

ISSN 1340-5306

*Studia Culturae Islamicae No. 81*

# MUNTAKHAB AL-TAWĀRĪKH

Selected history

vol. II

**Muḥammad Ḥakīm khān**

Edited by

**Yayoi KAWAHARA & Koichi HANEDA**

**RESEARCH INSTITUTE FOR LANGUAGES  
AND CULTURES OF ASIA AND AFRICA  
ILCAA 2006**



# 選史

## II

ムハンマド・ハキーム・ハーン著

河原弥生 羽田亨一

校訂

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

2006



# **MUNTAKHAB AL-TAWĀRĪKH**

Selected history

vol. II

**Muḥammad Ḥakīm khān**

Edited by

**Yayoi KAWAHARA & Koichi HANEDA**

**RESEARCH INSTITUTE FOR LANGUAGES  
AND CULTURES OF ASIA AND AFRICA  
ILCAA 2006**

Research Institute for Languages  
and Cultures of Asia and Africa (ILCAA)  
Tokyo University of Foreign Studies

3-11-1 Asahi-cho  
Fuchu-shi, Tokyo 183-8534  
Japan

© Yayoi KAWAHARA, Koichi HANEDA 2006  
ISBN 4-87297-926-5

Printed by  
Print Nagayama, Tokyo

## 目次 Contents

はじめに .....	vii
凡例 .....	ix
解題 .....	xiii
Foreword .....	xxii
Notes to the edition .....	xxiv
Introduction .....	xxix
テキスト目次 مندرجه .....	هـ
ペルシア語テキスト متن .....	۱
人名索引 فهرست اشخاص .....	۶۸۷
地名索引 فهرست اماکن .....	۷۰۱
民族・部族名索引 فهرست قبائل .....	۷۱۲
役職名索引 فهرست مشاغل و مناصب .....	۷۱۴
書名索引 فهرست کتب .....	۷۱۶

## はじめに

本書は、ムハンマド・ハキーム・ハーンMuhammad Ḥakīm khān著『選史Muntakhab al-tawārikh』のもっとも古い3写本を対照して作られた、初めてのアラビア文字による校訂テキストの第二巻である。

『選史』は、近代中央アジアのペルシア語（タジク語）で書かれた浩瀚な歴史書／旅行記であり、18-19世紀の中央アジア史研究にとっての第一級の史料である。この第二巻は、作品の後半部分にあたる第五章第12節「ミン朝（コーカンド・ハーン国）史」を扱ったものである。この大きな節は、コーカンド・ハーン国史と題されているが、実際にはそのうちの半分をコーカンド・ハーン国の歴史が占め、残る半分为著者のメッカ巡礼記が占めている。このように第二巻から先に校訂本を出版するのには理由がある。

まず第一に、後半部分の記述が、主に著者自身の見聞に基づいて書かれており、よりオリジナリティが高いためである。コーカンド・ハーン国史の部分は、同時代のマンガト朝ブハラ・アミール国や東トルキスタンの歴史研究にとっても多くの有意義な情報を含んでおり、公刊史料の乏しい近代中央アジア史研究にとって早急に公刊する必要が認められた。また、メッカ巡礼記の部分も、同時代のロシア帝国や、オスマン帝国、カージャール朝イランの研究に多少なりとも資するものと考えられた。

第二に、校訂者の一人である河原がコーカンド・ハーン国史を専攻しているため、修士論文の執筆時以来、本書のコーカンド・ハーン国史部分を一次史料として用いてきたという事情がある。著者ムハンマド・ハキーム・ハーンは、支配者の庇護を受ける宮廷詩人ではなかったため、客観的に記述することができた。彼の優れた観察眼による個性的な記述は、他のコーカンド・ハーン国史料とは比肩し得ない価値を持っている。このため、他のいかなる史料にも先立って、本書の「コーカンド・ハーン国史」部分を刊行する意義があると考えられた。

また、本書があまりにも浩瀚であるがために、全体の校訂を終えてから刊行の準備をするよりも、例えば半分であってもまずはこれを世に出して、関連する研究の利用に供することにそれなりの意味があるとも思われた。

本校訂本の出版に至る作業は以下のように行われた。

まず、1998年度より、タジキスタンで出版されたドシャンベ63写本のファクシミリを用いて校訂者二人でコーカンド・ハーン国史の部分の読み合わせを始めた。その後、河原が2000年度アジア・アフリカ言語文化研究所短期共同研究員として羽田と共同研究を行った際に、ドシャンベ63写本をコンピュータに入力した。そして、2001年から2003年まで河原がウズベキスタン共和国の科学アカデミー東洋学研究所に留学する機会を得た際に、日本ですでに入力してあったドシャンベ63写本のテキストを、タシケント592写本と照らし合わせた。その後、財団法人東洋文

庫に、サンクト・ペテルブルク所蔵のいくつかのペルシア語写本のマイクロフィルムが将来されることになったが、この中に本作品のサンクト・ペテルブルクC470写本も含まれていた。再び河原が2004年度アジア・アフリカ言語文化研究所短期共同研究員として羽田と共同研究を行い、二写本分の入力済みのテキストを、サンクト・ペテルブルクC470写本と照合することが可能になった。

三つの写本を一通り照らし合わせた後に、この中でもっとも完成度の高い優れた写本は、サンクト・ペテルブルクC470写本であることが分かった。そのため、ドシャンベ63写本とサンクト・ペテルブルクC470写本との間に相違点があった場合には、本文として入力してあったドシャンベ63写本のテキストをサンクト・ペテルブルクC470写本のそれに書き換え、ドシャンベ63写本に現れる表現を、註に移し替える作業をすることになった。

このように本書は、断続的にではあれ、8年の歳月を費やして完成されたものである。

今後の課題は、早急に第一巻を校訂して出版することである。前半部分におけるマンガト朝ブハラ・アミール国史に関する記述も、著者自らの体験を基にしており、ブハラ・アミール国において書かれた歴史書にはない多くの情報を含んでいるため、その史料的価値は高い。全二巻の刊行を遂げ、当該時代の中央アジア史研究に少しでも貢献することができればと願っている。

## 謝辞

本書の刊行が可能となったのは、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の長年にわたる多大な協力のお陰である。同研究所の関係諸氏に謝意を表したい。写本や、そのマイクロフィルムの利用に関しては、財団法人東洋文庫およびロシア連邦科学アカデミー東洋学研究所サンクト・ペテルブルク支部、ウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所の協力を感謝する。

また、本書の完成にあたって、凡例については菅原睦氏、アラビア語のファトワーの部分については堀井聡江氏の御教示を得た。両氏をはじめ、タシケントにおける史料調査の際に種々の面でお世話になった木村暁氏、本書の地図作成に協力を頂いた原山隆広氏、英文の部分の校正をして下さったクリスチャン・ダニエルス氏およびロバート・ラトクリフ氏、そして入力された全テキストの校正を快く引き受けて下さったアジア・アフリカ言語文化研究所客員教授のセファトゴル・マンスール先生に心からの謝意を表したい。

2006年1月

河原弥生 羽田亨一

## 凡例

## 1 写本とその略称

校訂に用いた写本とその略称は以下の通りである。

- [س] Санктпетербургское отделение Института Востоковедения Академии Наук Российской Федерации, инв. №С470
- [ت] Институт Востоковедения Академии Наук Республики Узбекистан, инв. №592
- [د] Институт Востоковедения и письменного наследия Академии Наук Республики Таджикистан, инв. №63 (Мухаммед Хакимхан, *Мунтахаб ат-Таворих*, Ба чоп ҳозиркунанда, муаллифи муқаддима ва таълиқот А. Мухторов, ҷилди 2, Душанбе, 1985)

## 2 記号の説明

テキストの葉数、頁数

- { } サンクト・ペテルブルクC470写本の葉番号を { } 内に記した。
- <> タシケント592写本の葉番号を<>内に記した。
- ( ) ファクシミリ版ドシャンベ63写本の頁番号を ( ) 内に記した。
- پ، ر، سانクト・ペテルブルクC470写本、タシケント592写本の葉番号を示す際に、葉の表には **رو** の略号 **ر** を、裏には **پشت** の略号 **پ** を葉番号の後に書き足した。
- ح 欄外に書かれた挿入文が長く、次の葉にまたがる場合には、葉・頁番号の後に、**حاشیه** の略号 **ح** を書き足した。

底本の訂正や補充、他写本のヴァリエントを示す記号

- .. 写本にはコンマ、ピリオドは用いられていないが、適宜コンマ、ピリオドを打った。
- <> 会話文を示す。
- { } 校訂に用いた3写本いずれにも存在しないが、必要と認められ、校訂者が挿入した語を示す。
- [ ] 二つ以上の単語、文に註がつく場合に、その対象となる範囲を示す。
- \* 底本に見える語、句、文を他の写本によって訂正したことを示す。脚注で、どの写本によって訂正したかを示し、底本ではどのように書かれているかも示した。
- # 底本に脱落している語、句、文を他の写本によって補充したことを示す。脚注で、どの写本から補充したかを示した。
- + 底本か他写本かにかかわらず、何らかの語、句、文が書かれているが、文脈上本文から



除いた方が良いと思われる場合に、その場所を示す。脚注に、その除かれた語、句、文を記し、どの写本に見えるかを略号で表示した。

- × 脚注で用いる。本文の註がつけられた語、句、文が、略号で示した写本において脱落していることを示す。

#### その他の記号など

？ 写本における文字が不明瞭で綴り字を確定できないことを示す。

ناخوانا 写本における文字が不明瞭で読み取れないことを(ناخوانا)「読解不能」示す。

#### その他

- 1) いかなる記号も付さずに、あるいは[ ]で括られただけで、単に脚注の番号のみが付されている場合は、その語、句、文は底本に従ったものであるが、他の写本には別の形で書かれているため、脚注に示している。
- 2) 底本や他の写本で、本文の脱落や誤記が欄外に挿入・訂正されている場合は、本文と同様に扱い、欄外に書かれていることを示す特別の記号は付さなかった。ただし、複数葉・頁にまたがる場合は上述したように、葉・頁番号を付して示した。
- 3) 写本において一旦書いた語、句、文が削除されている場合、校訂本には特に何も記さなかった。しかし、削除されている部分が歴史理解に有用だと考えられるものは、本文中には+記号を用いて場所を示し、脚注にその語、句、文を記し、(با خط بطلان)「削除線によって」と示した。

### 3 綴字

この校訂本では、底本の綴りをできる限り忠実に再現し、他の写本の綴りは註に示されている。ただし、読み易さを考慮して、底本の綴りを通常の正書法に従って訂正した場合もある。その標準化の原則は以下の通りである。

- 1) アラビア文字のうち、ペルシア語特有の<sup>گ</sup>の文字は校訂に用いた諸写本では全く使用されず、代わりに<sup>ک</sup>が用いられている。同じくペルシア語特有の<sup>پ</sup>、<sup>چ</sup>の文字は用いられているが、かわりに<sup>ب</sup>、<sup>ج</sup>が用いられている場合も多い。しかし、現代中央アジアのペルシア語(タジク語)においてキリル文字でこれらの音が使われている場合は、<sup>п</sup>、<sup>ч</sup>、<sup>г</sup>を用いて表記した。
- 2) به、درなどの前置詞や、指示詞のآنおよびاینが次に続く語と続けて綴られている場合、後置詞را、استが直前の語と続けて綴られている場合、動詞と名詞が続けて綴られている場合などは、分かち書きにする。例えば写本でبمقصدと綴ってあっても、校訂本ではبه مقصدとする。同様にایشان را ایشانراと、در آن وقت درانوقتと、رویداد را رویدادと、

عمری است و عمریست 綴る。کرد است や کرده ست のように、動詞の現在完了形において過去分詞の最後の *ه* や、*است* のはじめの *ا* の文字が抜けている綴りが散見されるが、このような場合には必要な文字を挿入し、*است کرده* のように綴った。ただし、動詞につく *می* は写本で続けて綴られている場合は分かち書きにはしない。

- 3) 写本で二つの単語を並列する場合にしばしば *و* の代わりに用いられているダンマ記号は校訂本においては *و* とし、註記はしなかった。例えば、*عشر و عشرت* は *عشرت عشرت* と綴る。
- 4) 不定の *i*、関係節の先行詞につく *i* がハムザ *ء* で書かれている場合は *ای* と綴った。これについては特に註記をしなかった。
- 5) アラビア語起源の単語の綴りが誤っている場合、本文では正しい綴りで示し、写本における誤った綴りは註に示した。例えば、*اسلحه* という語がいずれの写本でも *اصلحه* と綴られている場合は、本文には *اسلحه* を採用し、註においてすべての写本に *اصلحه* と綴られている旨を示した。
- 6) 単にアラビア語特有の発音記号や文字が正しく表現されていないもの（例えば、*امراء* が *امرا* と綴られている場合、*جرأت* が *جرأت* と綴られている場合、*جهت* が *جهت* と綴られている場合、*رحمان* が *رحمن* と綴られている場合、*حتا* が *حتا* と綴られている場合）については、底本で綴字法が一貫していない場合でも標準化は行わず、底本に則って綴った。
- 7) 現代ペルシア語の規範とは異なる綴りがすべての写本においてしばしば見られるが、これについては当時の中央アジアのペルシア語の特徴を示すものと捉え、底本で綴字法が一貫していない場合でもあえて標準化は行わず、底本に則って綴った。これには、*kā* の音を *خوا* と綴るか *خا* と綴るか（例えば、*برخواستن* < *برخواستن*、*خوان سالار* < *خان سالار*、*دولتخانه* < *دولتخانه*、*خوار* < *خار*）や、*-a* で終わる語に付加要素が付される場合に、*-a* を表わす文字を保って分かち書きするか（例えば、*خانه ها* < *خانه ها*）、文字を落として一語で綴るか（例えば、*زندگی* < *زندگی*）が含まれる。これらについては現代ペルシア語の規範的な綴りを註記しなかった。
- 8) 同様にペルシア語の言い回しが現代ペルシア語の用法では誤りであると考えられる場合でも、すべての写本で一致して用いられている言い回しの場合には、そのままの形で示した。例えば、すべての写本でほとんどすべての場合に、*فرار بر قرار اختیار نمودن* ところが *فرورز آوردن*（*آمدن*）と、*قرار بر قرار اختیار نمودن*（*آمدن*）と表現されているが、底本で表現が一貫していない場合でも標準化は行わず、底本に則って綴った。これらについては現代ペルシア語の規範的な表現を註記しなかった。

写本間の綴りの異同は以下のように扱う。

- 1) 写本間で語形が異なっている場合は原則として底本の綴りを本文に採用し、他写本の綴りは註に示す。例えば、*عناق* \ *عناق*、*خالق قل* \ *خالق قل*、*منغیت* \ *منغیت* などの語形の異同は

註に示した。

- 2) a) 特にチャガタイ語の単語や地名・部族名における、同じ音を示す綴り字のヴァリエント、すなわち短母音の表記の有無や異同 (کورنوش \ کورونوش \ کورنوش, جيزخ \ جزخ, قراقليق \ قره قلايق)、子音字の交替 (توى \ طوى, فلغر \ پلغر, توق \ توغ) については、すべて底本の綴りに従い、他の写本でそれと異なる綴りで書かれていても註記はしなかった。
- b) 上の5)、6)の場合では、他の写本で底本と異なる綴りで書かれていても特に註記はしなかった。
- 3) 例外的に、作品に頻出し、煩雑になるために、底本以外の写本の語形を註に示さなかった諸例を、以下にその綴りが用いられている写本の略号とともに示す。これらの語は、写本間で綴りが異なっているが、それぞれの写本においてはほぼ一貫して同じ綴りが用いられている。

مرغیلان [ت][د] \ مرغینان [س]

چلچیق [د] \ چرچیق [ت] \ چیلچیق [س]

ولنعمی [ت] \ والنعمی [د][س]

کیشتی [ت] \ کشتی [د][س]

خدمت [د] \ خدمت [ت][س]

ملکه [د] \ ملیکه [ت][س]

بالآخر [د] \ بالآخر [ت] \ بالاخیر [س]

اوان < آوان [د][ت][س]

معه [د] \ مع [ت][س]

وارید [ت] \ وارد [د][س]

ایریس قل بی [د] \ ایریس قلی بی [ت] \ ادریس قلی بی [س] \ اریس قلی بی [س]

(この語は[س]写本において、一旦<sup>1</sup> ادریسと書かれた後に、<sup>2</sup> だ<sup>3</sup>が削られて<sup>4</sup> ایریسに訂正されている。そのため、稀に訂正のし忘れて、<sup>5</sup> だ<sup>6</sup>のままになっている箇所がある。)

- その他) コーカンド・ハーン国の君主、ムハンマド・アリー・ハーンは、その名が書かれる度に、<sup>7</sup> مادر زن、すなわち「母親の夫」という蔑称を付けられた。しかしその渾名は校訂に用いたすべての写本において、後に消されて、غازیや<sup>8</sup> مادهなどの語に書き換えられた形跡がある。写本の該当箇所<sup>9</sup>で削除し忘れた場合や、訂正された綴りが読み取れる場合は、底本の場合は本文に、他の写本の場合は註に示した。

## 解題

### 1 『選史*Muntakhab al-tawārikh*』の概要

本書の著者ムハンマド・ハキーム・ハーン・イブン・マアスーム・ハーンMuḥammad Ḥakīm khān ibn Ma'sūm khānは、1217年/1802-1803年頃にコーカンド・ハーン国の首都コーカンドで生まれた。コーカンド・ハーン国は、18世紀初頭に興り、1876年にロシア帝国に併合されるまでフェルガナ盆地周辺を支配したウズベクのミン部族による国である。

ムハンマド・ハキーム・ハーンは、自身の説明によると、父方では16世紀のナクシュバンディー教団の高名指導者でマフドゥーミ・アアザムMakhdūm-i A'zamの尊称で知られるホージャ・アフマド・カーサーニーKhwāja Aḥmad Kāsānī (1542年没)の子孫である。また、母方においては、コーカンド・ハーン国の君主ナルブタ・ビーNārbūta bī (在位1770-1799年)の孫であり、その息子で次の君主のアーリム・ハーン'Ālim khān (在位1799-1810年)および、その弟で次の君主のウマル・ハーン'Umar khān (在位1810-1822年)の甥、その息子で次の君主のムハンマド・アリー・ハーンMuḥammad 'Alī khān (在位1822-1842年)の従兄にあたる。

父方の祖父ハキーム・トラḤakīm tūra、父マアスーム・ハーン、大伯父トラ・ホージャTūra khwājaはいずれもコーカンド・ハーン国の重鎮であったし、母方ではハーン家と親戚関係にあったから、著者は常にハーンの宮廷で過ごした。とりわけムハンマド・アリー・ハーンとは幼い頃より兄弟同然に育てられたことが、本書のあらゆる記述から窺える。しかし、1822年のムハンマド・アリー・ハーン即位後まもなく失寵し、メッカ巡礼を許可するという口実で国を追われた。

彼は1823年頃、当時コーカンド・ハーン国領だったタシケントを商人たちのキャラバンとともに出発し、ロシア帝国を経由して、オスマン帝国に入り、カイロからメッカ巡礼を果たした。帰路もカイロに逗留し、1828年にカージャール朝イランを経由して中央アジアに戻った。彼は、旅先でロシア語やアラビア語、オスマン帝国で話されるトルコ語を習得し、各地の支配者等と面会して懇談する機会を得た。例えばオムスクやオレンブルク、アストラハンなどロシア各都市の総督とも懇意になり、オレンブルクではロシア皇帝のアレクサンドル一世にも会った。エジプトではムハンマドアリー・パシャやその娘とも親交をもった。帰路、イランではファトフアリー・シャーとも面会した。中央アジアに帰還後はブハラ君主アミール・ナスルッラーが彼を庇護しようとしたが、彼は断り、『選史』の執筆時にはシャフリサブズの町に住んでいた。

『選史』には、1259年ラビーI月/1843年4月1日～30日に起こった出来事についての記述があり、また現存する最古の写本、タシケント592写本が1259年ラビー2月5日/1843年5月5日に完成していることから、本書は1259年ラビーI月中に脱稿したと考えて間違いない。

作品全体は五章(bāb)に分けられている。そのうち、第四章は3つの節(ṭāyifa)に、第五章は12の節にそれぞれ分けられている。分量的には第五章の第12節だけで全体の半分を占めている。各章、節の内容は次の通りである。

第一章	預言者たちの歴史
第二章	古代イラン王朝
第三章	中国とヨーロッパの王朝
第四章	カリフたちの歴史
第2節	ウマイヤ朝
第3節	アッバース朝
第五章	その後のイスラム諸王朝史
第1節	サッフアール朝
第2節	サーマーン朝
第3節	ブワイフ朝
第4節	ガズナ朝
第5節	セルジューク朝
第6節	ホラズムシャー朝
第7節	モンゴル帝国
第8節	ティムール帝国およびムガル朝
第9節	シャイバーン朝（ブハラ・ハーン国）
第10節	アシュタルハン朝（ブハラ・ハーン国）
第11節	マンガト朝（ブハラ・アミール国）
第12節	ミン朝（コーカンド・ハーン国）

『選史』は、作品のジャンルとしては独特の体裁をとっており、それは主に、他の歴史書を引用して編纂したムスリムにとっての世界史、著者の生きた時代の中央アジアの地域史、そして著者のメッカ巡礼に関する回想の三種の混じったものと言える。書名の『選史』は、このうちの世界史としての性格を意識して付けられたと思われるが、実際には地域史と巡礼記が作品の大半を占めている。

本書の大きな特徴は、第五章第11節のブハラ・アミール国史と第12節のコーカンド・ハーン国史の部分が、主に著者自らの見聞をもとに書かれており、また、アフガニスタンや清朝領トルキスタン、いわゆる東トルキスタンと両国との関係についても貴重な情報を含んでいる点である。とりわけコーカンド・ハーン国において歴史書が多く書かれるようになったのは1860年代以降のことであるから、1820年代初めまでの当地の状況について詳細に伝える本作品がコーカンド・ハーン国史研究に占める重要性は、他に類のないものである。

また、著者の同時代のヨーロッパの状況についての知識はさらに作品を興味深いものにしていく。巡礼記の中で彼は、ロシアの各都市の様子や、そこに住む人々の暮らしについて、詳細な記述を残している。実現こそしなかったが、彼にはエジプトからヨーロッパを訪れる計画もあった。中央アジアにおいて本格的な近代化運動が起ころのは19世紀末以降のことであるが、彼は

既に1840年代にこれらの知識をもって自らの祖国のおかれている状況を見つめていたのである。

本作品のもっとも特徴的な点は、これが支配者に命じられて執筆された公式年代記ではないということであろう。著者はムハンマド・アリー・ハーンによって祖国を追われた経緯から、彼に対して常に批判的である。また、巡礼記は、基本的に著者の見聞に基づいているが、読者の興味を引くことを強く意識し、話を脚色していると見られる箇所も多い。その点で、この作品は、中央アジアにおける近代文学の先駆けと呼ぶにも値するであろう。

なお、本作品はほとんどの写本に、*Muntakhab al-tawārikh*の書名がつけられているが、タシケント1560写本には、*Intikhāb al-tawārikh*の書名がある。IntikhābもMuntakhabと同じ語根から派生した語であり、この二つの書名の差異はさほど重要ではないと思われる。

## 2 先行研究

『選史』の写本は次章でも述べるように、そのすべてが旧ソ連内に所蔵されている。『選史』の史的価値についてはすでにロシア帝国期から指摘され、ソ連時代を通じて一次史料として多くの歴史研究に用いられてきた。その発展や内容については、ここに述べるムフタロフ氏及びフルシュト氏の論考で詳しく紹介されているので、『選史』そのものを対象にしたもっとも重要な3点について簡単に紹介するにとどめたい。

まず、メッカ巡礼記の部分のみが、チャガタイ語の訳本から現代ウズベク語に転写されるかたちでタシケントで出版された<sup>1</sup>。ただしこれは一般読者を対象とした読み物として刊行されたようである。後にフルシュト氏も指摘しているように、序文においてムハンマド・ハキーム・ハーンがイルクーツク、サラトフ、イスタンブルを訪問したなどと誤った説明がされているなど、学術的には大きな問題があると言わざるを得ない。

『選史』を初めて本格的に研究したのは、現タジキスタン共和国科学アカデミー東洋学・写本研究所（ドシャンベ）の研究員ムフタロフ氏である。氏は、同研究所に所蔵される『選史』の写本（ドシャンベ63写本）を2巻本のファクシミリとして出版し、詳細な序と索引を付した<sup>2</sup>。ただ残念ながら、ファクシミリ部分の印刷状態が良好ではなく、付された索引にも誤りが散見される。

その後、現ウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所（タシケント）の研究員フルシュト氏は、『選史』に関して5編の研究論文を発表した<sup>3</sup>。氏の一連の研究の中には、写本の数

<sup>1</sup> Ҳақимхон, *Хотиралар*, Нашрга тайёрловчилар: Х. Расул ва М. Қодинова, Тошкент, 1966

<sup>2</sup> Мухаммед Ҳақимхан, *Мунтахаб ат-Таварих*, Ба чоп ҳозиркунанда, муаллифи муқаддима ва Таълиқот А. Мухтаров, ҷилди 1-2, Душанбе, 1983-1985.

<sup>3</sup> Хуршут, Э., «Мунтахаб ат-Таварих» как источник по истории Средней Азии и

などの点で、我々には従えない部分もあるが、全体として非常に的を射た説明は、必要かつ十分な情報を提供していると言える。

### 3 現存する写本

#### ペルシア語写本

現存するペルシア語写本の数について、ムフタロフ氏とフルシュト氏は先行研究を踏まえた上で、7点と述べている。しかし、以下に述べるように、このうちの2点は1写本の第1巻目と第2巻目であると考えられ、正確には6点が現存すると言うべきであろう。それらはすべて現在、旧ソ連のロシア連邦、ウズベキスタン共和国、タジキスタン共和国の研究機関や図書館に所蔵されている。その概要は以下の通りである。

#### 1) ウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所（以下タシケント）592写本

現存する最古の写本。全699葉。1259年ラビー2月5日/1843年5月5日筆写完了。書生、ダームラー・ムハンマド・アミーン Dāmlā Muḥammad Amīn。写本の1bの欄外の書き込みによると、「初めに作られた10点の写本のうちの一つ」である。後述するタシケント593写本に書かれたメモから、この写本はフジャンドに住む著者の孫が所有していたが、後にバーバー・ラヒームというアクサカルの手に移ったことが分かっている。

#### 2) ロシア連邦科学アカデミー東洋学研究所サンクト・ペテルブルク支部（以下サンクト・ペテルブルク）C470写本

全678葉。1259年ジュマダーI月28日/1843年6月26日シャフリサブズで筆写完了<sup>4</sup>。書生、カーリー・アミーンジャー Qārī Amīnjān。所蔵機関によって付された葉表の左肩の葉番号が659葉の後670葉に飛んでいる。このためカタログにおいても誤って全688葉と書かれている。また、679葉から697葉までには、他の写本にはない続きがあり、シェール・アリー・ハーン Shīr ‘Alī khān（在位1842-1845年）の治世について述べられている。

---

сопредельных стран XVIII-XIX веков, *Общественные науки в Узбекистане*(ОНУз), 1984/7, стр. 41-45; Он же, «Мунтахаб ат-Таварих» и история его изучения, *ОНУз*, 1985/2, стр. 59-63; Он же, «Мунтахаб ат-Таварих» и его списки, *ОНУз*, 1986/5, стр. 41-45; Он же, «Мунтахаб ат-Таварих» и его источники, *ОНУз*, 1986/12, стр. 39-44; Он же, От компиляции к первоисточнику (на примере источниковедческого анализа «Мунтахаб ат-Таварих»), *ОНУз*, 1988/4, стр. 66-70.

<sup>4</sup> 研究所から出版された写本カタログには誤って「1259年ラビー1月28日/1843年4月29日」と書かれている。Миклухо-Маклай, Н. Д., *Описание Персидских и Таджикских Рукописей*, Института Востоковедения, Москва, 1975, стр. 329.

### 3) ドシャンベ (タジキスタン共和国科学アカデミー東洋学・写本研究所) 63写本

367葉。1260年ムハッラム月/1844年1-2月、キターブで筆写完了。書生は第五章第11節まではムハンマド・アミン・イブン・ダームラー・イナーヤトMuḥammad Amin ibn Dāmlā 'Ināyat、第五章第12節は彼の孫、バーバー・ホージャBābā khwājaである。ムフタロフ氏によってファクシミリとして出版された写本である。ムフタロフ氏の序文によると、この写本はもともと同研究所の研究員だったセミョノフ氏が私蔵していたものであり、セミョノフ氏は写本とともに、「1915年にコーカンドの裁判官、マフムード・マフドゥームから手に入れた」とのメモを残したという<sup>5</sup>。セミョノフ氏の死後、同研究所に寄贈された。

### 4) サルティコフ・シチェドリ名称ロシア国立公共図書館44写本

全357葉。1294年シャッワール月/1877年10~11月筆写完了。カタログによると、図書館には初代トルキスタン総督カウフマンによってもたらされたといい、書生は、ファズィールッディーン・カーリーFaḍīl al-Dīn qārīである<sup>6</sup>。しかし、写本の第五章第11節の終わる182aには、「何人かの手で、コーカンドのカーディー・アルクッダートのミール・バファルヤーシュ?・イーシャーンQāḍī al-quḍḍāt Mir Bafaryāsh? Īshān、すなわちイーシャーン・アブド・アッサッタール・ハーン・カーディー・アルクッダートĪshān 'Abd al-Sattār khān qāḍī al-quḍḍātのマドラサで書き終え、最後にムッラー・バーバージャー・ムフティー・イブン・ムハンマド・ザーキル・バーイ・ウストルーシャニーMullā Bābājān muftī ibn Muḥammad Dhākir bāy Ustrūshānīが、そのマドラサで、ラマダーン月19日木曜日に書き終えた」と記されている。一方、第五章第12節の終わる357aには、「ファズィールッディーン・カーリーが1294年シャッワール月に書き終えた」とある。

実際に写本は複数の筆跡で書かれており、筆跡が変わる一枚前の紙は半端な空白を残して終わっていることが多い。つまり、もととなった写本を何部分かに分け、各書生が手分けをして書き写したらしい。その切れ目から、元本がドシャンベ63写本であることが分かる。例えば、44写本の1bは、ドシャンベ63写本の1b（ファクシミリの5頁）に対応して始まっているが、その部分は48bで終わり、次葉からの筆跡は異なる。49aの始まりは、ドシャンベ63写本の49a=100頁の始まりに、111aが108a=218頁に、164aが164a=330頁に対応している。しかし、第五章第11節の終わる182葉の後、44写本には落丁があり、183葉目との間に、ドシャンベ63写本の184

<sup>5</sup> Мухаммед Хакимхан, *Мунтахаб ат-Таварих*, Ба чоп ҳозиркунанда, муаллифи мукаддима ва Таълиқот А. Мухтаров, чилди 1, Душанбе, 1983, стр. 10.

<sup>6</sup> *Персидские и таджикские рукописи «новой серии» Государственной Публичной библиотеки им. М. Е. Салтыкова-Щедрина: Алфавитный каталог*, Сост. Г.И.Костыгова, Ленинград, 1973, стр. 247.



葉～199葉の、16葉分が欠落している。その後、44写本の183aの始まりがドシャンベ63写本の200a=407頁に、239aが256a=519頁に、303bが320a=647頁に、341aが352a=711頁に対応している。ファーズィルッディーンは、最後の部分のみを担当しただけなのかも知れない。

##### 5) タシケント593写本

全481葉。1316/1899年筆写完了。481aには、「1259年ラビー2月/1843年5月1日～30日にキターブでダームラー・ムハンマド・アミンによって筆写された写本から1316/1899年に写された」と書かれており、この写本はタシケント592写本から書き写されたと考えられる。さらに481bにはロシア語で、ラーピン С. Лапин という署名とともに「この写本は、私の命令で、ミールザー・アブド・サマトフ Мирзо Абду-Саматов によって、フジャンドのアクサカル、バーバー・ラヒーム Бабараим 所蔵の写本から書き写された。なお、バーバー・ラヒームはこの写本を、フジャンド在住の著者の孫から譲り受けた。」と書かれている。ところでバルトリド氏は1913年のトルキスタン出張の報告で、ロストフツェフ伯爵 граф Н. Я. Ростовцев が、サマルカンド州総督の通訳官だったラーピン Сер-Али Лапин に譲ったという7点の写本について紹介し、それに含まれる『選史』写本について、「この写本はフジャンド在住の著者の孫の写本から写された。フジャンドで私はその写本を見た」<sup>7</sup>と書いている。以上のことから、タシケント592写本は著者の孫が所有していたことが分かる。また、ロストフツェフ伯爵がはじめにタシケント593写本を入手する際に、ラーピンが助力していたということになる。

##### 6) タシケント595写本 タシケント596/1写本

###### 595写本

全273葉。1329年ラジャブ月21日/1911年7月9日にコーカンドで筆写完了。作品の第五章第11節の途中で途切れている。ソ連時代に出版された東洋学研究所のカタログには、「コーカンドでムハンマド・アミンの写本（タシケント592写本）から筆写された」と書かれていた<sup>8</sup>。

フルシュト氏は写本間の比較検討からこれを否定し、「この写本は592写本と同じ書生ムハンマド・アミンによって筆写されたドシャンベ63写本から筆写された」と結論している<sup>9</sup>。その

<sup>7</sup> Бартольд, В.В., Отчет о командировке в Туркестан, *Записки восточного отделения императорского русского археологического общества*, т.15, вып.2-3, С.Петербург, 1904, стр.218-219

<sup>8</sup> *Собрание восточных рукописей Академии наук Узбекской ССР*, т.1, Ташкент, 1952, стр. 88.

<sup>9</sup> Хуршут, Э., «Мунтахаб ат-Таварих» и его списки, *ОНУЗ*, 1986/5, стр. 44. その根拠として氏は、タシケント595写本とドシャンベ63写本に存在する題名が593、592写本に

理由の一つにフルシュト氏は、595写本の273bの、「初めの写本は、私、ムハンマド・アミン・イブン・ダームラー・イナーヤトがキターブで1260年ムハッラム月の日曜日に、二つ目の写本はコーカンドで1329年ラジャブ月21日の月曜日に筆写した」という記述を挙げている<sup>10</sup>。

この記述から、595写本が592写本ではなく、ドシャンベ63写本から筆写されたことは首肯できるとしても、ムハンマド・アミンは、1843年にすでに写本の筆写をする年令の孫がいた。68年後の1911年に再び写本を作成したとは考えにくい。問題箇所の内容は以下の通りである。

...نسخه اول همین کتاب من محمد امین ابن داملا عنایت فی شهر محرم الحرام سنه ۱۲۶۰

بود که در بلده کتاب روز یکشنبه ماه مذکور نسخه دویم فی بلده خوقند سنه ۱۲۲۹ ۲۱

رجب المرجب روز دوشنبه...

この文章の、*من محمد امین* の *من* をフルシュト氏はペルシア語として *man* 「私」と読み「私ムハンマド・アミン я, Мухаммад Амин」と解釈したが、動詞の人称とも矛盾が生じ、不自然である。むしろ、*من* はアラビア語の前置詞 *min* と読み、ここは *(ید) من* 「(の手に) による」と解釈すべきであろう。そうすると、この文章は「この本の最初の写本はムハンマド・アミン・イブン・ダームラー・イナーヤトによって、1260年ムハッラム月に、キターブの町で、日曜日になされ、二つ目の写本はコーカンドの町で1329年ラジャブ月の21日の月曜日に(なされた)」と読むことができる。従って、「二つ目の写本」、つまりこのタシケント595写本の書生の名は書かれていないということになる。

また、この写本の152aまでと153a以降は別の書生の筆跡である。前半部分の筆跡は、ドシャンベ63写本の前半部分の筆跡、すなわち、ムハンマド・アミンの筆跡に、そして後半部分の筆跡は、ドシャンベ63写本の後半部分及び、596/1写本の筆跡、すなわち、バーバー・ホージャの筆跡に似ている。これが正しければ、595写本の前半はムハンマド・アミンの存命中に、後半部分はその孫のバーバー・ホージャによって筆写されたと考えることができるが、これについては推測の域を出るものではない。

写本の1aには「ユーヌスジャー・ダーダ・ムハンマド・オグル・アガルク・ホーカンディ Yūnusjān Dāda Muḥammad ūghlī Āghālīq Khūqandī 1338年」の押印がある。

は存在しないこと、タシケント595写本とドシャンベ63写本では、ブハラのアミール、ハイダル・寿命が33年とあるのに対し、593写本では31年と書かれていることを挙げている。

<sup>10</sup> ソ連崩壊後のウズベキスタン共和国で出版された新しいカタログでは、この595写本について、「本写本は、この書生が1265/1848-1849年にキターブで筆写した写本から筆写された(273b葉による)」と紹介されているが、1260年の誤りである。*Собрание восточных рукописей Академии наук Республики Узбекистан, история*, Ташкент, 1998, стр. 197.

## 596/I写本

185葉。185bに「1330年ラビーII月25日/1912年4月13日に、コーカンドで、1260/1844年に筆写された写本から、パーバー・ホージャ・イブン・ミール・ウバイドゥッラー・イブン・ムハンマド・アミンによって筆写された」とあり、ドシャンベ63写本からの写しと考えられる。作品の第五章第12節のみの写本である。同じ185bには、595写本と同様の「ユーヌスジャー・ダーダ・ムハンマド・オグル・アガルク・ホーカンディー1338年」の印章が押されている。このことはつまり、両写本が同じ人物によって所有されていたことを意味している。

ところでトガン氏は、フェルガナ盆地で行った写本調査報告に「ユーヌスジャー・ダードハー・ムハンメドフ Юнус-Джан-Дадха-Мухаммедов が所蔵する『選史』の写本は2巻本であり、それはコーカンドの裁判官マフムード・マフドゥーム所蔵の自筆本から書き写された」と述べている<sup>11</sup>。ここに言うマフムード・マフドゥーム所蔵の写本とは、前述したように、後にセミョノフ氏が入手したドシャンベ63写本である。

上述の点、1)595写本が第五章第11節までの写本で、596/I写本は第五章第12章のみに写本であるという事実、2)両写本ともドシャンベ63写本から筆写されたと考えられる点、3)両写本に押された同一の印章と、4)それに書かれた名前から、まさにこの595写本及び596/I写本が、トガン氏の言うところの、コーカンドに居住していたムハンマドの息子のユーヌスジャー・ダードハー（あるいはダーダ）の所有した2巻本の写本であることは間違いない。

以上のことから、ペルシア語写本の数6点であると言えるのである。

## チャガタイ語

『選史』には上に挙げたペルシア語写本以外に、チャガタイ語の訳本が作られた。現存する写本は4点であるが、訳者については知られていない。チャガタイ語の写本は校訂には直接利用しなかったが、その概要を以下に示す。

- 1) タシケント594写本 全408葉。1294年/1877年筆写完了。書生不詳。全訳ではなく抄訳であり、内容には、もとのペルシア語作品との間で大きな隔りがある。
- 2) タシケント1560写本 全404葉。1295年/1878年筆写完了。書生不詳。 *Intikhāb al-tawārikh* の書名をもつ。594写本から書き写された可能性が高いという<sup>12</sup>。
- 3) サンクト・ペテルブルクD90写本 全435葉。1295年/1878年筆写完了。書生不詳。カ

<sup>11</sup> Валидов, А. З., Восточные рукописи в Ферганской области, *Записки восточного отделения императорского русского археологического общества*, т.22, вып.3-4, Петроград, 1915, стр.304.ドシャンベ63写本が自筆本であるというのは彼の誤解である。

<sup>12</sup> *Собрание восточных рукописей Академии наук Республики Узбекистан, история*, Ташкент, 1998, стр. 198.

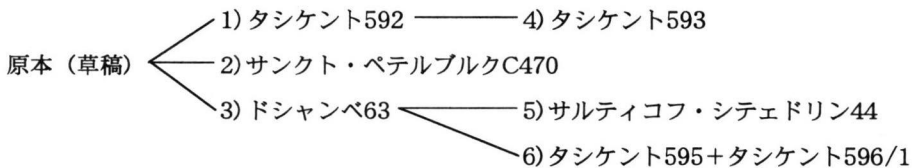
タログによると、「翻訳はムッラー・ミール・サイイド・ナースィル・イブン・ミール・サイイド・アフマド・バーイ Mullā Mīr sayyid Nāṣir ibn Mīr sayyid Aḥmad bāyの命による」<sup>13</sup>という。

4) サンクト・ペテルブルクD225写本 全311葉。1303年/1885年筆写完了。書生はムッラー・ムハンマド・ヤークーブ・イブン・ダードホージャ Mullā Muḥammad Ya'qūb ibn Dādkhwājaである。

#### 4 写本の系統、校訂に利用したテキスト及び底本

すでに見てきたように、『選史』の写本は、ペルシア語とチャガタイ語のものが存在する。オリジナルであるペルシア語には6点の写本が現存するが、そのうちはじめの3写本が、1259年/1843年の作品の執筆後一年以内に執筆場所のキターブかその隣町シャフリサブズで筆写されたものである。残る3写本は、執筆時から30年の時をおいて筆写されたものである。

系統図（写本番号の前の番号は第3章で付した番号と一致する）



本校訂本では、サンクト・ペテルブルクC470写本を底本とした。サンクト・ペテルブルクC470写本は、他の二つの写本において欄外に訂正・加筆されている語や文の多くが、本文中に書かれている。また文字も丁寧で、書き誤りも少ないもっとも完成度が高い写本と言える。また、他のどの写本にも存在しない、シェールアリー・ハーン即位以降の事件を扱った続きがあり、その価値も高い。

また、校訂をするにあたって、底本以外に、初期に筆写された2写本、タシケント592写本、ドシャンベ63写本を利用した。残る後代の3写本に比べて、全体的に記述がより正確であるためである。これら3写本は作品完成からまもない時期に筆写されたため、相違点は少なく、あったとしても多少の語彙や表現の相違に留まっている。また、途切れや大きな欠落もなく、良写本であると言える。後代の3写本や、チャガタイ語の写本も参照することはあったが、校訂に用いることはなかった。

<sup>13</sup> Дмитриева Л. В., Мугинов, А. М., Муратов, С. Н., *Описание тюркских рукописей Института народов Азии*, т.1, Москва, 1965, стр. 51-53.

## Foreword

This work is the second volume of a critical edition of the *Muntakhab al-tawārikh* (*Selected History*), written by Muḥammad Ḥakīm khān, in the Arabic script and based on the oldest three Persian texts.

*Muntakhab al-tawārikh* is a voluminous history and peregrination of pilgrimage, written in modern Central Asian Persian i.e. Tajiki and is the best source for the study of history of the 18-19th centuries Central Asia. This second volume consists of the “history of Mings (i.e. Khoqand khanate),” the part 12 of chapter 5, which occupies the second half of the whole book. Being named “history of Khoqand khanate,” only the first half of it deals with the history of Khoqand khanate and the second half of it deals with the pilgrimage of the author. We have decided to publish this second half before the first half for the following reasons.

Firstly, the second half of the book is mainly based on the experience of the author and gives more original information. The “history of Khoqand khanate” contains much valuable information about the history of the Bukhara Amirate and Eastern Turkistan at that time and so it seemed necessary to publish this part early for the study of the modern history of Central Asia, for which there is little published materials available. The peregrination of pilgrimage also seemed to be somewhat useful for the study of the Russian Empire, the Ottoman Empire and Qajarid Iran at that time.

Secondary, Yayoi KAWAHARA, one of the revisors, specializing in the history of Khoqand khanate, had used this part as one of the primary sources for her master’s thesis. Muḥammad Ḥakīm khān was not a court poet under the protection of the rulers and so could write the work objectively. His description with observant eye and great deal of personality is of great value and has no equal among the materials of Khoqand history. So it seemed to be meaningful to publish his work earlier than any other materials.

Thirdly, this work is voluminous. So, publishing the second volume, even though it is only the half of the work, seemed to be significant enough to submit to researchers of the field, even without the first volume.

The practical work of revision has been carried out as follows.

We started to read the “history of Khoqand khanate” in the facsimile version of Dushanbe 63 manuscript in 1998. In 2000, we inputted the whole text of “history of Khoqand khanate” of Dushanbe 63 manuscript, when Y. Kawahara was hosted by Koichi HANEDA as a joint researcher of ILCAA. Between 2001 and 2003, Y. Kawahara, studying at Institute of Oriental Studies, Academy of Sciences, Republic of Uzbekistan in Tashkent, collated the input of Dushanbe 63 text with Tashkent 592 manuscript. Afterwards some facsimiles of Persian manuscripts owned by St. Petersburg branch, Institute of Oriental Studies, Academy of Sciences, Russian Federation, were brought to the Oriental

Library (Toyobunko). In these collection the St. Peterburg C470 manuscript of *Muntakhab al-tawārikh* was included. Thus, we were able to collate the inputed text with the St. Peterburg C470 manuscript.

After collating all three manuscripts, we recognized that the most definitive and superior manuscript of *Muntakhab al-tawārikh* is St. Peterburg C470. So we changed the main text from text of Dushanbe 63 to that of St. Peterburg C470 and noted words found in Dushanbe 63, when we found differences between them.

So, the completion of this work has taken intermittently eight years.

Our task is the publication of the first half of the work. Descriptions about the history of the Bukhara Amirate in the first half of the work is also based on the author's experience and so it is of great value and contains very interesting information, which is lacking in other Bukharan sources. We hope that completion of whole two volumes would contribute even slightly to the study of the history of Central Asia at that time.

#### Acknowledgements:

The completion of this book owes much to the long-standing support of ILCAA. We would like to express our thanks to ILCAA's related members. In gaining access to the manuscripts or the microfilms we received assistance from Institute of Oriental Studies, Academy of Sciences, Republic of Uzbekistan, St. Peterburg branch, Institute of Oriental Studies, Academy of Sciences, Russian Federation and the Oriental Library (Toyobunko). We would like to express our appreciation to all of them.

We also would like to express our gratitude to Mr. Mutsumi Sugahara for advice about the "note to the edition," to Ms. Satoe Horii for advice about Arabic Fatwa, to Mr. Satoru Kimura for his overall support in research in Tashkent, to Prof. Christian Daniels and to Prof. Robert Ratcliffe for checking English, and to Takahiro Harayama for his help in making maps and we would like to express special gratitude to Dr. Mansur Sefatgol for proofreading all of the Persian texts.

January 2006

Tokyo

Yayoi KAWAHARA & Koichi HANEDA

## Notes to the edition

### 1 Manuscripts and their abbreviations

- [س] Санктпетербургское отделение Института Востоковедения Академии Наук Российской Федерации, инв. №С470
- [ت] Институт Востоковедения Академии Наук Республики Узбекистан, инв. №592
- [د] Институт Востоковедения и письменного наследия Академии Наук Республики Таджикистан, инв. №63 (Мухаммед Хакимхан, *Мунтахаб ат-Таворих*, Ба чоп ҳозиркунанда, муаллифи муқаддима ва таълиқот А. Мухторов, ҷилди 2, Душанбе, 1985)

### 2 Symbols

Folio numbers of manuscripts and page numbers of facsimile:

- { } Folio numbers of the St. Petersburg C470 manuscript are given inside parentheses { } in the main text.
- < > Folio numbers of the Tashkent 592 manuscript are given inside parentheses < > in the main text.
- ( ) Page numbers of the facsimile of the Dushanbe 63 manuscript are given inside parentheses ( ) in the main text.
- ر، پ In case of giving the folio numbers of St. Petersburg C470 and Tashkent 592 manuscripts ر, abbreviation of the word رو, that means “on the recto side of folio,” and پ, abbreviation of the word پشت, that means “on the verso side of folio,” are attached after the number.
- ح In the case of that the insertion in the margin is long sentences and it continues to the next folios or pages, ح, abbreviation of the word حاشیه, that means “margin,” is inserted after folio or page number.

Symbols for showing changes and additions in the base manuscript and variants of other manuscripts.

- . , Period and comma are not used in the manuscripts. But we have used as occasion demands.
- < > These brackets show the conversation.
- { } These brackets show the insertion by us as occasion demands, although all manuscripts are missing the word inside.
- [ ] These brackets in the main text shows that two or more words or sentences inside are corrected or added, or in place of which the other variants are shown in other

manuscripts.

- \* This symbol shows that the form found in the base manuscript was corrected on the basis of forms found in other manuscripts. The manuscript, on which the correction is based, and the form of base manuscript are shown in the footnotes.
- # This symbol shows that word, phrase or sentence which are missing from the base manuscript and were restored on the basis of evidence from other manuscripts, abbreviations of which are shown in the footnote.
- + This symbol shows that the manuscript(s) indicated by the abbreviation contain the word, phrase or sentence in footnote, which we considered unnecessary for the main text.
- × This symbol in a footnote shows that the word, phrase or sentence indicated in the main text by the footnote reference number are missing from the manuscript(s) indicated by the abbreviation.

Other symbols:

- ? This symbol shows that the word in question is not clearly legible in manuscripts and the spelling of the word cannot be determined.
- ناخوانا This symbol shows that the word in question is not “legible” at all in manuscripts.

Others:

- 1) When a footnote is given without any of the symbols listed above or only with the square brackets [ ], it indicates that, while the form of the word, phrase or sentence in the text was taken from the base manuscript, the forms found in other manuscripts are listed in the footnote for reference.
- 2) Missing from their proper place or misspelling in their proper place, which is added in the margins, are treated in the same way as words or phrases or sentences in the main text. In such cases no special mark is added to show that these words were written in the margins. But in the case that these added sentences are very long and continued to the next page(s), as mentioned above, folio or page numbers with the mark ح are shown.
- 3) In the case that the written words are deleted by the expurgatory line in the manuscripts no special note is made. But the expurgation, which seems to be useful for the understanding of the history, is shown in the footnote with the sign (با خط بطلان), that is “with the line of expurgation”, indicating where it was by the symbol + in the main text.

### 3 Spelling

This critical edition faithfully follows the spelling in the base manuscript and another



spelling in other manuscripts are shown in the notes.

But, in some cases, we have changed the spelling in the base manuscript, to make them easy to read. The following explains the principles according to which the spelling in the base manuscript is corrected.

- 1) The arabic letter گ, characteristic of Persian, is never used in the manuscripts, in place of which the letter ک is used. Although the letters پ and چ are used, the letters B and J are often used in places of them. We have used the letters پ, چ, and گ, in the way that the contemporary Central Asian Persian language, Tajiki, uses these in cyrillic letters.
- 2) In the case that some words are written as one continuous word, for example, a) preposition like به and در, and demonstrative like آن and این written continuously with following word, b) postposition را, and است written continuously with preceding word, c) a noun and a verb spelled continuously, we have spelled them separately. For example, بمقصد in manuscripts is changed to به مقصد in this critical edition. Similarly, ایشانا is changed to ایشان را, در آن وقت to درانوقت, ایشانا را, and روی داد to رویداد, در آن وقت to درانوقت, ایشانا را, and عمری است to عمریست. In the cases that the last letter ه of the past participle or the first letter ا of است are lacking, for example کرده ست or کرد است, we have inserted the necessary letters and spelled like کرده است. But می attached to verb is not spelled separately, if it is spelled continuously in manuscripts.
- 3) Damma used in place of و, when two words are written in parallel in the manuscripts, is spelled و and no special note is made. For example عیش عشرت in the manuscripts is changed to عیش و عشرت in this critical edition.
- 4) In the case that the infinitive ī or relative ī is spelled by hamza ء in the manuscripts, it was spelled separately like ای, and no special note was made.
- 5) In the case that an arabic word is misspelled, we have corrected the spelling and the spelling in manuscripts is shown in the notes. For example, in the case that the word اسلحه is misspelled as اصلحه in manuscripts, we have written اسلحه in main text and shown اصلحه in the note with the indication of the abbreviations of the manuscripts.
- 6) In the case that symbols or letters characteristic of arabic are not written properly, for example, امراء shown like امرا, جرأت shown like جرءت, جهة shown like جهت, رحمان shown like رحمان, and حتی shown like حتا, we have neither corrected nor normalized, but have followed the spelling in the base manuscript, although it is not necessarily always spelled the same way every time. In these cases no special note is made.

- 7) The words, which we consider misspelling in view of contemporary (Iranian) Persian orthography, are not corrected, because we regard such spellings as reflecting the characteristics of the Central Asian Persian language at that time. and have followed the spelling in the base manuscript, although it is not necessarily always spelled the same way every time and no note is made. This principle includes cases of spelling *بر خواستن* or *خا* for the pronunciation of *khā*, for example, *بر خواستن* is used in place of *بر خوان* *دولتخانه* in place of *دولتخوانه*; *خان سالار* in place of *خوان سالار*; *خوار* in almost all cases, and cases of retaining or omitting the letter *ه* in cases that adjunct is added to the words which ends with *-a ه*, for example *خانها* is used in place of *خانه ها*, *زنده گی* is used in place of *زندگی*.
- 8) Similarly, if the sentence, which we consider incorrect, from the viewpoint of contemporary Persian language, are shown in all manuscripts, we have not corrected the sentence and no note is made. For example, *قرار بر قرار اختیار نمودن* is used in place of *قرار بر قرار اختیار نمودن* in all manuscripts: similarly, *فروز آوردن (آمدن)* in place of *فروود آوردن (آمدن)*. We have followed the base manuscript and no special note is made.

The differences in spelling between manuscripts are dealt as follows.

- 1) In the case that differences in spelling appears in the manuscripts, in principal, the spelling in the base manuscript is written in the text and the spelling in other manuscripts are shown in the note. Following example, we have shown the differences of spelling like the : *منقیت \ منغیت, خالق قل \ خالقل, عناق \ اناق* :
- 2) a) The variants for a word especially in Chaghatay words, toponym and ethnonym, for example, existence or lack or change of short vowels (*کورنوش \ کورونوش \ کورنش*), and changes between consonant (*قره قلیاق \ قراقلیاق*) and changes between consonant (*طوی \ توی*) are not normalized. We have followed the spelling in the base manuscript, although it is not necessarily always spelled the same way every time and no note is made.
- b) In case of above mentioned 5) and 6), no note is made, even if other manuscripts show other spellings or phraseology.
- 3) We have taken exceptional steps in spelling of the following words. We have followed the spelling in the base manuscript and have not made any special note of the changes, because spellings in other manuscripts are almost always spelled consistently and these cases frequently appear, we are afraid that the note would be cumbersome. These words are written as follows in each manuscript shown here

with abbreviations of manuscripts.

مرغیلان [ت][د] \ مرغینان [س]  
 چلچیق [د] \ چرچیق [ت] \ چیلچیق [س]  
 ولنعمی [ت] \ والنعمی [د][س]  
 کیشتی [ت] \ کشتی [د][س]  
 خدمت [د] \ خدمت [ت][س]  
 ملکه [د] \ ملیکه [ت][س]  
 بالآخر [د] \ بالآخر [ت] \ بالاخیر [س]  
 اوان < آوان [د][ت][س]  
 معه [د] \ مع [ت][س]  
 وارید [ت] \ وارد [د][س]  
 ایریس قل بی [د] \ ایریس قلی بی [ت] \ ادريس قلی بی [س] \ ایریس قلی بی [س]

#### Other:

The king of Khoqand khanate, Muhammad Ali khan is almost always written with the contemptible nickname, “مادر زن,” that is, “the husband of the mother.” But this nickname seems to have been erased afterwards and rewritten “غازی” or “ماده,” although these spellings are not clear. In cases where the scribe has forgotten to erase it and where the rewritten spellings are readable, we have written the version in the base manuscript in the text and other versions from other manuscripts in the notes.

## Introduction

### 1 Outline of the *Muntakhab al-tawārikh*.

The author of the *Muntakhab al-tawārikh*, Muḥammad Ḥakīm khān ibn Ma‘šūm khān was born in Khoqand, the capital of Khoqand khanate around 1217 / 1802-1803. The Khoqand khanate had risen in the beginning of the 18th century and ruled mainly the Ferghana Valley till the Russian conquest in 1876, the ruler of which was Ming tribe of Uzbek.

According to his own description, Muḥammad Ḥakīm khān on his paternal side, was a descendant of Khwāja Aḥmad Kāsānī, more popular with the title of Makhdūm-i A‘zam, a distinguished shaykh of Naqshbandiya in the 16th century. On his maternal side, he was a grandson of Nārbūta bī (ruled 1770-1799), a nephew of Nārbūta bī's son and successor ‘Ālim khān (ruled 1799-1810) and of ‘Ālim khān's brother and successor ‘Umar khān (ruled 1810-1822). So he was a cousin of Muḥammad ‘Alī khān (ruled 1822-1842), a son and the successor of ‘Umar khān.

He had spent his life at the court of the khanate, because he was a relative of khans family on his maternal side and also because his grandfather Ḥakīm tūra, his father Ma‘šūm khān and his granduncle Tūra khwāja were magnates of the khanate. Many descriptions of *Muntakhab al-tawārikh* show that he had grown up with Muḥammad ‘Alī khān as real brothers. But there friction occurred between them, and Muḥammad ‘Alī khān banished Muḥammad Ḥakīm khān after his coronation in 1822.

Around 1823, Muḥammad Ḥakīm khān departed Tashkent, which was in the territory of Khoqand khanate at that time, with a caravan of merchants and he accomplished the pilgrimage to Mekka through the Russian Empire, the Ottoman Empire and Egypt. On his way back, he stayed in Cairo again and returned to Central Asia through Qajarid Iran in 1828. He had learned Russian, Ottoman Turkic and Arabic languages and had opportunities to meet and converse with rulers there. For example, he had got acquainted with the governors of Russian cities, like Omsk, Orenburg and Astrakhan and he met Aleksander I in Orenburg. He also met Muḥammad ‘Alī pādshāh and his daughter in Egypt and Fath ‘Alī shāh in Iran. After returning to Central Asia, the amir of Bukhara Amīr Naṣr Allāh wanted to take care of Muḥammad Ḥakīm khān, but the latter refused. Muḥammad Ḥakīm khān had been in Shahr-i Sabz, when he wrote *Muntakhab al-tawārikh*.

There is no doubt that the *Muntakhab al-tawārikh* was written in Rabī I 1259, because there is a description about the event which occurred in Rabī I 1259/1-30 April 1843 and oldest manuscript, Tashkent 592 was written in 5 Rabī II 1259/5 May 1843.

*Muntakhab al-tawārikh* is comprised of five chapters (bāb). Chapter 4 is comprised of 3 parts and chapter 5 is comprised of 12 parts. Part 12 of chapter 5 alone comprises half of the total manuscript. Contents of them is as follows:

Chapter 1	History of Prophets
Chapter 2	Ancient Iranian dynasties
Chapter 3	Dynasties of China and Europe
Chapter 4	History of the first caliphs
Part 2	Umayyads
Part 3	'Abbāsīds
Chapter 5	History of various Islamic dynasties
Part 1	Şaffārīds
Part 2	Sāmānīds
Part 3	Būyīds
Part 4	Ghaznavīds
Part 5	Saljūqīds
Part 6	Khwārazmshāhīds
Part 7	Chingīzīds
Part 8	Timūrīds and Bāburīds
Part 9	Shībānīds (i.e. Bukhara khanate)
Part 10	Ashtarkhānīds (i.e. Bukhara khanate)
Part 11	Manghīts (i.e. Bukhara Amirate)
Part 12	Mings (i.e. Khoqand khanate)

*Muntakhab al-tawārikh* contains various genres of contents: world history, which is gathered from previous sources, local history in the author's period and the travel literature about pilgrimage to Mekka. The title of the book shows that the book is in the genre of world history, but local history and the travel occupy much of the book.

Most distinctive point of this book is that the history of Manghīts (i.e. Bukhara Amirate) and history of Mings (i.e. Khoqand khanate) are written on the basis of the author's experience and they contain much valuable information about the relationship between Afghanistan, Eastern Turkistan and these two countries. Especially the information about the events before 1820's of *Muntakhab al-tawārikh* are peerless, because other historical sources from Khoqand were written mainly after the 1860's.

The author's acquaintance with the situation of Europe makes the book more interesting. In his memoirs about pilgrimage he writes about the situation of Russian cities and peoples living there. Even if it couldn't be completed, he had wanted to visit Europe from Egypt. Although the campaign for modernization in Central Asia started at the end of the 19th century, he looked on the situation of his hometown already in the 1840's with his observant eyes.

The most characteristic point of this book is that it is not an official history written by

the order of the governor. The author is very hostile to Muḥammad ‘Alī khān because the latter banished the former. The memoir of the pilgrimage is in principal based on his own experience, but it seems to be arranged for the purpose of readers’ interest. In this point *Muntakhab al-tawārikh* can be called the prelude to modern Central Asian literature.

This book is titled *Muntakhab al-tawārikh* in all of the manuscripts, except for Tashkent 1560, which has a title *Intikhāb al-tawārikh*. But this difference doesn’t seem to be so important, because both of *muntakhab* and *intikhāb* are from the same stem.

## 2 Previous studies about *Muntakhab al-tawārikh*

All of the manuscripts of *Muntakhab al-tawārikh* are in the possession of institutes and libraries in the former Soviet Union. The value of *Muntakhab al-tawārikh* has been pointed out since the period of Russian Empire and *Muntakhab al-tawārikh* had been used as a main historical source by Soviet scholars. There are details about the development of the study of *Muntakhab al-tawārikh* in the articles of A. Mukhtarov and E. Xurshut. So here we will introduce only the most important studies concerning *Muntakhab al-tawārikh* directly.

Memoir of pilgrimage was published in modern Uzbek transcription from a Chaghatay manuscript in Tashkent<sup>1</sup>. But this seems to have been the common literature for broad-scale readers. As Xurshut pointed out afterwards, there are gross mistakes in their foreword, so it would not be academic. For example, redactors say that the author Muḥammad Ḥakīm khān had been in Irkutsk, Saratov and Istanbul, places which in fact he had never visited<sup>2</sup>.

It was A. Mukhtarov, who seriously studied *Muntakhab al-tawārikh* for the first time. He published Dushanbe 63 manuscript, kept in the Institute of Oriental Studies and Written Legacy, Academy of Sciences, Republic of Tajikistan (Tajik SSR at that time), in two volumes with detailed foreword and indexes<sup>3</sup>. Unfortunately the printing of the text is not in such good quality and there are some mistakes in the hand-made indexes.

Afterwards, E. Xurshut from the Institute of Oriental Studies, Academy of Sciences, Republic of Uzbekistan (Uzbek SSR at that time) presented five articles about *Muntakhab al-tawārikh*<sup>4</sup>. His series of accurate works provide us necessary and sufficient information,

---

<sup>1</sup> Ҳақимхон, *Хотиралар*, Нашрга тайёрловчилар: Х. Расул ва М. Қодирова, Тошкент, 1966

<sup>2</sup> *Там же*, стр. 12-13.

<sup>3</sup> Муҳаммед Ҳақимхан, *Мунтахаб ат-Таварих*, Ба чоп ҳозиркунанда, муаллифи муқаддима ва Таълиқот А. Мухтаров, чилди 1-2, Душанбе, 1983-1985.

<sup>4</sup> Хуршут, Э., «Мунтахаб ат-Таварих» как источник по истории Средней Азии

even if there are some points, with which we cannot agree, like the number of the manuscripts.

### 3 Existing Persian and Chaghatay manuscripts

#### Persian manuscripts.

According to A. Mukhtarov and E. Xurshut, there are seven Persian manuscripts. But, as discussed later, two of them seem to be one book in two volumes, so more correctly there are six Persian manuscripts. All of them are kept in former USSR states, like Russian Federation, Republic of Uzbekistan and Republic of Tajikistan.

#### 1) Institute of Oriental Studies, Academy of Sciences, Republic of Uzbekistan (hereafter Tashkent) 592

The oldest existing manuscript. 699 folios. Copied on 5th Rabī II 1259/5th May 1843 by Dāmlā Muḥammad Amīn. According to the note in the margin in 1b, this is one of the first ten manuscripts copied. The after-mentioned description in Tashkent 593 manuscript shows that this had been owned by a grandson of the author who lived in Khujand and afterwards was given to an aqsaqal Bābā Raḥīm.

#### 2) St. Peterburg branch, Institute of Oriental Studies, Academy of Sciences, Russian Federation (hereafter St. Peterburg) C470

678 folios. Copied on 28th Jumādā I 1259/26th June 1843 in Shahr-i Sabz by Qārī Amīnjān<sup>5</sup>. Page number put by the Institute in the upper-left side of folio skips from 659 to 670. So catalogue also shows false number of folios 688. Last part of the book i.e. from folio 679 to folio 697 is an appendix, which shows the history of the reign of Shīr 'Alī khān (1842-1845).

---

и сопредельных стран XVIII-XIX веков, *Общественные науки в Узбекистане(ОНУз)*, 1984/7, стр. 41-45; Он же, «Мунтахаб ат-Таварих» и история его изучения, *ОНУз*, 1985/2, стр. 59-63; Он же, «Мунтахаб ат-Таварих» и его списки, *ОНУз*, 1986/5, стр. 41-45; Он же, «Мунтахаб ат-Таварих» и его источники, *ОНУз*, 1986/12, стр. 39-44; Он же, От компиляции к первоисточнику (на примере источниковедческого анализа «Мунтахаб ат-Таварих»), *ОНУз*, 1988/4, стр. 66-70.

<sup>5</sup> Catalogue of manuscripts published by the Institute shows the date 28th Rabī I/ 29th April 1843 by mistake. Миклухо-Маклай, Н. Д., *Описание Персидских и Таджикских Рукописей*, Института Востоковедения, Москва, 1975, стр. 329.

### 3) Dushanbe 63 (Institute of Oriental Studies and Written Legacy, Academy of Sciences, Republic of Tajikistan)

367 folios. Copied in Muḥarram 1260/January-February 1844 in Kitāb by two copyist, one of whom is Muḥammad Amīn ibn Dāmlā 'Ināyat, who copied up to part 11, chapter 5 and the other of whom is his grandson Bābā khwāja. This is the manuscript, which A. Mukhtarov published as a facsimile. According to A. Mukhtarov's foreword, this manuscript was owned by A.A. Semenov, a researcher at the Institute. A.A. Semenov left a memo with manuscript, in which he says that he obtained the manuscript from Qāḍī in Khoqand Maḥmūd Makhdūm in 1915. After the death of A.A. Semenov, the manuscript was presented to the Institute.

### 4) Saltykov-Shchedrin State Public Library 44

357 folios. Copied in Sawwāl 1294/October-November 1877. According to the catalogue, the manuscript, which was copied by Faḍīl al-Dīn qārī, was brought by Kaufman, the first general-governor of Turkestan<sup>6</sup>. But on f.182a, where the part 11 of chapter 5 ends, there is a description "this manuscript was completed by some persons in the madrasa of Qāḍī al-quḍḍāt Mīr Bafaryāsh? Īshān i.e. Īshān 'Abd al-Sattār khān qāḍī al-quḍḍāt. and was completed finally by Mullā Bābājān muftī ibn Muḥammad Dhākir bāy Ustrūshanī in 19th Ramaḍān 1294," while in f.357a, the end of the book, there is a description "by Faḍīl al-Dīn qārī in Shawwāl 1294."

Indeed, the manuscripts are completed by some hands and the last folio of one department often leaves the blanks. It seems that the members divided the original manuscript and each member copied his own charge. The end of each part apparently shows that this was copied from Dushanbe 63 manuscript: f.1b of Sartykov-Shchedrin 44 manuscripts starts corresponding to f.1b(p.5 of facsimile) of Dushanbe 63, and this part end in f.48b and in next page handwritings is different. Beginning of f.49a corresponds to f.49a(p.100), f.111a to f.108(p.218) and f.164a to f.164a(p.330). After the end of part 11 of chapter 5, there is a big blank in Sartykov-Shchedrin 44. Between f.182 and f.183 pages of Dushanbe 63 manuscript from f.184 to f.199 lack. f.183a corresponds to f.200a(p.407), f.239a to f.256a(p.519), f.303a to f.320a(p.647) and f.341a to f.352a(p.711). Faḍīl al-Dīn may have only copied the last part.

---

<sup>6</sup> *Персидские и таджикские рукописи «новой серии» Государственной Публичной библиотеки им. М. Е. Салтыкова-Щедрина: Алфавитный каталог*, Сост. Г.И.Костыгова, Ленинград, 1973, стр. 247.



### 5) Tashkent 593

481 folios. Copied in 1316/1899. Based on 481a “this is copied in 1316/1899 from the original manuscript copied by Dāmlā Muḥammad Amīn in Kitāb in Rabī II 1259/1-30 May 1843”, this should be a manuscript copied from Tashkent 592. 481b gives following texts in Russian and with sign of S. Lapin (С. Лапин): “this manuscript was copied by Mirzo Abdu-Samatov (Мирзо Абду-Саматов) by my order from the manuscript kept by aqsaqal Babaraim (Бабараим) in Khujand, who obtained his manuscript from the grandson of the author living in Khujand. In the report of his visit to Turkistan in 1913, V.V. Barthold gives information about seven manuscripts, presented to Ser-Ali Lapin (Сер-Али Лапин), translator of the general-governor of Samarqand state by count N. Rostovtsev (граф Н. Я. Ростовцев) which included “the manuscript of *Muntakhab al-tawārikh*, which is copied from the manuscript belonging to the grandson of the author living in Khujand”, and he saw the latter in Khujand<sup>7</sup>. This shows that Tashkent 592 is owned by a grandson of the author and when N. Rostovtsev obtained Tashkent 592, S. Lapin helped him.

### 6) Tashkent 595 & Tashkent 596/I

#### Tashkent 595

273 folios. Copied in 21st Rajab 1329/9th July 1911 in Khoqand. It is interrupted in part 11 of chapter 5. The old catalogue published in the Soviet period informs us that this manuscript was copied in Khoqand from the manuscript of Muḥammad Amīn (i.e. Tashkent 592)<sup>8</sup>.

But Xurshut denied it, on the basis of his comparison of the manuscripts and concluded that it was copied from Dushanbe 63, which was copied by Muḥammad Amīn, who copied Tashkent 592, too<sup>9</sup>.

Xurshut shows the following description in 273b as one of its reasons; “the first

---

<sup>7</sup> Бартольд, В.В., Отчет о командировке в Туркестан, *Записки восточного отделения императорского русского археологического общества*, т.15, вып.2-3, С.Петербург, 1904, стр.218-219

<sup>8</sup> *Собрание восточных рукописей Академии наук Узбекской ССР*, т.1, Ташкент, 1952, стр. 88.

<sup>9</sup> Хуршут, Э., «Мунтахаб ат-Таварих» и его списки, *ОНУз*, 1986/5, стр. 44. Mr. Xurshut mentions following mentions; Existing titles in Tashkent 595 and Dushanbe 63 lack in Tashkent 592 and 593; Amīr Ḥaydar had lived 33 years according to Tashkent 595 and Dushanbe 63 but 31 years according to Tashkent 593.

manuscript, I, Muḥammad Amīn ibn Dāmlā 'Ināyat, in Khoqand on Monday 21st Rajab 1329<sup>10</sup>."

We can conclude that Tashkent 595 was copied not from Tashkent 592, but from Dushanbe 63, but we cannot accept that he copied the second manuscript in 1911, 68 years after the first manuscript, because he had had a grandson, with whom he copied manuscript 592 in 1260/1844.

The original text is as follows:

... نسخه اول همین کتاب من محمد امین ابن داملا عنایت فی شهر محرم الحرام سنه ۱۲۶۰  
بود که در بلده کتاب روز یکشنبه ماه مذکور نسخه دویم فی بلده خوقند سنه ۱۳۲۹ ۲۱  
رجب المرجب روز دوشنبه...

Xurshut read من محمد امین as Persian "man" i.e. "I," and regarded "I, Muḥammad Amīn (я, Мухаммад Амин)," but the verb shows third person. Here it should be read "min" in Arabic and regarded like من (ید) "by (the hands of)." Then this sentence would be read as follows; "The first manuscript was copied in Kitāb in Muḥarram 1260 by Muḥammad Amīn ibn Dāmlā 'Ināyat, and the second one in Khoqand on Monday 21st Rajab 1329." Here the copyist of the second manuscript is not shown.

The handscripts of the first part of this manuscript i.e. till 152a and the second part i.e. from 153a are different. The first handscript is similar to that of the first part of Dushanbe 63, which is copied by Muḥammad Amīn himself and the second one is similar to that of the second part of Dushanbe 63 and to that of the after-mentioned 596/I. If this supposition is correct, the first part of 595 would have been copied by Muḥammad Amīn and the following part would have been copied by his grandson Bābā khwāja, but we have no evidence for this claim.

F.1a is marked with the seal of "Yūnusjān Dāda Muḥammad ūghlī Āghālīq Khūqandī 1338."

### Tashkent 596

185 folios. The information on f.185b. "this manuscript was copied by Bābā khwāja ibn Mīr 'Ubayd Allāh ibn Muḥammad Amīn in Khoqand from the manuscript copied in 1260/1844" shows that this is a copy from Dushanbe 63. It contains only part 12 of chapter 5. F.185b is marked with the same seal as Tashkent 595 "Yūnusjān Dāda Muḥammad

<sup>10</sup> New catalogue published in Republic of Uzbekistan says that Tashkent 595 "was copied from the manuscript copied in Kitāb in 1265/1848-1849 (273b)," but in manuscript, indeed, 1260 is shown. *Собрание восточных рукописей Академии наук Республики Узбекистан, история, Ташкент, 1998, стр. 197.*

ūghlī Āghālīq Khūqandī 1338” is put. This indicates that these two manuscripts were in the possession of the same person.

A.Z. Validov, in his report written after his research in the Ferghana Valley, states as follows; “*Muntakhab al-tawārikh* possessed by Юнус-Джан-Дадха-Мухаммедов (Yūnusjān Dādkhāh ibn Muḥammad) is in two volumes and was copied from the autographical manuscript possessed by qāḍī Maḥmūd Makhdūm in Khoqand<sup>11</sup>.” The manuscript of qāḍī Maḥmūd Makhdūm is Dushanbe 63, which A.A. Semenov obtained.

All the evidence – 1) the fact that Tashkent 595 is composed of the first part of the book up to part 11 of chapter 5 and Tashkent 596/I is composed of the second part of the book i. e. part 12 of chapter 5, 2) the fact that both of them were copied from Dushanbe 63, 3) the same seal appears on both, and 4) the name of the seal – show that Tashkent 595 and Tashkent 596/I are two volumes of a single book mentioned by A.Z. Validov, which was possessed by Yūnusjān Dādkhāh (or Dāda) ibn Muḥammad, who lived in Khoqand.

Thus we conclude that the number of existing Persian manuscripts is 6.

### **Chaghatay manuscripts.**

There are 4 existing Chaghatay manuscripts. The translator of the Chaghatay version is not known us. We have not used a Chaghatay version but here we show them for reference only in brief.

#### **1) Tashkent 594**

408 folios. Copied in 1294/1877. Copyist is unknown. This is the short version of *Muntakhab al-tawārikh* and there is a very big difference between this and Persian version.

#### **2) Tashkent 1560**

404 folios. Copied in 1295/1878. Copyist is unknown. This has the title “*Intikhāb al-tawārikh*” and has possibility that this was copied from Tashkent 594 manuscript<sup>12</sup>.

#### **3) St. Peterburg D90**

435 folios. Copied in 1295/1878. Copyist is unknown. According to the catalogue,

<sup>11</sup> Валидов, А. З., Восточные рукописи в Ферганской области, *Записки восточного отделения императорского русского археологического общества*, т.22, вып.3-4, Петроград, 1915, стр.304. He says that Dushanbe 63 is autograph by mistake.

<sup>12</sup> *Собрание восточных рукописей Академии наук Республики Узбекистан, история*, Ташкент, 1998, стр. 198.

this was translated by the order of Mullā Mīr sayyid Nāṣir ibn Mīr sayyid Aḥmad bāy<sup>13</sup>.

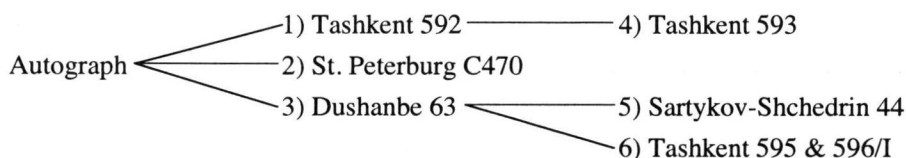
#### 4) St. Petersburg D225

311 folios. Copied in 1303/1885. Copyist is Mullā Muḥammad Ya'qūb ibn Dādkhwāja.

#### 4. The relationship between the manuscripts

As is mentioned above, there exist original Persian and Chaghatay translated versions of *Muntakhab al-tawārikh*. There are 6 Persian manuscripts. Three of them were made within one year after the completion of the book and other three were made more than 30 years after.

Diagram of manuscripts. (The numbers are same as in the explanation given in chapter 3)

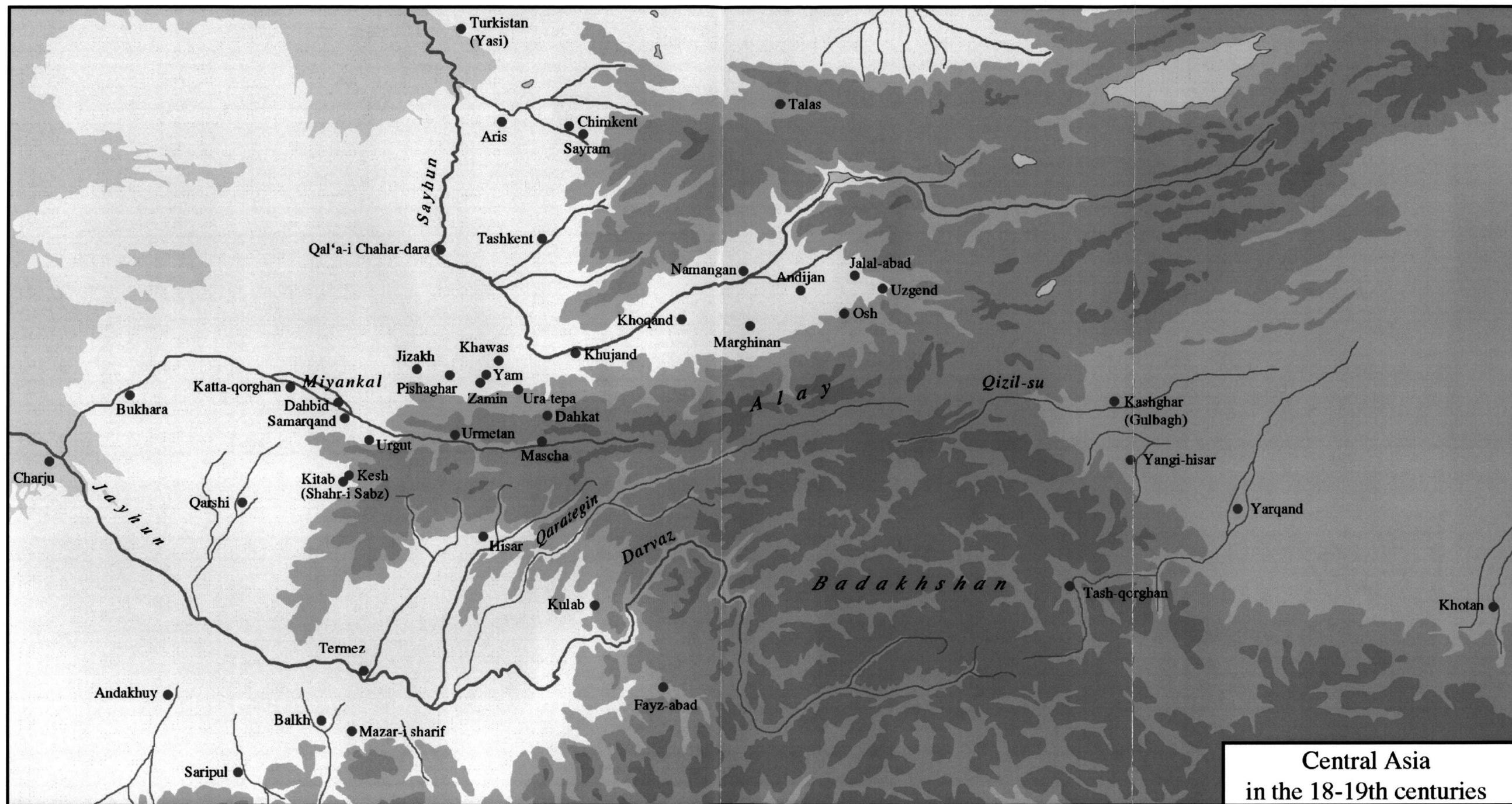


We took St. Petersburg C470 as the base text. Many of the corrections in the margins on Tashkent 592 and Dushanbe 63 are in the main text in it. Its handwriting is beautiful and it has few mistakes, so we may regard it as the most complete version. Appendix of St. Petersburg C470 about the events after the enthronement of Shīr 'Alī khān is also valuable.

We also used Tashkent 592 and Dushanbe 63 manuscripts for recension, because they are more accurate than the other three later manuscripts. There are very little differences between all of these three manuscripts, which we have used, because they were copied within one year after the completion of the book. There are only some differences in words or expression and there are not any interruption or big omissions. In short they are the best three manuscripts. We referred to other later Persian manuscripts and Chaghatay manuscripts but we have not made use of them for recension.

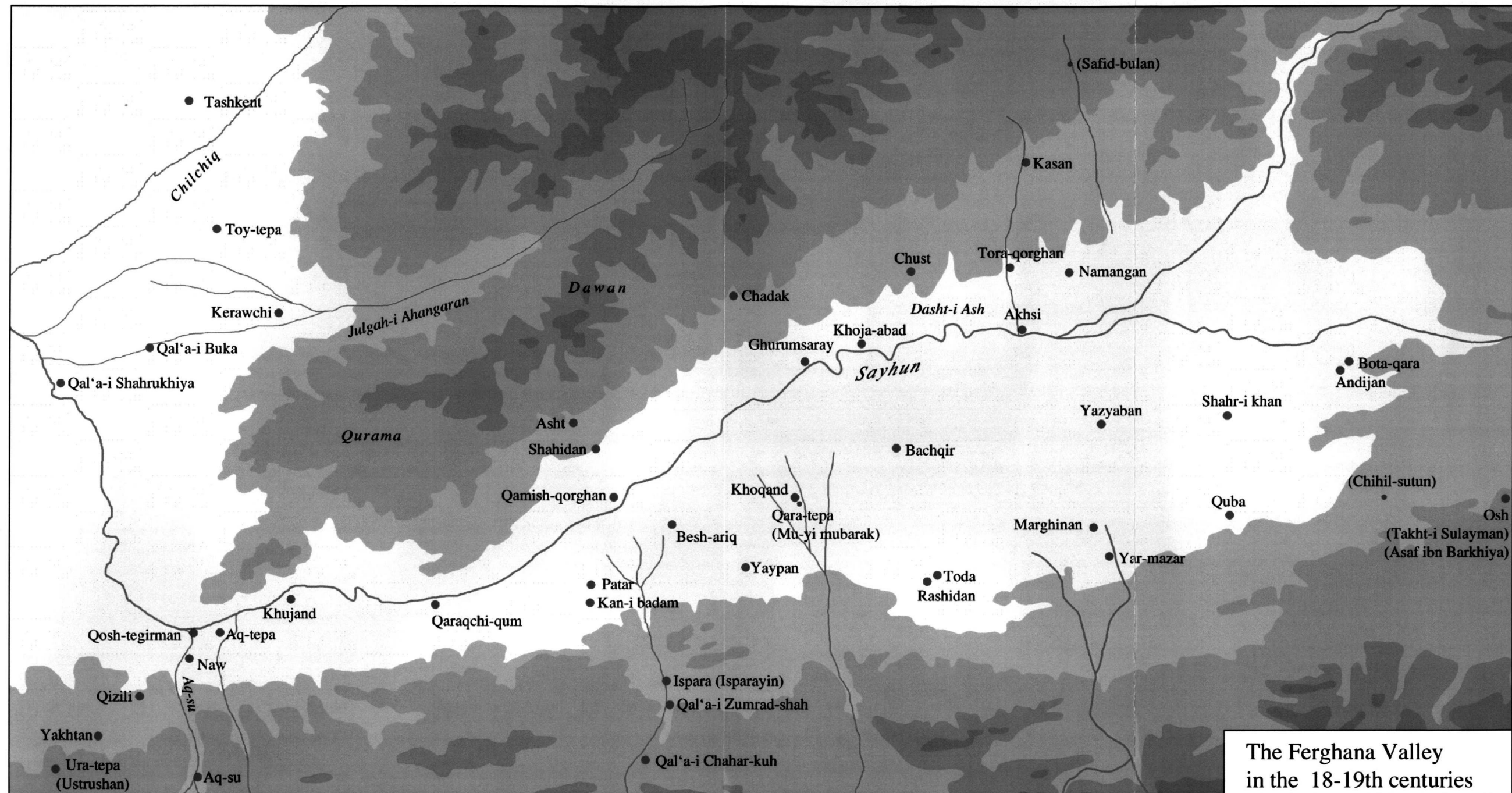
---

<sup>13</sup> Дмитриева Л. В., Мугинов, А. М., Муратов, С. Н., *Описание тюркских рукописей Института народов Азии*, т.1, Москва, 1965, стр. 51-53.













Studia Culturae Islamicae No.81  
イスラム文化研究第81集

**MUNTAKHAB AL-TAWĀRIKH**

Selected history

vol. II

**Muḥammad Ḥakīm khān**

Edited by

**Yayoi KAWAHARA & Koichi HANEDA**

**選史Ⅱ**

ムハンマド・ハキーム・ハーン 著

河原弥生・羽田亨一 校訂

2006(平成18)年3月3日

発行 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1

TEL 042-330-5600

印刷 株式会社プリント永山

東京都多摩市落合2-6-1

© Yayoi KAWAHARA, Koichi HANEDA 2006

ISBN4-87297-926-5







گ

گبور ناتور (اوروسیه) ۳۳۷-۳۴۹، ۳۵۴-  
 ۳۵۸، ۳۶۰-۳۶۳، ۳۶۵، ۳۶۸-۳۶۹،  
 ۳۷۴

م

محرم ..... ۵۹۸  
 محرم باشی ..... ۲۸۷  
 مفتی ..... ۶۸۵  
 مہتر ..... ۲۲۳  
 میر آخور باشی ..... ۲۶۶  
 میر اسد ۱۳۷، ۱۵۱، ۱۵۳، ۱۷۰-۱۷۱  
 میر بچہ ..... ۱۹، ۲۰  
 میرزا .... ۵۲، ۶۷-۶۸، ۸۳، ۸۵، ۱۱۳،  
 ۱۳۶-۱۳۷، ۱۵۱، ۵۲۱-۵۲۲،  
 ۵۳۱-۵۳۲، ۵۴۰، ۵۴۵  
 میرگن ..... ۱۹۷  
 مینگ باشی ..... ۶۶۳، ۶۶۸، ۶۷۰

ن

ندیم ..... ۶۰۲  
 نقیب ..... ۱۳۷، ۲۱۰

ی

ینگى چریک (ترکیہ) ..... ۴۰۹

## فہرست کتب

ت

تمہید ..... ۵۹۸

س

سیر البلاد ..... ۴۲۰

ش

شیرین و فرہاد ..... ۵۲۱

ع

عجایب المخلوقات ..... ۴۲۰، ۴۳۵

گ

گلستان ..... ۴۷۴، ۵۰۹

ل

لیلی و مجنون ..... ۵۲۱

م

منتخب التواریخ ..... ۶۵۹

ی

یوسف وزلیخا ..... ۵۲۱

ص

صاحب قران... ۱۳۴، ۴۱۶، ۵۴۳، ۶۵۳  
صدر ..... ۱۳۷، ۱۵۱  
صدور ..... ۶۳، ۱۳۷، ۶۱۵

ع

عناق ..... نگرید؛ اناق

غ

غلام بچه ..... ۲۹۳-۲۹۴

ف

فیضی ..... ۱۳۷، ۲۴۴، ۲۶۲، ۲۸۴  
فیضی گی ..... ۲۱۱

ق

قاضی عسکر ..... ۱۳۷  
قاضی کلان ..... ۱۳۷  
قوش بیگی .. ۲۰-۲۱، ۷۰، ۷۲، ۱۳۶،  
۱۴۳، ۱۴۵، ۱۴۸-۱۴۹، ۱۵۱-۱۵۲،  
۱۷۰-۱۷۱، ۲۰۷-۲۰۸، ۲۱۴-۲۱۶،  
۲۱۹، ۲۳۱، ۲۳۳، ۲۳۵-۲۳۶، ۲۴۰،  
۲۶۸-۲۶۹، ۲۹۹-۳۰۰، ۳۰۹، ۵۵۹،  
۵۷۳، ۵۸۳، ۶۰۴-۶۰۵، ۶۱۲، ۶۱۸،  
۶۲۱-۶۲۳، ۶۲۷-۶۲۸، ۶۳۲، ۶۷۷،  
۶۷۹، ۶۸۵

۲۳۳، ۲۳۵، ۲۳۹، ۲۶۸-۲۶۹، ۲۸۵،  
۲۹۸، ۳۰۱، ۳۰۹، ۳۱۲-۳۱۳، ۳۱۹،  
۳۳۱، ۳۳۳، ۵۶۷، ۵۷۶، ۶۱۵، ۶۲۱،  
۶۲۷، ۶۴۷-۶۴۸، ۶۷۰، ۶۷۳، ۶۷۵،  
۶۸۵

دسترخانچی .. ۱۳۷، ۱۴۴، ۳۱۹، ۵۸۱،  
۶۱۵-۶۱۷، ۶۷۳

دیوان بیگی ..... ۲۹، ۳۵-۳۷، ۵۶، ۶۰-

۶۲، ۶۵-۶۶، ۶۸، ۷۳، ۱۱۱، ۱۲۱،  
۱۲۸، ۱۳۱-۱۳۳، ۱۳۵-۱۳۸،  
۱۴۵-۱۴۹، ۱۵۱-۱۵۳، ۱۵۶،  
۱۷۰-۱۷۱، ۱۷۳، ۲۰۷، ۲۱۱، ۲۱۳،

۲۱۹، ۲۲۸-۲۲۹، ۲۳۲،  
۲۳۸-۲۳۹، ۲۴۳، ۲۵۸-۲۶۰، ۲۸۴،  
۲۸۸-۲۹۰، ۳۱۹، ۳۳۲، ۳۳۴، ۵۶۵،  
۵۶۷، ۵۷۱، ۵۷۳-۵۷۴، ۶۱۱-۶۱۲،  
۶۵۱، ۶۵۶، ۶۶۶، ۶۷۰-۶۷۱،

ر

رئیس ..... ۶۵

ش

شیخ الاسلام .. ۱۳۷، ۱۷۰، ۳۸۲، ۵۶۱،  
۶۱۸، ۶۸۴  
شیغاول ..... ۲۹۸، ۳۰۱، ۶۷۳

## فهرست مشاغل و مناصب

۱

اتالیق . ۱، ۴-۵، ۹، ۱۳۷-۱۳۸، ۱۵۲،  
 ۱۶۸، ۱۷۰، ۲۳۶-۲۳۷، ۲۵۹-۲۶۰،  
 ۲۶۵، ۶۰۴-۶۰۵، ۶۵۲، ۶۸۰، ۶۸۵  
 اشیک آقاباشی..... ۶۷۷، ۶۸۰  
 اغاچه..... ۳۲۶  
 امیر المسلمین..... ۱۳۶، ۱۷۷، ۲۰۳  
 امیر لشکر..... ۳۰۹  
 اناق ۷۰-۷۱، ۱۴۳-۱۴۴، ۱۸۷، ۲۳۳،  
 ۲۳۹، ۶۸۵

اناق کلان..... ۱۳۷، ۱۷۰  
 اودی چیان..... ۱۷۴-۱۷۵  
 اوراق کلان..... ۱۳۷، ۲۱۹  
 ایت باش..... ۱۳

ب

بوچه بردار..... ۱۴۴  
 بهادر.. ۷، ۱۳، ۱۵، ۱۸، ۲۰، ۲۲-۲۳،  
 ۵۰-۵۱

پ

پروانچی.. ۶۵، ۷۰، ۱۳۷-۱۳۸، ۱۴۸-  
 ۱۴۹، ۱۵۱-۱۵۳، ۱۷۰-۱۷۱، ۲۱۳،  
 ۲۳۱، ۲۳۳، ۲۳۷، ۲۴۰، ۲۵۵،  
 ۲۶۵-۲۶۶، ۲۶۸-۲۶۹، ۳۰۹، ۳۳۳

۳۸۲، ۴۱۷، ۵۷۱، ۵۷۳، ۵۸۴،  
 ۵۸۷-۵۸۸، ۶۰۴، ۶۰۷، ۶۱۲، ۶۱۵،  
 ۶۲۳، ۶۲۷، ۶۴۲-۶۴۳، ۶۴۷-۶۴۸،  
 ۶۵۳، ۶۶۳، ۶۷۱، ۶۷۳، ۶۸۵

ت

توپچی باشی..... ۱۳۷، ۱۵۱  
 توقسابه..... ۸۵، ۶۱۴-۶۱۵، ۶۱۹  
 تونقاتر ۲۴۲، ۲۵۰، ۳۰۳، ۲۱۳-۲۱۴،  
 ۲۴۲، ۲۵۰، ۲۹۹، ۳۰۱-۳۰۴، ۶۷۳

ج

جلو قوش بیگی..... ۱۳۷، ۱۵۲، ۱۷۵

چ

چاپوقچی..... ۱۴۴

خ

خاقان (خطای)..... ۳۳۰  
 خزینه چی..... ۵۸۷  
 خواجه کلان.. ۱۲۸، ۱۳۷، ۱۵۲، ۱۷۰،  
 ۲۲۱-۲۲۲، ۳۱۹

د

دادخواه ۵، ۷۲، ۸۴، ۱۳۷، ۱۴۴-۱۴۵،  
 ۱۵۱-۱۵۲، ۱۷۰-۱۷۱، ۱۶۲، ۱۷۰

ن	قراقلیق ..... (قره قلیق)
نوخی ..... ۳۸۲، ۳۰۵	قرغیز ..... (قیرغیز)
	قره قلیق ..... ۲۳۰-۲۳۱، ۲۳۶، ۲۳۹، ۲۶۵
ه	قزاق .... ۶۲، ۱۰۷-۱۰۸، ۱۵۹، ۳۳۶، ۳۷۱، ۶۴۴، ۶۷۷
هند ..... ۵۴۷، ۵۱۲، ۴۰	قلماق ..... ۶، ۷، ۴۹، ۵۱، ۳۸۱، ۶۴۴
ی	قیرغیز .... ۲، ۷، ۵۳، ۵۹، ۱۹۶، ۳۱۲، ۶۴۳-۶۴۴، ۶۴۸، ۶۵۱، ۶۵۶
یمنی ..... ۴۲۳	۶۶۳-۶۶۴، ۶۶۷، ۶۶۹-۶۷۰
یوز. ۷، ۱۰-۱۲، ۲۴، ۸۵، ۱۴۳، ۱۴۵	۶۷۳، ۶۷۷، ۶۸۰، ۶۸۲
۱۴۷	قیزیل باشی .... ۵۳۳، ۵۴۹-۵۵۰، ۵۸۱
یهود ..... ۴۳۴	
	ک
	کوردیه ..... ۴۱۳
	کینگس ..... ۱۳۸-۱۳۹، ۶۳۰
	م
	منغیت ..... (منقیت)
	منقیت .... ۱، ۱۰، ۶۸، ۷۰، ۸۴، ۱۳۱، ۲۳۶، ۲۴۳، ۶۱۶، ۶۳۵، ۶۳۷
	۶۴۲-۶۴۵، ۶۴۷، ۶۴۹-۶۵۰، ۶۷۰، ۶۷۵
	مینگ ۱، ۱۱، ۱۲، ۶۴۲، ۶۴۶-۶۴۷، ۶۴۹، ۶۶۲، ۶۷۰



## فهرست قبائل

۱

اباحت..... ۶۵۱  
 ارمنی .. ۳۶۰-۳۶۱، ۳۸۲، ۴۱۴، ۴۱۶  
 افغان..... ۲۴۴-۲۴۵، ۲۹۲  
 اوروس.. ۲۶، ۳۳۷-۳۳۸، ۳۴۱، ۳۵۳،  
 ۳۵۵، ۳۶۴، ۳۸۰، ۳۸۲-  
 ۳۸۳، ۴۰۲، ۴۰۷، ۵۷۱  
 اوزبک ... ۹، ۱۱۶، ۱۲۲، ۱۴۵-۱۴۶،  
 ۲۳۰، ۲۳۶، ۶۳۵

ب

بدوی ..... ۴۹۴، ۵۰۴

پ

پانغاز ..... ۱۱۲

ت

تاجیک..... ۶۵  
 ترک ... ۴۰۸، ۴۲۰، ۴۲۹، ۶۳۴، ۶۶۹  
 ترکمان..... ۵۵۰-۵۵۱، ۵۵۸

چ

چله قزاق ..... ۳۳۶  
 چوم باغیش ..... ۳۱۵

ح

حبشی..... ۲۵۴، ۴۷۱

خ

خطای قیچاق. ۱۴۰، ۲۳۰، ۲۳۶، ۲۳۸-  
 ۲۳۹، ۲۶۵، ۲۶۸

ز

زنگی ..... ۲۵۵

ع

عرب .. ۴۲۳، ۴۲۹، ۴۳۶، ۴۴۲، ۴۹۲،  
 ۴۹۴، ۵۰۱، ۵۰۳-۵۰۴

غ

غلچه ..... ۹۷-۹۸

ف

فرنگ. ۲۸۰، ۳۴۷، ۳۸۷-۳۸۸، ۳۹۱-  
 ۳۹۲، ۳۹۷-۳۹۸، ۵۴۴-۵۴۵

ق

قاچار..... ۵۰۸، ۵۴۱

قیچاق. ۱۲۲، ۶۶۷-۶۷۵، ۶۷۸-۶۸۰،

۶۸۲-۶۸۵

ه  
هرات ..... ۵۰۷  
هفت شهر. ۶، ۲۴۷، ۳۱۸، ۳۲۴-۳۲۵،  
۴۶۲  
همدان ..... ۵۰۸  
هندوستان .... ۴۴۰، ۴۹۴-۴۹۵، ۵۴۳،  
۵۹۰  
ی  
یارکند ..... ۳۲۱، ۳۲۵  
یار مزار.. ۴۳، ۱۵۹، ۱۶۶، ۱۸۲-۱۸۳،  
۱۹۷، ۲۰۰  
یازیبیان ..... ۱۶۶  
یام ..... ۱۰، ۶۰۶، ۶۱۲  
یام (قلعه) ..... ۱۴۷-۱۴۸، ۱۴۱  
یان بوع ..... نگرید؛ یانبوق  
یانبوق ..... ۴۳۵، ۴۴۲، ۴۴۷  
یختان سرای ..... ۱۴۹  
یر مسجد ..... ۱۹۸-۱۹۹، ۲۰۱، ۶۲۳  
یسو (یسی) ..... ۱۳۴، ۱۳۶، ۲۸۷  
یسو (قلعه) ..... ۱۳۳  
یسی تپه ..... ۲۸  
یعقوبیه ..... ۴۹۷  
یمن ..... ۵۴۴  
ینگى قورغان ..... ۴، ۲۶۹  
ینگى قورغان (قلعه) ..... ۲۳۱  
یى پى ..... ۶۵۸

مغ ..... ۱۴۵، ۱۴۸، ۵۷۰-۵۷۱  
مکریا ..... ۳۵۳  
مکه ... ۲۸۵، ۳۳۴، ۴۳۶، ۴۳۸، ۴۴۱،  
۴۴۶، ۵۹۲-۵۹۳  
موسى کلیم الله (مرقد) ..... ۴۹۵  
موى مبارک ..... ۱۷، ۵۹۱، ۶۴۹  
میان کال ..... ۲۳۰، ۲۳۶  
میمنه ..... ۵۵۹  
ن  
نابولوس ..... ۴۹۶  
نبی طایی ..... ۵۰۲  
نجانى ..... ۱۴۲  
نژد ..... ۵۰۲  
نشابور ..... ۵۰۷، ۵۵۰  
نمنگان ۲۰، ۳۰، ۳۲، ۵۶، ۲۱۹، ۲۳۳،  
۲۴۸، ۲۵۱، ۲۸۴، ۶۴۴، ۶۶۵، ۶۸۳  
نو ..... ۲۳۳، ۲۶۶، ۲۶۸، ۶۱۵، ۶۸۰  
نو (قلعه) ..... ۶۶۶، ۶۷۵  
نوبهار ..... نگرید؛ چهار باغ (نو بهار)  
نیاز بیک (قلعه) ..... ۷۸، ۸۶  
نیل (دریا) ... ۴۲۸، ۴۳۵، ۴۵۴-۴۵۵،  
۴۶۶، ۴۹۱  
نیلِی (قلعه) ..... ۱۲۱

۵۹۳، ۴۴۷

مرسمان ..... ۴۱۳

مرغینان... ۴، ۷-۸، ۱۸، ۳۷، ۴۳، ۷۹-

۸۱، ۱۵۶-۱۵۷، ۱۵۹، ۱۷۶-۱۷۷،

۱۹۵، ۲۳۳، ۲۷۰، ۳۳۳، ۵۹۱،

۶۲۵، ۶۳۵-۶۳۶، ۶۵۰، ۶۶۳-

۶۶۴، ۶۷۵

مرو ..... ۲۹۲، ۵۰۷

مزار حضرت شیخ قثم ابن عباس رض

اسبکی ..... ۵

مزار حضرت قطب الاقطابی (خواجه احمد

یسوی) ..... ۱۳۴

مزار فیض آثار قطب الاولیا غوث الاتقیا

سلطان صادق بورا خان ..... ۳۱۲

مزدلفه ..... ۴۳۷، ۴۳۹

مسجد اقصی ..... ۴۹۳

مسجد جامع ..... ۱۸۵

مسجد حضرت ابراهیم ..... ۴۳۷

مسچاه ..... ۳۴

مشهد .... ۵۷، ۵۴۶، ۵۵۳-۵۵۶، ۶۸۱

مصر... ۴۱۷، ۴۲۰-۴۲۱، ۴۲۳-۴۲۴،

۴۲۶-۴۲۸، ۴۳۰-۴۳۱، ۴۳۵،

۴۳۷، ۴۴۳، ۴۵۴-۴۵۶، ۴۵۸،

۴۶۱، ۴۶۴، ۴۶۸، ۴۷۱، ۴۷۸،

۴۸۱، ۴۸۵، ۴۹۲، ۵۹۳

معدن ..... ۴۱۳، ۴۱۵

کوه طور ..... ۴۹۴

کیراوچی ..... نگرید؛ کراوچی

کیش ..... ۴

گ

گجرات ..... ۲۰۷، ۲۱۰

گرجستان ..... نگرید؛ گورجستان

گلباغ ... ۱۹۶، ۳۱۳، ۳۱۸، ۳۲۳-۳۲۴

گلباغ (قلعه) ... ۳۱۹، ۳۲۲-۳۲۳، ۳۲۴،

۵۷۳

گورجستان ..... ۳۸۲، ۴۱۴، ۵۴۵

ل

لاتکیه ..... ۴۱۶

لاهور (دریا) ..... ۵۹۰

لکناور ..... ۴۴۰

م

ما وراء النهر ..... ۳۶، ۱۳۲، ۱۲۴، ۱۳۶،

۱۸۴، ۱۹۷، ۲۶۱، ۲۶۶، ۳۲۰،

۳۳۶، ۳۵۲-۳۵۴، ۳۵۷، ۳۶۱،

۳۶۹، ۳۷۲، ۳۸۲، ۴۱۹، ۴۶۱،

۴۶۴، ۵۲۶، ۵۴۴، ۵۴۸، ۵۵۴،

۶۰۲، ۶۵۷، ۶۷۶

مازندران ..... ۱۵۹، ۳۸۶

مدینه . ۳۳۴، ۴۱۸، ۴۳۱، ۴۳۶، ۴۴۲،

قیصریه ..... ۴۱۶

قی نر ..... ۶۶۱

### ک

کابل ..... ۵۱۲

کاسان .... ۶۴۴، ۲۸۴، ۲۵۰-۲۴۸، ۳۱

کاشغر ۶، ۴۴، ۱۸۲، ۱۹۶، ۲۴۴، ۳۱۰،

۳۱۲، ۳۱۷-۳۱۸، ۳۲۵-۳۲۹،

۴۶۲-۴۶۳، ۵۶۶، ۵۷۲-۵۷۴

کان بادام ... ۳۳، ۵۳، ۶۶، ۲۳۰، ۶۴۷،

۶۴۹، ۶۷۵

کان نمک ..... ۱۱۵

کتاب ..... ۶۵۹

کته قورغان ..... ۷۳

کراوچی ..... ۷۹، ۲۰۷

کراوچی (قلعه) ..... ۱۰۹، ۱۱۲، ۶۵۰

کریلا ..... ۶

کشمیر ..... ۲۰۷، ۲۱۰، ۵۲۴، ۵۴۷

کعبه ..... ۳۴۴، ۴۰۹، ۴۴۱، ۴۸۸

کنعان ..... ۱۹۷، ۴۲۱، ۴۹۲، ۴۹۷

کوثر ..... ۱۸۰

کوردستان ..... ۵۰۸

کولاب ..... ۵۸۴، ۵۸۸-۵۸۹

کوهستان ... ۵۸، ۹۷-۹۸، ۱۱۲، ۱۳۹،

۲۴۳، ۳۳۳، ۵۸۳-۵۸۴، ۵۸۷-

۵۸۸، ۶۰۷، ۶۴۳، ۶۴۸، ۶۵۱، ۶۶۱

قرشی ..... ۲۳۶، ۵۸۴

قرقچی قوم ..... ۳۵، ۱۷۴، ۶۱۸، ۶۷۵-

۶۷۶

قرقچی قوم (قلعه) ..... ۶۷۵

قرمه ... ۵۵، ۶۲، ۷۵، ۷۹، ۸۷، ۱۰۴،

۱۳۳، ۲۱۵، ۲۱۹، ۲۳۳، ۶۱۵،

۶۲۰، ۶۵۰، ۶۵۲، ۶۷۷، ۶۷۹

قره تپه ..... نگرید: قراتپه

قره دنگیز ..... ۴۰۸

قران ..... ۳۵۳

قلزم (دریا) ..... ۳۷۹، ۴۱۱

قمیش (قمیج) قورغان ۲۰۱، ۲۱۵، ۶۵۲

قنیه ..... ۴۵۴

قوبا ..... ۱۵۹، ۱۶۱

قوبان (دریا) ..... ۳۸۶

قورمه ..... نگرید: قرمه

قوسیر ..... ۴۵۰

قوش تیگیرمان ..... ۶۶۶

قوش تیگیرمان (قلعه) ۲۲۸، ۲۳۱، ۲۴۱

قیزیلی (قلعه) ..... نگرید: قیزیلی (قلعه)

قیزیل ارچه ..... ۲۰۷

قیزیل سای ..... ۱۳۸

قیزیل سو ..... ۳۱۳، ۳۱۶

قیزیل کوپروک ..... ۱۱۲

قیزیلی ..... ۱۴۹، ۵۶۹

قیزیلی (قلعه) ..... ۱۷

## ع

- عراق ..... ۵۰۵  
 عربستان ..... ۴۹۹، ۴۵۱  
 عرس (دریا) ..... ۳۰۲  
 عرفات ..... ۴۳۸-۴۳۷، ۱۸۴  
 عنقادام ..... ۱۲۱  
 عین (قصر) ... ۴۲۸، ۴۳۰، ۴۵۷-۴۵۸، ۴۶۰، ۴۶۳

## غ

- غار و امتا ..... ۴۴۵  
 غزه ..... ۴۹۳، ۴۲۲  
 غوروم سرای ۵۷، ۶۲-۶۵، ۶۲۰، ۶۴۴، ۶۴۸-۶۴۷

## ق

- قاهره .. ۴۱۷، ۴۲۰، ۴۲۴، ۴۲۸، ۴۲۸  
 قبة الاسلام ..... ۴۴۴  
 قتار تیرک ..... ۶۳  
 قدم النبی ..... ۴۱۸  
 قدوس شریف ..... ۴۹۶، ۴۹۳  
 قدیفه ..... ۴۱۷  
 قراتیه ..... ۶۴۹، ۵۹۱، ۱۷  
 قراتیگین ۳۴، ۱۳۱، ۱۴۰، ۲۱۶، ۳۳۲  
 ۵۸۳-۵۸۴، ۵۸۷-۵۸۸، ۶۶۱، ۶۸۱  
 قراسو ..... ۵۵

## ف

- فراط (دریا) ..... ۵۰۴  
 فرغانه ۱، ۴، ۷-۸، ۱۹، ۲۵، ۴۳، ۴۸-  
 ۴۹، ۵۱، ۶۷-۷۱، ۷۴-۷۵، ۷۷-  
 ۷۹، ۸۲، ۸۷، ۸۹، ۱۰۳، ۱۲۱،  
 ۱۲۷، ۱۳۱، ۱۳۳-۱۳۴، ۱۴۴،  
 ۱۴۹، ۱۵۶، ۱۶۷، ۱۶۹، ۱۷۶،  
 ۲۰۰، ۲۱۳، ۲۳۰، ۲۳۳، ۲۴۹،  
 ۲۵۷، ۲۶۶، ۲۷۳، ۲۸۳، ۳۱۹،  
 ۳۲۲-۳۲۳، ۳۳۲، ۴۶۱-۴۶۲،  
 ۵۲۶، ۵۶۹-۵۷۰، ۵۷۲، ۵۷۴

۱۸۷، ۱۹۵، ۲۳۳، ۲۳۹، ۶۳۸  
 شهرخیه (قلعه) ..... ۱۴۰  
 شهر سبز ..... ۴، ۱۵، ۲۸، ۱۲۸، ۱۳۳،  
 ۱۳۸-۱۴۰، ۲۳۷، ۲۶۵، ۳۱۹،  
 ۳۳۷، ۴۲۲، ۵۰۴، ۵۶۵-۵۶۶،  
 ۵۷۱، ۵۷۳-۵۷۴، ۵۸۲، ۵۸۴،  
 ۶۰۷، ۶۲۰، ۶۳۰، ۶۵۱، ۶۵۹،  
 ۶۶۲، ۶۷۶  
 شه رود ..... ۵۴۶  
 شهیدان ..... ۸۷، ۱۰۴، ۱۱۰، ۲۹۹  
 شیراز ..... ۵۱۲

### ص

صابر تپه ..... ۱۷۴

### ض

ضامین ..... ۲۹، ۲۵۷، ۲۶۷، ۶۰۶  
 ضامین (قلعه) ..... ۲۵۸، ۲۶۱، ۶۱۳  
 ضامین بزرگ ..... ۲۶۶  
 ضامین چه (قلعه) ..... ۲۶۶

### ط

طاق کسری ..... ۵۰۴  
 طوس ..... ۵۵۱  
 طهران .. ۵۰۸، ۵۱۶، ۵۳۳، ۵۳۹، ۵۴۶

سنه اردلان ..... ۵۰۸  
 سواد ..... ۴۴۰  
 سودان ..... ۴۹۱-۴۹۲  
 سوئیس ..... ۴۳۲  
 سیحون (دریا) .. ۲، ۱۹، ۶۴، ۷۵، ۷۹،  
 ۸۷-۸۸، ۱۰۴، ۱۱۰، ۱۲۰، ۱۳۳،  
 ۱۵۶، ۲۰۱، ۲۱۵، ۲۲۰، ۲۳۲،  
 ۲۴۹، ۲۵۵، ۲۸۴، ۲۹۱، ۶۲۷،  
 ۶۳۴، ۶۴۴، ۶۴۷-۶۴۸، ۶۵۲،  
 ۶۵۴، ۶۶۷-۶۶۹، ۶۷۴-۶۷۵،  
 ۶۷۹-۶۷۸

سیر (دریا) ..... نگريد؛ سیحون  
 سیر بویی ..... ۶۴۴، ۶۴۸  
 سیرام ..... ۱۱۱  
 سیناب ..... ۴۰۹-۴۱۰، ۴۱۲

### ش

شام ... ۱۶۴، ۴۱۲، ۴۱۷-۴۲۱، ۴۷۱،  
 ۴۹۲، ۴۹۸-۵۰۱، ۵۰۷، ۵۴۳،  
 ۵۹۳، ۶۱۶

شاه عبد العزيز (زیارتگاه) ..... ۵۴۶  
 شمایل ..... ۴۲۲  
 شمی ... ۳۰۹، ۳۳۵، ۳۳۷، ۳۴۸، ۳۵۲  
 شوم قورغان ..... ۲، ۳۵  
 شهر امیر ..... ۲۵۵-۲۵۶  
 شهر خان ..... ۱۴۶، ۱۶۱، ۱۷۷، ۱۸۳

## ر

رباط ..... ۱۵۶  
 رشت ..... ۵۳۳-۵۳۴  
 رشیدان ..... ۱۵۶  
 روم ... ۱۶۴، ۱۷۴، ۲۰۸، ۲۱۰، ۲۵۰،  
 ۳۸۴، ۳۸۸، ۳۹۱، ۴۰۹-  
 ۴۱۰، ۴۱۳، ۴۱۵-۴۱۶، ۴۲۷،  
 ۴۶۰، ۴۶۲، ۵۰۸، ۵۴۰، ۵۴۲، ۶۷۳

## ز

زمرد شاه (قلعه) ..... ۵۱-۵۲  
 زنگبار ..... ۲۵۵، ۴۵۴

## س

سبزوار ..... ۵۴۷، ۵۴۹  
 سرای ..... ۱۶۹، ۳۳۲  
 سریل ..... ۵۸۴  
 سرخس ..... ۵۵۸  
 سری تاو ..... ۳۵۹  
 سعید ..... ۴۵۴  
 سفید بلان ..... ۲۵۰  
 سنگ زار ..... ۷۳  
 سنگ زار (قلعه) ..... ۷۳  
 سنگ معلق ..... ۴۹۳  
 سنندج ..... ۵۰۷-۵۰۸، ۵۱۵-۵۱۶

۶۲۰-۶۲۱، ۶۲۷، ۶۳۱، ۶۳۴-

۶۳۵، ۶۴۲-۶۴۴، ۶۴۶-۶۵۵،

۶۵۷-۶۵۸، ۶۶۱-۶۷۰، ۶۷۲-

۶۷۷، ۶۸۰-۶۸۵

خیر آباد ..... ۲۳۲، ۲۴۰

خیوه ..... ۲۸۸

## د

دجله (دریا) ..... ۵۰۵-۵۰۷، ۵۵۴  
 درواز ..... ۵۸۴، ۵۸۸-۵۸۹  
 دریای شور ... ۴۰۸، ۴۱۰، ۴۱۲، ۴۴۲،  
 ۴۴۶-۴۴۷

دشت اش ..... ۲۲، ۶۴۸

دشت خزیان ..... ۶۵۰

دشت شیراز ..... ۱۳۰، ۱۴۳

دشت قیچاق ... ۳۳، ۱۰۲، ۱۳۳، ۱۳۶،

۶۱۵، ۶۲۰، ۶۵۴، ۶۶۱، ۶۶۷،

۶۶۹، ۶۷۷، ۶۷۹

دمشق ..... ۴۱۷، ۵۴۳

دنبای ..... ۲۵۹

دنگیز شاف ..... ۴۳۲

دوان .. ۷۵، ۷۹، ۸۷-۸۸، ۱۱۰، ۱۱۲،

۱۳۳، ۲۰۱، ۶۵۲، ۶۶۹

دوشبک اسکه (دوشنیکه اسکه) ... ۳۸۶

دهبید ..... ۱۶، ۳۲

دهکت (قلعه) ..... ۲۹۰

خراسان..... ۹۰  
 خسرو آباد ... ۵۱۰-۵۱۱، ۵۱۶، ۵۱۸-  
 ۵۱۹، ۵۲۲-۵۲۳، ۵۲۶  
 خطای . ۶، ۷، ۱۸۳، ۱۹۵-۱۹۷، ۲۱۰،  
 ۳۱۳-۳۱۷، ۳۲۴-۳۳۱، ۲۶۱، ۶۷۶  
 خواجه آباد..... ۵۷  
 خوارزم .. ۶۷، ۱۷۴، ۲۸۷، ۳۰۴، ۵۵۲،  
 ۶۸۱، ۵۸۲

خواص ..... ۱۳۰  
 خواص (قلعه)..... ۲۷، ۶۶۶-۶۶۷  
 خوقند ۱، ۴-۵، ۷-۱۳، ۱۷-۲۳، ۲۵-  
 ۲۷، ۳۱-۳۵، ۳۷، ۵۱-۵۴، ۵۶-  
 ۵۷، ۵۹، ۶۱-۶۷، ۷۱، ۷۳-۷۴،  
 ۷۷، ۸۶، ۸۸، ۹۰، ۹۳، ۹۶، ۱۰۹-  
 ۱۱۱، ۱۱۳، ۱۲۰، ۱۲۵-۱۲۶،  
 ۱۲۸، ۱۳۳، ۱۳۶، ۱۴۰، ۱۴۶-  
 ۱۴۷، ۱۴۹، ۱۵۵-۱۵۷، ۱۶۳،  
 ۱۷۶-۱۷۷، ۱۸۰، ۱۹۵-۱۹۶،  
 ۱۹۸، ۲۰۰-۲۰۳، ۲۱۰، ۲۱۵-  
 ۲۱۶، ۲۲۰، ۲۴۰-۲۴۲، ۲۴۷،  
 ۲۵۷، ۲۶۸، ۲۸۸، ۲۹۰-۲۹۱،  
 ۲۹۹-۳۰۰، ۳۱۱-۳۱۲، ۳۲۳-  
 ۳۲۴، ۳۳۰، ۳۳۲-۳۳۳، ۴۲۷،  
 ۴۶۲، ۵۵۴، ۵۶۱، ۵۷۱-۵۷۴،  
 ۵۸۳-۵۸۵، ۵۸۸-۵۸۹، ۵۹۳،  
 ۶۰۲، ۶۰۵-۶۰۷، ۶۱۱-۶۱۵،

حجاز ..... ۴۳۶  
 حجر متکلم..... ۴۳۷  
 حذر (بحر)..... ۳۳۵  
 حزر (دریا) ..... ۱۳۶  
 حصار (فیروزه) ... ۶۸-۶۹، ۵۸۳-۵۸۴  
 حلب ..... ۴۲۰  
 حنیفه (قلعه)..... ۴۰۸، ۳۹۴

## خ

خان..... ۴۲۶  
 خان بالیغ (چین) ..... ۳۳۰  
 خان قوروغی..... ۱۶۹  
 ختن ... ۱۹۳، ۱۹۵، ۲۷۹، ۳۲۱، ۳۲۵،  
 ۳۲۷، ۵۴۷  
 خجند ۱، ۳-۵، ۹، ۱۸، ۲۰-۲۵، ۳۱-  
 ۳۲، ۳۷، ۵۴، ۵۶، ۶۰-۶۱، ۶۵-  
 ۶۸، ۷۱، ۷۳-۷۴، ۸۲، ۸۶، ۱۱۳،  
 ۱۳۰، ۱۳۸-۱۳۹، ۱۴۲، ۱۴۶،  
 ۱۴۸-۱۴۹، ۱۵۷، ۱۶۹، ۱۷۳-  
 ۱۷۴، ۲۲۸، ۲۳۱، ۲۳۳، ۲۴۰-  
 ۲۴۱، ۲۵۷-۲۵۹، ۲۶۱، ۲۶۶،  
 ۲۶۸، ۲۹۰، ۳۳۲، ۴۲۷، ۵۶۹،  
 ۶۰۵، ۶۱۲-۶۱۵، ۶۱۹-۶۲۰،  
 ۶۲۷-۶۲۸، ۶۵۱، ۶۵۶، ۶۶۲،  
 ۶۶۵-۶۶۷، ۶۷۴-۶۷۶، ۶۷۹-  
 ۶۸۰، ۶۸۵



## ث

ثمرقند .... ۴-۵، ۹، ۲۸، ۱۳۱، ۱۳۸-

۱۴۰، ۱۷۴، ۲۲۹-۲۳۱، ۲۳۶،

۲۳۸، ۲۴۳، ۲۶۵، ۲۶۹، ۴۱۹،

۵۵۵-۵۵۶، ۶۰۷، ۶۵۱، ۶۶۳، ۶۷۵

## ج

جامع یحیی نبی ..... ۴۱۹، ۴۹۹

جده ..... ۴۳۵، ۴۴۲

جسر یعقوب ..... ۴۲۰، ۴۹۸

جلال آباد ..... ۴۲۲

جنت المعلا ..... ۴۳۷

جویار قوروغی ..... ۲۳۱

جهادیه ..... ۴۲۶، ۴۳۰

جیحون (دریا) ..... ۵۵۹، ۶۳۴، ۶۶۷

جیزخ ..... ۲۶-۲۷، ۲۹، ۷۱-۷۲، ۸۴،

۱۳۰، ۱۵۶-۱۵۷، ۲۲۹، ۲۳۱،

۲۳۲-۲۳۳، ۲۳۵، ۲۳۸-۲۳۹،

۵۷۱، ۶۰۳-۶۰۴، ۶۱۴، ۶۶۳، ۶۶۷

جیزخ (قلعه) ..... ۷۲، ۲۳۲

جیکده لیک ..... ۱۵۶

## چ

چادک ..... ۵۰

چاه یوسف ..... ۴۹۸

چرکس ..... ۳۸۳، ۳۸۶، ۴۰۵

## ح

حایت ..... ۵۸۴

حبشه ..... ۴۵۴-۴۵۵

حبیق ..... ۳۷۷

چست .... ۱۹-۲۰، ۵۶-۵۹، ۸۱-۸۲،

۲۳۳، ۶۴۴، ۶۴۷، ۶۶۸

چشمه خضر ..... ۱۸۰

چو ..... ۳۰۶

چهار باغ ..... ۱۸۰، ۲۸۵

چهار باغ (اورون بر) ..... ۳۶۴

چهار باغ (خسرو خان) ..... ۵۱۱، ۵۱۳

چهار باغ (عمر خان، شاه چمن) ..... ۶۴۹

چهار باغ (محمد حکیم خان، نو بهار) ...

۲۹۱، ۲۹۵، ۲۹۷

چهار باغ (محمد علی پادشاه) ۴۵۸، ۴۶۶

چهار باغ (معصوم خان) ..... ۹۶-۹۷

چهار باغ (ملیکه مصر) ..... ۴۷۱-۴۷۲،

۴۷۵-۴۷۸، ۴۹۰

چهار باغ دیوانه ..... ۱۹۸، ۲۳۲

چهار دره (قلعه) ..... ۶۷۷

چهار کوه (قلعه) ..... ۱۲-۱۳

چهل اوستون ..... ۱۸۴-۱۸۵

چیلچیق (دریا) .. ۵۵، ۷۶، ۱۰۴، ۱۰۹،

۲۰۷

چین ..... ۳۲۸-۳۲۹، ۳۳۵، ۶

تبریه ..... ۴۲۰-۴۲۱  
 تجن (دریا) ..... ۵۵۹  
 تخت سلیمان ..... ۹، ۱۸۴  
 ترکستان .. ۸۵، ۹۱، ۳۵۳، ۵۲۷، ۵۵۶-  
 ۵۵۸  
 ترکستان (شهر) ..... ۱۳۳، ۱۳۵، ۲۸۷،  
 ۲۹۹، ۳۰۲  
 تسنیم ..... ۱۸۰  
 تکیه ..... ۴۳۱  
 تلاس ..... ۳۰۶، ۶۶۴  
 تنگی ..... ۲۵۹، ۲۶۸، ۶۲۷  
 توده (ده قان) ..... ۱  
 توران .... ۴۸، ۹۰، ۴۶۲، ۴۹۱، ۵۲۳،  
 ۵۳۶، ۵۲۶  
 تورپاق قلعه سی ..... ۴۱۶  
 توره قورغان .... ۲۰، ۲۲-۲۳، ۳۱-۳۳،  
 ۳۷، ۵۶-۵۷، ۲۱۹، ۲۳۳، ۲۴۸-  
 ۲۵۰، ۲۸۴، ۲۸۸، ۶۴۴، ۶۶۵،  
 ۶۶۷، ۶۷۵، ۶۸۳  
 توره قورغان (قلعه) ..... ۶۴۸  
 توریسکه ..... ۳۵۴  
 توقی تپه ..... ۶۴۹، ۶۷۲  
 توی تپه ..... ۱۰۴  
 توی تپه (قلعه) ..... ۲۰۷، ۶۵۳  
 تیفلیس ..... ۵۴۵

بیش کوفروک ..... ۶۵۶

## پ

پتر ..... ۶۱۸  
 پتربور ..... ۳۵۷، ۳۷۵  
 پسته لیک ..... ۲۰۲  
 پشاغر ..... ۱۳۱، ۶۰۳  
 پشاغر (قلعه) . ۱۳۱، ۱۴۷، ۶۰۳، ۶۰۷  
 پنج شنبه ..... ۲۵۷، ۲۶۹  
 پنجه قم ..... ۱۶۳  
 پیغمبر اتا ..... ۱۲۶

## ت

تاش قورغان ..... ۶۱۴  
 تاش قورغان (قلعه) ..... ۳۱۲  
 تاشکند ... ۳۱، ۳۳، ۵۴-۵۶، ۵۹، ۶۳-  
 ۶۴، ۷۴-۷۹، ۸۶-۸۸، ۱۰۲، ۱۰۴،  
 ۱۰۷، ۱۰۹-۱۱۱، ۱۱۳، ۱۲۶،  
 ۱۲۸، ۱۳۳-۱۳۴، ۱۳۶، ۲۰۰،  
 ۲۰۷، ۲۱۵، ۲۳۳، ۲۵۷، ۲۶۳،  
 ۲۶۹، ۲۸۷، ۲۹۹-۳۰۲، ۳۰۵-  
 ۳۰۶، ۳۰۹، ۵۸۶، ۶۱۵، ۶۲۰-  
 ۶۲۱، ۶۲۳، ۶۴۷، ۶۵۰-۶۵۴،  
 ۶۷۴-۶۷۵، ۶۷۷-۶۷۹  
 تاشکند (قلعه) ..... ۶۵۴، ۶۷۹  
 تبریز ..... ۵۴۵

بخارا..... ۶، ۹-۱۰، ۲۴، ۳۴، ۳۷، ۵۴، ۶۸، ۷۰-۷۳، ۸۷، ۱۲۲، ۱۲۸، ۱۳۴، ۲۳۰، ۲۳۶-۲۳۸، ۳۳۱، ۳۳۳-۳۳۴، ۵۴۰، ۵۴۴، ۵۵۵-۵۵۶، ۵۵۹-۵۶۲، ۵۶۵-۵۶۷، ۵۷۴، ۵۸۲، ۵۸۴، ۶۰۲-۶۰۳، ۶۰۷، ۶۱۳، ۶۱۶-۶۱۷، ۶۱۹، ۶۲۳، ۶۲۷، ۶۳۴، ۶۴۳، ۶۵۰، ۶۵۳-۶۵۴، ۶۶۱-۶۶۲، ۶۶۶-۶۶۷، ۶۷۰، ۶۷۵، ۶۸۱، بدخشان..... ۶، ۷۷، ۵۴۴، بسطام..... ۵۴۶، بغداد.. ۱۵۹، ۴۲۸، ۴۹۸، ۵۰۱-۵۰۲، ۵۰۵، ۵۰۷، بلخ..... ۵۴۹، ۵۵۹، بنی تمیم (موضع)..... ۵۰۲، بوتہ قرہ..... ۶۳۵، بوکہ (قلعہ)..... ۶۵۲-۶۵۳، بولغار..... ۳۵۳، بہار قلعہ..... ۲۵۱، بیت الشریف..... ۲۵۸، بیت اللہ..... ۲۸۵-۲۸۶، ۳۴۳، ۳۷۵، ۳۸۳، ۴۰۹، ۴۳۰-۴۳۱، ۴۳۶-۴۳۷، ۴۴۱-۴۴۲، ۵۲۶، ۵۸۲، ۶۸۱، بیت المقدس..... ۴۹۳، بیش آریق..... ۳۴، ۳۳۲،

اورگوت..... ۲۹، ۲۶۹، ۶۴۷، ۶۷۶، اورگوت (قلعہ)..... ۱۳۸، اورمیتن..... ۱۳۸، ۶۰۷، اورمیتن (قلعہ)..... ۲۴۳، اوروسیہ..... ۳۰۴، ۳۰۹، ۳۳۶، ۳۴۹، ۳۷۲، ۳۷۶، ۳۸۱، ۳۸۶، اورون بر..... ۳۵۴، ۴۰۷، اوزگند..... ۶۴، اوش..... ۱۸۴، ۶۸۰، ۶۸۲، اومیسکہ..... ۳۳۷، ۳۴۵، اون ایکی بویناق..... ۲۰۱، آہنگران..... ۵۵، ۷۵، ۸۸، ۱۰۴، ۱۰۹، ۱۲۶، ۱۳۳، ۶۵۳، ایدل (دریا)..... ۳۷۹، ایران.. ۳۸۲، ۵۰۷، ۵۰۹، ۵۱۲، ۵۱۴، ۵۱۶، ۵۲۲، ۵۲۵، ۵۳۲-۵۳۴، ۵۳۹، ۵۴۱، ۵۴۴-۵۴۵، ۵۵۹، ایران زمین..... ۵۰۸، ایربیت..... ۳۴۴، ۳۵۲-۳۵۳، ب

بادام چشمہ..... ۱۱۴، ۱۲۰، ۲۰۱، بادکو..... ۳۶۳، بازار بمزاد..... ۵۰۰، بازار نبات..... ۴۶۱، بچقیر..... ۲۴۹،

## فهرست اماکن

۱

آب جامک ..... ۶۱۳  
آب زمزم ..... ۴۳۷  
احد (کوه) ..... ۴۴۴  
اخیسی .. ۲۱۶، ۲۲۰، ۲۵۱، ۲۵۳، ۶۴۴  
ارزنک تپه ..... ۶۳۳  
ارم (باغ، روضه) ۹۶-۹۷، ۱۸۰، ۴۱۷، ۴۳۰

اسپراین (قلعه) ..... ۱۲  
اسپره ..... ۱۲، ۵۰-۵۱، ۶۸۰  
استروشن ..... ۳۰  
استروشن (قلعه) ..... ۶۹  
استنبول ..... ۴۰۹-۴۱۰  
اسفراین (نگرید: اسپره) ..... ۵۰  
اسفره ..... نگرید: اسپره  
اسکندریه ..... ۴۲۸، ۴۵۸، ۴۶۰  
اشت ..... ۶۲-۶۳، ۱۲۰  
اشترخان ..... ۳۷۶-۳۷۷، ۳۸۱، ۳۵۸  
آصف ابن برخیا (قبر) ..... ۱۸۴  
اصفهان ..... ۵۴۶  
آق تپه ..... ۲۳۲  
آق جر ..... ۱۲۰  
آق سرای ..... ۵۰۴  
آق سو ۱۱-۱۲، ۶۸، ۱۲۹، ۱۴۹، ۱۷۳، ۳۲۵

اگوزتاق ..... ۱۳۶  
آلای ..... ۳۱۲، ۳۲۸  
الرحمان (قلعه) ..... ۴۹۴  
آمویه (دریا) ..... نگرید: جیحون  
اندجان .. ۳۴-۳۵، ۶۰، ۸۰-۸۱، ۱۲۱، ۱۵۷، ۱۵۹، ۱۶۲، ۱۷۰، ۱۷۶-  
۱۷۷، ۱۸۳-۱۸۴، ۱۸۶-۱۸۷، ۱۹۷، ۲۳۳، ۲۷۰، ۳۱۰، ۳۱۲، ۶۳۵، ۶۶۲-۶۶۳، ۶۷۰، ۶۷۷، ۶۸۲-۶۸۳

اندخو ..... ۵۵۹  
انه دول ..... ۴۱۲  
اوراتیپه ۷، ۱۰-۱۱، ۱۷، ۲۳، ۲۶، ۲۸-  
۲۹، ۳۱، ۳۳، ۳۶، ۵۶، ۶۷-۶۸، ۷۱-۷۴، ۸۲، ۸۴-۸۵، ۱۱۵، ۱۲۸، ۱۳۰-۱۳۱، ۱۳۳، ۱۳۸-۱۴۰، ۱۴۲، ۱۴۵-۱۴۹، ۱۵۵-۱۵۶، ۱۶۹-۱۷۱، ۱۷۳، ۱۸۸، ۲۲۱، ۲۲۸-۲۳۰، ۲۳۲، ۲۴۳، ۲۵۷، ۲۶۸، ۳۱۹، ۳۳۲، ۵۶۵-۵۶۹، ۵۷۱، ۵۷۳، ۵۸۷، ۶۰۵، ۶۱۱-  
۶۱۳، ۶۱۵، ۶۱۹، ۶۴۷، ۶۵۱، ۶۶۳، ۶۶۵-۶۶۶، ۶۷۴، ۶۷۷، ۶۸۰، ۸۲  
اورگنج ۱۷۴، ۲۳۶، ۲۸۷، ۵۵۲، ۶۶۳، ۶۶۶، ۶۸۱

- یوسف (غلام بچه) ..... ۵۴۶-۵۴۵
- یوسف پروانچی ..... ۲۱۳، ۱۷۱، ۱۵۲
- ۴۱۷، ۳۸۲، ۳۰۹، ۲۳۷
- یوسف علی خواجه ..... ۶۵، ۶۲، ۱۶
- یوسف صلاح الدین ..... ۴۵۸
- یوسف مینگ باشی ..... ۶۷۰
- یولداش بی ..... ۲۹
- یولداش (ملا) ..... ۶۲۸
- یونس ..... ۳۱۳، ۲۵۲
- یونس خواجه... ۳۳، ۵۴-۵۵، ۵۹، ۶۱-
- ۸۶، ۷۶، ۷۴، ۶۵
- یونس علی خواجه ..... ۶۵، ۶۲

مینگ آیم..... ۲۰، ۵۰

ن

نادر صاحبقران..... ۵۴۳

نار آیم..... ۳۳

ناربوته بی. ۸، ۱۴-۱۵، ۱۷-۲۰، ۲۲-

۲۳، ۲۵، ۳۱-۳۲، ۳۴-۳۷، ۴۹-

۵۱، ۵۳، ۵۶، ۲۹۸

نارقوزی دادخواه..... ۶۲۱

ناهید. ۱۲، ۸۰-۸۱، ۱۶۲، ۲۵۱، ۲۵۸

نخشب..... ۵۸۴

نصرت (مولانا)..... ۴۲-۴۳

نظامی..... ۱۱۸

نظر بیک..... ۱۲۶

نوح..... ۳۸۱، ۴۱۱، ۴۴۸

نیاز علی بی (دیوان بیگی، اتالیق) .. ۲۹،

۱۳۳، ۱۳۸

ه

هاتفی..... ۶۳۴

هاشم خواجه..... ۶۱، ۶۵۰

ی

یادگار بی..... ۵۰

یزید..... ۶، ۹

یوسف. ۱۱۸، ۱۹۷، ۴۲۱، ۴۵۸، ۴۶۱،

۴۷۸، ۴۹۳-۴۹۴

موسی..... ۲۷۶، ۲۸۰، ۴۳۳، ۴۹۰

موسی خان..... ۳۲۸

موسی خان خواجه..... ۱۶، ۳۲

موسی علی رضا..... ۵۴۶، ۵۵۳، ۵۵۵

موسی کاظم (حضرت)..... ۵۰۶

مولوی آصفی..... ۴۴۰

مومن بیک..... ۶۷۵

مومن خان شیخ الاسلام..... ۳۸۲

مهردار افندی..... ۴۶۱

مهری..... ۴۹۹

میر حسین خان..... ۱۳۹، ۲۴۳

میر حسین بیک... نگرید؛ میر حسین خان

میرزا ابوتراب..... ۵۰۹، ۵۲۱-۵۲۲،

۵۳۱-۵۳۲

میرزا آخوند..... ۱۳۷

میرزا ایوب..... ۶۱۵

میرزا رحیم (پروانچی)..... ۱۳۷، ۱۴۸-

۱۴۹، ۱۵۱-۱۵۲، ۱۷۰-۱۷۱،

۲۴۰، ۲۵۵، ۵۸۷

میرزا محتشم. ۵۰۹، ۵۱۴، ۵۱۶، ۵۲۲-

۵۲۳، ۵۳۱-۵۳۲

میرزا قلندر..... ۱۳۷

میرزا مله (دادخواه).... ۱۳۷، ۱۵۲، ۱۷۰

میر عبید الله..... ۶۵۹

میر محمد امین..... ۶۵۹

مینا..... ۴۳۷، ۴۴۰

۲۳۷، ۲۴۱-۲۴۲، ۲۴۴، ۲۵۹،  
 ۳۱۰، ۳۲۵، ۳۲۸، ۵۷۵  
 محمود خواجه (جلو قوشیگی) ..... ۹۴،  
 ۱۳۷، ۱۵۲، ۱۷۵  
 محمود خواجه (صدور) .... ۶۱۵، ۶۳۷،  
 ۶۴۶  
 محمود دسترخانیچی ..... ۶۱۵، ۶۱۷  
 محی الدین عربی ..... ۵۰۰  
 مخدوم اعظم ..... ۱، ۲۴۹، ۲۲۲، ۴۶۲  
 مراد خان ۱۲۵، ۱۳۰، ۶۷۷، ۶۷۹-۶۸۵  
 مریم (حضرت) ..... ۳۴۲، ۵۰۶  
 مستوره بی بی ..... ۴۵  
 مسلمان قلی ... ۶۶۸-۶۶۹، ۶۷۲-۶۷۷،  
 ۶۸۰، ۶۸۲  
 مسیح ..... ۲۷۹، ۳۰۰  
 مصطفی قلی خان ..... ۶۶۹، ۶۷۴  
 معاویه ..... ۵۰۰  
 معروف کرخی ..... ۵۰۶  
 معصوم خان ..... ۳۳، ۲۲۲، ۶۵۹  
 مقصود خواجه (تویچی باشی) ۱۳۷، ۱۵۱  
 ملا دوشن بی ..... ۱۹۷، ۱۹۹  
 مله دیوان بیگی ..... ۳۵، ۶۰  
 منصور حلاج ..... ۵۰۶  
 منصور خان ..... ۶۳  
 منصور خواجه ..... ۲۷۵  
 منیب ..... ۵۰۰

۲۵۳، ۲۵۵، ۲۵۷-۲۶۵، ۲۶۸،  
 ۲۷۲-۲۷۴، ۲۸۳-۲۹۲، ۲۹۴،  
 ۲۹۶-۲۹۹، ۳۰۲-۳۰۴، ۳۰۹-  
 ۳۱۲، ۳۱۸-۳۲۰، ۳۲۲-۳۲۴،  
 ۳۳۰-۳۳۵، ۳۴۳، ۳۷۵، ۴۴۷،  
 ۴۶۲، ۵۶۵-۵۸۴، ۵۸۵-۵۹۰،  
 ۵۹۲، ۵۹۴-۵۹۵، ۵۹۷-۵۹۸،  
 ۶۰۰-۶۰۷، ۶۱۰، ۶۱۲-۶۲۲،  
 ۶۲۴-۶۲۶، ۶۲۸-۶۳۲، ۶۳۵،  
 ۶۳۷، ۶۳۹، ۶۵۰، ۶۶۱، ۶۶۹،  
 ۶۷۲، ۶۷۴  
 محمد غازی رئیس (ملا) ..... ۶۵  
 محمد قلی بیک (دادخواه، پروانچی) ....  
 ۱۳۷، ۱۴۵، ۱۵۱، ۵۸۴، ۵۸۷  
 محمد نظر بیک ..... ۶۴۷-۶۴۸، ۶۶۵،  
 ۶۶۷-۶۷۷، ۶۸۲  
 محمد یوسف تونقاتر. ۲۱۳-۲۱۴، ۲۴۱،  
 ۲۵۰، ۲۹۹، ۳۰۱-۳۰۴  
 محمد یوسف خواجه .. ۲۴۳، ۵۷۲-۵۷۳  
 محمود ..... ۲۳۴  
 محمود بیک ..... ۱۳۳  
 محمود خان خواجه (احراری) .. ۷۳-۷۴،  
 ۸۲، ۸۴-۸۵، ۱۱۵، ۱۲۸-۱۲۹،  
 ۱۳۰-۱۳۱، ۱۳۳، ۱۳۸-۱۴۰،  
 ۱۴۲-۱۴۴، ۱۵۲، ۱۷۰، ۲۱۱،  
 ۲۲۰، ۲۲۲-۲۲۴، ۲۲۸، ۲۳۱

۲۸۸  
 محمد رحیم دیوان بیگی... ۱۳۱، ۱۴۷-  
 ۱۴۹، ۱۵۲-۱۵۶، ۱۷۱، ۱۷۳،  
 ۲۲۸-۲۲۹، ۲۳۲، ۲۳۸، ۲۵۸-  
 ۲۶۰، ۲۹۰، ۳۱۹، ۳۳۲، ۵۶۵،  
 ۵۶۷، ۵۷۳-۵۷۴، ۶۶۶  
 محمد شریف ..... ۶۴۸، ۶۵۴-۶۵۵  
 محمد شریف اتالیق... ۶۰۴-۶۰۵، ۶۵۲  
 محمد شریف بی ..... ۱۱۴، ۱۵۱-۱۵۲  
 محمد شریف پروانچی ..... ۶۱۲، ۶۱۵،  
 ۶۴۷-۶۴۸، ۶۵۳  
 محمد شریف دادخواه ..... ۱۷۰، ۲۳۳  
 محمد شریف قوشیگی .... ۵۷۳، ۵۸۳  
 ۵۸۸  
 محمد شریف میرگن ..... ۱۹۷  
 محمد صابر دستورخانچی ... ۱۳۷، ۱۵۱  
 محمد صادق بیک ..... ۶۶۱  
 محمد صادق دیوان بیگی ..... ۳۱۹  
 محمد صالح پادشاه ..... ۵۰۱، ۵۰۷  
 محمد عالم محرم باشی ..... ۲۸۷  
 محمد علی پادشاه... ۴۲۷-۴۲۹، ۴۵۵،  
 ۴۵۸-۴۵۹، ۴۶۱، ۴۶۵-۴۶۶،  
 ۴۶۹، ۴۹۱  
 محمد علی خان. ۸۱، ۱۶۱، ۱۶۳-۱۶۴،  
 ۱۶۹، ۱۷۱، ۲۰۲، ۲۰۴، ۲۰۷،  
 ۲۱۵، ۲۱۸، ۲۲۵، ۲۳۸، ۲۴۰،

۴۵۷، ۴۵۹، ۴۶۴، ۴۶۷-۴۶۸،  
 ۴۷۱-۴۷۴، ۴۸۱-۴۸۲، ۴۸۹، ۴۹۱  
 ماه لار آیم ..... ۸۰، ۱۶۸، ۲۰۴، ۲۶۱،  
 ۶۲۰، ۶۴۱  
 مجنون ..... ۵۰۲  
 محتشم کاشی (مولانا) ..... ۲۱۲  
 محزون ..... ۴۵-۴۷  
 محمد ..... ۴۱۸  
 محمد (حضرت) ..... ۲۹۷، ۴۴۴  
 محمد امین بی یوز ..... ۱۰  
 محمد امین (داملا) ..... ۶۵۹  
 محمد امین خان (پسر ناربوتہ بی) . ۳۷-  
 ۴۰، ۴۲-۴۵، ۴۹  
 محمد امین خان (پسر محمد علی خان)..  
 ۶۱۵، ۶۲۶، ۶۳۲، ۶۴۰  
 محمد امین خواجه خوقندی ..... ۲۳  
 محمد حسن ..... ۵۵۴  
 محمد حکیم خان .... ۲۰۳، ۳۰۲، ۳۴۳،  
 ۳۵۰، ۳۶۹، ۳۷۰، ۳۷۵-۳۷۶،  
 ۳۹۱، ۳۹۴-۳۹۵، ۳۹۹-۴۰۱،  
 ۴۶۰، ۴۶۳، ۴۷۴-۴۷۵، ۴۸۷،  
 ۵۲۶، ۵۶۳-۵۶۴، ۶۵۹  
 محمد خالق بی ..... ۱  
 محمد خواجه ..... ۲۴۴  
 محمد رحیم اتالیق یوز ..... ۱  
 محمد رحیم خان ..... ۱۷۴، ۲۳۶، ۲۵۰،



کیچکنه خان ..... ۹۴-۹۶  
 کیچکنه فرنگ ..... ۱۶۰  
 کیسترچی ..... ۵۴۴-۵۴۶  
 کیقباد ..... ۱۹۳  
 کیکاوس ..... ۱۵۷  
 کینگس آیم ..... ۹، ۱۵-۱۶، ۳۳

## گ

گدای بای بی (دادخواه، پروانچی) ۲۶۸،  
 ۳۳۳، ۶۰۳، ۶۰۷، ۶۱۲، ۶۲۳،  
 ۶۲۷-۶۲۸، ۶۴۸، ۶۵۲-۶۵۴

## ل

لشکر دیوان بیگی (قوش بیگی) .. ۱۳۶،  
 ۱۳۷، ۱۴۵، ۱۵۱-۱۵۲، ۱۷۰،  
 ۲۰۷-۲۰۸، ۲۱۴-۲۱۵، ۲۳۳،  
 ۲۹۹-۳۰۰، ۵۷۳، ۶۰۴-۶۰۵،  
 ۶۱۲، ۶۲۳، ۶۳۲، ۶۷۷-۶۷۹  
 لطف الله چستی (مولانا) ..... ۱  
 لقمان سرخسی ..... ۵۵۸  
 لیلی ..... ۵۰۲، ۲۸۲

## م

مامور بی (دادخواه) ..... ۲۳۹، ۲۶۹  
 مانی ..... ۵۱۰، ۵۴۳  
 ماهر افندی .. ۴۲۰، ۴۲۲، ۴۳۱، ۴۵۶-

قابل بی اناق ..... ۷۰  
 قارون ..... ۶۷۶  
 قاری امین جان ..... ۶۵۹  
 قاری اندجانی ..... ۶۸۵  
 قاسم بی (اتالیق، دیوان بیگی) ... ۱۳۷،  
 ۱۴۵-۱۴۶، ۱۴۸، ۱۵۲، ۱۷۰،  
 ۲۳۷، ۲۵۹، ۶۸۰، ۶۸۵

قدم اناق ..... ۷۱  
 قرا محرم ..... ۵۹۸  
 قربان بیک دادخواه ..... ۲۳۳  
 قمبر ..... ۲  
 قمبر بی ..... ۱۵۲

## ک

کاشف افندی ۴۲۷-۴۲۸، ۴۵۶، ۴۵۸،  
 ۴۹۱  
 کته بی پروانچی ..... ۱۳۸، ۲۶۹  
 کته بی ..... ۵۸۹  
 کته بیک (پسر حاجی بی) ..... ۶۴۳  
 کته خان ..... نگرید؛ کته بی  
 کته خان (پسر شاهرخ میرزا) ۱۲۷، ۶۷۷،  
 ۶۸۰

کریم قلی دادخواهی ... ۵۸۷، ۶۱۵، ۶۷۰،  
 ۶۷۵، ۶۸۰، ۶۸۵

کون خواجه ..... ۶  
 کی ..... ۱۶۷

عظیم بای دادخواه..... ۲۹۸، ۳۰۱، ۳۳۱  
عظیم جان بای..... ۵۸۶، ۵۹۱  
علی اکبر..... ۵۳۳  
علی شیر نوایی..... ۱۸۴  
عمر خیام..... ۲۷۰  
عمر علی خواجه..... ۱۳۷، ۳۲۵  
عمر فاروق..... ۲۹۷  
عیسی (علیه السلام)..... ۲۸۰، ۳۴۲  
عیسی بیک... ۶۵۱، ۶۶۶-۶۶۷، ۶۷۵، ۶۷۷

عیسی دادخواه ۱۶۲، ۲۳۳، ۳۱۲-۳۱۳، ۶۴۷-۶۴۸

## ف

فاضل بی .. ۷، ۱۰-۱۲، ۱۷، ۲۳، ۲۷-۵۰، ۲۹  
فاضل بیک..... ۲۹۸، ۳۰۲، ۳۰۴  
فتح علی شاه .. ۵۰۸، ۵۱۴، ۵۴۰-۵۴۱، ۵۴۴-۵۴۵

فرعون..... ۴۳۳، ۴۳۵، ۴۹۰  
فرهاد اتالیق..... ۹  
فضلی (مولانا)..... ۳۱، ۴۶  
فضیل عیاض..... ۵۰۶  
فلاطون..... ۲۷۱، ۳۷۲

## ق

۶۷۹، ۶۷۲، ۶۷۴، ۶۷۷-۶۷۹  
عبد رحمان دیوان بیگی .... ۶۵۱، ۶۵۶، ۶۷۰-۶۷۱، ۶۷۳  
عبد الرحمان میستن..... ۶۵۳-۶۵۴  
عبد الرحیم بی..... ۶۴۳  
عبد الرحیم قلماق..... ۶۰۲  
عبد الرسول دادخواه..... ۷۲، ۲۳۵  
عبد الشهید خواجه..... ۹  
عبد العزیز خان .... نگرید؛ شاه عبد العزیز خان

عبد العزیز خان بخاری..... ۴۴۱  
عبد الغفار بیک..... ۶۶۶، ۶۷۷

عبد الکریم بی..... ۱، ۴، ۶-۹، ۱۲  
عبد الکریم چاپوقچی..... ۱۴۴  
عبد الکریم دادخواه ... ۱۵۱، ۱۷۰-۱۷۱  
عبد المجید خواجه..... ۹  
عبد الله پادشاه..... ۴۰۸-۴۰۹  
عبد الله خان ، ۲۰۰، ۲۰۸، ۲۱۲، ۲۱۵، ۳۰۹

عبد الولی میرزا..... ۵۲، ۶۸، ۱۳۷  
عبید الله خان..... ۱۲۲  
عصمت الله بی..... ۳۳۱  
عطار..... ۴۸۳  
عظیم بای پروانچی..... ۱۳۷، ۱۵۲-۱۵۳  
عظیم بای پروانچی..... ۶۷۱، ۶۷۳

صادق بی ..... ۷، ۱۰

صدیق توفقاتار ..... ۶۷۳

### ض

ضیاء السلطنة ..... ۵۰۸، ۵۱۵-۵۱۶

### ط

طغای بیک ..... نگرید؛ ابو القاسم بیک

### ظ

ظهور دیوان بیگی ..... ۱۱۱، ۱۲۱

### ع

عایشه ..... ۵۹۲

عباس میرزا ..... ۵۴۵

عبد الرحمان بهادر ... ۱۳، ۱۵، ۱۸-۲۰،

۲۲-۲۳

عبد الرحمان بی (پسر عبد الکریم بی) ۸،

۱۲-۱۴

عبد الرحمن بیک (برادر محمد رحیم

دیوان بیگی) ..... ۳۱۹

عبد الرحمان بیک (پسر خدایار بی) ۶۵۰

عبد الرحمان بیک (پسر عبد الرحیم بی) .

۶۴۳

عبد الرحمان بیک (پسر شیر علی خان) ..

۶۴۷، ۶۶۲، ۶۶۵-۶۶۷، ۶۶۹،

شریف بیک کهیا ..... ۴۹۱

شکور علی توقسابه ..... ۸۵

شمر ذی الجوشن ۶۰، ۱۲۴، ۲۸۴-۲۸۵،

۲۹۲

شوخی خجندی (مولانا) ..... ۸

شهرخ (پسر امیر عالم خان) .... ۸۱، ۸۳،

۱۰۶، ۱۱۳، ۱۲۵

شهرخ اتالیق ..... ۱

شهرخ بی (برادر ناربوته بی) .. ۲۳، ۳۱،

شهرخ بی ..... ۶۴۳

شهرخ میرزا ..... ۶۷۷

شهزاده ملک قاسم ... ۳۸۳-۳۸۴، ۳۹۳،

۴۰۳، ۴۰۵، ۴۰۸

شیخ ابله ..... ۵۹۰

شیخ بدل میرزا ..... ۱۳۶، ۱۵۱

شیخ خواوند ظهور ..... ۶۳

شیخ عبد القادر گیلانی ..... ۵۰۶

شیدا ..... ۱

شیر علی بیک ..... نگرید؛ شیر علی خان

شیر علی خان .... ۵۳-۵۴، ۶۴۳، ۶۴۵-

۶۸۵، ۶۸۳-۶۶۱، ۶۵۸-۶۵۴، ۶۵۱

شیرویه ..... ۲۶۳

شیرین ..... ۱۹۱، ۲۶۲

### ص

صالح ..... ۵۳۸

سید دادخواه ..... ۲۸۵  
 سید سلطان جلال الدین ..... ۲۴۹  
 سید علی بیک پروانچی ۸۸، ۱۱۱، ۱۳۷  
 سید علی دستورخانچی ..... ۶۷۳  
 سید غازی خواجه (فیضی) ۱۴۶، ۱۸۸-  
 ۱۹۰، ۱۹۵، ۲۰۴، ۲۱۱، ۲۶۲، ۲۸۴  
 سید قل بیک (دیوان بیگی) ۱۳۷، ۱۵۲،  
 ۲۸۴، ۳۳۲

سید قوش بیگی ..... ۶۲۱-۶۲۲  
 سید کونین (حضرت) ..... ۴۴۳  
 سیر محمد بهادر ..... ۷

### ش

شادمان بیک ..... ۱۱۴  
 شادی بی ..... ۱، ۴، ۷-۸، ۱۸  
 شادی مینگ باشی .... ۶۶۳-۶۶۴، ۶۶۸  
 شاه ابراهیم خان ..... ۱۷۴-۱۷۵  
 شاه عبد العزیز خان ... ۱۳۱، ۱۷۴، ۲۱۶  
 شاه مراد بی. ۳۴، ۳۶-۳۷، ۱۳۹، ۲۴۳،  
 ۴۱۹، ۵۴۰

شاه منصور خان ..... ۶۳  
 شاه منصور پسکتی ..... ۱۸۴  
 شاهی (پروانچی، دادخواه) ۱۴۴، ۱۵۱-  
 ۱۵۳، ۱۷۰، ۲۱۳، ۲۳۱، ۲۳۳  
 ۲۶۶، ۵۷۱، ۵۷۳، ۵۸۷-۵۸۸، ۶۶۳  
 شبذیز ..... ۱۵۱

سلطان بایزید بسطامی ..... ۵۴۷، ۶۴۴  
 سلطان خان خواجه (ادا، احراری، خواجه  
 کلان). ۷، ۳۷، ۵۶، ۸۳، ۱۲۸-۱۲۹،  
 ۱۳۷، ۱۴۰، ۱۴۳-۱۴۴، ۱۵۲  
 ۱۷۰، ۲۱۲، ۲۲۱-۲۲۲، ۲۲۴  
 ۲۳۷، ۳۱۹-۳۲۲، ۳۲۸، ۳۳۱  
 ۳۳۳، ۵۵۹، ۵۶۱

سلطان خواجه (پسر یونس خواجه) . ۷۶-  
 ۷۸، ۸۶

سلطان سید خواجه صدر ..... ۱۳۷  
 سلطان صادق بورا خان ..... ۳۱۲  
 سلطان محمود افندیم ..... ۴۰۹  
 سلطان محمود خان (پسر عمر خان) ۱۶۹،  
 ۲۰۴، ۳۳۳، ۵۸۴، ۵۸۹، ۶۰۰-  
 ۶۰۲، ۶۰۷، ۶۱۱، ۶۱۵، ۶۱۸-  
 ۶۲۰، ۶۲۶، ۶۳۰-۶۳۲، ۶۳۸-۶۴۰  
 سلطان محمود خان (پادشاه روم) .. ۱۷۴،  
 ۲۵۰

سلیمان ..... ۱۱۸، ۲۴۹، ۲۷۶، ۵۰۲  
 سلیمان اغا ..... ۵۳۲-۵۳۴، ۵۳۹  
 سلیمان بی ..... ۸، ۱۸، ۱۹  
 سلیمان خان ..... ۶۳  
 سلیمان خواجه شیخ الاسلام .. ۶۸۵، ۶۱۸  
 سمندر بی ..... ۲۸۵  
 سیاوش ..... ۱۰۴  
 سید بوقچه بردار ..... ۱۴۴

۱۵۲، ۱۵۴، ۱۷۰، ۲۱۶-۲۲۰، ۶۸۵  
رحمان قل بی (اتالیق)..... ۸۰، ۸۳،  
۱۰۰، ۱۲۱، ۱۲۵، ۱۳۷، ۱۶۸

رحمان قلی خان ..... ۲۸۸  
رحمت الله (ملا) ..... ۷۱  
رحیم خان..... ۱-۶، ۸-۱۰، ۱۴، ۱۶۷-  
۱۶۸، ۶۷۳

رحیم قل دادخواه ..... ۶۷۳  
رستم ..... ۱۶  
رستم (داستان)..... ۷۷، ۹۴، ۱۵۲-۱۵۴  
رستم بی ..... ۵۰، ۵۳-۵۴

## ز

زلیخا..... ۱۹۱، ۴۵۸، ۴۶۱، ۵۴۵  
زنبورک خواجه تاشکندی ..... ۶۳  
زینت شاه ..... ۱۴۷

## س

ساتیب آلدی بیک بن قاسم اتالیق  
(دادخواه) ..... ۶۸۰، ۶۸۵  
سری سقطی ..... ۵۰۶  
سریمساق خان ..... ۱۲۷  
سعد الله خان..... ۵۶۱  
سعدی ..... ۴۷۴  
سکندر..... ۶۸، ۱۷۶  
سلطان ابراهیم ادهم ..... ۴۱۶

خوشحال دادخواه ..... ۵۷۶  
خوشوقت قوش بیگی ۱۰۹، ۱۱۲، ۱۴۷،  
۱۷۰-۱۷۱، ۲۳۳، ۲۶۸-۲۶۹، ۳۰۹

## د

دانیال اتالیق ..... ۲۳۶-۲۳۷، ۲۶۵  
داود..... ۱۲  
داود قلی بی..... ۵۳-۵۴  
داول بی ابن کته بی..... ۵۸۹  
داول پروانچی. ۲۳۳، ۲۶۶، ۲۶۸، ۳۳۳  
داول دادخواه..... ۱۳۷  
دفتردار افندی..... ۴۶۶  
دوست قل بهادر..... ۱۸، ۲۰، ۵۰  
دوران بیک کوهستانی ..... ۶۷۸-۶۷۹  
دولت قوش بیگی... ۲۳۱، ۲۳۶، ۲۴۰-  
۲۴۱  
دین ناصر خان ..... ۵۴۰

## ذ

ذاکر خواجه شیخ الاسلام..... ۲۴۷، ۶۸۵

## ر

رجب بیک دادخواه منقیت..... ۸۴  
رجب (دیوان بیگی، قوش بیگی) .. ۶۱-  
۶۲، ۶۵-۶۶، ۶۸، ۷۳، ۱۲۸، ۱۳۲-  
۱۳۵-۱۳۷، ۱۴۳، ۱۴۸-۱۴۹،

۶۱-۶۲  
 خان خواجه بزرگ ..... ۳۲۵  
 خان خواجه صدر ..... ۱۵۱  
 خان خواجه میر اسد... ۱۳۷، ۱۷۱-۱۷۰  
 خجالت (مولانا) ..... ۲۱۲  
 خدایار بی (حاکم اوراتیپه) ۱۷، ۲۳-۲۶،  
 ۲۷-۳۰، ۳۳-۳۶، ۷۳، ۱۳۱، ۱۴۷،  
 ۲۴۳، ۲۵۹  
 خدایار بی. ۳۲۷، ۶۵۰-۶۵۱، ۶۶۵-  
 ۶۶۶، ۶۷۵  
 خدایار بیک (پسر بیک مراد بی). ۶۵۱،  
 ۶۵۵  
 خدایار خان ..... ۶۸۲-۶۸۳، ۶۸۵  
 خدایار میرزا ..... ۳۱۲  
 خدای بردی (ملا) ..... ۴۱۹، ۵۰۱  
 خدیجه ..... ۲۲۵، ۴۱۷  
 خسرو ..... ۱۵۱، ۱۹۵، ۲۵۸، ۴۸۵  
 خسرو خان..... ۵۰۷-۵۰۸، ۵۱۰-۵۱۱،  
 ۵۲۲، ۵۳۲  
 خضر ..... ۲۱۷، ۲۷۹، ۴۹۹، ۶۶۹  
 خواجه جان خواجه ..... ۱  
 خواجه حسن پادشاه ..... ۴۰۹  
 خواجه خورد ..... ۱۴۵  
 خواجه شهداء ولی ..... ۱۷۱  
 خواجهم قلی مفتی (داملا) ..... ۶۸۵  
 خورشید پادشاه ..... ۴۱۳، ۴۱۵

حق قلی بی (دادخواه، دیوان بیگی) ۱۴۵،  
 ۱۸۲-۱۸۳، ۱۹۶-۱۹۷، ۲۰۰،  
 ۲۱۱، ۲۸۷، ۳۰۹، ۳۱۹، ۳۲۲،  
 ۳۳۲، ۵۶۶-۵۶۸، ۵۷۱-۵۷۲،  
 ۵۷۳، ۵۷۹  
 حکیم بوکری ..... ۴  
 حکیم بیک ..... ۴-۵  
 حکیم توره ۱۰، ۱۶، ۳۲-۳۳، ۳۷، ۶۰،  
 ۶۶، ۴۲۷  
 حکیم خان ..... نگرید؛ محمد حکیم خان  
 حکیم قوش بیگی... ۷۰، ۷۲، ۲۳۵، ۵۵۹  
 حمزه (امیر) ..... ۲۷۰، ۴۴۴  
 حوا ..... ۴۳۶  
 حورلقا خانیم ..... ۴۶۵  
 حیدر خان ..... ۱۲۷، ۶۷۷، ۶۸۰  
 حیدر کرار ..... ۲۹۷  
 خ  
 خاطف (مولانا) ..... ۲۱۲  
 خاقانی (تخلص فتح علی شاه) ..... ۵۱۴  
 خالق قل میرزا.... ۶۷، ۶۸، ۸۳، ۱۱۳  
 خالی بیک قوش بیگی ۶۱۸، ۶۲۷-۶۲۸،  
 خان پادشاه .. ۱۸۸، ۱۹۳، ۲۶۲، ۵۷۵،  
 ۵۹۴، ۶۰۸، ۶۱۸، ۶۲۲، ۶۳۱،  
 ۶۳۵-۶۳۶  
 خان خواجه ..... ۱۶، ۳۲-۳۳، ۵۴-۵۵،

۲۴۴، ۳۱۰-۳۱۱، ۳۱۳-۳۱۵،

۳۱۸-۳۲۹، ۴۶۲، ۵۷۲

### چ

چمش بی ..... ۱، ۶۴۳

چنگیز خان ..... ۳۳، ۱۳۷، ۲۱۰، ۳۷۱،

۶۴۴، ۶۵۳

### ح

حاتم طای ..... ۵۰۲

حاجی بی ..... ۲۳۰-۲۴، ۳۱-۳۴، ۵۳، ۶۴۳

حاجی خان ..... ۵۴۴

حاجی قربان ..... نگرید؛ حاجی میر قربان

حاجی قلندر ..... ۵۶۷، ۶۱۶

حاجی میر قربان ..... ۱۷۴، ۲۵۰

حاذق (مولانا) ..... ۲۴۰، ۲۰۹، ۲۱۲، ۲۲۰،

۲۷۳، ۵۲۷، ۵۶۲-۵۶۳، ۶۳۴، ۶۴۲

حافظ شیرازی (شمس الدین، خواجه) ...

۶۷، ۲۷۰، ۴۷۴

حافظ قوت ..... ۹۴

حامد خواجه ..... ۷۸-۷۹، ۸۶-۸۷

حبیب افندی ..... ۴۲۸، ۴۳۱، ۴۵۸، ۴۶۱

حسن پادشاه گورجی .. ۵۰۱، ۵۰۸-۵۰۷

حسن خواجه ..... ۳۱۳، ۳۱۶

حسن علی میرزا ..... ۵۴۰

حسین ..... ۶، ۹

پیر نظر بی (پسر ایر نظر بی منقیت) .. ۷۰

### ت

تاجری ..... ۵۵۴

تنگری قلی شیغاول ... ۲۹۸، ۳۰۱، ۶۷۳

تورسون دیوان بیگی ..... ۲۵۸

توره خان ۸۵، ۱۳۷، ۱۴۳-۱۴۴، ۱۴۶،

۳۱۰-۳۱۱، ۳۲۷-۳۲۸

توره خان میر اسد ..... ۱۵۱، ۱۵۳

توره خواجه ..... ۳۲۵، ۳۲۸، ۳۳۳

توره خواجه (مخدوم اعظمی، خواجه

کلان) ..... ۱۲۸-۱۲۹، ۱۳۷، ۱۵۲،

۱۷۰، ۲۲۲

توله بای میرزا ..... ۸۵

### ج

جامی (مولوی) ..... ۲۷۳

جبرئیل ..... ۴۱۷

جلودار ایناق ..... ۱۸۷، ۲۳۳، ۲۳۹

جمشید ۱۰۴، ۱۵۹، ۱۶۷، ۱۷۰، ۱۸۴،

۲۲۷، ۴۸۵

جمعه بای قیتاقتی .. ۶۸، ۸۳، ۹۹-۱۰۰،

۱۰۷-۱۰۸، ۱۲۷

جنید بغدادی ..... ۵۰۶

جهانگیر خواجه (فیضی) ... ۱۴۵، ۱۸۲،

۱۹۶-۱۹۷، ۱۹۹-۲۰۰، ۲۱۱،

بوته میر آخور باشی ..... ۲۶۶  
بهادر (پروانچی، دادخواه) . ۶۰۴، ۶۱۲،  
۶۲۷

بهادر بیک ولد خدایار بی ..... ۶۵۱  
بهادر خواجه دسترخانچی ... ۱۲۶، ۱۴۴،  
۱۶۰، ۱۸۹، ۳۱۹، ۵۸۱

بهادر فرمان ..... ۳۳  
بهجت (مولانا) ..... ۱۵۱  
بہزاد ..... ۴۵۹، ۵۱۰  
بہلول دیوانہ ..... ۵۰۶  
بی بی نار ..... ۵۷۶  
بیدل ..... ۲۷۵، ۲۷۸، ۵۳۸  
بیردی یار ..... نگرید؛ بردی یار  
بیرم علی خان ..... ۵۴۴  
بیک اوغول بیک ..... ۵۳  
بیک بوته بی ..... ۵۳  
بیک مراد بی پروانچی (پسر ایر نظر بی  
منقیت) . ۵۶، ۶۳، ۶۵، ۶۷-۶۸، ۷۰  
بیک مراد بی ولد خدایار بی . ۳۲۷، ۶۵۱  
بیک نظر بی ..... ۱۶، ۲۸-۲۹

پ

پادشاه خان ..... ۱۳۷  
پادشاه خواجه ..... ۶۳  
پری سلطان ... ۵۰۸، ۵۱۴-۵۱۵، ۵۱۸،  
۵۲۳

ایردانه بی ..... ۵، ۸-۱۴، ۱۶-۱۷  
ایشان شافعی ..... ۶۰۰-۶۰۱  
ایشان صدور ..... ۶۳  
ایشان مولوی ..... ۶۰، ۹۲  
ایشان توره اوراق کلان ۱۳۷، ۱۷۰، ۲۱۹  
ایشان خان مولانایی ..... ۱۳۷

ب

بابا (پروانچی، دیوان بیگی) .. ۳۶-۳۷،  
۵۶، ۶۵، ۲۴۳  
بابا بیک ..... ۵۶۵، ۵۷۰-۵۷۱  
بابا خواجه ..... ۶۵۹  
بابا دادخواه ..... ۵۶۷  
بابا رحیم اناق ..... ۱۴۳-۱۴۴، ۶۸۵  
بازار بای (ملا) ..... ۶۷۵، ۶۷۸-۶۷۹  
بازار قل مهتر ..... ۲۲۳  
بای بوته بهادر ..... ۵۱-۵۲  
بایزید ایلدوروم ..... ۴۱۶  
بردی یار ولد تورسون دیوان بیگی . ۲۵۸،  
۲۶۷

بردی یار (توقصابه، اشیک آقاباشی) ...  
۶۸۰، ۶۷۷، ۶۱۹

بزرگ خواجه ..... ۵۶-۵۹، ۶۱  
بلال حبشی ..... ۵۰۰  
بلدای (مولانا) ..... ۲۱۵  
بلقیس ..... ۲۲۵-۲۲۶، ۲۵۵



- ۲۳۱-۲۳۳، ۲۳۶، ۲۳۸، ۲۴۱،  
 ۲۴۴، ۲۴۸، ۲۵۰-۲۵۱، ۲۵۷-  
 ۲۵۹، ۲۶۱-۲۶۷، ۲۶۹-۲۷۰،  
 ۲۷۲-۲۷۵، ۲۸۳-۲۸۵، ۲۹۲،  
 ۲۹۹، ۳۰۳، ۳۰۹-۳۱۰، ۳۳۳-  
 ۳۳۴، ۳۴۷، ۵۷۵، ۵۸۱، ۵۹۰،  
 ۶۴۹، ۶۷۳-۶۷۴  
 امیر نصر الله... ۳۳۳، ۵۵۹، ۵۶۱-۵۶۵،  
 ۵۸۲، ۵۸۴، ۶۰۰، ۶۰۲، ۶۰۷،  
 ۶۱۱-۶۱۲، ۶۱۵-۶۱۹، ۶۲۱،  
 ۶۲۶-۶۲۷، ۶۳۲-۶۳۳، ۶۳۷-  
 ۶۴۰، ۶۴۲، ۶۴۷-۶۵۱، ۶۵۵-  
 ۶۵۶، ۶۶۱-۶۶۳، ۶۶۷، ۶۷۵-  
 ۶۷۷، ۶۸۱  
 انه قلی دادخواه..... ۵  
 انه قل (دادخواه، پروانچی) ۲۳۹، ۲۶۵،  
 ۲۶۸-۲۶۹  
 اولیا محرم باشی..... ۲۶۵  
 آی بی بیش..... ۲۷۵  
 آی جان آیم..... ۵، ۸، ۱۴  
 آی چوچوک آیم..... ۵-۶، ۹، ۱۴  
 آی خواجه..... ۶  
 ایر نظر ایت باش..... ۱۳  
 ایر نظر بی (پروانچی، دیوان بیگی) ۶۸،  
 ۷۰، ۱۳۷، ۱۵۱، ۱۵۳، ۱۷۰، ۲۰۷،  
 ۲۱۹-۲۲۰، ۲۳۳، ۲۸۸-۲۹۱، ۳۰۹  
 امام اعظم (حضرت) ..... ۵۰۶  
 امام قلی بی ..... ۲۰، ۵۰  
 آمنه ..... ۴۳۵  
 امیر تیمور صاحبقران..... ۱۳۴، ۴۱۶  
 امیر حسین (برادر امیر حیدر) ..... ۲۱۱  
 امیر حسین توره (پسر امیر حیدر) .. ۲۳۰  
 امیر حیدر پادشاه..... ۶۸، ۷۰-۷۱، ۷۳،  
 ۱۲۸-۱۲۹، ۱۳۱، ۱۳۳، ۱۳۹-  
 ۱۴۰، ۲۱۱، ۲۳۰، ۲۳۵-۲۳۶،  
 ۳۳۱-۳۳۲  
 امیر عالم خان... ۳۷، ۴۹-۵۴، ۵۶-۶۲،  
 ۶۴-۷۴، ۷۹-۱۰۰، ۱۰۲-۱۱۴،  
 ۱۲۰-۱۲۱، ۱۲۵-۱۲۶، ۱۲۸،  
 ۱۳۰، ۱۳۲، ۱۸۸، ۲۱۶-۲۱۷،  
 ۲۸۴-۲۸۵، ۲۹۰، ۵۸۲، ۶۴۳،  
 ۶۵۱-۶۵۲، ۶۷۰، ۶۷۷  
 امیر عمر خان... ۳۶، ۴۹، ۵۷، ۶۶، ۶۸،  
 ۷۲-۸۱، ۸۳، ۸۶، ۹۹-۱۰۰، ۱۰۶-  
 ۱۰۷، ۱۰۹-۱۱۰، ۱۱۳-۱۱۴،  
 ۱۲۱، ۱۲۵-۱۳۶، ۱۳۸-۱۴۶،  
 ۱۴۸-۱۵۱، ۱۵۴-۱۵۷، ۱۵۹-  
 ۱۶۱، ۱۶۳، ۱۶۶-۱۶۹، ۱۷۱-  
 ۱۷۴، ۱۷۶، ۱۸۰، ۱۸۲-۱۸۴،  
 ۱۸۷-۱۸۸، ۱۹۱-۲۰۰، ۲۰۴،  
 ۲۰۷-۲۰۸، ۲۱۰-۲۱۳، ۲۱۵-  
 ۲۱۷، ۲۱۹-۲۲۲، ۲۲۵-۲۲۹

## فهرست اشخاص

۱

ابراهیم (خدمتکار محمد حکیم خان) ....

۴۰۸

ابراهیم اتالیق (کینگس) ..... ۴-۵، ۹

ابراهیم بی پروانچی (پسر خدایار بی) ...

۶۶۶-۶۶۷، ۶۸۵

ابراهیم بی پروانچی (منقیت) ..... ۶۴۲-

۶۴۳، ۶۴۵

ابراهیم خان (پسر عالم خان) ۱۲۵، ۱۳۰،

۲۹۰، ۵۸۲، ۵۸۴، ۶۵۶-۶۵۸،

۶۶۱، ۶۷۰، ۶۸۱

ابراهیم خلیل الله (حضرت) ..... ۴۹۴

ابن یمین بی ..... ۶۲۸

ابو الغازی خان بخاری ..... ۶۷۳

ابو الفیض خان ..... ۹

ابو القاسم بیک (طغای بیک) ۶۶۱-۶۶۴

ابو شکور سالمی ..... ۵۹۸

اتالیق خان ..... نگرید؛ ابراهیم خان

احمد افندی ..... ۴۲۸، ۴۹۱

احمد یسوی (خواجه) ..... ۱۳۳، ۲۸۷

آخون جان ..... نگرید؛ آخون دادخواه

آخون دادخواه بن ابراهیم پروانچی. ۶۸۰،

۶۸۵

آخوند داملا خال محمد اعلم ..... ۶۸۵

ادریس قلی بی ..... نگرید؛ اریس قلی بی

ادریس قلی بی کوچک.. نگرید؛ اریس قلی

بی کوچک

آدینه قلی ..... نگرید؛ انه قلی

آرتوق خواجه ..... ۹، ۳۲

ارسلان بیک دادخواه. ۱۱۱، ۲۶۸-۲۶۹

اریس قلی بی. ۱۳، ۱۵، ۱۷-۲۰، ۲۹-

۳۰، ۳۲، ۵۰، ۶۴۷، ۶۶۵

اریس قلی بی کوچک... ۶۸، ۸۳، ۹۹-

۱۰۰، ۱۰۷-۱۰۸، ۱۲۷

اریس قلی دیوان بیگی ..... ۱۴۷

آستانه قلی توقصابه ..... ۶۱۴-۶۱۵

اسحاق (حضرت) ..... ۴۹۴

اسحاق بیک دیوان بیگی... ۱۳۳، ۱۳۷،

۱۴۶، ۲۱۳، ۲۳۹، ۲۵۷، ۲۶۹،

۳۳۴، ۵۷۱، ۵۷۳-۵۷۴، ۶۱۱-۶۱۲

اسرافیل ..... ۵۸

اسفندیار ..... ۷۷، ۹۴، ۱۵۵

افراسیاب ..... ۱۸۴

افلاطون ..... نگرید؛ فلاطون

آفاق خواجه کاشغری ..... ۶۴، ۳۱۳

آق بوته بی ..... ۱-۳

اکمل خوقندی (مولانا) ... ۳۶، ۴۹-۵۰

الوغ بیک ..... ۵۳، ۳۱۹

امام (حضرت) ..... ۴۱۲

امام ابی یوسف (حضرت) ..... ۵۰۶

امام احمد حنبل (حضرت) ..... ۵۰۶

نموده، به فرمان روای آن اقلیم نازنین پرداختند.

مصراع

میتوان یافت ز عنوان سخن مضمون را

زبده کلام آن که آن خون کشیده را کشان کشان دستگیر نموده، به پیش جماعه قپچاقیه آوردند. فی الحال ایشان به خون شیر علی خان شربت شهادت را بر گلوی او ریختند و آن پادشاه نادیده دولت به چندین داغ و حسرت دامن از این خاکدان دهر برچید. روی به سوی عقبی آورد.

### بیت

حجاب چهره جان میشود نقاب تنم  
خوش آدمی که از این چهره پرده بر فکنم  
چنین قفس نه سزای چو من خوش الحانی است  
روم به گلشن رضوان که مرغ آن چمنم

مدت حکومتش نه روز بود و مدت عمرش یکم چهل سال و جماعه قپچاقیه که از علما و از امراء بقیت السیف را بعد از فراغ قتل به هوس به چندین مباحثات {۶۹۷پ} به درجه شهادت رسانیدند. از آن جمله پیرزاده تمام ممالک فرغانه ایشان سلیمان خواجه شیخ الاسلام ابن جناب هدایت پناهی ایشان ذاکر خواجه شیخ الاسلام علیه الرحمه و قاری اندجانی و از علما آخوند داملا خال محمد اعلم، مدرس مدرسه خان داملا خواجهم قلی مفتی و از امراء ساتیب آلدی دادخواه بن قاسم اتالیق و بابا رحیم عناق بن رجب قوشبیگی و آخون دادخواه بن ابراهیم پروانچی و حاکم خجند کریم قل دادخواه علی هذا القیاس. اگر به هر کدام ایشان مفصل شروع رود، سخن به طول میانجامد. بنابر این ملال خاطر نکته سنجان بلاغت نشود. گفته به همین قدر اکتفا کردیم. باقی از عوام الناس لا یعد و لا یحصی بود.

### بیت

سخن بسیار و آن اندکی گو      یکی را صد مگو صد را یکی گو

القصة. جماعه قپچاقیه در تاریخ هزار و دو صد و شصت روز شنبه... (نخوانا) مکرر تسخیر ممالک خوقند نمودند. خاطر خود را از مراد خان جمع ساخته و از قتل و تاراج فارغ گشته، روز دیگر خدایار خان بن شیر علی خان را مثل پدر به تخت عارضی نشانیده، سکه به نامش زدند و خطبه به نامش خواندند و در خود ایشان چه نوعی که لازم بیاید، به همان عمل

خلص کلام هر دو دریای لشکر به هم در آویختند و از خون یلان رسته های ولایت خوقند چون رود موج گلناری گشت و بازار قتال چنان رونق گرفته بود که ملک الموت فرصت نداشت که مولا و غلام را بها گذارد و شیخ الاسلام و مزدور را به یک نرخ می فروخت، چنانچه میگوید،

## بیت

بنی آدم اعضای یک دیگرند      که در آفرینش ز یک گوهرند  
چو عضوی بدرد آورد روزگار      دگر عضوها را نماند قرار  
تو کز محنت دیگران بی غمی      نشاید که نامت نهند آده می

عاقبت بعد از کوشش بسیار کوکب طالع جماعه قچاق طلوع نمود و ستاره مراد خان در هبوط افتاد. قرار بر فرار اختیار نموده، خود را به چندین محنت و مشقت در میان ارک گرفت و لشکر قچاقیه دیدند که دری فتح به روی ایشان به آسانی گشاده شد. تعاقب نموده، از روی بی باکی {۶۹۷} خون ناحق و صیله رحم را به خود عار داشته، به قتل مشغول بودند و از کشته ها پشته ها بر داشته، خود را به ارک خوقند رسانیده، به یک حمله داخل قصر پادشاهی شدند. هر ذی روحی که در آن جا موجود بود، همه را از دم شمشیر خون آشام گذرانیدند، الا دو برادر فقیر که پیر آن جماعه بودند، از آن مهلکه سالم ماندند.

## مصراع

صلای مرگ در عالم فکندند

و مراد خان بیچاره که هنوز نسیم پادشاهی به مشامش نرسیده بود که تندباد اجل در ربود و هنوز غنچه مدعا از گلستان شاهی نشکفته بود که قضا و قدر پژمرده ساخت، به حکم آن که،

## بیت

دریغا که آن خسرو نامراد      چنان نیست شد گویی ما در نژاد

امر خطیر شدند، به حکم آن که،

### بیت

فرصت غنیمت است غنیمت شمار وقت ز آن پیش کو برون رود از دست ناگهان

در آن زمان امارت توره قورغان و نمندگان به پسر کوچک شیر علی خان خدایار خان تعلق داشته، بلا اهمال آن میر بچه را در میان خود گرفته، همه امراء بر نمد سفید انداخته، بیعت نمودند. روز دیگر با چندین شان و شوکت از ولایت اندجان کوچ نموده، در کمال سرعت رو به مقصد آوردند. بعد از طی مسافت به دو شبگیر خود را بعد از طلوع نیر اعظم به ولایت خوقند رسانیده، آماده محاربه گشت و مراد خان که در بستر استراحت با معشوقه خود به چندین ناز و نیاز غنوده بود و این مقدمه را از جمله ممتنعات شمرده، سهواً و قصداً بر زبان جاری نمیکرد. ناگاه به گوش جاننش ندای شور و غوغا رسید. به تور خود به چندین گیر و تمنا از حرم سرا بیرون خرامید و نمیدانست که خون شیر علی خان گریبان او را محکم گرفته، به سوی اجل کشان کشان میبرد، به حکم آن که،

### بیت

هر که در راهی کسی چاهی کند خویش را آخر در آن چاه افکند

چون بر دیوان خانه رسید و استفسار این امر خطیر نمود. دانست این گنبد مقرنس در عالم کون و فساد چه شعبده انگیزخته است. خوش خوش سر در جیب تفکر افکنده، در گرداب غم فرو رفت. {۶۹۶پ} دانست که قضا کار خود را کرد. دست افسوس به هم میسود و از پشیمانی سودی نداشت، به حکم آن که گفته اند،

### بیت

لا علاج دل به نابودنی نهاده، با ندیمان خود متوجه محاربه شد. در آن وقت لشکریان قیچاق خود را به یک حمله داخل شهر گشته، دست به قتل و تاراج گشادند.

### بیت

چو ضبط ملک منصوب تو است جهد نمای که از جوانب {و} اطراف با خبر باشی

گفتار در بیان مسخر نمودن جماعهٔ قپچاقیه دار الملک خوقند را بار دیگر و شهادت مراد

خان از دست خدایار خان بن شیر علی خان

مجمل این اجمال آن که چون جماعهٔ قپچاقیه بلوای قرغیز را شنیده، از بازیچهٔ فلک فتنه جو غافل بلا اجمال با لشکر انبوه متوجه آن صوب گشته، بعد از قطع مراحل در ولایت اندجان وارد گردیدند. روز دیگر از آن منزل کوچیده، در کمال سرعت راه پیموده، در ولایت اوش رسیده، به جماعهٔ قرغیز ملحق شده، به جنگ پیوستند. چون از آمدن جماعهٔ قپچاقیه قرغیزان واقف گشته، ایشان نیز طریق محاربه را آماده کرده، رو به قتال آوردند. بعد از محاربات بسیار نسیم ظفر از جانب قپچاقیه وزید و قرغیزان رو به فرار آوردند و مسلمان قلی که بزرگ ایشان بود، مظفر و منصور در آن جا نزول فرموده، از رنج محاربه آسود، به حکم آن که گفته اند،

بیت

{۶۹۵پ} مست بودن نیست دأب پیشهٔ ارباب ملک

شاه را در سلطنت آیین هشیاری خوشست

در آن وقت خبر پادشاهی مراد خان در رسید و از شنیدن این مقدمهٔ جان گداز لرزه بر اندام محمد نظر بیک و جماعهٔ قپچاقیه افتاد. انگشت تحیر به دندان گزیده، نمیدانستند که چه چاره سازند. هر چند عقل پر فن در میدان خیال مطلق العنان میساختند، به جای نرسیده، باز میگشت. بعد از تأمل بسیار همهٔ بزرگان لشکر متفق اللفظ و الکلمه گشته، در کمال عجز و نیاز به خدمت مراد خان عرضه نوشته، اظهار غلامی و خدمتکاری خود نمودند و چون نامه به مراد خان رسید، از مضمون مکتوب مطلع گشته، عجب و کبر او دو بالا شد. فی الحال جواب مکتوب را در کمال درشتی نوشته، به قاصد رخصت اجازت داد. چون حامل رقعہ از مراد خان مرخص شد، در کمال تعجیل قطع منزل و مراحل نموده، خود را به پیش محمد نظر بیک و مسلمان قلی چولاق رسانید. صورت حال را بیان فرمود.

القصه. ایشان از مضمون مکتوب و از بی کفایتی مراد خان واقف گشته، دانستند که اگر در این کار مساهله ورزند و فرصت را از دست بدهند، مراد خان از بیخ و بنیاد ایشان بر میکند. از این جهت از ترس جان خود دست به جبل المتین توکل زده، {۶۹۶ر} متصدی این

ممالک را به آسانی در بر کشید و شیر علی خان بیچاره که از شهد شاهی به جز خون جگر قطره ای نچشیده بود که به خون عالیجاهی اتالیق خان {۶۹۴پ} گرفتار گشته، به درجه شهادت رسید و مدت عمرش پنجاه و پنج سال و مدت سلطنتش در ممالک فرغانه دو سال و یک ماه و بست و پنج روز بود. چون مراد خان در ممالک خوقند بر سریر سلطنت نشست و همه خاص و عام پادشاه زاده بر اصلی خود پنداشته، بر خدمت او قیام نمودند و از هیچ وجه ذره ای از فرمان او تجاوز نمیکردند و ندانسته بودند که شکفتن این گل بقای ندارد و ثمر این نخل باری نمی آرد.

## بیت

جمشید جز حکایت جام از جهان نبرد      زنهار دل میند بر اسعادی دنیوی

از آن جا که مراد خان قریب به سی سال در دیار غربت آواره گشته، چنانچه چندی در قراتگین عمر به سر برد و سالها در بخارا روزگار گذرانید و از آن جا به ولایت خوارزم رفته و از اورگنج اراده بیت الله نموده، به ولایت مشهد مقدس رسیده، هر چه زاد و راحله در بساط بوده را به تاراج قزلباشان داده و به چندین کلفت باز به خوارزم مراجعت نمود و چند روز از رنج راه بر آسود و از آن جا بار دیگر به بخارا آمد و امیر نصر الله به حال او نه پرداخت. سه ماه در میان گورستان روزگار گذرانید. بالاخر امیر نصر الله در جوار خود جا داد. به این درجه رسیده بود. از روی بی کفایتی {۶۹۵ر} این قدر رنجی که کشیده بود، همه را به یک بار فراموش کرده، در کمال غفلت به تن پروردن مشغول گشت. امراء جیش را موافق نسبش نیافتند. همه خاص و عام نا امید گشته، دست تا به بازو شسته، دل به نابودنی نهادند.

## بیت

تا پای پادشاه بود در بساط عدل      بر فرق او نهاده بود تاج خسروی  
چون دست از آستین بعلت برون کند      باشد نصیب گردن او طوق مدبری



بعد از ادای عزا به درستی ملک پرداختند.

### ذکر مسخر نمودن مراد خان دار السلطنت خوقند را و کشتن شیر علی خان بیچاره را به تقدیر ازلی و سر نوشت لم یزلی

و چون مراد خان معه برادرزاده اش حیدر خان و کته خان در ولایت اوراتپه به نزد برد یار ایشیک آقاباشی آرام گرفتند، شب و روز از چاره ساز حقیقی چاره میجستند. ناگاه دعای او با جانب مقرون گردیده، از امراء خوقند ضمناً پی در پی خبر نوید سلطنت ممالک فرغانه رسیدن گرفت. مجمل سخن آن که در آن وقت جماعه قپچاقیه در ولایت خوقند مستولی گشته، شیر علی خان را پادشاه عارضی ساخته، خود به فرمان روایی مشغول بودند. خبر رسید که جماعه قرغیز با لشکر انبوه آمده، ولایت اوش را به یغما میبرند. از شنیدن این خبر وحشت اثر بزرگ ایشان مسلمان قل در کمال تعجیل با لشکر پر و بال ریخته خوقندی و جماعه قپچاقیه خود ولایت ویران {و} {۶۹۴ر} خراب را به شیر علی خان گذاشته، متوجه آن صوب گشت و برخی امراء خانان ماضی که مماتشان را از حیات خود چندین درجه ترجیح میزدند، این نوع روز را از خداوند عالم میجستند، در غایت بشاشت به امارات پناهی مراد خان مکتوبها نوشته، تکلیف تاج و تخت نمودند و آن عالیجاه به رسیدن کتابتهای امراء خوقند دانست که ملک از اغیار خالی است، بلا توقف حیدر خان و کته خان را در ولایت اوراتپه گذاشته، خود به راه کوه با سیصد کس توکل به ذات اقدس آورده، متوجه مقصد گشت، به حکم آن که،

#### بیت

بی عزم درست سعی کامل کس را نشود مراد حاصل

و این خبر را حاکم اسفهر ساتیب آلدی بیک بن قاسم اتالیق شنیده، استقبال نمود و حاکم خجند کریم قل و حاکم نو آخون جان شنیده، ایشان نیز در کمال تعجیل به ولایت اسفهر ملحق شدند و مراد خان یک شب در آن ولایت بر آسود. در آن وقت قریب دو هزار کس جمع آمد کرده بودند. روز دیگر از آن سرزمین کوچیده، به یک شبگیر خود را به ولایت خوقند رسانیده، سنه ۱۲۶۰ غره ماه شعبان روز جمعه بی توقف داخل شهر گشته، عروس آن

متوجه مقصد گشت. بعد از دو منزل بر لب سیحون در برابر لشکریان عبد الرحمان بیک و لشکر قوشبیگی نزول فرمود. چون از آمدن دوران بیک آن امارت پناهان وقوف یافته، در کمال خرسندی به استقبال او کس فرموده، در تدارک بند و بست شدند.

خلص کلام آن که بعد از گفتگوی بسیار و عهدهای بیشمار از هر دو جانب به وقوع آمده، به هم ساختند. چون عبد الرحمن بیک و لشکر قوشبیگی از دریا عبور نموده، به لشکر ولایت تاشکند ملحق شدند، بعد از یک روز از آن سرزمین با چندین شان {و} شوکت با لشکر انبوه متوجه مقصد شدند. بعد از دو منزل نزدیک ولایت شده بودند. همه خاص و عام {۶۹۳ر} استقبال نموده، مبارکبادی دشت قیچاق نمودند و از این بازیچهٔ فلک غدار ملاً بازار بای بیچاره حیران و سرگردان به هر سو مثل سگ دیوانه میدوید. سودی نداشت. عاقبت دید که کار به جای نمیرسد. تن به قضا در داد و خاموش نشست. روز دیگر عبد الرحمن خان با صولت تمام از آن جا کوچ نموده، سال مذکور به قلعهٔ تاشکند نزول فرموده، ملا بازار بای را معه قیچاقان دیگر دستگیر نموده، پاره ای را به قتل رسانید و برخی را محبوس ساخت و خود مکرر بر تمام ممالک تاشکند و قورمه فرمان روا گشت، از آن که گفته اند،

### بیت

تو باز ساعد شاهی باستخوان منگر همای همت خود را بلند ده پرواز

چون عبد الرحمن خان از رنج راه بر آسود، بعد از چندین روز هوای ممالک فرغانه به سر افتاده، با لشکر انبوه متوجه مقصد شد. بعد از چهار منزل در برابر ممالک خجند بر لب دریای سیحون نزول فرمود و از آمدن او امراء خجند وقوف یافته، در غایت بشاشت نوید تسخیر عروس ولایت را رسانیده، میخواستند که به او تفویض نمایند. ناگاه خبر پادشاهی مراد خان و قتل شیر علی خان در رسید، همه از شنیدن این پیام از کار فلک بو قلمون انگشت تحیر به دندان گزیده، {۶۹۳پ} سر در جیب فکر فرو بردند و وعده هایی که به عبد الرحمن خان کرده بودند، بلا توقف برگشته، به درستی کار خود شدند. چون این خبر را عبد الرحمن خان و لشکر قوشبیگی نیز شنیده، در کمال پریشان حالی از آن منزل کوچ نموده، در غایت تعجیل بر سه کوچ به ولایت تاشکند وارد گردیده، به عزای شیر علی خان پرداختند.

سی سال حکم رانی کرده بود و بر تمام اهالی آن مرز و بوم الفتی پذیرفته بود، از این جهت کار او به ترقی انجامید و در میان {۶۹۲ر} سهل روز لشکری بسیار به گرد او هجوم کردند. عبد الرحمن بیک و لشکر قوشبیگی دانستند که مسبب الاسباب کاری خواهد ساخت. بنابر این دست به دامن توکل زده، با لشکری بسیار متوجه ولایت تاشکند شدند. بعد از سه منزل بر لب دریای سیحون نزول فرمودند، به حکم آن که،

### بیت

ما کار خویش را بخداوندگار ساز      بگذاشتیم تا کرم او چه میکند

در آن عصر در ولایت تاشکند از جانب قیچاق ملا بازار بای نام کسی حکم رانی میکرد و دوران بیک کوهستانی سپه سالار او بود و او در زمان ماضی نمک خوار لشکر قوشبیگی بوده و هم در وقت تاشکند بودن به نزد عبد الرحمن بیک شهرتی پیدا کرده بود. خواست که در این وقت نمک هر دو را به جای آرد و هم دید که کار شیر علی خان به جای نمیرسد. بلا توقف ضمناً به خدمت امارت پناهان عرضه نوشت و خود در تدارک این امر گشت. بعد از دو روز خبر آمدن امارت پناهان بر تمام ممالک تاشکند منتشر گشت و همه خرسندیها میکردند و ملا بازار بای از شنیدن این خبر مهلک در گرداب غم فرو رفت. هر چند فکر کرد، فکرش به جای نرسید. بالاخر گردن خار خار آن دوران بی را در پیش خود طلب نموده، چاره جو گشت و آن مبارز گفت، >از آن جا که آتش این فتنه حالا بلند نشده است، در تدارک {۶۹۲پ} این امر بزرگ گشته، خود به سر رشته قلعه داری میباید پرداخت و مرا با تمام لشکریان به جانب دشمن نام زد میباید نمود و اگر در این امر مساهله ورزند، جز پشیمانی چیزی به دست نخواهد آمد.<

### بیت

بنای کار بنه بر ثبات ایمن باش      که هر بنا که بر اصل است پایدار بود

از آن جا که آن بینچاره از کار سپاهی گری عاری بود، به سخن گندم نمای جو فروش او عمل نموده، بالرئس و العین قبول نموده، بلا توقف آن مبارز را معه تمام لشکریان به آن صوب نام زد فرمود. چون دوران بیک از ملا بازار بای رخصت اجازت یافت، بلا اهمال

## بهر تسخیر ممالک لشکر خیل حشم

جمله در کارند لیکن از همه تدبیر به

در آن وقت خبر رسید که امیر نصر الله برادرم عیسی را از ولایت اوراتپه معزول کرده، به جای او مکرر بیردی یار اشیک آقاباشی را به آن ولایت نسب کرده است و هم شنیدند که عبد رحمان بیک را مع لشکر قوشبیگی به جانب تاشکند در قلعه چهار دره نامزد فرموده است و نیز پسر امیر عالم خان مراد خان و پسری شهرخ میرزا حیدر خان و کتہ خان را در ولایت اوراتپه رسانیده است. چون این خبر به سمع ایشان رسید، به اندیشه دور فرو رفتند. با وجود او بر دماغ مسلمان قلی فرمان روایی مملکت خوقند صعود<sup>۱</sup> کرده، به محمد نظر بیک امارت ولایت اندیجان را تکلیف نمود و آن {۶۹۱پ} امارت پناه شنیدن این خبر در حیرت افتاده، گردن خار خار قبول نموده، متوجه آن صوب گشت و شیر علی خان بیچاره در میان پادشاهی و گدایی و محبوسی مشترک بوده، خود نمیدانست که او در<sup>۲</sup> کدام مقام است. هر روز به جای قمیز کاسه کاسه زهر و خون دل میخورد و دست افسوس به هم سوده، میگفت، >خوش آن روزی که در میان قرغیزان قوروق به دست گرفته، گله بانی میکردم. از شبانی ممالک فرغانه جز رنج چیزی به دست نیامد. ای کاش در میان قرغیزان رفته، به عادت<sup>۳</sup> معهود به رمه چرانی مشغول میبودم. < میگفت. اشک از دیده همی بارید و به این کلفت به سر میبرد.

گفتار در بیان مسخر نمودن عبد الرحمن بیک بن شیر علی خان و لشکر قوشبیگی ممالک

تاشکند و قورمه بل تمام دشت قپچاق را به لطف او تعالی

در آن وقت که عبد الرحمن بیک و لشکر قوشبیگی در قلعه چهار دره کوس امارت نواختند، تمام جماعه قزاقیه این خبر را شنیده، گروه گروه با تارتوق های مناسب آمده، به ایشان پیوستن آغاز کردند. از بسکه لشکر قوشبیگی در آن ولایت به دولت سه پادشاه قریب

۱ سعود [س]

۲ ر [س]

۳ عاهب؟ [س]

شهر سبز و حاکم اورگوت به جماعه خطای قپچاق به هر کدام ایشان جدا باید نوشت. مضمون مکتوب این که قبل از این مقدمه با یک دیگر عهد {و} پیمان کرده بودیم که امیر نصر الله می خواهد. اگر فرصت خود را با بد میرانی که در ما وراء لهر هستند، از بیخ بنیاد ایشان بر کند. قبل از وقوع حادثه من بعد امیر نصر الله به هر جانب قوشون کرده بر آید. ما پیش دستی کرده، او را به سوی عدم فرستانیم. همون روز اینک رسید {۶۹۰پ} اکنون شما امارت پناهان خبر دار باشید. ما همین شب شبیخون خواهیم آورد. چون محمد نظر بیک و مسلمان قلی این سخن از آن مدبر عصر شنیدند، بالرأس و العین قبول نموده و میرزا طلب کرده، تقریر آن پیر دانا را به هر کدام نام برده ها خط نوشت. به دست قاصد سبک رو سپرد. چون قاصد از ایشان مرخص شد، در کمال تعجیل راه می پیمود، چنانچه،

چو از کمان قضا قدر رسد تیری      یقین باز نکرد و به هیچ تدبیری

وقت صبح بر لب خندق ولایت خجند رسیده، میخواست که خود را از بیرون به درون شهر اندازد. اتفاقاً چیده، دلهای امیر نصر الله حاضر بودند. آن خون کشیده را دستگیر نموده، به پیش امیر نصر الله حاضر کردند. چون امیر نصر الله از مضمون کتابت مطلع شد. هوش از سرپر غرورش پرواز آمد و هم بر طبیعت او چنان استیلا یافت که به هیچ تدبیر علاج پذیر نبود. امراء هر چند مکرر عرض کردند که این کذب محض است. عرض امرا به جای نرسید. امیر نصر الله در غایت پریشان حالی از ولایت خجند کوچیده، متوجه مقصد شد. چون فرار امیر نصر الله مردم خجند واقف گشته، بلا توقف از عقب او برآمده، در آویختند. چنان مالک اولجه شده بودند که گدای آن ولایت به قارون همسری میکرد و این خبر {۶۹۱ر} در موضع قرقچی قوم به امرا رسید. دانستند که تدبیر آن پیر دانا موافق تقدیر افتاد. همه از شادی به پراهن نگنجیده، به جانب خوقند مراجعت فرمودند. بعد از یک منزل به خدمت شیر علی خانی گرننگ رسیده، کورونش داده، خبر بهجت اثر را دادند، چنانچه گفته اند،

قطعه

هر که بی تدبیر کاری کرد ملک از دست رفت  
ملک میخواهی بنای کار بر تدبیر نه

کمال چستی راه می پیمود. بعد از یک شب {و} روز از دریای سیر گذشته، در قلعه نو که {۶۸۹پ} برادریم عیسی بی به محاصره آن قلعه اشتغال داشت، ملحق شد و برادریم عیسی بی آمدن آن بیچاره را به خود فوز عظیم دانسته، به مهمانداری قیام نمود. بعد از دو روز مومن بیک ابن خدایار بی والنعمی را مع رابه او همراه کرده، به جانب ثمرقند فرستاد و آن سر گردان بعد از قطع مراحل به ولایت ثمرقند وارد گردیده، به امیر نصر الله کورونش داد و او قدم او را مبارک دانسته، شفقت های بسیار و مرحمت های بی شمار در آن وطن آواره نمود. بعد از دو روز همراه خود متوجه ولایت خجند گردید. هر چند این مقدمه در طبقه منقیت در سلک قصه کشیده بودم، این جا نیز نخواستم که سخن را کوتاه گذارم. بنابر این سطری چند نوشتم. امید این که نکته سنجان بلاغت قلم عفو جاری نمایند.

ذکر واقف شدن محمد نظر بیک و مسلمان قلی چولاق از آمدن امیر نصر الله در بالای خجند و لشکر کشیدن ایشان نیز تا به موضع کان بادام و قرقچی قوم و از آن جا به حيله {و} بدبیر گردانیدن ایشان امیر بخارا را

در آن وقت سنه ۱۲۶۰ بود که بعد از تسخیر ممالک خوقند و محمد نظر بیک و مسلمان قلی چولاق به امارت هر ولایت کسی را نامزد فرمود، چنانکه در ولایت تاشکند بازار بای نام قیچاق را فرستاد و در ولایت مرغیلان کریم قلی دادخواه را مامور ساخت. در ولایت توره قورغان پسر کوچک شیر علی خان را روانه نمود، علی هذا القیاس. در آن حین خبر رسید که امیر نصر الله در ولایت خجند وارد {۶۹۰ر} گردیده به محاصره آن ولایت قیام نمود. چون این خبر وحشت اثر به گوش محمد نظر بیک و مسلمان قلی رسید، در فکر عمیق فرو رفتند. بالاخر دل به نابودنی نهاده، کفن خودها را بگردن پیچیده، بل لشکر قیچاق و غیر دیگر متوجه دشمن شدند. بعد از یک منزل به قلعه قرقچی قوم نزول فرمودند و آن وقت در میان ایشان یکی از مدبران آن قصر بود. به امراء خوقند گفت، >امیر نصر الله اگر چندی که یک سال میشود، کار او پیش نمیرود. از یغمای خوار میان به ستوه آمده است. با وجود او پادشاه بخارا است. به او مقابل شده، محاربه نمودن شما از حکمت دور و از حزم بعید مینماید. اکنون تدبیر باید اندیشید، والا به هلاک خود میکوشیم.< همه به سخن آن پیر دانا تحمل نموده، چاره جو گشتند و آن پیر عافیت اندیش گفت، >به برادریم عیسی بی و میر بچه

شیر علی خان سه روز می بود که از اورنگ خلافت بر خواسته، به بوریایی مذلت منتظری مرگ مینشست. محمد نظر بیک و مسلمان قلی چُولا ق از قصر محمد علی خان ماده آورده، به قصر خورشید کلاهی امیر عمر خان مکرر بر تخت عارضی نشاندند. در تمام شهر منادی در دادند که <زمان زمان شیر علی خان است.> این ندا به گوش اهالی خوقند رسید. همه تحسین نموده، از بازیچهٔ فلک غدار انگشت حیرت به دندان گزید و میگفتند،

مملکت معمور داری خلق را معمور دار      وز سر ایشان بلای ظالمانرا دور دار

القصه. ولایت خوقند به دست اوباشان افتاد. همان روز گریز پسر شیر علی خان در کمال تعجیل دل از ملک {و} مال و از زن {و} فرزند کنده، به چندین داغ {و} حسرت راه {۶۸۹ر} می پیمود. در راه از گریخته گان یک یک همراه شد. بعد از یک شب {و} روز به ولایت خجند وارد گردید و مردم خجند دو طایفه شدند. جمعی امارت عبد رحمان بیک را قبول کردند و برخی مسلم نداشتند، عبد رحمان بیک دید که در میان ایشان مخالفت بسیار است. از دریای سیحون عبور نموده، متوجه ولایت تاشکند شد. در آن وقت که عبد رحمان بیک بلوای جماعهٔ قیچاق را شنید. از تاشکند به جانب خوقند متوجه شد. برادر کوچک فقیر مصطفی قلی خان را به جای خود نصب<sup>۱</sup> نموده، رفته بود. حالا به امید نورچشمی اختیار آن صوب نمود. چون فقرای تاشکند از آمدن عبد رحمان بیک وقوف یافتند، اهالی آن ولایت نیز دو گروه شدند. پاره ای آمدن او را خواستند و چندی نخواستند. از بسکه او در وقت تاشکند بودن مست باده جوانی شده، به ناموس اکبر فقرا دست درازی کرده بود. از این سبب مخالفت در میان ایشان بسیار واقع شد. بعد از ماجرای بسیار به استقبال او کس فرموده، از آمدن او منع فرمودند. چون این پیام به آن شور بخت رسید، در غرقاب فکر غوطه زدن آغاز کرد. نمیدانست که یک جا رود و الحق جای رفتن هم نبود،

### بیت

چو بد کردی مباحش ایمن ز آفات      که واجب شد طبیعت را مکافات

بعد از تانی بسیار گردن خار خار عنان عزیمت به جانب اوراتپه معطوف داشت. در

## قطعه

همان کز ستم خنجری بر کشید      فلک هم بدان خنجرش سر برید  
چو سندان کسی سخت رویی نکرد      که خایسک تأدیب بر سر نخورد

چون از فرار شیر علی خان لشکر قپچاق وقوف یافت، با یک حمله داخل شهر گشته، دست به قتل و تاراج گشادند و بسیاری سپاه و فقرای خوقند در تحت پای اسپان چون کون گوی می غلطیدند و خون مسلمانان در کوچه‌ها جریان میکرد. گویند، همان روز از امرا تا فقرا قریب دو هزار کس به قتل رسیده بودند، مثل عبد رحمان دیوان بیگی و عظیم بای پروانچی رحیم قل دادخواه و تنگری قلی شغال و سید علی دستورخانچی و صدیق تونقاتار علی هذا القیاس و قرغیزان رو به اوردوی شیر علی خان آورده، تمام حرم محترم او را چنان به یغما بردند که یک پرچه لته کهنه بنزد ایشان از دیبای رومی به قدرتر بود و پریرویان خوقندی را قپچاقان بر کفل اسپان سوار کرده، به هر سو میبردند، تا حتی گویند، از زیر شیر علی خان قالین او را در ربودند. چون این روز قیامت اهلای خوقند مشاهده نمودند، همه انگشت حسرت به دندان گزیده، جز خواموشی بر خود دوی نیافتند. بعد از یک شب {و} روز قتل {و} تاراج به پایان رسید. سنه ۱۲۶۰ روزی شنبه سیزدهم جماد الاول محمد نظر بیک و مسلمان قلی چولاق به قصر خورشید کلاهی امیر عمر خان نزول کرده، به سر رشته ملک پرداختند. {۶۸۸پ} بعد از قبض بسط شهر خواستند، ملک را صاحبی میباید. اما در آن وقت از خاندان رحیم خانی کسی نبود که بر سریر سلطنت بنشیند و پادشاهی محمد نظر بیک از عقل دور و از خرد بعید بود. بنابر این سه شب و روز به مصلحت قیام نمودند. دامن مدعا در کشاکش افتاد. بعد از گفت و گوی بسیار لا علاج سخن بر آن قرار دادند که باز شیر علی خان را مانند مثل ابو الغازی خان بخاری بر مسند جهانبنایی بنشانیم. به خود پادشاه عارضی کنیم و اما عنان اختیار به او نخواهیم داد. به همین مصلحت متوجه اورودوی او شدند.

## مصراع

ملک کم سلطانی یوق جسم دورور کم جانی یوق



به حال خود گذارید تا که کار خود را دانسته کنیم. شیر علی خان دانست که فقرا او را هم مثل محمد علی خان ماده بی آبرو خواهند کرد. لا علاج به فقرا وعده داد که به دشمن محاربه نماید. فقرا این نوید را شنیده، هر کدام به خانه خود مراجعت فرمودند. شیر علی خان فی الحال ندا در داد که جمعی مردم سر رشته خود را کنند که روز دیگر جنگ سلطانی خواهم کرد. چون این ندا به گوش خاص {و} عام رسید، همه به درستی کار خود پرداختند، چنانچه میگویند،

{۶۸۷پ}

ازین نام داران با هوش {و} هنگ      کسی را که بینم سزاوار جنگ  
و هم جوشن مرکب مغفرش      بگردون گردان رسانم سرش

پس هندوی شب به پایان رسید و صبح صادق گریبان چاک کرد و طاوس زرین بال چرخ زنگاری بر نه طاق نیلوفری فرمان روا گشت و عالم کون فساد را به شعاع خود منور ساخت. روز شنبه سیزدهم ماه جمادی الاول یازدهم جوزا شیر علی خان با حشمت بسیار و به شوکت بیشمار مع تمام سادات و علما و امرا و فقرا از ولایت خوقند یک فرسخ در موضع توقی تپه<sup>۲</sup> که ملک موروثی فقیر است، بر آمده، صف آراستند. قریب پنجاه هزار کس از شهر بر آمده بودند و محمد نظر بیک و مسلمان قلی چولاق نیز لشکر خود را ترتیب داده، آماده محاربه شدند. چون هر دو دریای لشکر ملاقی شد، دلیران پر کین به هم در آویختند. از خون یلان خاک رزم گاه چون یاقوت رمانی گلناری گشت. بعد از محاربات بسیار کوکب بخت لشکر قپچاقیه طلوع نمود و ستاره طالع شیر علی خان در هبوط<sup>۳</sup> افتاده، قرار بر فرار اختیار نمودند. چون این بلوا را شیر علی خان مشاهده نمود، از غایت پریشانی از همه پیش راه گریز پیش گرفته، خود را دوقت کرده، به درون شهر انداخته، به قصر خود به چندین بی آبرویی وارد گردید و عبد رحمان بیک {۶۸۸ر} در کمال تعجیل با یک محرم از دروازه دیگر بر آمده، راه گریز پیش گرفت، چنانچه،

۱ میگو [س]

۲ بیشه [س]

۳ هبوت [س]

کار حسد باز نمیدارند. ایشان را داشته، به دست ما سپارد. بعد شیر علی خان را باز خان خود میدانیم، والا خشت از قالب جسته است و تیر از کمان جسته، چنانچه گفته اند،

#### قطعه

ز دوستان سخن دان شنیده ام بیدلی      که بر ملایمت دشمن اعتماد مکن  
چو اعتقاد مضرت بخصم پیدا شد      مشو فریفته ز فتح اعتقاد مکن

چون عبد رحمان دیوان بیگی از محمد نظر بیک این جوابهای با صواب را شنیده، بلا توقف آمده، یک به یک به خدمت شیر علی خان تقریر نمود. به مجرد شنیدن این سخن شیر علی خان از کمال شرمساری سر در جیب تفکر فرو برده، دست افسوس به هم میسود. اما پشیمانی هیچ سودی نداشت، به حکم آن که،

#### مصراع

جز پشیمانی چه سود اکنونکه کار از دست رفت

و دیگر عظیم بای پروانچی را نیز {۶۸۷} بر سبیل رسالت در کمال عجز و نیاز فرستادن او نیز همان جواب را شنیده، آمده، بیان نمود. بالاخر شیر علی خان و پسرش بی حمیتی را شعار خود ساخته، از آن فتنه جویان یکی را به دست ایلچی جماعه قیچاقیه سپارید و ایلچی محمد نظر بیک در حال در میان رسته شهر بر آورده، آن جوان را سر برید. چون این خبر بر تمام شهر منتشر گشت، همه انگشت حیرت به دندان گزیده، به شیر علی خان نفرین میکردند، چنانچه گفته اند،

#### بیت

اگر نه هیبت شمشیر پادشاه بود      چه شورها که بیکدم ز شهر بر خیزد  
کسی که دست چپ خود راست شناسد      هزار فتنه چو دستش دهد بر انگیزد

روز دیگر خاص {و} عام دیدند که طالع شیر علی خان از سعد به نحس انجامید. همه متفق اللفظ و الکلیمة شده، در پیش آوردی شیر علی خان هجوم کرده، آمده، عرض نمودند که اگر استحقاق این امر خطیر داشته باشند، از ما مظلومان دشمن را دفع نمایند، والا ما را

متوجه خوقند شدند. بعضی از امرای خوقند که در اطراف و جوانب بودند، کار قیچاق را به این منوال دیدند. لا علاج آمده، به ایشان پیوستند. از آن جمله حاکم اندجان کریم قلی دادخواه و غیر دیگر چنانچه میگوید،

### بیت

القصه. محمد نظر بیک با لشکر قیامت اثر در بیرون شهر خوقند وارد گردید و از یک جانب به محاصره پرداخت. در آن وقت شیر علی خان سری کلابه خود را گم کرده، {۶۸۶ر} در بحر تحیر غرق شده بود. هر چند فکر قوپال خود را به هر سو میدوانید، به هیچ جا نرسیده، باز میگشت. دانست که آتش این فتنه را فرو نشانیدن از عقل بشری بیرون است. لا علاج تن به قضا در داده، خاموش نشست. امرای خوقند دیدند که حوصله شیر علی خان بر پادشاهی ممالک فرغانه وفا نمیکند. همه دست تا بازو شستند و با وجود او عبد رحمان دیوان بیگی را بر سبیل رسالت در پیش محمد نظر بیک فرستادند. سبب این قدر فتنه را از او استفسار نمودند. آن امارت پناه گفت، > ما شیر علی خان را از پادشاه ماضی بهتر دانسته بودیم. ندانستیم که از ایشان بتر بوده است. از این جهت که در میان قرغیز چهل سال به گله چرانیدن مشغول بودند، نام {و} نشانها شان کسی نمیدانست. وقتی که در ممالک فرغانه جماعه منقیتیہ مستولی شدند و پادشاهی از جماعه مینگیه منقطع شد و من که نمک پرورده این خانه دان بودم. ما پس نمک را اندیشیده، به چندین محنت {و} مشقت خود را در میان قرغیز رسانیده، شیر علی خان را گرفته، آورد و به لطف او تعالی به جای آبا و اجداد خود نشانیدم و باز دولت به این خاندان قرار گرفت. اول کاری که کرد، پسری امیر عالم خان اتالیق خان را به درجه شهادت رسانید. دویم دو برادر {۶۸۶پ} زاده خود که در بخارا بودند، از آن جا آورده، حکومت اندجان را انعام فرموده و به خود داماد ساخته، به چندین بی آبرویی دست به خون آن میر بچه های نادیده جهان شست و یوسف مینگ باشی که سبب دولت او شده بود، او را نیز از عقب ایشان فرستاد و من که هزار هزار جان خود را به راه او باخته بودم، عاقبت حکم به قتل من فرمود. لا علاج دست به دامن توکل زده، دفع ضرر را از نفس خود واجب دانسته، این قدر سبب بلوای عام شدم. حالا هم باشد. پنج شش از فتنه جویان که از پادشاهان ماضی که خود را پنجم فساد اندیشی نگاه داشته اند، حالا دست از آن

زبده کلام آن که چون لشکریان خوقندی فرار نموده، بسیاری به قتل رسیدند و برخی دستگیر شده، بقیه السیف<sup>۱</sup> به چند محنت و مشقت از آن غرقاب بلا نجات یافته، از دریای سیحون عبور نموده، خود را به خدمت شیر علی خان رسانیدند و آن پادشا {ه} بی کفایت این حال را مشاهده نمودن همان، از پا افتادن همان. بعد از ساعتی به خود آمد. بلا توقف پسرش عبد رحمان بیک که از برای درستی ممالک دشت قیچاق رفته، در آن مرز بوم با پریرویان ترکی باده عشرت میپیمود، به او پیغام فرستاده، از صورت حال آگاه کرد. از بسکه او در میان قرغیز بودن به دفع شهوت از روی مفلس بودن سوراخی را میکافت، موجود نبود. حالا در ممالک فرغانه و دشت قیچاق مطلق العنان فرمان فرما گشت. در میان گله پربزادان افتاده بود. در بحر وصل خوبرویان غرق شده، نوبت به هیچ کدام از نازنینان نمیرسید، چنانچه گفته اند،

### بیت

سفله را بی دستگاهی خضر راه رو نیست این پیاده کجروی نگرفت تا فرزین نشد

{۶۸۵پ} در این وقت خبر وحشت اثری ممالک فرغانه به گوشش رسید. هوش از سرپر غرورش در پرواز آمد. به جای خود برادر فقیر مصطفی {قلی} خان را نصب<sup>۲</sup> کرده، بلا توقف با امرای محمد علی خان ماده متوجه مقصد شد. بعد از سه کوچ از دوان گذشته، از دریای سیر عبور نموده، به پدر ملحق شده، به درستی کار پرداخت.

ذکر مسخر نمودن امرای فرغانه مع جماعه قرغیز و قیچاق مثل محمد نظر بیک و مسلمان قلی  
چولاق به لطف او تعالی

در آن وقت سنه ۱۲۵۹ شتا به پایان رسید و فصل بهار به سر آمد و اشجارها خود را بیاراست و تمام کوه {و} دشت را سبزه و ریاحین فرو گرفت. در تحویل سال دیگر که سنه ۱۲۶۰ بود که محمد نظر بیک و جماعه قیچاق این فتح بزرگ را از جمله عطاها ی غیبی شمرده، چون چندان با چندین تفاخر و مباهاات با لشکر انبوه از دریای سیحون عبور نموده،

۱ الصیف [س]

۲ نسب [س]

چنانچه میگوید،

### بیت

کفاف نفس اگر چند اندکست ولی جهان به تیغ گرفتن ز همت عالیست

بعد از یک منزل آن ولایت را فرو گرفتند و این ماجرا را جماعهٔ قپچاقیه شنیده، او نیز به هوس ملک ویرانی و مردم کشی را به خود فخر و مباهات دانسته، با سپاهی بسیار آمده، به محمد نظر بیک ملحق شدند و کار ایشان تا رفت بالا گرفت {۶۸۴پ} و این خبر را شیر علی خان شنیده، در بحر غم غوطه زدن گرفت. بعد از گفت گوی بسیار مصلحت بر آن قرار یافت که شادی مینگ باشی با سپاهی خوقندی سواری نموده، در کمال سرعت از دریای سیحون عبور نموده، در ولایت چُست وارد گردید و محمد نظر بیک و مسلمان قلی که بزرگ جماعهٔ قپچاقیه بود، ایشان نیز این ماجرا را شنیده، به درستی کار خود پرداختند. روز دیگر هر دو دریای لشکر چون بحر مواج در حرکت آمده، مقابل یک دیگر صف آراستند و از هر دو جانب دلیران کینه خواه در میدان خنجر محاربه مطلق العنان میساختند و اجل نیز در عقیب ایشان به چندین حیرانی میدوید که کدام او را پیشتر به راه عدم فرستاند.

القصة. هر دو دریای خونخوار به هم در آویختند و بسیاری امرای خوقند نمک اندیشه را منظور نکرده، در عین گیر {و} دار از سپاهی خوقند کنده، به آن جماعه ملحق شدند و این بیوفایی را شادی مینگ باشی میدید. دست افسوس به هم سُوده، داد مردی را میداد، چنانچه،

### بیت

بدی مکن که در این کشت زار زود زوال بداس دهر همان بدروی که می کاری

عاقبت بعد از محاربات بسیار ظفر از جانب محمد نظر بیک در وزیدن در آمد و سپاهی خوقند دیدند که کار از دست رفته است. لا علاج قرار بر فرار اختیار نمودند و شادی به جای خود مستقیم بود. چندی را به ضرب شمشیر به سوی عدم {۶۸۵ر} فرستاد. بالاخر او را نیز دستگیر نموده، به درجه شهادت رسانیدند. چون این فتح بزرگ را محمد نظر بیک و مسلمان قلی مشاهده نمودند. امید ایشان دو چندان شده، قدم پیش نهادند.

خوقندی به آسانی روی نمود. در غایت بشاشت حکومت او را به پسر ابراهیم بی تفویض نموده، با فتح {و} نصرت به جانب خجند مراجعت فرمود. در آن وقت شنید که امیر نصر الله در کمال پریشان حالی از لب دریای امویه {۶۸۳پ} برگشته، از روی لاعلاجی با سپاهی کم به ولایت جیزخ آمده است. این خبر را شنیده، در آن ولایت قرار گرفتند. بعد از سه روز خبر رسید که عیسی بی قلعه خواص را از دست پسر ابراهیم بی گرفته، به خدمت امیر نصر الله شتافته است و امیر نصر الله نیز از ولایت جیزخ عبور نکرده، به عیسی بی مهربانها نموده، رخصت اجازت داده، خود نیز به جانب بخارا مراجعت فرموده است. از این مقدمه ها واقف گشته، عبد رحمن بیک نیز از ولایت خجند بر آمده، متوجه ولایت خوقند شد. بعد از سه منزل به آن ولایت خراب وارد گردید. به پدر نابود خود ملحق شد و به عیش {و} عشرت پرداخت.

### ذکر سبب فتور دولت شیر علی خان و عداوت ورزیدن محمد نظر بیک مع جماعه قرغیزو قپچاق

سال دیگر محمد نظر بیک که از مسند عزت بر خواسته، به خاک ادبار نشست، به چندین خواری عمر میگذرانید. شیر علی خان نیز بودن او را از طریق حکمت دور می پنداشت. از این جهت خواست آن امارت پناه را از بیخ بنیادش بر کند. به این نیت او را به طریق تلبیس حکم فرمود که امارت پناه رفته، ذکوة تمام دشت قپچاق را جمع کرده، بیارند. به این تدبیر از ولایت بیرون کرده، دو جلاد را فرستاد که او را به راه عدم فرستانند و آن امارت {۶۸۴ر} پناه از شیر علی خان مرخص شده، در کمال تعجیل از دریای سیحون عبور نموده، در کمال فارغ البالی غنوده بود. ناگاه آن دو جلاد به خون تشنه به سر آن امارت پناه چون مرگ مفاجا در رسید. امارت پناه دانست که ماجرا چیست. ناگاه آن دو جلاد را سر بریده، قرار بر فرار اختیار نمود. در غایت تعجیل قطع راه مینموده، بعد از مشقت بسیار خود را در میان جماعه قرغیزان رسانید و ننگ {و} ناموس خود را به ایشان انداخته، صورت واقعه را بیان فرمود و از ایشان مدد خواست و آن جماعه که این نوع روز را از خدا میجستند، به مجرد شنیدن این سخن متفق اللفظ و الکلیمه شده، سلسله جنبان این امر شدند. بعد از درستی کار با لشکر فراوان از منزل خود در حرکت آمده، متوجه ولایت توره قورغان شدند،

بعد از طی مسافت در قلعه نو وارد گردیده، به محاصر و مقاتله آن حصن حصین پرداختند. در آن وقت حکومت آن سرزمین به پسر ابراهیم بی ابن خدایار بی والنعمی تعلق داشت. آن مرد به چه شرط قلعه داری را به جای آورده، بعد از پنج روز دید که مشیت به درفش راست نمی آید. لا علاج عهد امان نموده، قلعه را به امرای خوقند تفویض نموده، راه اوراتپه را در پیش گرفت و امراء خوقند قلعه نو را مع قوش تیگیرمان به آسانی مسخر نمودند. با فتح نصرت به جانب خوقند مراجعت نمودند. بعد از قطع مراحل به خدمت شیر علی خان رسیده، کورونش دادند.

### ذکر لشکر کشیدن عبد رحمان بیک ابن شیر علی خان به جانب اوراتپه

بار دیگر چون چندی بر این بگذشت، در آن وقت از خان اورگنج خبر رسید که > ما لشکر به جانب بخارا کشیده تا یک فرسخ زمین بخارا را به یغما بردیم. شما نیز وقت را از دست نداده، سواری نمایید. < چون این خبر به شیر علی خان رسید، بلا توقف فرزندان ارجمندش عبد الرحمن بیک را با لشکر فرغانه به جانب اوراتپه نامزد فرمود و او از پدر رخصت اجازت {۶۸۳ر} یافته، در غایت تعجیل به ولایت خجند رسید. در آن وقت پسر ابراهیم بی را برادرم عیسی بی از قلعه خواص در کمال خواصی بیکار کرده بود. آن میر بچه از امارت پناهی کنده، در ولایت خجند رفته، به پسری شیر علی خان پیوست و رفتن آن میر بچه را عبد رحمن بیک فوز عظیم دانسته، متوجه قلعه خواص شد، چنانچه گفته اند،

### نظم

کسی کو ز همت بر افراخت تیغ	سر تیغ را بگذراند ز میغ
ز غیرت به دست آیدت نام ننگ	ز غیرت مراد خود آری به جنگ
چنین گفت آن مرد بیدار بخت	که از غیرت آید به کف تاج تخت

بعد از یک روز آمده، آن قلعه را چون نگین انگشتی در میان گرفته، به محاصره پرداخت. در آن وقت حکومت آن قلعه را به عبد الغفار بیک ابن برادرم محمد رحیم دیوان بیگی گذاشته بود. آن میر بچه طریق قلعه داری را به جای آورده، سعی {و} کوشش نمود. به جای نرسید. لا علاج عهد امان کرده، متوجه اوراتپه شد و چون تسخیر آن قلعه به لشکر

شتافت، {۶۸۲ر} چنانچه گفته اند،

### نظم

حکمی که آن ز بارگه کبریا بود      بالاتر از مقوله چون {و} چرا بود  
حکمی که صادر است ز دیوان لم یزل      خود زهره ز مخالفت کی روا بود

و این خبر را شیر علی خان و عبد الرحمان بیک شنیده، به طور خود خاطر خود را از شرایشان جمع نمود. فارغ البال به حکومت ممالک فرغانه قیام نمودند. ندانستند که در اندک فرصت وخامت این کار با شروع گریبان گیر ایشان خواهد شد.

### ذکر لشکر کشیدن امرای خوقند به جانب اوراتپه

چون شیر علی خان و پسرش از کار میر بچه ها فارغ شدند، خواستند که به جانب اوراتپه سواری نمایند. اما در آن وقت حکومت ولایت خجند به امارت پناهی عبد الرحمان بیک ابن خدایار والنعمی تعلق داشت و امارت ممالک توره قورغان و نمگان به + محمد نظر بیک ولد ایریس قلی بی قرار گرفته بود. از ایشان متوهم شده، امارت پناهان را به طریق تلبیس به ولایت خوقند طلب نموده، از مسند حکومت بر خاک مذلت انداخت و ایشان به چندین خوندل عمر به سر میبردند. چون شیر علی خان نیز از کار امارت پناهان فراغت یافت، تمام امرای ممالک فرغانه را به جانب اوراتپه نامزد فرمود. امرا از شیر علی خان اجازت یافته، متوجه مقصد شدند، چنانچه گفته اند،

{۶۸۲پ} قطعه

شاهد ملک است در عقد کسی کز روی جهد

دست در آغوش با شمشیر خنجر میکند

آنکه او پا بر سر ناز و تنعم می نهد

کردگارش در جهان سردار {و} سرور میکند



القاسم بیک در آن وقت رسید، بی تأمل دستگیر نماید. چون شادی این خبر را شنید، از شادی به پراهن نگنجیده، منتظر صید آن مرغ نوآموز بنشست، به مضمون آن که،

### بیت

هر خار که سر برزند از گلشن ملک      فی الحال شرش به تیغ باید برداشت

زبدۀ کلام آن که چون ابو القاسم بیک با شکوه تمام به ولایت مرغیلان رسید، شادی طریق مهمانداری را باید {و} شاید به جای آورد. بعد از انقضای مجلس آن میر بچه های ساده لوح را دستگیر نموده، تمام لشکر ایشان را به تاراج برد و ابو القاسم بیک از کار فلک حقه باز واقف گشته، دانست که به سری آن بخت برگشته چه شعبده انگیخت. دل با نابودنی نهاده، منتظر مرگ نشست، {۶۸۱پ} چنانچه به این طریقه میگفت،

### بیت

تقدیر چو سابق است تعلیم چه سود      جز بنده گی رضا و تسلیم چه سود

و چون شادی از نغما فارغ گشت، آن دو میر بچه را معه برادرش به جانب خوقند فرستاد. این خبر به شیر علی خان رسید، بلا توقف کس فرستاده، آن مظلومان را به جای تعیین نمود و از این مقدمه تمام حرم و دختر شیر علی خان واقف گشته، روی کنان و موی کنان به پیش شوهری خود آمده، او نیز مرتکب<sup>۱</sup> هلاک خود بنشست. روز دیگر شیر علی خان تمام توابعات ایشان را مع کوچش جلای وطن ساخته، در میان قرغیز فرستاد و چون آن جماعۀ بی سر و پا قطع مراحل نموده، در موضع تلاس رسیده، آرام آرام گرفتند. اما پسر شیر علی خان حیات ایشان را سبب ممات خود میپنداشت، از این جهت دو جلاد خوکوار که یاد از شمر ذی الجوشن میداد، نامزد آن امر شنیع نمود و آن دو بیباک در کمال تعجیل قطع راه نموده، چون بلای ناگهان رسیده اند و میر بچه های فلک زده را که از جلاوت جوانی قدری ندیده و از شربت حکومت چاشنی نه چشیده بود که تندباد اجل کل حیات ایشان را پژمرده و بی طراوت ساخت و از این غمخوانه هستی به چندین داغ حسرت دامن بر چید و به خلد برین

عاهت معهود خود عمل نموده، فتنه جویی را شعار خود ساخته اند، شاید که به این وسیله مقرب خانی شوند، {۶۸۰پ} از این غافل که در سهل روز از بیخ بنیادشان کنده میشوند، به حکم آن که گفته اند،

### بیت

حسد ریخی است سزنده کزو آتش به جان افتد  
چه جای جان که از حسّاد آتش در جهان افتد

بالآخر از سلسله جنبان این امر شنیع به شیر علی خان گرننگ چنان معقول کردند که جناب خان از روی صیلهٔ رحم میر بچه ها را از دیار غربت آورده، فرزند خود ساخته، ولایت اندجان را به آنها تفویض نمودند. حالا شنیده میشود که آن میر بچه ها از جادهٔ فرزندى انحراف نموده، تمنای حکومت خوقند دارد. اگر از روی حکمت پیش دستی نموده، علاج این واقعه نسازند، بعد از وقوع حادثه پشیمانی سود نخواهد کرد. از آن جا که شیر علی خان بیچاره در میان قرغیز تربیت یافته بود، در عمر خود این نوع ماجرا هرگز ندیده و نشنیده بود. به مجرد شنیدن امر عجیب وهم در طبیعت او مستولی شده، گفت، <هر چه صلاح بیند، شما مختارید.> آن فتنه جویان دیدند که تدبیر ایشان موافق تقدیر خواهد افتاد. در تدارک آن کار شدند، چنانچه گفته اند،

### بیت

حالا چو بکش چو میتوان کشت آتش چو بلند شد جهان بسوخت

در آن وقت خبر رسید که امیر نصر الله به جانب اورگنج سواری نموده است. {۶۸۱ر} ولایت اوراتپه و جیزخ خالی است. این خبر را شیر علی خان شنیده، سواری را بهانه نموده، به ابو القاسم بیک در غایت شفقت خط نوشت که فرزند ارجمندش به رسیدن مکتوب مع سپاهی خود سواری نموده، آمده، سپاهی خوقند را گرفته، امیر لشکر گشته، تا ولایت ثمرقند تاخت نموده، مراجعت فرمایند. چون این پیام به ابو القاسم بیک رسید، با دبدبهٔ بسیار متوجه خوقند گشت. در آن وقت شیر علی خان حکومت ولایت مرغیلان را به شادی مینگ باشی ابن شاهی پروانچی تفویض نموده بود. ضمناً به او نوشت که هر آینه ابو

## بیت

جهان تا بگرداند انگشتی جهانرا دیگر گون شود داوری

مقدمه خوقند بر پا شد. باز مکرر دولت به خاندان مینگیه قرار گرفت. ذکر این واقعه در بالا ثبت یافته است.

خلص کلام آن که شیر علی خان مادر آن دو میر بچه را یسیر خود گفته، در عقد خود در آورد. در کمال تعجیل پی در پی ضمناً در بخارا به آن دو میر بچه کس فرستادن آغاز کرد و در شهر سبز به فقیر نیز مکتوبها نوشته، مضمون آن که نوعی ساخته، آن دو فرزند ارجمند مرا به دست آرید. در آن وقت بی سعی {و} کوشش به آنها امیر نصر الله رخصت اجازت داد که به وطن خود روند و این دو میر بچه از امیر نصر الله مرخص {۶۸۰} شده، در کمال تعجیل قطع مراحل نموده، در ولایت خجند وارد گردیدند. چون این خبر بهجت اثر را شیر علی خان شنیده، از شادی به پراهن نمی گنجید. بلا توقف تمام امراء خوقند را به استقبال ایشان نامزد فرمود. امراء به خدمت آن میر بچه ها رسیده، طریق ملازمت را باید {و} شاید مرعی داشته، به چندین عزت {و} حرمت به ولایت خوقند رسانیدند و شیر علی خان آنها را به کنار عاطفت خود کشیده، شفقت های پدرانه و مرحمت های پادشاهانه در حق آن میر بچه ها آورد و دختر خود را در عقد ابو القاسم بیک در آورده، حکومت ولایت اندجان را به او تفویض نمود و همه خاص از کار شیر علی خان تحسین و آفرین نموده، «مأشا الله کان» گفتند. چون ابو القاسم بیک مع برادرش در آن ولایت رسیده، بر سریر امارت نشسته، حکم را میکردند و میگفتند.

## نظم

او حاکم است ما همه محکوم حکم او ما را چه اعتبار بود حکم حکم روا است

و چون چندی از این بگذشت، چندی از فتنه جویان که از خانان ماضی خود را به همچنین وقت نگاه داشته، با عبد الرحمن بیک همدستان شده بودند<sup>۱</sup>، چون شنید که باز

{۶۷۹ر} خانه خود رسیده، نزول اجلال فرمود و از رنج راه برآسوده، به عیش و عشرت خود مشغول گشت.

ذکر به درجه شهادت رسانیدن شیر علی خان هر دو برادر زاده خود را از بهر دنیای دون چون شیر علی خان خاطر خود را از عالیجاهی اتالیق خان فارغ بال ساخت، خواست که ابو القاسم طغای بیک و محمد صادق بیک را طلب نموده، به کنف حمایت خود جای داده، به تربیت ایشان پردازد و طریق صیله رحم را به جای آرد. از این غافل که دست به خون ایشان می‌شویید. مجمل این اجمال آن که در آن وقت محمد علی خان ماده که لگد کوب حوادث گشته، بر جا مانده بود، این دو میرزاده به ولایت خوقند در موضع قی نر عمر به سر می‌بردند. محمد علی خان ماده از کمال پریشان حالی از ایشان نیز متوهم شده اند و میر بچه بیچاره را به جانب قرانگین بدرقه ساخت و ایشان در ولایت کوهستان روزگار می‌گذرانیدند، چنانچه گفته اند،

#### قطعه

کلید در مقصود صبر است      در مقصد آن کس که بگشود صبر است  
چه خار ای کوه چه دیای گردون      لباسی که هرگز نفرسود صبر است

چون امیر نصر الله خوقند را مسخر ساخت، به جانب بخارا مراجعت نمود. خواست که جماعه پادشاهزاده های خوقند را از بیخ بنیادش بر کند تا که {۶۷۹پ} از ایشان آثاری باقی نماند و حکومت ممالک فرغانه بل دشت قیچاق را بطناً بعد بطن تصرف نماید. از این غافل که توتی الملک من تشاو تنزع الملک ممن تشاء تعز من تشأ و تزل من تشأ بیدک الخیر، از این جهت به حاکمان قرانگین پیغام فرستاده، دو میر بچه را خواست. آنها به رسیدن خط امیر نصر الله بی حمیتی را شعار خود ساخته، ننگ ناموس را منظور نکرده، بالرئس و العین گفته اند و میر بچه را محبوس کرده، به خدمت امیر نصر الله فرستادند. در آن وقت هنوز نوبت به ایشان نرسیده بود که مسبب الاسباب کاری ساخت، به حکم آن که،

شکر که این نسخه به عنوان رسید      پیشتر از مرگ به پایان رسید<sup>۱</sup>

در آن وقت آن دو جلاد بیرحم چون بلای<sup>۱</sup> ناگهان بر سر آن امارت پناهی مظلوم رسیده، در سنه ۱۲۵۹ غره ماه ربیع الاول روز جمعه بود که سر نازنینش از تن پاکش به چندین خاری پاک ساخته، به درجه شهادت رسانیدند. مدت عمرش چهل و یک سال بود، به حکم آن که<sup>۲</sup>

### مثنوی<sup>۳</sup>

کجا دید قصاب رنج شبان      تبرزن چه داند غم باغبان  
{۶۷۸پ} درختی که عمری بر آید بلند      توان در یکی لحظه از بیخ کند  
توان مرد صد کشتن اندر نبرد      یکی زنده کن تا بخوانند مرد

نکته سنجان بلاغت را پوشیده (۷۴۲) نماند که این کتاب منتخب التواریخ <۶۶۹ر> که تصنیف سیادت [و نجابت]<sup>۴</sup> پناهی<sup>۵</sup> حاجی الحرمین الشریفین +<sup>۶</sup> محمد حکیم خان +<sup>۷</sup> است. [سنه ۱۲۵۹ بیست هشتم ماه جماد {ی} الاول روز یک شنبه بود، از دست فقیر الحقیر قاری امین جان در ولایت شهر سبز به اتمام رسید.]<sup>۸</sup> [امید از ذو العقلا آن که اگر سهو و خطای رفته باشد، به قلم عفو به اصلاح او کوشند و الله اعلم بالصواب.

تمت تمت تمت

تم تم تم

۱ بلایی [ت]

۲ گفته اند [ت]

۳ نظم [د]

۴ × [د]

۵ پناه [د]

۶ سید [ت]

۷ ولد نتیجه دود مان عظام و خاندان ذو الاحترام سید معصوم خان [ت]

۸ سنه ۱۲۵۹ پنج ماه ربیع الثانی روز جمعه بود، در ولایت کتاب از دست فقیر الحقیر داملا محمد امین به اتمام رسید. [ت]

علی ید عبد الضعیف الراجی الی رحمت الله المبین بابا خواجه ابن میر عبید الله ابن میر محمد امین تمام یافت. این نسخه در تاریخ سنه ۱۲۶۰ فی شهر محرم الحرام. [د]

خان <۶۶۸ر> در هبوط افتاده بود، از آن زمین مضبوط و از آن کوشش بیهوده ثمری نه بخشید، به حکم آن که گفته اند.

### مصراع

تقدیر چو سابق است تدبیر چه سود

القصه. آمدن اتالیق خان بر تمام ولایت شایع شد و شیر علی خان این مژده را شنید<sup>۱</sup>، در گرداب عمیق فرو رفت. نمیدانست که به آن امارت پناهی به چه کیفیت سلوک دارد. در آن وقت بود که چندی از فتنه جویان که از امیران ماضی از بهر تخم خود را نگاه داشته بودند، [خود را به خدمت شیر علی خان رسانیده، بر قتل اتالیق خان مبالغه نمودند.]<sup>۲</sup> از بس که طبع و هوای این ولایت این که هر کس ندیم پادشاه شود، بر وی لازم است که<sup>۳</sup> سلسله جنبان فتنه جویی<sup>۴</sup> کنند<sup>۵</sup> و این نوع {۶۷۸ر} کار نا مشروع را به خود واجب میدانند و عین فخر و مباهات پندارند. بنابر آن به سنت ندیمان گذشته عمل نموده، از چندین وجه در آمد کرده، به شیر علی خان معقول گردند. شیر علی خان چار و<sup>۶</sup> ناچار به<sup>۷</sup> سخن آن بیباکان عمل نموده، دو جلاد بیرحم را به قتل اتالیق خان مأمور ساخت. آن بیرحمان تشنه به خون در کمال سرعت راه <۶۶۸پ> می پیمودند. در آن حین اتالیق خان خون کشیده به امید وطن به اتفاق سر کرده های خوقندی راه طی میکرد و نمیدانست که<sup>۸</sup> اجل گریبان او را محکم گرفته، به سوی خاک وا میکشد.

القصه. در موضع یی پن که تخمینا چهار فرسخ است، به ولایت خوقند، وارد گردید<sup>۹</sup>.

۱ شنیده [ت]

۲ [ت]

۳ × [ت]

۴ جوی [ت] [د]

۵ کند [ت]

۶ × [ت]

۷ × [ت] [د]

۸ × [د]

۹ گردیدند [ت]

خوقندی بر آورده، ایشان را از رفتن خود امیدوار گردانید. به شرط آن که از هر وجه چیزی لابدی او را سرشار کنند. سر کرده های خوقندی {۶۷۷ر} این نوید را شنیده، در کمال خورسندی<sup>۱</sup> از مدعای اتالیق خان چندین درجه زیاد<sup>۲</sup> از هر جنس اقمشه و از هر الوان خوراکی فرستادند. اتالیق خان به فکر خام دانست که تدبیرش موافق طبعش<sup>۳</sup> افتاد. از این غافل که گفته اند.

### بیت

به نیکی نیک و بد را بد شمار است      به پاداش عمل گیتی به کار است

بلا اهمال به انداختن تیر و تفنگ پرداخت <۶۶۷پ> و مکرر طبل مخالفت نواخت و از این کار امارت پناه<sup>۴</sup> سر کرده های خوقند واقف گشته، همه انگشت تحیر به دندان گزیده، در بحر تفکر فرو رفتند. دانستند که این فلک فتنه جو چه منصوبه نو در عالم امکان باخت. بالاخر صورت واقعه را به خدمت شیر علی خان نوشتند. چون شیر علی خان این خبر وحشت اثر را شنیده، چون موی در آتش می پیچید و عرق غضب در حرکت آمد. در غایت قهر لشکر بسیار به صوب اتالیق خان امر فرمود. چون لشکریان خوقندی از شیر علی خان این جسارت را مطالعه فرمودند، رو به آن صوب آوردند. در کمال کوشش آن موضع را فتح نموده، اتالیق خان را به دست آورده، {۶۷۷پ} به مباحثات بسیار به جانب خوقند مراجعت فرمودند. آن موضعی بود، در غایت<sup>۵</sup> استحکام. پلی داشت، در کمال موزونی. اگر آن پل را از سر دریا بردارند، پشه پرزند، بالش میسوخت و یک تفنگ دار در آن جا باشد، اگر تمام لشکریان ما وراء النهر کمر کین در میان بندند، مسخر نمودن آن جا از عقل دور و از خرد بعید بود. از آن جا که ستاره دولت شیر علی خان طلوع نمود (۷۴۱) و کوکب بخت اتالیق

۱۳ آشنای [د]

۱ خورسندی [ت] [د]

۲ زیاده [د]

۳ تقدیر [د]

۴ پناهی [د]

۵ کمال [د]



نصر الله کنده، بر<sup>۱</sup> شیر علی خان پیوست. در حق آن امارت پناهی مهربانیهای پادشاهانه و شفقت های بی اندازه نمود. +<sup>۲</sup> حکومت ولایت خجند را به خود او بخشید. بعد از یک ماه آن امارت پناه را از آن ولایت عزل نموده، حکومت ولایت {۶۷۶پ} خجند را به عبد الرحمن دیوان بیگی تفویض نمود و آن امارت پناهی بر مسند امارت نشسته<sup>۳</sup>، به درستی<sup>۴</sup> ولایت پرداخت. +<sup>۵</sup>

### ذکر شهادت +<sup>۶</sup> اتالیق خان

در آن وقت که اتالیق خان در موضع بیش کوفروک میان قیرغیزان کوس امارت نواخت. شیر علی خان بارها از روی نصیحت ایلچیان دانا را در میان گذاشته، به وعده و<sup>۷</sup> پیمان به وطن مألوف تکلیف نمود. امارت پناه مذکور به سخن شیر علی خان عمل ناکرده<sup>۸</sup>، تارفت، اظهار دشمنی نمود. <۶۶۷ر> شیر علی خان دید که پند به جایی<sup>۹</sup> نمیرسد. لا علاج لشکر بسیار بر سر اتالیق خان فرستاد. در آن وقت راه آمد شدی<sup>۱۰</sup> آن موضع را شیر علی خان کس فرموده، مسدود کرده بود (۷۴۰) و مردمان +<sup>۱۱</sup> اتالیق خان از بابت خوراک بسیار به تنگ آمده بودند، اتالیق خان دید که کار از دست میرود. بیچاره از روی کم تجربه گی به طور خود تدبیری<sup>۱۲</sup> اندیشید. حیلۀ او این بود که ایلچی در کمال آشنایی<sup>۱۳</sup> در پیش لشکریان

- |    |   |
|----|---|
| ۱  | به [د]  |
| ۲  | و [ت] [د]   |
| ۳  | بنشسته [د]  |
| ۴  | درست [ت]  |
| ۵  | چون شیر علی خان خاطر خود را از کار ملک جمع ساخت. به داد دهش پرداخت. [د] |
| ۶  | یافتن [د]   |
| ۷  | [ت]   |
| ۸  | نکرده [ت]   |
| ۹  | جای [د]   |
| ۱۰ | شد [د]  |
| ۱۱ | ابراهیم [س]   |
| ۱۲ | تدبیر [ت]   |

قطعه<sup>۱</sup>

خضم ترا زمانه به تعجیل میکشد از عرصه وجود سوی خیبر عدم

{۶۷۶ر} با چون تویی هر آن که دمی<sup>۲</sup> دشمنی<sup>۳</sup> زند مشکل اگر امان دهدش مرگ نیم<sup>۴</sup> دم (۷۳۹) چون امرا محمد شریف را مع فرزندان<sup>۵</sup>ش و برادرانش به خدمت شیر علی خان فرستادند و خود ساکن آن ولایت شدند و این خبر بهجت اثر را شیر علی خان شنید، از شادی به پراهن نمیگنجید و این فتح بزرگ را از جمله عطاها<sup>۶</sup>ی غیبی میشمرد و محمد شریف را غضب نموده، در حبس انداخته، به بدترین عقوبت قین میکرد<sup>۷</sup>. تا حتی گویند، [مرغ وار]<sup>۸</sup>+<sup>۹</sup> بهر او قفس آهنین<sup>۱۰</sup> ساخته بودند، در آن جا بود. عاقبت فقرای <۶۶۶پ> خوقند از شیر علی خان طلب نموده، به چندین خاری بدن او را پاره پاره کرده کشتند، چنانچه<sup>۱۱</sup>

## بیت

چون ز دشمن کسی فراغت یافت جانب خوشدلی عنان بر تافت

در آن وقت خدایار بی این مقدمه را<sup>۱۲</sup> مشاهده نموده<sup>۱۳</sup>، از روی دور اندیشی از امیر

۱۶ گفته اند [ت][د]

۱ بیت [د]

۲ دم [د]

۳ دشمن [د]

۴ هم [د]

۵ میکردند [ت][د]

۶ مردمان [د]

۷ از [د]

۸ آهن [د]

۹ × [د]

۱۰ × [ت]

۱۱ کرد [د]

دریای آتش انداختند.<sup>۱</sup> +<sup>۲</sup>

### شعر<sup>۳</sup>

درفش درخشند<sup>۴</sup> بالا گرفت      سر نیزه اوج ثریا گرفت  
یلان کماندار بهرام جنگ      گشادند از دست تیر و خدنگ  
چنان گشت سیلاب<sup>۵</sup> یاران تیر      که گفتی کمان گشت ابر مطیر

جوانان خوقندی چنان مردانگی به ظهور آوردند که ملک در بام فلک زبان به<sup>۶</sup> بارک الله گشادند. بعد از محاربات بسیار نسیم ظفر از جانب لشکریان فرغانه وزید و سپاه تاشکندی رو به فرار آوردند.<sup>۷</sup> گدای <۶۶۶ر> بای بی<sup>۸</sup> و عبد رحمان<sup>۹</sup> بی<sup>۱۰</sup> میستن با ده کس به<sup>۱۱</sup> چندین<sup>۱۲</sup> عذاب و عقوبت از آن مهلکه نجات یافته، از دریای سیحون عبور نموده، متوجه بخارا شدند و محمد شریف را در<sup>۱۳</sup> قلعه تاشکند محاصره کرده، بلا توقف دستگیر نمودند و فتح ولایت به آسانی روی نمود. به آن گیر و دار تمامی<sup>۱۴</sup> دشت قیچاق [یک قلم]<sup>۱۵</sup> در تحت تصرف شیر علی خان در آمد، چنانچه +<sup>۱۶</sup>

۱ به هم در آمیختند. چنانچه گفته اند [د]

۲ چنانچه گفته اند [ت]

۳ مثنوی [د]

۴ درخشنده [ت][د]

۵ بسیار [د]

۶ × [د]

۷ آورد [د]

۸ × [ت][د]

۹ الرحمن [ت]

۱۰ × [ت][د]

۱۱ با [ت]

۱۲ چندین [د]

۱۳ از [د]

۱۴ تمام [د]

۱۵ × [د]

تفنگ گشادند<sup>۱</sup>. چون امرای خوقند دیدند، آن مبارزت پناه [کورنمکی نموده]<sup>۲</sup>، لباس بی آزر می در بر کرد. دیدند که کار نمیشود. لا علاج به محاصره و محاربه مشغول شدند، روز دیگر تمام مبارزان خوقند اتفاق نموده، به یک حمله داخل<sup>۳</sup> قلعه شدند و گدای بای از سه جای<sup>۴</sup> زخم شمشیر خورده، به صد<sup>۵</sup> محنت و<sup>۶</sup> مشقت نجات یافت و جانب تاشکند (۷۳۸) شتافت. در آن وقت به مدد ایشان عبد الرحمان میستن با لشکر انبوه از بخارا آمده، ملحق شد. چون لشکریان فرغانه بعد از فتح قلعه<sup>۷</sup> بوکه با چندین شأن شوکت متوجه ولایت تاشکند شده، در چُل<sup>۸</sup> گاه آهنگران وارد گردیدند و از آن جا کوچیده، قلعه<sup>۹</sup> توی تپه را در تحت تصرف خود در آوردند. روز <۶۶۵پ> دیگر از آن جا سواری نموده، با چندین تجمل جوانغار<sup>۱۰</sup> و برانغار<sup>۱۱</sup> خود را به سرداریان کارکن نامزد فرموده، به ترتیب چنگیز خانی و به<sup>۱۲</sup> نسق صاحب قرانی متوجه ولایت تاشکند شدند و محمد شریف پروانچی<sup>۱۳</sup> و گدای بای بی<sup>۱۴</sup> و عبد الرحمن بی<sup>۱۵</sup> میستن این خبر را شنیده، ایشان نیز به لشکر خود استقبال نموده، منتظر محاربه شدند. در آن حین هر دو دریای لشکر +<sup>۱۶</sup> ملاقی شده، مبارزان میدان دلیران کارزار جنگی سختی پیش گرفته، جان خود را {۶۷۵پ} سبیل عار ناموس ساخته، خود را به

۱ گشاد [د]

۲ عمرها استخوان او به نمک خوقند سخت شده بود [د]

۳ داخل [ت]

۴ جا [ت]

۵ چندین [د]

۶ × [ت]

۷ چول [ت][د]

۸ جوالغار [ت][د]

۹ یوالغار [ت][د]

۱۰ × [د]

۱۱ × [ت][د]

۱۲ × [ت][د]

۱۳ × [ت][د]

۱۴ به هم [د]

دریای<sup>۱</sup> سیحون عبور نموده، در موضع قمیش<sup>۲\*</sup> قورغان وارد گردیدند<sup>۳</sup>. روز<sup>۴</sup> دیگر از آن جا کوچیده، از کوه دوان گذشته، به تابعات<sup>۵</sup> قورمه داخل شدند. در آن وقت در قلعه<sup>۶</sup> بوکه که در زمان پیشین بزرگترین قلعه های قورمه بود، گدای بای در آن جا می بود و در تاشکند محمد شریف اتالیق<sup>۷</sup> این هر دو مبارزان از وقت امیر عالم خان استخوان ایشان به نمک خوقندی سخت گشته<sup>۸</sup> بود و این نشو<sup>۹</sup> نما از دولت آن مرز بوم حاصل شده بود. حالا صاحبان خود را ندانسته<sup>۱۰</sup>، طرح بیوفایی افکندند. به حکم آن که گفته اند.

<۶۶۵ ر بیت<sup>۱۰</sup>

اگر بیضه زاغ ظلمت سرشت	نهی زیر طاوس باغ بهشت
به هنگام آن بیضه پروردنش <sup>۱۱</sup>	ز انجیر جنت دهی ارزنش
دهی آبش از چشمه سلسبیل	در آن بیضه گر پرزند جبرئیل
شود عاقبت بیضه زاغ زاغ	کشد رنج بیهوده طاوس باغ

چون لشکریان فرغانه بر<sup>۱۲</sup> سر آن قلعه رفتند<sup>۱۳</sup>، +<sup>۱۴</sup> دست به انداختن {۶۷۵ ر} تیر و

۱ دریایی [د]

۲ [د]، قمیش [س] [ت]

۳ گردید [د]

۴ روزی [د]

۵ توابعات [د]

۶ × [د]

۷ شده [د]

۸ نشأ [ت] [د]

۹ نادانسته [ت]

۱۰ × [ت] [د]

۱۱ پروردش [د]

۱۲ به [ت]

۱۳ رفتن [ت]

۱۴ او [ت] [د]

گردان شده، آمده است. فرزند خود را فرمود<sup>۱</sup>، استقبال نموده، به عزت تمام در شهر در آورد و شیر علی خان نیز پیش آمده، در کمال شفقت و مرحمت در بر کشید {۶۷۴} و قدم آن امارت پناه را به خود فوز عظیم دانست و او را بسیار گرامی داشت و جای مناسب (۷۳۷) تعیین نمود<sup>۲</sup>. به مهمانداری مبالغه فرمود<sup>۳</sup> و در آن زمان خبر رسید که امیر نصر الله حکومت خجند را به پسر بیک مراد بی ولد ارشد<sup>۴</sup> خدایار بی والنعمی به خدایار بیک تفویض نموده است و در ثمرقند رفته، از ولایت شهر سبز پسر بهادر بیک ولد خدایار بی والنعمی برادر امیر عیسی بیک را طلب نموده، حکومت اوراتپه را به او تفویض نموده است. بعده<sup>۵</sup> خبر رسید که پسر ارشد امیر عالم خان <۶۶۴پ> از ولایت شهر سبز به امر<sup>۶</sup> امیر نصر الله آمده، در بالای خجند در میان کوهستان به پیش جماعه<sup>۷</sup> اباحت که یک اوروق قیرغیز است، وارد گردیده، کوس حکومت مینوازند<sup>۸</sup>.

[ذکر فتح نمودن امرای خوقندی ولایت تاشکند +<sup>۹</sup> به لطف حضرت<sup>۱۰</sup> ایزد متعال<sup>۱۱</sup>]

چون دولت شیر علی خان روی در ترقی آورد، مع فرزند کوچکش عبد رحمان دیوان بیگی را امیر لشکر ساخته، تمام لشکر<sup>۱۲</sup> فرغانه را به صوب ولایت تاشکند حکم فرمود. چون امرای خوقند {۶۷۴پ} از پیش شیر علی خان رخصت اجازت یافته، متوجه مقصد شدند، از

- ۱ × [د]
- ۲ فرمود و [د]
- ۳ نمود [د]
- ۴ × [د]
- ۵ بعد [ت] [د]
- ۶ × [د]
- ۷ مینوازد [ت]
- ۸ را [ت]
- ۹ × [ت]
- ۱۰ × [د]
- ۱۱ لشکریان [ت] [د]

بود. بعد از محاربات<sup>۱</sup> بسیار کوکب طالع از جانب لشکریان فرغانه طلوع نمود و ستاره لشکریان منقیت در هبوط افتاد. در غایت سراسیمه گی به لشکرگاه خود مراجعت فرمودند. در آن وقت مدت محاصره به چهل روز کشیده بود. چون امیر نصر الله دید که غنچه مدعا به ناخن هیچ تدبیر گشاده نمیشود و ندانسته بود که در عصر محمد علی خان ماده<sup>۲</sup> اگر مورچه ها اتفاق میکردند، ولایت خوقند را هزار بار فتح میکردند. {۶۷۳پ} چه جای آن که پادشاه بخارا در حرکت آید و آن دم یقین او شد که ولایت فرغانه را به ضرب شمشیر گرفتن از قوت بشری بیرون است.<sup>۳</sup> لا علاج گردن خار خار نیم از شب بود که از آن موضع به جانب مرغینان کوچ کرده، به دشت خزیان متوجه مقصد گشت. چنانکه گفته است.

### بیت

صیاد نه هر بار شکاری بو برد [روزی افتد که]<sup>۴</sup> + پلنگش بدرد<sup>۵</sup>

و امرای خوقند همه<sup>۶</sup> که با او همراه بودند، همه کنده، به وطن خود پیوستند. چون <۶۶۴ر> شیر علی خان خاطر خود را از شر دشمن جمع کرد و به داد و<sup>۷</sup> دهش مشغول شد، در آن حین خبر رسید که مردمان قورمه بلوا کرده، قلعه کروچی را فتح نموده اند و حکومت آن ولایت را به پسر یونس علی<sup>۸</sup> خواجه حاکم تاشکند به هاشم خواجه تفویض [نموده اند و]<sup>۹</sup> در آن وقت نیز خبر آمد که عبد الرحمان<sup>۱۰</sup> بیک ولد خدایار بی والنعمی از امیر نصر الله روی

۱ × [د]

۲ × [ت] [د]

۳ بوده است [ت]

۴ باشد که یکی روز [د]

۵ بیم [ت]

۶ × [ت]

۷ × [ت]

۸ × [د]

۹ نمودند [ت]، نمود و [د]

۱۰ رحمن [ت]

وقت بود، خبر رسید که امیر نصر الله در موضع کان بادام نزول فرمود <۶۶۳ر> و در حق آن بلده چنان ظلم را پیشه خود ساختند که در عصر هیچ پادشاهی به وقوع نآمده است و سیصد<sup>۱</sup> و پنجاه کس از لشکر فرغانه سر برید.

### مصراع

سر بریدن پیش این جلاد چون گل چیدن<sup>۲</sup> است

و این خبر را شیر علی خان شنیده، منقیتانی که در حبس بودند، بسیاری ایشان را به قتل آورد. بعد از دو روز امیر نصر الله در موضع قرا تپه که حالا به موی مبارک<sup>۳</sup> + اشتهار دارد، وارد گردید. همان روز در میان لشکریان امیر نصر الله و شیر علی خان چنان<sup>۴</sup> جنگی سخت<sup>۵</sup> به وقوع آمد که از کشته ها پشته بر داشتند. بالاخر لشکریان {۶۷۳ر} فرغانه غالب آمده، بسیاری سربازان را به قتل رسانیدند<sup>۶</sup>. بعده<sup>۷</sup> از جانب چهار باغ امیر عمر خان که به شاه چمن اشتهار دارد، +<sup>۸</sup> نیز محاربه بزرگ در وقوع آمد. آن جا نیز سپاهیان مردم خوقند غلبه نمودند. بعد از چند روز دیگر از جانب شرقی خوقند دیهه ای که ملک فقیر است، به توقی تپه شهرت دارد، چنان جنگ سلطانی در میان لشکر منقیت و مینگ به ظهور آمد که در عصر هیچ پادشاهی کسی (۷۳۶) ندیده و نشنیده بود <۶۶۳پ> و در کوچه ها از خون بهادران کینه خواه جوی خون جریان شد و مرده لشکریان منقیت ته به ته به<sup>۹</sup> کوچه ها افتاده

۱۳ نمودند [ت]

۱ سه صد [ت][د]

۲ چند [د]

۳ دروغ [ت][د]

۴ × [د]

۵ سختی [ت]

۶ رسانید [ت]

۷ بعد [ت]

۸ و [د]

۹ در [د]



چون لشکریان فرغانه به جانب خوقند مراجعت نمودند، گویند<sup>۱</sup>، در آن وقت محمد نظر بیک و عیسی دادخواه با لشکر انبوه از دریای سیحون عبور نموده، در ولایت غوروم سرای وارد گردیدند. روز دیگر هر دو لشکر کینه خواه در دشت اش به هم ملاقی شده، به یک دیگر در آویختند. بعد از جنگ بسیار باد نصرت از جانب محمد شریف و گدای بای وزیدن آغاز کرد و لشکرایان محمد نظر بیک < ۶۶۲ پ > و عیسی دادخواه رو به فرار آوردند و محمد شریف و گدای بای تعاقب نموده، <sup>۲</sup> ولایت سر<sup>۳</sup> بویی را فرو گرفتند<sup>۴</sup> و پسر<sup>۵</sup> محمد شریف قلعه توره قورغان را در تحت تصرف خود در آورد و محمد نظر بیک با ده کس (۷۳۵) <sup>۶</sup> در غایت تعجیل از ورطه بلا<sup>۷</sup> به چندین محمت و مشقت نجات یافته، خود را در میان کوهستان گرفت و محمد شریف پروانچی و گدای بای پروانچی با چندین مباحات از دریای سر<sup>۸</sup> عبور نموده، به امیر نصر الله پیوستند.

[خلص کلام آن که]<sup>۹</sup> چون محمد نظر بیک در میان کوهستان رفت، { ۶۷۲ پ } تمامی قیرغیز را فراهم آورده، متوجه قلعه توره قورغان شد. بعد از یک شب و <sup>۱۰</sup> روز نیم از شب گذشته بود که آن قلعه را به یک حمله فتح نمود و پسر محمد شریف پروانچی را دستگیر نموده، به خدمت شیر علی خان فرستاد و روز<sup>۱۱</sup> دیگر خود سواری نموده، مکرر توابعات سیر<sup>۱۲</sup> بویی را فرو گرفت و از این خبر بهجت اثر شیر علی خان شنیده، شادیاها نمود<sup>۱۳</sup>. در آن

- ۱ × [د]
- ۲ تمام [ت] [د]
- ۳ سیر [د]
- ۴ گرفت [ت] [د]
- ۵ فرزند [د]
- ۶ با ده کس [د]
- ۷ بالا [د]
- ۸ سیر [د]
- ۹ × [د]
- ۱۰ × [ت]
- ۱۱ روزی [ت]
- ۱۲ سر [ت]

میکرد. در آن آوان خبر رسید که امیر نصر الله در ولایت اوراتپه وارد گردید. +<sup>۱</sup> روز دیگر خبر آمد که محمد شریف پروانچی و +<sup>۲</sup> با لشکر تاشکند بر لب دریای سیحون رسید. چون این خبر را شیر علی خان شنید، در بحر تفکر غوطه زدن گرفت و بعد از اندیشه بسیار محمد نظر بیک ابن ایریس قلی بیک و عیسی دادخواه را با لشکر بسیار به جانب چست و غوروم سرای فرستاد و فرزند ارجمندش عبد الرحمان بیک را با لشکر خوقند در موضع کان بادم [امر فرمود]<sup>۳</sup>. چون ایشان به کان بادم رسیدند، این خبر را سرداران لشکر <۶۶۲ر> منقیت<sup>۴</sup> شنیده، همه بالاتفاق<sup>۵</sup> در بالای کان بادم +<sup>۶</sup> هر دو دریای لشکر به هم در آویختند. بعد از محاربات بسیار نسیم ظفر از جانب لشکر فرغانه وزید و لشکر منقیت<sup>۷</sup> رو به فرار آوردند.<sup>۸</sup> +<sup>۹</sup> در آن حین بود که<sup>۱۰</sup> لشکر اورگوت که جماعه مینگ اند، در ما بین ایشان رسید<sup>۱۱</sup>، حایل افتاد و [سپاه منقیت]<sup>۱۲</sup> اسیران خود را خلاص کردند و این حال را خوقندیان مشاهده نموده، این بیت را میخواندند، [چنانچه گفته اند].<sup>۱۳</sup>

## بیت

{۶۷۲ر} هر که از دست دیگری نالد      سعدی از دست خویشتن فریاد

۱ و [ت]

۲ گدای بای پروانچی [ت][د]

۳ فرستاد [ت][د]

۴ منقیت [د]

۵ به اتفاق [د]

۶ رفته [د]

۷ منقیت [د]

۸ آورد [ت][د]

۹ و [ت]

۱۰ × [ت]

۱۱ رسیده [د]

۱۲ × [د]

۱۳ × [د]

[ذکر بر تخت نشستن شیر علی خان بر دار السلطنت خوقند]<sup>۱\*</sup>

چون شیر علی خان بر سریر جهانبنانی تکیه زد و دولت باز به خاندان مینگ<sup>۲</sup> قرار گرفت و تمام ممالک فرغانه را در تحت تصرف خود در آورد و از زیور معدلت خود [ملک را]<sup>۳</sup> بیاراست و دست عطا به کافه انام گشود<sup>۴</sup> و قریب<sup>۵</sup> سه هزار منقیت<sup>۶</sup> را دستگیر نمود و بسیاری<sup>۷</sup> او در همان گیر و دار به قتل رسید و<sup>۸</sup> در هر ولایتی که از سپاهی منقیت<sup>۹</sup> بود، مردم آن جا دستگیر [نموده، در همان موضع]<sup>۱۰</sup> به قتل رسانیدند. در آن ضمن محمود خواجه کورنمک را به چندین عقوبت <۶۶۱پ> پاره پاره کردند، [به حکم آن که]<sup>۱۱</sup>

## بیت

سگ که وفایش بر نان نیستش      بهتر از آن کس که وفا نیستش

[بعد از آن]<sup>۱۲</sup> بر تمام ولایت<sup>۱۳</sup> فرغانه حکم نمود که ولایت خوقند را قلعه ای در غایت ارتفاع (۷۳۴) بنا کنند. ایشان به مجرد شنیدن این امر خاص و<sup>۱۴</sup> عام جمع شده، به پانزده روز چنان حصن حصین {۶۷۱پ} بر پا<sup>۱۵</sup> ساختند که کنگره او به کاخ فلک هم سری

- 
- |    |                        |
|----|------------------------|
| ۱  | [ت][د]                 |
| ۲  | مینگیه [د]             |
| ۳  | × [د]                  |
| ۴  | بگشود [ت][د]           |
| ۵  | × [د]                  |
| ۶  | منغیت [د]              |
| ۷  | بسیار [ت]              |
| ۸  | × [د]                  |
| ۹  | منغیت [د]              |
| ۱۰ | نمودند و بسیاری را [د] |
| ۱۱ | × [د]                  |
| ۱۲ | و [د]                  |
| ۱۳ | ممالک [د]              |
| ۱۴ | × [ت]                  |
| ۱۵ | × [د]                  |

شد. چون این خبر را ابراهیم پروانچی متقیت<sup>۱</sup> شنیده<sup>۲</sup>، بلا اهمال قرار بر فرار اختیار نمود، [چنانچه گفته اند].<sup>۳</sup>

#### قطعه

<۶۶۱ر> ندهد هوشمند روشن رای      به فرومایه کارهای<sup>۴</sup> خطیر  
بوریا باف گر<sup>۵</sup> چه بافنده است      نبرندش به کارهای حریر

و<sup>۶</sup> امرا و فقرا استقبال نموده، + شیر علی خان را به شکوه پادشاهی در شهر در آورده، به جای آبا و اجداد او<sup>۷</sup> نشانیدند، چنانچه<sup>۹</sup>

#### بیت

{۶۷۱ر} کار دولت باشد آن نه سعی ما گر گاه گاه  
چون تو مطلوبی به سر وقت طلب کاران رسد

[وله ایضا].<sup>۱۰</sup>

از آن آمدی بر سر این سریر      که افتاده گان را شوی دستگیر

- 
- |    |                            |
|----|----------------------------|
| ۱  | × [د]                      |
| ۲  | شنید [د]                   |
| ۳  | × [د]                      |
| ۴  | کارهایی [ت]                |
| ۵  | اگر [د]                    |
| ۶  | × [د]                      |
| ۷  | عالی جاهی [ت]              |
| ۸  | خود [د]                    |
| ۹  | چنانچه گفته اند [ت]، × [د] |
| ۱۰ | × [د]                      |

مشاورت انداخت<sup>۱</sup> و ایشان نیز همدستان شده، از جماعه قیرغیز [و قلماق و]<sup>۲</sup> قزاق لشکر [لایعد و لایحصی]<sup>۳</sup> بل از جماعه یاجوج و ماجوج لشکر قیامت اثر از مور و<sup>۴</sup> ملخ بیشتر<sup>۵</sup> فراهم {۶۷۰پ} آورده، مانند چنگیز خان از مسکن خود در حرکت (۷۳۳) آمده، چندین کوه و<sup>۶</sup> بیابان و چندین دریا و<sup>۷</sup> بیشه را قطع نموده، به ولایت نمندگان وارد گردید. +<sup>۸</sup>

بیت<sup>۹</sup>

[آن را که خدای دولتی خواهد داد      ناگاه ز سنگ خاره بیرون آید]<sup>۱۰</sup>

و از آن جا کوچیده، تمام تابعات سیر بویی<sup>۱۱</sup> که مراد از او ولایت توره قورغان و کاسان و اخسی و چست و غوروم سرای است<sup>۱۲</sup>، همه را فرو گرفت. از آن جا با چندین شأن و شوکت از دریای سیحون<sup>۱۳</sup> عبور نموده، در موضع سلطان بایزید<sup>۱۴</sup> بسطامی که دروغ نام نهاده اند، [آن جا]<sup>۱۵</sup> وارد گردید. از آن جا +<sup>۱۶</sup> با چندین تجمل متوجه دار السلطنة خوقند

- 
- |    |                              |                                     |
|----|------------------------------|-------------------------------------|
| ۱۲ | ×                            | [د]                                 |
| ۱  | افکند [ت]                    | [د]                                 |
| ۲  | ×                            | [د]                                 |
| ۳  | ×                            | [د]                                 |
| ۴  | ×                            | [ت] [د]                             |
| ۵  | بیش [ت]                      | [د]                                 |
| ۶  | ×                            | [ت]                                 |
| ۷  | ×                            | [د]                                 |
| ۸  | به حکم آن که                 | [د]                                 |
| ۹  | ×                            | [ت] [د]                             |
| ۱۰ | آنها که خدای دولتی خواهد داد | ناگاه سنگ خاره بیرون آید [ت]، × [د] |
| ۱۱ | بوی                          | [د]                                 |
| ۱۲ | ×                            | [ت] [د]                             |
| ۱۳ | سیر                          | [د]                                 |
| ۱۴ | بایزیدی                      | [ت]                                 |
| ۱۵ | ×                            | [د]                                 |
| ۱۶ | سواری نموده                  | [د]                                 |

دور گردون نیست گردون پس چرا دون پرور است  
نی غلط گفتم سخن در جای دیگر میکشد

{۶۷۰ع} خود به جانب بخارا مراجعت فرمود و<sup>۱</sup> چون ابراهیم بی پروانچی ینگى<sup>۲</sup> بر  
بستر امارت نشست و دو ماه حکم رانی میکرد.

ذکر مسخر نمودن شیر علی خان دار السلطنة خوقند را بل تمام ممالک فرغانه را به لطف  
حضرت<sup>۳</sup> ایزد متعال

در آن وقت که<sup>۴</sup> +<sup>۵</sup> شیر علی خان ابن حاجی بی ابن عبد الرحمان بیک<sup>۶</sup> ابن عبد  
الرحیم بی ابن شهرخ بی ابن چمش بی در آن زمان که امیر عالم خان سنه ۱۲۱۶<sup>۷</sup> بود که  
حاجی بی را به درجه شهادت رسانید، کته بیک و شیر علی بیک هر دو<sup>۸</sup> + در عالم شبابی  
قرار بر فرار اختیار [نمود و]<sup>۹</sup> در میان کوهستان رفته، سکونت اختیار [نموده اند]<sup>۱۰</sup> و کته  
بیک در آن جا از دار فنا به دار بقا رحلت نمود و شیر علی خان در میان جماعه قیرغیز مدت  
چهل پنج سال عمر میگذرانید. در آن حین آشوب و خرابی ولایت فرغانه <۶۶۰پ> به گوش  
او رسید. چون سپند در مجمر آتش سوختن آغاز [کرد و]<sup>۱۱</sup> به بزرگان اولوس طرح<sup>۱۲</sup>

۱۲ میکشید [د]

۱ × [د]

۲ × [د]

۳ × [ت] [د]

۴ × [د]

۵ عالیجاهی [ت]

۶ بی [ت] [د]

۷ ۱۲۱۳ [د]

۸ شاه زاده [ت]

۹ نموده [ت] [د]

۱۰ نموده بودند [ت]، نمودند [د]

۱۱ کرد [د]

## بیت

آچیلن گل لار میدور یر اوزره هر<sup>۱</sup> فصل<sup>۲</sup> + بهار  
یا فنا ملکیده خاک اولگان پریرولار میدور

(۷۳۲) زبده کلام این<sup>۳</sup> که دولت از خاندان مینگیه منقطع گشت. رو به منغیت<sup>۴</sup> آورد. + هر چند این مقدمه در بالا ذکر یافته بود، با وجود مکرر شدن آن<sup>۵</sup> نخواستیم که این جا سخن را گوسه گذارم. هر چند ملال خاطر نکته سنجان بلاغت میشده باشد، هم از روی گستاخی چند سطری نوشتیم. به کرم عفو فرمایند.

القصه. امیر نصر الله تمام ممالک فرغانه را در تحت تصرف خود در آورده<sup>۶</sup>، سیزده روز در ولایت خوقند بر سریر فرمان فرمایی<sup>۷</sup> نشست. بعد از آن حکومت آن ممالک را از روی نادانستن به ابراهیم پروانچی منقیت<sup>۸</sup> تفویض نمود. < ۶۶۰ ر > چنانچه مولانا حاذق میفرماید.

قطعه<sup>۱۰</sup>

بار غرو جاه را هر سفله نتواند کشید  
هیچ تار<sup>۱۱</sup>\* عنکبوتی عقد گوهر میکشد<sup>۱۲</sup>

۱ × [د]

۲ نو [د]

۳ آن [د]

۴ منقیت [ت]

۵ مصراع

مرد از عیب برون آید کاری بکند [د]

۶ × [د]

۷ آورد [د]

۸ روای [د]

۹ منغیت [د]

۱۰ × [ت]

۱۱ [د]، تار [س] [ت]

طایر هستی اگر در چرخ ساز<sup>۱</sup> آشیان<sup>۲</sup>  
 عاقبت گردد اسیر دام صیاد اجل  
 هر که آید در دیار زندگی زان پیشتر  
 تیغ در کف در کمینش هست جلاد اجل

+ آری این پیره زن شوهر کش که دنیا ش خوانند، خود را در لباس نو عروسان  
 <۶۵۹پ> جوان بر جهانیان عرضه می‌دهد. بر طینت و ناپایدار و زیور بی اعتبار دل بیخردان  
 مغرور را در دام محنت خود می افکند، به حکم آن که +<sup>۴</sup>

بیت<sup>۵</sup>

بازیچه ای است طفل فریب این متاع دهر  
 بی عقل مردمان که درو مبتلا شدند

{۶۶۹پ} + عفت پناهی مادر شاهان ماه لار آیم را مع دو فاحشه بد بخت [بد گوهر  
 را]<sup>۶</sup> نیز به چندین خاری بر گلویش شربت مرگ +<sup>۸</sup> ریختند، چنانچه<sup>۹</sup>

۱ سازد [ت] [د]

۲ آشنا [د]

۳ روز دیگر این خبر هایل به تمام شهر منتشر گشت و همه اعیان مملکت از استماع این واقعه جان  
 سوز مدهوش باده تحسّر و اندوه گشته، از بیم لب ظهور نمیکردند. [د]

۴ گفته اند [ت]

۵ × [د]

۶ چنانچه مولانا حاذق میفرماید،

بار غرو جاه را هر سفله نتواند کشید      هیچ تار عنکبوتی عقد گوهر میکشد  
 دور گردون نیست گردون بس چرا دون پرور است      نی غلط گفتم سخن در جای دیگر میکشد

و [د]

۷ مذکور [د]

۸ را [د]

۹ چنانچه گفته اند [ت]، × [د]



بیت<sup>۱</sup>

مرا به مرگ عدو جای شادمانی نیست      که زندوگانی<sup>۲</sup> ما نیز جاودانی نیست

و سلطان محمود خان را هم [در همان شب]<sup>۳</sup> به درجهٔ شهادت رسانیدند<sup>۴</sup> و محمد  
امین خان که به استقبال [امیر نصر الله]<sup>۵</sup> بر آمده بود، +<sup>۶</sup> او را نیز +<sup>۷</sup> شربت شهادت  
چشانیدند<sup>۸</sup>. [روز دیگر این خبر هایله بر تمامی شهر منتشر گشت و همهٔ اعیان مملکت از  
استماع {۶۶۹} این واقعهٔ جان سوز مدهوش بادهٔ تحیر و اندوه گشته، از بیم لب ظهور  
نمیکردند.]<sup>۹</sup>

مثنوی<sup>۱۰</sup>

هر که افروزد به بزم زنده گی شمع وجود  
سازدش خاموش آخر سیل<sup>۱۱</sup> باد اجل  
در سراغ خرمن عمر است دایم برق مرگ  
زنده گی کی محو گردد یک دم از یاد اجل

- 
- ۱۶ به صد خاری [ت]  
۱۷ جدا کردند [س]  
۱۸ × [ت] [د]  
۱ × [ت]  
۲ زندگانی [د]  
۳ × [د]  
۴ رسانید [د]  
۵ × [د]  
۶ هر دو در درج سلطنت را نیز [د]  
۷ به گلوگاهش [د]  
۸ ریختند [د]  
۹ × [د]  
۱۰ شعر [د]  
۱۱ سیلی [ت] [د]

## بیت

زنی<sup>۱</sup> با جفا نیست دنیای دون که هرگز از او شوهری بر نخورد

القصة. از مشاهده چنین حال غریو از نهاد خلاق +<sup>۲</sup> وضع و شریف [برآمد]<sup>۳</sup> اشک حسرت از دیده ریختند و صغیر و کبیر دست تغابن بر یک دیگر {۶۶۸پ} کرده<sup>۴</sup>، انگشت حسرت<sup>۵</sup> به دندان گرفتند. آواز هیهات از برگ گیاه صحرا به آسمان رسید و صدای افسوس از زبان مرد و<sup>۶</sup> زن از بهر سلطان محمود خان در گنبد نیلگون پیچیده، سلامت<sup>۷</sup> جناب آن شهزاده نادیده جهان را از درگاه خالق جز و<sup>۸</sup> کل طلب مینمودند. عاقبت نسیم ظفر +<sup>۹</sup> خصم به وزیدن در آمد و سپاه زندوگانی<sup>۱۰</sup> (۷۳۱) ایشان منهزم و مستاصل و مایعرف خزاین ملک و مال حیاتش نهیب غارت +<sup>۱۱</sup> دست <۶۵۹ر> انداز لشکر اجل گردیده<sup>۱۲</sup>، از رباط وجود رخت به بادیه نیستی کشید.

خلص کلام آن که از قضا همان شب [به حکم امیر نصر الله]<sup>۱۳</sup>، سر<sup>۱۴</sup> پر غرور محمد علی خان ماده<sup>۱۵</sup> را از تن ناپاکش +<sup>۱۶</sup> پاک ساختند +<sup>۱۷</sup>، [چنانچه گفته اند].<sup>۱۸</sup>

- 
- |                            |    |
|----------------------------|----|
| زن [د]                     | ۱  |
| برآمد [د]                  | ۲  |
| × [د]                      | ۳  |
| زده [د]                    | ۴  |
| حیرت [د]                   | ۵  |
| × [ت] [د]                  | ۶  |
| سلامتی [د]                 | ۷  |
| × [د]                      | ۸  |
| بی رحمی [د]                | ۹  |
| زندگانی [ت]                | ۱۰ |
| و [ت]                      | ۱۱ |
| گردید و [د]                | ۱۲ |
| امیر نصر الله حکم نمود [د] | ۱۳ |
| سری [د]                    | ۱۴ |
| × [ت]، مادر زن [د]         | ۱۵ |

{۶۶۸} و نورچشمی سلطان محمود خان را حرامیان کورنمک مردم شهر خان +<sup>۱</sup> از شهر خود دستگیر نموده، به چندین کلفت به پیش امیر نصر الله آورده، در<sup>۲</sup> قید کشیدند<sup>۳</sup>. +<sup>۴</sup>

بیت<sup>۵</sup>

ندانم که تقدیر داور ز چیست      که درد آوری نیز باید گریست  
اگر هر چه هست آن به حکم خدا است      که از راه پرسش نه چون چرا است  
بلی هر چه هست از خطا و صواب<sup>۶</sup>      سبب دارد اما مسبب خدا است  
چو خواهد پریشان کند کشوری      شود پایمال بلا سروری

آری دنیا در هیچ دولتخانه <۶۵۸پ> نیست که اگر مکر و خدیعت او به ظهور نرسیده، +<sup>۷</sup> کتاب هیچ قصری نبود که نشانه قصد او نیست. بر<sup>۸</sup> گشت کرا بر داشته<sup>۹</sup> که بیفکند<sup>۱۰</sup> و کجا نهالی نشانند که باز بر نکند. با که تکلیفی نمود که خورش ن خورد و بر که دولتی گشود که هزار محنت از پی او<sup>۱۱</sup> در نیاورد، چنانچه<sup>۱۲</sup>

- 
- ۱ نیز [د]
  - ۲ × [د]
  - ۳ کردند [د]
  - ۴ چنانچه [ت]
  - ۵ × [ت]، نظم [د]
  - ۶ ثواب [د]
  - ۷ که [ت]، و [د]
  - ۸ × [د]
  - ۹ داشت [د]
  - ۱۰ نیفکند [ت][د]
  - ۱۱ × [د]
  - ۱۲ چنانچه گفته اند [ت]، × [د]

نه بندق و غنچه و فای از نسیم تبعیت شان نخندد، چنانچه<sup>۱</sup>

### مثنوی

زن اوستاد<sup>۲</sup> است در نیرنگ و تبلیس  
 ز زن مکر و حیل آمـوزد ابلیس  
 <۵۸ر> (۷۳۰) ز فکر<sup>۳</sup> زن کسی غافل میباشد<sup>۴</sup>  
 و گر غافل شود عاقل نباشد  
 اگر زن را کسی بر خود دهد راه  
 فتند<sup>۵</sup> دور<sup>۶</sup> از سریر دولت و جاه

زبده کلام آن که محمود خواجه کورنمک مع لشکریان منقبت<sup>۷</sup> از آمدن محمد علی  
 خان ماده<sup>۸</sup> و قوف یافته، بلا توقف رفته، دستگیر نموده، به چندین خاری در<sup>۹</sup> پیش امیر نصر  
 الله آورده، به قید کشیدند، چنانچه<sup>۱۰</sup>

### بیت

هر که ز گلزار وفارو بتافت      خار جفا سینه او را شکافت

- 
- |    |                            |
|----|----------------------------|
| ۱  | چنانچه گفته اند [ت]، × [د] |
| ۲  | استاد [ت]                  |
| ۳  | مکر [د]                    |
| ۴  | شد [د]                     |
| ۵  | فتند [د]                   |
| ۶  | زود [د]                    |
| ۷  | منقبت [د]                  |
| ۸  | × [ت] [د]                  |
| ۹  | به [د]                     |
| ۱۰ | چنانچه گفته [ت]، × [د]     |

سحر<sup>۱</sup> پگاه در بیرون مرغینان با دو محرم خود به رباط کهنه فرود آمد.

مصراع<sup>۲\*</sup>

نفس در شهر آورد خوک<sup>۳</sup> بیابان گرد را

زبده کلام آن که محرم خود<sup>۴</sup> را به پیش خان پادشاه فرستاد و صورت واقعه را بیان فرمود. + جواب خان پادشاه در بالا مذکور شده بود.

مصراع

داغ دیگر بر سر آن داغ داد

القصه. آن ابله ندانسته بود که<sup>۵</sup> خصوصاً امری<sup>۶</sup> که با زنان باشد، خلف وعده و شکستن پیمان خانه زاد<sup>۷</sup> طبع این طبقه ناقص بیخرد است. تخمیر وجود زنان از آب و<sup>۸\*</sup> گل {۶۶۷پ} بیوفایی است. هیچ کس جرعه ای از صهبای محبت ایشان نچشیده که به درد +<sup>۹</sup> خمار رسوایی<sup>۱۰</sup> و فضیحتی گرفتار نگردیده باشد، بوی گل قول ایشان آمیخته خلاف و خار آمیزش آنها سینه شکاف است. هر کس که نظر به فقرات نسخوری<sup>۱۱</sup> و نیرنگ ایشان افکند و داستانی از کتاب فسون سازی و بی مهری آن فرقه خوانده باشد، دل به وعده بی فروغ آنها

۱ سحری [د]

۲ [د]، ع [س] [ت]

۳ خوکی [ت]

۴ × [د]

۵ و [د]

۶ × [ت] [د]

۷ امر [ت] [د]

۸ را و [د]

۹ [د]

۱۰ سر [د]

۱۱ رسوای [د]

۱۲ نسخه وری [ت]، نسمة فریب [د]

به چندین درد و حسرت یکی از باغ و دیگری از راغ فرار بر قرار اختیار نمودند و خزینه ای که محمد علی خان ماده<sup>۱</sup> به چندین خون جگر <۶۵۷ر> از اقطار عالم جمع کرده بود، به یک دم همه به تاراج سربازان رفت و حجله نشینان پرده عصمت که آفتاب را به خود نا محرم می پنداشتند، سر و<sup>۲</sup> پا برهنه اوزبکان موی کشان به کفل اسپان (۷۲۹) نشانیده، به چندین خاری و زاری به کوچه و بازار میگشتند. مردم خوقند این حال را مشاهده نموده، این نظم را میخواندند.

نظم<sup>۳</sup>

گل به تاراج رفت و خار بماند      گنج برداشتند و مار بماند  
دیده بر تارک سنان دیدن      بهتر از روی دشمنان دیدن  
{۶۶۷ر} واجب است از هزار دوست برید      تا رخی<sup>۴</sup> دشمنان<sup>۵</sup> نباید دید

القصة. گویند<sup>۶</sup>، محمد علی خان ماده<sup>۷</sup> در کمال سرعت راه می پیمود. به یک روز بست فرسخ راه را<sup>۸</sup> طی نموده، از ولایت اندجان گذشته، در موضع بوته قره رسید و از شر لشکریان منغیت<sup>۹</sup> نجات یافت. اما به خاطر نامبارکش رسید که مادر زنش<sup>۱۰</sup> خان پادشاه در ولایت مرغینان مانده است. دود از دمارش برآمد. گردن خار خار از آن زمین از برای به دست آوردن خان پادشاه در آن نیم شبی به جانب مرغینان مراجعت فرمود. <۶۵۷پ>

۱۷ این [د]

۱ × [ت] [د]

۲ × [ت]

۳ قطعه [ت]

۴ یکی [د]

۵ دشمن [د]

۶ × [د]

۷ × [ت]، غازی [د]

۸ × [د]

۹ منقیت [ت]

۱۰ زن [د]

۱ و چون این خبر را برادران شنیده<sup>۲</sup>، دست از جان شیرین صد بار شسته، چار و<sup>۳</sup> ناچار آماده جنگ<sup>۴</sup> شده<sup>۵</sup>، سر کوبها برداشتند و به انداختن توب +<sup>۶</sup> و تفنگ پرداختند. پگاه چهار<sup>۷</sup> شنبه پنجم ثور و<sup>۸</sup> غره ماه ربیع الثانی [بود که]<sup>۹</sup> به یک حمله لشکریان +<sup>۱۰</sup> ترک به شهر داخل شده، دست به قتل و تاراج گشادند، به حکم +<sup>۱۱</sup> حدیث شریف است که قال النبی علیه السلام اترک<sup>۱۲</sup> التترک ماتر ککم. +<sup>۱۳</sup> چنانچه {۶۶۶پ} مولانا حاذق [تاریخی گفته اند.]<sup>۱۴</sup>

نظم<sup>۱۵</sup>

[به بخارا است نسبت خوقند      پیش جیحون چو نیست سیحون  
بکشد گر عنان به حرم وقار      خون سیحونیان شود جیحون  
ها تقی گفت بهر تاریخش      فتح شد قلعه های مفسد دون]

القصه<sup>۱۶</sup>. هر دو برادران چون +<sup>۱۷</sup> حال را مشاهده نمودند، دل از تخت تاج برکنده،

- 
- |    |                             |
|----|-----------------------------|
| ۱  | × [د]                       |
| ۲  | شنیدند [د]                  |
| ۳  | × [ت] [د]                   |
| ۴  | محربه [د]                   |
| ۵  | گشته [د]                    |
| ۶  | و تیر [د]                   |
| ۷  | چار [ت]                     |
| ۸  | × [د]                       |
| ۹  | سال مذکور [د]               |
| ۱۰ | و [د]                       |
| ۱۱ | آن که [د]                   |
| ۱۲ | الترک [د]                   |
| ۱۳ | صدق یا رسول [د]             |
| ۱۴ | میفرماید [د]                |
| ۱۵ | [د]                         |
| ۱۶ | وزبده کلام آن که [ت]، و [د] |

## بیت

مگذر از موقع شناسی ورنه در عرض<sup>۱</sup> نیاز  
پیش از آروغ است نفرت آه بی هنگام را

{۶۶۶} و هم قضا و قدر گریبان گیر شد. پیمانه عمر و دولت ایشان پر شده بود. هر

چند در تدارک این کار سعی بلیغ مینمودند، بالعکس نتیجه میداد، چنانچه<sup>۲</sup>

## بیت

یکی قضا است به هر نیک و بد عنان کش خلق  
بدان دلیل که تدبیرهای جمله خطاست

همان وقت خبر رسید که امیر نصر الله نیم فرسخ از<sup>۳</sup> شهر در موضع ارزنگ تپه نزول

فرمود. همان شب به تهیه<sup>۴</sup> اسباب<sup>۵</sup> لشکر پرداخت. روز دیگر بعد از دمیدن صبح رو به شهر  
آورد.

## مثنوی

دیگر<sup>۶</sup> روز چون خسرو خاوری <۶۵۶پ> بر آمد بر این طاق نیلو فری

زمانه در<sup>۷\*</sup> روشنی باز کرد جهان بازی<sup>۸</sup> دیگر<sup>۹</sup> آغاز کرد

۱ عجز [د]

۲ × [د]

۳ × [ت]

۴ تعیه [د]

۵ × [د]

۶ دگر [د]

۷ [ت]، درو [س]، دری [د]

۸ باز بر [د]

۹ دگر [د]



محمد {۶۶۵پ} علی خان ماده<sup>۱</sup> خبر رسید که امیر نصر الله در موضع بیش اریق وارد گردید. گردن خار خار پسرش محمد امین خان را با لشکر قوشبیگی به وعده<sup>۲</sup> بسیار به پیش امیر نصر الله [به استقبال]<sup>۳</sup> فرستاد. شاید که مثل دفعه<sup>۴</sup> اول آشتی در میان افتد. ندانست که [گفته اند].<sup>۵</sup>

بیت<sup>۵</sup>

دشمن اگر لاف مودت زند      صاحب عقلش شمارد<sup>۶</sup> دوست<sup>۷</sup>  
مار همان است به سیرت که هست      و ر چه به صورت بدر آید ز پوست

در آن حین بود که خبر رسید که سلطان محمود خان با لشکر انبوه می آید. همه<sup>۸</sup> امرا و فقرا استقبال نموده، به چندین شأن شوکت به شهر <۶۵۶ر> در آوردند و هر دو برادر یک دیگر را در آغوش کشیدند و محمد علی خان<sup>۹</sup> ماده<sup>۱۰</sup> خود را عزل نموده<sup>۱۱</sup>، به جای خود نور چشمی سلطان محمود خان را بر بستر سلطنت نشانید. چون برادرم بر سریر جهانبانی متمکن گشت، دست عطا به خاص و<sup>۱۲</sup> عام (۷۲۸) گشاد. اما از آن جا که فرصت فوت شده بود، هر چند انعام و احسان میکرد، به جایش نمی افتاد، چنانچه<sup>۱۳</sup>

- 
- ۱ × [ت] [د]
  - ۲ × [د]
  - ۳ سفر [د]
  - ۴ گفته اند، چنانچه [ت]، × [د]
  - ۵ قطعه [د]
  - ۶ شمارند [د]
  - ۷ [د]، به دوست [س] [ت]
  - ۸ [ت] [د]
  - ۹ × [ت]، غازی [د]
  - ۱۰ کرد و [د]
  - ۱۱ × [ت]
  - ۱۲ چنانچه گفته اند [ت]، × [د]

فقیر به محمد علی خان ماده<sup>۱</sup> خطی در کمال عجز و بیچاره گی خود را اظهار نموده، خط<sup>۲</sup> کرده فرستاد. شاید که عرق برادری در حرکت آید و هم صیله رحم که<sup>۳</sup> از جمله واجبات ایمان است، به او عمل نماید و ندانسته بودیم<sup>۴</sup> که ایمان او به یاد خان پادشاه کیها رفته بوده است. چون آن<sup>۵</sup> خط به آن بی رحم رسید، به زبان ترکی گفت، <صدقه پُل بولسون.> این خبر را نور چشمی سلطان محمود خان شنیده، هزار بار از آن غول بیابان دست شسته، به تدارک کار خود شده بود.

## [بیت]

آشنا که وقت استغنا دلیل همت است

ورنه وقت حاجتش هر ماده بان را آشنا است<sup>۶</sup>

در این وقت قافیه تنگ آمد و<sup>۷</sup> مال و<sup>۸</sup> جان <۶۵۵پ> خود را دریغ نمیداشت. اما چه سود که کار به جای نمیرسید و<sup>۹</sup> امرا و فقرا نیز پی در پی کس فرستاده، به پادشاهی خوقند بشارت دادند و سلطان محمود خان دید که اگر خود را در ولایت خوقند نگیرد، ولایت دست پر تاب از دست میرود. با وجودی که دانسته بود که کار از دست رفته است. لا علاج چار و<sup>۱۰</sup> ناچار با لشکر خود به چندین درد و<sup>۱۱</sup> حسرت متوجه خوقند شد. در آن وقت به

۱ زن [ت]، غازی [د]

۲ × [ت] [د]

۳ × [د]

۴ بود [د]

۵ این [د]

۶ × [ت] [د]

۷ × [د]

۸ × [ت]

۹ × [د]

۱۰ × [ت]

۱۱ × [ت]

نظم<sup>۱</sup>

نهال کینه که در سینه ها نشانه<sup>۲</sup> شده است  
مقرر است و معین که بر چه خواهد داد  
درخت حقد بدان نوع میوه دارد  
که طعم آن به دل و جان کس چنین<sup>۳</sup> مرساد

خلص کلام آن که محمد علی خان ماده<sup>۴</sup> دید که آتش این فتنه به هیچ < ۶۵۵ ر > تدبیر فرو نمی نشیند و کار از دست رفت. ناچار [پی در پی به خدمت نور چشمی [سلطان محمود خان]<sup>۵</sup> کس فرستاده، تکلیف تاج و تخت نمود و هر چیزی که در بساط داشت، به پیش برادرم سلطان محمود خان فرستاد و خواست که آن شاهباز نو آموز بلند پرواز را آهسته آهسته طنابش را خالی گذاشته، به خود رام سازد، چنانچه میگویند.<sup>۶</sup>

## بیت

زر فرستادن محمود بدان میماند  
نوش دارو که پس از مرگ به سهراب دهند

{ ۶۶۵ ر } (۷۲۷) الغرض. وقتی که نور چشمی سلطان محمود خان در شهر سبز بود، از [پته های]<sup>۷</sup> کینگس به تنگ آمده، از روی تنگی روزگار [میگذرانید. روزی]<sup>۸</sup> به مصلحت

۱ قطعه [د]

۲ نشانه [ت] [د]

۳ چنان [د]

۴ × [ت]، غازی [د]

۵ × [ت]

۶ خواست که آن شاهباز نو آموز بلند پرواز را آهسته آهسته طنابش را خالی گذاشته، به خود رام سازد. پی در پی به خدمت نور چشمی کس فرستاده، تکلیف تاج و تخت نمود و چیزی که در بساط داشت، به پیش برادرم سلطان محمود خان فرستاد. [د]

۷ پته [ت]

۸ × [ت] [د]

بود. بنابر آن به عداوت محمد علی خان ماده<sup>۱</sup> کمر بستند و میگفتند.

### مصراع<sup>۲</sup>

نزدیک شد که دور شود دشمن از نظر

<sup>۳</sup>+

لیکن<sup>۴\*</sup> امرا و سپاه اثر بی صفایی<sup>۵</sup> بر جبین خود ظاهر نمیگردانیدند، چار و<sup>۶</sup> ناچار جام ناخشگوار از دست بی دینی<sup>۷\*</sup> آن ملعون مینوشیدند، [چنانچه میگویند].<sup>۸</sup>

### بیت<sup>۹</sup>

ز دشمن دوستی جستن چنان است که یک جا جمع کردن آب و آتش

{۶۶۴} اما عمرها بود که در دل کینه گرفته، منتظر این وقت میبودند. ابواب طغیان بر گشادند و سوابق انعام او<sup>۱۰</sup> را فراموش کردند و بودن محمد علی خان ماده<sup>۱۱</sup> را معدوم پنداشتند. در فکر کار خود شدند، چنانچه<sup>۱۲</sup>

۱۷ اخلاص ایشان [ت][د]

۱ × [ت][د]

۲ × [ت]

۳ مصراع

خانه ویرانست نزد؟ خانه ویران ساختند [ت]

۴ [ت][د]، لیکین [س]

۵ صفای [د]

۶ × [ت]

۷ [د]، دین [س][ت]

۸ چنانچه [ت]، × [د]

۹ × [ت]

۱۰ × [د]

۱۱ × [ت][د]

۱۲ × [ت][د]

دستگیر نموده، همراه به شهر در آمدند. به آسانی ولایت خجند فتح شد. از <sup>۱</sup> جمله اسیران خالی بیک قوش بیگی و گدای بای و ملا یولداش و ابن یمین بی بود. خالی بیک قوش بیگی و ابن یمین بی به قتل [رسیدند و] <sup>۲</sup> دیگر ایشان به حبس ماند. در آن وقت محمد علی خان ماده <sup>۳</sup> منتظر میبود که از پرده غیب چه حادثه در عالم کون و <sup>۴</sup> فساد ظهور میکند. {۶۶۴} ناگاه گریخته گان گروه گروه فوج فوج سر و <sup>۵</sup> پا برهنه به اسبان (۷۲۶) لُج سواری<sup>۶</sup> نموده، بسیاری مجروح به چندین بی آبرویی<sup>۷</sup> به پیش محمد علی خان ماده<sup>۸</sup> رسیده، صورت واقعه را بیان فرمودند. چون محمد علی خان ماده<sup>۹</sup> ایشان را به این حال مشاهده نمود و سخن ایشان را به این تقریر شنید، عقل و <sup>۱۰</sup> هوش از سر پر غرورش صد گز پرید و انگشت تحیر به دندان گزید<sup>۱۱</sup>. مثل سگ دیوانه به هر سو میدوید < ۶۵۴ پ > و از هر کس چاره خود را میجست. از آن جا که آن ملعون عمر<sup>۱۲</sup> + <sup>۱۳</sup> خود را به مردم قمارباز و کبوترباز و <sup>۱۴</sup> بی پدر گذرانیده بود، فتور<sup>۱۵</sup> در اعتقاد جمع اهالی<sup>۱۶</sup> + <sup>۱۶</sup> فرغانه و شکست در [اخلاص شان] <sup>۱۷</sup> افتاده

- ۱۳ بعضی [د]  
 ۱ آن [د]  
 ۲ رسید [ت] [د]  
 ۳ × [ت]، غازی [د]  
 ۴ × [ت]  
 ۵ × [ت]  
 ۶ سواره [ت]  
 ۷ آبروی [د]  
 ۸ × [ت]، غازی [د]  
 ۹ × [ت] [د]  
 ۱۰ [د]  
 ۱۱ گزیده [د]  
 ۱۲ عمرها [د]  
 ۱۳ خجبت [د]  
 ۱۴ و [ت]، دون [د]  
 ۱۵ فتوری [د]  
 ۱۶ ممالک [د]

خجند فرستاد، مثل طغایی اش خالی بیک قوش بیگی و گدای بای پروانچی و بهادر دادخواه. چون ایشان بعد از طی مسافت در ولایت خجند وارد گردیده، منتظر محاربه نشستند، [چنانچه میگوید].<sup>۱</sup>

بیت<sup>۲</sup>

{۶۶۳پ} گروهی<sup>۳</sup> رزم جوی و فتنه انگیز

همه پر کینه و بی باک و خون ریز

به کین خواهی میان را تنگ بسته

دل چون سنگ را در جنگ بسته

در آن وقت بود، خبر رسید که امیر نصر الله رسید. تمام لشکریان خوقند از شهر خجند + یک فرسخ در موضع تنگی رسیدند و از آن جانب نیز امیر نصر الله رسید و دو دریای لشکر به هم صف<sup>۵</sup> کشیدند<sup>۴</sup> و چنان بازار قتال گرم گشت که زمین میدان از خون یلان گلگون شد <۶۵۴ر><sup>۶</sup> و بعد از محاربات بسیار نسیم ظفر از جانب لشکر بخاری وزید و لشکر فرغانه رو به انهزام آورد. فرار برقرار اختیار نمود. + بسیاری<sup>۸</sup> ایشان خود را به دریا<sup>۱۱</sup> [انداختند و] لقمه نهنگ شدند<sup>۱۲</sup> و بعضی<sup>۱۳</sup> ایشان به قتل رسیدند و باقی مانده را

۱ × [د]

۲ مثنوی [ت]، رباعی [د]

۳ گروه [د]

۴ به [د]

۵ در [د]

۶ آمیختند [د]

۷ × [د]

۸ و [د]

۹ بسیار [د]

۱۰ دریای سیحون [د]

۱۱ انداخته [د]

۱۲ گشتند [د]

{۶۶۳ر} اکنون هر صاحب بصیرت<sup>۱</sup> در این صورت به دیده فکرت نگرد داند که عواطف<sup>۲</sup> قهر قهاری<sup>۳</sup> احد بیچون در حرکت آمده، باد بی نیازی در وزیدن آید، به یک دم عالمی را در خاک مذلت اندازد و هرگاه نسیم گرم و مواهب به مقتضای (۷۲۵) +<sup>۴</sup> کریمه الله +<sup>۵</sup> لطیف بعباده<sup>۶</sup> در گلستان جان وزد، غنچه امانی<sup>۷</sup> جهانی<sup>۸</sup> شکفته گردد. به مقتضای [ما ذلک]<sup>۹</sup> علی الله العزیز.

### بیت

از سرا بوستان دولت میوه شادی<sup>۱۰</sup> مجوی  
ز آن که کمتر میوه چیند ز انقلاب<sup>۱۱</sup> عالم است

<۶۵۳پ> [ذکر مردن محمد علی خان ماده و شهادت یافتن سلطان محمود خان و محمد

امین خان نادیده جهان از جبر چرخ زنگاری]<sup>۱۲</sup>

زبده کلام آن که [سنه ۱۲۵۷ بود که در آن وقت خبر رسید که]<sup>۱۳</sup> امیر نصر الله با لشکر انبوه متوجه ممالک فرغانه شده است و<sup>۱۴</sup> این خبر را محمد علی خان ماده<sup>۱۵</sup> شنیده، در بحر تفکر غوطه زدن گرفت. بالاخر تمام لشکر فرغانه را فراهم آورده، سرداران را به ولایت

۱ بسیرت [د]

۲ عوصف [د]

۳ آیت [ت] [د]

۴ و [س]

۵ بالعباد [ت]، با العباد [د]

۶ [د]، جهان [س] [ت]

۷ ذالک [د]

۸ [ت] [د]، سازی [س]

۹ اینقلاب [د]

۱۰ × [ت] [د]

۱۱ در آن وقت خبر رسید، سنه ۱۲۵۷ بود که [د]

۱۲ × [ت]

۱۳ × [ت]، غازی [د]

[و هم گوید.]<sup>۱</sup>

بگو که محمد علی خان نر خر<sup>۲</sup> کیدی خموش باش که در کار سلطنت اید

خلص کلام آن که<sup>۳</sup> دو امرا دیدند<sup>۴</sup> که کار از حد اعتدال گذشته است. {۶۶۲پ} مشت به درفش راست نمی آید. بلا توقف آن دو سردار آن زن بیچاره را به چندین خاری و زاری [در نزد فقرا]<sup>۵</sup> مع فرزندان میقتیش<sup>۶</sup> بدرقه کرده، به ولایت مرغینان فرستادند. سبب تأمل اهل فرغانه بر ظلم محمد علی خان ماده<sup>۷</sup> این بود که اگر او را به قتل رسانند، به این خاندان خون دار خواهند شد. مثل برادر او و یا فرزندان هر کدام ایشان به جای او قرار گیرند، خون او را خواهند طلبید و اگر از مردم بیگانه به خود پادشاه کنند، <۶۵۳ر> او را نیز قبول نمیکردند. بنابر آن لا علاج کار خود را به هیچ تدبیر نیافته، حیران و سرگردان هر روز به جای غذا کاسه کاسه خون دل خورده، عمر به سر میبردند. نزد همگنان معلوم است که فلک غدار ناپایدار خود در این شیوه بهانه جو است. در کرشمه آمده، عالمی را زیر و زبر کرد. این به طور حکم است، [به حکم آن که]<sup>۸</sup>

رباعی<sup>۹</sup>

دی گفت فلک به گوش من پنهانی      کاری که خدا کند ز من میدانی  
این گردش دور خود به دستم بودی      خود را برهاند می ز سرگردانی

۱ × [د]

۲ خری [د]

۳ × [د]

۴ دید [د]

۵ × [د]

۶ مقتیش [ت][د]

۷ × [ت]، غازی [د]

۸ × [د]

۹ قطعه [د]



شدن مکرر در پیش خود طلب نموده، امید وصل جستن چه معنی دارد، یا از بهر ما گذرد، یا از بهر این زن،

<۶۵۲پ> مصراع<sup>۱</sup>

تا سر نرود و خیالش<sup>۲</sup> از سر نرود<

گویند، در آن وقت کوکناری بود، در کمال ضعیفی. [او نیز]<sup>۳</sup> در آن مجمع<sup>۴</sup> +<sup>۵</sup> حاضر بود. به آواز بلند منادی کرده، میگفت، <محمد علی خان ماده<sup>۶</sup> شما<sup>۷</sup> گرای<sup>۸</sup> جهنم رفتن کُس سفید میخورید<sup>۹</sup>. میرود و ما در این میان [مفت و]<sup>۱۰</sup> رایگان گوه خورده، میرویم +<sup>۱۱</sup>. > از این سخن او پاره ای در خنده افتادند و بعضی<sup>۱۲</sup> منع مینمودند<sup>۱۳</sup>، [چنانچه گفته اند].<sup>۱۴</sup>

#### بیت

که کرد در همه عالم گمان کفر بزه      که تیر لعنت جاوید را نشانه نشد

۱۴ × [ت][د]

۱ × [ت]

۲ صالش [د]

۳ × [ت]

۴ جمع [د]

۵ آمد [د]

۶ × [ت][د]

۷ × [د]

۸ گیرای [د]

۹ میخورد [د]

۱۰ × [د]

۱۱ می [ت]

۱۲ بسیاری [د]

۱۳ نمودند [د]

۱۴ × [د]

<۶۵۲> این دفعه فقرا کار او را خواهند کرد. بنابر آن لشکر قوش بیگی<sup>۱</sup> از تاشکند معزول<sup>۲</sup> شده، آمده بود، او را به گدای بای پروانچی در پیش فقرا به استقبال برآورد و گفت، <هر چیزی<sup>۳</sup> که فقرا فرمایند، قبول کنید> و خود به راه دیگر به جانب یر مسجد<sup>۴</sup> که شکارگاه او بود، گریخت و این بیت در زبان او جاری بود.

## بیت

نفس را پروردم و آخر شدم رسوای او  
من چه دانستم که نفس<sup>۵</sup> خویش را می پرورم

چون هر دو امارت پناهان به پیش فقرا برآمدند، سبب جمع آمد را پرسیدند. فقرا جواب دادند که <ظلمهایی که در میان این چند سال ما از میر خود کشیدیم، هیچ فقرا<sup>۶</sup> در عصر هیچ پادشاهی ندیده است {۶۶۲}> و نشنیده است. این سخن اظهر من الشمس است. با وجود این قدر ظلم علمای بخارا موطوه<sup>۷</sup> پدر را حلال دانسته است. گفته، حکم به<sup>۸</sup> کفر<sup>۹</sup> او کرده اند و<sup>۱۰</sup> در کثافت<sup>۱۱</sup> او به این مسئله عمل نموده که من کثر سواد قوم فهم منهم نیز به کفر<sup>۱۲</sup> مایان<sup>۱۳</sup> نیز<sup>۱۴</sup> حکم کرده اند. با وجود از بهر (۷۲۴) این زن خسر الدنيا و الآخرة

- ۱ که [د]
- ۲ عزل [د]
- ۳ چه [د]
- ۴ مچیت [د]
- ۵ خصم [د]
- ۶ فقرای [د]
- ۷ موطویه [ت]، موطوعه [د]
- ۸ بر [ت] [د]
- ۹ تکفیر [د]
- ۱۰ × [ت]
- ۱۱ کسافت [ت] [د]
- ۱۲ تکفر [ت]، تکفیر [د]
- ۱۳ ما [ت] [د]

داشته، کلان<sup>۱</sup> کرده بود، خانه او را چنان تاراج کرد که یک بوری باقی نماند و<sup>۲</sup> خود او را به مسجد<sup>۳</sup> مؤذن ساخت.

## بیت

آن را که به دست لطف بر داشته بنواز به یک بار میفکن در<sup>۴</sup> خاک

و خان پادشاه که در خانه پدرش بود، او را ضمنا به خانه سید قوش بیگی آورده، باز به کار معهود قیام نمود. +<sup>۵</sup> این سر در سهل روز بر تمامی<sup>۶</sup> شهر {۶۶۱پ} شایع شد. مردمانی که در تدبیر این کار بودند، شنیدند<sup>۷</sup>. همه متفق اللفظ و المعنی گشته<sup>۸</sup>، بلوای عام نموده، +<sup>۹</sup> بدر آورده، محمد علی خان ماده<sup>۱۰</sup> چندین هزار کس مجتمع شده<sup>۱۱</sup>، آمدند، [به حکم آن که]<sup>۱۲</sup>

## بیت

اولدی مغلوب هوای عقل استیلای نفس آلدی بر حاکم ایلیدین اختیار اوباش لار

چون این خبر به آن ناپاک رسید، از بیم لرزه بر<sup>۱۳</sup> اندامش افتاد. دانست که

۱ بزرگ [د]

۲ × [د]

۳ مسجدی [ت] [د]

۴ بر [ت] [د]

۵ و [ت] [د]

۶ تمام [د]

۷ شنیده [د]

۸ × [د]

۹ گشته [د]

۱۰ × [ت] [د]

۱۱ شد [ت]

۱۲ × [د]

۱۳ به [د]

گفتم، یک شیشه روغن بادام فرستادم.

### بیت

{۶۶۱ر} نیم سنگ فلاخن لیک دارم بخت واژونی

که برگرد سر هر کس که کردم دورم اندازد<sup>۱</sup>\*

در آن وقت عهد و<sup>۲</sup># پیمان هر دو برادر محکم شده بود و تمام امرای خوقندی<sup>۳</sup> به خدمت نور چشمی آمد<sup>۴</sup>. از امیر نصر الله<sup>۵</sup> + گشته، متوجه<sup>۶</sup> + تاشکند شده بودند. دیگر<sup>۷</sup> این مقوله در ضمن پادشاهی امیر نصر الله گذشته بود. با وجود او سخن مکرر شود، هم<sup>۸</sup> + موقعش بود<sup>۹</sup>، بیان کردیم. امید از نکته سنجان بلاغت (۷۲۳) این که [به کرم]<sup>۱۰</sup> عفو فرمایند. [از ایراد خود را نگه دارند.]<sup>۱۱</sup>

<۶۵۱پ> القصه. محمد علی خان ماده<sup>۱۲</sup> یک چیز از بیم مرگ و عزل برآمد. باز به همان کارهای ناشایست<sup>۱۳</sup> خود مشغول گشت. در آن وقت نارقوزی دادخواه که بزرگترین سرکرده های او بود، بی سبب او را به قتل رسانید و سید قوش بیگی که او را به سرش بر

۱ [ت][د]، اندازم [س]

۲ [د]

۳ خوقند [ت][د]

۴ آمده [د]

۵ بر [ت][د]

۶ ولایت [د]

۷ ذکر [د]

۸ در [د]

۹ × [د]

۱۰ × [د]

۱۱ × [ت][د]

۱۲ × [ت]، غازی [د]

۱۳ ناشایسته [د]

گل که تنها بویی<sup>۱</sup> آخر خشک گرداند<sup>۲</sup> دماغ  
 و ر شکر تنها خوری هم گرم گرداند جگر  
 زین دو تنها هیچ قوت ناید اندر جان و دل  
 قوت جان<sup>۳</sup> + را و دل را گلشکر به گلشکر

و هم یقین او شد،<sup>۴</sup> در سهل روز امرا و فقرا سلطان محمود خان را طلب نموده، بر بستر سلطنت می نشانند. بنابر آن گردن خار خار {۶۶۰پ} محمد علی خان ماده<sup>۵</sup> رو به مادرش ماه لار آیم آورده، در غایت التجا صورت واقعه را بیان کرد و آن ناقص عقل<sup>۶</sup> سخن آن ملعون را قبول نموده، ضمناً به برادرش سلطان محمود خان گریز کس فرستاده، او را به فریفت و طبیعت او را مایل ساخت. او<sup>۷</sup> سخن را به این قرار داد که تاشکند و تمام دشت قیچاق و قورمه و خجند و غوروم سرای از آن سلطان محمود خان باشد. باقی از آن محمد علی خان ماده<sup>۸</sup> > ۶۵۱ر < باشد. هر دو به اتفاق در ولایت فرغانه فرمان فرمایی<sup>۹</sup> کنند. مکرر در میان کس رفته، آمد. بعد نور چشمی سلطان محمود خان این امر را قبول فرموده، بر سبیل مصلحت صورت واقعه را به شهر سبز به فقیر نوشت. +<sup>۱۰</sup> دانستم که آن شهزاده ساده لوح را بازی داده اند. فقیر در جواب نوشتم که > امرا و فقرا شما را بخواهند<sup>۱۱</sup>. این مصلحت پر زیبا و الا خوقند را گذاشته، به تاشکند رفتن چه معنی دارد. مگر دماغ شما خشک شده است. <

- ۱ بوی [ت] [د]
- ۲ گردد در [د]
- ۳ جان [س]
- ۴ که [د]
- ۵ × [ت]، غازی [د]
- ۶ العقل [د]
- ۷ آن [د]
- ۸ × [ت] [د]
- ۹ فرمای [ت]
- ۱۰ فقیر [د]
- ۱۱ نخواهند [ت]

بسیار از هر جنس به پیش امیر نصر الله بر آورد. ایشان رفته، طرح آشتی در میان انداخته، مراجعت فرمودند و محمد علی خان ماده<sup>۱</sup> یک چیز قامت خود را راست کرد. در آن وقت بود، خبر رسید که امیر نصر الله حکومت خجند را به سلطان محمود خان تفویض نموده است و امارت اوراتپه را به بیردی یار توقصا به گذاشته، خود متوجه بخارا شده است. چون این خبر به گوش محمد علی خان ماده<sup>۲</sup> {۶۶۰ر} رسید کرده گی، شادیهای وی<sup>۳</sup> از بینی اش هزار بار [برآمده]<sup>۴</sup>، منتظر مرگ و<sup>۵</sup> یا عزل نشست. بعد از چند روز امرا به هم دیگر مشاورت کردند. بعد [از آن]<sup>۶</sup> به محمد علی خان ماده<sup>۷</sup> گفتند که >تدبیر اندیشیده، کاری<sup>۸</sup> کنید که سلطان محمود خان را به دست آرید (۷۲۲) و الا بر هلاک خود میکوشید. از بس که امیر نصر الله بسیار زور است. اگر این دفعه بیاید، فتور<sup>۹</sup> از همه ملک خواهد رفت. بعد پشیمانی سود نمیکند. < [به حکم آن که]<sup>۱۰</sup>

< ۶۵۰ پ > بیت<sup>۱۱</sup>

رشته تا<sup>۱۲</sup> یکتا است او را زور زالی<sup>۱۳</sup> بگسلد<sup>۱۴</sup>

چون دو تا شد عاجز آید از گسستن زال زر

۱۳ را [ت]

۱ × [ت]، غازی [د]

۲ × [ت] [د]

۳ او [د]

۴ بیرون شده [د]

۵ × [د]

۶ × [د]

۷ × [ت] [د]

۸ کار [ت]

۹ فطور [ت]

۱۰ × [د]

۱۱ × [ت]، شعر [د]

۱۲ × [د]

۱۳ زال [ت]

۱۴ بگسد [ت]

چنانچه<sup>۱</sup>بیت<sup>۲</sup>

اگر ز باغ رعیت ملک خورد سببی      بر آورند غلامان او درخت از بیخ  
به پنج بیضه که سلطان ستم روا دارد      زنند لشکریانش هزار مرغ به سیخ

و مادرزنش<sup>۳</sup> خان پادشاه را به چندین بی آبرویی<sup>۴</sup> از قصر محمد علی خان ماده<sup>۵</sup> بر آورده، به خانه پدرش فرستادند. این مقدمه را ندیمان دیگر به محمد علی خان صورت واقعه را بیان نموده، گفتند که <بلوای عام شد. اگر نوعی کرده، این آتش را فرو {۶۵۹پ} نه نشانید، عالمی به تاراج خواهد رفت.> محمد علی خان ماده<sup>۶</sup> +<sup>۷</sup> امرای بزرگ را حکم نمود. ایشان رفته، به چندین زحمت و مشقت التجا نموده، فقرا را از آن کار منع نمودند و<sup>۸</sup> حاجی بیچاره را در قید کشیدند و فقرا میر<sup>۹</sup> خود را نگذاشتند که به پیش امیر نصر الله استقبال نماید. در آن وقت بود، خبر رسید که امیر نصر الله در موضع قرقچی قوم وارد گردید. سلطان محمود خان یک منزل پیش در موضع پتر نزول اجلال فرموده است و این خبر را محمد علی خان <۶۵۰ر> ماده<sup>۱۰</sup> شنید. مثل بید لرزه بر<sup>۱۱</sup> اندامش افتاد. سراسیمه سلیمان خواجه شیخ الاسلام و اعلم ولایت<sup>۱۲</sup> +<sup>۱۳</sup> و طغایی اش خالی بیک قوش بیگی را با اجناس

۱ × [د]

۲ نظم [ت]، قطعه [د]

۳ مادرش [د]

۴ آبروی [د]

۵ × [ت] [د]

۶ × [ت] [د]

۷ عظیم بای [د]

۸ × [د]

۹ امیر [ت]

۱۰ × [ت] [د]

۱۱ به [د]

۱۲ × [د]

این چنین روز را از خدا طلب میکردند، نمی یافتند، [چنانچه میگوید].<sup>۱</sup>

### نظم<sup>۲</sup>

ای آن که به ملک یافتی دست رسی      دستی داری کم طلب آزار کسی  
صد تیغ سیاست آن خرابی نکند      کار زده محنتی بر آرد نفسی

{۶۵۹} القصه. ندیمانی که بر دولت محمد علی خان ماده<sup>۳</sup> بر<sup>۴</sup> سر فقرا<sup>۵</sup> به چه نوع حکم میکردند، به کار میرفت. آرای<sup>۶</sup> کسی نبود که دست کس به دامن ایشان رسد. به یک ساعت فقرا هجوم کرده، خانه هژده ندیم را به تاراج بردند. + محمود دسترخانچی که<sup>#۸</sup> محمد علی خان ماده<sup>۹</sup> را به پیش امیر نصر الله سعی مینمود، خانه او را<sup>۱۰</sup> نیز به تاراج بردند<sup>۱۱</sup> [و خود]<sup>۱۲</sup> او را به قتل رسانیدند و آن دو فاحشه که عالم را (۷۲۱) سوخته بودند<sup>۱۳</sup>، خانه ایشان را چنان به<sup>۱۴</sup> یغما برده بودند که پرچه خشتی باقی نمانده بود و خود بی باکان را <۶۴۹پ> آن قدر جستند<sup>۱۵</sup>، آثارش را نیافتند و ایلچی بخارا را نیز تاراج کردند،

۱ × [د]

۲ رباعی [د]

۳ × [ت]، غازی [د]

۴ × [د]

۵ فقیر [د]

۶ آرای [د]

۷ و [د]

۸ [د]

۹ × [ت] [د]

۱۰ × [ت]

۱۱ برده [د]

۱۲ × [د]

۱۳ بود [د]

۱۴ × [د]

۱۵ جستن [ت]



بخارا رفت. > گفت، > امیر نصر الله میگوید. اگر محمد علی خان ماده<sup>۱</sup> ما را بر آمده، ببند، ولایت او را به او میگذارم<sup>۲</sup> و الا<sup>۳</sup> آماده جنگ باشد. > و<sup>۴</sup> ایلچی را به خانه<sup>۵</sup> دسترخوانچی فرود آورد<sup>۶</sup> [و به امرای خود]<sup>۷</sup> {۶۵۸پ} طرح مشاورت انداخت<sup>۸</sup>. در آن وقت بود که حاجی قلندر نام مسگر که خدمتکار فقیر بود، او را پیش از خود از شام شریف رخصت داده، فرستاده بودم و در علم مسگری نظیر و عدیل<sup>۹</sup> نداشت. همان وقت بلا توقف به پیش محمد علی خان ماده<sup>۱۰</sup> در آمده، گفت که > یک روز [حکم خود را اگر]<sup>۱۱</sup> به من دهید، لشکر منقیت<sup>۱۲</sup> را بی خلاف از سر شما دفع میکنم. > از آن جا که عقل و<sup>۱۳</sup> هوش از سر محمد علی خان ماده<sup>۱۴</sup> رفته بود، بلا اهمال انگشت قبول به دیده > ۶۴۹ر < نهاد<sup>۱۵</sup>. گفت، > به تو دادم. < چون مسگر از پیش آن ابله بر آمده، منادی کرد که > میر ما یک روزه حکومت خود را به من ارزانی [داده است]<sup>۱۶</sup>. میباید فقرا جمع شود. به مشاورت ایشان کار کنم. < این ندا بر تمام شهر رسید. چنان مردم هجوم کرده بودند که<sup>۱۷</sup> در هیچ عید و نوروز کسی ندیده بود و

- ۱ × [ت][د]
- ۲ میگذاریم [د]
- ۳ اله [د]
- ۴ چون [د]
- ۵ جای [د]
- ۶ آوردند [ت]
- ۷ و به امرای خود [ت]، خود به امراء [د]
- ۸ افکند [د]
- ۹ عدیلی [د]
- ۱۰ × [ت][د]
- ۱۱ اگر حکم خود را [د]
- ۱۲ منقیت [د]
- ۱۳ [د]
- ۱۴ × [ت][د]
- ۱۵ نهاده [ت][د]
- ۱۶ داده اند [ت][د]
- ۱۷ × [د]

توقصابه از جانب امیر نصر الله ایلچی شده، رفت و خبر رسانید که <sup>۱</sup> <ولایت اوراتپه به آسانی فتح شد و حکومت نو<sup>۲</sup> را به سلطان محمود خان + <sup>۳</sup> ارزانی داشتند<sup>۴</sup> و امیر لشکر شما محمد شریف پروانچی و حاکم اوراتپه کریم قلی<sup>۵</sup> دادخواه و محمود خواجه صدور دستگیر شدند و مدعای امیر ما {۶۵۸ر} این که ولایت خجند را و قورمه را و تاشکند بل تمام دشت قپچاق را به ما بدهد<sup>۶</sup> و الا شما دانید. اکنون چه میفرمایید. > در آن وقت محمد علی خان ماده<sup>۷</sup> حالتی پیدا کرده بود که به هیچ نقش دیوار نبود. کاش خوک تیر خورده میبود که <sup>۸</sup> به زخم تیر کارها میکرد. ایلچی بار دیگر گفت، <من به امیر نصر الله چه گویم. > بعد محمد علی خان ماده<sup>۹</sup> گفت، <ولایت خجند را به امیر نصر الله دادم. پسر مرا نیز به مال بسیار میفرستم<sup>۱۰</sup>. > + <sup>۱۱</sup> <۶۴۸پ> و ولایت را خالی کرده، به ایلچی گذاشت و کلید دروازه را سپرد و <sup>۱۲</sup> خود در غایت پریشان حالی فرار برقرار اختیار نمود و [بدر رفت و]<sup>۱۳</sup> فرزندش محمد امین خان را (۷۲۰) مع محمود دسترخانچی و میرزا ایوب را<sup>۱۴</sup> به پیش امیر نصر الله فرستاد و خود در نهایت سرعت متوجه خوقند شد. بعد از طی مسافت به چندین رسوایی<sup>۱۵</sup> به شهر در آمد و شرمنده خلق گشته نشست. بعد از پنج شش روز از تعاقب او پسرش مع ایلچی

- 
- |    |                    |
|----|--------------------|
| ۱  | × [د]              |
| ۲  | او [د]             |
| ۳  | دادر شما [د]       |
| ۴  | داد [ت]، دادند [د] |
| ۵  | قل [د]             |
| ۶  | بدهید [د]          |
| ۷  | × [ت]، غازی [د]    |
| ۸  | × [ت] [د]          |
| ۹  | × [ت]، غازی [د]    |
| ۱۰ | میفرستانم [ت] [د]  |
| ۱۱ | گفت [ت] [د]        |
| ۱۲ | × [ت]              |
| ۱۳ | × [د]              |
| ۱۴ | × [د]              |
| ۱۵ | رسوای [د]          |

داده، فرار بر قرار اختیار نمودند. در کمال پریشانی نیم از شب گذشته بود که به پیش محمد علی خان ماده<sup>۱</sup> (۷۱۹) گروه گروه سر و<sup>۲</sup> پا برهنه و بسیاری زخم دار و بی اسب رسیدن گرفتند. چون این حال را<sup>۳</sup> [مشاهده کرد]<sup>۴</sup>، هوش از سر پر نخوتش هزار گز بالا پرید. دانست که در عالم کون و<sup>۵</sup> فساد {۶۵۷پ} این نوع معامله ها بوده است. انگشت ندامت به دندان گزید. دست افسوس به هم سودن گرفت. مثل سگ دیوانه به هر سو میدوید و نمیدانست که چه چاره کند، [چنانچه گفته اند].<sup>۶</sup>

## بیت

به استواری اندیشه گوش در تدبیر      که از تردد وسواس صد خلل<sup>۷</sup> زاید

لا علاج از آن جا کوچیده، در موضع تاش قورغان نزول فرمود. +<sup>۸</sup> از آن جا <۶۴۸ر> باز داخل خجند شد و هر چند ندیمان خود را فرموده، لشکریان را منع میکرد و التجا مینمود<sup>۹</sup>، چندان فایده نمیکرد. رو به جانب خوقند می آوردند و ندیمانی که در پیش داشت، بسیاری ایشان +<sup>۱۰</sup> آهسته آهسته متوجه جانب خوقند شدند. محمد علی خان ماده<sup>۱۱</sup> دانست که کار چیست. او نیز اختیار فرار نمود. در آن حین بود که حاکم جیزخ آستانه قلی<sup>۱۲</sup>

۱۸ جای [د]

۱ × [ت]، غازی [د]

۲ × [ت]

۳ محمد علی خان [د]

۴ دید [د]

۵ × [ت] [د]

۶ × [د]

۷ بلا [د]

۸ و [د]

۹ مینمودند [د]

۱۰ نیز [د]

۱۱ × [ت]، غازی [د]

۱۲ قل [د]

و قلعه ضامین را نیز تصرف نموده است. این خبر را [محمد علی خان ماده]<sup>۱</sup> شنیده، یک چیز چشمش<sup>۲</sup> +<sup>۳</sup> روشن<sup>۴</sup> شد. دو عرابه از سرو قدان و سیه چشمان خوقندی که در حسن و جمال به<sup>۵</sup> آفتاب<sup>۶</sup> دعوی<sup>۷</sup> هم سری {۶۵۷} میکردند، به خود همراه آورده بود. در حال رخصت داد. +<sup>۸</sup> دو عرابه کبوتر که دوام در [حضر و سفر]<sup>۹</sup> همراه بود، او را نیز گردانید و خود در تنگی خجند بر آسود و سر کرده هایی که در اوراتپه بودند، به ایشان خبر رسید که<sup>۱۰</sup> اینک لشکر بخاری<sup>۱۱</sup> رسید. ایشان نیز با لشکر فرغانه متوجه آن صوب شدند. چون<sup>۱۲</sup> در موضع آب جامک هر دو دریای لشکر <۶۴۷پ> ملاقی شده<sup>۱۳</sup>، به هم در آمیختند. چنان جنگی به وقوع آمد که رزم پیشینیان از دفترها محو گشت. از آن جا که شریعت نبی علیه السلام کار سپاهی<sup>۱۴</sup> فرغانه کرده بود، هر چند سعی و کوشش کردند، به جایی<sup>۱۵</sup> نرسید و ستاره طالع ایشان در هبوط افتاد و کوکب ظفر از جانب لشکر بخارا<sup>۱۶</sup> وزید. بعد از محاربات بسیار لشکر<sup>۱۷</sup> فرغانه دیدند که کوشش به جایی<sup>۱۸</sup> نمیرسد. لاعلاج تن به قضا در

- 
- |                         |    |
|-------------------------|----|
| محمد علی خان [ت]، × [د] | ۱  |
| چشم [د]                 | ۲  |
| محمد علی خان غازی [د]   | ۳  |
| گشاده [د]               | ۴  |
| با [د]                  | ۵  |
| آفتابی [د]              | ۶  |
| دعوی [د]                | ۷  |
| و [ت] [د]               | ۸  |
| سفر و حضر [د]           | ۹  |
| × [د]                   | ۱۰ |
| بخارا [د]               | ۱۱ |
| × [د]                   | ۱۲ |
| گشته [د]                | ۱۳ |
| سپاه [د]                | ۱۴ |
| جای [د]                 | ۱۵ |
| بخاری [د]               | ۱۶ |
| لشکریان [د]             | ۱۷ |

ذکر<sup>۱</sup> لشکر کشیدن محمد علی خان ماده<sup>۲</sup> به صوب خجند و از آن جا فرار نموده، به خوقند آمده، خانه نشین شدن آن نسناس<sup>۳</sup>

الغرض<sup>۴</sup>. + تمام لشکر فرغانه را فراهم آورده، او نیز به جانب اوراتپه لشکر کشید و لشکر قوش بیگی و محمد شریف <۶۴۷ر> پروانچی و بهادر پروانچی و گدای بای پروانچی و [غیرها از سرداران]<sup>۵</sup> لشکر پیش فرمود. + خود<sup>۶</sup> با لشکر خوقند طی<sup>۷</sup> مراحل نموده، در ولایت خجند وارد گردید. سر کرده ها به اوراتپه نزول فرمودند. روز دیگر خبر رسید که امیر نصر الله قلعه یام را به تحت توپ گرفته، به سه روز مسخر<sup>۸</sup> نمود و اسحاق + دیوان بیگی را دستگیر نموده، به درجه شهادت رسانیده است، [به حکم آن که]<sup>۹</sup>

### بیت

راستی خاتم فیروزه<sup>۱۰</sup> بو اسحاقی خوش درخشید ولی دولت مستعجل بود

- 
- ۱ × [د]
  - ۲ × [ت]، غازی [د]
  - ۳ نا سپاس؟ [س]
  - ۴ × [د]
  - ۵ چون محمد علی خان غازی این خبر را شنید [د]
  - ۶ غیر دیگر از سرداران [ت]، غیر دیگر سرداران را با [د]
  - ۷ و [د]
  - ۸ او [د]
  - ۹ قطع [د]
  - ۱۰ فتح [د]
  - ۱۱ بیک [ت]
  - ۱۲ به حکم آن که گفته اند [ت]، × [د]
  - ۱۳ فیروز [د]

روز به حاشیه < ۶۴۶ پ > خاطر و ضمیر پر فسادش نمیگذشت. حضرت آفریده گار سبحانه و تعالی حکمی که به نفاذ خواهد رسانید، به میل غفلت دیده بصیرت بی نایان تیره و خیره گرداند، تا راه صواب از ایشان پوشیده شود. چون [جور زنان فاحشه]<sup>۱</sup> به حکم محمد علی خان ماده<sup>۲</sup> در ملک خوقند به سرحد افراط کشید و بی پروایی<sup>۳</sup> +<sup>۴</sup> در باره امرا و سپاه به وضوح پیوسته، به درجه کمال رسید. همه دست از وی شستند، [به حکم آن که]<sup>۵</sup>

## بیت

همان به که لشکر به جان پروری      که سلطان به لشکر کند سروری

القصه<sup>۶</sup>. با وجود ناشدن کار را دانسته<sup>۷</sup>، حکومت قلعه یام را به برادر ام اسحاق دیوان بیگی تفویض نمود<sup>۸</sup>. در آن وقت بود خبر رسید که امیر نصر الله با لشکر (۷۱۸) انبوه نور چشمی سلطان محمود خان را پیش جنگ کرده<sup>۹</sup>، متوجه ولایت اوراتپه شده است. [این خبر را {۶۵۶ پ} محمد علی خان ماده شنید.]<sup>۱۰</sup> [در غرقاب تحیر فرو رفت و نمیدانست که چه تدبیر اندیشد.]<sup>۱۱</sup>

---

۱ × [ت]

۲ × [ت]، غازی [د]

۳ پروای [د]

۴ محمد علی خان [د]

۵ چنانچه گفته است [د]

۶ × [ت]

۷ دانستن [د]

۸ نمودند [د]

۹ نموده [د]

۱۰ این خبر را محمد علی خان شنید [ت]، × [د]

۱۱ × [ت] [د]

## بیت

این درگه مادر که نومیدی نیست صد بار اگر توبه شکستی<sup>۱</sup> باز آی

اما ابلیس لعین بر<sup>۲</sup> دل آن ملعون چنان معقول کرده بود که میگفت، >اگر من در این وقت از این کار باز ایستم، مردم میگویند که<sup>۳</sup> از ترس باز ایستاد. بنابر آن دست از این کار باز نخواهم داشت.<، چنانچه<sup>۴</sup>

## بیت

ماری<sup>۵\*</sup> تو که هر کرا بو<sup>۶</sup> بینی بگری بو می که به هر کجا نشینی بکنی

[سعدی گوید.]<sup>۷</sup>

رازت<sup>۸</sup> از پیش می‌رود با ما با خداوند غیب دان نرود

امرا از این جواب نالایق او در اندیشه فرو رفتند. حیران به کار خود شدند و از افعال نا صواب آن عفریت منظر متألّم گردیدند و به زخم بی دوا مبتلا شده، مرهمی نمی یافتند. جز صبر {۶۵۶ر} چاره ای نمیدیدند و [نیستی آن ابله را]<sup>۹</sup> از پادشاه حقیقی مسئلت مینمودند و به سهولت میسر نمیشد و محمد علی [خان ماده را]<sup>۱۰</sup> چنان غفلت فرو گرفته بود که چنین

۱ شکسته [د]

۲ در [د]

۳ × [د]

۴ چنانچه میگوید [ت]، × [د]

۵ [ت][د]، مار [س]

۶ به [د]

۷ وله [ت]

۸ زورت [د]

۹ × [ت]

۱۰ × [ت]، خان غازی را [د]

## مصراع

شاید که ز صد ناله<sup>۱</sup> یکی کار گر آید

به پادشاه حقیقی مینالیدند و میگفتند. >ای بزرگان ممالک فرغانه شمایان<sup>۲</sup> را ظلم کش ظالم کش میگفتند. {۶۵۵پ} ظلم کشی را می بینیم<sup>۳</sup>. ظالم کشی را [نمی بینیم]<sup>۴</sup>. معلوم شد که (۷۱۷) +<sup>۵</sup>، الاشیاء مرهونه باوقاتها، موقوف بوده است. هر چند امرا میگفتند که اکنون مقدمه فتور<sup>۶</sup> دولت شده<sup>۷</sup>، میباید [که مادر زن]<sup>۸</sup> خود<sup>۹</sup> را رخصت دهد<sup>۱۰</sup> و از دیگر کارهای ناشایسته<sup>۱۱</sup> خود<sup>۱۲</sup> +<sup>۱۳</sup> از صمیم قلب به درگاه <۶۴۶ر> خالق بی نیاز توبه کند<sup>۱۴</sup>. شاید که<sup>۱۵</sup> مقبول +<sup>۱۶</sup> الهی شود<sup>۱۷</sup>، به حکم آن که، [گفته اند.]<sup>۱۸</sup>

- 
- |    |              |
|----|--------------|
| ۱  | گریه [د]     |
| ۲  | شما [د]      |
| ۳  | بینم [د]     |
| ۴  | ندیدیم [د]   |
| ۵  | به مضمون [د] |
| ۶  | فطور [ت]     |
| ۷  | شده است [د]  |
| ۸  | × [ت]        |
| ۹  | × [د]        |
| ۱۰ | دهید [د]     |
| ۱۱ | ناشایست [ت]  |
| ۱۲ | نیز [د]      |
| ۱۳ | کند [د]      |
| ۱۴ | × [د]        |
| ۱۵ | درگاه [د]    |
| ۱۶ | گردد [د]     |
| ۱۷ | × [د]        |



بود، در ملک دست تعدی گشادند. +<sup>۱</sup> [زن و دختر مسلمانان را]<sup>۲</sup> شب مخفی میبردند.<sup>۳</sup> اکنون به<sup>۴</sup> روز روشن میبرند.<sup>۵</sup> علما و امرا و فقرای شهر و<sup>۶</sup> صحرا از جور و<sup>۷</sup> جفای [آن دو زن مکاره]<sup>۸</sup> به ستوه آمده بودند و خان [پادشاه که مادر زن او بود، مهر و محبت]<sup>۹</sup> او را چنان<sup>۱۰</sup> در دل +<sup>۱۱</sup> جای داده بود که در ملک او<sup>۱۲</sup> به<sup>۱۳</sup> هر نوع تصرف میکرد. به کار میرفت، [چنانچه گفته اند].<sup>۱۴</sup>

## بیت

حیف باشد که از برای زنی      پاره سازی به دری<sup>۱۵</sup> پرهنی

و کسی را قدرت به جز هان هون نبود. [چه او مادر زن او بوده است]<sup>۱۶</sup>، مردم چار و<sup>۱۷</sup> ناچار از بیم خود چیزی نمیگفتند، به امیدی که

- 
- |    |  |
|----|--|
| ۱  | سابق [د]                                   |
| ۲  | × [ت]                                      |
| ۳  | میرد [ت]                                   |
| ۴  | × [د]                                      |
| ۵  | میبردند [د]                                |
| ۶  | [د]  |
| ۷  | [د]  |
| ۸  | × [ت]                                      |
| ۹  | × [ت]                                      |
| ۱۰ | × [د]                                      |
| ۱۱ | خود [ت]، ناپاک خود [د]                     |
| ۱۲ | × [د]                                      |
| ۱۳ | × [ت]                                      |
| ۱۴ | × [د]                                      |
| ۱۵ | هرزه [د]                                   |
| ۱۶ | های هوی نبود [ت]، چه او مادر زن او بود [د] |
| ۱۷ | × [ت]                                      |

نصر الله قلعه پشاغر را فتح نموده و گدای بای پروانچی قلعه را گذاشته، به لشکر ملحق [شده است]<sup>۱</sup> و امیر نصر الله به جانب مقر خود مراجعت فرموده، در ولایت ثمرقند نزول فرموده است و از ولایت شهر سبز برادرش سلطان محمود خان را طلب نموده، بسیار گرامی داشت و<sup>۲</sup> حکومت اورمیتن<sup>۳</sup> + مع تمام کوهستان را<sup>۴</sup> تفویض نموده است و خود به جانب بخارا متوجه شده است. چون این خبر را [محمد علی خان ماده]<sup>۵</sup> شنید، چون مار افعی<sup>۶</sup> در آتش می پیچید. در آن وقت بود که لشکریان فرغانه با چندین رسوایی<sup>۷</sup> به خوقند وارد گردید<sup>۸</sup>، چنانچه<sup>۹</sup>، {۶۵۵ر} میفرماید<sup>۱۰</sup>.

## بیت

پراکنده لشکر نیاید به کار دو صد مرد جنگی به از صد هزار

و محمد علی خان ماده<sup>۱۱</sup> کار ناشایسته<sup>۱۲</sup> خود را چند درجه از اول زیاد<sup>۱۳</sup> گردانید. چنانچه [خوشحال و آشوله آن دو فاحشه عقربیت دنبه پشت که]<sup>۱۴</sup> <۶۴۵پ> ماده فساد

- ۱ شد [ت] [د]
- ۲ × [ت]
- ۳ را [ت] [د]
- ۴ × [ت] [د]
- ۵ مادر زن [ت]، × [د]
- ۶ افعب [د]
- ۷ رسوای و پراکنده گی [ت]، رسوای [د]
- ۸ گردیدند [د]
- ۹ × [د]
- ۱۰ میفرمایند [ت]، × [د]
- ۱۱ × [ت]، غازی [د]
- ۱۲ ناشایع [د]
- ۱۳ زیاده [د]
- ۱۴ × [ت]

تمام امرا از گفته خود پشیمان شده<sup>۱</sup>، نمیدانستند که چه تدبیر کنند. بالاخر دیدند + کار<sup>۲</sup> نمیشود. لا علاج همه سر کرده ها جمع شده، طرح مشاورت در میان انداختند. > اگر کوچیده، به جانب خوقند مراجعت فرمایند، از محمد علی خان + <sup>۳</sup> می هراسیدند و اگر در آن جا سکونت اختیار کنند، او را نیز نمیدانستند. < قریب صد هزار لشکر در آن بیابان بی پایان بی صاحب کار کردن خود را ندانستند<sup>۴</sup>، حیران و سرگردان میبودند. پی در پی از تعاقب محمد علی خان ماده<sup>۵</sup> قاصد در کمال تعجیل فرستاده، رخصت میجستند که {۶۵۴پ} چه میفرمایند. موافق امرشان کار کنیم. هر خطی که از امرا به محمد علی خان ماده<sup>۶</sup> میرسید، نمیدید. + <sup>۷</sup> اگر میدید، ناسزا میگفت، چنانچه<sup>۸</sup>

### مصراع

هر که بی تدبیر کاری کرد سامانی نیافت

گویند، در میان یک هفته چهل<sup>۹</sup> قاصد (۷۱۶) رسیده بود. به یکی او جواب نداد و امرا دیدند که < ۶۴۵ر > دادشان به جای نمیرسد. لا علاج از آن موضع کوچیده، میان یام و ضامین را لشکرگاه خود<sup>۱۰</sup> ساختند. در آن وقت بود + <sup>۱۱</sup> محمد علی خان ماده<sup>۱۲</sup> شنید که امیر

۱ گشته [ت][د]

۲ که [د]

۳ × [ت]، غازی [د]

۴ نمیدانستند [ت]، ندانسته [د]

۵ × [ت]، غازی [د]

۶ × [ت]، غازی [د]

۷ و [د]

۸ × [د]

۹ چل [ت]

۱۰ × [د]

۱۱ که [د]

۱۲ × [ت]، غازی [د]

در<sup>۱</sup> جیب تفکر فرو برد. در آن وقت لشکر قوش بیگی و محمد شریف اتالیق مکرر رفته، گفتند که <لشکر را بی صاحب گذاشته، در این موضع نشستن شما از حزم دور است.> چون سخن ایشان را گوش کرد، در آشفت. بلا اهمال از جای برجست. تمامی<sup>۲</sup> لشکر<sup>۳</sup> را در آن جا<sup>۴</sup> گذاشته،<sup>۵</sup> با دو محرم متوجه اوراتپه گشت. هر کس از تعاقب او میرسید، فحش میگفت و<sup>۶</sup> ناسزا {۶۵۴ر} میداد. در کمال سرعت با هفده تن [از محرمان]<sup>۷</sup> نیم از شب گذشته بود که در اوراتپه وارد گردید. سحر<sup>۸</sup> پگاه از آن جا سواری نموده، با دویست کس به ولایت خجند نزول فرمود. روز <۶۴۴پ> دیگر از آن جا<sup>۹</sup> کوچیده، در کمال سرعت به یک منزل به خوقند داخل شد و فاحشه های خود را جمع نموده، به خوردن بوزه پرداخت، چنانچه<sup>۱۰</sup>

مصراع<sup>۱۱</sup>

عاقبت میمون لولی را گزند از چنبر است

زبده کلام آن که چون محمد علی خان ماده<sup>۱۲</sup> لشکریان را گذاشته، متوجه مقصد شد،

- 
- |    |                         |
|----|-------------------------|
| ۱  | به [ت] [د]              |
| ۲  | تمام [د]                |
| ۳  | فرغانه [د]              |
| ۴  | زمین [د]                |
| ۵  | خود [د]                 |
| ۶  | یا [ت]                  |
| ۷  | × [د]                   |
| ۸  | سحری [د]                |
| ۹  | شهر [د]                 |
| ۱۰ | به حکم آن که [ت]، × [د] |
| ۱۱ | × [ت]                   |
| ۱۲ | × [ت]، غازی [د]         |

<sup>۱</sup>+ در آن جا تمام لشکریان را گذاشته، خود با صد کس متوجه جیزخ شد. در آن وقت از لشکریان فرغانه سبقت کرده، به سپاه<sup>۲</sup> جیزخ جنگ میکردند و امرا دیدند که محمد علی خان ماده<sup>۳</sup> با صد کس اراده<sup>۴</sup> محربه دارد. [چندی از]<sup>۵</sup> ایشان مثل لشکر قوش بیگی و محمد شریف {۶۵۳پ} اتالیق و بهادر پروانچی در کمال سرعت آمده، گفتند، <شما با این چند کس کم به کجا میروید.> محمد علی خان ماده<sup>۶</sup> در آن وقت <۶۴۴ر> در غایت مستی<sup>۷</sup> بوزه<sup>۸</sup> بود. گفت، <من با سپاه جیزخ جنگ میکنم و خود نیز آرزوی کس خلانیدن دارم.> ایشان گفتند، <شما حاکم ممالک فرغانه اید و حالا در درون<sup>۹</sup> +<sup>۱۰</sup> جیزخ سه هزار کس مرد جرار موجود. به این صد کس رفتن (۷۱۵) شما از حکمت نیست و اگر تماشای جنگ به خاطر دارید، تمام لشکریان را امر فرمایید. قلعه<sup>۱۱</sup> جیزخ را چون نگین انگشتی در میان گیریم و +<sup>۱۲</sup> شما سیر محاربه نمایید و الا به هلاک خود میکوشید.> چون محمد علی خان ماده<sup>۱۳</sup> از امرای خود این سخن را شنید، به ایشان چیزی نگفته<sup>۱۴</sup>، از اسب فروز آمده<sup>۱۵</sup>، سر

- ۱ و [ت][د]
- ۲ سپاهی [ت]
- ۳ × [ت]، غازی [د]
- ۴ آماده [د]
- ۵ چندی [ت]، چند [د]
- ۶ × [ت]، غازی [د]
- ۷ مست [ت]
- ۸ × [د]
- ۹ میان [د]
- ۱۰ ولایت [د]
- ۱۱ ولایت [د]
- ۱۲ خود [د]
- ۱۳ × [ت]، غازی [د]
- ۱۴ نگفت [د]
- ۱۵ آمد [د]

علمای بخارا بینند. به کدام دلیل حلیت او را<sup>۱</sup> ثابت کرده<sup>۲</sup> باشند<sup>۳</sup>. چون ایلچی سخن را تمام کرد و<sup>۴</sup> محمد علی خان ماده<sup>۵</sup> از جهة جهل مرکب داشتن چنان آتش خشم بر روی غلبه کرده بود که بلا توقف از جای برخاست و ایلچی را بر زمین زد {۶۵۳} و سر او را به دندان میگزید. بعد ندیمان از دست محمد علی خان ماده<sup>۶</sup> جدا کردند و حکم نمود <۶۴۳پ> که<sup>۷</sup> همه ایشان را دستگیر نموده، به حبس اندازند.

ذکر<sup>۸</sup> لشکر کشیدن محمد علی خان ماده<sup>۹</sup> در بالای جیزخ و قلعه پشاغر را انداخته، بی وجه از امرا رنجیده، مثل سگ دیوانه بمقر خود مراجعت فرمودن آن برگشته بخت در تاریخ<sup>۱۰</sup> سنه ۱۲۵۵ بود که محمد علی خان غازی دیوانه وار بلا اهمال تمام<sup>۱۱</sup> لشکر فرغانه را جمع نموده، متوجه جیزخ شد. بعد از طی مسافت در ولایت پشاغر وارد گردید. قلعه ای در کمال استحکام بنا فرمود و گدای بای<sup>۱۲</sup> را با مبارزان کینه خواه در آن قلعه گذاشته، خود باز گشت نموده، به شاه راه بزرگ نزول فرمود. <sup>۱۳</sup>

## بیت

آن تیره رای کرد به ملک تو چشم سرخ      تا زرد روی گشت جهان شد به رو سیاه

- ۱ × [د]
- ۲ میشده [د]
- ۳ باشد [د]
- ۴ × [د]
- ۵ غازی [ت] [د]
- ۶ × [ت]، غازی [د]
- ۷ × [ت] [د]
- ۸ × [د]
- ۹ × [ت]، غازی [د]
- ۱۰ × [د]
- ۱۱ × [ت]
- ۱۲ ولد داوول پروانچی [د]
- ۱۳ چنانچه [ت]

میان +<sup>۱</sup> از هزار جا بسته، در صدد<sup>۲</sup> این امر بزرگ شد، [چنانچه گفته اند.]<sup>۳</sup>

### بیت

بیک تدبیر نیکو آن توان کرد      که نتوان با سپاه بیکران کرد

+<sup>۲</sup>

[بعد از آن به مصلحت حضرت ایشان به امیر نصر الله]<sup>۵</sup> سلطان محمود خان {۶۵۲پ} به این مضمون خط نوشت که >شنیدم که برادرم محمد علی خان موطوء<sup>۶</sup> <۶۴۳ر> پدر را حلال دانسته، در عقد خود در آورده است. [بخارای شریف]<sup>۷</sup> معدن علما است. در این مسئله چه حکم میکرده باشند. شما بزرگ ما وراء النهر اید. به این امر شنیع چه میفرمایید. < چون خط به دست امیر نصر الله رسید، او نیز این مقدمه را شنیده بود. بلا توقف عبد الرحیم<sup>۸</sup> قلماق که ندیم او بود، بر سبیل ایلچی گری به پیش محمد علی خان ماده<sup>۹</sup> فرستاد و آن بیچاره با<sup>۱۰</sup> چندین تجمل طی مسافت نموده، به خوقند رسید و محمد علی خان ماده<sup>۱۱</sup> او را به حرمت داشت. روز جواب آن بیچاره گفت، امیر نصر الله میگویند، علمای (۷۱۴) خوقند موطوء<sup>۱۲</sup> پدر به فرزند جایز گفته، روایت داده اند. ما در بخارا هر چند کتابهای معتبره را تفتیش کردیم، حلیت او را نیافتیم. اگر همان روایت را فرستانند،

۲۱ × [ت]، مادر زن [د]

۱ را [د]

۲ سدد [س] [ت]، سصدی [د]

۳ × [د]

۴ ذکر خط نوشتن سلطان محمود خان به امر حضرت ایشان به امیر نصر الله [د]

۵ × [د]

۶ موطوءه [ت]

۷ بخارا [د]

۸ رحیم [ت]

۹ غازی [ت] [د]

۱۰ به [د]

۱۱ غازی [ت] [د]

۱۲ موطوءه [ت]، موطوءه [د]

گشتیم<sup>۱</sup>، سپندوار در مجمر آتش سوختن آغاز کردیم<sup>۲</sup>. < ۴۲ پ > +<sup>۳</sup> به اتفاق هم دیگر به پیش جناب قطب الاولیا غوث الاتقیا [به خدمت]<sup>۴</sup> ایشان شافعی رفتیم. جناب ایشان نیز این مقدمه را شنیده بودند<sup>۵</sup>. باز<sup>۶</sup> از ما استفسار نمودند<sup>۷</sup>. ما صورت واقعه را بیان نمودیم<sup>۸</sup>. [به جناب شان]<sup>۹</sup> غیرت دین<sup>۱۰</sup> احمدی دست داد. به سلطان محمود خان در آشتند<sup>۱۱</sup> [و گفتند. شخصی را که کافر بودنش به آیت و حدیث و به قول مجتهدین ثابت شده باشد،]<sup>۱۲</sup> هزار بار از برای رواج<sup>۱۳</sup> دین محمدی<sup>۱۴</sup> سعی نکنید<sup>۱۵</sup> و خلاصی مسلمانان<sup>۱۶</sup> از دست آن ملعون نجوید<sup>۱۷</sup>، [او نیز داخل همین حکم است. چون]<sup>۱۸</sup> این سخن را سلطان محمود خان از حضرت ایشان شنید، [بلا توقف]<sup>۱۹</sup> از برای محاربه<sup>۲۰</sup> محمد علی خان ماده<sup>۲۱</sup> فی سبیل الله

- ۱۴ از این خبر [د]  
 ۱ گشت [ت]  
 ۲ کرد [ت]  
 ۳ روزی [ت] [د]  
 ۴ × [د]  
 ۵ بود [ت]  
 ۶ × [د]  
 ۷ نمود [ت]  
 ۸ کردیم [د]  
 ۹ × [د]  
 ۱۰ دینی [ت]  
 ۱۱ آشت [ت]  
 ۱۲ به چندین آیت که در بالا مذکور شد. دلیل آورده، فرمودند که [د]  
 ۱۳ × [د]  
 ۱۴ نبی علیه السلام [د]  
 ۱۵ بکنید [د]  
 ۱۶ مسلمان [ت]  
 ۱۷ نجوید [ت]، بجوید [د]  
 ۱۸ × [د]  
 ۱۹ بی توقف [ت]، × [د]  
 ۲۰ ضرر [د]



میگفتند. مدتی آن ملعونان عمر به سر می بردند. از آن دو ناپاک سه فرزند<sup>۱</sup> مقتی که<sup>۲</sup>  
[خدای تعالی]<sup>۳</sup> در قرآن ذکر +<sup>۴</sup> کرده است. در وجود آمده<sup>۵</sup>، مشق محمد علی خان ماده<sup>۶</sup> که  
در مدح مادر زن<sup>۷</sup> خود گفته است<sup>۸</sup>، این است.

### بیت

پنجره ایچیگا کیرگان خان نگاریم اوزلاری  
کیچه سی می لار ایچب کوزندوز خماریم توغروسی

این مصراع نیز از آن ناپاک است.

### مصراع<sup>۹</sup>

آتینگ نی آتی سید غازی سن غازی<sup>۱۰</sup> ایمان سین

[ذکر خط نوشتن فقیر و سلطان محمود خان به امر حضرت ایشان شافعی {۶۵۲} به امیر

### نصر الله<sup>۱۱</sup>

[چون از این خبر]<sup>۱۲</sup> در آن وقت [فقیر و]<sup>۱۳</sup> نور چشمی سلطان محمود خان +<sup>۱۴</sup> واقف

۱ فرزندی [ت]

۲ × [د]

۳ خدا [د]

۴ آن [ت]

۵ آمد [د]

۶ × [ت]، غازی [د]

۷ × [ت]

۸ × [د]

۹ [د]

۱۰ غازیه [ت]

۱۱ ذکر خط نوشتن سلطان محمود خان به امر حضرت ایشان شافعی به امیر نصر الله [ت]، × [د]

۱۲ × [د]

۱۳ × [ت]

این امر قبول نمیفرمایند. وقتی که در اشکم مادر بودیم، بیقضیب نبودیم.<sup>۱</sup> + خصوص در وقت وضع حمل البته به فرج مادر قضیب رسیده باشد. چرا در آن وقت رسیدنش جایز بوده است. حالا نمیشده است. این قدر هست که<sup>۲</sup> آن در عالم طفولیت بوده است، حالا در عالم [بلاغت است].<sup>۳</sup> سخن آن گبر بی دین به گوش آن ملعون رسید. خنده زنان<sup>۴</sup> گفت، >چه خوش میگوی<sup>۵</sup>، تا بالوقت هیچ کس {۶۵۱پ}> {۶۴۲ر}> به این نوع سخن موافق طبع<sup>۶</sup> نگفته است. بلا توقف سر و پای عالی به او بخشید و حکم تمام قمار بازان و کبوتر بازان را به او تفویض نمود. آری گفته اند که<sup>۷</sup>

## بیت

از بدان جز بدی نیاموزی      نکند گرگ<sup>۸</sup> پوستین دوزی

[و هم گوید.]

## بیت

نخوانده ام نشنیده ندیده ام هرگز      کسی به جای پدر حکم کرد و مادر گاد<sup>۹</sup>

(۷۱۳) خلص کلام آن که مادر خود را در عقد خود در آورد و این خبر به ولایت فرغانه بل به<sup>۱۰</sup> تمام ربع مسکون شایع شد و همه انگشت تحیر به دندان گزیده، لعنت

۱ و [ت]

۲ × [ت]

۳ شبایت [د]

۴ کنان [ت]

۵ میگوی [د]

۶ طبعم [د]

۷ × [د]

۸ گورگ [ت]

۹ × [ت] [د]

۱۰ بر [د]

المفسرين و لما قالوا اکتنا نفعل ذلك فكيف حال ما كان منّا قال الا ما قد سلف ای لكن ما قد سلف فانکم لا یواخذون و الاستثناء منقطع عن سبویه<sup>۱</sup> ثم بین صفة هذا العقد فی الحال فقال انه كان فاحشة باللغة فی القبح و مقتا و بغضا عند الله و عند المؤمنین و الناس منهم یمقتونه من ذوی مر و انهم و بسمونه نکاح المقت و كان المولود علیه یقال له المقتی و ساء سبیلاً و بئس الطريق طریقاً ذلك تفسیر مدارک من نفسه و الاصل فی هذا ان من تکلم (۷۱۲) بكلمة او اعتقد بشیء یكون خلاف النص او ما یقوم مقام النص کالسنة الظاهرة الثابة و اجماع الامة فانه یوجب الکفر تمهید ابو شکور سالمی من نصه من باب حادی عشر فی السنة و الجماعة و من تکلم فی افعال عباد الله او فی اصحاب رسول الله صلی الله علیه و سلم او کان مخالفاً للنص الصریح او للخبر المتفق [۶۵۱ر] > ۶۴۱پ < علیه او الاجماع فانه یوجب الکفر بالاخلاف تمهید [ابو شکور]<sup>۲</sup> من نصه الاستهزاء علی الشریعة کفر و خفة الذنوب کفر منه ایضاً و منکر الاجماع یكون کفراً فتاوی<sup>۳</sup> حمادیه<sup>۴</sup> + < چنانچه گفته اند.

### بیت

باش تا دستش بو<sup>۵</sup> بندد روزگار      بس به کام دوستان مغزش برار

القصة، محمد علی خان ماده<sup>۶</sup> قمار بازان و کبوتر بازانی که عمرها الفت شده بودند<sup>۷</sup>، لاف جوهره گی میزدند. به پیش خود طلب نمود. به ایشان نیز اظهار این راز نمود. همه به اتفاق یک دیگر گفتند. < بسیار خوب و مناسب. > و<sup>۸</sup> در میان آن قوم یکی بود، قرا محرم نام که ابلیس را یکی از شاگردان خود میشمرد، گفت، < سخن علما را من<sup>۹</sup> تحسین میمانم که

۱ سیبویه [د]

۲ [د]

۳ فتاوی [د]

۴ من نفسه [د]

۵ به [د]

۶ × [ت]، مادر زن [د]

۷ × [د]

۸ × [د]

۹ من سخن علما را [ت] [د]

معصیه بدلیل قطعی و الاستهزار<sup>۱</sup> بها کفر اذا اعتقد الحرام حلالاً فان کان حراماً<sup>۲</sup> لعینه و ثبت بدلیل قطعی یکفر<sup>۳</sup> + عقاید نسفی من نفسه. > محمد علی خان ماده<sup>۴</sup> چون این مسئله ها<sup>۵</sup> را شنید، دانست که از دو سر کافر میشود<sup>۶</sup>. گفت، >من شمایان را از برای تدبیر کار خود در پیش خود طلب نمودم. نه از برای ملایی<sup>۷</sup>. همه را از پیش خود راند.

## [بیت]

هرچه در شرع عقل بد باشد      نکند هر که با خرد باشد<sup>۸</sup>

و مدعای او این بود که کاری کند که از بنای آدم تا بالوقت کسی نکرده باشد و هم نشنیده باشد. هم مردود خالق شود و هم مردود خلاق و هم تا قیامت در مجلس ها لعنت کنند و هم منکر<sup>۹</sup> نص شود. آن ملعون دید که همه چیز به این کار موجود است. > ۶۴۱ ر < بنابر آن خلاف این چند مسئله را اختیار نمود { ۶۵۰ پ } نص صریح این است که > و<sup>۱۰</sup> لا تنکحوا ما نکح آباءکم<sup>۱۱</sup> من النساء و قيل المراد بالنکاح الوطی ای و لا تطوا<sup>۱۲</sup> ما وطی آباءکم<sup>۱۳</sup> و خیر<sup>۱۴</sup> تحریم و طی موطؤة الاب بنکاح او بملک یمین او بزناء کما هو مذهبنا و علیه کثیر من

۱ الاستهزاء [ت][د]

۲ حرمة [د]

۳ شرح [د]

۴ × [ت]، غازی [د]

۵ مسئله [د]

۶ میشده است [د]

۷ ملاگی [ت][د]

۸ × [ت][د]

۹ منکری [د]

۱۰ × [ت]

۱۱ [د]، آباءوکم [س][ت]

۱۲ یطئوا [د]

۱۳ [د]، آباءوکم [س][ت]

۱۴ فیه [د]

(۷۱۱) بر<sup>۱</sup> تکفیر<sup>۲</sup> شما خواهند نمود<sup>۳</sup> و + تا انقراض عالم لعنت بر شما خواهند گفت،  
 <۶۴۰پ> بهتر این که مثل عادت<sup>۵</sup> معهود به زنا عمر گذرانید. میشود و مخفی دارند<sup>۶</sup>.  
 {۶۵۰ر} [چنانچه گفته اند.]<sup>۷</sup>

## بیت

کارهای این چنین آن به که پنهانی شود آشکارا گر کنی البته رسوایی<sup>۸</sup> میشود<sup>۹</sup>

چرا که زنا از کفر بهتر است، چون ندیم اول<sup>۱۰</sup> سخن را به اتمام رسانید، +<sup>۱۱</sup> ندیم دیگری داشت، او گفت، <اصرار<sup>۱۲</sup> گناه کبیره<sup>۱۳</sup> را نیز کفر گفته اند. به این مسئله چه میگویند<sup>۱۴</sup>.> و<sup>۱۵</sup> گفت، +<sup>۱۶</sup> استحلال المعصیة صغیرة کانت او کبیره کفر اذا ثبت کونها

- 
- ۱۶ چار [ت]  
 ۱۷ × [د]  
 ۱ به [ت]  
 ۲ کفر [ت]  
 ۳ کرد [د]  
 ۴ هم [د]  
 ۵ × [د]  
 ۶ دارید [د]  
 ۷ × [د]  
 ۸ رسوای [د]  
 ۹ شود [د]  
 ۱۰ او [د]  
 ۱۱ یک [د]  
 ۱۲ اکثر [د]  
 ۱۳ × [د]  
 ۱۴ میفرماید [ت][د]  
 ۱۵ × [د]  
 ۱۶ و [د]

روزی مهر<sup>۱</sup> علما را در پیش خود طلب نمود و دو ملایی<sup>۲</sup> که دین خود را به دنیا فروخته بودند، [به ایشان]<sup>۳</sup> حکم نمود، روایتی نویس. ایشان از ترس جان چندی<sup>۴</sup> مالا یعنی نوشتند. آن ملعون آن روایت را مهر کرده<sup>۵</sup>، به زن نشان داد و زن نیز<sup>۶</sup> طالب این امر بود و<sup>۷</sup> بهانه میجست<sup>۸</sup>. بالرأس و العین قبول فرمود و ندانست که زنان،

## بیت

هر دم به هوای دلربای دیگر<sup>۹</sup> است      هر لحظه ز روی فکر جای دیگر<sup>۱۰</sup> است

و محمد علی خان ماده<sup>۱۱</sup> چندی دولتخواهان خود را در خلوت طلب کرد<sup>۱۲</sup> و این مدعا را در میان آورد. هر کدام چیزی گفتند. در آن میان ندیمی داشت، از دیگران حق گوی تر +<sup>۱۳</sup> گفت، > این کار به نص ظاهر الدلالة ثابت شده است. هر آینه این امر را حلال دانسته، نکاح کنید<sup>۱۴</sup>. نزدیک<sup>۱۵</sup> علمای چهار<sup>۱۶</sup> مذهب [کافر میشوید و علمای این عصر]<sup>۱۷</sup> حکم

۱۷ علاج [د]

۱۸ × [د]

۱ × [ت]

۲ ملای [د]

۳ × [د]

۴ چیزی [د]

۵ کرد [د]

۶ که [د]

۷ × [د]

۸ جو [د]

۹ دگر [د]

۱۰ دگر [د]

۱۱ × [ت]، غازی [د]

۱۲ داشت [د]

۱۳ بود [د]

۱۴ کنند [د]

۱۵ جمهور [د]

وقوع آوردن<sup>۱</sup> نیز از بد بختیهای محمد علی خان ماده<sup>۲</sup> بوده است، چنانچه دروغی او از<sup>۳</sup> آینه روشن تر<sup>۴</sup> گشت و عاقبت [ثمره آن]<sup>۵</sup> گل کرد، به حکم آن که +<sup>۶</sup>

### بیت

سوختیم از دست صرّافان جوهر<sup>۷</sup> ناشناس  
دایما خر مهره را با دُر برابر میکنند

ذکر حلال دانستن محمد علی خان ماده<sup>۸</sup> [مادر خود]<sup>۹</sup> خان پادشاه را و از بهر او دین دنیا  
[باختن آن ملعون ابدی]<sup>۱۰</sup>

مدت ها بود که محمد علی خان ماده<sup>۱۱</sup> [به مادر خود خان پادشاه ضمنا بازی میکرد و هر چند به علما]<sup>۱۲</sup> < ۶۴۰ ر > رجوع کرد که موطوعه<sup>۱۳</sup> پدر را در عقد خود در آوردن جایز { ۶۴۹ پ } است<sup>۱۴</sup>، یا نه. [علمای آن عصر هر چند]<sup>۱۵</sup> کوشش کردند، نیافتند. عاقبت دید<sup>۱۶</sup> که به راه اسلام علاج پذیر نمیشود. +<sup>۱۷</sup> مکرری دیگری<sup>۱۸</sup> اندیشید و مکر این بود که

- 
- |    |   |
|----|---|
| ۱  | آمدن [د]                                  |
| ۲  | × [ت]، غازی [د]                           |
| ۳  | چون [د]                                   |
| ۴  | روشن [د]                                  |
| ۵  | × [د]                                     |
| ۶  | گفته اند [ت]                              |
| ۷  | گوهر [ت] [د]                              |
| ۸  | × [ت]، غازی [د]                           |
| ۹  | × [ت] [د]                                 |
| ۱۰ | باختن آن ملعون [ت]، × [د]                 |
| ۱۱ | × [ت] [د]                                 |
| ۱۲ | × [ت]                                     |
| ۱۳ | [ت]، موطوی [س]، موطوء [د]                 |
| ۱۴ | [د]، هست [س] [ت]                          |
| ۱۵ | علماء آن عصر [ت]، هر چند علماء آن عصر [د] |
| ۱۶ | دیدند [ت]                                 |

معظمه<sup>۱</sup> و در مدینه منوره و<sup>۲</sup> به شریفان الفت شدم و<sup>۳</sup> در مصر و شام و غیر دیگر<sup>۴</sup> [ولایت ها]<sup>۵</sup> که<sup>۶</sup> {۶۴۹ع} موی مبارک<sup>۷</sup> آن حضرت [صلی الله علیه و سلم]<sup>۸</sup> در عالم موجود بوده است. > گفته، از کسی نشنیده بودم، یک بار شنیدم که در ولایت<sup>۹</sup> خوقند سه موی مبارک موجود شده است. فقیر در بحر تفکر<sup>۱۰</sup> فرو<sup>۱۱</sup> رفته، در تأمل<sup>۱۲</sup> بودم که این چه حکمت باشد. اگر موی مبارک<sup>۱۳</sup> آن حضرت [صلی الله علیه و سلم]<sup>۱۴</sup> نباشد، بر<sup>۱۵</sup> دروغ گیاهی را به آن حضرت [علیه الصلوة و سلم]<sup>۱۶</sup> نسبت دهند. جزای آن<sup>۱۷</sup> را خواهند کشید. گفته، به خاطر داشتم. بعده<sup>۱۸</sup> یقینم شد که این همه بدعت صریح را برپا [کردن و کار]<sup>۱۹</sup> خلاف شرع<sup>۲۰</sup> + به

۱۹ × [ت][د]

۱ معظم [د]

۲ × [د]

۳ × [ت][د]

۴ ذلک [د]

۵ ولایت [د]

۶ × [د]

۷ × [ت][د]

۸ × [د]

۹ × [ت]

۱۰ تحیر [ت][د]

۱۱ فر [ت]

۱۲ حیرت [د]

۱۳ × [ت][د]

۱۴ × [ت][د]

۱۵ × [د]

۱۶ × [ت][د]

۱۷ او [د]

۱۸ بعد [د]

۱۹ کرده [د]

۲۰ کارها [د]



آن حاجیان دغل بازان عمل نموده و آن گیاهان را موی مبارک<sup>۱</sup> حضرت خیر البشر<sup>۲</sup> دانسته، بدعت ظاهری پیدا<sup>۳</sup> کرده، چند روز در وقت محمد علی خان ماده<sup>۴</sup> خود را در ضلالت انداختند، [به حکم آن که  
قال نبی<sup>۵</sup> علیه سلام الناس علی دین ملوکهم\*<sup>۶</sup> و هم]<sup>۷</sup>

چنانچه [در خبر است که]<sup>۸</sup> نبی علیه السلام میگوید<sup>۹</sup> +<sup>۱۰</sup> > کل محدث بدعة و کل بدعة ضلالة [و کل ضال فی النار]<sup>۱۱</sup> کفایه شعبی من نفسه و<sup>۱۲</sup> عن ام المؤمنین عایشه رضی الله تعالی<sup>۱۳</sup> عنها +<sup>۱۴</sup> انها<sup>۱۵</sup> قالت قال رسول الله صلی الله علیه و سلم من احدث فی امرنا هذا ماليس منّا<sup>۱۶</sup> فهو ردّ رواه البخاری [و المسلم]<sup>۱۷</sup> و فی رواية المسلم من عمل عملاً ليس عليه امرنا فهو ردّ الحديث> از بس که < ۳۹۶ پ> < فقیر عالم آن<sup>۱۸</sup> را دیدم، (۷۱۰) که<sup>۱۹</sup> در مکه

- 
- |    |                            |
|----|----------------------------|
| ۱  | × [د]                      |
| ۲  | صلی الله علیه و سلم [ت]    |
| ۳  | برپا [د]                   |
| ۴  | × [ت]، غازی [د]            |
| ۵  | النبی [ت]                  |
| ۶  | [ت]، الملوکهم [س]          |
| ۷  | × [د]                      |
| ۸  | × [د]                      |
| ۹  | میگویند [ت]، میفرمایند [د] |
| ۱۰ | که [د]                     |
| ۱۱ | [ت]                        |
| ۱۲ | × [د]                      |
| ۱۳ | × [ت] [د]                  |
| ۱۴ | و [ت]                      |
| ۱۵ | × [د]                      |
| ۱۶ | منه [د]                    |
| ۱۷ | × [د]                      |
| ۱۸ | × [د]                      |

مردمان صحرایی<sup>۱</sup> زیارت میکردند، به حکم آن که، [گفته اند.]<sup>۲</sup>

قطعه<sup>۳</sup>

لاله را گفتم سیه دل بودنت از بهر چیست

گفت حالش این بود هر کس که در صحرا نشست

بعد از چندین وقت آن گیاه را [از آن جا]<sup>۴</sup> گرفته، در موضع قراتپه برده، گذاشتند و آن موضع به موی مبارک اشتها یافت و مردم بسیار در آن جا جمع آمد<sup>۵</sup>، زیارت<sup>۶</sup> میکردند. بالاخر همه گمراه شده، <۶۳۹ر> از تمام ممالک فرغانه از دُم گاو دشتی که آن<sup>۷</sup> را قوطس<sup>۸</sup> مینامند<sup>۹</sup>، توق ها {۶۴۸پ} در کمال زینت ساخته، می آوردند و<sup>۱۰</sup> در آن جا میگذاشتند. قریب چهار هزار توق در آن موضع مثل درخت نشانیده بودند. در آن وقت یک حاجی بی<sup>۱۱</sup> انصاف دیگر در ولایت مرغینان او نیز این چنین دستگاهی<sup>۱۲</sup> را برپا کرد و بعد از آن در خانه عظیم جان بای نیز موی مبارکی موجود بوده است.

خلص کلام آن که مردم فرغانه [بیچاره ها]<sup>۱۳</sup> که ساده لوح ترین انسان اند<sup>۱۴</sup>، به سخن

۱۷ موی [ت]، گیاح [د]

۱۸ مدت [ت]

۱ صحرای [ت] [د]

۲ × [د]

۳ بیت [د]

۴ × [د]

۵ آمده [د]

۶ [د]، وی [س]، × [ت]

۷ او [د]

۸ قوتس [ت] [د]

۹ میگویند [د]

۱۰ × [د]

۱۱ نا [د]

۱۲ دستگاه [ت]

۱۳ بیچاره [د]

۱۴ است [د]

میکرد و از شادی به پراهن نمیگنجید و ندانسته بود که {۶۴۸ر} شمع در وقت مردن  
<۶۳۸پ> [خود را]<sup>۱</sup> روشن میگرداند<sup>۲</sup>، [به حکم آن که.<sup>۳</sup>]

### مصراع<sup>۴</sup>

شمع من در وقت مردن خانه روشن میکند

[زبدۀ کلام آن که]<sup>۵</sup> قبل از این مقدمه چند سال (۷۰۹) پیش شیخ ابله فریب<sup>۶</sup> شیخ  
چه نام +<sup>۷</sup>، گیاهی که در هندوستان بر لب دریای لاهور میباشد و او به صلوات شریف عاشق  
است. هر وقت که<sup>۸</sup> صلوات خوانند، او<sup>۹</sup> در حرکت می آید. بنابر آن دغل بازان هندوستان  
آن گیاه را گرفته، <موی مبارک<sup>۱۰</sup> حضرت<sup>۱۱</sup> نبی علیه السلام> گفته، مردم را فریب داده، مال  
میستانند و آن شیخ چه هم مثل ایشان از همان موی<sup>۱۲</sup> آورده دید که از محمد علی خان ماده<sup>۱۳</sup>  
ابله تر [در این دنیا کسی]<sup>۱۴</sup> نمیباشد، بنابر آن به او داده، مبلغی<sup>۱۵</sup> گرفته بود و محمد علی  
خان ماده<sup>۱۶</sup> آن مو<sup>۱۷</sup> را گرفته، در قصر امیر عمر خان گذاشته، زیارت گاه ساخته بود و مدتی<sup>۱۸</sup>

- ۱ × [د]
- ۲ میکرد [ت]، میگردد [د]
- ۳ × [د]
- ۴ ع [د]
- ۵ الغرض [د]
- ۶ × [د]
- ۷ کسی فریب [د]
- ۸ × [د]
- ۹ × [ت] [د]
- ۱۰ × [د]
- ۱۱ × [د]
- ۱۲ گیاح [د]
- ۱۳ مادر زن [ت]، × [د]
- ۱۴ کسی در دنیا [د]
- ۱۵ مبلغ [د]
- ۱۶ × [ت] [د]

<۶۳۸> و حاکم کولاب که پسر داول<sup>۱</sup> بی {۶۴۷پ} ابن کته<sup>۲</sup> بی که در بی پرهیزی و بیباکی محمد علی خان ماده<sup>۳</sup> را یکی از جمله شاگردان خود می شمرد، دختری داشت، در کمال حسن و جمال. غایبانه از بیم خود پیش کش او کرد و تابع شد و حاکم درواز<sup>۴</sup> که به هیچ صاحب افسری سر فرود<sup>۵</sup> نمی آورد، از بیم خود با چندین تحفه و هدایا امرای خوقند را استقبال کرده<sup>۶</sup>، او نیز اطاعت خوقند نمود. چون امرای خوقند دیدند که از مدعای دل خود چندان درجه گشایش به<sup>۷</sup> وقوع آمد. هر کدام ایشان را به جای خود گذاشته، دختر کته خان را +<sup>۸</sup> و حاکم درواز سلطان محمود را همراه خود گرفته، متوجه خوقند شدند و راه طی میکردند. در آن وقت [سلطان محمود را] <sup>۹</sup> قضا گریبان گیر +<sup>۱۰</sup> شد و نخواست که <sup>۱۱</sup> قدمی پیش نهد. دامن از این خاکدان پر غرور برچید و <sup>۱۲</sup> رو به عقبی آورد و لشکریان فرغانه بعد از قطع منازل و مراحل به +<sup>۱۳</sup> خوقند رسیده، به محمد علی خان ماده<sup>۱۴</sup> کورنوش دادند و محمد علی خان ماده<sup>۱۵</sup> این فتح را از کسافتهای <sup>۱۶</sup> کارهای بد خود دانسته، خورسندیها<sup>۱۷</sup>

- ۱ کته [د]
- ۲ داول [د]
- ۳ × [ت]، غازی [د]
- ۴ درواز [د]
- ۵ فرو [ت] [د]
- ۶ نموده [د]
- ۷ در [د]
- ۸ گرفتند [د]
- ۹ × [ت]
- ۱۰ او [ت]
- ۱۱ × [د]
- ۱۲ × [د]
- ۱۳ ولایت [د]
- ۱۴ × [ت]، غازی [د]
- ۱۵ × [ت] [د]
- ۱۶ کسافت [د]
- ۱۷ خورسندیها [د]

رسید که از <sup>۱</sup> ولایت کولاب لشکر بسیار آمده، به تابعات قراتیگین دخل کرده است. هر آینه لشکر از جانب خوقند نه آرند <sup>۲</sup> و تغافل ورزند <sup>۳</sup>. فتور <sup>۴</sup> به ولایت خواهد رفت. محمد علی خان ماده <sup>۵</sup> این امر را (۷۰۸) به محمد شریف قوش بیگی حواله کرد و خود به قمار باختن پرداخت و <sup>۶</sup> امرا دیدند که به کاهلی کار به جایی <sup>۷</sup> نمیرسد و به امید میر خود هیچ عقده و نمیشود. لا علاج مرتکب لشکر کشی شدند.

### ذکر لشکر کشیدن امرای خوقند در ولایت کوهستان

چون امرای <sup>۸</sup> محمد علی خان ماده <sup>۹</sup> با لشکر انبوه متوجه مملکت کوهستان شدند، بعد از طی مسافت با چندین محنت و مشقت به آن ولایت رسیدند و <sup>۱۰</sup> به اتفاق شاهی پروانچی راه درواز <sup>۱۱</sup> پیش گرفتند. چون این خبر بر تمام ولایت کوهستان شایع شد، همه از بیم لشکر فرغانه مثل بید در لرزه درآمدند، [چنانچه گفته اند.] <sup>۱۲</sup>

### بیت

چون به وقت حریف خصم نه <sup>۱۳</sup> حیل و فکر را ز دست مده

- ۱ جانب [د]
- ۲ آرد [ت]، آید [د]
- ۳ ورزد [ت]
- ۴ فطور [ت]
- ۵ × [ت]، غازی [د]
- ۶ × [د]
- ۷ جای [ت] [د]
- ۸ به رخصت [د]
- ۹ × [ت]، غازی [د]
- ۱۰ × [د]
- ۱۱ را [د]
- ۱۲ × [د]
- ۱۳ نه [ت]

چندین خاری و زاری به درجه شهادت رسانید و آن بیچاره مظلوم در وقت مردن این قطعه را میخواند.

### قطعه<sup>۱</sup>

بیداد بود فدای بیداد تو جان      صد جان اگرم بود فدای تو +<sup>۲</sup> بر آن  
لیکن چه کنم که هرچه با من بکنی      ترسم که کسی دیگر کند با تو همان

و<sup>۳</sup> در آن عصر بود که محمد قلی بیک را از حکومت قراتیگین معزول ساخته، به جای او میرزا رحیم پروانچی را فرستاد. آن امارت پناه چند وقت در ولایت کوهستان حکم رانی کرد. بعد از دار دنیا<sup>۴</sup> به دار عقبی<sup>۵</sup> رحلت نمود و این خبر را محمد علی خان ماده<sup>۶</sup> شنیده، شاهی<sup>۷</sup> پروانچی را از حکومت اوراتپه معزول کرد و امارت +<sup>۸</sup> قراتیگین را [به او]<sup>۹</sup> تفویض نمود و آن امارت پناه در آن ولایت رفته، کوس حکومت<sup>۱۰</sup> نواخت و به جای او کریم قلی<sup>۱۱</sup> <۶۳۷پ> دادخاهی که خزینه چی +<sup>۱۲</sup> او بود، به حکومت اوراتپه نصب کرد {۶۴۷ر} و به عیش خود مشغول شد. در آن آوان به محمد علی خان ماده<sup>۱۳</sup> از شاهی پروانچی قاصدی<sup>۱۴</sup>

۱ بیت [ت]

۲ باد [د]

۳ × [د]

۴ الفنا [د]

۵ البقا [د]

۶ × [ت]، غازی [د]

۷ عظیم بای [د]

۸ حکومت ولایت [د]

۹ × [د]

۱۰ امارت را [د]

۱۱ قل [د]

۱۲ خود [د]

۱۳ × [ت]، غازی [د]

۱۴ قاصد [د]

اماره دوییدی و از معموره پرهیزکاری و صلاح کناره چستی، تا لمحہ ای را<sup>۱</sup> توانستی. به سنگ لایخ دشت نا هموار شقاوت و خطا کاری گذراندی. هرگر به سعادت آباد اعمال صالحه گذر نکردی و در سفره امکان تا لقمه عصیان گمان بردی، اصلاً (۷۰۷) دست هوس به موید<sup>۲</sup> خان<sup>۳</sup> نیکوکاری نرساندی. در آن زمان که قبض و بسط<sup>۴</sup> ممالک فرغانه به عظیم جان بای تعلق گرفته بود و او مرد<sup>۵</sup> خدا ترس و حق شناس بود<sup>۶</sup> و بر دولتخواهی محمد علی خان ماده<sup>۷</sup> مهما امکن سعی بلیغ<sup>۸</sup> و کوشش مینمود. او نیز دانست، + فتور<sup>۹</sup> از<sup>۱۰</sup> دین نبی علیه السلام میرود. از روی مسلمانی و + دولتخواهی مکرر محمد علی <۶۳۷ر> خان ماده<sup>۱۱</sup> را<sup>۱۲</sup> از کار ناشایسته منع فرمود و او نیز موافق مزاج آن اهرمن {۶۴۶پ} نه افتاد و به او در آشفت. تمامی<sup>۱۳</sup> ملک و<sup>۱۴</sup> مال او را در تحت تصرف خود در<sup>۱۵</sup> آورد و خود او را به [سخت ترین عذاب و]<sup>۱۶</sup> شاید در قید کشید. بعد از چند وقت او را به جانب تاشکند فرستاده، با

۱ × [د]

۲ مواید [ت][د]

۳ جان [ت][د]

۴ بست [د]

۵ مردی بود [د]

۶ × [د]

۷ × [ت]، غازی [د]

۸ × [د]

۹ که [ت][د]

۱۰ فطور [ت]، قصور [د]

۱۱ بر [د]

۱۲ از روی [د]

۱۳ × [ت]، غازی [د]

۱۴ × [د]

۱۵ تمام [د]

۱۶ [د]

۱۷ × [ت][د]

۱۸ بزرگترین [د]

خو قند مراجعت نمودند<sup>۱</sup>. بعد از قطع مراحل به مقصد رسیده، از رنج راه بر آسودند و این فتح را محمد علی < ۶۳۶ پ > خان ماده<sup>۲</sup> فوز عظیم دانسته، به خود فخر کنان به قمار بازان و کبوتر بازان خود میگفت، < مردم ندانسته، مرا از این کارهای نامناسب منع میکنند. { ۶۴۶ ر } من بارها آزموده ام که هر وقت کار صواب کنم. مثل روزه دارم و<sup>۳</sup> نماز خوانم. به من مبارک نمی آید. چه مقدار کار گناه از من سر برزند، رواج کار من میشود و نمیدانست، آن ملعون که این امر استدراج است، در اندک<sup>۴</sup> فرصت زیر و زبر خواهد شد، [به حکم آن که

## شعر

روز اخیر که گرگ مردم خار	کند از خواب غفلتش بیدار
یادش آید که در جوار خدای	سالها زد به جرم عصیان رای
هرچه در عمر چون بی سر افتاد	کرده از خیر و شر به پیش افتاد
یک بیک پیش چشم او دادند	آشکارا به پیش او آورد
بگذارند ز گنبد والا	بانگ واحسرتا و واویلا
حسرت از جان او بر آرد دود	و آن زمان حسرتش ندارد سود <sup>۵</sup>

از روی نادانی همواره<sup>۶</sup> در فسق و<sup>۷</sup> فجور<sup>۸</sup> در رکاب اطاعت و<sup>۹</sup> ارادت نفس

۱۰ را [د]

۱۱ نمودند [د]

۱ فرمودند [د]

۲ × [ت]، غازی [د]

۳ یا [د]

۴ کم [د]

۵ × [ت] [د]

۶ × [د]

۷ [د]

۸ و همواره [د]

۹ [د]



در آن وقت لشکر فرغانه به سرایشان رسید، بزرگ ایشان شاهی<sup>۱</sup> درواز سلطان محمود بود، دانست که آمدن لشکر خوقندی متحقق است. لا علاج تمام لشکر درواز و قراتیگین را جمع نمود<sup>۲</sup>. به استقبال ایشان جهة محاربه متوجه شد. قبل از این دو روز به اتالیق خان رخصت داده بود. اتالیق خان به راه کولاب و حصار متوجه بخارا شد<sup>۳</sup>. در آن وقت سنه ۱۲۵۰ بود که امیر نصر الله از بالای شهر سبز باز گشت نموده، در ولایت قرشی نزول فرموده بود. +<sup>۴</sup> امارت پناه<sup>۵</sup> مذکور آمده، در ولایت نخشب امیر را دید. در آن وقت فقیر با همراهی امیر [نصر الله]<sup>۶</sup> بودم. (۷۰۶) به اتفاق هم متوجه بخارا شدیم.

القصة. شهزاده های کوهستان تمام جمع شده، روز دیگر در موضع حایت و سربل طرح جنگ انداختند و امرای <۶۳۶ر> خوقندی شنیدند که امارت پناهی اتالیق خان از میان ایشان بدر رفته است. ایشان نیز میان را از صد جا بسته، آماده محاربه شدند. روز دیگر هر دو دریای لشکر رو به روی {۶۴۵پ} یک دیگر صف زده، سلسله جنگ را در حرکت آورده، به هم در آویختند. چنان<sup>۷</sup> بازار مرگ گرم شد که پیر و جوان را قضا و قدر به یک نرخ می فروخت و از خون بهادران کینه خواه زمین رزمگاه لعل گون گشت. بعد از محاربات بسیار نسیم ظفر از جانب لشکر فرغانه وزید و لشکر کوهستان رو به فرار آورد و سلطان محمود با تنی چند با چندین محنت و مشقت از آن گرداب بلا نجات یافته، راه درواز را پیش گرفت و دیگر شهزاده هایی که بودند، به هر جانب پریشان شدند و لشکریان فرغانه چندی را به قتل رسانیدند و چندی<sup>۸</sup> را دستگیر نمودند و تمام قلعه های قراتیگین را در تحت تصرف خود در<sup>۹</sup> آوردند و حکومت آن ولایت +<sup>۱۰</sup> به محمد قلی پروانچی تفویض نموده<sup>۱۱</sup>، خود به جانب

- |   |            |
|---|------------|
| ۱ | شاه [د]    |
| ۲ | نموده [د]  |
| ۳ | شدند [ت]   |
| ۴ | و [د]      |
| ۵ | پناهی [د]  |
| ۶ | × [د]      |
| ۷ | چنین [ت]   |
| ۸ | بسیاری [د] |
| ۹ | × [د]      |

راه حصار به ولایت قراتیگین رفته، منتظر وقت [نشستند و]<sup>۱</sup> این خبر را محمد علی خان ماده<sup>۲</sup> شنیده، محمد شریف قوش بیگی را سردار کرده، کلهم لشکر فرغانه را به جانب قراتیگین فرمود.

ذکر<sup>۳</sup> لشکر کشیدن امرای خوقند به صوب قراتیگین و مسخر نمودن آن مرز و<sup>۴</sup> بوم را<sup>۵</sup> چون امرای خوقند از میر خود مرخص شده، متوجه مقصد شدند، در آن راههای باریک کوهستان راه طی میکردند. بعد از قطع مراحل به آن ولایت رسیدند. شهزاده هایی که مست غرور دولت بودند،<sup>۶</sup> امر عجیب در هیچ وقت به گوشه خاطرهایشان نمی آمد. هر کس که خبر آمدن لشکر خوقند <۶۳۵پ> گفت<sup>۷</sup>. در حال سرش را میگرفتند<sup>۸</sup>، چنانچه<sup>۹</sup> +<sup>۱۰</sup> مثنوی<sup>۱۱</sup>

مکن تکیه بر گنج و تیغ و<sup>۱۲</sup> سپاه ز فرزندگان رای و تدبیر خواه  
{۶۴۵ر} شود رای نیکو ترا دستگیر به جایی<sup>۱۳</sup> که ضایع بود تیغ و تیر

۱ نشست و [ت]، نشست [د]

۲ × [ت]، غازی [د]

۳ × [ت]

۴ [د]

۵ و [ت]

۶ و [ت]، این [د]

۷ آمده میگفت [ت]، را گفت [د]

۸ گرفتند [د]

۹ × [د]

۱۰ گفته اند [ت]

۱۱ قطعه [د]

۱۲ [د]

۱۳ جای [د]

نموده<sup>۱</sup>، متوجه بخارا شد. بعد از طی مسافت به +<sup>۲</sup> امیر نصر الله آمد و از آن جا اراده<sup>۳</sup> بیت الله کرد، [چنانچه گفته اند.]<sup>۳</sup>

#### قطعه<sup>۴</sup>

از فتنه<sup>۵</sup> این زمانه شور انگیز      بر خیز به هر جا که توانی بگریز  
ور پای گریختن نداری باری      دستی زن و بردامن خلوت آمیز

(۷۰۵) بعد از باز گشت حج در ولایت خوارزم آمده، حق را بیک گفت.  
القصه. محمد علی خان ماده<sup>۵</sup> مادر رضاعی خود را در سلک <۶۳۵ر> ازدواج خود  
کشید و به لهو و طرب مشغول گشت و این نوع زندوگانی<sup>۶</sup> +<sup>۷</sup> او در اقطار عالم منتشر گشت،  
چنانچه<sup>۸</sup>

#### مصراع<sup>۹</sup>

{۶۴۴پ} تا قیامت باد لعنت بر سر قبر لعین

هر صاحب دولتی که در اطراف بودند، به ولایت او چشم دوختند. یکی از آن جمله  
اتالیق خان فرزند ارشد امیر عالم<sup>۱۰</sup> خان که عمرها به<sup>۱۱</sup> ولایت شهر سبز بودند<sup>۱۲</sup>، بلا توقف به

۱ نمود [د]

۲ پیش [د]

۳ × [د]

۴ رباعی [د]

۵ × [ت]، غازی [د]

۶ زندگانی [د]

۷ به سر بردن [ت]

۸ × [د]

۹ ع [د]

۱۰ عالیم [ت]

۱۱ در [د]

۱۲ بود [ت]

وجه تیر دعا<sup>۱</sup> به هدف اجابت مقرون نمیشد. از بس که یک نام او حلیم است. در آن وقت حکمت بالغه او تعالی چنان تقاضا کرد که<sup>۲</sup> دیر گیر سخت گیر بودن خود را به بنده های غافل روشن گرداند<sup>۳</sup>. بنابر آن آن ملعون ابدی را به حالش چند وقت گذاشت و آن ظالم تا رفت، کار ناشایسته را دو بالا کرد و تنور ظلمتش از خاشاک بیرحمی و شقاوت بر می افروخت و رقت<sup>۴</sup> سموم جانگداز شرارت ذات نامسعودش خشک و تر مزرعه حیات خاص عام میسوخت. یکی از آن جمله آن بود که بهادر خواجه که دسترخانچی امیر عمر خان بود و زن او مادر رضاعیه<sup>۵</sup> <۶۳۴پ> محمد علی خان ماده<sup>۶</sup> بود و او را پدر میگفت، زنی داشت، در کمال حسن و جمال. {۶۴۴} خواست که مادر رضاعیه<sup>۷</sup> خود را دست درازی کند. در آن وقت بهادر خواجه تمام امور ملکی به او تعلق گرفته بود، تا حتی<sup>۸</sup> مهر محمد علی خان ماده<sup>۹</sup> به دست او بود. چون از این سر واقف گشته<sup>۱۰</sup>، هر چند در تدبیر این امر شنیع کوشش کرد، به جایی<sup>۱۱</sup> نرسید. لا علاج گردن خار خار دل از ملک و<sup>۱۲</sup> مال و از زن و<sup>۱۳</sup> فرزند کننده، به چندین درد و<sup>۱۴</sup> حسرت در میان مردم<sup>۱۵</sup> بودن خود را<sup>۱۶</sup> عار دانسته، قرار بر فرار اختیار

- ۱ دعاشان [د]
- ۲ و [د]
- ۳ گردانید [د]
- ۴ آفت [د]
- ۵ رضاعی [د]
- ۶ × [ت]، غازی [د]
- ۷ رضاعی [د]
- ۸ حتا [د]
- ۹ × [ت]، غازی [د]
- ۱۰ گشت [د]
- ۱۱ جای [د]
- ۱۲ × [ت]
- ۱۳ × [ت]
- ۱۴ [د]
- ۱۵ مردوم [ت]، مرد وزن [د]
- ۱۶ ر [ت]

نابکار را چنان زنگ فسق گرفته بود که به هیچ صیقل عکس پذیر نمیشد. <sup>۱</sup> سخن <sup>۲</sup> آن نیکو خصلت را <sup>۳</sup> گوش نکرد <sup>۴</sup> و تغافل ورزید. بعد از چند روز آن دولتخواه صمیمی باز همان سخن را اعاده کرد. محمد علی خان ماده <sup>۵</sup> دید که آن امارت پناهی از سر این نصیحت <sup>۶</sup> نمیگذرد. (۷۰۴) لا علاج گشته <sup>۷</sup>، آن مبارزت پناه که عمرها جان خود را فدای محمد علی خان ماده <sup>۸</sup> [کرد و] ولایت ها را به ضرب شمشیر گشاده بود، به چندین خاری و زاری به خنجر ظلم {۶۴۳پ} سر از تن آن سرآمد <۶۳۴ر> مبارزان جدا کرده <sup>۹</sup>، به درجه شهادت رسانید، [چنانچه گفته اند]. <sup>۱۱</sup>

### بیت

برای خدمت آن کس که شناسد حق خدمت  
مکن اوقات خود ضایع که نه مزد است نه منت

و این خبر هایله بر تمام شهر منتشر گشت <sup>۱۲</sup> و خواص <sup>۱۳</sup> و عوام <sup>۱۴</sup> در حسرت آن بیچاره مظلوم چون موی در آتش می پیچیدند و از درگاه کار ساز چاره ساز چاره می جستند. به هیچ

- |    |                        |
|----|------------------------|
| ۱  | به [د]                 |
| ۲  | سخنی [ت]               |
| ۳  | × [د]                  |
| ۴  | نیکرد [د]              |
| ۵  | × [ت]، غازی [د]        |
| ۶  | سخن [د]                |
| ۷  | شده [ت]                |
| ۸  | × [ت]، غازی [د]        |
| ۹  | میکرده و [ت]، کرده [د] |
| ۱۰ | کرد و [د]              |
| ۱۱ | × [د]                  |
| ۱۲ | شد [د]                 |
| ۱۳ | خاص [د]                |
| ۱۴ | عام [د]                |

از فیض تابش<sup>۱</sup> مهر هر سنگ کی شود لعل      تاثیر<sup>۲</sup> کی نماید بر سفله مهربانی  
همچون مگس همیشه در بزم نعمت تو      جمعند در کمین<sup>۳</sup> تا خان به گسترانی  
جیب ترا چو خالی بینند از زر و<sup>۴</sup> مال      عنقا صفت گریزند در قاف بی نشانی

هر حکامی خوش آمد گوی و نا اصل را به خود راه داد. هرگز عکس شواهد  
<۶۳۳پ> عافیت و مقصود در آینه بهبودی<sup>۵</sup> نه بیند. عاقبت {۶۴۳ر} از کار باز ماند.  
مانند محمد علی خان ماده<sup>۶</sup> +<sup>۷</sup> کرد و جزای خود را یافت<sup>۸</sup>.

خلص کلام این<sup>۹</sup> که امرا و فقرا تمام در<sup>۱۰</sup> محلت فرغانه از این کارهای ناشایسته میر  
خود چون سپند در [مجرم آتش]<sup>۱۱</sup> میسوختند. به<sup>۱۲</sup> هیچ تدبیر علاج پذیر نمیشد. کار از حد  
اعتدال در گذشت. عاقبت همه روی به حق قلی آوردند<sup>۱۳</sup>، گفتند، چاره این کار را می باید  
سازی و الا فتور بر ممالک خواهد رفت. حق قلی انگشت قبول به دیده<sup>۱۴</sup> نهاد و<sup>۱۵</sup> از روی  
دولتخواهی و مسلمانی به پیش محمد علی خان در آمده، صورت واقعه را تقریر کرد و دل آن

۱ [ت][د]، تابشی [س]

۲ تا شیر [د]

۳ کمین اند [د]

۴ × [د]

۵ بهبودشان [د]

۶ × [ت]، غازی [د]

۷ که [د]

۸ کشید [د]

۹ آن [د]

۱۰ × [د]

۱۱ آتش مجرم [د]

۱۲ × [د]

۱۳ آورده [د]

۱۴ سینه [د]

۱۵ × [د]

آشنایان طور وفاداری به هیچ شامه رایحه انتفاعی نرسیده و از زبان اختلاط این مخالفت بزرگ و<sup>۱</sup> کوچک نشنیده،

خلاصه کلام آن که روز و<sup>۲</sup> شب تیشه وار<sup>۳</sup> در دست نفس دغا بار<sup>۴</sup> داده، مترصد خرابی صد خرابی بیخ و بنیاد عافیت و راحت (۷۰۳) عموم خلق الله میبودند. در غایت جهد <۶۳۳ر> در تلف به<sup>۵</sup> چهل چراغ سعی بر افروزند<sup>۶</sup> و به احتمال ادراک دانه خرمنها به آتش زوال سوزند. الحق +<sup>۷</sup> در سهل روز [کشته شان]<sup>۸</sup> گل کرد. بس در این صورت باید که پادشاه<sup>۹</sup> و حکام هرگز در زورق موافقت این نا موافقان لثیم خصال ننشینند<sup>۱۰</sup>، تا اسباب ننگ و ناموس و اعتبار و احترام خود را مثل محمد علی خان ماده<sup>۱۱</sup> خسر الدنیا و الآخرة نگردانند<sup>۱۲</sup> و طوفان گرداب قلزم فنا و زوال نه بیند، چنانچه گفته اند.

{۶۴۲پ} بیت<sup>۱۳</sup>

سیلاب قصر اقبال باشد رفیق نا جنس	بابد گهر میامیز تا محترم بمانی
در شمع مهر ناکس نبود فروغ راحت	از یار نا موافق بگریز تا توانی
راز ضمیر خود را از سفله گان نگهدار	ناید ز دزد <sup>۱۴</sup> هرگز آیین پاسبانی

- ۱ × [ت]
- ۲ × [ت]
- ۳ آر [د]
- ۴ باز [د]
- ۵ × [د]
- ۶ اوزند [ت]
- ۷ عاقبت [د]
- ۸ کشت شان [د]
- ۹ هر پادشاهی [د]
- ۱۰ ننشینند [د]
- ۱۱ × [ت]، غازی [د]
- ۱۲ نگردد [ت] [د]
- ۱۳ مثنوی [ت]، نظم [د]
- ۱۴ دوزد [ت]

اکبر مسلمان<sup>۱</sup> را به خانه برده، چندی را در قطار فاحشه ها جای میدادند. +<sup>۲</sup> از باقی <۶۳۲پ> مانده پُل گرفته، رخصت میدادند. تمام سال و<sup>۳</sup> ماه کار آن دو ملعون همین میبود<sup>۴</sup>، [چنانچه گفته اند].<sup>۵</sup>

### بیت

صبر کن ای شیشه بر سنگ جفای محتسب  
گردن این دشمن عشرت خدا خواهد شکست

+<sup>۶</sup> در آن وقت بر دل محمد علی خان ماده<sup>۷</sup> نیز محبت قمار افتاد. در هر ولایت قمار بازان<sup>۸</sup> آوازه دار را یافته، آورده، هر شب به باختن قمار پرداخت و چند حرامیان دزد<sup>۹</sup> که انگشت نمای عالم بودند، همدستان شد و این خصلت که بدترین خصلت های {۶۴۲ر} انسان<sup>۱۰</sup> است. سبب مباهات خود دانست و شب و<sup>۱۱</sup> روز به این کار پرداختند<sup>۱۲</sup>. باده مصاحبت آن بی باکان نا پاک از شهوت زار خدعه و حيله<sup>۱۳</sup> مغشوش و رنگ بازی و معاونت آن دخل<sup>۱۴</sup> پیشه گان بی ادراک از آتش تمنا و خسران در جوش است. از بوی آشنایی آن نا

- 
- |    |                 |
|----|-----------------|
| ۱  | مسلمانان [د]    |
| ۲  | و [د]           |
| ۳  | × [ت]           |
| ۴  | بود [د]         |
| ۵  | × [د]           |
| ۶  | و [ت] [د]       |
| ۷  | × [ت]، غازی [د] |
| ۸  | باز [د]         |
| ۹  | دوزد [ت]        |
| ۱۰ | انسانی [د]      |
| ۱۱ | × [ت] [د]       |
| ۱۲ | پرداخت [د]      |
| ۱۳ | × [د]           |
| ۱۴ | دغل [ت]         |



<sup>۱</sup> نزد [خالق و خلق] <sup>۲</sup> مردود بود، او را به نفس خود لازم دانسته، ارتکاب امر شنیع مینمود.<sup>۳</sup>  
<sup>۴</sup> از آن جمله آن بود که دو فاحشه که <sup>۵</sup> یکی را <sup>۶</sup> خوشحال دادخواه نام نهاد و دیگری [بی بی] <sup>۷</sup> نار که به آشوله <۶۳۲ر> اشتهار داشت، چنان آن دو پلید را به حکم رانی ممالک فرغانه مطلق العنان ساخته بود که هر کدام آن دو ملعون با چندین تجمل به خانه های مسلمانان میرفتند و حجله نشینان پرده عصمت خواه زن و خواه دختر باشد، (۷۰۲) به نظر آن بی باکان خوش می آمد، موی کشان میبردند و آنی که موافق طبع نامبارک آن دو کافر کیش <sup>۸</sup> نمی افتاد، <sup>۹</sup> پل می ستانیدند <sup>۱۰</sup> و مسلمانان از جهت ناموس خود هر چیزی <sup>۱۱</sup> که او میگفت، به خورسندی <sup>۱۲</sup> تمام طلا میدادند. در سهل وقت آن دو کافر کیش {۶۴۱پ} چنان متمول شد که دستگاه آن دو ملعون به هیچ امرای فرغانه موجود نبود و آن دو حق ناشناس زنها و دختران مسلمانان را به خانه خود جمع مینمودند. بعد همه را به پیش محمد علی خان ماده <sup>۱۳</sup> حاضر میساختند. آن ملعون چندی را که میخواست، به پیش خود نگاه میداشت و چندی را امر میکرد که آن دو فاحشه به خانه خود برند. هر کدام زنان و دختران را تعلیم بازی و حافظی میدادند <sup>۱۴</sup>، تا که در کار لهو و طرب خوب عامل شوند و آن دو بطل ناموس

- ۱ در [د]
- ۲ خلق و خالق [د]
- ۳ نمود [د]
- ۴ یکی [د]
- ۵ را [د]
- ۶ × [ت]
- ۷ × [د]
- ۸ × [د]
- ۹ افتاده بود [د]
- ۱۰ ستانید [د]
- ۱۱ چه [د]
- ۱۲ خورسندی [د]
- ۱۳ × [ت]، غازی [د]
- ۱۴ دهند [د]

نزد همگنان نهفته نماند<sup>۱</sup> که در آن آوان +<sup>۲</sup> سیادت پناهی محمود خان زنی  
 <۶۳۱پ> داشت، در غایت<sup>۳</sup> حسن و جمال. بعد از وفات سیادت پناه امیر عمر خان به آن  
 تعشقی پیدا کرده، به عقد +<sup>۴</sup> خود در آورده<sup>۵</sup> و از چهار زن<sup>۶</sup> خاصه یکی او بود، [چنانچه گفته  
 اند].<sup>۷</sup>

## بیت

آخر<sup>۸</sup> مراد شاه روا کرد روزگار      اقبال را به وعده وفا کرد روزگار

بعد از وفات امیر<sup>۹</sup> عمر خان محمد علی خان ماده<sup>۱۰</sup> به مادرش خان پادشاه مخفی بازی  
 میکرد به او نیز از جهة بی نظیر بودن دست درازی میکرد. روزی هر دو [مادر زن]<sup>۱۱</sup> به شوهر  
 پسر بوزه میخوردند. {۶۴۱ر} از آن جهت که به هم دیگر مکرر کُس داش شده بودند، [از  
 بهر سهل سخن به هم در آویختند]<sup>۱۲</sup>. جنگ کورته کنی سخن<sup>۱۳</sup> در میان ایشان واقع شد و  
 محمد علی خان ماده<sup>۱۴</sup> جانب خان پادشاه را گرفته، آن مظلوم ظاهری را به چندین خاری به  
 تیغ بی دریغ سر از تنش پاش ساخت و در آن آوان که محمد علی خان ماده<sup>۱۵</sup> هر کاری که +

۱ مباد [ت]

۲ که [د]

۳ کمال [د]

۴ نکاح [ت][د]

۵ آورد [د]

۶ زنی [ت]

۷ چنانچه گفته [ت]، به حکم آن که [د]

۸ آخر [ت]

۹ × [د]

۱۰ × [ت]، غازی [د]

۱۱ غازی [د]

۱۲ به هم در آویختند از بهر سهل سخن [د]

۱۳ × [ت][د]

۱۴ × [ت]، غازی [د]

۱۵ × [ت]، غازی [د]

این خبر را محمد علی خان ماده<sup>۱</sup> شنیده، از شادی به پراهن نمیگنجید <۶۳۱ر> و شادیه<sup>۲</sup> مینمود و امر کرد که سر<sup>۳</sup> محمد رحیم دیوان بیگی را به دار آویزند و اسحاق [دیوان بیگی]<sup>۴</sup> را به حبس اندازند. در آن وقت لشکریان فرغانه به چندین کلفت و مذلت به ولایت خوقند از ولایت کاشغر وارد گردیده، از رنج راه بر<sup>۵</sup> آسودند.

(۷۰۱) ذکر جلای وطن کردن محمد علی خان ماده<sup>۶</sup> برادرش عالیجاهی سلطان محمود خان

را به صوب شهر سبز

چون چندی بر این {۶۴۰پ} بگذشت، در آن زمان سنه ۱۲۴۵ بود که برادرم [نور چشمی]<sup>۷</sup> سلطان محمود خان را دید که از جبینش آثار سلطنت هویدا و<sup>۸</sup> صله<sup>۹</sup>\* رحم از جمله واجبات ایمان است، قطع نمود و هم نخواست که آن عالیجاهی<sup>۱۰</sup> به وطن مألوف به درجه کمال رسد. چندی با فتنه جویان همدستان شده، آن نور چشمی را به چندین خاری از کنار<sup>۱۱</sup> مادرش کشیده، به جانب شهر سبز جلای وطن ساخت و آن گرامی از آن مهلکه به چندین ترس و هراس نجات یافته، به راه بخارا در<sup>۱۲</sup> شهر سبز آمده<sup>۱۳</sup>، سکونت اختیار نمود.

۱ × [ت]، غازی [د]

۲ خرسندیها [د]

۳ سری [د]

۴ [ت][د]، بیک [س]

۵ × [ت]

۶ × [ت]، غازی [د]

۷ × [د]

۸ بود و هم [د]

۹ صیله [س][د]، سیله [ت]

۱۰ عالیجاه [د]

۱۱ بغل [ت]

۱۲ به [د]

۱۳ آمد و [د]

## ذکر لشکر کشیدن امرای خوقند به صوب کاشغر

بعد از سه روز سر کرده ها مثل +<sup>۱</sup> محمد شریف قوش بیگی و لشکر قوش بیگی و [حق قلی دیوان بیگی و]<sup>۲</sup> دیگر امرای خوقند تماماً<sup>۳</sup> به اتفاق <۶۳۰پ> محمد یوسف خواجه با لشکر انبوه متوجه مقصد شدند. در آن کوه هایی که سر به عیوق فلک کشیده بود، عبور مینمودند و به چندین محنت و مشقت راه می پیمودند. بعد از طی مسافت به ولایت کاشغر رسیدند. +<sup>۴</sup> بلا اهمال شهر را فرو گرفتند و روز دیگر قلعه گل باغ را چون نگین انگشتری در میان گرفته، به محاصره و مقاتله مشغول شدند. مدت محاصره به سه ماه کشید. به هیچ تدبیر فتح قلعه گل باغ میسر نشد. {۶۴۰ر} لا علاج چندین هزار مردم را کوچانیده، گردن خار خار به جانب خوقند مراجعت فرمودند. در آن وقت بود که به محمد علی خان ماده<sup>۵</sup> خبر رسید که امارت پناهی محمد رحیم دیوان بیگی و اسحاق دیوان بیگی از شهر سبز به هژده کس آمده، به اوراتپه داخل<sup>۶</sup> شده بوده است. شاهی پروانچی الا اسحاق +<sup>۷</sup> دیوان بیگی همه را به قتل رسانید. سر<sup>۸</sup> محمد رحیم دیوان بیگی را با +<sup>۹</sup> اسحاق دیوان بیگی فرستانیده<sup>۱۰</sup> است. اینک رسید.

## بیت

اگر صد سال مانی در یکی روز      بو باید رفت از این کاخ دل افروز<sup>۱۱</sup>

- ۱ حق قلی بی و [د]
- ۲ × [د]
- ۳ تمام [د]
- ۴ و [د]
- ۵ × [ت]، غازی [د]
- ۶ داخل [ت]
- ۷ بیک [ت]
- ۸ سری [د]
- ۹ همراهی [د]
- ۱۰ فرستاده [د]
- ۱۱ فروز [د]

سیادت پناهی جهانگیر خواجه محمد یوسف خواجه به خوقند تشریف برد<sup>۱</sup>. محمد علی خان ماده<sup>۲</sup> ایشان را از<sup>۳</sup> بهر دنیا گرامی داشت. به جای مناسب فرود آورد. +<sup>۴</sup> بعد از چند روز جناب سیادت پناهی سخن غذا را در میان انداخت<sup>۵</sup> و امرای خوقند نیز [به ایشان]<sup>۶</sup> اتفاق نمود، به محمد علی خان ماده<sup>۷</sup> اعلام نمود<sup>۸</sup>. < ۶۳۰ ر > چون نام غذا را شنید، در آشفت و گفت، < سفر اول غذا گفته، چه کار کردید که<sup>۹</sup> حالا کنید. > امرا دانستند که به غذا راضی نمیشود. لا علاج زبان در کشیدند و خاموش شدند. در آن میان حق قلی بر خواست. گفت، < جناب سیادت پناهی محمد یوسف خواجه میگویند که انشاء الله اگر این سفر ولایت کاشغر مسخر شود، تمام خزینه ای که از برادرم مانده است (۷۰۰) و از مردم اهل کفر<sup>۱۰</sup> باقی است. به میر شما تعلق دارد. گفته، { ۶۳۹ پ } وعده دادند. > چنانچه میگوید.

#### رباعی<sup>۱۱</sup>

چون گل به چمن دامن پر زر بنمود      بلبل به هزار صوت و دستانش ستود<sup>۱۲</sup>  
و آن گه که به باد رفت بر گیش که بود      کس نام گل از زبان بلبل نشنود

چون این سخن آن ناپاک از زبان حق قلی شنید، شادی کنان و خنده زنان بلا توقف حق قلی را امیر لشکر ساخته، تمام لشکر فرغانه را به سوی کاشغر امر فرمود.

۱ بردند [ت] [د]

۲ × [ت]، غازی [د]

۳ [د]

۴ و [ت]

۵ انداختند [ت]

۶ × [د]

۷ × [ت]، غازی [د]

۸ نمودند [د]

۹ × [ت]

۱۰ کفره [د]

۱۱ قطعه [د]

۱۲ بود [د]

شان<sup>۱</sup> را مکرر جلای وطن سازند. به فرموده آن حیوان طینت چندی + قبله گاهم<sup>۳</sup> را گرفته، متوجه +<sup>۴</sup> اوروِس شدند. باقی این مقوله در بالا ذکر یافته بود، [چنانچه گفته اند].<sup>۵</sup>

### بیت<sup>۶</sup>

اگرچه غالبی از سید ضعیف به ترس که تیر آهشان البته بر نشانه زند

القصه. محمد علی خان ماده<sup>۷</sup> ولایت اوراتیپه را به چندین تهمت <۶۲۹پ> و شیلناق در تحت تصرف خود آورد و بابا بیک<sup>۸</sup> و اسحاق دیوان بیگی سه روز در مغ محاربه کردند. بعد [به حق قلی] عهد و پیمان کرده، قلعه مغ را خالی [گذاشتند و]<sup>۹</sup> مع کوچ متوجه جیزخ شدند. محمد علی خان ماده<sup>۱۰</sup> حکومت آن ولایت را به شاهی پروانچی ارزانی داشت و خود تمام کبوتران آن ولایت را گرفته، به جانب کورکه خود مراجعت فرمود و<sup>۱۱</sup> بعد از طی مسافت به خوقند رسید و عهد {۶۳۹ر} کرد که دو باره به هیچ جانب سواری نکنند. با وجودی که ولایت فتح شده بود، اگر شکستی واقع شود<sup>۱۲</sup>، معلوم نبود، چه کار میکرد. چند وقت به لهو و طرب بی تعطیل مشغول شد و<sup>۱۳</sup> چندی از این بگذشته بود که از شهر سبز برادر کلان<sup>۱۴</sup>

- ۱ جناب قبلگاهی [د]
- ۲ جناب [ت]
- ۳ قبله گاهی ام [ت]
- ۴ ولایت [ت] [د]
- ۵ × [د]
- ۶ × [ت]
- ۷ × [ت]، غازی [د]
- ۸ بی [ت] [د]
- ۹ گذاشته [د]
- ۱۰ × [ت]، غازی [د]
- ۱۱ × [د]
- ۱۲ میشد [د]
- ۱۳ چون [د]
- ۱۴ × [ت] [د]

گشته، به قتل و تاراج دست گشادند و مردمانی که این مقدمه به گوشه خاطرشان نمی آمد، در خواب ناز استراحت کرده بودند. سپندوار از جای بر جسته، برهنه<sup>۱</sup> بیرون شتافتند. دانستند که فلک غدار چه منصوبه بر پا کرد. هر کس به کار خود شد. در آن وقت صبح دمیدن آغاز کرد و بابا بیک<sup>۲</sup> که در مغ بود، از این حادثه هایل و واقف گشته، چون مار در آتش می پیچید و دست به انداختن < ۶۲۹ ر > تیر و تفنگ پرداخت. در آن ضمن جناب قبله گاهم در آن جا بود<sup>۳</sup>، لشکریان فرغانه موضع شان را احاطه کردند و این خبر به محمد علی خان ماده<sup>۴</sup> رسید. شادی کردن آغاز نهاد. چرا که دوام در صدد<sup>۵</sup> این بود که به کدام راه نا خوشنودی حضرت حق سبحانه و تعالی را<sup>۶</sup> جوید و به کدام طریق خلاف گفته پیغمبر [صلی الله علیه و سلم را]<sup>۷</sup> پوید. این مدعا عین موافق طبع آن ملعون افتاد { ۶۳۸ پ } ( ۶۹۹ ) از بس که به [مضمون این]<sup>۸</sup> حدیث شریف +<sup>۹</sup> که دوست داشتن اولاد رسول علیه السلام دوست داشتن [نبی علیه السلام]<sup>۱۰</sup> است و دشمن داشتن +<sup>۱۱</sup> اولاد رسول [علیه اسلام]<sup>۱۲</sup> دشمن داشتن [نبی علیه السلام]<sup>۱۳</sup> است. +<sup>۱۴</sup> بنابر آن بلا توقف امر کرد<sup>۱۵</sup> که [جناب

- ۱ به [د]
- ۲ بی [ت] [د]
- ۳ بودند [د]
- ۴ × [ت]، غازی [د]
- ۵ سدد [س] [ت]، بند [د]
- ۶ × [ت] [د]
- ۷ × [د]
- ۸ این مضمون [ت] [د]
- ۹ است [د]
- ۱۰ نبی [ت]، رسول [د]
- ۱۱ از [د]
- ۱۲ × [د]
- ۱۳ نبی [ت]، رسول [د]
- ۱۴ علیه السلام [د]
- ۱۵ کرده [د]

به<sup>۱</sup> امرا گفت، <مژده باد<sup>۲</sup>، مر شما را که میر ما آهنگ اوراپه کردند و همه خرسند<sup>۳</sup> شده، به سر رشته کار خود شدند. بعد از دو روز محمد علی خان ماده<sup>۴</sup> با لشکر فرغانه متوجه اوراپه شد. بعد از سه منزل در ولایت خجند وارد گردید و از آن جا کوچیده، در موضع قیزیلی نزول فرمود. به امرا طرح مشاورت انداخت. ایشان<sup>۵</sup> گفتند، <چه نوعی که گذشتگان شما نیز<sup>۶</sup> > ۶۲۸پ> میرفتند، شما به ترتیب ایشان خواهید رفت. > گفت، از خر پا کوفتن دور و از اشتر حمام رفتن بعید. گفت<sup>۷</sup>، <من به دزدی<sup>۸</sup> میروم، نه به آشکارا. > امرا دیدند که [کار او]<sup>۹</sup> نمیشود. لا علاج قبول کردند. از بس که نیت<sup>۱۰</sup> او کبوتر به دست آوردن بود. نه تسخیر<sup>۱۱</sup> ملک کردن<sup>۱۲</sup>. بنابراین دزدی<sup>۱۳</sup> را اختیار نمود. بعد از عشا با لشکر انبوه متوجه مقصد شد و آن شب چنان تاریک {۶۳۸ر} و ظلمانی بود که [از بخت]<sup>۱۴</sup> محمد علی خان ماده<sup>۱۵</sup> هم سیاه تر و تاریکتر<sup>۱۶</sup> بود. بعد از قطع راه قبل از دمیدن صبح به نزدیک شهر رسیدند. سردارانی که به هر دروازه نام زد شده بودند، بلا توقف به دزدی<sup>۱۷</sup> به شهر داخل

- ۱ با [د]
- ۲ × [ت] [د]
- ۳ خورسند [ت]
- ۴ × [ت]، غازی [د]
- ۵ × [د]
- ۶ × [ت] [د]
- ۷ × [ت]
- ۸ دزدی [ت]
- ۹ × [د]
- ۱۰ قصد [ت]
- ۱۱ × [د]
- ۱۲ گرفتن [د]
- ۱۳ دزدی [ت]
- ۱۴ × [د]
- ۱۵ × [ت]، غازی [د]
- ۱۶ تاریک [د]
- ۱۷ دزدی [ت]



کبوتران بازی<sup>۱</sup> گر که به چندین خون جگر از ولایت ها جمع آورده اند، اسیر پنجه شاهین خواهد شد. < آن کبوتر باز انگشت قبول به دیده نهاد<sup>۲</sup>، به پیش محمد علی خان ماده<sup>۳</sup> در آمده، گفت، شنیدم<sup>۴</sup> که کبوترانی که < ۶۲۸ ر > در ولایت اوراتپه بوده است، در هیچ اقلیم نبوده است. وقتی که در پرواز می آمده است، سر او به آسمان میسوده است. زمانی که در بازی کردن بال میگشوده است، هیچ سرو قدی<sup>۵</sup> رقاصی به او برابری نمیکرده است. این چنین کبوتران بازی<sup>۶</sup> گر +<sup>۷</sup> موجود باشد. ما به بستر راحت خوابیم. این از جمله حمیت کبوتر بازان نخواهد بود، چنانچه<sup>۸</sup>

### { ۶۳۷ پ } مصراع

امتحان کردیم حال هر کسی معلوم شد

چون این سخن را محمد علی خان ماده<sup>۹</sup> شنید، از جای برجست و<sup>۱۰</sup> گفت، (۶۹۸) < حق میگوی. > بلا توقف حق قلی را طلب نمود. +<sup>۱۱</sup> گفت، < لشکر را جمع نما. ما به جانب اوراتپه سوار میشویم. > حق قلی رقص کنان از پیش محمد علی خان ماده<sup>۱۲</sup> بر آمده،

- |    |                  |
|----|------------------|
| ۱۴ | از [د]           |
| ۱  | بازین [د]        |
| ۲  | نهاد [ت]         |
| ۳  | × [ت]، غازی [د]  |
| ۴  | شنیده ام [د]     |
| ۵  | قد [د]           |
| ۶  | بازین [د]        |
| ۷  | به نزاکت [ت] [د] |
| ۸  | × [د]            |
| ۹  | × [ت]، غازی [د]  |
| ۱۰ | × [د]            |
| ۱۱ | و [ت]            |
| ۱۲ | × [ت]، غازی [د]  |

کبوتران چهل من دانه صرف میشد و چندین دایره ساخته بود. اما نه دایره مخصوص از برای نواختن خود کرده بود که همه زنجیرهای او طلا و کندل بود و چندی<sup>۱</sup> از نقره بود. در آن وقت امرا شنیدند که محمد رحیم دیوان بیگی اوراتپه را به پسرش بابا دادخواه گذاشته، خود متوجه بخارا شده است. به هم طرح مشاورت انداخته، گفتند، <بدکرداری او<sup>۲</sup> در تمام عالم > ۶۲۷پ> منتشر شده است و اگر در این کار تغافل ورزیم، فتنه های بسیار در ملک راه خواهد یافت. <لا علاج رو به حق قلی آورد و گفتند که > کاری کرده، به +<sup>۳</sup> حيله [میر ما]<sup>۴</sup> را به لشکر بری و<sup>۵</sup> الا در سهل روز فتنه ها از ولایت خواهد برخواست، [به هیچ دفع آن]<sup>۶</sup> تدبیر علاج {۶۳۷ر} پذیر نباشد. < چون<sup>۷</sup> حق قلی سخن ایشان را<sup>۸</sup> قبول نموده، به محمد علی خان ماده<sup>۹</sup> صورت واقعه را بالتفصیل<sup>۱۰</sup> بیان فرمود و آن غول بیابان در جواب گفت، <مرا از این [تکلیف ها]<sup>۱۱</sup> و ارهان و امور ملک را به تو [سپرده ام]<sup>۱۲</sup>. تو میدانی. > حق قلی دید که کار نمیشود. خوش خوش برآمد و ندیمی داشت، حاجی قلندر نام و همه کبوتران به او تعلق گرفته بود. حق قلی رو به او آورد. گفت، <کاری کن، میر را به راه انداز. به جانب اوراتپه لشکر کشد و الا در سهل روز فتوری<sup>۱۳</sup> در<sup>۱۴</sup> دولت خواهد شد. و

۱۶ کبوتری [د]

۱۷ بدان [د]

۱ چند [د]

۲ شاه ما [ت]، امیر ما [د]

۳ یک [ت]

۴ شاه خود [ت]

۵ [ت]

۶ دفع آن به هیچ [ت]

۷ × [د]

۸ × [ت]

۹ × [ت]، غازی [د]

۱۰ × [د]

۱۱ تکلیف [د]

۱۲ سپرده [ت]

۱۳ فتور [د]

مانده<sup>۱</sup> ناشایسته<sup>۲</sup> او را بالتفصیل بیان فرموده، به اتمام رساند<sup>۳</sup>، انشاء الله تعالی و بالله<sup>۴</sup> التوفیق.

### بیت

سعدیا مرد نکو نام نمیرد هرگز مرده آن است که نامش به نکوی نبرند

<۶۲۷ر> ذکر لشکر کشیدن محمد علی خان ماده<sup>۵</sup> از روی لا علاجی به سوی اوراتپه و

تسخیر<sup>۶</sup> کردن آن ولایت را به تحمت و<sup>۷</sup> شیلتا

در آن وقت که محمد علی خان ماده<sup>۸</sup> به نفس اماره گرفتار گشت. امور ملک را به دست حق قلی گذاشت<sup>۹</sup> و خود تمام عمر گرانمایه را {۶۳۶پ} به بوزه خوردن و به دایره نواختن پرداخت. چنانچه در هر ولایتی<sup>۱۰</sup> کبوتری<sup>۱۱</sup> خوب بود، جمع نموده<sup>۱۲</sup>، مثل کاشغر و بخارا و شهر سبز و محبت او به کبوتر به درجه ای بود که آشیانه کبوتران را از طبق چینی ساخته<sup>۱۳</sup> و میخ او را از نقره و خانه او از کاشین بود و در پای کبوتران زر<sup>۱۴</sup> طلا و نقره آویخته بود. به چندین جا<sup>۱۵</sup> کبوتر<sup>۱۶</sup> جمع کرده بود. گویند، هر روز (۶۹۷) [بر آن]<sup>۱۷</sup>

۱ باقی مانده احوال [د]

۲ محمد علی خان غازی [د]

۳ رسانم [د]

۴ × [د]

۵ × [ت]، غازی [د]

۶ مسخر [د]

۷ [ت]

۸ × [ت] [د]

۹ گذاشته [د]

۱۰ ولایت [ت] [د]

۱۱ کبوتر [د]

۱۲ نمود [ت] [د]

۱۳ ساخت [د]

۱۴ ریزه [د]

۱۵ چنان [د]

نصر الله رسیدم، با او مصافحه نمودم. <sup>۱</sup> بسیار شفقت و مرحمت نمود. بعد از صحبت بسیار از پیش او رخصت اجازت یافته، به خانه آمدم. در آن وقت شنیده بودم که جناب قبله گاهم از شهر سبز به اوراتپه تشریف [برده است] <sup>۲</sup>. محمد رحیم دیوان بیگی به پیش فرزندش بابا بیک گویا به جای (۶۹۶) خود گذاشته، قبل از آمدن فقیر پنج روز پیش خود به بخارا آمده بوده است و از آمدن فقیر واقف گشته، پی در پی [به فقیر] <sup>۳</sup> کس [فرستاد و] <sup>۴</sup> به پیش خود طلب نمود. چون فقیر به <sup>۵</sup> نزدیک منزل او رسیدم، استقبال < ۶۲۶ پ > نموده، به چندین عزت و حرمت برده، به جای خود نشانید و از هر جانب سخن کردیم. بعد خانه را خلوت کرد. گفت، < نوعی کرده، پدرم را می آرم. > گفته، < از امیر <sup>۶</sup> جواب بگیرید. نباشد، به شما جواب نخواهد داد. چون از پیش محمد رحیم دیوان بیگی مرخص شده، به خانه رفتیم <sup>۷</sup> { ۶۳۶ ر } و چند روز از رنج راه بر <sup>۸</sup> آسودیم. در آن وقت بود که محمد رحیم دیوان بیگی از امیر نصر الله رخصت اجازت یافت و فقیر نیز رخصت گرفته، به اتفاق محمد رحیم دیوان بیگی متوجه اوراتپه شدیم. باقی این قصه در ذکر محمد رحیم دیوان بیگی <sup>۹</sup> + در طبقه امیر نصر الله در بالا ذکر یافت و این مقدمه سنه ۱۲۴۳ دهم ماه شعبان بود، به وقوع آمد.

نکته سنجان بلاغت را پوشیده نماند که حکومت محمد علی خان ماده <sup>۱۰</sup> را به اتمام نرسانده، شروع به سرگذشت خود کرده بودم. اکنون قلم دو زبان میخواهد [که احوال باقی

- 
- ۱۷ را [د]  
 ۱ و [ت][د]  
 ۲ برده اند [د]  
 ۳ × [ت]  
 ۴ فرستاده [د]  
 ۵ × [د]  
 ۶ نصر الله [ت][د]  
 ۷ رفتیم [د]  
 ۸ × [ت][د]  
 ۹ و [د]  
 ۱۰ × [ت]، غازی [د]

به فقیر مهربانی کرد.<sup>۱</sup> که<sup>۲</sup> > امیر را [تا نبینید]<sup>۳</sup>، نمیشود. +<sup>۴</sup> از بس که حالا<sup>۵</sup> باز پرسید که<sup>۶</sup> حکیم خان چرا [آمده، ما را]<sup>۷</sup> نمی بینند. ما به رضای<sup>۸</sup> شما عمل نموده، گفتیم که حکیم خان بسیار ضرب چوگان <۶۲۶ر> فلک را خورده است. فعل و اطوار دیگر<sup>۹</sup> پیدا کرده است. قابلیت صحبت هیچ<sup>۱۰</sup> سلاطین ندارد. خورسندی<sup>۱۱</sup> او این که به حالش گذارید، چنانچه<sup>۱۲</sup>

## بیت

پادشاهان و گدایان دو گروه عجبی      که نه بودند و نباشند به فرمان کسی

{۶۳۵پ} [امیر نصر الله میگوید]<sup>۱۳</sup>، تا ما یک بارشان را نه بینیم، امکان ندارد که گذاریم. اکنون به هر حال روید. <گفته، جناب ایشان فرمود<sup>۱۴</sup>. بعد فقیر چار و<sup>۱۵</sup> ناچار چیزهای بسیار<sup>۱۶</sup> غیر مکرر +<sup>۱۷</sup> گرفته، ارمغان گویان متوجه ارک شدم. چون به پیش امیر

- 
- ۱۲ آمدند [د]  
 ۱ کردند [د]  
 ۲ × [د]  
 ۳ نه بینی [ت]  
 ۴ حالا [ت] [د]  
 ۵ × [د]  
 ۶ × [ت] [د]  
 ۷ ما را آمده [ت]  
 ۸ رضاگی [د]  
 ۹ دیگری [د]  
 ۱۰ × [ت]  
 ۱۱ خورسندی [د]  
 ۱۲ × [د]  
 ۱۳ میگوید امیر نصر الله [ت]  
 ۱۴ فرمودند [ت] [د]  
 ۱۵ × [ت]  
 ۱۶ × [د]

افتاد، گریه کنان در کنار عاطفت خود کشید<sup>۱</sup> و شوری در میان قصر ایشان پیدا شده بود و ایشان خود را نگاه داشته، نمیتوانستند به زبان (۶۹۵) فقیر این بیت جاری بود.

### مثنوی<sup>۲</sup>

المنة لله که نمودیم و<sup>۳</sup> بدیدیم دیدار عزیزان و به خدمت برسیدیم  
<۶۲۵پ>

از رفتن و باز آمدن رأیت منصور پس فاتحه خواندیم و به اخلاص دمیدیم  
دشمن که نمیخواست چنین کوس بشارت همچون دهندش کوس<sup>۴</sup> به چوگان بدریدیم

بعد به تکلف بسیار رو به فقیر آورده، گفتند<sup>۵</sup>، «حالا ما به شما سخن میگردگی {۶۳۵ر} مجال نداریم<sup>۶</sup>. این قدر زحمت دنیا را شما دیدید. حالا قریب است، از شادی از دست روم<sup>۷</sup>. > فقیر از جای برخاستم. خانه ای که از بهر فقیر آراسته بودند، در آن جا رفته آسودیم. بعد از نماز خفتن بود که جناب ایشان مع مولانا حاذق در آن خانه تشریف آورده، طرح مجلس افکندند و گفتند<sup>۸</sup>. > امیر نصر الله دو بار از ما پرسید که حکیم خان آمد. ما نی گفتیم. اکنون لازم است که فردا رفته، بینید. > فقیر گفتم، > عالی جاها فقیر را وا گذارید. >  
+ چون همان شب آسودیم، جناب ایشان به<sup>۹</sup> پیش امیر نصر الله رفت<sup>۱۱</sup>. باز گشته آمد<sup>۱۲</sup>.

۱ کشیدند [د]

۲ بیت [د]

۳ [د]

۴ پوست [د]

۵ گفت [ت]

۶ ندارم [ت]

۷ رویم [د]

۸ گفت [ت]

۹ از بس که از ملازمت سلاطین بسیار آزرده، دلم این کار در هیچ وقت از من نه آید. جناب ایشان این جواب از من شنیده خاموش شد [ت]

۱۰ × [د]

۱۱ رفتند [د]

## بیت

نماز شام این عنقای فرتوت شکم پر کرد از یک دانه یاقوت

القصه. همان شب در کمال سرعت راه طی کرده، قبل از صبح به نزدیک <۶۲۵ر> شهر رسیده، فرود آمدم. بعد از دمیدن صبح از آن جا سواری نموده، وقت چاشت به بخارا وارد گردیده، به حوالی<sup>۱</sup> جناب ایشان [فروز آمدم].<sup>۲</sup>

{۶۳۴پ} ذکر<sup>۳</sup> آمدن فقیر در ولایت بخارا و دیدن<sup>۴</sup> + امیر نصر الله را و جناب ایشان به پیش امیر نصر الله رفته بود<sup>۵</sup>. برادرم مولانا حاذق در آن جا حاضر بود. +<sup>۶</sup> یک دیگر را در کنار کشیده، گریه میکردیم و آن برادر این دو مصراع را +<sup>۷</sup> میخواند، چنانچه [گفته است].<sup>۸</sup>

بیت<sup>۹</sup>

خوش آمدی که خوش آمدم<sup>۱۰</sup> از آمدنت هزار جان گرامی فدای هر قدمت

در آن حین بود که جناب سیادت پناهی تشریف آورد<sup>۱۱</sup>. چون چشم ایشان به فقیر

---

۱ حولی [د]

۲ وارد گردیدیم [د]

۳ × [ت]

۴ فقیر [د]

۵ [ت]، بودند [س] [د]

۶ و [ت]

۷ مکرر [د]

۸ × [ت]

۹ مصراع [د]

۱۰ آمدی [د]

۱۱ آوردند [د]

فقیر از چاه آب میکشید. به پیش او آمد. چیزی پرسید و<sup>۱</sup> از اسب فرود آمد و<sup>۲</sup> رو به جانب فقیر آورده، در غایت شدت دوید. + دست فقیر را گرفته، گریه کنان بوسه میکرد و<sup>۳</sup> گفت، <جناب ایشان شیخ الاسلام (۶۹۴) دعا میگویند و منتظر قدوم شما یند. > اینک خویشان و خدمتکاران رسیدند. فقیر این سخن را از آن کس شنیدم. انگشت تحیر به دندان گزیده، گفتم، <ایشان شما کیست. > گفت، <سیادت پناهی سلطان خان که از خوقند کوچیده، به بخارا تشریف آوردند. > {۶۲۴پ} امیر نصر الله عمل شیخ {۶۳۴ر} الاسلامی بخارا را بخشید. حالا از شان با آبروتر کسی نمیباشد. < چون از این<sup>۵</sup> مرد این مقدمه ها را شنیدم، یقینم شد که باز از کتم عدم دو باره به وجود آمدم. در آن حین بود که پی در پی خدمت کارانی که میشناختم و قدردان بودند، رسیدند و بعد از ساعتی برادرم سعد الله خان فرزند ایشان رسید و این قطعه را میخواند.

قطعه<sup>#۶</sup>

یار غایب شده من به سلامت برسید      بخت برگشته من بر سر پیمان آمد  
خسته خار عنا چند توان بود آخر      وقت شایسته کنون<sup>۷</sup> کان گل خندان آمد

یک دیگر را<sup>۸</sup> در کنار گرفتیم<sup>۹</sup> و گریه میکردیم و<sup>۱۰</sup> اسب جبدوق طلا و سر و پای عالی به فقیر آورده بودند. فقیر قبول نفرموده، به لباس قلندری به اتفاق ایشان بعد از غروب آفتاب از آن منزل سواری نموده، متوجه شهر شدیم.

- ۱ × [د]
- ۲ × [ت] [د]
- ۳ و [د]
- ۴ × [د]
- ۵ آن [د]
- ۶ [د]
- ۷ کنو [ت]
- ۸ × [ت]
- ۹ کشیدیم [د]
- ۱۰ × [ت] [د]



آمد<sup>۱</sup>. با دو سوداگر از کاروان جدا<sup>۲</sup> شده، رو به شهر آوردیم. بعد از طی مسافت بر لب چاهی رسیدیم. در آن دشت بی پایان احدی نبود، مگر ما چهار کس. ترس و هراس به میان بسیار مستولی شد. خواستیم که چیزی پخته خوریم. بعد [از آن]<sup>۳</sup> رو به راه آریم. رفیقان به طعام پختن پرداختند. فقیر در بحر تفکر فرو رفته بودم که شهر بخارا را در عمر خود ندیده ام و آشنایی<sup>۴</sup> ندارم. به کجا روم و یا به کاروان سرا فرود آیم. به این فکر بودم که ناگاه <۶۲۴> از دور سواران {۶۳۳پ} +<sup>۵</sup> پیدا شدند. چون چشم مایان<sup>۶</sup> به ایشان افتاد، هزار بار از حیات خود دست شسته<sup>۷</sup>، منتظر مرگ نشستیم<sup>۸</sup>. از بس که قبل از آمدن ما در آن جا دزدان<sup>۹</sup> چندی<sup>۱۰</sup> را به قتل رسانیده بودند و راه مسدود شده بود، ما ندانسته، از قافله جدا شده بودیم.

القصة. سواریان<sup>۱۱</sup> به<sup>۱۲</sup> نزدیک رسیدند و جایی<sup>۱۳</sup> نبود که ما<sup>۱۴</sup> گریزیم. لا علاج گردن خار خار تن به قضا در داده، منتظر<sup>۱۵</sup> + یغما نشسته بودیم که از قضا یکی از ایشان پیشتر رسید و اسب جبدوق طلا به دست یَتَو<sup>۱۶</sup> کرده و خود در نهایت صولت در آن حین خدمتکار

- |    |                |
|----|----------------|
| ۱  | آمده [د]       |
| ۲  | × [ت]          |
| ۳  | × [د]          |
| ۴  | آشنای [د]      |
| ۵  | بسیار [د]      |
| ۶  | ما [د]         |
| ۷  | برداشتیم و [د] |
| ۸  | بنشستم [د]     |
| ۹  | دزدان [ت]      |
| ۱۰ | چند تجار [د]   |
| ۱۱ | سواران [د]     |
| ۱۲ | × [د]          |
| ۱۳ | جای [د]        |
| ۱۴ | × [ت]          |
| ۱۵ | قتل و [د]      |
| ۱۶ | یته [د]        |

[قطع راه] <sup>۱</sup> میگردیم و از بی بی آبی بسیار به هلاکت رسیده بودیم. بعد از سه شب و <sup>۲</sup># روز به دریای تجن رسیدیم و از آن جا به آن سردی هوا به چندین محنت راه طی کرده، به راه میمنه و اندخو آمدیم <sup>۳</sup>. + <sup>۴</sup> بعد از سی روز بر لب دریای جیحون <sup>۵</sup> رسیدیم و کاروانیان ام البلاد بلخ نیز آن جا نزول کرده بودند. به رفاقت ایشان از دریای آمویه عبور نموده، سه روز در آن جا از رنج راه آسودیم.

الغرض. از آن جا یکی از رفیقان از ما بیخبر جدا شده، متوجه بخارا شده است. چون (۶۹۳) به شهر داخل میشود، وزارت پناهی حکیم قوش بیگی او را طلب نموده، <۶۲۳پ> از احوال ولایت ایران سخن {۶۳۳ر} میپرسید <sup>۶</sup>. در ضمن تکلم آن کس آمدن فقیر را بیان میکند. + <sup>۷</sup> وزارت پناهی به خدمت امیر نصر الله در آمده، عرض میکند و امیر آن کس را به خدمت جناب سیادت پناهی ایشان سلطان خان میرسانند <sup>۸</sup>. جناب ایشان به مجرد شنیدن این خبر در غایت خرسندی تمامی <sup>۹</sup> خویش و خدمت کاران را به استقبال فقیر امر میکنند، چنانچه <sup>۱۰</sup>

### بیت

مرحبا قاصد فرخ پی پاکیزه خصال      خیر مقدم تو بگویار کجا راه کدام

در آن وقت فقیر با کاروانیان <sup>۱۱</sup> متوجه مقصد شدیم. فقیر به گشت قافله بسیار به تنگ

- ۱      راه قطع [ت][د]
- ۲      [ت][د]
- ۳      × [د]
- ۴      و [ت]
- ۵      سیحون [ت]
- ۶      میپرسد [د]
- ۷      و [ت][د]
- ۸      میفرستاند [د]
- ۹      تمام [د]
- ۱۰      × [د]
- ۱۱      کاروان [ت][د]

## مصراع

جای گله نیست شکر باید گفتن

< ۶۲۲ پ. ح. > و در آن وقت هوا در غایت برودت بود و رفتن قافله به جانب ترکستان معلوم نبود. لا علاج<sup>۱</sup> بودم. روزی چندی<sup>۲</sup> سوداگران اتفاق کرده، به مردم ترکمان رفیق شده، رخت اقامت از آن شهر چیده، متوجه مقصد شدیم. بعد از طی مسافت به ولایت سرخس وارد گردیدیم و آن شهری است<sup>۳</sup>، در کمال خرابی. رفیقانی که بودند، سه روز { ۶۳۲ پ } < ۶۲۳ ر > در آن جا ساکن شدند. فقیر در قبر<sup>۴</sup> + لقمان سرخسی رفته، اعتکاف نشستم و مدد و<sup>۵</sup> استعانت طلب مینمودم<sup>۶</sup>، [چنانچه گفته اند].<sup>۷</sup>

قطعه<sup>۸</sup>

گفت لقمان سرخسی کای<sup>۹</sup> اله      پیرم و سرگشته<sup>۱۰</sup> و<sup>۱۱</sup> گم کرده راه  
بنده کو پیر شد شادش کنند      پس خطش بدهند و آزادش<sup>۱۲</sup> کنند

و از آن جا نیز کوچیده، رو به راه آوردیم. در آن بیابان خون خوار در کمال مشقت

- |    |              |
|----|--------------|
| ۱  | چند روزی [س] |
| ۲  | چند [د]      |
| ۳  | بود [ت] [د]  |
| ۴  | حضرت [د]     |
| ۵  | [د]          |
| ۶  | نمودم [د]    |
| ۷  | [د] ×        |
| ۸  | نظم [د]      |
| ۹  | کی [ت]       |
| ۱۰ | گشته ام [د]  |
| ۱۱ | [د] ×        |
| ۱۲ | از دس [ت]    |

من تعجب نموده، به من تندی میکرد {۶۳۱.ح.} و<sup>۱</sup> در کمال غضب و<sup>۲</sup> این بیت را میخواند.

### فرد

رفیق صاف درون در زمانه کم پیدا است      دلی سفید درین عصر<sup>۳</sup> بیضه عتقا است

{۶۳۱.پ} و من میگفتم، «خاموش باش که مصلحت همین است. از برای تو خود را خراب نخواهم کرد. دیدم که این افسون کارگر نمیشود. من هم چوب خواهم خورد.»  
{۶۳۲.ر} لا علاج رفیق را به شیعه ها سپرده، نوعی کرده، سلامت از دست شیعه ها خطا خورده، راه اوتاق خود را پیش گرفتم و در راه این مصراع را میخواندم.

### مصراع<sup>۴</sup>

رسیده بود بلایی<sup>۵</sup> ولی به خیر گذشت

در اوتاق خود آمده، شکر می کردم و<sup>۶</sup> اما از احوال رفیق خبر نداشتم که چه شد. بعد از نماز شام شیعه ها آورده، به رسته بازار پرفتند. جمعی از بازرگان<sup>۷</sup> ترکستانی ما از کاروان سرا بر آمده، گرفته، آمدند<sup>۸</sup>. دیدیم که بیچاره به خاک و خون غلطیده است و خود را نمیداند و جای صحت هم ندارد. بعد از چندین ساعت به خود آمد. به فقیر گله آغاز کرد. فقیر میگفتم که

۱ × [ت]

۲ × [ت]

۳ عهد [د]

۴ × [ت][د]

۵ بلای [د]

۶ × [د]

۷ بازرگانی [ت]

۸ آمدم [ت]

مصراع<sup>۱</sup>

چون ترا نیست وقوفی چه به از خاموشی

عاقبت لا علاج باز خواند. میخواستند که دست گیرند. یکی در میان ایشان بزرگتر بود. گفت، <شمایان باشید.> به من نگاه کرد. گفت، <شعراى ترکستان شما مردم غلط کرده اند. این نوع خوانید.> گفته، +<sup>۲</sup> بلا توقف این رباعی را خواند.

رباعی<sup>۳</sup>

<۶۲۳ ر.ح.> ثمرقند صیقل<sup>۴</sup> روی زمین است

بخارا با جهنم هم قرین است

مشهد +<sup>۵</sup> گنجش را گر بو بینی

که جنت خانه روی زمین است

گفت و زدن آغاز کرد. فقیر حیران و سرگردان بودم که چه کار کنم.

مصراع<sup>۶</sup>

مرگ را که خبر کرد بلا را که نشان داد

لا علاج شدم. از روی ترس به شیعه ها همراه شدم. رفیق نادان خود را زدن گرفتم. (۶۹۳ ح.) +<sup>۷</sup> <از ترس خود پی نبرند.> گفته، از شیعه ها محکم تر میزدیم. رفیق از حرکت

۱ × [د]

۲ در برابر همان رباعی [ت]

۳ × [ت][د]

۴ صیقلی [ت]

۵ را [ت]

۶ × [ت]

۷ رفیق دید که [ت][د]

<۶۲۲پ> چند وقت<sup>۱</sup> در آن شهر سکونت اختیار کردم<sup>۲</sup>. بعد از [چند روز]<sup>۳</sup> {۶۳۱ر} باز کسل فقیر عود نموده، بر<sup>۴</sup> بستر ناتوانی خوابیدم. سه روز از زبان باز ماندم و امید از جان شیرین شستم. بعد از پنج شش روز حضرت آفریده گار تعالی از غیب حیات دوباره بخشید و کسل علاج پذیرفت و صحت یافتم و هر روز به زیارت حضرت موسی [علی رضا]<sup>۵</sup> میرفتم. روزی رفیق ابلهی داشتم، (۶۹۲ ح.) بسیار نادان و موقع ناشناس بود. اتفاقاً همراه به زیارت رفت. بعد از ادای زیارت در آن جا نشستیم. دیدیم که جمعی از اهل شیعه از ظرفای آن <۶۲۲پ. ح.> ولایت نشسته اند و شعر میخوانند. فقیر گوش میکردم. اتفاقاً بیخبر از زبان رفیق<sup>۶</sup> این رباعی جاری شد که گفته اند.

بیت<sup>۷</sup>

ثمرقند صیقل<sup>۸</sup> روی زمین است      بخارا قوت<sup>۹</sup> اسلام دین است  
مشهد را گنبد سبزش نباشد      خوارج خانه روی زمین است

این سخن را که شیعه ها شنیدند، همه سپند آسا از جای خود برخواستند و بر سر ما هجوم کردند. رفیق گرنگ را گرفتند. گفتند +<sup>۱۰</sup> رباعی که خواندی، مکرر خان. نباشد، ترا خواهیم کشت. <چشم رفیق نادان {۶۳۱پ} باز شد. نمیدانست، چه کار کند. فقیر می گفتم که

- 
- ۱ روز [د]
  - ۲ نمودم [د]
  - ۳ × [د]
  - ۴ به [د]
  - ۵ کاظم [ت]
  - ۶ رفیق [ت]
  - ۷ × [ت]
  - ۸ صیقلی [ت]
  - ۹ تمت [د]
  - ۱۰ که [ت] [د]

ذکر<sup>۱</sup> رسیدن فقیر در ولایت مشهد مقدس و چند روز در حالت بیماری در آن < ۶۲۲ پ >

مملکت روز<sup>۲</sup> گذرانیده<sup>۳</sup>، بعد متوجه ممالک ما وراء النهر شدن

القصه. + < ۶۲۲ پ. ح. > به گوشه کاروان سرا افتادم. کسی مرا<sup>۵</sup> نمیشناخت. در وقت خوقند بودن فقیر محمد حسن نام بازرگان زاده ای از ولایت مشهد به فقیر آشنا شده بود و او را شنیده بودم که در آن جا است. فقیر از یک تاجری نام +<sup>۶</sup> نشان او را پرسیدم. گفت، < صاحب همین کاروان سرا پدر همان شخص است. > فقیر این خبر را شنیده، خطی به نام او در حال نو شتم و مهر کرده، فرستادم. بعد از ساعتی آن برادر دوان<sup>۷</sup> به پیشم آمد. فقیر را به آن حال دید. گریه کنان در پایم افتاد و<sup>۸</sup> غریب از کاروان سرا برآمد و<sup>۹</sup> مردم از حرکت آن<sup>۱۰</sup> بازرگان +<sup>۱۱</sup> در حیرت بودند. بعد از ساعتی فقیر را به حال نگذاشته، به خانه خود (۶۹۲) برد و به خدمت مشغول شد.

### بیت<sup>۱۲</sup>

تونیکی [کرده ای در]<sup>۱۳</sup> دجله انداز که ایزد در بیابانت دهد باز

۱ × [ت] [د]

۲ روزگار [د]

۳ گذرانیدن [د]

۴ چند وقت در آن شهر سکونت اختیار کردم [د]

۵ ما را [د]

۶ و [د]

۷ دوان دوان [د]

۸ × [د]

۹ × [د]

۱۰ × [د]

۱۱ زاده [د]

۱۲ × [ت]

۱۳ میکن با [د]

روز دیگر رو به راه آوردیم. قدری راه طی<sup>۱</sup> کردیم، به [کوه بلندی]<sup>۲</sup> برآمدیم. <sup>۳</sup>+ چون به سر کوه رسیدیم، از دور گنبذ طلایی<sup>۴</sup> حضرت موسی علی رضا نمایان شد و شعاع آفتاب به<sup>۵</sup> گنبذ [طلایی افتاد]<sup>۶</sup>. چنان برق میزد که عالم عالم آفتاب نمایان میشد، چنانچه میگوید.

بیت<sup>۷</sup>

هفت هزار و هفتصد<sup>۸</sup> و هفتاد هفت خشت طلا  
صرف شد در گنبذ موسی<sup>۹</sup> علی ابن رضا

{۶۳۰پ} + آهسته آهسته راه طی [میکردیم و به]<sup>۱۱</sup> ولایت مشهد مقدس وارد گردیدیم<sup>۱۲</sup>.

- 
- |    |                            |
|----|----------------------------|
| ۱  | قطع [د]                    |
| ۲  | کوهی بلندی [ت]، کوهی [د]   |
| ۳  | در کمال بلندی بود [د]      |
| ۴  | طلای [ت]                   |
| ۵  | بدان [د]                   |
| ۶  | طلا افتاده بود [د]         |
| ۷  | × [ت] [د]                  |
| ۸  | هفتصد [د]                  |
| ۹  | سلطان [د]                  |
| ۱۰ | و [د]                      |
| ۱۱ | کرد و به [ت]، کرده، در [د] |
| ۱۲ | گردیم [ت]                  |



## بیت (۶۹۱)

ز انقلاب اندیشه کن ما را به چشم کم مبین در دیار خویش ما هم آبروی<sup>۱</sup> داشتیم  
و اسپان را مع چیز و چاره در ربودند و همه ما<sup>۲</sup> را لوچ<sup>۳</sup> و عریان کردند. {۶۳۰} فقیر  
دانستم که کار از دست میرود و مشّت به درفش راست نمی آید. بالاخر بزرگان و امرای  
خوارزم را چندی را که میدانستم، بیان < ۶۲۲ > کردم. یکی از ایشان گفت، < من بارها  
اورگنج را دیده و امرای آن ولایت را میدانم. [این کس]<sup>۴</sup> حق میگوید و سنی است، و  
گذارید. > به گفته آن خدا شناس فقیر را مع خدمتکارم رها کردند و آن شیعه ها را محکم  
بسته، در کمال سرعت متوجه مقر خود شدند. فقیر به آن خدمتکار به چندین محنت و مشقت  
راه می پیمودم<sup>۵</sup>. چون به منزل قدم جا رسیدم<sup>۶</sup>، + در آن جا همان شب آسودیم، [چنانچه  
میگوید].<sup>۷</sup>

بیت<sup>۹</sup>

خواه آب و خواه شمع<sup>۱۰</sup> خواه آتش همچو شمع  
بر سرفـرزنـد آدم هرچه آید بگذرد

۱۳ اثبات [د]

۱۴ × [د]

۱ آبرویی [ت]

۲ × [د]

۳ لُج [د]

۴ × [ت]

۵ پیمودیم [د]

۶ رسیدیم [د]

۷ و [ت]

۸ × [د]

۹ × [ت]

۱۰ تیغ [د]

ذکر<sup>۱</sup> به یغما بردن ترکمنان [این بی سرو پا را]<sup>۲</sup> در آن بیابان خونخار

اتفاقاً هفت شیعه ناچیز<sup>۳</sup> اتفاق کردند. فقیر نیز [به همراهی]<sup>۴</sup> ایشان متوجه طوس شدم<sup>۵</sup>. چون به منزل چناران رسیدیم، از آن جا برآمده، به زمین کوه می پیمودیم. از قضا بست ترکمن جلاد {۶۲۹پ} [در راه کمین]<sup>۶</sup> کرده بودند. در اثنای راه از پیش برآمده، مایان را در میان گرفتند و شیعه ها دست از جان شیرین شسته، تن به قضا در دادند و<sup>۷</sup> فقیر دیدم که امکان خلاصی نیست. به آواز بلند میگویم که<sup>۸</sup> >بیایید، مسلمانان. این کافر شیعه ها را {۶۲۱پ}< دستگیر نمایید.< و<sup>۹</sup> از سخن فقیر شیعه ها در حیرت افتاده، میگویند، >مگر شما دیوانه [شده اید]<sup>۱۰</sup>.< گفته، این بیت را میخوانند.

### بیت

یاران که بوده اند ندانم کجا شدند      آیا چه حال بود که از ما جدا شدند

ترکمنان به یک حمله همه را دستگیر نموده، می بستند. فقیر را نیز به کسافت ایشان آهنگ بستن کردند. فقیر در غایت التجا قسم ها یاد میکردم که >من مردی هستم، حاجی و از بیم خود لباس خود را تغیر داده، در میان ایشان میگردم. هر چند در [سلک این جماعه]<sup>۱۱</sup> بودن خود را<sup>۱۲</sup> سلب<sup>۱۳</sup> میکردم. مفید نمی افتاد، [چنانچه میگوید].<sup>۱۴</sup>

۱ × [د] [ت]

۲ × [د]

۳ × [د]

۴ همراه [د]

۵ شدید [ت]

۶ کمین راه [د]

۷ × [د]

۸ × [ت]

۹ × [د]

۱۰ شدید [د]

۱۱ سنی [د]

۱۲ × [د]

سنی<sup>۱</sup> به این حیلہ خلاص شدنی. > و این سخن را زواران<sup>۲</sup> شنیدند. به آن سگ در افتادند و از اهل زوار کس بسیار بود. غلبه کرده، آن کس را چنان زدند که از گفته خود هزار بار پشیمان شد<sup>۳</sup> و التجا میکرد. ایشان نمیگذاشتند که (۶۹۰) > تو اهل زوار را سنی میگوی<sup>۴</sup>. > در آن زمان فقیر وقت را غنیمت دانسته، ایشان را به جنگ گذاشته، متوجه کاروانیان شدم، [چنانچه میگوید].<sup>۵</sup>

### {۶۲۹ر} بیت

چو دشمن به دشمن شود مشغول      تو با دوست ره گیر به آرام دل

چون به زواریان پیوستم، از تعاقب زواریان آن سگ را کوفته، رسیدند. همان شب در آن جا آسودیم. روز دیگر از آن منزل رو به مقصد آوردیم. فقیر گردن خار خار در کمال محنت و مشقت راه می پیمودم<sup>۶</sup>. > ۶۲۱ر > بعد از طی مسافت به ولایت نسا بور رسیدیم. آن ولایتی بود، در غایت خوش آب و هوا. فقیر یک خدمتکار خود را مع چیز و<sup>#۷</sup> چاره به زوار همراه کرده، فرستادم و<sup>۸</sup> خود مع یک خدمتکار در آن ولایت سکونت اختیار کردم و به معالجه خود پرداختم. ده روز از این میان گذشت و مرض فقیر رو به بهبودی آورد و<sup>۹</sup> اما کاروانی موجود نبود. چار ناچار در میان قیزیل باشان روزگار میگذراندم.

۱ کسی [د]

۲ زواریان [ت] [د]

۳ بود [د]

۴ میگوی [د]

۵ × [د]

۶ پیمودیم [ت]

۷ [د]

۸ × [د]

۹ × [د]

و القصه<sup>۱</sup>. گفتگو میانه فقیر و آن سگ رافضی بسیار شد و مردم کاروان رأساً<sup>۲</sup> بر سر ما هجوم کردند. فقیر دانستم که اگر تدبیر نه اندیشم، خراب خواهم شد و او به قیزیل باشان معقول [میکرد و]<sup>۳</sup> میگفت، >این کس به<sup>۴</sup> تحقیق سنی است. هر کس این را {۶۲۸پ} رفض<sup>۵</sup> کند، اجر عظیم می یابد. فقیر [از بیم جان با خود]<sup>۶</sup> میگفتم.

## بیت

دو گروه اند مردمان تلخ شیعه سبزوار و سنی بلخ

در آن ماجرا بود که چندی از زواریان برای<sup>۷</sup> + حوایج خود به کاروان سرا آمده بودند. فقیر را به آن حال دیدند. به پیش فقیر<sup>۸</sup> آمدند. + ایشان را دیده<sup>۹</sup>، یک چیز جرأت<sup>۱۰</sup> + کرده، شطاحی<sup>۱۱</sup>\* را پیشه خود ساخته، میگفتم، >الحمد لله شیعه پاکم. مرا این <۶۲۰پ> نامسلمانان<sup>۱۲</sup> دانسته، ایستاده، حکم به سنی گی میکنند<sup>۱۳</sup>. حکم این چه باشد و از نهایت بیم<sup>۱۴</sup> + نیز از خاطر فراموش شده. > میگفتم. >در این جا ایستادن مسلمان از حکمت نیست. < گفته، چیز و چاره خود را به اسب بار کردن گرفتم و آن ملعون میگفت، >این

- 
- |    |                            |
|----|----------------------------|
| ۱  | × [د]                      |
| ۲  | سرا [د]                    |
| ۳  | کرده [د]                   |
| ۴  | × [ت]                      |
| ۵  | از جر [د]                  |
| ۶  | از بیم جان [ت]، با خود [د] |
| ۷  | احتیاج [د]                 |
| ۸  | ما [ت]                     |
| ۹  | فقیر [د]                   |
| ۱۰ | دیدم [د]                   |
| ۱۱ | پیدا [د]                   |
| ۱۲ | [ت]، شتاحی [س]، سیاحی [د]  |
| ۱۳ | نامسلمان [د]               |
| ۱۴ | میکند [د]                  |
| ۱۵ | سخن [د]                    |

سنی] \*<sup>۱</sup> نمیشود. < فقیر از کمال تنگ شدن بی اختیار گفتم که > سنیها میگویند که حلوا کوه<sup>۲</sup> میشود و<sup>۳</sup> کوه<sup>۴</sup> حلوا نمیشود. < به مجرد شنیدن این سخن آن سگ ملعون [در آشت و]<sup>۵</sup> گفت، > [مگر شما]<sup>۶</sup> از اهل سنت و [جماعه اید]<sup>۷</sup> و از ولایت ما وراء النهر اید. < +<sup>۸</sup> این سخن به گوشم رسید، از ترس مثل برگ بید لرزه < ۶۲۰ ر > بر اندامم افتاد. از بس یقین میدانستم که<sup>۹</sup> اگر در آن ولایت اهل سنت و جماعه<sup>۱۰</sup> را کسی داند، به بدترین +<sup>۱۱</sup> عذاب گرفتار میکنند<sup>۱۲</sup>. بنابراین از جای بر جستم. گفتم، > [تو مگر]<sup>۱۳</sup> دیوانه شده ای. ما وراء النهر گفته، چه چیز را میگویی<sup>۱۴</sup>. خوراک است. یا پوشاک است و<sup>۱۵</sup> یا چهار پا است. < هر چند مبالغه میکرد<sup>۱۶</sup>، منکر میشدم<sup>۱۷</sup>. مفیدی<sup>۱۸</sup> [نه افتاد]<sup>۱۹</sup>.

۱ [ت][د]، سنی شیعه [س]

۲ کُهِ [د]

۳ × [د]

۴ کُهِ [د]

۵ × [د]

۶ شما مگر [د]

۷ جماعت هستید [د]

۸ چون [د]

۹ × [د]

۱۰ جماعت [د]

۱۱ ظلم و [د]

۱۲ میکند [ت]

۱۳ مگر تو [د]

۱۴ میگوی [د]

۱۵ × [د]

۱۶ کرده [د]

۱۷ شدم [د]

۱۸ مفید [ت][د]

۱۹ نمی افتاد [ت]

در قبر حضرت سلطان الاولیا و<sup>۱</sup> برهان < ۶۱۹ پ > الاتقیاء<sup>۲</sup> جناب سلطان بایزید بسطامی<sup>۳</sup> قدس سره العزیز معتکف بودم و از آن جا کوچیده، رو به راه آوردیم. بعد از قطع مراحل به ولایت<sup>۴</sup> سبزوار آمدم و آن ولایت بسیار معمور و آبادان بود و<sup>۵</sup> اما مردم او بدترین اهل روضه میباشند.<sup>۶</sup> چنانچه جناب مرحومی امیر<sup>۷</sup> عمر خان ندیده، میگویند که<sup>۸</sup>

### بیت<sup>۱</sup>

هند و کشمیر و ختنده یوق سیننگدیک نازنین  
باش آلیب هجرینگده شهر سبزوار ایلای بوگون

القصه. اهل زوار به بیرون شهر نزول کردند. در آن وقت طبع فقیر از جاده صحت انحراف نموده، به مرض صعب گرفتار شدم. لا علاج از کاروانیان جدا شده، به کاروان سرا فرود آمدم و چند روز سکونت اختیار [نمودن کردم]<sup>۱۰</sup>. از قضا صاحب (۶۸۹) سرا {۶۲۸} به پیش فقیر آمد و از هر جانب سخن پرسید. فقیر از غایت صعوبت کسل از ترس به تکلف جواب میدادم. بالاخر<sup>۱۱</sup> گفت، < [چه سبب شد] <sup>۱۲</sup> که سنی شیعه میشود و [شیعه

۱۱ زواریان [د]

۱ × [د]

۲ الاصفیا [د]

۳ × [ت] [د]

۴ شهر [د]

۵ × [د]

۶ بود [ت] [د]

۷ × [د]

۸ × [ت]

۹ × [ت]

۱۰ نمودم [د]

۱۱ و [د]

۱۲ سبب چه باشد [ت] [د]

فرنگستان فرستاده است. او نیز از زاده طبع خود<sup>۱</sup> این بیت را < ۶۱۹ ر > [در سلک نظم کشیده، به نزد پادشاه]<sup>۲</sup> فرنگستان فرستاد. [بیت این است.]<sup>۳</sup>

{ ۶۲۷ ر } بیت

صبا رسان به فرنگی که یوسف ثانی شکست رونق بازار حسن کیسترجی

ذکر<sup>۴</sup> متوجه شدن فقیر از ولایت طهران به صوب مشهد مقدس

زبده کلام آن که فقیر روزی تفرج کنان از شهر بیرون به زیارت شاه عبد العزیز رفتم. در آن جا دیدم که زوار<sup>۵</sup> + بسیار از جانب اصفهان آمده است. میخواستند که از آن جا کوچیده، به جانب مشهد مقدس به زیارت حضرت موسی علی رضا متوجه شوند. فقیر در غایت سرعت به شهر آمده، به منزل خود نزول فرمودم و از شاه رفته، رخصت گرفتم. شاه از روی پادشاهی به فقیر صد طلایع دو قوتی مومیای<sup>۶</sup> اصل انعام نمود [وزری که گفته اند.

مصراع

رسم باشد از شهان چیز رسد سیاح را<sup>۷</sup>

+<sup>۸</sup> چون از شاه مرخص شدم، در غایت { ۶۲۷ پ } تعجیل آمده، به زوار همراه شدم و از آن جا رخت اقامت بر چیده، [مع زواریانم]<sup>۹</sup> رو به مقصد آوردیم. بعد از طی مسافت در ولایت شه رود<sup>۱۰</sup> و بسطام وارد گردیدیم و زواران<sup>۱۱</sup> در آن جا از رنج راه سه روز آسودند. فقیر

۱ × [د]

۲ مشق کرده، به نزد پادشاه [ت]، مشق کرده، به امر شاه به [د]

۳ × [ت] [د]

۴ × [ت] [د]

۵ یعنی زوار [ت]

۶ مومیایی [ت]

۷ × [ت] [د]

۸ و [ت]

۹ × [ت] [د]

۱۰ روت [د]

اول شاه و شاهزاده ها بل تمام ملک +<sup>۱</sup> گرفتار آن پری چهره<sup>۲</sup> شده بودند. آن گل پرهن از زاده طبع خود این بیت نوشته، به شاه فرنگ فرستاد. +<sup>۳</sup>

{۶۲۷ ر.ح.} بیت

رسان به شاه فرنگ این نوید کیسترجی به تیغ غمزه مسخر نمود ایران را

[خلص کلام آن که]<sup>۴</sup> در آن آوان +<sup>۵</sup> فرزند ارشد<sup>۶</sup> فتح علی شاه عباس میرزا حاکم تبریز بود. از ولایت تیفلیس یعنی گرجستان یوسف نام غلامی را به هزار طلا خریده، (۶۸۸) به خدمت پدرش در ایران فرستاد. الحق آن گورجی<sup>۷</sup> بچه<sup>۸</sup> غلام یوسفی بود که هزار زلیخا در عشق او حیران و سرگردان میبود، +<sup>۹</sup> در غایت حسن و جمال به حکم آن که

بیت

یوسف نبود چون او در نیکویی<sup>۱۰</sup> مکمل نقاش نقش ثانی بهتر کشد ز اول

القصه<sup>۱۱</sup>. در آن وقت<sup>۱۲</sup> یوسف شنید که کیسترجی بیت مذکور را<sup>۱۳</sup> مشق کرده، به

۱ ایران [ت]

۲ پیکر [د]

۳ که گفته است [ت]، که [د]

۴ و [د]

۵ بود که [د]

۶ [ت] [د]، ارشدی [س]

۷ گرجی [د]

۸ × [ت]

۹ و [د]

۱۰ نیکوی [د]

۱۱ × [د]

۱۲ زمان [ت] [د]

۱۳ × [د]



از هوش روم، خود را به تکلف نگاه میداشتم. هر گاه تجمل ایشان به خاطر [می آمد]<sup>۱</sup>.  
 حاکمان ما وراء النهر را به لفظ پادشاهی<sup>۲</sup> به زبان جاری کردن شرم می آید.  
 القصه، نظر شاه <۶۱۸ر> به فقیر افتاد. در حال به پیش خود طلب نمود. گفت،  
 <خوش آمدید. ما از تشریف شما بیخبر بودیم. حالا از امیرزاده شنیدیم. بنابر این<sup>۳</sup> شما را  
 خواستیم.> فقیر از<sup>۴</sup> کمال آداب گفتم، <این همه شفقت و مرحمت از غریب پروری<sup>۵</sup> خسرو  
 والا آمده است، ورنه<sup>۶</sup> من چیستم که در این بارگاه عالی راه یابم.> و این سراغ جناب  
 صاحبقرانی سبب مباحثات این بی سرو پا گشت.

## بیت

سالها باید که تا یک سنگ اصلی ز آفتاب  
 لعل گردد در بدخشان یا عقیق اندر یمن

و گفت، <پسر بیرم علی خان حاجی خان قبل از این چند سال از قید حاکمان بخارا  
 فرار نموده، به ولایت شما رفته بوده است. میدانید.> فقیر گفتم، <در آن وقت در عالم  
 طفولیت بودم. نمیدانم. اما خوب شنیده ام.> بعد رو به وزیرای خود آورده، گفت، <این مردم  
 در حق او بسیار نیکها<sup>۷</sup> کرده اند.> بعد فقیر را مرخص کرد. به منزل خود مراجعت فرمودم.  
 قبل از این یک سال پیش از ولایت فرنگستان کیسترجی نام {۶۲۷ر} جوانی در غایت حسن  
 و جمال از پیش پادشاه فرنگ به پیش فتح علی شاه به ولایت <۶۱۸پ>+<sup>۸</sup> ایران آمده بود.  
 شاه فرنگ از جهت صاحب حسن بودن<sup>۹</sup>+ فرستاده بود. چون به خدمت شاه ایران رسید،

۱ می آید [ت] [د]

۲ پادشاه [ت] [د]

۳ آن [د]

۴ در [د]

۵ نوازی [د]

۶ و نه [ت]

۷ نیکها [ت]

۸ به ولایت [ت]

۹ و [ت]

مثنوی<sup>۱</sup>

ستونهایش سهی [بالا و]<sup>۲</sup> موزون      خیابانها گلستانهای گردون  
تماشا تا کند زیبایی خویش      نهاد آینه دیبایی خویش

و دیوارهای او را مصوران مانی قلم به صورتهای زیبا چنان صورت هر ذی روح را<sup>۳</sup> در نهایت مشابَهت کشیده اند که احدی او را نقش گمان نمیکند و در پیش آن ایوان فواره<sup>۴</sup> عالی {۶۲۶ر} بنا کرده اند. مثل فواره جامع<sup>۵</sup> دمشق شام که حالا موجود است. همه از سنگ مرمر ساخته است<sup>۶</sup> و در تحت آن ایوان تختی از سنگ یشم بنا کرده است و چهار صورت دیو و چهار تصویر شیر را از سنگ یشم چنان مشابَهت < ۶۱۷پ > تراشیده است که عین او کرده است و آن دیوان و شیران تخت را به سر بر داشته ایستاده اند. همه از طلا منقش کرده، کندل کرده اند و در بالای آن تخت + تخت طاوس که نادر صاحبقران از هندوستان آورده بود. او را گذاشته اند. +<sup>۸</sup> مثل چتر طاوس از دور به نظر کس مرئی میشود. بنابراین او را تخت طاوس می نامند و همه او از زمرد سعیدی و شعاع او عالم را روشن کرده بود و شاه در تحت آن تخت مربع نشسته و تاجی بر سر داشت و خود را در میان جواهر غرق کرده بود. خصوص به بازوی خود دریای نور را بسته بود. چنان برق میزد که نگاه انسان از شعاع آن +<sup>۹</sup> می لغزیدی<sup>۱۰</sup> و شاه در کمال حسن (۶۸۷) و لطافت با وجودی که پیر بود و ریش او سفید به نظرم از همه باشکوه تر می نمود. چون آن دستگاه را مشاهده کردم، قریب {۶۲۶پ} بود که

- ۱      قطعه [د]
- ۲      بالای [د]
- ۳      × [د]
- ۴      فواره های [د]
- ۵      × [د]
- ۶      اند [د]
- ۷      سر شاه [س]، به سر شاه [ت]
- ۸      و [د]
- ۹      سنگ [د]
- ۱۰    لغجید [ت]، لغزید [د]

گاه شاه رسیدم، کورونوش خانه ای بود، در نهایت وسعت و در و<sup>۱</sup> دیوار او همه از کاشین و تصویرهای با هول را در کمال شباهت کشیده اند و زمین کورونوش خانه را نیز +<sup>۲</sup> کاشین فرش کرده اند و به میان آن منزل دو جانبه رسته کرده، چنار<sup>۳</sup> نشانیده اند و آن چنارها<sup>۴</sup> در غایت بزرگی {۶۲۵پ} (۶۸۶) و +<sup>۵</sup> بلندی و سر به آسمان میسود و<sup>۶</sup> آبهای روان از فواره ها چون قد دلبران سر +<sup>۷</sup> میکشید. باز به آن صحن میریخت. +<sup>۸</sup> به هر جانب جریان میشد<sup>۹</sup>. اتفاقاً همان روز ایلچی روم حاضر بود. بنابر آن شاه کورونوش<sup>۱۰</sup> ساخته بود و امرای <۶۱۷ر> اهل شیعه به لباس های فاخر<sup>۱۱</sup> خود را زیب داده، دو جانب صف زده ایستاده اند و پیشگاه آن منزل قصری در غایت بلندی بنا کرده اند. +<sup>۱۲</sup> پیش قصر ایوانی در نهایت ارتفاع ساخته اند و چهار<sup>۱۳</sup> اوستون<sup>۱۴</sup> از سنگ مرمر در کمال بزرگی نصب کرده اند و همه او را از طلا کندل کرده اند و سقف ایوان را از آئینه فرنگی تعمیر کرده اند، چنانچه<sup>۱۵</sup>

- 
- |    |                         |
|----|-------------------------|
| ۱  | × [د]                   |
| ۲  | از [د]                  |
| ۳  | چنارها [ت] [د]          |
| ۴  | چنار [ت]                |
| ۵  | نهایت [د]               |
| ۶  | × [د]                   |
| ۷  | بر [د]                  |
| ۸  | و [د]                   |
| ۹  | میشود [د]               |
| ۱۰ | کورونوشی [ت]            |
| ۱۱ | فاخره [د]               |
| ۱۲ | و [ت] [د]               |
| ۱۳ | چهل [ت]                 |
| ۱۴ | اوستون [ت]، اوستونی [د] |
| ۱۵ | × [ت] [د]               |

خبری نشنیده بودم. بنابر آن بلا اهماال همراه آن دو جوان متوجه خانه امیرزاده شدم.<sup>۱</sup> چون به نزد خانه او رسیدم<sup>۲</sup>، امیرزاده استقبال نمود و گرامی داشت. خبر قبله گاهم را باید و شاید تقریر نمود و از پیش خود جای داد.

### ذکر<sup>۳</sup> ملاقات کردن فقیر به شاه ایران یعنی فتح علی شاه قاجار

روز دیگر احوال فقیر را +<sup>۴</sup> به فتح علی شاه بیان نمود و شاه دو محرم خود را به پیش فقیر فرستاد. محرمان در کمال تعجیل آمده، گفتند، <خدمت شما را شاه میطلبید<sup>۵</sup>. فقیر بلا توقف بر خواسته، {۶۲۵ر} متوجه بارگاه سلطانی شدم. چون نزدیک قصر رسیدم<sup>۶</sup>، قلعه ای دیدم، در کمال رفعت و بلندی. چون از دروازه داخل قلعه شدم، دو جانب کوچه را به دوکان های عالی آراسته<sup>۷</sup> و از هر جنس متاع و اقمشه در آن جا موجود و از آن جا گذشته، به دروازه دیگر رسیدم و از آن جا <۶۱۶پ> به صحنی بر آمدم. در کمال وسعت و دور<sup>۸</sup> آن صحن همه کوشک های عالی ساخته و دیوانیان و دیگر ناظرانی<sup>۹</sup> که به کار پادشاهی<sup>۱۰</sup> تعلق دارند، در +<sup>۱۱</sup> دیوان [خانه ها]<sup>۱۲</sup> موجود و به کار خود مشغول و در میان آن صحن تویهای ازدها پیکر مملو. چون از آن جا گذشته، به دربند دیگر رسیدم، دانستم که کورونوش خانه پادشاهی است. تواچیان و محرمان هر کس به جای خود منتظر خدمت نشسته، چون از آن جا به نشیمن

- ۱ شدیم [ت] [د]
- ۲ رسیدیم [ت] [د]
- ۳ × [ت] [د]
- ۴ امیرزاده [د]
- ۵ طلب میکند [د]
- ۶ شدم [د]
- ۷ آراسته اند [ت] [د]
- ۸ [د]، در [س] [ت]
- ۹ ناصرانی [ت]
- ۱۰ پادشاه [د]
- ۱۱ هر [د]
- ۱۲ خانه [د]

چند روز از زیبایی<sup>۱</sup> آن<sup>۲</sup> شهر در آن جا سکونت اختیار نمودم و هر روز تفرج کنان به کوچه و بازار میبر آمدم و عجایبات دنیا را از هر جنس مشاهده میکردم. روزی به عادت معهود به چهار سوی شهر به دکانی<sup>۳</sup> نشسته بودم. + ناگاه دو جوان ماه روی در<sup>۵</sup> غایت حسن و جمال و<sup>۶</sup> در کمال آرایش به پیش فقیر [آمد و]<sup>۷</sup> سلام کرد و گفت، <جناب شما را امیرزاده بخارا میطلبند و منتظر {۶۲۴پ} خدمت شما هستند و دو روز میشود که آمدن شما را شنیده<sup>۸</sup>، در جستجوی شما بودیم. + (۶۸۵) +<sup>۹</sup>. <فقیر پرسیدم که <امیرزاده کیست. > گفت، <فرزند ارجمندی<sup>۱۱</sup> دین ناصر خان ابن شاه مراد بی والنعمی حالا [خود او]<sup>۱۲</sup> به دار السلطنة روم تشریف بردند [و فرزند او]<sup>۱۳</sup> که داماد حسن علی میرزا ابن فتح علی شاه است، مع کوچ به خدمت شاه میباشد<sup>۱۴</sup>. > فقیر قبل <۶۱۶ر> از حاجیان شنیده بودم که جناب قبله گاهم +<sup>۱۵</sup> به [خانه او]<sup>۱۶</sup> تشریف آورده بود<sup>۱۷</sup> و هم در میان این چند سال از قبله گاهم تعیین

- ۱ زیبایی [د]
- ۲ × [د]
- ۳ [د، دوکانی [س]] [ت]
- ۴ که [ت] [د]
- ۵ × [ت]
- ۶ × [ت]
- ۷ آمده [د]
- ۸ شنیده اند و [د]
- ۹ حالا [د]
- ۱۰ یافتیم [د]
- ۱۱ ارجمند [د]
- ۱۲ خودشان [ت] [د]
- ۱۳ فرزندشان [ت] [د]
- ۱۴ میباشد [ت] [د]
- ۱۵ به مشهد مقدس [ت]
- ۱۶ خانه شان [ت] [د]
- ۱۷ بودند [ت] [د]

گویان به پیشم یک تسبیح مرجان و نه بند ایزار [ابریشمی داد، چنانچه میگوید].<sup>۱</sup>

بیت

کس نمیداند در این بحر عمیق      سنگ ریزه قدر دارد یا عقیق

در آن وقت بود که سلیمان اغا نام فقیر را گرفته، منادی میکرد و هر جانب را میجست و فقیر در آن زن بیچاره وداع کرده، {۶۲۴ر} آهسته بیرون شدم و ایشان هر چند فقیر را جستند<sup>۲</sup>، نیافتند. عاقبت مستان<sup>۳</sup> به هر گوشه افتادند. فقیر بعد از ساعتی به وصله<sup>۴</sup> خود رفته، به خاطر جمعی خوابیدم. روز دیگر از آن جا کوچیده، رو به مقصد آوردیم. بعد از طی مسافت به پای تخت ممالک ایران به طهران<sup>۵</sup> وارد گردیدم<sup>۶</sup>. آن شهری بود، در نهایت آبادی و در کمال معموری نزد همگنان نهفته <۶۱۵پ> نماند که از آن جا که دار السلطنة<sup>۷</sup> ایران است. از تعریف مستغنی است. حاجت به<sup>۸</sup> بیان نیست<sup>۹</sup>.

قطعه

زهی خرم زمین شهری که در وی      بنای فیض باشد آسمان پی  
چو شهر علم معمور و<sup>۱۰</sup> مصفا      در او هر چیز میخواهی مهیا

۱۴ × [د]

۱ ابریشمی نذر گویان گذاشت، چنانچه میگوید [ت]، ابریشمی نهاد [د]

۲ جستن [ت]

۳ مستانه [د]

۴ وصلی [د]

۵ توران [ت][د]

۶ گردیدیم [د]

۷ ممالک [د]

۸ × [ت]

۹ ندارد [د]

۱۰ [د]

خوابیده است. روز دوم در عالم رویا چنان مشاهده کردم که شخصی محاسن سفید میگوید که بعد از سه روز در خانه تو سیدزاده ای نزول میفرماید. البته فرزند خود را به<sup>۱</sup> دامن آن سیدزاده انداز. چون از خواب بیدار شدم، هولی بر دلم افتاد و این خواب را از جمله رؤیای صالحه شمرده، به<sup>۲</sup> همین روز {۶۲۳پ} منتظر بودم که شما تشریف آوردید. چنانچه میرزا<sup>۳</sup> + میفرماید.

### مصراع<sup>۴</sup>

خواب ما غفلت سرشتان<sup>۵</sup> محض اوهام است و بس

چون چشم من به شما افتاد، به علم فراست در یافتم و<sup>۶</sup> علمم<sup>۷</sup> قرار یافت<sup>۸</sup> که همان کس شمايید. (۶۸۴) بنابر آن از روی گستاخی به خدمت شما عرضه نمودم. > گفت. از جای برخواست و از گهواره فرزند خود را گشاد. به دامن فقیر انداخت و گفت، > نام <۶۱۵> این فرزند را از شما میخواهم. > چون<sup>۹</sup> + این مقدمه را از آن زن شنیدم، در بحر تفکر<sup>۱۰</sup> فرو رفته، هر چند اندیشه میکردم که در این چه حکمت باشد. تفکر<sup>۱۱</sup> به جایی<sup>۱۲</sup> نمیرسید. لا علاج<sup>۱۳</sup> + آن فرزند<sup>۱۴</sup> را نام<sup>۱۵</sup> صالح نهادم و در حق او دعا کردم و آن زن نذر

- ۱ در [د]
- ۲ × [ت]
- ۳ بیدل [د]
- ۴ ع [د]
- ۵ پرستان [د]
- ۶ × [د]
- ۷ حکم [د]
- ۸ گرفت [د]
- ۹ فقیر [د]
- ۱۰ تخیل [د]
- ۱۱ جای [ت][د]
- ۱۲ نام [د]
- ۱۳ کودک [ت]

نموده، از عقیب او رفته<sup>۱</sup>، به منزل او در آمدم. خانه ای داشت، در غایت خوبی و زیبایی و پلاس های قیمت بها گسترده و در کنج خانه گهواره ای نهاده، الا همان زن کسی در آن جا موجود نبود و آن زن در کمال حسن و جمال بود. یک تعجب او این بود که مثل خط مهوشان [در غایت نزاکت]<sup>۲</sup> به گرد عارضش سبزه خط نو دمیده بود. به حکم آن که [گفته اند].<sup>۳</sup>

## بیت

{۶۲۳ر} هر کجا نقاش نقش آن پری رو میکشد

چون رسد نوبت به ریحان خطش بو میکشد

در ساعت به پیش فقیر از هر جنس نقل<sup>۴</sup> حلوایات +<sup>۵</sup> لطیف<sup>۶</sup> کشید و بعد از فراغ اطعمه گفتم، <ای زن، سبب این قدر شفقت و مرحمت چیست. > گفت، <زنی هستم، از اهل سنت و جماعت<sup>۷</sup> الا من در این ولایت > {۶۱۴پ} سنی نمیباشد و من هم<sup>۸</sup> از ترس شیعه ها مذهب خود را مخفی میدارم و این حوالی<sup>۹</sup> که می بینید، از من است. شوهری داشتم، +<sup>۱۰</sup> بسیار متمول. از دار دنیا به دار بقا رحلت نمود و من از آن شوهر آستن بودم. حالا سه روز میشود که حضرت آفریده گار از کتم عدم فرزندی به وجود آورد و اینک می بینی که در مهد

۱۴ فقیر [د]

۱۵ به سخن او [ت]

۱۶ اعتمادی [ت]

۱ به حرم رفتم. چون [د]

۲ × [د]

۳ × [د]

۴ × [د]

۵ و [ت]

۶ لطیفه [د]

۷ جماعه [ت]

۸ × [ت]

۹ خانه ای [د]

۱۰ مردی بود [د]



سفید دارد، به پیشم حاضر شد و سلام کرد. گفت، >ایشان را بارها دیده ام. از این جا مرور میکردند<sup>۱</sup> و شما را<sup>۲</sup> ندیده بودم. خدا و رسول را شفیع می آرم که حقیقت خود را گویند که از کجا می آید و کجا میروید. مشکلی دارم، تا<sup>۳</sup> حل شود. < چون فقیر از آن زن این سخن<sup>۴</sup> را شنیدم، در حیرت افتادم. از آن جا<sup>۵</sup> که خدا و رسول را شفیع آورده بود، { ۶۲۲پ } به<sup>۶</sup> جز راستی چاره دیگر ندیدم. گفتم، >قلندرم. از حج می آیم و به اقلیم توران میروم. < چون نام (۶۸۳) حج شنید، به پایم افتاد. گفت، >مقصودم را یافتم. بیایید، به [خانه ام]<sup>۷</sup> تشریف نمایند که<sup>۸</sup> صورت واقعه را بیان فرمایم. < فقیر سخن آن زن بیچاره را > ۶۱۴ر < باور نکرده<sup>۹</sup>، از جمله مکاید ایشان خیال<sup>۱۰</sup> کرده، به [سخن او]<sup>۱۱</sup> اعتماد نمیکردم، چنانچه میگوید.

## بیت

نباید غافل از مکر زنان بود که هر ساعت زند<sup>۱۲</sup> صد خانه بر باد

و آن بیچاره به فراست دانست که فقیر سخن او را تلبیس میدانم. زبان به عهد گشاد و از دین و ایمان قسم ها یاد کرد. <sup>۱۳</sup> بسیار التجا نمود. بعد + <sup>۱۴</sup> [سخن او را] <sup>۱۵</sup> اعتماد<sup>۱۶</sup>

- ۱ کرده اند [د]
- ۲ هیچ [د]
- ۳ که [د]
- ۴ سخنها [ت][د]
- ۵ × [ت]
- ۶ × [د]
- ۷ خانه [ت][د]
- ۸ × [د]
- ۹ [د]، نا کرده [س][ت]
- ۱۰ حمل [د]
- ۱۱ سخنش [د]
- ۱۲ دهد [د]
- ۱۳ و [ت][د]

همان شب چهار زن<sup>۱</sup> فاحشه که در آن ولایت عدیل و نظیری<sup>۲</sup> نداشت، آورده، چنان جشنی<sup>۳</sup> آراست که کرای دیدن صد بار میکرد و می ناب را {۶۲۲} به گردش در آورده، به عیش و<sup>۴</sup> عشرت مشغول شد<sup>۵</sup>. خانه دیگر موجود نبود که پناه گیرم. لا علاج گردن خار خار در میان ایشان بودم و آن پری چهره ها به فقیر بسیارتر دخل میکردند، به حکم آن که

بیت<sup>۶</sup>

قلندر مشرب و مطرب<sup>۷</sup> نوا باش به هفتاد و دو ملت آشنا باش

<۶۱۳پ> فقیر نیز از روی شوخی به سخندهای خوش آمد آمیز دروغی<sup>۸</sup> دل آنها را<sup>۹</sup> شاد میکردم و میگفتم.

## بیت

گفتم ای گل بوسه بر رویت زنم یا بر لب  
گفت عاشق چشم داری بین کجا نازکتر است

دیدم که مستی<sup>۱۰</sup> ایشان از حد تجاوز کرده، فقیر آهسته بیرون + آمدم. همان شب در غایت تاریک بود. +<sup>۱۱</sup> نمیدانستم که کجا روم. از قضا زنی [را دیدم،]<sup>۱۲</sup> به سر خود چادر

- 
- |    |                                   |
|----|-----------------------------------|
| ۱  | × [د]                             |
| ۲  | نظیر [ت]                          |
| ۳  | جشن [د]                           |
| ۴  | [د]                               |
| ۵  | شدند [ت] [د]                      |
| ۶  | قطعه [د]                          |
| ۷  | مصری [د]                          |
| ۸  | دروغ [ت]، به حرکت های دوروغین [د] |
| ۹  | × [د]                             |
| ۱۰ | بر [د]                            |
| ۱۱ | فقیر [د]                          |
| ۱۲ | × [د]                             |

معموری و آبادی و برنج عنبر بو و آکوله از آن شهر<sup>۱</sup> میروید و زنان [آن ممالک]<sup>۲</sup> در غایت<sup>۳</sup> حسن و جمال میباشند. (۶۸۲) اما<sup>۴</sup> در طبیعت<sup>۵</sup> ایشان شوخی<sup>۶</sup> + غالب<sup>۷</sup> است و صنعت ایشان <۶۱۳> بسیاری بند ایزار در نهایت خوبی می بافتند<sup>۸</sup>. +<sup>۹</sup> در تمام ممالک ایران [از آن جا]<sup>۱۰</sup> میبردند<sup>۱۱</sup>، چنانچه شاعری خوب<sup>۱۲</sup> گوید.

قطعه<sup>۱۳</sup>

دخترانی که ساکن رشت اند      مثل طاوس مست میگردند  
گله گله به کـوچه و بازار      بند ایزار به دست میگردند

ذکر<sup>۱۴</sup> مجلس کردن رفیقان در ولایت رشت<sup>۱۵</sup> در آن جا صحبت کردن فقیر با زن صالحه القصه. در آن ولایت وارد گردیدیم<sup>۱۶</sup> و سلیمان اغا [مردی بود، بسیار]<sup>۱۷</sup> لاوبال.

- 
- |    |                        |
|----|------------------------|
| ۱  | جا [د]                 |
| ۲  | ایشان [د]              |
| ۳  | نهایت [د]              |
| ۴  | × [د]                  |
| ۵  | طبع [د]                |
| ۶  | بسیار [د]              |
| ۷  | غالب [ت]               |
| ۸  | بافتند [ت]، بافند [د]  |
| ۹  | و [د]                  |
| ۱۰ | × [ت] [د]              |
| ۱۱ | میبردند [د]            |
| ۱۲ | × [د]                  |
| ۱۳ | بیت [د]                |
| ۱۴ | × [ت] [د]              |
| ۱۵ | رشد [ت] [د]            |
| ۱۶ | گردیدیم [ت] [د]        |
| ۱۷ | بسیار مردی بود [ت] [د] |

بیت<sup>۱</sup>

مباش ای غنچه از اوراق گل مغرور جمعیت  
که این پیوستگی ها<sup>۲</sup> در بغل دارد جدایها

## متوجه شدن فقیر به صوب پای تخت ایران

القصه<sup>۳</sup>. به رفاقت سلیمان اغا و محرم شاه یعنی<sup>۴</sup> علی اکبر متوجه طهران<sup>۵</sup> شدم<sup>۶</sup>. در آن وقت + لباس<sup>۷</sup> [قیزیل باشی]<sup>۸</sup> در بر کردم و زلف شیعه گی [پیشتر در بناگوش گذاشته بودم]<sup>۹</sup> و زبان ایشان را<sup>۱۰</sup> در کمال فصاحت از بر کردم. چنان به ایشان مشابَهت پیدا کرده بودم که کسی از سنی بودن فقیر { ۶۲۱ پ } واقف نمیشد و [در آن وقت]<sup>۱۱</sup> راه می پیمودیم. بعد از طی مسافت در ولایت رشت [وارد گردیدیم]<sup>۱۲</sup>. اگر چندی که راه چپ بود، به سببی [گذار ما]<sup>۱۳</sup> در آن ولایت [افتاد و]<sup>۱۴</sup> آن مملکت<sup>۱۵</sup> بهترین ولایت<sup>۱۶</sup> ایران است، در کمال

- ۱ × [ت]
- ۲ وا بستگی ها [ت] [د]
- ۳ عاقبت [د]
- ۴ × [ت] [د]
- ۵ [د]، ایران [س] [ت]
- ۶ شدیم [د]
- ۷ فقیر [د]
- ۸ لباسی [ت]
- ۹ ایرانی [د]
- ۱۰ به سر گذاشتم [د]
- ۱۱ × [د]
- ۱۲ × [د]
- ۱۳ رسیدیم [د]
- ۱۴ × [د]
- ۱۵ رسیدیم [د]
- ۱۶ ولایت [د]
- ۱۷ از شهرهای [د]

## {۶۲۱} بیت

سوی من لب چه میگری که<sup>۱</sup> مگوی لب<sup>۲</sup> لعلی گزیده ام که میپرس

در آن وقت [بود که]<sup>۳</sup> خبر رسید که خسرو خان سلیمان اغا نام [ندیم خود]<sup>۴</sup> را مع محرم<sup>۵</sup> شاه ایران<sup>۶</sup> با ده هزار طلا<sup>۷</sup> + نام زد کرده است. حالا به جانب ایران میروند. [فقیر این خبر را]<sup>۸</sup> شنیده، [بلا اھمال]<sup>۹</sup> از خسرو خان رفته، رخصت [اجازت یافتم]<sup>۱۰</sup>. او به فقیر یک [اسب عالی انعام فرمود. <۶۱۲پ> چون به<sup>۱۱</sup> منزل خود رسیدم<sup>۱۲</sup>، به میرزا ابو تراب و [جانانه ام]<sup>۱۳</sup> میرزا محتشم [به چندین غم و درد]<sup>۱۴</sup> سر و روی یک دیگر را بوسیده،<sup>۱۵</sup> + وداع کردیم. برادر<sup>۱۶</sup> این بیت را مکرر<sup>۱۷</sup> میخواند.

- 
- |    |  |
|----|--|
| ۱۶ | مکر [ت]  |
| ۱  | × [ت]  |
| ۲  | لبی [ت]  |
| ۳  | بود [ت]، × [د]   |
| ۴  | کسی [د]  |
| ۵  | محرمی [ت]  |
| ۶  | × [د]  |
| ۷  | به خدمت فتح علی شاه [د]  |
| ۸  | این خبر را فقیر [د]  |
| ۹  | × [د]  |
| ۱۰ | ایجازت یافتم [ت]، گرفتم و [د]  |
| ۱۱ | قوته عالی مع کتاب نفایس المضمون و صد طلا انعام فرمود <۶۱۲پ> فقیر چون به [ت]، اسب مع دو قوتی مومیا انعام نمود و رخصت اجازت داد و در [د] |
| ۱۲ | آمده [د]   |
| ۱۳ | × [د]  |
| ۱۴ | × [د]  |
| ۱۵ | در کمال غمناکی به هم دیگر [د]  |
| ۱۶ | و آن پری چهره مکرر [د]   |
| ۱۷ | × [د]  |

ضلالت بر خواسته، خود را به کنار کشیدم<sup>۱</sup> و<sup>۲</sup> (۶۸۱) بر<sup>۳</sup> منزل خود<sup>۴</sup> <۶۱۲ر> آمده، طرح خواب افکندم، [چنانچه میگوید.]<sup>۵</sup>

## بیت

من گذشتم ز مدعا شوکت      خانه آرزو خراب شود

چون سیمرغ زرین جناح آفتاب از افق<sup>۶</sup> نیلگونی<sup>۷</sup> عالم گون و<sup>۸</sup> فساد را فرو گرفت و هندوی شب به زنگبار خود شتافت، فقیر از خواب بر خواستم که میرزا ابو تراب از چهار باغ تشریف آورده است و برادرم میرزا محتشم در غایت خواب آلودی [در پیش]<sup>۹</sup> پدر نشسته است. فقیر نیز<sup>۱۰</sup> در<sup>۱۱</sup> پیش ایشان رفته، طرح مجلس انداختم، هر دم نگاه پدر او را دزدیده<sup>۱۲</sup>، [به گوشه چشم به سوی برادرم]<sup>۱۳</sup> اشارت میکردم و آن پری چهره لب میگزید و<sup>۱۴</sup> در کمال اوستاگی<sup>۱۵</sup> این بیت را مکرر<sup>۱۶</sup> میخواند.

- 
- ۱۲ × [د]  
 ۱۳ بنابر آن فقیر [د]  
 ۱ گرفتم [د]  
 ۲ × [د]  
 ۳ به [د]  
 ۴ خویش [د]  
 ۵ [د]  
 ۶ افیق [ت]  
 ۷ نیلگون [د]  
 ۸ [د]  
 ۹ به خدمت [د]  
 ۱۰ × [د]  
 ۱۱ به [د]  
 ۱۲ دوزدیده [ت]  
 ۱۳ به سوی برادرم به گوشه چشم [د]  
 ۱۴ × [د]  
 ۱۵ ادا فهمی [د]

## بیت

بوسه کلید\*<sup>۱</sup> در گنج و فاست بوسه که شد [دیگری وی]<sup>۲</sup> از قضااست

در آن وقت آن [عجوزه کیاد]<sup>۳</sup> چشم آن دو مشتاق را خطا کرده، آهسته آهسته چنان سخن های [لطیفه آمیز]<sup>۴</sup> میگفت که از خندیدن<sup>۵</sup>\* قریب بود که فقیر از هوش روم. اما از ترس خود را به تکلف<sup>۶</sup> نگاه میداشتم. مثل آن که خم شده به گوش فقیر +<sup>۷</sup> میگفت، <فرزند، مگر نشنیده ای. +<sup>۸</sup> شاعری در این بابت گفته است.

## قطعه

از حکیمی باز پرسیدم که آواز است چند  
گفت ما را در جهان آواز چار آمد پسند  
{۶۲۰پ} قلقل بانگ صراحی مرمر سیخ و کیاب  
جم جم بوس و کنار و سور سور<sup>۹</sup>\* ایزار بند

در آن حین ملیکه از غایت مستی رو به فقیر آورد. +<sup>۱۰</sup> گفت، <ای قلندر بچه، حالا این جا نشسته ای. > فقیر گفتم، <بلی. > بلا توقف پنجاه طلا داد. یقین فقیر شد که ایشان به نفس اماره<sup>۱۱</sup> گرفتار گشته، ناموس سلطنت را<sup>۱۲</sup> خواهند ریخت. +<sup>۱۳</sup> آهسته از آن گرداب

۱ [د]، کلیدی [س] [ت]

۲ دیگری وی [ت]، دیگری هم [د]

۳ پیره زن مکاره [د]

۴ به مضمون و لطیفه [د]

۵ [ت]، خندان [س]، خنده [د]

۶ زور [د]

۷ در کمال آهستگی [د]

۸ که [ت]، که حکیمی [د]

۹ [د]، سوری [س] [ت]

۱۰ و [د]

۱۱ امواره [ت]

مثنوی<sup>۱</sup>

به راحت عمرها هر سو دویدم      که از دوری به نزدیکی رسیدم  
 چو نزدیکم شدی نزدیکتر شو      سرم را تاج و تاجم را گهر شو  
 اسیرم مبتلایم بی قرارم      سرا پا تشنه بوس و کنارم

خلص کلام آن که گاه این بهار حسن آن به دست نگار گلهای نظاره میچید و گاه از چشمه نوشین آن آب زلال زندگانی نوش میکرد، تا آن که در سر هر دو مشتاق هوای کامجویی<sup>۲</sup> {۶۲۰} ترفع گزیده، اسباب بیقراری متراکب گردید، چنانچه شاعری<sup>۳</sup> میفرماید.

مثنوی<sup>۴</sup>

دو عاشق را قرار از دل بر افتاد      نشاط کامرانی بر<sup>۵</sup> سر افتاد  
 هوای دل هوس را شد عنان گیر      شکیب از دل برون بر جست چون تیر  
 دهانش بر<sup>۶</sup> دهانش بوس بر بوس      میانش با میان همدوش همدوش

القصه. فقیر نیک ملاحظه کردم که فتور در حرکت‌های<sup>۷</sup> ایشان راه یافته است <۶۱۱پ> و مستی از حد اعتدال گذشته است. بازار بوس و<sup>۸</sup> کنار [رواج گرفته است، به حکم آن که]<sup>۹</sup>

- 
- ۱ × [د]
  - ۲ کامجوی [د]
  - ۳ در مثنوی خود [ت]
  - ۴ نظم [د]
  - ۵ در [د]
  - ۶ با [د]
  - ۷ حرکت [د]
  - ۸ × [ت]
  - ۹ گرم شده بوده است [د]



## بیت

ماه را مهر مهمان کرده زهره با مشتری قران کرده

زبدۀ کلام آن که بعد از فراغ<sup>۱</sup> طعام ملیکه<sup>۲</sup> + به آن دو کنیز ماه روی {۶۱۹پ} عنبر بوی<sup>۳</sup> [امر کرد]<sup>۴</sup> که باده گلرنگ را در گردش<sup>۵</sup> در آرند و آن ماه پیکران به قدح داشتن مشغول شدند. در آن ضمن به فقیر (۶۸۰) نیز تکلیف [می نمودند]<sup>۶</sup>. فقیر عذر<sup>۷</sup> خود را در غایت آداب گفتم و این بیت را خواندم.

بیت<sup>۸</sup>

ناخن گل کی گشاد عقده طبع ملول باده کجا شاد کرد خاطر ناشاد را

القصه. فقیر را [به حال]<sup>۹</sup> گذاشتند. + خود به می خوردن [مشغول شدند]<sup>۱۱</sup>. بعد از ساعتی آثار<sup>۱۲</sup> مستی بر جبین آن دو مشتاق ظاهر گشت <۶۱۱ر> و حیا از میان گم شد و این بیت<sup>۱۳</sup> مثنوی را مکرر<sup>۱۴</sup> میخواندند<sup>۱۵</sup>.

۱ فارغ شدن [ت]

۲ ایران [د]

۳ بو [د]

۴ بفرمود [د]

۵ گردیش [ت]

۶ نمودند [ت]

۷ عذور [ت]

۸ حاذق [د]

۹ وا [د]

۱۰ و [د]

۱۱ پرداختند [د]

۱۲ آساری [ت]

۱۳ × [ت]

۱۴ مکر [ت]

۱۵ میخواندم [د]

ناموس چیست {۶۱۹ر} و غم و شادمانی کدام است. > اکنون ای قلندر بچه، چه میفرمایی<sup>۱</sup>. < فقیر به مجرد شنیدن این سخن از زبان ملیکه در بحر تفکر فرو رفتم. نمیدانستم که چه جواب گویم. بعد از تأمل<sup>۲</sup> بسیار [زبانم به این بیت مترنم شد، چنانچه میفرماید.]<sup>۳</sup>

### مثنوی

نسازد عشق را کنج سلامت	خوشا رسوایی <sup>۴</sup> کوی ملامت
غم عشق از ملامت تازه گردد	وز این سودا بلند آوازه گردد
ملامت صیقل ز نگار عشق است	ملامت شحنه بازار عشق است

> {۶۱۰پ} چون این [جواب از فقیر شنید]<sup>۵</sup>، بسیار خرسندیها نموده، در خنده افتاد. بعد گفت، > در ترکستان شما کسی هست که از عهده شعر گفتن تواند [بر آمدن]<sup>۶</sup>. < فقیر گفتم، > بلی. < و<sup>۷</sup> چندی را خواندم. هیچ کدام را نه پسندید، مگر اشعار مولانا حاذق<sup>۸</sup> که در غایتی<sup>۹</sup> موافق<sup>۱۰</sup> طبع او افتاد. [در آن وقت]<sup>۱۱</sup> از هر گونه اطعمه لطیفه و اشربه لذیذه مهیا کردند.

- ۱۴ جان [د]
- ۱۵ × [ت] [د]
- ۱ میفرماید [د]
- ۲ تأنی [د]
- ۳ زبانم به این مثنوی مترنم شد [ت]، گفتم [د]
- ۴ رسوای [ت]
- ۵ بیت را مسموع نمود [د]
- ۶ [د]
- ۷ [ت] [د]
- ۸ را [د]
- ۹ غایت [ت]، نهایت [د]
- ۱۰ موافق [ت]
- ۱۱ بعد از آن [د]

آفاق کرده و سیاحی<sup>۱</sup> جهان دیده و کلفت ایام چشیده. { ۶۱۸ پ } فقیر از اقلیم توران و از زمین فرغانه و نامم حکیم خان و سفرم بیت الله و<sup>۲</sup> اراده ام، ما وراء النهر. < باز گفت، > بهر خدا سرگذشت خود را (۶۷۹) [به تفصیل]<sup>۳</sup> از روی راستی در پیش من بیان کن، تا که من از تو شاد شوم. < فقیر این بیت را خواندم، [چنانچه گفته اند].<sup>۴</sup>

### بیت

آسوده شبی باشد و خویش<sup>۵</sup> مهتابی      تا با تو حکایت کنم از هر بابی

گفت، < اینک همان شب آسوده. > بالاخر فقیر غیر از<sup>۶</sup> راست گفتن چاره < ۶۱۰ ر > دیگر نیافتم. از اول تا آخر [سرگذشت خود را]<sup>۷</sup> خلص نموده، بیان کردم. چون آن خسرو خوبان از فقیر این ماجرا را گوش کرد، بر حال من رحم آورده<sup>۸</sup>، در کمال شفقت و مرحمت به<sup>۹</sup> سویم نگاه کرد و گرامی داشت و<sup>۱۰</sup> به نزدیک خود جای داد و گفت، < همان روز که در خسرو آباد از شما آن حرکتها صادر شد. یقینم شد که شما از خاندان بزرگید. > بعد گفت، < ما را که می بینید. قضا دامن<sup>۱۱</sup> دل بگرفت و کشان کشان به جانب دوست آورد و سلسله عشق به پای<sup>۱۲</sup> پیچید و رشته محبت بر<sup>۱۳</sup> گردن<sup>۱۴</sup> بست. اکنون ندانم که ننگ و<sup>۱۵</sup>

۱ سیاح [ت] [د]

۲ × [د]

۳ مفصل [د]

۴ × [د]

۵ شب [د]

۶ × [د]

۷ × [ت]

۸ آمد [د]

۹ × [د]

۱۰ × [د]

۱۱ دامان [د]

۱۲ دل [د]

۱۳ به [د]

رباعی<sup>۱</sup>

ای دل به کمند دلبر<sup>۲</sup> افتادی در دام بت ستمگری افتادی  
 {۶۱۸ر} از قید یکی<sup>۳</sup> خلاص ناگشته هنوز فی الحال به دام دیگری افتادی

چون چشم به آن ملیکه ایران افتاد که در پیشگاه خانه در مسند ناز تکیه زده، چه بانویی که تابنده اختر سپهر حسن و ارزنده گوهر درهای جمال مهر جهانتاب از آتش رخسارش نور گرفته و ماه از شرف غلامیش در چشم جهان عزیز گشته، از مشاهده این حال قریب بود که فقیر از پا در<sup>۴</sup> افتم. خود را به تکلف نگاه داشته، زمین ادب بوسیدم. دانستم که آن آفتاب ایران است که در آن جا طلوع نموده است و به گوشه چشم کنار خانه را اشارت فرمود. <۶۰۹پ> فقیر در کمال آداب تعظیم و تکریم او را به جای آورده، آن جا نشستم و آن ملیکه<sup>۵</sup> + چنان در میان جواهر غرق شده بود که از شعاع سنگ پاره حاجت به مشعل نبود. بعد از ساعتی رو به فقیر [آورد و]<sup>۶</sup> گفت.

مصراع<sup>۷</sup>

نخستین بار<sup>۸\*</sup> گفتن<sup>۹</sup> از کجایی<sup>۱۰</sup>

>ای قلندر بچه، از کدام آشیانه بلند پرواز کرده ای و از کجا می آیی و عزم کجا داری و نامت کیست و پیشه ات چیست. < فقیر گفتم، >ای ماه هفت کشور، قلندری هستم. سیر

- ۱ قطعه [د]
- ۲ دلبری [ت]
- ۳ یک [د]
- ۴ × [د]
- ۵ ایران [د]
- ۶ آورده [د]
- ۷ × [ت]، ع [د]
- ۸ [د]، باز [س] [ت]
- ۹ گفتش [د]
- ۱۰ کجای [ت]

(۶۷۸) و نیک مطالعه کردم که آن برادر خود را به لباس های ملوکانه و عطرهای کشمیری کار فرموده، چنان [خود را] <sup>۱</sup>زیب و <sup>۲</sup>زینت داده، مشاطه گری <sup>۳</sup>کرده است. + <sup>۴</sup>یک حسن او صد حسن شده است.

## بیت

کرد بیجا دلم از طرهٔ جانانه جدا      دست مشاطه الهی شود از شانه جدا

در حیرت افتادم. آن طناز<sup>۵</sup> به چستی<sup>۶</sup> از دستم گرفت<sup>۷</sup>. متوجه بیرون شد. فقیر گفتم، <مرا در این نیم شبی که مرغ و<sup>۸</sup> ماهی در آرام اند، کجا میبری.> گفت، <۶۰۹ر> خاموش. هر چند التجا میکردم که صورت واقعه را بیان فرما. اصلا و قطعا به سخنم گوش نمیکرد. لا علاج من هم گردن خار خار از تعاقب او میرفتم. <تا به جایی<sup>۹</sup> که عیش گاه<sup>۱۰</sup> ایشان بود، رسیدم. چون به خانه در آمدم، جشنی<sup>۱۱</sup> دیدم که در تمام عمر خود ندیده +<sup>۱۲</sup> و نشنیده بودم. +<sup>۱۳</sup>

- 
- |    |           |
|----|-----------|
| ۱  | × [د]     |
| ۲  | × [ت]     |
| ۳  | گر [د]    |
| ۴  | که [د]    |
| ۵  | تناز [ت]  |
| ۶  | چست [د]   |
| ۷  | بگرفت [د] |
| ۸  | [د]       |
| ۹  | جای [د]   |
| ۱۰ | گاهی [ت]  |
| ۱۱ | حسنى [د]  |
| ۱۲ | بودم [د]  |
| ۱۳ | گفتم [د]  |

## بیت

دلا چو غنچه شکایت ریخت<sup>۱</sup> بسته مکن که باد صبح نسیم گره گشا آورد

به اتفاق +<sup>۲</sup> به عیش خانه می شتابند و به عیش و عشرت مشغول می باشند و در عین محاوره مقدمه ای که به فقیر در خسرو آباد او<sup>۳</sup> کنیزان کرده بودند، پری سلطان نقل میکند و برادرم میرزا محتشم به مجرد شنیدن این ماجرا در خنده می افتد. میگوید که همان قلندر بچه که بیان میفرمایند، حالا در همین قصر موجود است و در بستر راحت غنوده<sup>۴</sup>، <۰۸ پ> فردا اراده اقلیم توران دارد. +<sup>۵</sup> ملیکه از بودن فقیر وقوف یافته، به برادرم میرزا محتشم التجا میکند که آن قلندر بچه را به پیش من حاضر کنید و کنیزان هر چند التجا کرده، مانع میشوند، مفید نمی افتد و در طلب فقیر +<sup>۶</sup> مبالغه میکند. برادرم می بیند که نمیشود. لا علاج از جای بر خواسته، متوجه منزل فقیر میشود. +<sup>۷</sup> در آن وقت {۶۱۷ پ} در عین مستی<sup>۸</sup> خواب بودم که تق تق<sup>۹</sup> در شد. در کمال چستی در را گشادم. آن خسرو خوبان مع یک کنیز سمن بو بر دست شمع کافوری به خانه در آمد، چنانچه<sup>۱۰</sup>

## بیت

به یک ناگه در آمد در حرم آن قد<sup>۱۱</sup> شمشادش

نهال سرو را ماند که هر سو میبرد بادش

۱ زکار [د]

۲ یک دیگر [د]

۳ × [د]

۴ غنوده است [ت][د]

۵ و [د]

۶ بسیار [ت]

۷ فقیر [د]

۸ مست [ت]

۹ تقی [د]

۱۰ × [د]

۱۱ قدی [د]

خواب افکندم، [چنانچه گفته اند].<sup>۱</sup>

#### قطعه

عشق است که شیر نر زبون آید از او      صد نوع مخالفت فزون آید از او  
که دوستی کند که جان آساید      که دشمنی که بوی خون آید از او

مجمّل سخن آن که در آن وقت که میرزا ابو تراب<sup>۲</sup> قصر خود را خالی گذاشته، متوجه (۶۷۷) چهار<sup>۳</sup> باغ شد و برادرم میرزا محتشم عمرها همین روز را میجست و در گوی جانان رسیدن از عقل دور بود. ضمناً به خدمت ملّیکه ایران پیام فرستاده، از صورت واقعه آگاهی میدهد. به مجرد شنیدن این سخن آن دلبر خوبی مجنون وار با دو کنیز ماه روی و به آن عجزه مکاره بعد از نیم شب خسرو خان را <۶۰۸ر> به خسرو آباد در خواب گذاشته، متوجه قصر جانان میشود و این بازرگان زاده خانه را به چندین زیب و زینت خالی کرده و اسباب عیش را مهیا ساخته، در راه آن پری چهره تمام چشم گشته، منتظر مقدم آن بانوی ایران می نشیند، [چنانچه میگوید].<sup>۴</sup>

#### {۶۱۷ر} بیت

بیا که وصل ترا از خدای میخوام      بیا که گوش بر آواز و چشم بر راهم

در آن وقت تق تق<sup>۵</sup> در میشود. سپندوار از جای بر جسته، استقبال مینماید و عاشق و<sup>۶</sup> معشوق به جمال یک دیگر مشرف میشوند.

۱ × [د]

۲ طراب [ت]

۳ چار [ت]

۴ × [د]

۵ تقی [د]

۶ [د]

سالها است، عشق با دلها طرح آمیزش<sup>۱</sup> ریخته، خانه زاد طبع و مزاج انسان است که<sup>۲</sup> این بدعت در زمانه ما و او به هم نرسیده، مگر حکایت یوسف و زلیخا نشنیده ای و از<sup>۳</sup> قصه شیرین و فرهاد را<sup>۴</sup> مطالعه نفرموده ای و از داستان لیلی و مجنون بابی نخوانده ای. کیست، در عالم که شور عشقی در سر نداشته باشد. کسی را که گوهر عشقی<sup>۵</sup> در صدف دل پرده نشین نباشد. از گلچینی بهار حیاتش چه ثمر بخشد و گفت.

### بیت

در کنج دماغم مطلب جای نصیحت  
کین حجره پر از زمزمه و چنگ و رباب است

بر خواست و<sup>۶</sup> به حرم خرامید. اتفاقا همان روز میرزا ابو تراب تمام اشراف ولایت را از بهر مهمانداری به چهار باغ خود طلب نمود. جشنی<sup>۷</sup> در غایت تکلف بر پا ساخت و آن چهار باغ از شهر یک فرسخ مسافت داشت. فقیر نیز در آن جا حاضر بودم. بعد از فراغ از اطعمه<sup>۸</sup> و اشربه فقیر به اوتاق خود <۶۰۷پ> مراجعت فرمودم. ایشان همان شب به آن باغ رضوان آیین طرح مجلس انداخته، به عیش {و} عشرت مشغول شدند و<sup>۹</sup> چون فقیر به منزل میرزا ابو تراب {۶۱۶پ} آمدم، دیدم که پشه پر نمیزند. چون طاوس زرین بال آفتاب<sup>۱۰</sup> عالم تاب<sup>۱۱</sup> به منزلگاه خود شتافت و هندوی شب عالم را فرو گرفت. فقیر طرح

۱ یافته است [ت]

۲ × [ت]

۳ × [د]

۴ × [د]

۵ عشق [ت]

۶ × [د]

۷ جشن [ت][د]

۸ و اغذیه [د]

۹ × [د]

۱۰ × [د]

۱۱ × [د]



فقیر این مقدمه را از آن سرو قد شنیدم. هوش از سرم پرید و در گرداب فکر غوطه زدن گرفتم. بعد از ساعتی لب به پاسخ گشادم. گفتم، <آری، عشق گرامی گوهریست که در رنگ ضیای آفتاب مستور و<sup>۱</sup> خفی بودن آن<sup>۲</sup> از دایره امکان بیرون است. +<sup>۳</sup>

## بیت

خوشا عشقی که چون آید به تاراج لباس فقر پوشد صاحب تاج

(۶۷۶) و گفتم، <خصوص ناموس اهل سلطنت حصاری است، بلند. عنقا در هوایش بال پرواز کم کند و سیمرغ در میدانش بال مجال ریزد و تو هرزه هیون هوس به سوی اجل متاز و<sup>۴</sup> بیهوده به کام نهنگ گام منه و عبث بادیه پیمای<sup>۵</sup> جنون مباحش و چون مجنون به صحرای رسوایی<sup>۶</sup> سرور مکن که ذره<sup>۷</sup> به فتراک خورشید دست نتواند زد و پشه بر بام آسمان نتواند رسید > (۶۰۷) و اگر این کار اختیار کنی، دست به خون خویش شسته باشی. < (۶۱۶) گفت، <برادرا، خود میدانی که [گفته اند.

بیت<sup>۸</sup>

رسمی است قدیم دل به خوبان دادن از دست فتادن به پا افتادن<sup>۹</sup>

- 
- |    |                     |
|----|---------------------|
| ۱۲ | گر [د]              |
| ۱۳ | × [ت] [د]           |
| ۱  | ستر [د]             |
| ۲  | × [د]               |
| ۳  | چنانچه [ت]          |
| ۴  | [د]                 |
| ۵  | [د]، پیمایی [س] [ت] |
| ۶  | رسوای [د]           |
| ۷  | زره [د]             |
| ۸  | × [د]               |
| ۹  | × [ت]               |

آشنایی<sup>۱</sup> و در<sup>۲</sup> معرفت ناز و<sup>۳</sup> نیاز طالب و مطلوب کوس لمن الملك میزد، به حکم آن که گفته<sup>۴</sup>.

#### قطعه<sup>۵</sup>

به راه عاشقی کار آزموده      گهی عاشق گهی معشوق بوده  
به هم وصلت ده معشوق و عاشق      موافق ساز یار ناموافق

القصه. پیغام فرستاد و اظهار عشق خود نمود و من این مژده را شنیده، از سر آن پیره زن مثل پروانه می‌گشتم. عاقبت غایبانه میان من و<sup>۶</sup> آن ماه بو تمام<sup>۷</sup> شرط عاشقی و معشوقی مستحکم شد و<sup>۸</sup> اما شب وصل از گوگرد احمر نایاب تر بود و آن گل پرهن مرا به خسرو آباد تکلیف میکرد و من از جان شیرین گذر نمی‌کردم. حالا طاقتم طاق شده است و آن نادره زمان مرا بسیار به تنگ آورده است. دو کار را اختیار کرده ام، یا به رفاقت شما آواره خان مان {۶۱۵ پ} > ۶۰۶ پ < شده، رو به غربت می‌آرم، یا دست از جان<sup>۹</sup> شسته، به کوی جانان میرسم. هر چند فکر میکنم، غیر از این دو کار چیزی به خاطر<sup>۱۰</sup> نمی‌آید. شما چه میفرمایید. < گفت.

#### بیت

هجر داغی<sup>۱۱</sup> است +<sup>۱۲</sup> اگر بر جگر کوه نهند      سنگ بر سینه زنان آید و<sup>۱۳</sup> فریاد کنان

۱ آشنای [د]

۲ × [ت]

۳ × [د]

۴ گفته اند [ت]، × [د]

۵ مثنوی [د]

۶ × [د]

۷ × [ت] [د]

۸ × [د]

۹ شیرین [ت]

۱۰ خاطر [ت]

۱۱ داغ [ت]

مصراع<sup>۱</sup>

سر تو میان جان نهان خواهم داشت

[بعد آن یار جانی]<sup>۲</sup> گفت، <روزی تفرج کنان گذارم +<sup>۳</sup> خسرو آباد پری سلطان افتاد. از قضا آن [سر آمد نازنینان]<sup>۴</sup> مع کنیزان به شهر میخرامید. اتفاقاً در شاه راه به او دوچار آمدم<sup>۵</sup>. چون نظرم به آن آفتاب خاور افتاد، فی الفور عشق آن جادو فطرت ماه فریب تا سوفار بر دلم نشست و بر خاک بی صبری در افتادم. به چندین درد دل به خانه مراجعت (۶۷۵) فرمودم و نیز چشم آن سلطان محبوبان به من افتاده<sup>۶</sup>، تیر عشق من به آن عشوه گر عابد فریب تا پیکان کارگر آمده بود.

## مصراع

چه خوش بود که بر آید به یک کرشمه دو کار

من از این غافل مدام در بوته هجر میگذاختم. روزی آن ماه تابان {۶۱۵ر} عجزه ای که از تیر مکایدش ابلیس چون برگ بید میلرزید و در فنون عشق و شیوه<sup>۷</sup> محبت اوستاد<sup>۸</sup> بود و در دار <۶۰۶ر> الآباد<sup>۹</sup> خورده دانی و نبض شناسی عاشق و معشوق را علم اوستادی می بر افراشت و در منصب میانچی گری طبل حکمت مینواخت و در شناسایی قوانین

۱ × [د]

۲ × [ت]

۳ در راه [س] [ت]، در راه [د]

۴ خسرو خوبان [د]

۵ آمد [د]

۶ افتاد [ت]

۷ شتیو [د]

۸ استاد [ت]

۹ الآدب [د]

## بیت

اگر چندی که بلبل در گلستان خانه ای دارد  
به قدر همت خود چغذ<sup>۱</sup> هم ویرانه دارد

و<sup>۲</sup> گفتم، <انشاء الله که<sup>۳</sup> اراده سفر میکنند<sup>۴</sup>.> گفتم، <اگر کاروان موجود شود، حالا [خواهم کرد].><sup>۵</sup> چون این جواب از فقیر شنید، در بحر تفکر فرو رفت. بعد از ساعتی سر بر داشت. گفتم، <رازی دارم. میخواهم که به شما شرح کنم. اما به این {۶۱۴پ} شرط در میانه عهد و پیمان شود.> [به حکم آن که]<sup>۶</sup>

مصراع<sup>۷</sup>

که عشق و مشک را نتوان نهفتن

فقیر در حیرت افتادم و آن خوبان جهان بسیار مبالغه نمود. <۶۰۵پ> فقیر گفتم، <برادرا، قلندر بچه ای هستم، پخته و سیاحی هستم، جهان دیده و گرم و سرد روزگار چشیده،<sup>۸</sup> نیک و بد ایام آزموده، از من در هیچ وقت افشای راز تو نه آید. +<sup>۹</sup> با وجود آن +<sup>۱۰</sup> شرط کردم که به کسی لب نگشایم.>

۱ چغز [ت]

۲ × [د]

۳ کی [د]

۴ میکنید [ت][د]

۵ × [ت]

۶ × [ت]

۷ × [د]

۸ ع [ت]

۹ و [د]

۱۰ سر تو میان جان نهان خواهم داشت. [د]

۱۱ لا علاج [ت]، × [د]

مشق کرده، در آن خط ثبت نموده، به فرزند فرستاد، چنانچه<sup>۱</sup>

### بیت

نور چشم من ضیاء السلطنة      یک شب هجر تو ما را در سنه

{۶۱۴ر} و آن پری چهره از زاده طبع سلیم خود در تعریف خسرو آباد خود <۶۰۵ر> میفرماید که

### قطعه<sup>۲</sup>

نسیم نافه گشا آمد از دیار سنندج      گشود نافه مشکین چوزلف یار سنندج  
به گوش هوش شنو آیت وان من شئ      ز طایران خوش الحان شاخسار سنندج  
زهی هوای فرح بخش خسرو آبادم      کز او است پرز ریاحین و گل کنار سنندج  
ندیده دیده چنین [شهریار شهر]<sup>۳</sup> چنین      تبارک الله ازین شهر و شهریار سنندج

### تماشا کردن فقیر بزم ملیکه<sup>۴</sup> ایران را با معشوقه او میرزا محتشم

زبده کلام آن که فقیر در آن وقت آماده سفر طهران شدم و +<sup>۵</sup> زوآر میجستم، موجود نمیشد. در آن حین بود که روزی در اوتاق خود سر به جیب تفکر فرو برده، در کمال مغمومی نشسته بودم، +<sup>۶</sup> آن یار جانی یعنی میرزا محتشم از در در آمد و به<sup>۷</sup> پیشم نشست، چنانچه<sup>۸</sup>

۱۰ غایت [د]

۱۱ او [د]

۱ × [د]

۲ نظم [د]

۳ شهر شهریار [د]

۴ ملکه [د]

۵ در آن وقت [ت]

۶ که [د]

۷ × [د]

۸ × [د]

کرده است و از زاده طبع او این دو بیت [شاهد {۶۱۳پ} حال وی] است.

### بیت

از ره دیرم به مسجد زاهدی ناگاه برد      من نمیرفتم به آن جا او مرا از راه برد

<۶۰۴پ> وله<sup>۲</sup>

بشکست خم می اگر از سنگ ملامت      ای باده پرستان سر انگور سلامت

خلص کلام آن که شاه از فرزند این سخن شنید، گفت، <اگر شما دختر من باشید،<sup>۳</sup> به نام خود سجع مهر گوئید.> چون ضیاء السلطنة یعنی پری سلطان از شاه این سخن شنید، چون سرو آزاد از جا<sup>۴</sup> برخاست و زمین خدمت ببوسید. بلا توقف این سجع را به نام خود در سلک نظم کشید.<sup>۵</sup>

### [سجع مهر]<sup>۶</sup>

در پس پرده عصمت چو پری پنهانم      دختر خسرو آفاق پری سلطانم

چون شاه استعداد فرزند را به این درجه مشاهده نمود، تحسین و آفرین نموده<sup>۷</sup>، یک سپر جواهر انعام فرمود. گویند، در آن وقت که پری سلطان را با<sup>۸</sup> چندین تجمل به ولایت سنج فرستاد. بعد از چندین<sup>۹</sup> روز مکتوبی در<sup>۱۰</sup> اشتیاق نوشته، و<sup>۱۱</sup> این (۶۷۴) بیت را

۱ × [د]

۲ بیت [ت] [د]

۳ فی الفور [ت] [د]

۴ جای [ت]

۵ این است [د]

۶ بیت [د]

۷ کرد [د]

۸ به [د]

۹ چند [د]

بیت<sup>۱</sup> {۶۱۳ر} (۶۷۳)

عروس صبح<sup>۲</sup> نزهت<sup>۳</sup> سرای کشور صبح گشود به رقع مشکین شام از رخسار  
 <۶۰۴ر> رسید صیت ظهور سکندر خورشید نمود زنگه<sup>۴</sup> شب رو به زنگ بار فرار  
 در آن وقت بود که جانانم میرزا محتشم چون طاوس مست خرامان خرامان به حجره  
 فقیر چون ماه شب چهارده در آمد و سرگذشت گذشته را سوال نمود. فقیر بی کم و<sup>۵</sup> کاست<sup>۶</sup>  
 تقریر نمودم. + در خنده افتاد و گفت. خاموش که

## مصراع

اگر سر بایدت سر را نگه دار

بعد یقین فقیر شد که دختر فتح علی شاه پری سلطان در آن جا مسکن داشته است و آن  
 زنی بود که تمام مردم ایران [در حسن صورت و در علم فضل اتفاق داشتند که]<sup>۸</sup> در تمام ربع  
 مسکون عدیل و نظیری ندارد. چنانچه گویند، روزی در نزد پدر نشسته بود، به شاه عرضه  
 نمود که قبله عالم چه میشود که سجع مهر<sup>۹</sup> مرا<sup>۱۰</sup> از زاده طبع مبارک به نام این مشت پر کرم  
 فرمایند. از مرحمت و شفقت پادشاهی دور نخواهد بود. از بس که فتح علی شاه طبع موزونی  
 + داشت و تخلص خود را خاقانی گذاشته بود. [کتاب بزرگ]<sup>۱۲</sup> در کمال خوبی تصنیف

۱ قطعه [د]

۲ مهر [د]

۳ بنزهت [د]

۴ زنگی [د]

۵ × [ت] [د]

۶ کاس [د]

۷ به مجرد شنیدن این مقدمه [ت]

۸ اتفاق داشتند که در حسن سیرت و در علم و فضل [د]

۹ مهری [د]

۱۰ × [ت]

۱۱ خوب [د]

۱۲ کتابی بزرگی [د]

نیز کلوخ هایی که +<sup>۱</sup> می انداختند، آهسته گرفته، به جانب ایشان هوا دادم. در آن وقت در طبیعت ایشان چنان خنده غلبه کرده بود که خود را به تکلف نگاه میداشتند، [چنانچه گفته اند].<sup>۲</sup>

### بیت<sup>۳</sup>

گداخت جان که شود کار دل تمام نشد  
بسوختیم در این آرزو که خام نشد  
بدان طمع که ببوسم<sup>۴</sup> به مستی آن لب لعل  
چه خون که در دلم افتاد همچو جام نشد<sup>۵</sup>

بالاخر دانستم که در آن جا گستاخی را می پرورد. +<sup>۶</sup> موافق طبع ایشان است. با وجود<sup>۷</sup> +<sup>۸</sup> خود را دانسته، صراحی را در پیش ایشان گذاشته، آهسته آهسته از چهار باغ به چندین ترس و هراس بیرون شده، متوجه اوتاق خود شدم. چون به منزل رسیدم، شب به<sup>۹</sup> بستر راحت<sup>۱۰</sup> غنودم، تا اسکندر زرین کلاه مهر از ظلمات مغرب آیین عود نموده، بر فراز تختگاه چرخ زرین مستقر گردید. +<sup>۱۱</sup>

- 
- |    |                     |
|----|---------------------|
| ۱  | به فقیر [د]         |
| ۲  | × [د]               |
| ۳  | رباعی [ت]، قطعه [د] |
| ۴  | بوسم [ت]            |
| ۵  | شد [د]              |
| ۶  | و [ت] [د]           |
| ۷  | و خود [ت]           |
| ۸  | او حد [د]           |
| ۹  | بر [ت] [د]          |
| ۱۰ | استراحت [ت] [د]     |
| ۱۱ | به حکم آن که [د]    |



و فقیر به گوشه چشم تماشای آن پری چهره ها را میکردم. چندی از شوخ شنگان آن کنیزان به پشت نگاه کرده، تعظیم میکردند. از روی گستاخی قدم پیش میماندند. فقیر از حرکات و سکنات ایشان پی بردم که در میان این کاسه نیم کاسه ای<sup>۱</sup> هست و آن ماه رویان فقیر را دیدند که +<sup>۲</sup> در میان مرده ها شهید نشسته ام. یکی از آن جمله که<sup>۳</sup> در کمال<sup>۴</sup> شوخی بود [و در غایت مستی زلفهای پرچین را بر بناگوش تاب داده،]<sup>۵</sup> مکرر<sup>۶</sup> در عقیب خود نگاه کرده، تعظیم نمود و پیش آمد [و به حکم آن که

### بیت

گل به کابل باده در شیراز رنگین میشود      زلف در ایران کمر در هند پرچین میشود<sup>۷</sup>

و فقیر را اشارت کرد<sup>۸</sup>. +<sup>۹</sup> صراحی می را به من بده<sup>۱۰</sup>. {۶۱۲پ} فقیر چیزی نگفتم. مکرر اشارت کرد. فقیر نیز سکوت کردم. دفعه سیوم عقیب رفت. <۶۰۳پ> چیزی گفت +<sup>۱۱</sup>. سه کنیز [دیگر باز]<sup>۱۲</sup> تعظیم نموده، در کمال جرأت پیش آمده، فقیر را آهسته آهسته در تحت کلوخ گرفته، میخندیدند. فقیر دیدم که در طبیعت ایشان شوخی غالب بود، +<sup>۱۳</sup> فقیر

- ۱ کاسه [ت]، کاسه دیگر [د]
- ۲ در لباس قلندری [د]
- ۳ × [د]
- ۴ نهایت [د]
- ۵ × [ت]
- ۶ باز [ت]، × [د]
- ۷ × [ت] [د]
- ۸ نمود که [د]
- ۹ و گفت [ت]
- ۱۰ ده [ت]
- ۱۱ و دیگر بار [د]
- ۱۲ × [د]
- ۱۳ به حکم آن که،

گل بکابل باده در شیراز رنگین میشود      زلف در ایران کمر در هند پرچین میشود [د]

مرمر چهار گنج خانه را صورت چهار دیو در غایت شباهت کشیده، خانه را در پشت دیوان گذاشته اند و دور آن قصر را فواره های خوب ساخته اند. چون فقیر آن باغ خسرو آباد را بدین خوبی مشاهده نمودم، انگشت تحیر به دندان گزیده، می‌گفتم، >مگر روضه رضوان است که در خواب می بینم.<

القصه. به پیش خسرو خان رسیدم، او در کمال عزت در پیش خود نشانید و تکلیف می‌ناب نمود. فقیر عذر خود را در غایت آداب گفتم. سخن فقیر را مبذول داشت. دیگر تکلیف ننمود. در میان مستان {۶۱۲ر} نشسته، از هر جانب سخن می‌کردم، [چنانچه گفته اند.]<sup>۱</sup>

>۶۰۳ر< بیت<sup>۲</sup>

عیب رندان مکن ای زاهد پاکیزه سرشت  
که گناه دیگران<sup>۳</sup> بر تو نخواهند نوشت

چون بازار مجلس بسیار گرم شد و مستی ایشان از حد اعتدال گذشت و به هر جای<sup>۴</sup> (۶۷۲) بیهوش افتادند +<sup>۵</sup> +<sup>۶</sup> در آن وقت کنیزان حرم در کمال حسن و جمال و در غایت آراستگی بیرون<sup>۷</sup> از کنج باغ خرامیده، به احوال ایشان می‌خندیدند، به حکم آن که

نظم<sup>۸</sup>

نگار من که در آید به خنده نمکین      نمک زیاده کند بر جراحت ایشان  
چه بودی از سر زلفش به دستم افتادی      چو آستین گریمان به دست درویشان

۱ چنانچه گفته [ت]، × [د]

۲ × [ت]

۳ دگری [ت][د]

۴ جا [ت]

۵ خسرو خان نیز افتاد [د]

۶ و [ت]

۷ × [د]

۸ قطعه [د]

[مجلس کردن فقیر به خسرو خان]<sup>۱</sup>\*

در آن وقت بود که روزی خسرو خان فقیر را در چهار باغ خود طلب نمود و آن منزل از شهر دو هزار قدم بیرون بود و او را خسرو آباد نام نهاده، (۶۷۱) +<sup>۲</sup> چون فقیر در آن موضع رسیدم، باغی دیدم، در کمال طراوت و لطافت که سرو و شمشاد چون عاشق و معشوق دوش به دوش هم ایستاده و سنبل گل مانند عروس و داماد در آغوش یک دیگر نشسته و از سبزه سیراب زمرد گون صحن چمن فلک نمون گشته و ناله دلکش مرغان در آن چمن گل کار نوای ارغنون کرده، می گساران باغ از مینای سرو به شاخ بلند رسانیده و فاخته قلندر مشرب به دلق خاکستری ساز<sup>۳</sup> آواز آغاز نهاده، چنانچه<sup>۴</sup>

بیت<sup>۵</sup>

هوایی<sup>۶</sup> سبزه اش گوهر گسسته      زمرد را به مروارید بسته  
 {۶۱۱پ} به هر گنجش ریاحین بر دمیده      بساط خرمی بر وی کشیده  
 بنفشه تار زلف افکنده بر دوش      <۶۰۲پ> گشاده باد نسرين را بنا گوش

در میان باغ حوضی ساخته اند. از سنگ مرمر در کمال بزرگی و در کنار حوض کوشکی بنا کرده اند. از کاشین در کمال نزاکت و لطافت و در آن جا خانه ای بر پا کرده اند. از سنگ مرمر آینه های بزرگ در آن خانه نصب کرده اند و به جای<sup>۷</sup> خالی صورت هر ذی روح را اوستادان مانی قلم و مصوران بهزاد رقم در غایت زیبایی<sup>۸</sup> کشیده اند و از سنگ

۱ [د]

۲ بود [د]

۳ سازی [د]

۴ × [د]

۵ مثنوی [ت]، ابیات [د]

۶ هوای [د]

۷ جایی [د]

۸ زیبای [ت] [د]

## بیت

صفاسین کورمه میش سین زاهد انکار ایتمه می دور بو

مجلای<sup>۱</sup> جمال +<sup>۲</sup> جمله اشیا طرفه شی دور بو

و آن شهر در [نهایت خوبی و در غایت]<sup>۳</sup> معموری بود. اگر چندی که کوچک بود، اما در نزاکت در تمامی<sup>۴</sup> ممالک ایران عدیل و نظیر<sup>۵</sup> نداشت و از هر<sup>۶</sup> جنس فواکه در کمال خوبی موجود بود. +<sup>۷</sup> از جهة خوبی ولایت چند روز در آن جا مکث کردم. اتفاقا در پیش کاروان سرا بازرگانی بود، میرزا ابو تراب نام، بهترین اشراف های آن مرزبوم بود. فقیر را فرزند قیامتی خواند و از قصر خود جای داد و آن ملک التجار سه فرزند با کمال داشت، کوچک ترین او میرزا محتشم نام که مدت عمرش به بست سال رسیده بود. در غایت حسن و جمال به گرد عاضش سبزه خط نو دمیده، {۶۱۱ر} [چنانچه گفته اند.]<sup>۸</sup>

## بیت

ز خط تحقیر حسن گلرخان لازم نمی آید

به گرد این گلستان سنبلستان شد چو<sup>۹</sup> شد خوب شد

<۶۰۲ر> و آن پری چهره به فقیر بسیار طرح آشنایی افکند، بل +<sup>۱۰</sup> نزد فقیر چند روز

کتاب گلستان خواند و بسیار<sup>۱۱</sup> در اوتاق فقیر میبود.

۱ تجلای [د]

۲ تمام [ت]

۳ غایت خوردی و نهایت [د]

۴ تمام [د]

۵ نظیری [د]

۶ × [د]

۷ و [ت]

۸ چنانچه گفته [ت]، × [د]

۹ چه [ت][د]

۱۰ به [د]

۱۱ بسیاری [ت][د]

<۶۰۱ر> زوآران همدان<sup>۱</sup> متوجه ممالک ایران زمین شده<sup>۲</sup>، ده شب و<sup>۳</sup> روز راه طی نموده، به ولایت همدان رسیدم. آن ولایتی بود، در کمال عظمت و معموری و<sup>۴</sup> اما در آن وقت فقیر لباس رومی در بر داشتم و اهل شیعه بسیار به تنگ آوردند. لا علاج راه طهران را گذاشته، در ولایت کوردستان که همه آنها<sup>۵</sup> شافعی مذهب اند، عنان عزیمت (۶۷۰) به صوب آن ممالک<sup>۶</sup> تافتم.

### ذکر<sup>۷</sup> رفتن فقیر در ولایت سنندج

<sup>۸</sup> بعد از دو منزل به شهر سنندج که<sup>۹</sup> حالا به سنه اردلان اشتها دارد، وارد گردیدم و در کاروان سرا اقامت گزیدم<sup>۱۰</sup> و خط حسن پادشاه را به خسرو خان سپردم و در میان فقیر و او بسیار<sup>۱۱</sup> آشنایی پذیرفت که نهایت نداشت و او در باطن شافعی مذهب بود و ظاهراً<sup>۱۲</sup> خود را شیعه مذهب می گرفت. بنابر آن فتح علی شاه قاچار بهترین دختران {۶۱۰پ} خود پری سلطان را که لقب به ضیاء السلطنة شهرت داشت که ماه رخسارش در سپهر دلبری و صباحت چرخ را زیبایی آموختی، به او داده، به خود داماد <۶۰۱پ> کرده بود. اما خسرو خان دوام به خوردن می اشتغال داشت. یک ساعت بی می<sup>۱۳</sup> ناب نشستن متعذر بود، به حکم آن که

- 
- |    |                    |
|----|--------------------|
| ۱  | همدانم [ت]         |
| ۲  | شدم [د]            |
| ۳  | [ت][د]             |
| ۴  | × [د]              |
| ۵  | ایشان [د]          |
| ۶  | مملکت [د]          |
| ۷  | × [ت][د]           |
| ۸  | خلص کلام آن که [د] |
| ۹  | × [د]              |
| ۱۰ | کردم [د]           |
| ۱۱ | × [د]              |
| ۱۲ | ظاهر [د]           |

چنین سرزمین الاچند شهری<sup>۱</sup> مقرری در هیچ جا ندیده، از خوبی ولایت چند روز در آن جا سکونت اختیار نموده، هر روز به زیارت بزرگان [مثل دیوانه ها]<sup>۲</sup> سر و پا برهنه می‌گشتم<sup>۳</sup> و بعد از شام بر لب دجله آمده، سیر چراغان می‌کردیم.<sup>۴</sup> +

### بیت

نماز دیگر مرو و نماز شام هرات علی الصباح نشابور و خفتن بغداد

اگر در بزرگی و آبادی بغداد شروع رود، سخن به طول می انجامد. مستمعان ملول<sup>۵</sup> خاطر می‌گردند. بنابر آن بر همین قدر اکتفا کردم و<sup>۶</sup> در آن وقت مکتوب محمد صالح پادشاه حاکم شام را به حسن پادشاه گورجی حاکم بغداد دادم و<sup>۷</sup> او فقیر را بسیار گرامی داشت و در میان او و فقیر بسیاری آشنایی پذیرفت. او نیز در وقت رفتن در کمال سپارش به حاکم سنندج خسرو خان {۶۱۰ر} مکتوب<sup>۸</sup> داد.

ذکر<sup>۹</sup> رسیدن فقیر به بغداد +<sup>۱۰</sup> سه ماه در آن ولایت مکث کرده، بعد متوجه ممالک ایران

### شدن

+<sup>۱۱</sup> بعد از یک ماه از آن ولایت فردوس مانند رخت اقامت برپاییده، با رفاقت

۱ شهر [ت] [د]

۲ × [د]

۳ می‌گشتم [د]

۴ به حکم آن که [ت]، به حکم آن که گفته است [د]

۵ ملال [د]

۶ × [د]

۷ × [ت] [د]

۸ مکتوبی [د]

۹ × [ت]

۱۰ شریف [د]

۱۱ القصه [د]

حضرت موسی کاظم و حضرت امام اعظم و امام ابی<sup>۱</sup> یوسف و امام احمد حنبل<sup>۲</sup> و شیخ عبد القادر گیلانی و جنید بغدادی و معروف کرخی و سری سقطی و فضیل عیاض و منصور حلاج و بهلول دیوانه [رحمة الله تعالى عليهم اجمعین]<sup>۳</sup> و غیر هم. +<sup>۴</sup> پادشاهان ذوی<sup>۵</sup> الاحترام نهایت ندارد و<sup>۶</sup> علی هذا القیاس. +<sup>۷</sup> از فضلی با احترام و دانایان فضیلت گستر لا یعد و لا یحصی خاکش از لطافت پاکی چون آستین مریم و سنگ ریزه های آبش در شفافی خوشاب تر از عقیق (۶۶۹) و لالی آب خوشگوار شط دجله آبش<sup>۸</sup> در غایت صافی رشک در دل مامعین می<sup>۹</sup> اندازد و هوای اعتدال آثارش مسیحاوار اموات صد ساله را [حیات می بخشد].<sup>۱۰</sup>

### بیت<sup>۱۱</sup>

سواد او به نظر مینمود مینارنگ

هوای او به صفت چون نسیم جان پرور

{۶۰۹پ} صبا سرشته به خاکش طراوت طوبی

هوا نهفته در آبش حلاوت کوثر

ولایتی چنین به جمعیتی معروف که گوش هوش سامعان اخبار شبیه <۶۰۰پ> آن نشیده، مملکتی به جماعتی موصوف که دیده گردون قرن ها گرد جهان گشته. هرگز این

۱ ابو [ت] [د]

۲ × [د]

۳ × [ت]، رضوان الله تعالى عليهم اجمعین [د]

۴ و [ت]، و از [د]

۵ ذو [د]

۶ × [د]

۷ و [د]

۸ اش [د]

۹ × [د]

۱۰ زنده کند [د]

۱۱ قطعه [ت] [د]

کوچیده، بعد از ظهر به<sup>۱</sup> بغداد شریف از شهر بیرون بر لب دریای دجله نزول کردیم<sup>۲</sup>. در آن وقت دجله در عین طغیان بود، به حکم آن که [گفته اند].<sup>۳</sup>

### بیت

دجله را امسال<sup>۴</sup> رفتار<sup>۵</sup> عجب مستانه بود  
پای در زنجیر کف بر لب عجیب<sup>۶</sup> دیوانه بود

فقیر چیز و چاره را گرفته، در زورقچه فرود آمده، دو جانب دریای بغداد را تماشا کرده، از جسر بر آمدم. [رو به تکیه قلندران آوردم. در آن جا]<sup>۷</sup> سی و سه کشتی بزرگ را به قلابهای بزرگ به یک دیگر وا بسته کوده، جبری ساخته اند. بر دو جانب جسر مردم<sup>۸</sup> شهر<sup>۹</sup> چیزها میفروشدند و عبور اهل شهر از آن جسر است. چون آفتاب غروب کرد، باز آن جسر در کنار میکشند. باز آفتاب طلوع کرد، به هم پیوند میکنند، در کمال [آسانی. بر رای عالم آرای]<sup>۱۰</sup> سالکان مسالک توفیق و بر<sup>۱۱</sup> ضمیر عقده گشای {۶۰۹} مالکان ممالک تحقیق پوشیده، نخواهد بود که مملکت عراق خصوص بغداد شریف از سوابق ایام<sup>۱۲</sup> و سواف ایام<sup>۱۳</sup> همواره مسکن امامان < ۶۰۰ > و علمای عظام و مشایخ کرام آسوده اند. چنانچه از امامان

- ۱ × [ت]
- ۲ فرمودیم [د]
- ۳ × [د]
- ۴ آن سال [د]
- ۵ رفتاری [د]
- ۶ عجب [ت]، مکر [د]
- ۷ × [ت]
- ۸ مردوم [ت]
- ۹ × [ت]
- ۱۰ اوستانی [د]
- ۱۱ × [د]
- ۱۲ انام [د]
- ۱۳ ایام [د]



خوش است. >

القصه. روز دیگر از آن جا کوچ کرده، رو به بیابان بی پایان آوردیم و راه طی می‌کردیم. در هر سه منزل از چاه‌های شور آب می‌برد داشتیم و در آن سفر آب‌هایی را می‌خوردیم که آب دریای شور به نزد او [چندان لذیذ و لطیف]<sup>۱</sup> تر بود.

### بیت

ز گرما آنچنان میشد نفس تنگ<sup>۲</sup>      که لب از تاب آن چون شمع می‌سخت  
ز باد گرم پنداری که تقدیر      بدنی‌ا دوزخ دیگر بر افروخت

و در آن دشت خونخوار چهار پایان از بی‌آبی و از گرمی هوا بسیار به هلاکت رسیدند. پانزده روز دیگر بدین منوال و<sup>۳</sup> به چندین محنت و مشقت راه قطع می‌کردیم. (۶۶۸) روز سی و م بر لب دریای فراط وارد گردیدیم<sup>۴</sup>. همه خود را یک باره بانداختند. از بسیار<sup>۵</sup> خوردن آب چندی<sup>۶</sup> از کاروانیان از هوش رفتند. یکی از آن جمله فقیر بودم<sup>۷</sup> و در میان آن سی روز غیر از همان عرب بدوی ذی روحی را ندیده بودیم.

{۶۰۸} القصه. از دریا عبور نموده، سه روز از رنج راه برآسودیم. بعد از آن جا کوچیده، به یک منزل به طاق کسری رسیده، فرود آمدیم و آن موضع حالا خراب است و لیکن<sup>۸\*</sup> آثار طاق باقی است، مثل < ۵۹۹ پ> آق سرای شهر سبز و<sup>۹</sup> روز دیگر از آن جا

۱ لذیذ و لطیف چندان [ت]

۲ دم [د]

۳ × [د]

۴ گردیم [ت]

۵ بسیاری [د]

۶ چند [ت][د]

۷ بود [ت][د]

۸ [د]، لیکن [س][ت]

۹ × [د]

نکرده بودیم. در آن وقت بود که مردی<sup>۱</sup> قوی هیکل در غایت خوش رویی<sup>۲</sup> حاضر شد و تمام لباس او همه از پوست آهو بود. فقیر در حیرت افتادم و در میان کاروانیان گدایی<sup>۳</sup> میکرد. فقیر +<sup>۴</sup> به پیش خود طلب [نمودم و]<sup>۵</sup> احوال پرسیدم. گفت، >ما [مردم مالکی مذهب هستیم]<sup>۶</sup>. در عمر خود شهر را ندیدم<sup>۷</sup>. در این بیابان بی پایان میگردم<sup>۸</sup>. در میان ده سال و بست سال کاروان اتفاق افتد، می بینم و الا<sup>۹</sup> نه و ما مردم از یک خانه وار<sup>۱۰</sup> تا دو خانه واریم. از این زیاده<sup>۱۱</sup> نمی باشیم و خوراک ما گوشت آهو. چیز دیگر را نمیدانیم و آب هم نمیخوریم. مگر ماهی دوچار آید. فقیر نیک ملاحظه کردم، [زبان شان]<sup>۱۲</sup> فصیح ترین زبان عرب بود و تمام اعضای او اوستخوان و پی بود و در همه اعضای او صد مثقال گوشت نبود و چنان صاحب {۶۰۸} حسن بود که<sup>۱۳</sup> از هزار یک<sup>۱۴</sup> حسن او به مردم شهر نبود و از دو چشم او <۵۹۹> گویا خون مثل فواره میجوشید. فقیر گفتم، >[به شمایان]<sup>۱۵</sup> چه ضرور است. به<sup>۱۶</sup> شهر رفته، سکونت اختیار کنید. بهتر نیست. < خندید و گفت، >هر کس به جای خود

۱ مرد [د]

۲ روی [د]

۳ گدای [ت] [د]

۴ او را [د]

۵ نموده [د]

۶ مردمی هستیم مالکی مذهب [د]

۷ ندیدیم [د]

۸ میگردیم [ت] [د]

۹ اله [د]

۱۰ و [ت]

۱۱ زیاد [ت] [د]

۱۲ زبان او [د]

۱۳ × [د]

۱۴ یکی [د]

۱۵ شمایان را [د]

۱۶ × [ت]

فقیر، رو به بغداد آوردیم و در آن بیابان بی پایان راه می پیمودیم. چون به نزدیک نزد رسیدیم، در زمین نبی طایی که منزلگاه حاتم طای<sup>۱</sup> بود و از آن جا در موضع بنی تمیم<sup>۲</sup> که نشیمن گاه<sup>۳</sup> لیلی و مجنون بود و حالا در آن منزلها پشه پر نمیزند و از آن جا در کوشک حضرت سلیمان علیه السلام رسیدیم که دیوانی<sup>۴</sup> ساخته اند. همه +<sup>۵</sup> سنگ رخام و کاروانیان چون نزدیک آن قصر رسیدند، همه چون بید میلرزیدند. همان شب به پیش آن قصر سکونت اختیار نمودند.<sup>۶</sup> فقیر هر چند سلسله جنبان آن امر شدم و چندی را تکلیف نمودم که <بیایید. به رفاقت یک دیگر به آن قصر رویم +<sup>۷</sup> و غریب دنیا را مشاهده نمایم<sup>۸</sup>.> گفته، هر چند التجا کردم، قبول نکردند. تمام شب از میان آن قصر آوازه های بسیار به گوش میرسید. نمیدانستم که چه واقعه باشد. اما مردمان آن [سرزمین]<sup>۹</sup> گفتند که <درون آن قصر پر {۶۰۷} از پری است. هر کس آن جا رود، به<sup>۱۰</sup> هلاک خود میکوشد. روز دیگر (۶۶۷) از آن جا کوچیده، به جایی<sup>۱۱</sup> رسیدیم که قاق بسیار خوب داشت و آب باران بسیار لذیذ <۵۹۸پ> در آن قاق موجود بود. همه کاروانیان شادان و خندان از آن آب خوردند. از بس که در این پانزده روز غیر از آب شور چیزی را ندیده بودند<sup>۱۲</sup> و هیچ انسانی<sup>۱۳</sup> را مشاهده

- ۱ طایی [د]
- ۲ تحیم؟ [ت]، × [د]
- ۳ گاهی [ت]
- ۴ دیوان [ت] [د]
- ۵ از [د]
- ۶ کردند [د]
- ۷ عجایب [د]
- ۸ نمایم [د]
- ۹ جا [ت] [د]
- ۱۰ گویا بر [د]
- ۱۱ جای [د]
- ۱۲ بودند [د]
- ۱۳ انسان [ت] [د]

پیغمبر مرسل آسوده اند. در آن وقت حاکم شام شریف محمد صالح پادشاه بود. در میان ما و او طرح آشنایی پذیرفت. آن عالیجاه به فقیر سپارش کرده، به نام حسن پادشاه حاکم بغداد [در کمال سپارش]<sup>۱</sup> مکتوبی داد. فقیر بعد از دو ماه از آن شهر جنت نشان دل سخت خود را کنده، در کاروان سرا رفتم که اتفاقاً بازرگانان بغداد بار بسته اند و اراده سفر بغداد<sup>۲</sup> دارند. فقیر در حال یک اشتر تا بغداد به پنج طلا کرایه کرده، متوجه بغداد شدم. چون برادران فقیر را گسیل کرده، وداع نمودند<sup>۳</sup>. در آن وقت بود که ملا خدای بپردی<sup>۴</sup> که در وقت رفتن از بابت نان و<sup>۵</sup> نصیب بحث<sup>۶</sup> کرده بود، گفت، <به خاطر دارید که چه فرموده بودید.> به خاطر فقیر آمد. از سخن خود توبه و استغفار کردم که اختیار جزوی و کلی به واجب تعالی است، نه در بند<sup>۷</sup>.

#### بیت<sup>۸</sup>

{۶۰۷} رشته ای بر گردنم افکنده دوست

می برد هر جا که خاطر خواه<sup>۹</sup> او است

<۶۹۸> [رفتن فقیر از شام جنت مشام به راه بیابان بی پایان به بغداد شریف به چندین

درد و الم]<sup>۱۰</sup>

خلص کلام آن که قریب پانصد اشتر بار و دو صد بازرگان همه ایشان عرب بودند، الا

۱ × [ت][د]

۲ × [ت]

۳ کردند [ت][د]

۴ پردی [د]

۵ × [ت]

۶ سخن [د]

۷ بنده [ت][د]

۸ × [د]

۹ خواهی [ت]

۱۰ × [ت]

## مصراع

ای شوخ چنان مکن که نومید شدم<sup>۱</sup>

و آن پری چهره را به دست آورد و<sup>۲</sup> بعد از چند روز همان گل اندام از برای امتحان کله پوش صوف<sup>۳</sup> خود را به بازار + بمزاد بر آورد. چون گرفتاران<sup>۴</sup> آن گل پرهن از این کار واقف شده، همه رو به بازار آورده، خریداری آن کله پوش را میکردند. به یک ساعت بهای او به پنج اشرفی بر آمد. یکی شربت فروش بود، منیب نام داشت<sup>۵</sup>، در کمال بیباکی هفت طلا داد و آن کله پوش کهنه را به خرسندی تمام بخريد و در ربود، به حکم آن که

## بیت

{۶۰۶پ} عاشقان را بر سر خود حکم نیست

هر چه فرمان تو باشد آن کنند

و چیزهای عجیبی<sup>۶</sup> که<sup>۷</sup> فقیر در شام شریف مشاهده نمودم، هزار یکی<sup>۸</sup> او را بیان کرده نمیتوانم و عمری که گذرد، در شام <۶۹۷پ> گذرد. دیگر +<sup>۹</sup> هیچ است. زبده کلام آن که هر روز به زیارت (۶۶۶) عزیزان میرفتم، مثل حضرت معاویه و بلال حبشی و محی<sup>۱۰</sup> الدین عربی [رضی الله عنهم]<sup>۱۱</sup> و در آن جا غاری است. گویند، دوازده هزار

۱ شوم [د]

۲ × [د]

۳ صُوف [ت] [د]

۴ شهر [ت] [د]

۵ گرفتار [ت]

۶ × [ت] [د]

۷ عجیب [د]

۸ × [د]

۹ یک [د]

۱۰ همه [ت] [د]

۱۱ موحد [ت]

۱۲ × [ت] [د]

و هر روز با سیاحان جهان گرد در جامع یحیی نبی علیه السلام طرح مجلس می افکندیم و با جوانان سیاه چشم سرو قد نیز صحبت میداشتیم. از بس که در حسن {و} لطافت شام شریف +<sup>۱</sup> در تمامی<sup>۲</sup> عربستان شهرتی دارد و جوان بازی که فقیر<sup>۳</sup> در آن ولایت مشاهده نمودم، در تمام ربع مسکون نخواهد بود. چنانچه در آن عصر جوانی بود، خیاط بچه مهری نام، در غایت حسن و جمال و خط سبزش +<sup>۴</sup> به گرد عارضش {۶۰۶ر} نو<sup>۵</sup> دمیده بود، چنانچه<sup>۶</sup> لمؤلفه<sup>۷</sup>.

## بیت

بر لب لعل تو دیدم سبزه پر آب و رنگ  
بی تأمل گفتمت این چشمه خضر است بس

و بسیار<sup>۸</sup> امرزاده های شام به او تعلقی داشتند. خصوص قاضی زاده و مفتی زاده اتفاقاً هر دو جشن <۶۹۷ر> آراستند. ضمناً هر دو به آن پری چهره پیام فرستاده، تکلیف منزل خود نمودند و آن پری زاد گفت، <هر کدام ایشان بیشتر مبلغ فرستد<sup>۹</sup>، به خدمت او خواهم رفت.> هر دو بزرگ زاده به هم عار کرده، از ده طلا به صد طلا رسیدند. بعد از ماجرای بسیار مفتی زاده دو صد طلا فرستاد و گفت.

۱ و [ت]

۲ تمام [د]

۳ × [ت]

۴ نو [د]

۵ × [د]

۶ × [د]

۷ لمؤلفه [ت]

۸ بسیاری [د]

۹ فرستند [د]

قضا نرسیده بود، طاعون کفید و چنان فساد رفته بود که در تمام اعضا<sup>۱</sup> +<sup>۲</sup> یقین این بود که البته<sup>۳</sup> یک قطره آب باقی نمانده باشد و در میان آن چهار روز {۶۰۵پ} چنان کسل کشیده بودم که البته سه ساله مرض صعب به آن درجه نخواهد رسید. روز دیگر از آن جا به چاه یوسف علیه السلام آمده، لحظه ای آسودیم و از آن جا نیز سواری نموده، به جسر یعقوب [نزول فرمودیم]<sup>۴</sup>. روز دیگر از آن جا کوچیده، به سه منزل به شام جنت مشام وارد گردیدم.

<۵۹۶پ> مکرر دیدن فقیر ممالک شام را و پنج ماه در آن ولایت بی مانند سکونت اختیار نمودن بعد رو به بغداد شریف آوردن

القصة. برادرانی که +<sup>۵</sup> در آن جا بودند، همه فقیر را [فی الحال]<sup>۶</sup> آمده دیدند و<sup>۷</sup> به معالجه فقیر پرداختند. در سهل روز صحت یافتم. به زبان این بیت<sup>۸</sup> جاری بود، چنانچه<sup>۹</sup>

رباعی<sup>۱۰</sup>

(۶۶۵) حاجی ای در این وادی با هزار غم آمد

موی موی او حسرت عضو عضو الم آمد

پای تا سرش بر باد اندر این غریب آباد

مثل او دل<sup>۱۱</sup> ناشاد در زمانه کم آمد

- 
- |    |               |
|----|---------------|
| ۱  | اعضام [د]     |
| ۲  | البته [د]     |
| ۳  | × [د]         |
| ۴  | رسیدیم [د]    |
| ۵  | همه [د]       |
| ۶  | به آن حال [د] |
| ۷  | × [د]         |
| ۸  | نظم [د]       |
| ۹  | × [ت] [د]     |
| ۱۰ | نظم [د]       |
| ۱۱ | دلی [د]       |

آن شهر فرود آمدم<sup>۱</sup> و هیچ کرایه<sup>۲</sup> کشی نبود که ما را از آن شهر بیرون کشد. لا علاج تن به قضا در داده، منتظر مرگ بودم. روز سیوم به فقیر نیز طاعون کار گر آمد و قاعده<sup>۳</sup> این<sup>۴</sup> مرض آن<sup>۵</sup> است که مثل هفت پوست سیاه +<sup>۵</sup> میشود. اگر به سه روز کفید و فساد رفت، آن شخص خلاص می یابد < ۵۹۶ ر > و اگر به روز چهارم عاید شد<sup>۶</sup> و نه کفید، از هزار جان یک جان خلاص نمیشود. این مقرر است.

القصه. همان روز دو کرایه کش آمدند. با دو خچر راه وار فقیر را مع چیز و<sup>۷</sup> چاره کرایه کرد<sup>۸</sup>. با وجود طاعون بودن لا علاج متوجه یعقوبیه شدم. مراد +<sup>۹</sup> کنعان است و راه طی میکردیم. در بالای خچر چنان زحمت میکشیدم که مثل سپند در مجمر آتش میسوختم و<sup>۱۰</sup> مشقتی که در آن مورد کشیده ام، در تمام سیاحت<sup>۱۱</sup> [نکشیده ام]<sup>۱۲</sup>. [و بر زبانم به این بیت مطر نم بود.

## بیت

صبری کنم تا کرم او چه میکند      با این دل شکسته غم او چه میکند]<sup>۱۳</sup>

روز سیوم به کنعان رسیدیم. همان شب گاه خود را میدانستم، گاه نمیدانستم. اتفاقاً

۱ آمدم [د]

۲ کرا [س][ت][د]

۳ آن [د]

۴ این [ت][د]

۵ بیرون [د]

۶ گردد [د]

۷ × [د]

۸ کرده [د]

۹ از [د]

۱۰ × [د]

۱۱ سیاحتم [ت]

۱۲ ندیده ام [د]

۱۳ × [ت][د]



[می پیمودم]<sup>۱</sup>. بعد از رنج بسیار قبل از غروب آفتاب به قدوس<sup>۲</sup> شریف وارد گردیدم. <sup>۳</sup>+ هفت روز در آن شهر<sup>۴</sup> متبرک از رنج راه برآسودم و از آن جا به اشتری کرایه کرده، رو به راه آوردم. بعد از یک منزل<sup>۵</sup> به<sup>۶</sup> ولایت نابولوس [داخل شدم]<sup>۷</sup> آن شهر را ساحران<sup>۸</sup> پیشین [ساخته اند]<sup>۹</sup>. در کمال استحکام (۶۶۴) و در غایت معموری و<sup>۱۰</sup> اما در آن وقت چنان کسل<sup>۱۱</sup>\* طاعون به آن شهر استیلا یافته بود که در کوچه ها و بازارها مردم مرده خوابیده بودند. کسی نبود، به حال ایشان پردازد و<sup>۱۲</sup> هر کس به حال خود بود، [به حکم آن که]<sup>۱۳</sup>

## بیت

{۶۰۵} قضا نرادی کوک طاقیده آی کون کعبتین ایله  
دوشش نقشی بیله ایل نقد عمرین بیشمار ایلتور

<sup>۱۴</sup>+ چون آن حال را فقیر مشاهده کردم، دست از جان شیرین شستم و به کاروان سرای

- |    |                                  |
|----|----------------------------------|
| ۱۵ | مشکلی [ت]                        |
| ۱  | میرفتم [د]                       |
| ۲  | قدس [ت]                          |
| ۳  | سه روز [د]                       |
| ۴  | شهری [ت]، منزل [د]               |
| ۵  | منزلی [ت]                        |
| ۶  | در [د]                           |
| ۷  | داخیل شدم [ت]، نزول فرمودم و [د] |
| ۸  | ساحیران [ت]                      |
| ۹  | ساخته بودند [د]                  |
| ۱۰ | × [د]                            |
| ۱۱ | [د]، کسلی [س] [ت]                |
| ۱۲ | × [د]                            |
| ۱۳ | × [د]                            |
| ۱۴ | و [ت]                            |

قبل از نماز عصر در مرقد<sup>۱</sup> حضرت موسی کلیم الله رسیدم. [غیر از بقعه]<sup>۲</sup> آن حضرت +<sup>۳</sup> در آن بیابان بی پایان چیزی دیگر نبود. همان شب فقیر مع آن سیاح<sup>۴</sup> هندوستانی به چندین ترس و هراس شب را به روز آوردم و چنان جای پر بیم<sup>۵</sup> بود که اگر شیر نر [در آن جا میرسید، صد بار زهره اش از ترس میترکید.]<sup>۶</sup> بعد از طلوع +<sup>۷</sup> آفتاب از آن آستان ملک پاسبان بر آمده، پیاده قدم توجه مینهادم {۶۰۴پ} و از غایت بیچاره گی اشک گلگون به رخسار میریخت<sup>۸</sup>. دیوانه وار بر خار خار قدم میزد و<sup>۹</sup> تمسک به عنایت الهی که مونس تاریک نشینان شب کربت است، کرده، عندلیب زبان را بدین بیت مترنم<sup>۱۰</sup> میساختم که [چنانچه گفته اند.]<sup>۱۱</sup>

## بیت

مددی گر به چراغی نکنند آتش طور چاره تیره شب<sup>۱۲</sup> وادی<sup>۱۳</sup> ایمن چه کنم

در آن وقت پای فقیر آبله کرده<sup>۱۴</sup>، مجروح < ۵۹۵پ > شده بود. در غایت مشقتی<sup>۱۵</sup> راه

- 
- ۲۱ الایک احرام کهنه در بری فقیر چیزی نیست، وا گذاشتند. بعد از چندین محنت [د]
- ۱ مرقدی [ت]
- ۲ الامرقد [د]
- ۳ بقعه کهنه [د]
- ۴ سیاحی [ت]
- ۵ وهم [د]
- ۶ میرفت، از ترس زهره اش آب میشد. [د]
- ۷ نمودن [د]
- ۸ میریختم [د]
- ۹ × [ت]
- ۱۰ مترنیم [ت]
- ۱۱ × [ت] [د]
- ۱۲ شبی [ت]
- ۱۳ واده [ت]
- ۱۴ کرد و [د]

بعد از سه روز چیز و<sup>۱</sup> چاره {۶۰۴} خود را در آن جا گذاشته، با یک قلندر<sup>۲</sup> هندوستانی [سیاح گیتی پیمایی<sup>۳</sup> که بس آفاق گردی و جهان نوردی،]<sup>۴</sup> متفق شده<sup>۵</sup>، پیاده متوجه <۵۹۵> قلعه الرحمان شدم. بعد از مشقت بسیار در آن ولایت<sup>۶</sup> وارد گردیده<sup>۷</sup>، به زیارت حضرت ابراهیم خلیل الله و حضرت اسحاق و حضرت یوسف [علیهم السلام]<sup>۸</sup> پرداختم<sup>۹</sup>. بعد از سه روز رو به کوه طور آوردم. چون به آن کوه<sup>۱۰</sup> متبرک رسیدم<sup>۱۱</sup>، +<sup>۱۲</sup> نه آب بود و نه اشجار [و از آن جا]<sup>۱۳</sup> در غایت سختی راه طی میکردیم<sup>۱۴</sup>. به چندین جا عربان بیدوی<sup>۱۵</sup> دوچار آمده<sup>۱۶</sup>، خواستند، +<sup>۱۷</sup> ما را هلاک کنند<sup>۱۸</sup>. نیک تأمل [می کردند]<sup>۱۹</sup> که [در بر فقیر الا یک احرام جریده چیز<sup>۲۰</sup> دیگر نبود. لا علاج رها میکردند. عاقبت به همین مشقت]<sup>۲۱</sup>

- ۱ × [ت] [د]
- ۲ قلندری [ت]
- ۳ پیمای [د]
- ۴ × [ت]
- ۵ شد [د]
- ۶ جا [د]
- ۷ شده [د]
- ۸ × [ت]
- ۹ مشرف شدم [د]
- ۱۰ کوهی [ت]
- ۱۱ رسیدیم [ت]
- ۱۲ و در آن کوه [د]
- ۱۳ × [د]
- ۱۴ میکردم [ت] [د]
- ۱۵ بدوی دزد [د]
- ۱۶ آمد [د]
- ۱۷ که [ت]
- ۱۸ کند [ت]
- ۱۹ کردند [د]
- ۲۰ چیزی [ت]

مثنوی<sup>۱</sup>

{۶۰۳پ} این بخت ندانم از کجا خواست      کز هر رگ و ریشه ام بلا خواست  
 <۵۹۴پ> یک جان و هزار برق و اندوه      گاهی چه کند به آتشین کوه  
 ای فتنه چه خواستی به کینم      وی چرخ چه داری<sup>۲</sup> در کمینم  
 بر قتل منت چه لشکر است این      آهنگ کدام کشور<sup>۳</sup> است این

ای کوکب بخت سوختم وای بر آبله دلم [بو بخشای]<sup>۴</sup>  
 و چنان به سرعت راه طی میکردیم<sup>۵</sup> که ده روزه راهی<sup>۶</sup> را به سه روز قطع کرده، به شهر  
 غزه وارد گردیدیم<sup>۷</sup> و از همه وهم بر آمده، سه روز در آن شهر از رنج راه بر آسودم<sup>۸</sup>، چنانچه  
 گفته اند.

رباعی<sup>۹</sup>

یوسف منم از رنج بلا افسرده      از تهمت خون جگر آلوده  
 خاری مکن ای عزیز دانی که منم      یوسف ندیده<sup>۱۰</sup> + دهن آلوده

القصه. (۶۶۳) روز چهارم متوجه قدوس شریف شدم. بعد از دو روز در بیت  
 المقدس نزول فرمودم و سنگ معلق را زیارت کرده، به مسجد اقصی سکونت نمودم.

- 
- |    |                         |
|----|-------------------------|
| ۱  | ابیات [د]               |
| ۲  | داریی [د]               |
| ۳  | کیشور [ت]               |
| ۴  | به بخشایی [د]           |
| ۵  | میکردم [د]              |
| ۶  | راه بیابان خون خوار [د] |
| ۷  | گردیدم [ت] [د]          |
| ۸  | آسودیم [د]              |
| ۹  | قطع [د]                 |
| ۱۰ | او [د]                  |

در آن جانب سعی نمودم و سر و روی یک دیگر را بوسیدیم<sup>۱</sup>، به چندین گریه و زاری از هم دیگر جدا شدیم و این بیت به زبان فقیر جاری بود، [چنانچه گفته اند].<sup>۲</sup>

### بیت

[باز آمدن ز رفتن خورسند دور نیست      گر زنده گيست دیده به دیدار میرسد]<sup>۳</sup>

و آن برادر قرار بر فرار اختیار نموده<sup>۴</sup>، متوجه سودان شد و فقیر ضمناً به برادران وداع نمودیم.<sup>۵</sup>

### ذکر<sup>۶</sup> رخت اقامت از مصر کثافت<sup>۷</sup> چیده، رو به کنعان شرافت آوردن فقیر

القصة. از غایت ترس و هراس به کاروان سرا آمدم<sup>۸</sup>. از قضا دو عرب اجین سوار یعنی بیل مایه سوار به جانب شام میروند. فقیری یکی از آن بیل مایه را به پنج طلا کرایه کرده، به اتفاق ایشان متوجه کنعان شدم و این چند ابیات بر<sup>۹</sup> زبانم جاری بود، [چنانچه گفته اند].<sup>۱۰</sup>

۱ بوسیده [د]

۲ × [د]

۳ رفتی رفتی خدا نگه دار تو باد      شمس و قمر و ستاره ها یار تو باد [د]

۴ کرده [ت]

۵ نمودم [ت]، نموده [د]

۶ × [د]

۷ کسافت [س][ت][د]

۸ آمدم [ت]

۹ به [د]

۱۰ × [د]

## بیت

چه افیون بود اندر جام نوشین که سر رفت و نرفت از سر خمارم

<۵۹۳پ> از آن جا که [چرخ مشعبد]<sup>۱</sup> کجرو فتنه فروش که شب روانش همه چون چشم خوش نگاهان از دیده شقایق جگران بیکه‌نه گر<sup>۲</sup> خون ریز اند، همت بلند بر گزند و ایذا ابنای بشر مقصور داشته، بعد از سه روز این واقعه<sup>۳</sup> در میان مردم شهرت یافت. +<sup>۴</sup>

## مصراع

کل سر جاوز الاثنین شاع

و<sup>۵</sup> برادرم احمد افندی و کاشف افندی از این سر<sup>۶</sup> فقیر را آگاه کردند. برادرم ماهر افندی نیز از این امر واقف گشته، در کمال ترس و هراس به پیش فقیر آمد و طرح مشاورت در میان افکند. فقیر گفتم، <از دو سر. من اراده اقلیم توران دارم و تو چه خواهی کردن.> گفت، <من در ولایت سودان در پیش شریف بیک کهیا (۶۶۲) میروم. +<sup>۷</sup> چند روز سکونت اختیار میکنم. بعد از تخفیف این حادثه باز خواهم آمدن. فقیر مصلحت او را پسندیدم. از بس که {۶۰۳} خود میدانستم که سودان ولایتی است، در بالای نیل مبارک و شریف بیک بزرگ ترین امرای محمد علی پادشاه بود، در آن <۵۹۴ر> دیار حکم رانی میکرد. به برادرم الفتی داشت. اگر آن جا رود، به هر حال اصلاح پذیر میشود. بنابر آن<sup>۸</sup> فقیر

۱ مشعبد چرخ [د]

۲ بیکینه؟ گر؟ [ت]، بکینه؟ کبر؟ [د]

۳ هایلِه [د]

۴ آری گفته است [د]

۵ × [د]

۶ واقعه هایلِه [د]

۷ چون [د]

۸ این [ت]

اجازت داد. به این وعده که {۶۰۲} در هر هفته یک بار به خدمت آن شیرین زمان حاضر باشم. فقیر انگشت قبول به دیده نهاده، از آن پری زاد رخصت اجازت یافته، با همراهی همان عجوزه به جانب بیرون مراجعت فرمودیم، [چنانچه گفته اند].<sup>۱</sup>

### بیت

چه بزم ها که در این خاک تیره بر هم خورد  
تمام ریگ روان شیشه ریزه حلی است

<۵۹۳> چون به دروازه چهار باغ رسیدیم، آن پیره<sup>۲</sup> زن مکاره همان تدبیر را کار فرموده، به حاجبان فرمود. مثل اول به سر برداشته، به خانه آن کیاد بردند و ما از صندوق برآمده، به ایشان وداع کردیم و آن غلام سیاه دیو سیرت با دو خچر خوش رفتار باز حاضر شد. خود را با مرکب ها گرفته، در غایت تعجیل قبل از طلوع آفتاب به دروازه شهر رسیدیم<sup>۳</sup> و از خچر به زیر آمده، به آن غلام سیاه +<sup>۴</sup> هفت طلا داده، رخصت کردیم. در آن وقت بود که فرعون شب به سحر نیل فرو رفت و موسی آفتاب در صدر سریر سپهر بلند اقبال جلوه نمود.

### بیت

پنجه زر سر کشید از مهر خاور آفتاب  
کرد روشن ربع مسکون را سراسر آفتاب

{۶۰۲} و خود از دروازه وقت صبح<sup>۵</sup> داخل شهر شده، خرامان خرامان از آن گرداب بلا مفت و رایگان خلاص شده، به منزل خود آمدیم، [چنانچه گفته اند].<sup>۶</sup>

۱ × [د]

۲ پیر [د]

۳ رسانیدیم [د]

۴ یک طلا [د]

۵ طلوع [د]

۶ × [د]

عدیلی<sup>۱</sup> نداشت و بر همه ایشان غلبه میکرد. در پیش خود طلب نمود. فقیر دو بساط او را مات کردم. با وجودی که در سه جا کج باخته بود و از آن حال ملیکه خبر داشت. بنابراین به موقعش این بیت را خواندم [چنانچه گفته اند]<sup>۲</sup>.

### بیت

فرزین ز کج روی شده با شاه همنشین  
بیچاره رخ ز [راستی اندر کناره ها است]<sup>۳</sup>

<۵۹۲پ> و از این بیت نیز ملیکه خرسندیها نمود و در آن حین بود که کنیزکی در کمال سرعت آمد و گفت، <ساعت به دوازده رسید، یعنی صبح صادق دمید.> فقیر باز این بیت در حال خواندم.

### نظم<sup>۴</sup>

صبح دمید و روز شد یار [به سوی]<sup>۵</sup> خانه رفت  
روی سحر سیاه باد یار به این بهانه رفت

### فرد<sup>۶</sup>

شب رفت و حدیث ما به پایان نرسید      شب را چه گنه حدیث ما بود دراز

و نیز این بیت را در حال نوشت. به فقیر صد یالدوز، به ماهر افندی صد محمودیه مع سر و پای ملوکانه انعام نمود. +<sup>۷</sup> بسیار شفقت و مرحمت در باره فقیر کرد (۶۶۱) و رخصت

۱ عدیل و نظیری [د]

۲ که [د]

۳ راست روی در کناره ماند [د]

۴ بیت [د]

۵ شبینه [د]

۶ بیت [د]

۷ و [ت][د]



بعد از ساعتی سر برداشت. رو به آن دو کنیزی که با برادرم طعام خورده بودند، آورده، گفت، > حالا به شما نگفته بودم که این جوان البته بزرگ زاده خواهد بود. اینک دیدید و گفت.

## بیت

بعد از این فکر تو خواهم<sup>۱</sup> به نوعی کردن  
که<sup>۲</sup> شود بهر تو این رنج روان گنج روان

و<sup>۳</sup> ایشان به فراست ملیکه از روی خوش آمد بسیار مبالغه نموده، < ۵۹۲ر > په په میگفتند و در پیش برادرم طلبیده، نشانید و<sup>۴</sup> گفت، > از شعرهای پارسی خوان و من در شعر پارسی بسیار عاشقم. < فقیر شعرهای عاشقانه بسیار خواندم. آخر<sup>۵</sup> این قطعه را بسیار پسندید. +<sup>۶</sup> در حال نوشت.

قطعه<sup>۷</sup>

هنوز اول عشق است اشتراک مکن      دلا به مقصد خود میرسی شتاب مکن  
به رب کعبه قسم میدهم ترا امروز      و لیک زنده به دست آوری کباب مکن

و گفت، > بازی شطرنج و نرد را میدانید. < فقیر گفتم، > بلی. بسیار در این علم مهارتی دارم. < از بس که چند نوع بازی او را در کتاب نفایس الفنون خوانده، ضبط کرده بودم، در حال کنیزی داشت که خزینه چئی او بود، { ۶۰۱پ } در علم شطرنج [نظیری و

۱ خواهیم [د]

۲ گر [د]

۳ × [د]

۴ × [د]

۵ اخیر [د]

۶ و [د]

۷ بیت [د]

ما واقف گشته، چنان خنده به آن سر آمد نازنینان غلبه کرده بود که از خوردن باز ماند و خان را از پیش برداشتند. بعد از فراغ از<sup>۱</sup> طعام آن ملیکه خوبان رو به فقیر آورده، گفت، > حکیم خان، من ترا پیشتر<sup>۲</sup> شنیده بودم. حالا دیدم، پسندیدم. اکنون از تو یک التماس دارم. می باید که از کمال راستی بی کم و کاس بیان فرمایی. < فقیر به مجرد شنیدن این سخن سپندوار از جای بر جسته، گفت، > ای سر آمد نازنینان، سری که اگر سر میرفته باشد، به خدمت بیان کنم. < گفت، > تو از کدام آشیانه بلند<sup>۳</sup> پرواز کرده ای و سرگذشت خود را [از اول تا آخر یک به یک]<sup>۴</sup> بیان فرما. < > ۵۹۱ < فقیر غیر از راستی چاره دیگر ندیدم. انگشت قبول به دیده نهاد.

### بیت

گفتم ای سرو بگفتی که بگو با من راست  
پیش تو چون به خیانت کنم آلوده زبان

بعد از آن گفتم، > قلندرم<sup>۵</sup>. ضربت ایام +<sup>۶</sup> خورده و در خم چوگان فلک خورد گشته و<sup>۷</sup> از ستاره منحوس و طالع واژون به عقوبتها مبتلا شده و از بخت نا مساعد<sup>۸</sup> مذلتها کشیده ام. < گفته، صورت واقعه را بالتفصیل بیان نمودم. (۶۶۰) چون ملیکه این مقدمات را {۶۰۱} از فقیر شنیده<sup>۹</sup>، انگشت تحیر به دندان [گزید و]<sup>۱۰</sup> سر به جیب تفکر فرو برد.

۱ × [د]

۲ پیش [د]

۳ × [د]

۴ یک به یک به پیش من از اول تا آخر [ت][د]

۵ قلندری ام [د]

۶ و سیلی دهر نافر جام [د]

۷ × [د]

۸ نا مساعد [د]

۹ شنید [ت][د]

۱۰ گزیده [د]

که مشاهده نمودم<sup>۱</sup> در عمر خود ندیده بودم<sup>۲</sup>. مگر از<sup>۳</sup> بهشت آورده بودند.  
 خلص کلام آن که در پیش ملیکه [خان مخصوص]<sup>۴</sup> کشیدند. به<sup>۵</sup> برادرم با دو  
 ندیمی<sup>۶</sup> ملیکه خان گذاشتند. به فقیر [و آن عجوزه مع همان]<sup>۷</sup> کنیز سیاه چشم [یک خان]<sup>۸</sup>  
 دادند.

<۵۹۱ر> بیت

سیه گر کرد چشمش روز ما خود هم کشید آخر  
 مکافات عمل را در لباس سرمه دید آخر

فقیر از<sup>۹</sup> کمال شوق از اطعمه ها<sup>۱۰</sup> و اشربه ها تناول میکردم و آن پیره زن از روی دخل  
 گفت،<sup>۱۱</sup> <فرزند، مگر شما در عمر خود طعام نخوردید.> فقیر در جواب گفتم، <بلی  
 ماما<sup>۱۲</sup>، مثل این نوع طعام را [نخورده ایم و نشنیده ایم]<sup>۱۳</sup>> {۶۰۰پ} ملیکه از سخنها<sup>۱۴</sup>

۱۶ کردند [د]

۱ فقیر به آن مایده ها طعامهای که مشاهده نمودم [ت]، در آن خان چنان اطعمه های رنگارنگ  
 مشاهده کردم که [د]

۲ و شنیده بودم [ت]، و نشنیده [د]

۳ خان [د]

۴ مخصوص خان [ت]

۵ × [د]

۶ ندیم [د]

۷ به آن زن مکاره به یک [د]

۸ دیگر [د]

۹ در [د]

۱۰ اطعمها [ت]

۱۱ که [ت]

۱۲ × [د]

۱۳ نخوردم و نشنیدم [ت][د]

۱۴ سخن [د]

خود را به جواهر پیراسته و بر دست و<sup>۱</sup> پا زنگوله های خوش صدا بر بسته، به چندین عشوه و<sup>۲</sup> کرشمه به<sup>۳</sup> پیش ملیکه مصر صف زدند، [چنانچه شاعری میفرماید.]<sup>۴</sup>

## بیت

{۶۰۰} بیا که نغمه سرایان نفس به نی بستند

پیاله را به لب شیشه های می بستند

القصه. ملیکه +<sup>۵</sup> حکم فرمود<sup>۶</sup> که [مطربان بزم عالی]<sup>۷</sup> بر پا کنند. به مجرد امر [بانوی مصر]<sup>۸</sup> (۶۵۹) [نغمه گران]<sup>۹</sup> چنان بزمی<sup>۱۰</sup> بر پا کردند<sup>۱۱</sup> که نه جمشید در خواب دیده بود و نه خسرو شنیده بود. فقیر چون آن حال را مشاهده نمودم، گاه به خود بودم، گاه بیخود. بعد از فرصتی<sup>۱۲</sup> بزم تسکین یافت. ملیکه [حکم نمود]<sup>۱۳</sup> که طعام بیارند. در حال کنیزان سرو قد از هر گونه اطعمه<sup>۱۴</sup> لطیفه و اشربه<sup>۱۵</sup> لذیذه مهیا ساختند<sup>۱۶</sup>. [فقیر به آن مایده طعامهایی

- 
- |    |  |
|----|--|
| ۱۸ | × [ت]  |
| ۱  | × [ت]  |
| ۲  | × [ت][د]   |
| ۳  | در [د]   |
| ۴  | × [د]  |
| ۵  | مطربان را [د]  |
| ۶  | نمود [د]   |
| ۷  | بزم جمشیدی [د]   |
| ۸  | ملکه [د]   |
| ۹  | مطربان به مضراب زدن پرداختند و کنیزان به رقص در آمدند. [د] |
| ۱۰ | جشنی [د]   |
| ۱۱ | ساختند [د]   |
| ۱۲ | فرستی [ت]، ساعتی [د]                                       |
| ۱۳ | فرمود [د]  |
| ۱۴ | اطعیمه [ت]، اغذیه [د]                                      |
| ۱۵ | اشربه [ت]  |

بیت<sup>۱</sup>

حسنی<sup>۲</sup> که سفید است ندارد مزه چندان  
همرنگ نمک هست و لیکن<sup>۳\*</sup> نمکین نیست

زبده کلام آن که ملیکه سیرت<sup>۴</sup> برادرم را موافق<sup>۵</sup> صورتش<sup>۶</sup> نیافت. دل<sup>۷</sup> بیدلان سخن  
میکرد. در آن وقت در پیش ملیکه دو کتاب گشاده و بساط شطرنج چیده،<sup>۸</sup> گاه به کتاب ها  
نگاه کرده، مطالعه<sup>۹</sup> میفرمود<sup>۱۰</sup> و<sup>۱۱</sup> گاه به سوی بازی تأنی میکرد.  
القصة. در آن حین بود که بانوی زمان سازنده ها و رقاصان را در<sup>۱۲</sup> پیش خود طلب  
نمود و<sup>۱۳</sup> در حال شش کنیز پریچهره مع اسباب ساز حاضر شدند و چهار کنیز<sup>۱۴</sup> گل پرهن از  
بهر رقص کردن <۵۹۰پ> سرو<sup>۱۵</sup> قد و<sup>۱۶</sup> بالای خود را به زر و<sup>۱۷</sup> سیم آراسته و سرو<sup>۱۸</sup> روی

- ۱ × [د]
- ۲ حسینی [د]
- ۳ [د]، لیکن [س] [ت]
- ۴ صورت [ت]
- ۵ موافق [ت]
- ۶ سیرتش [ت]
- ۷ دلی [ت]
- ۸ ایستاده بود. گاه [د]
- ۹ مطالعه [ت]
- ۱۰ میکرد [د]
- ۱۱ × [ت]
- ۱۲ به [د]
- ۱۳ × [د]
- ۱۴ کنیزی [ت]
- ۱۵ × [د]
- ۱۶ × [ت]
- ۱۷ × [ت]

میکرد. [اما به تغافل]<sup>۱</sup> فقیر از حرکت‌های<sup>۲</sup> ملیکه در یافت کردم که برادرم چندانی<sup>۳</sup> موافق<sup>۴</sup> طبع ملیکه<sup>۵</sup> نه افتاده است. از بس که برادرم از علم محاوره<sup>۶</sup> بسیار بیخبر بود، [قبل از این مقدمه<sup>۷</sup> صحبت پادشاهان ذوی الاحترام را]<sup>۸</sup> هیچ ندیده بود. +<sup>۹</sup> گفته اند، مشک آن است که خود بو دهد<sup>۱۰</sup>، {۵۹۹پ} نه این که عطار گوید.

بیت<sup>۱۱</sup>

غنچه بادام را گفتم چرایی<sup>۱۲</sup> بی ادب گفت من صحرا نشینم شهر کمتر دیده ام

در آن وقت عمر برادرم به بست دو سال رسیده بود. حسن سفیدی در غایت نزاکت داشت، اما<sup>۱۳</sup> گفته اند.

- 
- |    |   |
|----|---|
| ۱۴ | حال [د]   |
| ۱۵ | هر کدام [د]   |
| ۱۶ | و با [د]  |
| ۱۷ | به تغافل [د]  |
| ۱  | × [د]   |
| ۲  | حرکت [د]  |
| ۳  | چندان [د]   |
| ۴  | موافق [ت]   |
| ۵  | بانوی زمان [د]  |
| ۶  | محاوره [ت]  |
| ۷  | مقدمه [ت]   |
| ۸  | و صحبت پادشاهان ذو الاحترام را قبل از این چند وقت [د] |
| ۹  | چنانچه [ت]  |
| ۱۰ | دندند [ت]   |
| ۱۱ | × [د]   |
| ۱۲ | چرای [د]  |
| ۱۳ | چنانچه [د]  |

عقل از من زایل شد. در آن وقت بود که ملیکه به گوشه چشم<sup>۱</sup> جایی را اشارت کرد که از +  
 ۲ ماهر افندی سه گز پایان بود. فقیر در غایت آداب و تواضع بر<sup>۳</sup> بستر زرین [نشسته، فارغ  
 البال تماشای پریان را]<sup>۲</sup> میکردم.

## [بیت]

چو آن رخسار و بالا باغبان زید ز گل بر کند و تنها<sup>۵</sup> ببرید از صنوبر<sup>۶</sup>

[در آن وقت بود که]<sup>۷</sup> یکی از آن پری چهره ها نزدیکتر<sup>۸</sup> بود، آهسته [به فقیر]<sup>۹</sup> این  
 بیت را خواند.

## بیت

+ ۱۰ گرچه افعی نیستی مایان زمرد پیکریم  
 پر نظر با ما مکن نقصان به چشمت میرسد

[در آن وقت]<sup>۱۱</sup> ملیکه به هر سو نگاه کرده، سخن میکرد. [هر کدام]<sup>۱۲</sup> کنیزان  
 موافق<sup>۱۳</sup> استعداد<sup>۱۴</sup> خود + ۱۵ < ۵۹۰ ر > جواب میدادند. [در آن ضمن به]<sup>۱۶</sup> برادرم نیز + ۱۷ سخن

۱ چون چشم ملکه به فقیر افتاد [د]

۲ برادرم [د]

۳ در بالای [د]

۴ نشستم، مجلس ایشان را تماشا [د]

۵ × [د]

۶ × [د]

۷ × [د]

۸ نزدیک فقیر [د]

۹ × [د]

۱۰ گرچه افعی به لغت ادهم زمرد پیکر است پر نظر خویش مکن نقصان چشمت میرسد [د]

۱۱ در آن وقت [د]

۱۲ و [د]

۱۳ موافق [ت]

[سلام کردم و به رسم ایشان]<sup>۱</sup> >مرحبا< گفتم. + دیدم، [ملیکه مصر را که]<sup>۲</sup> تاج شاهی بر تارکش >۵۸۹پ< کج نهاده و بر تخت زرین مربع نشسته و لباس های مرصع در بر کرده، به غرور حسن و پادشاهی به چندین استغنا +<sup>۳</sup>، دل میبرد و از دو جانب او چهل کنیز ماه روی عنبر بوی<sup>۴</sup> [به زر و سیم غرق گشته، صف زده اند]<sup>۵</sup> و هر کدام ایشان به خراج مملکتی<sup>۶</sup> می ارزید، به حکم آن که [گفته اند]<sup>۷</sup>.

بیت<sup>۱</sup>

دل به یک جا کرد و دیده به صد جا نگران حاصل حسن ترا سوخته گان میدانند

و تمام نقوش آن خانه را +<sup>۱۰</sup> از طلا و نقره در کمال<sup>۱۱</sup> خوبی [بنا فرموده اند]<sup>۱۲</sup> {۵۹۹ر} [به چندین جا مشعلهای]<sup>۱۳</sup> کافوری روشن کرده<sup>۱۴</sup> اند، (۶۵۸) و برادرم ماهر افندی به زیر تخت بانو<sup>۱۵</sup> به کرسی<sup>۱۶</sup> زرین نشسته است. [فقیر این حال را مشاهده نمودم،

۱ به رسم ایشان سلام کرده [د]

۲ چون چشم فقیر به آن خسرو خوبان افتاد، [د]

۳ × [د]

۴ نشسته [د]

۵ بو [ت] [د]

۶ صف کشیده و در میان زر و سیم غرق گشته [د]

۷ اقلیمی [د]

۸ است [ت]

۹ × [د]

۱۰ نیز [د]

۱۱ غایت [د]

۱۲ ساخته اند و [د]

۱۳ تمام آن خانه را از شمع [د]

۱۴ ساخته [د]

۱۵ ملکه [د]

۱۶ کورسی [ت]



یک سنگ [تراشیده باشند و گرد]<sup>۱</sup> آن حوض را + چنان چراغان کرده اند [که عکس شمع تمام آب را گویا شعاع آتش کرده باشد، چنانچه در مثنوی میفرماید].<sup>۲</sup>

### مثنوی<sup>۳</sup>

که در آب افکند گر شمع تمثال      لب حوضش زند صد رنگ تبخال  
{ ۵۹۸ پ } از آتش بیشتر گلزار گلشن      که یک یک را توانی سیر کردن

فقیر آن منزل<sup>۵</sup> بهشت آیین را به آن نزاکت [مشاهده نمودم]<sup>۶</sup>. قریب بود که از هوش روم. اما خود را به تکلف نگاه میداشتم.

القصة<sup>۷</sup>. بعد از فراغ سیر کوشک آن دو کنیز ماه روی فقیر را به در خانه ای که<sup>۸</sup> ملیکه [نشسته بود، رسانید. فقیر]<sup>۹</sup> دیدم که کنیزان سیاه چشم سرو قد بسیار جمع شده<sup>۱۰</sup>، منتظر<sup>۱۱</sup> خدمت نشسته اند. فقیر [را ملیکه در حال در پیش خود طلب نموده]<sup>۱۲</sup>، فقیر از در در آمده،

۱۷ پیوند و به هیچ وجه معلوم نمیشود. زبده کلام این که [د]

۱۸ آن قصر [د]

۱ مرمر باشد. او را اوستادان به مرور ایام و حکم پادشاه عصر ساخته باشند و بالای [د]

۲ از شمع مومی [د]

۳ در درون آب همه به نظر کس آتش مرئی میشود. [د]

۴ ابیات [د]

۵ منزل [ت]

۶ دیده [د]

۷ بالاخر [د]

۸ × [د]

۹ بردند [د]

۱۰ آمده [د]

۱۱ منتظری [ت]

۱۲ نیز به پیش ایشان نشستم. بعد از ساعتی ملک فقیر را به پیش خود خواند. [د]

کنج حوض<sup>۱</sup> چنان تراشیده اند. البته او را هر کس ببند، زنده گمان میکند و آن شیر را فواره {۵۹۸ر} ساخته اند. از دهن هر چهار شیر چهار سنگ<sup>۲</sup> آب در غایت شدت قریب به ده گز بالا سر زده، به حوض میریزد و در میان آن حوض حوض علی حده از سنگ مرمر تراشیده اند. از حوض بزرگ یک قد آدم بلند و صورت سی و دو تمساح یعنی<sup>۳</sup> نهنگ<sup>۴</sup> + از سنگ مرمر ساخته اند و آن تمساحان حوض کوچک را به پشت (۶۵۷) بر داشته اند و از دهن تمساحان نیز فواره آب بر جسته، به حوض بزرگ میریزد و در<sup>۵</sup> میان حوض کوچک نیز <۵۸۹ر> فواره ای بر پا کرده اند، در کمال نازکی<sup>۶</sup>. از<sup>۷</sup> او نیز [آب سر کشیده]<sup>۸</sup>، به حوض کوچک میریزد و دور<sup>۹</sup> حوض را همه به صورتهای مختلف<sup>۱۰</sup> به سنگ مرمر کنده اند و آن حوض در غایت<sup>۱۱</sup> پری. کس<sup>۱۲</sup> نمیداند +<sup>۱۳</sup> که این قدر آب از کجا می آید و به کجا میرود. +<sup>۱۴</sup> بنای آن قصر همه از سنگ مرمر +<sup>۱۵</sup> به هم دیگر پیوند<sup>۱۶</sup> کرده اند که +<sup>۱۷</sup> گویا +<sup>۱۸</sup> از

حوض قریب یک طناب بود. به چهار گوشه حوض از سنگ مرمر [د]

- ۱ × [ت] [د]
- ۲ آسیا [د]
- ۳ که مراد از [د]
- ۴ است [د]
- ۵ از [د]
- ۶ نازوکی [ت]
- ۷ × [د]
- ۸ ده گز بالا پریده [د]
- ۹ دوری [ت]
- ۱۰ مختلیف [ت]، حیوان بحری [د]
- ۱۱ کمال [د]
- ۱۲ و [د]
- ۱۳ کس [د]
- ۱۴ به حکم آن که و [د]
- ۱۵ چنان [ت] [د]
- ۱۶ متصل [د]

فرموده اند که مهمان اول تماشای قصر کنند<sup>۱</sup>. <۵۸۸ر> بعد به خدمت ما آیند. < فقیر انگشت قبول به دیده نهاده، به اتفاق ایشان به سیر قصر چشم گشادم، چنانچه<sup>۲</sup> +<sup>۳</sup>

### مثنوی

عمارات رفیعش طاق بر طاق      فکنده سایه شهرت بر افلاک<sup>۴</sup>  
نسیم مصر باشد گرد راهش      چو آب آید برون یوسف ز خاکش

{۵۹۷پ} قصری بود، در میانه<sup>۵</sup> چهار باغ واقع شده، قریب چهار طناب از زمین دو قد نیزه از سنگ مرمر سفید کار کرده، بر آمده اند و از چهار جانب قصر دری به جانب چهار باغ گشاده، زینه های از سنگ مرمر ساخته اند. به چهار کنج او چهار خانه در غایت بزرگی انداخته اند و دریچه های<sup>۶</sup> از آئینه فرنگی ساخته، رو به جانب چهار باغ گشاده اند. یک خانه تمام آئینه خانه بود و دیگر تمام از سنگ سفید مرمر بود که اسلیمی و مداخل های غیر مکرر بود که<sup>۷</sup> کنده بودند و دیگری از هفت رنگ در غایت نزاکت تصویر تمام ذی روح را کشیده بودند. به دیگر خود ملیکه نشسته بود <۵۸۸پ> و گرد آن منزل را همه ایوان و کیوان های بلند بنا کرده اند. تمام نقش و نقوش او از طلا و لاجورد<sup>۸</sup> به هر جانب او سی و دو ستون<sup>۹</sup> از سنگ مرمر در غایت صافی تراشیده و نقش های زیبا در آن نگاشته گذاشته<sup>۱۰</sup> اند و در میان آن قصر حوضی از سنگ مرمر +<sup>۱۱</sup> یک لخت صورت چهار شیر را [بر چهار

۱ کند [ت]

۲ × [د]

۳ میگوید [ت]

۴ آفاق [د]

۵ میان [د]

۶ دریچه ها [د]

۷ × [د]

۸ لاجورد [د]

۹ ستونی [ت]

۱۰ × [د]

۱۱ ساخته اند. قریب یک طناب بود و به چهار گوشه حوض از سنگ مرمر [ت]، ساخته اند. بزرگی

سایه گرم بر فرق زمین انداخته و<sup>۱</sup> صغیر بلبل به رنگ ارغنون و باده ارغوانی کار کرده،  
فراش صبا از سبزه نارس مطر البساط دلگشا ممهد گردانیده.

### مثنوی<sup>۲</sup>

در دامن هر شکوفه باغی      فروخته گل چو شب چراغی  
<۵۸۷پ> گلهای شکفته جام در دست      برداشته بانگ بلبل مست  
در هر چمنی<sup>۳</sup> به چشم مینا      مینوکده برنگ مینا  
سیرابی سبزه های نو خیز      از لؤلؤ تر ز مرد انگیز

خلص کلام آن که پیره زن مکاره راهبر شده، فقیر را در میان {۵۹۷ر} چهار باغ به  
گوشه ای رسانید. در آن جا کنیزان ماه رو گروه گروه نشسته، به عیش خود مشغول اند،  
چنانچه [گفته اند]<sup>۴</sup>.

### بیت

چشمش به عشوه راه زن افسانه افسون<sup>۵</sup> دیگر  
دل میبرد از عاشقان هر یک به قانون دیگر

آن پیره زن فقیر را در پیش ایشان گذاشته، خود به خدمت ملیکه شتافت. کنیزان فقیر  
را در میان گرفته، سخنها میپرسیدند و گرامی میداشتند. در آن وقت (۶۵۶) بود، دو کنیز  
ماه روی عنبر بوی<sup>۶</sup> در کمال چستی برآمد. گفت، «شما را ملیکه طلب میکند.» فقیر  
سپندوار بر خواسته، به رفاقت کنیزان از زینه قصر بالا شدم<sup>۷</sup> و آن دو کنیز گفت، «بانو

- ۱ × [ت]
- ۲ ابیات [د]
- ۳ چمن [د]
- ۴ گفته است [د]
- ۵ افسونی [د]
- ۶ بو [ت] [د]
- ۷ شدیم [د]

مثنوی<sup>۱</sup>

ز رنگ روشنی خواهی بخواهی      حباب است آب بر انگشت ماهی  
بر آمد شب پی نظاره بیتاب      چو طفلان بر سر دیوار مهتاب

(۶۵۵) و درها جانب رسته ها و خیابانها +<sup>۲</sup> هشت در هشت طرح انداخته اند. بزرگی چهار باغ به تخمینا<sup>۳</sup> صد طناب به نظر می آمد<sup>۴</sup>. همه چهار باغ مانند روز روشن +<sup>۵</sup> نمایان بود. دو<sup>۶</sup> جانب خیابان چنان سرو <۵۸۷ر> بسیار نشانیده اند که گویا همه را به یک قالب ریخته باشند. از هم دیگر نه بزرگ و نه کوچک و در هر سرو یک قندیل بزرگ +<sup>۷</sup> شیشه الماس تراش و خانه شمع را از طلا صورت طوطی ساخته اند و در هر فانوس چندین شمع روشن میشود و زمین خیابان را {۵۹۶پ} از هر الوان سنگ مثل تخم مرغ جمع نموده، به کج و<sup>۸</sup> ماس به صورت درخت بنشانیده اند که به نظر کس چنان مرئی میشود که گویا زمین را به صورت درخت منقش کرده باشند. تو گفتی، قطعه بهشت است. بر روی زمین پیدا شده است<sup>۹</sup> و فواره های<sup>۱۰</sup> چون قد دلبران سر کشیده، آبهای خشگوار<sup>۱۱</sup> مانند آب حیات به هر طرف روان، چمن چمن گلهای لطیف گونه گونه شکفته و چندان +<sup>۱۲</sup> درختان پر بار

- ۱ قطعه [د]
- ۲ را [د]
- ۳ تخمین [د]
- ۴ آید [د]
- ۵ و [د]
- ۶ و [ت]
- ۷ و یک [د]
- ۸ × [ت] [د]
- ۹ × [د]
- ۱۰ فواره ها [د]
- ۱۱ خوشگوار [ت] [د]
- ۱۲ و [ت]

خان مهارتی دارد. بنابراین بانوی زمان ترا طلبیده است. < فقیر هر چند التجا نمودم، به جایی<sup>۱</sup> نرسید. عاقبت گفتم. ><sup>۲</sup>

### مصراع<sup>۳</sup>

یا ز غم سیل آورد یا خون شود یکباره گی

گویان تن به قضا در داده، به گفته پیره زن به صندوق در آمدم. مثل مقدمه اول +<sup>۴</sup>  
 فقیر را نیز < ۵۸۶ پ> در بانان به سر برداشته، متوجه حرم شدند. در میان مجمع پاسبانان<sup>۵</sup>  
 رسیدند، در آن وقت به<sup>۶</sup> بدی فقیر را چنان سرفه<sup>۷</sup> تنگ کرده بود که اگر هزار بار قتل  
 میکردند، سرفه<sup>۸</sup> میکردم. اما لا علاج دندان به دندان { ۵۹۶ ر } مانده، خود را به تکلف نگاه  
 میداشتم. بعد از آن<sup>۹</sup> به جای برده، صندوق را گذاشته، خود مراجعت نمودند. آن پیره زن  
 سر صندوق را وا کرد. فقیر سپندوار از جای برجستم. یقینم شد که روز شده است و<sup>۱۰</sup> اما  
 نیک ملاحظه کردم که چهار باغ را چنان چراغانی کرده اند که البته روشنائی<sup>۱۱</sup> او از شعاع  
 آفتاب جهان تاب چندان درجه روشن تر بود، [چنانچه گفته اند.]<sup>۱۲</sup>

- |    |                   |
|----|-------------------|
| ۱۱ | × [ت] [د]         |
| ۱  | جای [ت] [د]       |
| ۲  | چنانچه [ت]        |
| ۳  | × [د]             |
| ۴  | و [ت]             |
| ۵  | پاسبان [د]        |
| ۶  | رسیده [د]         |
| ۷  | از [د]            |
| ۸  | سلفه [د]          |
| ۹  | سلفه [د]          |
| ۱۰ | لحظه [د]          |
| ۱۱ | × [د]             |
| ۱۲ | روشنای [د]        |
| ۱۳ | چنانچه [ت]، × [د] |

را تماشا کنند<sup>۱</sup>. زود باشید. صندوق را برداشته، به خدمت ملیکه بریم. > آن غلامان عفریت  
منظر انگشت قبول به دیده نهاده، صندوق را برداشته، با همراهی پیره زن و کنیزان متوجه  
حرم شدند. فقیر را تنها گذاشتند + (۶۵۴) و آن عجوزه < ۵۸۶ ر > شوهری داشت، اعمی  
به زبان عربی [به فقیر]<sup>۲</sup> از هر مقوله سخن میکرد و کنیزان پیره زن به پیش فقیر از هر جنس  
اطعمه و اشربه مهیا ساخته { ۵۹۵ پ } بودند<sup>۳</sup>. در کمال گرمی مجلس به آن پیر اعمی نشسته  
بودیم<sup>۴</sup>. ناگاه باز همان عجوزه مکاره با دو کنیز رسید. گفت، > برخیزید که<sup>۵</sup> ملیکه شما را  
میخواهد. < چون [از آن مکاره این سخن]<sup>۶</sup> شنیدم، دست از جان شیرین صد بار شستم.  
گفتم، > ای مادر مهربان، از بهر من گذر و مرا رنجه مده، تا خدا ترا رنجه مدهاد. < گفت،  
> مگر تو دیوانه ای. برخیز. هرزه مگو. <

### مصراع

این ناز به خانه پدر می باید کردن<sup>۷</sup>

و گفت، > ملیکه چند بیت از خواجه حافظ شیرازی و از<sup>۸</sup> گلستان سعدی از ماهر افندی  
پرسید. او عاجز آمد. گفت، من به زبان پارسی وقوف<sup>۹</sup> ندارم. برادرم حاجی محمد<sup>۱۰</sup> حکیم

۱ کند [ت]

۲ شوخی یعنی محزون میفرماید.

بیت

فلک کجرو لیگیدین شکوه گر قیسم تنگ ایرمس کیم

(۶۵۴) هما که استخوان تشلاب چیوین که طعمه قند ایتیمیش [د]

۳ × [د]

۴ بود [د]

۵ بودم که [ت] [د]

۶ × [ت] [د]

۷ این سخن از آن مکاره [د]

۸ کرد [ت] [د]

۹ × [د]

۱۰ وقوفی [ت] [د]

## بیت

چو کار عاشقی بسیار کرده گهی عاشق گهی معشوق بوده

<۵۸۵پ> فقیر نیز غایبانه تعظیم او را <sup>۱</sup> به جای آوردم <sup>۲</sup>. بعد آن مکاره به ماهر افندی گفت، <حالا پاسبانان و دربانان بیدار نشسته اند. شما را {۵۹۵ر} به تدبیر بزم رفتن امکان ندارد.> گفت. ماهر افندی گفت.

مصراع<sup>۳</sup>

علاج ما تو به <sup>۴</sup> میدانی از ما

آن مکاره صندوقی در کمال بزرگی حاضر ساخت. <sup>۵</sup> ماهر افندی را در آن صندوق تکلیف نمود. آن برادر از غایت ترس چون بید میلرزید. رو به فقیر آورد. گفتم.

## مصراع

مرغ زیرک چون به دام افتد تحمل بایش

آن برادر چار ناچار به صندوق در آمد و آن مکاره صندوق را کلید کرد. فقیر را در گوشه خانه مخفی داشت و چند پاسبان <sup>۶</sup> را طلب نمود. گفت، <امروز ملیکه از مال فرنگ چند صندوق گرفته بودند <sup>۷</sup>. من آورده، در آن جا گذاشته بودم. حالا میخواهند <sup>۸</sup> که آن اقمشه

۱ از ترس [ت]

۲ می آوردم [ت]

۳ × [د]

۴ بهتر [د]

۵ و [د]

۶ پاسبانان [د]

۷ بود [ت]

۸ میخواهد [ت]



وی نفرت میکردند. با دو خچر راه وار < ۵۸۵ ر > منتظر ایشان نشسته است. چون ما را دید، { ۵۹۴ پ } خچرهای خود را پیش کشید. فقیر با ماهر افندی به یک خچر سوار شدیم و آن دو زن به یک خچر سوار شده، راه چهار باغ + <sup>۱</sup> را <sup>۲</sup> پیش گرفتم <sup>۳</sup>. از شهر تا چهار باغ یک فرسخ بود. در کمال سرعت (۶۵۳) به یک ساعت رسیدیم. چون چشم فقیر به دیوار چهار باغ افتاد، در کمال رفعت و بلندی، کنگره او سر به ثریا میسوده <sup>۴</sup>.

## [بیت]

خیال بلند نباد که عقل نتوانست      کمند فکر فکندن به گوشه بامش <sup>۵</sup>

در آن جا از مرکوب خود فرود آمده، به خانه پیره زن داخل شدیم و آن پیره زن [با همراهی] <sup>۶</sup> کنیز ما را گذاشته، متوجه حرم شد <sup>۷</sup>. بعد از ساعتی بود که آن پیره زن لباسهای فاخره در بر کرده، مع چهار کنیز عنبر موی آمد. دانستم که آن لباس را بانو بخشیده است و <sup>۸</sup> روی <sup>۹</sup> به ماهر افندی آورده <sup>۱۰</sup>، گفت، < بر خیزید. ملیکه منتظر مقدم جناب شما است. > بعد رو به فقیر آورده و <sup>۱۱</sup> گفت، < ملیکه میگویند، مهمان خوش آمدند و بسیار از شما خرسند <sup>۱۲</sup> شدند <sup>۱۳</sup>. >

- ۱ ملیکه [ت]
- ۲ × [د]
- ۳ گرفتیم [ت] [د]
- ۴ میسود [ت] [د]
- ۵ × [ت] [د]
- ۶ مع [د]
- ۷ شدند [د]
- ۸ × [د]
- ۹ رو [د]
- ۱۰ آورد [ت]
- ۱۱ × [ت] [د]
- ۱۲ خورسند [ت]
- ۱۳ شد [ت]

> اگر میخواهید مرا به خدمت ملیکه برید، تا به در قصر این کس را همراه برید و باز بیارید و الا رفتن من امکان ندارد. <<sup>۱</sup> و این بیت را خواند،

### بیت

بگفتا اندر این گرداب تذویر مرا بگذار و دست +<sup>۲</sup> یار من گیر

{۵۹۴} > ۵۸۴ پ < ذکر<sup>۳</sup> رفتن فقیر به تماشای جشن ملیکه مصر به رفاقت برادرم ماهر

### افندی

چون آن زن مکاره از آن برادر این سخن را شنید، گفت، > ای فرزند، در بیرون چهار باغ ملیکه خانه ای دارم، در کمال خوبی و نزاکت و<sup>۴</sup> در آن جا اگر پشه ای پرزند، بالش میسوزد و<sup>۵</sup> خاطر خود را جمع دار که احدی از این مقدمه واقف نگردد. چه میشود که<sup>۶</sup> از خاطر برادر و هم از<sup>۷</sup> خرسندی ملیکه عالم قدم رنجه فرمایی<sup>۸</sup>. از راه یک رنگی دور نخواهد بود. < گفته، بسیار مبالغه نمود و آن برادر ساده لوح<sup>۹</sup> نیز سعی بلیغ میکرد. +<sup>۱۰</sup> هر چند تضرع نموده، التجا کردم، مفید نه افتاد. عاقبت گردن خار خار سر رضا جنبانیده، به اتفاق ایشان از قصر بیرون برآمده، [پیاده خوش خوش]<sup>۱۱</sup> در میان شهر راه میرفتیم. در آن وقت از شام سه ساعت گذشته بود. بعد از ساعتی از دروازه شام شریف بیرون شده، بر لب خندق رسیدیم. در آن جا دیدیم که یک غلام حبشی لب زیرین او تا به ناف رسیده و مالکان دوزخ صد بار از

۱ که [د]

۲ دست [ت]

۳ × [د]

۴ × [د]

۵ × [د]

۶ × [د]

۷ × [د]

۸ فرمای [د]

۹ × [ت]

۱۰ فقیر [ت][د]

۱۱ خوش خوش پیاده [د]

را بر مزرع دل تو میکاری. این نه < ۵۸۴ ر > هما است که به دام تو افتد { ۵۹۳ پ } و این نه آن گل است که به چمن تو شکفته شود، به حکم آن که

### مصراع

همای اوج سعادت به دام ما افتد

چون فقیر سخن را به اتمام رسانیدم، آن عجزه کیاد و آن کنیز ماه پیکر از جواب فقیر چنان خرسند شد<sup>۱</sup> که از شادی به پراهن نمیگنجید<sup>۲</sup> و آن برادر ساده لوح حرف مصلحت آمیز فقیر را ندانسته، بلا توقف انگشت قبول به دیده نهاد و گفت، > به سر میروم. مگر به این شرط که تو با من رفیق باشی. < فقیر (۶۵۲) گفتم. > برادرا، مگر به دماغ تو علت ماخولیا پدید آمده که این نوع سخنهای بیهوده میگویی. < گفته<sup>۳</sup>، این مصراع<sup>۴</sup> را خواندم، [چنانچه گفته اند. <sup>۵</sup>]

### مصراع

فکر زاهد دیگر<sup>۶</sup> و سودای عاشق دیگر<sup>۷</sup> است

در کمال غضب از جای بر جستم. خواستم که بیرون روم. آن برادر سپندوار از جای بر خواست و<sup>۸</sup> از دستم بگرفت و به جایم نشانید و<sup>۹</sup> روی به آن دو قاصد آورد. +<sup>۱۰</sup> گفت،

- ۱ شدند [د]
- ۲ نمیگنجیدند [د]
- ۳ گفتم و [ت]
- ۴ بیت [س][ت]، مصراع [د]
- ۵ به حکم آن که [د]
- ۶ دگر [ت]
- ۷ × [د]
- ۸ دگر [ت]
- ۹ × [د]
- ۱۰ × [د]
- ۱۱ و [د]

نهایت عشق نه مرغی است که به هر دام گرفتار آید و تعلق نه سیلابی است که سد هر چه<sup>۱</sup>  
مانع جریانش گردید.

## بیت

خاموش<sup>۲</sup> نشین که هیچ به جایی<sup>۳</sup> نمیرسد  
{۵۹۳ر} سعی که در نصیحت مجنون کند کسی

<۵۸۳پ> و اگر از قتل پدرم محمد علی پادشاه ترسد، +<sup>۴</sup> مرا گذارد، از پدرم پیشتر  
آن قدر ناشناس را به چندین خاری به قتل خواهم رسانید و این هرزه گوی ها سد راه عشقم  
نمیشود. گفته، امشب منتظر قدم شما نشسته اند. اگر هر آینه امشب قدم رنجه نفرمایید،  
وای بر حال شما. > چون این سخن از آن مکاره شنیدیم، هر دوی ما در گرداب تحیر غوطه  
زدن گرفتیم. یقین دانستیم<sup>۵</sup> که نخل این خیال در تن و رگ آن پری چهره چنان جای گرفته  
است که امکان ندارد که به هیچ تدبیری خلاص یابد. آن برادر رو به فقیر آورده، +<sup>۶</sup> گفت،  
<چه میفرمایی<sup>۷</sup>.> فقیر از غایت ترس و کمال هراس گفتم، <صلاح وقت و تقاضای حال آن  
است که با ملیکه جهان خوش بر آیی<sup>۸</sup> و سُراغ او را زهی سعادت دانی و این همای اوج  
سعادت را به دام آری و این ماه برج نیکویی<sup>۹</sup> را به دست در<sup>۱۰</sup> آری. از بس که اختر با ماه  
زینت<sup>۱۱</sup> است و سبزه با گل مطرا و لیک این دیگ تمنا است که تو می پزی و این دانه هوس

۱ جر تواند [د]

۲ خامش [د]

۳ جای [ت] [د]

۴ و [د]

۵ دانستم [د]

۶ و [د]

۷ میفرمای [ت]

۸ آی [ت] [د]

۹ نیکوی [د]

۱۰ × [ت]

۱۱ زیننده [د]

[اکل و شرب]<sup>۱</sup> باز به سر همان سخن آمد و<sup>۲</sup> گفت، <برادرا، {۵۹۲پ} مرا آن ملیکه<sup>۳</sup> بسیار به تنگ آورده است. در میان دو روز هفت مراتب کس فرستاده است و حالا باز قاصد <۵۸۳ر> خواهد آمد. <+<sup>۴</sup> هنوز سخن را تمام نکرده بود که ناگاه از در پیره زنی سلام کرده، در آمد که با شمس<sup>۵</sup> جادو سالها به یک جا در جلوه نموده، عجزه دهر [از او]<sup>۶</sup> طریق نیرنگ آموختی و مع<sup>۷</sup> یک کنیز ماه روی سنبل موی نیز رفیق آن مکاره بود. به هم نشستند. بعد از ساعتی رو به ماهر افندی آورده، گفت و<sup>۸</sup> پرسید که <این کس کیست و از کجا است. > آن برادر جانی گفت، <برادر من است و هیچ راز من از<sup>۹</sup> این کس مخفی نیست> و این مصراع<sup>۱۰</sup> بر<sup>۱۱</sup> خواند.

### مصراع

راز من مخفی نباشد پیش این غم خوار خود

چون آن کیاد این سخن از آن برادر شنید، خاطر خود را از فقیر جمع ساخته، به برادرم سخن آغاز کرد و گفت، (۶۵۱) <هر پیامی که به خدمت بانوی مصر عرض کردید، بالتفصیل عرض کردیم. در جواب میگویند که عقل و ذکای<sup>۱۲\*</sup> او به درجه کمال است و<sup>۱۳</sup>

۱ ماکول و مشروب [د]

۲ × [د]

۳ پری زاد [ت][د]

۴ گفت [ت][د]

۵ شمه [د]

۶ × [د]

۷ × [د]

۸ فقیر را [د]

۹ در پیش [د]

۱۰ مصرع [د]

۱۱ را [د]

۱۲ زکای [س][ت][د]

۱۳ × [د]

شهر به قصر خود مراجعت میفرمود. در اثنای راه به من دوچار آمد و تیر عشق مرا خورد و من از این حادثه بی خبر بودم. همان روز باز قاصدان مکاره را پی در پی مع چیزهای گران بها فرستاده، مرا از وصل خود امیدوار میگرداند و من از ترس خود سخن او را قبول (۶۵۰) نمیفرمودم و حالا سعی و کوشش او از حد اعتدال گذشته است. نمیدانم چه چاره سازم. < چنانچه گفته اند. ><sup>۱</sup>

## بیت

{۵۹۲ر} هر شبی گویم که فردا ترک این سودا کنم  
تازه میسازد هوایش هر سحر گاهم دیگر<sup>۲</sup>

<۵۸۲پ> فقیر این سخن را از آن برادر شنیدم. در اندیشه دراز فرو رفتم. بعد از ساعتی گفتم، <ای یار جانی، این چه سودای خام بود که بر دماغ تو جای گرفته و<sup>۳</sup> از این فکر در گذر و هرزه مگوی، مگر نشنیده ای که بزرگان گفته اند، در خانه<sup>۴</sup> کسی اگر نمک خوری، نمکدان مشکن. البته این فکر بر دل راه مده که بر تمامی<sup>۵</sup> عالم رسوا خواهی شد. > چنانچه<sup>۶</sup>

## بیت

من آنچه شرط نصیحت بود به جا آرم اگر قبول کنی و نه آن تو میدانی

آن برادر از فقیر این جواب شنید. انگشت قبول به دیده نهاد و به جانب قصر خود خرامید. بعد از دو روز آن برادر غلام بچه ای داشت، در نهایت خوبی، به نزد فقیر آمد. گفت، <ماهر افندی مولای من منتظر مقدم شما است. > فقیر بلا توقف متوجه شهر شدم. چون به قصر او رسیدم، آن برادر استقبال نمود. به اتفاق او به خانه داخل شدم. بعد از فراغ

۱ × [ت] [د]

۲ دگر [د]

۳ × [د]

۴ خان [د]

۵ تمام [د]

۶ × [د]

خود که به دفتردار افندی اشتهار دارد، در غایت بد رویی<sup>۱</sup> و در کمال بد شکلی، در سلک ازدواج آن دیو سیرت عفریت منظر کشیدند و آن پری چهره چون سپند در [مجمر آتش]<sup>۲</sup> میگذارد و میگوید، [چنانچه گفته اند].<sup>۳</sup>

### قطعه

کس نیـــــــــــــــــاید به پای دیواری  
 که بر آن صورتش نگار کنند  
 {۵۹۱پ} گر او را در بهشت باشد جای  
 دیگران<sup>۴</sup> دوزخ اختیار کنند

عاقبت در میان ایشان الفت<sup>۵</sup> نمی پذیرفت و خود را در کنار<sup>۶</sup> <۵۸۲ر> میکشید و حالا بر لب دریای نیل محمد علی پادشاه چهار باغی ساخته است، در نهایت خوبی و زیبایی<sup>۷</sup> و بر تمام ربع مسکون نظیر و عدیل ندارد و اوستادان چابک دست +<sup>۸</sup> به هفت سال [بی تعطیل کار کرده]<sup>۹</sup>، به اتمام رسانیده اند. +<sup>۱۰</sup> دیوانیان خرج او را در قید کتابت آورده اند. سیصد<sup>۱۱</sup> هزار طلا خرج او شده بود و حالا آن پری رو با چهار صد کنیز ماه روی عنبر موی<sup>۱۲</sup> به آن منزل بهشت آیین به عیش و عشرت مشغول میباشد. از قضا روزی با چندین تجمل از

۱ روی [ت] [د]

۲ آتش مجمر [د]

۳ چنانچه [ت]، × [د]

۴ دیگر [د]

۵ الفتی [ت]

۶ کناره [د]

۷ زیبای [ت] [د]

۸ او را [د]

۹ × [د]

۱۰ و [ت] [د]

۱۱ سه صد [ت]

۱۲ مو [د]

چون با هم دیگر اختلاط می‌کردیم و<sup>۱</sup> اما از جبین او آثار<sup>۲</sup> مغمومی هویدا بود. بالاخر پرسیدم. <ای<sup>۳</sup> یار جانی، ترا در غایت پریشان حالی مشاهده می‌کنم، سبب چیست. > بلا توقف گفت.

شعر<sup>۴</sup>

{۵۹۱ر} (۶۴۹) چه زیبا گفته است آن مرد هوشیار<sup>۵</sup>

اگر ســـــر بایدت ســـــر را نگه دار

> برادرا، چند روز میشود که به درد بیدوا گرفتار شده ام. هر چند سر به جیب تفکر فرو برده، خیال می‌کنم، فکرم به جایی<sup>۶</sup> نمیرسد و به هیچ تدبیر <۵۸۱پ> علاج آن<sup>۷</sup> را نیافتم. لا علاج به خدمت شما از بهر این مصلحت آمده ام. چه می‌فرمایید. < فقیر گفتم. +<sup>۸</sup>

مصراع<sup>۹</sup>

هر چه مراد تو بود هست مراد من همان

گفت، > محمد علی پادشاه افندیم دختری دارد، حورلقا خانیم نام. آفتاب دیدار طره تابدار مشکبو بر عارض گلرنگ فروهشته و کلاه دلبری و تاج شاهی بر تارک حال کج نهاده و عنبرین طاق ابرو چون پیشانی نیک بختان گشاده و آن پری شمایل را یکی از خویشاوندان

۱ × [د]

۲ آثاری [ت]

۳ از [ت]

۴ نظم [د]

۵ هشیار [د]

۶ جای [ت] [د]

۷ او [د]

۸ بفرما [د]

۹ ع [د]



خط<sup>۱</sup> + مشغول بودم. چون چندی برین بگذشت، < ۵۸۱ ر > اما اراده<sup>۲</sup> + ما وراء النهر به خاطر بود. نمیدانستم که به چه تدبیر از آن پری خانه دل کنده، بیرون میشوم، [به حکم آن که]<sup>۳</sup>

### بیت<sup>۴</sup>

چند روزی بر دری<sup>۵</sup> یاران اقامت آرزو است  
ای اجل سرعت مکن ولی عمر مستعجل مباش

ذکر واقف گشتن فقیر از عشق برادر ماهر افندی به ملیکه مصر

روزی در کمال مغمومی تنها در منزل خود [به چندین غم]<sup>۶</sup> نشسته بودم، + [چنانچه گفته اند،]<sup>۸</sup>

### بیت

دست طلب از دامن صحبت مگسل      تنها منشین که بیم دیوانه گی است

ناگاه<sup>۹</sup> آن سرو خرامان یعنی ماهر افندی در رسید. گفتم.

### بیت

گر نه مهمانی قدم در کلبه<sup>۱۰</sup> ما می نهی      لطف میفرمایی و بر چشم ما پا می نهی

۱ ثلث [د]

۲ جانب [د]

۳ × [د]

۴ × [ت] [د]

۵ در [د]

۶ × [ت]

۷ که به ناگاه [ت]

۸ که [د]

۹ × [ت]

که در حق آن نابکار پیش کرده بودم، بیان واقع بوده است. به خاطر فقیر این بیت رسید که [گفته اند].<sup>۱</sup>

{۵۹۰} بیت

اکنون دو صد فرشته نکو گویدت چه سود

در شهرها حکایت بد نامی تو رفت

چون ایشان فقیر را [به این]<sup>۲</sup> حال مشاهده نمودند، انگشت حیرت به دندان (۶۴۸) گزیده، گفتند. <سبب چیست که در سخن اول اظهار بشاشت کردید. +<sup>۳</sup> در سخن ثانی اظهار غم خواری میکنید. مگر شما مردم آن ولایت اید > {۵۸۰پ} و یا بر سیل سیاحت به آن اقلیم رسیدید. <فقیر گفتم، > آن دیار را ندیده ام و نه شنیده ام. اما از آن جا که شنیدم +<sup>۴</sup> خواجه عالی نسب سد ثغور گشته، به اهل کفره جهاد میکند، از روی دین خرسند شدم و آن را شنیدم که حاکم ولایت اهل اسلام به مادر خود نزدیکی میکند. به این سخن نیز از روی دین اظهار خفه گی میکنم. > چون ایشان از فقیر این جواب را شنیدند، قبول فرمودند و از فقیر پرسیدند که <حکیم خان را میدانید و حالا در کجا است<sup>۵</sup>. > فقیر گفتم، <آری. خوب میدانم. یک تن و یک جان ایم. اما او حالا اراده سفر فرنگستان دارد. > چون این سخن از فقیر شنیدند، اظهار خفه گی کرده، گفتند که <مایان به آرزوی دیدن او بودیم. از بس که بزرگ زاده ولایت ما است. > {۵۹۰پ} فقیر گفتم، <غم مخورید. عنقریب خواهید دید. > بعد از صحبت بسیار از پیش ایشان بر خواستم. متوجه قصر عین شدم. چون به [آن جا]<sup>۶</sup> رسیدم، هوای غزای ولایت کاشغر به سر افتاد. سفر فرنگستان را از دل محو ساختم. به مشق

۱ × [د]

۲ بدان [د]

۳ و [ت][د]

۴ که [د]

۵ اند [د]

۶ منزل خود [د]

آنها فقیر را به آن لباس دیدند و زبان فقیر را غیر زبان خود دانستند. یقین ایشان شد که فقیر از مردم روم ام. +<sup>۱</sup> از ایشان پرسیدم که < شما { ۵۸۹ پ } مردم کجا اید. > گفتند، < ما مردم از اقلیم توران ایم > و از شهر فرغانه و<sup>۲</sup> از [ احوال ولایت ]<sup>۳</sup> پرسیدم. گفتند، < سیادت و نجابت پناه جهانگیر خواجه +<sup>۴</sup> از ولایت خوقند که پای تخت ممالک ما است، خروج کرده، تمام ولایت هفت شهر کاشغر را در تحت تصرف خود در آورده، به فرمان روایی<sup>۵</sup> مشغول میباشد. > چون این خبر را شنیده<sup>۶</sup>، بی اختیار اظهار بشاشت کردم و<sup>۷</sup> گفتم، < حالا > ۵۸۰ < میر شما مردم کیست و چه نام دارد. > گفتند. < از احوال میر ما نپرسید. > باز سوال کردم. آنها نیز<sup>۸</sup> همان جواب را<sup>۹</sup> دادند. فقیر تا رفته، مبالغه نمودم. گفت<sup>۱۰</sup>. < محمد علی خان کافر<sup>۱۱</sup>. > چون این سخن را شنیده<sup>۱۲</sup>، باز التجا کردم، +<sup>۱۳</sup> < سبب چیست که حاکم خود را کافر میگویند. به چه دلیل. > ایشان باز مخفی داشتند. +<sup>۱۴</sup> به حال ایشان نگذاشتم. باز سوال کردم. دیدند که نمیشود. لا علاج گفتند. < به مادر خود بازی میکند. چه اش را میپرسید. > چون این سخن از ایشان شنیدم، در بحر تفکر فرو رفتم. یقینم شد که گمانهایی

۱۵ ایشان [د]

۱ فقیر [د]

۲ × [د]

۳ ولایت احوال [د]

۴ مخذوم اعظمی [د]

۵ روای [د]

۶ شنیدم [د]

۷ × [د]

۸ باز [د]

۹ × [د]

۱۰ گفتند [د]

۱۱ غازی [د]

۱۲ شنیدم [د]

۱۳ که [د]

۱۴ فقیر [د]

پیش پادشاه مرخص شده، به منزل خود {۵۸۹ر} مراجعت فرمودم. به کار خود پرداختم. چون چندی برین بگذشت، روزی از محمد علی پادشاه حکم آمد که پسر وزارت پناهی +<sup>۱</sup> مهرداد افندی با چهل غلام<sup>۲</sup> با فضل از برای علوم غربیه<sup>۳</sup> تحصیل کردن [به فرنگستان روند، مثل علم هندسه و دیگر علمها]<sup>۴</sup>. بعد از هفت سال مراجعت نمایند<sup>۵</sup>. چون این خبر را شنیدند، +<sup>۶</sup> به سر رشته کار خود شدند. آرزوی این سودا به سر فقیر نیز افتاد و آماده سفر فرنگستان شدم. +<sup>۷</sup> وزارت پناهی حبیب افندی نیز قبول فرمود.

<۵۷۹پ> ذکر (۶۴۷) پرسیدن فقیر احوال ممالک فرعانه را از دو قلندر بچه در موضع

### کازه زلیخا

وقتی<sup>۸</sup> بود که فقیر +<sup>۹</sup> گذارم در بازار مصر افتاد و<sup>۱۰</sup> بعد از سیر بسیار به بازار نبات رسیدم که<sup>۱۱</sup> کمتر جای خالی بود که آن جا زلیخا به راه یوسف علیه السلام از نی کازه ای ساخته بود. آن جای کازه است که حالا خالی گذاشته اند و در آن جا دو مرد<sup>۱۲</sup> از +<sup>۱۳</sup> ما وراء النهر با یک دیگر گفت گو داشتند. +<sup>۱۴</sup> ایشان را دیدم. سلام کرده، به پیش آنها<sup>۱۵</sup> نشستم و

۱ ؟ (ناخوانا) افندی [ت]

۲ غلامان [د]

۳ غربیه [د]

۴ مثل علم هندسه و دیگر علم به فرنگستان روند و [د]

۵ فرمایند [د]

۶ ایشان [د]

۷ و [ت][د]

۸ در آن وقت [د]

۹ روزی [د]

۱۰ × [د]

۱۱ × [ت]

۱۲ قلندر [د]

۱۳ مردم [د]

۱۴ فقیر [د]

نموده، در کنار گرفت و<sup>۱</sup> به پیش خود {۵۸۸پ} نشانید و احوال پرسید و در غایت مرحمت به سویم نگاه کرد. در آن وقت فقیر +<sup>۲</sup> به زبان عربی و ترکی رومی مهارتی پیدا کرده بودم<sup>۳</sup>. فقیر نیز آداب پادشاهی او را به جای آورده، موافق بزرگی او سخن کردم<sup>۴</sup> و از هر مقوله سخن در میان می افتاد و حل میکردیم. چنان مجلس گرم شده بود<sup>۵</sup> که مدت صحبت ما به چهار<sup>۶</sup> ساعت نجومی کشید. بالاخر گفت، > حاجی محمد حکیم خان از تو التجا دارم که در همین ولایت سکونت اختیار کنی<sup>۷</sup> و از هر [وجه خصوص از هر]<sup>۸</sup> وجه دنیوی ترا ممنون سازم و حالا به رفاقت < ۵۷۹ر > ما به اسکندریه تشریف فرما. < +<sup>۹</sup> گفتم، > [حالا فقیر]<sup>۱۰</sup> در قصر عین به مشق خط ثلث اشتغال دارم. در سهل روز به اتمام میرسانم. اگر شفقت فرمایند، بعد به خدمت باشم. < مدعای فقیر از آن پریزاد خانه بیرون شدن نبود. پادشاه سخن فقیر را قبول فرمود، به حکم آن که [گفته اند.]<sup>۱۱</sup>

## بیت

گردن کشی به سر و سرافراز میرسد      آزاده را به عالمیان ناز میرسد

در حال وظیفه تعیین نمود و سیصد<sup>۱۲</sup> عدلیه انعام فرمود<sup>۱۳</sup>. رخصت اجازت داد. فقیر از

- ۱ × [ت] [د]
- ۲ نیز [د]
- ۳ بود [د]
- ۴ میکردم [د]
- ۵ بوده [ت]
- ۶ چار [ت]
- ۷ کن [ت] [د]
- ۸ [ت]، [د]، [س]، × [د]
- ۹ فقیر انگشت قبول به دیده نهادم. [د]
- ۱۰ فقیر حالا [د]
- ۱۱ × [د]
- ۱۲ سه صد [ت]
- ۱۳ کرد و [د]

باشد و در پیش گاه<sup>۱</sup> آن قصر خانه<sup>۲</sup> است، در نهایت بزرگی و سقف خانه را از طلا ساخته اند. در کمال شفافی و سه {۵۸۸} جانب او را چنان منقش کرده اند که در عمرش نه مانو<sup>۳</sup> دیده است و نه بهزاد شنیده است و یک جانب دیوار او را از سنگ مرمر ساخته اند و صورت درخت را در<sup>۴</sup> + سنگ کنده اند. به جای گل کاسه های از سنگ مرمر بر آورده اند و در میان<sup>۵</sup> + کاسه ها آبها<sup>۶</sup> جاری<sup>۷</sup> + میکرد و یک قطره بر زمین نمی افتاد و در میان خانه حوضی ساخته اند و در میان حوض فواره ای بنا کرده اند که چون قد دلبران آب سر میکشید<sup>۹</sup> و آب حوض [کم نمیشود]<sup>۱۰</sup> و نه زیاد و سنگ های مرمر را به یک دیگر چنان <۵۷۸> پیوند کرده اند که گویا از یک سنگ تراشیده، سوهان<sup>۱۱</sup> کرده باشند و استادان<sup>۱۲</sup> چابک دست به آن قصر چنان صنعتی<sup>۱۳</sup> کار فرموده اند که البته هیچ ساحری نکرده است (۶۴۶) و نشنیده است. چون آن قصر را مشاهده نمودم، انگشت تحیر به دندان گزیدم و در بحر تفکر فرو رفتم. در آن وقت برادرم ماهر افندی آمد. به فقیر اختلاط میکرد. ناگاه محمد علی پادشاه از حرم بیرون خرامید. چون چشم او به فقیر افتاد، به پیش خود طلب

۱۴ × [د]

۱ گاهی [ت]

۲ خانه ای [د]

۳ مانی [د]

۴ آن [د]

۵ آن [ت] [د]

۶ آبهای [د]

۷ حار [ت]

۸ باز [د]

۹ میکشیده [ت]

۱۰ قطره ای کم نمی شود [ت]، نه کم میشود [د]

۱۱ سوهن [ت] [د]

۱۲ استادان [ت]

۱۳ صنعتی [د]

### ذکر<sup>۱</sup> صحبت داشتن فقیر به محمد علی پادشاه به مصر قاهره

وقتی<sup>۲</sup> که محمد علی پادشاه از اسکندریه تشریف آورد و احوال فقیر را از وزارت پناهی حبیب<sup>۳</sup> افندی و کاشف افندی شنیده، فقیر را به پیش خود طلب نمود. فقیر (۶۴۵) در آن وقت در قصر عین بودم که دو محرم پادشاه رسید و گفت، <پادشاه افندی خدمت شما را طلب میکند.> فقیر بلا توقف متوجه قلعه<sup>۴</sup> {۵۸۷پ} پادشاهی شدم. چون نزدیک قلعه رسیدم، آن قلعه ای بود، در میانه<sup>۵</sup> شهر و در غایت ارتفاع و همه از سنگ تراشیده اند و او از بناهای یوسف صلاح<sup>۶</sup> الدین است که بعد از یوسف علیه السلام چندین سال در مصر پادشاهی کرد. چون داخل آن قلعه شدم، مثل کوه بود، بالا میرفتم. به جایی<sup>۷</sup> رسیدم که چاهی از سنگ و مزدوران<sup>۸</sup> کار میکردند. دانستم که آن چاه<sup>۹</sup> است که<sup>۱۰</sup> زلیخا یوسف علیه السلام را به تهمت انداخته بود و از آن جا گذشتم. تمام عمارت های عالی بود. چون به قصر محمد علی پادشاه <۵۷۸ر> رسیدم، میدانی در غایت وسعت و دور او همه از سنگ مرمر قصرهای عالی بنا کرده اند و به هر کدامی<sup>۱۱</sup> او ندیمان و عملداران نشسته اند. چون داخل قصر شدم، یک جانب او چهار باغ<sup>۱۲</sup> عالی و از هر<sup>۱۳</sup> + اشجار در آن جا موجود. یک جانب او شهر. همه دریچه ها<sup>۱۴</sup> از<sup>۱۵</sup> آئینه فرنگی از جانب ولایت گشاده اند. گویا همه شهر در زیر آن کوشک

۱ × [ت] [د]

۲ در آن وقت بود [د]

۳ حیت [د]

۴ میان [د]

۵ سلاح [د]

۶ جای [ت] [د]

۷ مزدوران [ت]

۸ چاهی [د]

۹ × [د]

۱۰ کدام [د]

۱۱ باغی [ت]

۱۲ جنس [ت]

۱۳ دریچه های [د]

در کنار کشیدیم و حالش را مشاهده نمودم که {۵۸۷ر} + <sup>۱</sup> مرتبه اش <sup>۲</sup> بالا رسیده <sup>۳</sup> و به اوج ارادت [متمکن شده] <sup>۴</sup> و مقرب پادشاه و معتمد علیه گشته، بر نیکویی <sup>۵</sup> احوالش شادمانی کردم و گفتم.

قطعه<sup>۶</sup>

ز کار بسته میندیش دل شکسته مدار که آب چشمه حیوان درون تاریکی است

+<sup>۷</sup>

منشین ترش از گردش ایام که صبر تلخ است و لیکن <sup>۸</sup> بر شیرین دارد

چون چندی برین منوال بگذشت، فقیر روزی به قصر عین رفته، اختیار سکونت آن پریزاد خانه <sup>۹</sup> نمودم و در مشق خط ثلث پرداختم و آن برادر جانی ماهر افندی گاه فقیر را به قصر خود میبرد و غم و <sup>۱۰</sup> شاد <۵۷۷پ> میگفت و گاه به منزل فقیر تشریف می آورد. بدین منوال عمر به سر می بردیم.

- 
- |    |                   |
|----|-------------------|
| ۱  | به [د]            |
| ۲  | مرتبه [د]         |
| ۳  | متمکن شده [د]     |
| ۴  | رسیده [د]         |
| ۵  | نیکوی [د]         |
| ۶  | بیت [د]           |
| ۷  | بیت [د]           |
| ۸  | [د]، لیکن [س] [ت] |
| ۹  | را [د]            |
| ۱۰ | [ت]               |



ساکن<sup>۱</sup> میشدیم، چه نوعی که از دریاهاى بزرگ محنت و مشقت کشیدیم، از این دریای مبارک تلافی<sup>۲</sup> او را یک به صد میدیدیم<sup>۳</sup> و هر روز از غذاهایی<sup>۴</sup> که تناول میکردیم. یکی از آنها<sup>۵</sup> نی شکر بود<sup>۶</sup>، یک ماه بدین < ۵۷۷ ر > ترتیب راه<sup>۷</sup> [می پیمودیم]<sup>۸</sup>. بعد در ولایت مصر قاهره وارد گردیدیم<sup>۹</sup>.

### ذکر<sup>۱</sup> استقامت کردن فقیر + <sup>۱۰</sup> در + <sup>۱۱</sup> مصر قاهره

بعد از آن از آمدن فقیر [برادرانی که بودند، آگاه گشته]<sup>۱۲</sup>، جمع آمدند و + <sup>۱۳</sup> برادرم کاشف افندی [او نیز]<sup>۱۴</sup> رسید و مجلسی برپا ساخته<sup>۱۵</sup>، + <sup>۱۶</sup> غم و <sup>۱۷</sup> شادی<sup>۱۸</sup> می گفتیم. در آن حین بود که برادرم ماهر افندی شنیده، بلا توقف در آن صحبت حاضر شد، یک دیگر را

- 
- |    |  |
|----|--|
| ۱  | ساکن [ت]   |
| ۲  | مصرع   |
|    | تلخی بادام را شکر تلافی میکند [د]                                    |
| ۳  | اغذیه [د]  |
| ۴  | آن جمله [د]  |
| ۵  | می بود [د]   |
| ۶  | راهی [د]   |
| ۷  | پیموده [د]   |
| ۸  | گردیدم [د]   |
| ۹  | × [ت] [د]  |
| ۱۰ | یک سال [د]   |
| ۱۱ | ولایت [د]  |
| ۱۲ | آگاه گشته، برادرانی که بودند، [ت]، واقف گشته، برادرانی که بودند، [د] |
| ۱۳ | نیز [د]  |
| ۱۴ | × [ت] [د]  |
| ۱۵ | ساختیم و [د]   |
| ۱۶ | و [ت]  |
| ۱۷ | × [ت]  |
| ۱۸ | شاد [د]  |

## مصراع

ای خدا هر جا بری من بعد بی کاهش بو بر

در آن وقت بود که از بهر تحفه به خدمت محمد علی پادشاه از ولایت حبشه ظرافه در کمال بزرگی رسید و او را در پارسی اشتر گاو\*<sup>۱</sup> پلنگ مینامند. در میان حیوانات عجبتین و خوبترین حیوانات<sup>۲</sup> است <۵۷۶پ> و صورت بی نظیری دارد. دو دست او دراز و دو پای او کوتاه و گردن در غایت درازی و بیاض کردن او در هیچ حیوانات نمیباشد و<sup>۳</sup> نهایت خوبی و چشمی دارد، از چشم آهو به چندین درجه خوش چشم تر و دُم<sup>۴</sup> او مثل دُم<sup>۵</sup> گاو، به جای شاخ او<sup>۶</sup> دو تاج<sup>۷</sup> خوب دارد، گویا از ابریشم سیاه در غایت نازکی ساخته، اما خیلقی<sup>۸</sup> است +<sup>۹</sup> و پوست او یک کف دست رنگ {۵۸۶پ} گل انار و یک کف دست سفید نقاش ازل چنان به قدرت کامله خود [چنان نقش]<sup>۱۰</sup> کرده است که آن نقش نه کم و نه زیاد<sup>۱۱</sup> و آن حیوان الا شیر (۶۴۴) چیزی نمیخورد. او را به مصر بردند. فقیر بعد از چند روز به کشتی در آمده، متوجه مقصد شدم<sup>۱۲</sup>. روزی<sup>۱۳</sup> در میان نیل مبارک راه طی میکردیم. شب سکونت اختیار میکردیم و دو لب دریای نیل همه معمور و شهرهای عالی به کجایی که دل خواهد، در آن جا

۱ [د]، گو [س] [ت]

۲ حیوانی [د]

۳ در [د]

۴ دوم [ت]

۵ دوم [ت]

۶ × [ت] [د]

۷ تاجی [د]

۸ خلقی [د]

۹ نه عارضی [د]

۱۰ صنعتی [د]

۱۱ زیاده [د]

۱۲ [ت] [د]، شدیم [س]

۱۳ روز [د]

زبان عربی سخنهای فحش [میگفت و نازیبا میداد].<sup>۱</sup> فقیر در آن وقت خود را در بالای اشتر گرفته، متوجه راه شدم. قدری راه طی کرده بودم که سواد آبادی نمایان شد. بعد از ساعتی به کنار نیل مبارک وارد گردیدیم.<sup>۲</sup> از جهة تشنه بودن به یک دم از آن < ۵۷۶ ر > آب خوشگوار هفت کاسه چینی لاجرعه بر کشیدم<sup>۳</sup> و<sup>۴</sup> اما از خود رفتم. بعد از ساعتی به خود باز آمدم. شکر [ایزد تعالی]<sup>۵</sup> را میکرדם که از آن بیابان بی پایان به ساحل نجات رسیدم و از آن جا به یک منزل در ولایت قنیه وارد گردیدیم.<sup>۶</sup> آن شهری است، بزرگترین ولایتهای ملک سعید<sup>۷</sup> و<sup>۸</sup> غایت معموری و آبادی. بر لب نیل { ۵۸۶ ر } مبارک واقع شده است. پایان او تا مصر یک ماهه راه همه دو جانب دریا شهرهای بزرگ و تمام آبادان<sup>۹</sup> و از آن شهر بالا دو ماهه راه ممالک زنگوار و حبشه، او نیز همچنین دو جانب دریا شهرها<sup>۱۰</sup> و دیهه های<sup>۱۱</sup> بزرگ افتاده است، معمور<sup>۱۲</sup> و آبادانی<sup>۱۳</sup>. فقیر آن ولایت را در کمال نزاکت یافتیم. چند روز از سفر بیابان +<sup>۱۴</sup> بر آسودم، چنانچه<sup>۱۵</sup>

---

۱ و نازیبا میگفت [د]

۲ گردیدیم [د]

۳ گردیدم [د]

۴ × [د]

۵ ایزاد [ت]، ایزدی [د]

۶ گردیدم [ت] [د]

۷ سعید [د]

۸ در [د]

۹ آبادانی [د]

۱۰ شهرهای [د]

۱۱ دهه های [د]

۱۲ معموری [د]

۱۳ آبادی [د]

۱۴ دور [ت]

۱۵ × [د]

جسته، اسیر پنجه پلنگ گشتم و از گرداب بلا برآمده، به<sup>#۱</sup> سیه خان<sup>۲</sup> عنا در افتادم، کو شاهباز اجل و شاهین مرگ که صعوه جان بلا سیخ مرا دردم بر باید و<sup>۳</sup> از چنگ عقاب رهاوند.<

مثنوی

<۵۷۵پ> منم آن تشنه بر ریگ بیابان      برای آب هر سویی<sup>۴</sup> شتابان  
نماید ناگهان از دور آبم      فغان<sup>۵</sup> خیزان به سوی او شتابم  
به جای آب یابم در مغانکی      ز تاب خود<sup>۶</sup> درخشان شوره خاکی

القصه. در آن زمان بود که اشتر سواری پیدا شد. او نیز مثل فقیر {۵۸۵پ} در کمال تشنگی بود. به اتفاق او راه میرفتم<sup>۷</sup>. ناگاه از پیش کاروانی برآمد و آن اشتر سوار از کاروانیان در غایت التجا یک کاسه<sup>۸</sup> آب طلبید. ایشان سخن او را<sup>۹</sup> قبول نموده، یک کاسه بزرگ<sup>۱۰</sup> پر آب داده نی شدند. آن مرد ساده لوح<sup>۱۱</sup> فقیر را اشارت کرد که آب را گرفته، بده. به تو هم قدری آب خواهم داد. فقیر در کمال چستی از دست کاروانیان آب را گرفته، (۶۴۳) چنان به سر برداشتم که قطره ای در آن کاسه کلان<sup>۱۲</sup> باقی نماند و آن شخص به

- ۱ [ت][د]
- ۲ جان [ت]
- ۳ × [د]
- ۴ سوی [د]
- ۵ فتان [د]
- ۶ خور [د]
- ۷ میرفتم [د]
- ۸ بزرگ [د]
- ۹ بکره [د]
- ۱۰ × [ت][د]
- ۱۱ × [ت][د]
- ۱۲ × [ت][د]

مصراع<sup>۱</sup>سر<sup>۲</sup> به کوه بیابان تو داده ای ما را

+ در آن وقت [بود که]<sup>۴</sup> کاروانیان از نظرم غایب شدند. در آن دشت خونخواری که تنها به چندین خون دل راه طی میکردم. دیدم که به امید اشتر به جایی<sup>۵</sup> نمیرسم. لا علاج به زیر آمده، آهنگ پیاده<sup>۶</sup> رفتن کردم، قدری راه قطع کرده بودم که +<sup>۷</sup> از رفتار باز ماندم و<sup>۸</sup> تن به قضا در داده<sup>۹</sup>، {۵۸۵ر} منتظر مرگ [می نشستم]<sup>۱۰</sup>. در آن حین بود که همان اشتر به برم آمد. از مهارش گرفتم و دم او را گرفته، آهسته آهسته قدم میماندم و از تشنگی زبانم از ذقن پایان افتاده بود. به زبانم این رباعی جاری بود.

## رباعی

یا خالق خلق رهنمایی<sup>۱۱</sup> بفرست      یا رازق رزق در گشایی<sup>۱۲</sup> بفرست  
کار من بیچاره گره در گره است      لطفی بکن و گره گشایی<sup>۱۳</sup> بفرست

و میگفتم، >این چه طالع زبون و بخت واژون است که از کام نهنگان دریای پر طوفان

- ۱ × [ت][د]
- ۲ سری [ت]
- ۳ قصه کوتاه [ت][د]
- ۴ × [د]
- ۵ جای [ت][د]
- ۶ به پا [ت]
- ۷ و [س]
- ۸ × [د]
- ۹ دادم [د]
- ۱۰ نشستم [ت][د]
- ۱۱ رهنمای [د]
- ۱۲ گشای [د]
- ۱۳ گشای [د]

میکردیم. علاج پذیر نمیشد. چنانچه در کتابهای طبیه\*<sup>۱</sup> به<sup>۲</sup> اصلاح [آب شور]<sup>۳</sup> {۵۸۴پ} چیزها نوشته اند. همان روز چنان<sup>۴</sup> هوا گرم [شده بود]<sup>۵</sup> که قریب ریگ ها به جوش آید. در آن وقت از قضا باد سام<sup>۶</sup> برخواست و امید از حیات خود صد بار کنده، در آن بیابان بی پایان راه میرفتیم، [چنانچه می گوید.]<sup>۷</sup>

بیت<sup>۸</sup>

بیابان<sup>۹</sup> وسیع پر مخافت      به هر گامی در او صد گونه آفت  
هوايش آتش و<sup>۱۰</sup> آتش هوا بود      زمينش ريگ ريگ آهن ربا بود

در آن حین اتفاقا اشتر فقیر از رفتار باز ماند. چنان آهسته قدم میماند که البته در هر قدمش<sup>۱۱</sup> او یک<sup>۱۲</sup> ساعت<sup>۱۳</sup> میگذشت. نزد همگنان پر ظاهر<sup>۱۴</sup> است که راه رفتن (۶۴۲) اشتر چه باشد که مانده شدن او باشد. مگر بیل مایه عربستانی که با باد سبقتی <۵۷۵ر> میکند.

- 
- |    |                   |
|----|-------------------|
| ۱  | [د]، طبیه [س] [ت] |
| ۲  | × [د]             |
| ۳  | شور آب [د]        |
| ۴  | × [ت] [د]         |
| ۵  | بود [ت] [د]       |
| ۶  | [د]، صام [س] [ت]  |
| ۷  | چنانچه [ت]، × [د] |
| ۸  | × [ت]، قطعه [د]   |
| ۹  | بیابانی [د]       |
| ۱۰ | [د]               |
| ۱۱ | قدمی [د]          |
| ۱۲ | × [د]             |
| ۱۳ | ساعتی [د]         |
| ۱۴ | روشن [د]          |

درخشنده خورشید زینت یافت، در آن شب تاریک معلوم نبود. چون عالم روشن گشت، نیک مطالعه نمودیم که چنان پورطنه بحر در طغیان بود که از چار جانب کشتی به نظر چنان <۵۷۴ر> مرئی میشد که هزار کوه +<sup>۱</sup> پی در پی میرسید. یقین (۶۴۱) کس این بود که از هزار جان یک جان خلاص نخواهد یافت و باز میدیدیم که کشتی در بالای کوه آب برآمده است. باز به زیر آب میرفت {۵۸۴ر} و باز موج های بزرگ نزدیک میرسید. کشتی نیز<sup>۲</sup> بالا صعود میکرد. فقیر چنان مرگ را به خود یقین کرده بودم<sup>۳</sup> که غیر از کلمه<sup>۴</sup> گردانیدن<sup>۵</sup> کار دیگر نداشتیم<sup>۶</sup>. در آن حین، در بالای مرده صد چوب، یک جانب چوب بادبان شکست. غریب از اهل کشتی و ملاحان برآمده، هر کس به حال خود شد و همه مردم کشتی به بادبان چسبیده، به چندین محنت و مشقت نگاه داشته، چوب دیگری به جای او نصب کردند. در میان کشتی شوری بود که ناگاه از دور کوهی نمایان شد. اهل کشتی خرسندیها<sup>۷</sup> میکردند. اما طغیان پورطنه در حال قدیم بود. بعد از لحظه ای سیاهی شهر نمودار شد. نفسی بگذشت، به ساحل دریا رسیدیم. به عمر دو باره<sup>۸</sup> هزار بار شکر کنان از دریا بیرون خرامیدیم و آن اسکله ای بود، قوسیر<sup>۹</sup> نام داشت<sup>۱۰</sup>، در کمال معموری. <۵۷۴پ> اما آب شیرین از بیضه عنقا نایاب تر و از آب سلسبیل به قدرتر. سه روز در آن جا از رنج سفر دریا آسودیم. بعد از آن موضع به کاروانیان کرایه نموده، متوجه مقصد شدیم<sup>۱۱</sup>. چون راه می پیمودیم، اما از بابت آب شیرین بسیار به تنگ آمده بودیم که هر چند آب شور را تدبیر

۱ آبی [ت]، آب [د]

۲ باز [د]

۳ بودیم [د]

۴ [د]، کلمه [س] [ت]

۵ گرداندن [ت] [د]

۶ نداشتیم [ت]

۷ خورسندیها [ت]

۸ [ت] [د]، باز [س]

۹ قوس [د]

۱۰ × [ت] [د]

۱۱ شدم [د]

میکردند. آن تخته کاغذی بود که تمام <۵۷۳پ> +<sup>۱</sup> تصویر دنگیز دریای شاف را کشیده بودند. مثل این که در میان +<sup>۲</sup> دریا چند جزیره دارد و چند کوه دارد که {۵۸۳پ} خطر کشتی میشود و قبله نمای<sup>۳</sup> بزرگ نیز در پیش +<sup>۴</sup> مانده بودند. به همون<sup>۵</sup> نگاه کرده، حکم میکرد. کسی دُم<sup>۶</sup> کشتی را گرفته، به<sup>۷</sup> موقع حکم او<sup>۸</sup> مروت کشتی را<sup>۹</sup> می تافت و در آن وقت چنان موج دریا تلاطم کرده بود که هر موجی که به کشتی میرسید<sup>۱۰</sup>، مثل آواز توپ صدا میداد و آب از کشتی گذشته، به آب بحر همراه میشد و اهل کشتی همه از حیات خود دست [شسته بودند]<sup>۱۱</sup>، منتظر مرگ بودیم.

## بیت

شب تاریک {و} بیم موج {و} گردابی<sup>۱۲</sup> چنین هایل  
کجا دانند حال<sup>۱۳</sup> ما سبک باران ساحل ها

چون غواص صبح سراز بحر نیلگون شب بر<sup>۱۴</sup> آورد و بساط روزگار<sup>۱۵\*</sup> از فروغ گوهر

- 
- |    |                  |
|----|------------------|
| ۱  | تمام [ت]         |
| ۲  | این [ت] [د]      |
| ۳  | نامه [د]         |
| ۴  | او [د]           |
| ۵  | همون ها [د]      |
| ۶  | [د]، دُم [س] [ت] |
| ۷  | × [د]            |
| ۸  | این [د]          |
| ۹  | × [د]            |
| ۱۰ | میزد [د]         |
| ۱۱ | شسته [د]         |
| ۱۲ | گرداب [ت] [د]    |
| ۱۳ | قدر [ت] [د]      |
| ۱۴ | در [د]           |
| ۱۵ | [د]، روز [س] [ت] |



## مثنوی

[گر از گردون بیارد خنجر و تیغ      نه آید کارگر بی حکم تقدیر  
وگر عالم سراسر آب گردد      یکی بی حکم زبانی نمیرد]<sup>۱</sup>

و راه طی میکردیم.<sup>۲</sup> سیاحت دریا به طول کشید. در آن وقت به بست و<sup>۳</sup> پنج روز رسیده<sup>۴</sup> بود. +<sup>۵</sup> از بابت آب شیرین اهل کشتی بسیار به تنگ آمدند. یک کاسه آب به یک<sup>۶</sup> طلا یافت نمیشد و هر کس که از آب شور میخورد. مثل مسهل عمل مینمود، به همین مشقت راه میرفتم.<sup>۷</sup> شبی<sup>۸</sup> از شبها در غایت ظلمانی بود، چنان باد سخت بر خواست [و دریا در طلاطم آمد]<sup>۹</sup> که یاد از طوفان نوح علیه السلام و باد ثمود<sup>۱۰</sup> میداد و<sup>۱۱</sup> ملاحان دانا در حجره ای که باد نمیرسید، به مشعل در آمده، قرته خود را گشاده<sup>۱۲</sup>، و<sup>۱۳</sup> در پیش خود گذاشته، نظر

- |    |                          |                               |
|----|--------------------------|-------------------------------|
| ۱  | نمودی هر حبابی آسمانی    | خط هر موج او چون کهکشانی      |
|    | چو جنبیدی به هنگام طلاطم | بگردی سیر با افلاک انجم [ت]   |
|    | نمود هر حبابش آسمانی     | خط هر موج او چون کهکشانی      |
|    | چو جنبیدی به هنگام طلاطم | بگردی سیر با افلاک و انجم [د] |
| ۲  | مدت [ت][د]               |                               |
| ۳  | × [ت]                    |                               |
| ۴  | کشیده [د]                |                               |
| ۵  | و [ت][د]                 |                               |
| ۶  | × [د]                    |                               |
| ۷  | میرفتم [ت][د]            |                               |
| ۸  | شب [ت]                   |                               |
| ۹  | × [د]                    |                               |
| ۱۰ | سمود [د]                 |                               |
| ۱۱ | × [ت]                    |                               |
| ۱۲ | گشادند [د]               |                               |
| ۱۳ | × [د]                    |                               |

که بیان تعریف مدینه منوره حاجت نیست.

مصراع<sup>۱</sup>

جایی<sup>۲</sup> که عیان است<sup>۳\*</sup> چه حاجت به بیان

القصه. در آن بیابان بی پایان راه قطع میکردیم. به حکم آن که

بیت<sup>۲</sup>

از بس به دشت کرده ام آشفته ناله ها چون زلف مهوشان شده شاخ غزاله ها

بعد از پنج روز در موضع یانبوق وارد گردیدم. در آن اسکیله<sup>۵</sup> افلاس چهار<sup>۶</sup> روز اقامت کردم. <۵۷۳> از قید چهار ماه (۶۴۰) محمد علی خان [مادر زن]<sup>۷</sup> {۵۸۳} مشقت تر مینمود.

القصه<sup>#۸</sup>. به غراب بزرگ که او را تکنه میگفتند، کلان ترین کشتیها بود، فرود آمده، رو به دریای شور آوردیم، [چنانچه می گوید].<sup>۹</sup>

۱۵ ذو [د]

۱ × [ت]

۲ چیزی [د]

۳ [ت][د]، دست [س]

۴ × [ت]

۵ اسکله [د]

۶ چار [ت]

۷ × [ت]، غازی [د]

۸ [ت]

۹ × [د]

نبود. به فقیر یک ساعت وهم مستولی شد. بعد به خاطر آمد که این جایی<sup>۱</sup> است که از بیم خارج در آن<sup>۲</sup> موضع متبرک فقیر را خواب در ربود و<sup>۳</sup> در رؤیا چنان مشاهده نمودم که در کوشکی بودم، در نهایت خوبی و در آن جا حضرت خیر البشر [علیه افضل الصلوات و التسلیمات]<sup>۴</sup> بر تمامی<sup>۵</sup> صحابه تشریف داشته اند. فقیر در مکه معظمه دوستی داشتم، از اهل مکه، در آن جا حاضر شد و به خدمت آن حضرت [علیه السلام]<sup>۶</sup> داخل شد. بعد از ساعتی از نزد آن حضرت [صلی الله علیه و سلم]<sup>۷</sup> دو اناری < ۵۷۲ پ > در غایت خوبی به دست گرفته، برآمد. به پیش فقیر آمده، گفت، > این انار را حضرت { ۵۸۲ پ } سید المرسلین [صلی الله علیه و السلام]<sup>۸</sup> به تو ارزانی داشتند. < گفت. به دستم داد. فقیر در غایت خرسندی انار را<sup>۹</sup> از دست آن برادر گرفته، شروع به خوردن کردم. در آن حین بود که چشم از خواب گشادم. چنان فرحناک بودم<sup>۱۰</sup> که از شادی به پراهن نمیگنجیدم و از آن موضع بی نظیر به آستان بوسی +<sup>۱۱</sup> رسول صلی الله علیه و سلم آمده، به زیارت مشغول شدم. روز دیگر از روی بد بختی از خاک بوسی حضرت +<sup>۱۲</sup> البشر [علیه السلام]<sup>۱۳</sup> جدا شده، به چندین درد و<sup>۱۴</sup> داغ به جانب دریای شور مراجعت نمودم. نزد ذوی<sup>۱۵</sup> العقلا واضح و لایح باد

۱ جای [د]

۲ این [د]

۳ × [ت] [د]

۴ × [ت] [د]

۵ تمام [د]

۶ × [ت] [د]

۷ × [ت] [د]

۸ × [ت] [د]

۹ × [د]

۱۰ بود [د]

۱۱ حضرت [د]

۱۲ خیر [د]

۱۳ × [ت] [د]

۱۴ × [د]

ملک پاسبان آن +<sup>۱</sup> سرور رسیده، به خاک بوسی زمینی که در میانه روضه +<sup>۲</sup> خیر الانام [و منبر آن حضرت که] +<sup>۳\*</sup> [روضه من] +<sup>۴</sup> ریاض الجنة [است، یعنی] +<sup>۵</sup> از زمین بهشت است، در آن جا غلطیده، به تضرع مشغول شدم. [در نزد مجتهدین همین است که قسم شخصی یاد کند که من در بهشت در آمدم. اگر در آن زمین داخل شود، حاثث نمیشود.] +<sup>۶</sup> فقیر هر روز در آن زمین <۵۷۲> متبرک به امید، قال النبی {۵۸۲} علیه السلام من زار<sup>۷</sup> (۶۳۹) قبری وجب علیه<sup>۸</sup> شفاعتی، مشغول میبودم. روز دیگر در<sup>۹</sup> آن جا به غار وا اُمّتا که غیر از<sup>۱۰</sup> غار حراست [حضرت نبینا] +<sup>۱۱</sup> علیه السلام در آن غار در آمده، سه شب و روز گناه امت را از حضرت رب العزت طلب نمودند، این واقعه بر تمام کتابهای تواریخ مسطور است، در آن غار فقیر در عین گرمی هوا رسیدم. چون داخل غار +<sup>۱۲</sup> شدم، در کمال تنگی بود. از دو کس زیاده نمیگنجید و یک جانب او گشادی داشت، در غایت<sup>۱۳</sup> باد کش بود. داخل شدن از آن جانب ممکن

۱۶ آستان [د]

۱ سلطان [د]

۲ و منبر [س] [ت]

۳ × [س]، که [ت]

۴ من روضه [د]

۵ × [د]

۶ در نزد مجتهدین این است که شخصی قسم یاد کند که من در بهشت در آمدم. اگر در آن زمین داخل شود، حاثث نمیشود. [ت]، کسی که در آن جا داخل شود و قسم یاد کند که من در جنت داخل شده ام، حاثث قسم نمیشود. نزد مجتهدین همین است. [د]

۷ زاره [د]

۸ × [د]

۹ از [د]

۱۰ × [د]

۱۱ حضرت نبی [ت]، رسول [د]

۱۲ وا اُمّتا [د]

۱۳ غایتی [د]

القصه. با<sup>۱</sup> چندین آداب به حرم شریف داخل { ۵۸۱پ } شدم. چون چشم من<sup>۲</sup> به روضه مطهره<sup>۳</sup> حضرت محمد مصطفی صلی الله علیه و سلم < ۵۷۱پ > افتاد، از خود رفتم. بعد از ساعتی به خود آمدم. به چندین ترس و هراس خود را به تکلف نگاه میداشتم. بعد از لحظه ای از زیارت آن حضرت [علیه السلام]<sup>۴</sup> فارغ [گشته، میگفتم].<sup>۵</sup>

### بیت<sup>۶</sup>

ای خاک بوس در گهت مقصود هر صاحب‌دلی  
بردن به خاک این آرزو مشکلتر از هر مشکلی

بعد از آن رو به گورستان بقیع آورده، از زیارت آن موضع<sup>۷</sup> نیز<sup>۸</sup> فارغ شدم. روز دیگر سر و پا برهنه بیرون خرامیده، در کوه احد رفتم<sup>۹</sup> و در آن جا زیارت جناب امیر حمزه [و سایر شهدا]<sup>۱۰</sup> +<sup>۱۱</sup> رضی الله [تعالی عنهم]<sup>۱۲</sup> به جای آورده، به چندین [ترس و هراس]<sup>۱۳</sup> به قبلتین رفتم<sup>۱۴</sup> و از آن جا به قبه<sup>۱۵\*</sup> الاسلام رسیدم. بعد از فراغ زیارت رو به شهر آورده، به آستانه<sup>۱۶</sup>

- 
- |    |                           |
|----|---------------------------|
| ۱  | به [د]                    |
| ۲  | × [ت]                     |
| ۳  | مطهر [د]                  |
| ۴  | × [ت] [د]                 |
| ۵  | شدم و گرفتم [ت]، شدم [د]  |
| ۶  | × [ت]                     |
| ۷  | جا [د]                    |
| ۸  | متبرک [ت]                 |
| ۹  | رفتیم [د]                 |
| ۱۰ | × [د]                     |
| ۱۱ | را [ت]                    |
| ۱۲ | عنه و شهدا را [د]         |
| ۱۳ | محنت از ترس عربان دزد [د] |
| ۱۴ | رفتیم [د]                 |
| ۱۵ | [د]، قوت [س] [ت]          |

کدام<sup>۱</sup> آنها<sup>۲</sup> را شرح کنم، (۶۳۸) مستمعان را ملال می آرد. بنابراین<sup>۳</sup> به همین قدر اکتفا میکنم. بالاخر بعد از پنج روز وقت طلوع آفتاب بود که گنبد خضرای آن سرور کاینات و خلاصه موجودات [علیه افضل الصلوات و التسلیمات]<sup>۴</sup> نمایان شد. همه از اشتراک خود را به زیر انداخته، گریبان چاک گریه کنان سرعت میکردیم. بعد از ساعتی در آن بلده بی مانند وارد گردیدیم. بعد از ساعتی متوجه به<sup>۵</sup> آستان بوسی روضه<sup>۶</sup> مقدس حضرت سلطان تخت گاه رسالت و خاقان<sup>۷</sup> عز و جلالت شدیم<sup>۸</sup>.

## بیت

آن شهسوار کرم [رو بس]<sup>۹</sup> بلند سیر      که نه حریم چرخ دوال رکاب او است<sup>۱۰</sup>

ذکر<sup>۱۱</sup> رسیدن این بی بضاعت به آستان ملک پاسبان حضرت سید کونین [علیه الصلوة و السلام]<sup>۱۲</sup> از روی بی دولتی از آن موضع با شرافت رجوع<sup>۱۳</sup> نموده، با چندین درد و حسرت به راه دریا رو به مصر کثافت<sup>۱۴</sup> آوردن

۱ کدامی [ت]

۲ او [د]

۳ آن [د]

۴ × [ت]، علیه افضل الصلوات و اکمل التجنات؟ [د]

۵ × [د]

۶ × [د]

۷ بارگاه [د]

۸ [د]

۹ × [د]

۱۰ × [د]

۱۱ × [د]

۱۲ و [ت][د]

۱۳ مراجعت [د]

۱۴ کسافت [س][ت][د]

خانه خدا وداع نمودم.<sup>۱</sup> +<sup>۲</sup> به جانب جدۀ مبارک مراجعت فرمودم.<sup>۳</sup>

### بیت

رفتن و<sup>۴</sup> نا آمدن باید ز آب آموختن

خانه بر دوشی [بو باید]<sup>۵</sup> از حساب آموختن

نزد همگنان نهفته نماند که تعریف بیت الله شریف را کسی به هیچ بیان [به تقدیم]<sup>۶</sup> رسانیده نمیتواند. از بس که خانه خدا است، بنابر آن از تعریف مستغنی است.

القصه. چون در جدۀ مبارک رسیدیم، به غراب بزرگ فرامده، متوجه دریای شور شدیم. راه می پیمودیم. بعد از پنج روز از ولایت یان بوغ<sup>۷</sup> بر آمدیم. فقیر از آن جا با کاروانیان همراه شده، به اشتر +<sup>۸</sup> کرایه کرده، متوجه مدینۀ منوره شدیم.<sup>۹</sup> در آن بیابان<sup>۱۰</sup> بی پایان راه طی میکردیم و باد صام<sup>۱۱</sup> چنان بر خواسته بود که مردم از بالای {۵۸۱} اشتر می پریدند. هنوز به<sup>۱۲</sup> زمین نرسیده، جان از قالب تهی میکردند. در آن < ۵۷۱ ر > چولی<sup>۱۳</sup> پر بیم در چند جا به دزدان عرب دوچار آمده، به چندین حيله و تدبیر خلاص شدم. اگر هر

- ۱ نموده [د]
- ۲ و [ت]
- ۳ فرمودیم [ت] [د]
- ۴ × [ت]
- ۵ بیاید [ت] [د]
- ۶ بیان [د]
- ۷ یان بوغ [ت]
- ۸ باد پا [د]
- ۹ شدم [د]
- ۱۰ [ت] [د]، بیان [س]
- ۱۱ سموم [د]
- ۱۲ بر [ت]
- ۱۳ چول [د]

مکه +<sup>۱</sup> شده بود. از بهر بیت الله آوردند و آن زینه قدیم که عبد العزیز خان بخاری ساخته بود. همان سال او را گذاشته، زینه نو را به درخانه معظمه<sup>۲</sup> گذاشتند<sup>۳</sup>.

زیده کلام این<sup>۴</sup> که مولوی مذکور در علم طب و حذاقت در آن عصر عدیل و نظیر<sup>۵</sup> نداشت. اتفاقاً به فقیر الفتی پذیرفت. فقیر چند وقت در بستر ناتوانی خوابیده بودم. آن یار عزیز معالجه [کرده بود]<sup>۶</sup> و<sup>۷</sup> علاج [پذیرفته بود]<sup>۸</sup>. همان شخص در آن بازار در نزد فقیر به هفتاد هزار طلا گوهر فروخت. از این قیاس باید کرد. از این نوع {۵۸۰ پ} بازرگان از هر اقلیم بسیار بود. روز چهارم از آن جا به مکه معظمه آمده، سعی طواف زیارت<sup>۹</sup> را به جای آورده، از احرام برآمدم، [چنانچه می گوید].<sup>۱۰</sup>

#### قطعه<sup>۱۱</sup>

بر در کعبه سالیلی دیدم      که همی گفت و میگریستی خوش  
من<sup>۱۲</sup> نگویم که طاعتم بو<sup>۱۳</sup> پذیر      <۵۷۰ پ> قلم عفو بر<sup>۱۴</sup> گناهم کش

بعد از سه روز دیگر بعد از فراغ طواف به باب الوداع رفته، به چندین گریه و زاری به

- 
- |    |              |
|----|--------------|
| ۱  | خرج [د]      |
| ۲  | معظم [د]     |
| ۳  | کشیدند [د]   |
| ۴  | آن [ت] [د]   |
| ۵  | نذیر [ت] [د] |
| ۶  | کرد [د]      |
| ۷  | × [ت] [د]    |
| ۸  | پذیرفت [د]   |
| ۹  | قدوم [ت] [د] |
| ۱۰ | × [د]        |
| ۱۱ | بیت [د]      |
| ۱۲ | می [د]       |
| ۱۳ | به [د]       |
| ۱۴ | در [د]       |



## [نظم]

فیض کرم رسانیده شرق تا به غرب      جان نعم نهاده از قاف تا قاف  
مستند پیش کم ز نوال بهره مند      دارند نیک بد به عطای به تو انحراف<sup>۱</sup>

در آن مسجد<sup>۲</sup> عید قربان به وقت ادا نموده، به مینا آمده، نزول فرمودیم. هر کس موافق حالش قربانی کرد و دست به رمی جمار گشادیم. در آن موضع<sup>۳</sup> {۵۸۰ر} مردم هفت اقلیم چنان بازاری بر پا ساخته بودند که در هیچ ربع مسکون مثل آن بازار کسی ندیده بود و نشنیده. مولوی آصفی<sup>۴</sup> نام شخصی از سواد اعظم هندوستان از ولایت لکناور آمده بود. +<sup>۵</sup> از بهر روضه<sup>۶</sup> حضرت<sup>۷</sup> خیر البشر قندیلی از شیشه<sup>۸</sup> الماس تراش که<sup>۹</sup> در غایت شفاف<sup>۱۰</sup> مثل صورت درخت ساخته بودند، آورده بود +<sup>۱۱</sup>. هژده مشعل خانه<sup>۱۲</sup> <۵۷۰ر> بزرگ داشت. هر کدام او به پنج کاسه روغن پر میشد و همه<sup>۱۳</sup> او را<sup>۱۴</sup> به یک قالب ریخته بودند<sup>۱۵</sup> و یک زینه از چوب عاج که تمامی<sup>۱۶</sup> او حلی<sup>۱۷</sup> طلا بود و خرج<sup>۱۸</sup> هر دوی (۶۳۷) این پنجاه هزار طلا<sup>۱۹</sup> تا

۱ × [ت][د]

۲ مسجد [ت]

۳ وقت [د]

۴ صاحب [ت]

۵ و [د]

۶ × [ت]

۷ × [د]

۸ شفاف [د]

۹ که [د]

۱۰ × [د]

۱۱ بود [ت][د]

۱۲ تمام [د]

۱۳ حل [د]

۱۴ خرجی [د]

۱۵ طلای [د]

وقت چنان حشری بر پا شده بود که لرزه بر زمین و زمان افتاد و [کوهها به صدا]<sup>۱</sup> آمد. +<sup>۲</sup> آبهای دریا<sup>۳</sup> به جوش آمد.<sup>۴</sup> قریب صد و پنجاه هزار کس +<sup>۵</sup> لبیگ میگفتند. قبل از نماز عصر قاضی مناجات را به اتمام رسانید و توب های اژدها پیکر را آتش دادند و صدای توب +<sup>۶</sup> عالم را فرو گرفت و حاجیان به های و<sup>۷</sup> هوی بسیار مراجعت فرمودند. چون <۵۶۹پ> در موضع مزدلفه رسیدیم، همان شب در آن جا بودیم. آن شبی<sup>۸</sup> است که در نزد بعضی مجتهدین<sup>۹</sup> اگر خواب نرود، گناه حق العبد<sup>۱۰</sup> را نیز حضرت واجب تعالی میبخشد. الحق در آن شب به کس چنان غفلت مستولی میشود که به هیچ تدبیر بیدار نشستن موجود نمیشود. چنانچه فقیر از ترس خواب به هر سو +<sup>۱۱</sup> میگشتم. با وجود گشتن غفلت چنان غلبه میکرد<sup>۱۲</sup> که بی اختیار می پریدم. باز سپندوار از جای بر میجستم<sup>۱۳</sup>. به چندین مشقت شب را [روز کردم].<sup>۱۴</sup>

۱ کوه در لرزه در [د]

۲ و [ت]

۳ دریاها [ت]

۴ آمدن گرفت [د]

۵ به آواز بلند [ت][د]

۶ مثل آواز رعد [د]

۷ × [د]

۸ شب [د]

۹ مشاهدین [ت]

۱۰ عبد [د]

۱۱ به پا [د]

۱۲ کرده بود [د]

۱۳ میخواستم [د]

۱۴ به روز آوردم [د]

میدویدم. لا علاج با همراهی مردم تکرور متوجه کوه عرفات شدم، چنانچه<sup>۱</sup>

### بیت

به جوش خلق چه حاجت عزیز کرده حق را      شرافت حرم از التفات حاج نباشد

{۵۷۹ر} بعد از قطع راه به چندین محنت و مشقت خود را در بالای کوه عرفات گرفتم.<sup>۲</sup> در فوق کوه در غایت خورده گنبذچه ای ساخته اند و اهل تکرور آن جا را مثل مکه معظمه طواف میکردند و سنگ ریزه ها هر کس در آن جا میگذاشت و نمیدانستم که سبب چه بود و فقیر در حیرت بودم که من هم مثل ایشان طواف کنم یا نکنم. آخر خاموش بنشستم و چندین هزار حاجی در آن جا مجتمع شده بودند. همه در زیر بودند و از مذهب حنفی کسی از هیچ جماعه در آن جا نبود. فقیر در غایت محزونی بودم که <۵۶۹ر> آیا من چه کاری کردم که به این جماعه بر آمدم. ندانسته بودم که در مذهب ابو<sup>۳</sup> حنیفه و غیر دیگر ترک مستحب میشده است. اما چیزهای فقیر در آن جا مشاهده کردم که به ترک فرض کردن [می ارزید]<sup>۴</sup>. اگر نویسم سخن به طول می انجامد.

القصه. در آن حین بود که دو محمل شریف را با چندین [زیب و زینت]<sup>۵</sup> و تجمل بسیار در پیش کوه<sup>۶</sup> عرفات آورده، (۶۳۶) نگاه داشتند و قاضی مکه معظمه بر اشر سفید سواری نموده<sup>۷</sup>، به کوه بر آمد. چون نزدیک سر کوه رسید، آن جا جای است، چهار<sup>۸</sup> یک طناب وسعت دارد، {۵۷۹پ} در آن منزل آمده، به حمد واجب تعالی زبان بر گشاد. در آن

۱ × [ت] [د]

۲ گرفتیم [د]

۳ × [د]

۴ ارزید [د]

۵ زینت و زیب [ت]

۶ × [ت]

۷ نمود [د]

۸ چار [ت] [د]

<۵۶۸> بعد از ساعتی به خود آمدم. بعد از فراغ طواف از آب زمزم در کمال سیری خوردم. از آن جا رو به صفا و مروه آوردم. بعد از تمام<sup>۱</sup> سعی و<sup>۲</sup> میلین اخضرین از احرام برآمده، از پیش باب السلام خانه بسیار عالی را به پنج طلا کرایه کرده، سکونت اختیار نمودم. بعد از آن هر روز سر و پا برهنه به زیارت<sup>۳</sup> بیت الله اشتغال داشتم. {۵۷۸پ} در موضع زیارت گاه میرفتم، مثل جنت المعلا و حجر متکلم و مولد نبی علیه السلام و علی کرم<sup>۴</sup> الله وجهه<sup>۵</sup>. [در آن وقت سنه ۱۲۴۲ بود که]<sup>۶</sup> بعد از پنج ماه موسم حج رسید و امیر حاج مع محمل شریف با چندین (۶۳۵) شأن<sup>۷</sup> و شوکت وارد گردید و امیر حاج مصر قاهره نیز با محمل شریف با تجمل بسیار نزول اجلال فرمود. روز دیگر چندین هزار حاجیانی که بودند، همه احرام بسته، با چندین عجز متوجه کوه عرفات شدیم. چون در موضع مینا رسیدیم، ساعتی توقف نموده، از آن جا به موضع مزدلفه نزول کردیم و از آن جا کوچیده، در عرفات وارد گردیدیم. در آن موضع فقیر با چندی از سیاحان در مسجد حضرت ابراهیم <۵۶۸پ> +<sup>۸</sup> آرام گرفتیم.<sup>۹</sup> + روز دیگر بعد از پیشین تمام اهل حاج لبیک گویان متوجه عرفات شده، آن کوه بزرگ را فرو گرفتیم. در آن وقت فقیر +<sup>۱۱</sup> از کثرت حاجیان از رفیقان خود جدا افتادم. هر چند سعی و کوشش نمودم<sup>۱۲</sup>، آثار ایشان را نیافتم. سرگردان و حیران به هر سو

۱ تمامی [ت]

۲ [ت]

۳ طواف [د]

۴ اکرم [د]

۵ وجه [د]

۶ × [ت]

۷ × [ت]

۸ خلیل الله [ت][د]

۹ گرفتم [ت]

۱۰ و [د]

۱۱ کمر حین [د]

۱۲ کردم [د]

ولایت حجاز او است و بزرگترین اسکیل<sup>۱</sup> محیط اعظم او<sup>۲</sup> است و تمام بازرگانان <۵۶۷پ> دریا آن جا جمع میشوند. بعد به هر دیاری که اختیار کنند، میروند و قبر حضرت حوا آن جا است. طول قد<sup>۳</sup> مبارکشان را فقیر قدم کردم. دو صد و بست قدم بود. از آب شیرین {۵۷۸ر} آن شهر<sup>۴</sup> مبارک +<sup>۵</sup> معذور اند و از آن جا به اشتران باد پا کرایه کرده، متوجه مکه معظمه شدم. بعد از یک شب و روز در کمال سرعت وقت سحر بود که به آن شهر معظم داخل شدم.

ذکر رسیدن این بی سرو پا به چندین عجز و نیاز به [مکه معظمه]<sup>۶</sup> و از آن موضع متبرک

بعد از پنج ماه مراجعت نموده، به راه دریا متوجه مدینه منوره شدن<sup>۸</sup>

القصه. چون به نزدیک حرم رسیدم، یک عرب بچه ای به پیش فقیر حاضر شد. او را دلیل خود ساخته، داخل حرم شدم. چون چشم فقیر به +<sup>۹</sup> بیت الله<sup>۱۰</sup> شریف افتادن همان، از پا در افتادن همان، [چنانچه گفته اند]<sup>۱۱</sup>

#### قطعه

عذر و تقصیر و خدمت آوردم      که ندارم به طاعت استظهار  
عاصیان از گناه توبه کنند      عارفان از عبادت استغفار

- ۱ ایسکله [د]
- ۲ × [ت] [د]
- ۳ قدم [د]
- ۴ شهری [ت]
- ۵ نیز [د]
- ۶ × [د]
- ۷ خانه خداوند تعالی [د]
- ۸ شدم [د]
- ۹ خانه خدا یعنی [د]
- ۱۰ [ت]
- ۱۱ × [د]

شدیم، [به حکم آن که گفته اند.]<sup>۱</sup>

### بیت

زنده گی می باید اسباب طرب معذور<sup>۲</sup> دار

رنگ هر جا رفته باشد در بغل دارد بهار

نزد همگنان نهفته نماند که بسیاری مردم مصر به همین سخن اتفاق < ۵۶۷ > دارند. اما بسیاری<sup>۳</sup> مؤرخان در کتب های معتبر خود بیان میفرمایند که غرق فرعون به نیل مبارک واقع شد، نه جای دیگر { ۵۷۷ پ } بود.

القصة. در<sup>۴</sup> کشتی نشستیم. روز دیگر بادبانها را بر پا کرده، رو به سوی دریا آوردیم. در غایت چستی راه می پیمودیم. بعد از یک هفته از ولایت یانوق بر آمدیم. سه روز در آن موضع سکونت اختیار کردیم و از بسیاری مکس و از نیستی آب شیرین در آن ولایت بر آمدن متعذر<sup>۵</sup> بود. در آن جا ماهیان ریزه میباشد<sup>۶</sup> که گرفته، او را پخش<sup>۷</sup> نمایند. به آب او چیزی نویسند. بهترین سیاهی است. فقیر این امر عجیب را به چشم خود مشاهده نمودم. صاحب عجایب المخلوقات نیز در کتاب خود نوشته است و قبر ( ۶۳۴ ) مادر حضرت خیر البشر آمنه آن جا است و<sup>۸</sup> بعد از سه روز از آن جا +<sup>۹</sup> متوجه دریای پر طوفان شدیم و راه قطع میکردیم. بعد از سه روز از جدّه مبارک بر آمدیم. آن شهری است، در کمال معموری و آبادی و بهترین

۱ × [د]

۲ معذور [د]

۳ از [ت]

۴ به [ت]

۵ متعسر [د]

۶ مسباشند [د]

۷ رحيق [د]

۸ × [د]

۹ نیز [د]

نمیباشد، الا این بیشه و مردم یهود<sup>۱</sup> [از آن]<sup>۲</sup> روغن<sup>۳</sup> + میکشند [و بر تمام]<sup>۴</sup> {۵۷۷ر} [بازرگانان عالم]<sup>۵</sup> میفروشند. > گفته<sup>۶</sup>، بعد از آن اهل کشتی خرسند شده، از غراب بیرون آمده، متوجه بیشه شدند. فقیر<sup>۷</sup> + از روی کم تجربه بودن از تعاقب ایشان رفتم. چون در میان بیشه داخل شدم، رفیقان را گم کردم. نوحه کنان یکه و تنها در میان آن بیشه [به هر سو]<sup>۸</sup> میدویدم. چنان بیشه<sup>۹</sup> پر وهم بود که زهره شیر در آن جا می ترقید. +<sup>۱۰</sup> سر هر درخت او به ثریا<sup>۱۱</sup> [سوده بود]<sup>۱۲</sup>، بالاخر بعد از کوشش بسیار و<sup>۱۳</sup> به مهربانی حضرت<sup>۱۴</sup> واجب تعالی ناگاه از پیش آن چشمه برآمدم. رفیقان را دیدم که همه غسل کرده اند و دست از فقیر شسته، [و من]<sup>۱۵</sup> نیز بلا توقف غسل کردم. آن چشمه در غایت گرمی بود. بعد از فراغ غسل دو رکعت نماز شکر را<sup>۱۶</sup> ادا کردم<sup>۱۷</sup>. +<sup>۱۸</sup> به اتفاق رفیقان به مشقت بسیار آمده، داخل غراب

۱ یهودیه [د]

۲ × [د]

۳ او را [د]

۴ × [د]

۵ بازرگان عالم [ت]، و [د]

۶ [ت]

۷ نیز [ت] [د]

۸ بی سرو پا [د]

۹ و [ت]

۱۰ سریا [د]

۱۱ سوده [د]

۱۲ × [د]

۱۳ × [ت]

۱۴ فقیر [د]

۱۵ × [ت]

۱۶ کردیم [د]

۱۷ × [د]

متوجه دریا شدیم. بعد از سه روز قطع راه نموده بودیم که ملاحان گفتند، +<sup>۱</sup> > این همان<sup>۲</sup> موضع است که غرق فرعون در آن<sup>۳</sup> جا واقع شده است. < ۵۶۶ر > هر کشتی که در آن جا رسد، البته شکست واقع { ۵۷۶پ } میشود. < اتفاقا در آن ساعت چنان باد سخت بر خواست که از فورطنه آب کوه های بزرگ پیدا شد<sup>۴</sup> و یقین همه بود که طعمه نهنگان دریا شدیم. در آن حین از قضا چوب بادبان شکست. چون این حال را مشاهده نموده بودیم که اهل کشتی دست از جان شیرین شسته، به خواندن کلمه<sup>۵</sup> مشغول شدیم و هر چند ملاحان سعی نمودند که لنگر اندازند، مفید نه افتاد. +<sup>۶</sup> به راه خود میرفت. بعد از قطع راه به ساحل دریا رسیدیم. در آن جا بیشه ای بود، در کمال معموری و +<sup>۷</sup> کوه طور سینا<sup>۸</sup> آن جا منتهی میشود و ملاحان شادیها مینمودند. > به چندین سال اتفاقا کشتی از آن جا بیرون میشود. از بس که در میان این بیشه چشمه ایست، موسی علیه السلام. بعد از غرق شدن فرعون به این چشمه غسل [نموده اند و]<sup>۹</sup> دو رکعت نماز شکر ادا کرده اند. از شرافت (۶۳۳) کلیم الله آن چشمه در نهایت گرمی و هر کس در آن چشمه<sup>۱۰</sup> غسل کند، از درد میان ایمن<sup>۱۱</sup>\* میباشد. خاصیت چشمه این است و درخت بلسان به هیچ جا موجود < ۵۶۶پ >

۱ که [ت]

۲ × [د]

۳ این [د]

۴ شده [د]

۵ [د]، کلیمه [س] [ت]

۶ بنابر این سبب هایله به زبان قال بدین است، ترنم گشت.

## بیت

کشتی شکسته کانیم ای باد شرط بر خیز شاید که باز بینیم آن یار آشنا را [د]

۷ اخیر [د]

۸ × [د]

۹ نموده [د]

۱۰ × [ت]

۱۱ ایمن [س] [ت] [د]



{۵۷۶}>{۵۶۵پ} و راه می پیمودیم<sup>۱</sup>. بعد از قطع مراحل در شهر سودیس که بزرگترین اسکیله های (۶۳۲) دنگیز<sup>۲</sup> شاف است، وارد گردیدم. شهری بود، در نهایت معموری و اما + آب شیرین [به درجه]<sup>۳</sup> نایابی که یک قطره او به جای صد کاسه آب حیات میگذرد و مردمان آن شهر به آب شور عادت کرده اند، [برخی اگر موجود شود، از قاق می آرند.]<sup>۴</sup> بعد از سه روز به غراب بزرگ یعنی کشتی بزرگ که<sup>۵</sup> وسعت فلک در جنب عظمت هر فلک<sup>۶</sup> از آن حقیر نمودی و نه سپهر در برابر یک ورق از هر سفینه رقع<sup>۷</sup> مختصری<sup>۸</sup> بودی، سوار شده، مرکشتی بی پای آب پیما را روان ساختند و در خانه چوبین که سقف<sup>۹</sup> در زیر<sup>۱۰</sup> زمین<sup>۱۱</sup> و ستون بر زیر<sup>۱۲</sup> دارد، +<sup>۱۳</sup> قرار گرفته، عنان اختیار به دست باد سبک رفتار باز دادیم، [چنانچه میگوید.]<sup>۱۴</sup>

#### مثنوی<sup>۱۵</sup>

چومه در برج آبی کرده منزل      روان کردند کشتی را به ساحل

- ۱ پیمودم [د]
- ۲ دن کری [د]
- ۳ از بابت [د]
- ۴ در غایت [د]
- ۵ × [ت]
- ۶ × [د]
- ۷ فلکی [د]
- ۸ مختصر [د]
- ۹ صقف [س][ت][د]
- ۱۰ زیر [د]
- ۱۱ × [د]
- ۱۲ زیر [د]
- ۱۳ و [ت]
- ۱۴ × [د]
- ۱۵ بیت [د]

چنانکه<sup>۱</sup> گفته است،

{ ۵۷۵ پ } بیت

رشته ای بر<sup>۲</sup> گردنم افکنده دوست      میبرد هر<sup>۳</sup> جا که خاطر خواه او است

< ۵۶۵ ر > القصه. از آن پریزاد خانه به چندین داغ حسرت متوجه تکیه شدم و<sup>۴</sup> چند روز به سیر گشت ولایت مشغول گشتم<sup>۵</sup>. در آن وقت بود که برادرم ماهر افندی اختیار ملازمت وزارت پناهی حبیب<sup>۶</sup> افندی نمود. به فقیر طرح مشاورت انداخت. فقیر نیز راضی شدم و آن یار جانی از فقیر آشنایی را کنده، به وزیر پیوست، به حکم آن که

بیت

دلم ز دست بتان دایما در آزار است      الهی بر نخورد هر که عاشق آزار است

بعد از چندین روز فقیر رخت اقامت از مصر قاهره بر بسته و احرام بیت الله و مدینه منوره از رگ جان هزار بار به میان بر بسته، قدم به بیابان<sup>۷</sup> بی پایان به چندین عجز نهاده، متوجه آن آستانه ملک پاسبان شدم، [چنانچه گفته اند،]<sup>۸</sup>

قطعه

امید طواف حرم گوی تو افکند      در وادی غم طایفه بی سر و پا را  
لبیک زنان بر عرفات سر کویت      صد قافله جان منتظر آواز درارا

۱ چنانچه [د]

۲ در [د]

۳ آن [ت]

۴ × [د]

۵ شدم [د]

۶ حیت [د]

۷ بیابانی [ت]

۸ × [د]

باشد، + مامور میسازند.<sup>۲</sup> مثلاً<sup>۳</sup> بعضی<sup>۴</sup> را [به علم طب\*<sup>۵</sup>] به حکیم خانه میفرستاند<sup>۶</sup>، تا<sup>۷</sup> [از طب\*<sup>۸</sup> بهره برند و برخی را به فرنگستان امر مینمایند تا]<sup>۹</sup> از علم های غریب بهره یافته بیاید. مثل علم هندسه و پاره ای را به دیوان حکم میکنند<sup>۱۰</sup>، علی هذا القیاس و آنهایی<sup>۱۱</sup> که [از این علوم]<sup>۱۲</sup> بهره +<sup>۱۳</sup> نبرده اند<sup>۱۴</sup> و تربیت اثر نکرده است، +<sup>۱۵</sup> جدا می سازند و به جهادیه میفرستانند. سرداران به لشکر همراه میسازد<sup>۱۶</sup>. هر سر ماه کار همین است. از این<sup>۱۷</sup> جانب گروهی بیرون میشوند و از آن جانب داخل میشوند.

خلص کلام این که پریراد خانه باغ ارم همان قصر عین است که<sup>۱۸</sup> در مصر افتاده بود. فقیر چون این حال را مشاهده نمودم، انگشت تحیر به دندان گزیدم. میخواستم که در آن موضع سکونت اختیار کنم. از آن جا که محبت بیت الله در دل بود، کشان کشان میبرد،

۱ به هر خدمت [د]

۲ میسازد [د]

۳ × [د]

۴ جمعی [د]

۵ طیب [س][ت]

۶ × [د]

۷ میفرستانند [ت][د]

۸ که [د]

۹ طیب [س][ت]

۱۰ × [د]

۱۱ میکنند [ت]

۱۲ آنی [د]

۱۳ × [د]

۱۴ از علم [د]

۱۵ است [د]

۱۶ نیز [د]

۱۷ میسازند [د]

۱۸ آن [د]

۱۹ × [ت]

می آورد\*<sup>۱</sup> و نیز از ترک بچه های ماه روی<sup>۲</sup> و عرب بچه های سیاه چشم را به غلامان شیر و<sup>۳</sup> شکر کرده، به آن قصر بی همتا میگذاشت. هر روز دو مراتب از هر گونه اطعمه لطیفه و اشربه لذیذه در پیش ایشان موجود و لباس تمامی آنها همه از ماووت<sup>۴</sup> گلناره<sup>۵</sup> و از آن عملدارهای ایشان زردوزی بود. +<sup>۶</sup> اما در چشم عیبی داشته باشد. یا مدت عمرش از ده پایان باشد، یا از بست بالا باشد. +<sup>۷</sup> در +<sup>۸</sup> پریزاد خانه راه نمیداد<sup>۹</sup> و از هر جنس معلم و کاتب موجود. گروهی عربی میخواندند<sup>۱۰</sup> و جماعتی فارسی میخواندند<sup>۱۱</sup> و خیلی ترکی میخواندند<sup>۱۲</sup> و پاره ای فرنگی میخواندند<sup>۱۳</sup> و جمعی در کاتبان خوش خط نسخ و تعلیق مشق میکنند و چندی خط ثلث می نویسند {۵۷۵} و یک سر این علم ها را از نظر گذرانده، خوب استعداد پیدا کردن بعد ناظران نیک تأمل میکنند. آنی که [قابلیت پیدا کرده و]<sup>۱۴</sup> تربیت اثر کرده است، [آنها را]<sup>۱۵</sup> جدا میسازند. (۶۳۱) هر ماه چندی که باشد، <۵۶۴پ> به خدمت محمد علی پادشاه میرند و موافق استعداد ایشان [به کدام]<sup>۱۶</sup> علمی که

- ۱ [د]، آرد [س] [ت]
- ۲ رو [د]
- ۳ [د]
- ۴ ماوت [ت] [د]
- ۵ گلناره [د]
- ۶ و [د]
- ۷ هم [ت] [د]
- ۸ آن [د]
- ۹ نمیداد [ت] [د]
- ۱۰ میخوانند [د]
- ۱۱ میخوانند [ت] [د]
- ۱۲ میخوانند [د]
- ۱۳ میخوانند [ت] [د]
- ۱۴ قابل علم آمده است، بر او [د]
- ۱۵ × [د]
- ۱۶ × [د]

مرتبه وزارت رسیده بود. رفتن فقیر را شنیده، از روی قدردانی بلا توقف به پیش فقیر آمد و طریق خدمتکاری را باید و<sup>۱</sup> شاید به جای آورد. در آن زمان محمد علی پادشاه از جانب خود نیابة<sup>۲</sup> حبیب افندی نام کهیایی<sup>۳</sup> خود را یعنی وزیر خود را گذاشته، خود به شهر اسکندریه خرامید. در آن جا سکونت اختیار <۵۶۳پ> نموده بود. نزد همگنان نهفته مباد که تعریف مصر قاهر از توصیف مستغنی است. از بس که ام البلاد است، از هر وجه نظیر و عدیل (۶۳۰) ندارد. اگر شروع بیان مصر رود، سخن +<sup>۴</sup> به طول می انجامد.

خلص کلام آن که در آن حین به نام کاشف افندی از محمد علی پادشاه مکتوب آمد که > در قصر عین به رفاقت احمد افندی ناظر<sup>۵</sup> کاشف افندی را به آن خدمت مأمور ساختیم.< آن برادر نام زد آن خدمت گشت. فقیر بعد از دو سه روز تفرج کنان از شهر بیرون شده، از برای فاتحه خوانی به آن سرزمین رسیدم. این خبر را کاشف افندی شنیده، استقبال نموده، به جای خود برده، نشانید و آن قصری بود، از مصر نیم فرسخ بیرون و در میان مصر عتیق<sup>۶</sup> و بولاغ و در لب دریای نیل مبارک {۵۷۴پ} واقع شده است. در غایت دلگشا و مفرح، پانصد حجره داشت. سه آشیانه که همه از سنگ مرمر بود و از آینه های فرنگی<sup>۷</sup> دریچه های بغدادی ساخته اند و حجره های او همه در کمال بزرگی و در<sup>۸</sup> نقش و<sup>۹</sup> نقوش بسیار زیب داده اند و در هر حجره <۵۶۴ر> ده جوان ماه پیکر موجود. چنانچه دأب و رسم محمد علی پادشاه این بود که هر سال از اطراف و جوانب گروه گروه غلام بچه<sup>۱۰</sup> خریده،

۱ × [ت]

۲ نیابتا [ت][د]

۳ کهیای [د]

۴ بسیار [ت][د]

۵ ناضر [د]

۶ ساختم [ت]

۷ اتیق [د]

۸ فرنگ [د]

۹ از [د]

۱۰ × [ت]

۱۱ بچه ها [د]

شهرهایی<sup>۱</sup> که در آن جا سکونت اختیار کرده بودند، رفتن فقیر را شنیده، همه استقبال نمودند. به رفاقت ایشان به تکیه قلندران نزول فرمودیم.

ذکر<sup>۲</sup> وارد گردیدن فقیر در ولایت مصر و از آن جا [برآمده]<sup>۳</sup> متوجه مقصد شدن قصه کوتاه. آن قلندر خانه در کمال <۵۶۳ر> دلگشا و در غایت صفا بود. چنانچه فقیر در آن جا به زبان رومی قطعه نوشته<sup>۴</sup>.

رباعی<sup>۵</sup>

نقشبند نینگ<sup>۶</sup> در گهی دور بول مقام دلگشا

خواه قیل حقه عبادت خواه قیل کیف صفا

نان قاق و خرقه پشمینه قایل اینک

ایشته<sup>۷</sup> میدان محبت کیل عزیزیم مرجبا

در آن زمان بود که کاشف افندی نام کسی بود. از مردم خجند و او در وقت خوقند بودن به خدمت جد<sup>۸</sup> فقیر جناب سیادت پناهی حکیم توره لاف خدمتکاری میزد. نوعی<sup>۹</sup> از گردش<sup>۱۰</sup> فلک به حج آمده، باز گشت گذارش به مصر افتاده، سکونت اختیار کرده بود. در آن وقت به خدمت محمد علی پادشاه ملازمت اختیار نموده، {۵۷۴ر} به مرور ایام قریب به

۱ شهری هایی [د]

۲ × [د]

۳ به راه دریا [د]

۴ نوشته ام [ت]، نوشته ام، این است [د]

۵ قطعه [د]

۶ × [د]

۷ ایسته [د]

۸ جدی [ت]

۹ نوع [د]

۱۰ گردی [د]

میرود. اگر مرا هم از کام دل خود امیدوار گردانی، در ساعت این جوان را مع چیز<sup>۱</sup> بسیار به خدمت تو می آرم. هم کام می برداری +<sup>۲</sup> هم پل. [این سخن از من شنید، در حال ترا گذاشت]<sup>۳</sup> و حالا آن که گفته اند.

### مصراع

زور باید نه زر که بانو را <

+<sup>۴</sup> فقیر از آن برادر از زمین تا آسمان منت دار شدم<sup>۵</sup>، تمام راه در حق او دعا میکردم. چون به منزل خویش رسیدم<sup>۶</sup>، همان شب < ۵۶۲ پ> به چندین ترس و هراس روز کردیم و از آن منزل کوچیده، به دو منزل دیگر در موضع خان که حالا به جهادیه موصوف<sup>۷</sup> است، وارد گردیدیم، در کمال وسعت و معموری. از آن جا تا مصر قاهره یک فرسخ است. تمام سر کرده ها<sup>۸</sup> و +<sup>۹</sup> لشکریان مصر در آن جا میباشند. در آن وقت پنجاه هزار نظام (۶۲۹) +<sup>۱۰</sup> جدید در آن موضع لشکرگاه حاضر میبود<sup>۱۱</sup> و همه ایشان سرخ پوشند. وقتی که از بهر تعلیم بیرون میشوند، گویا از دور به نظر مردم چنان مرئی میشود، +<sup>۱۲</sup> عالمی را لاله زار گرفته باشد و قصرهای عالی بنا کرده اند. بالاخر { ۵۷۳ پ } همان شب در آن جا از رنج راه بر آسودیم. روز دیگر بر اشتر باد پا نشسته، متوجه مقصد شدیم. چون به مصر قاهره نزدیک رسیدیم، هم

- ۱ چیزی [ت]
- ۲ و [ت] [د]
- ۳ × [د]
- ۴ این سخن از من شنید، در حال ترا گذاشت [د]
- ۵ شده [د]
- ۶ رسیدیم [ت] [د]
- ۷ موسوم [د]
- ۸ کرده [د]
- ۹ بسیاری [ت] [د]
- ۱۰ نظام [د]
- ۱۱ مینمود [ت]، × [د]
- ۱۲ که [د]

(۶۲۸) چون فقیر این مقدمه را از رفیق شنیدم، در بحر تفکر<sup>۱</sup> غوطه زدن گرفتم. به آن رفیق التجا آوردم که >تو خود از بهر خدا +<sup>۲</sup> نوعی کرده، از این گرداب بلا خلاصی<sup>۳</sup> ندهی. از دست رفتم<sup>۴</sup>. < در آن وقت قریب سیصد<sup>۵</sup> از فاحشه های بیباک بر سر فقیر هجوم کرده بودند. آن رفیق مهربان در آن حین به زبان عربی سخن بسیار به آن پری پیکر گفت. آن طناز<sup>۶</sup> رو به فقیر آورده، چیزی میگفت. چنانچه بر<sup>۷</sup> این مضمون گفت.

<۵۶۲ر> مصراع

بر خیز و بیا چنانکه من دانم و تو

فقیر نمیدانستم که چه میگوید. به تعلیم<sup>۸</sup> برادر سر رضا می جنبانیدم. بعد از ساعتی دست فقیر را گذاشت و رخصت داد. چون فقیر از دست آن بیباک خلاص شده<sup>۹</sup>، شکر کنان در نهایت سرعت به راه منزلگاه کاروان شدم<sup>۱۰</sup>. در راه از آن برادر پرسیدم که >به چه تدبیر مرا از آن گرداب معصیت خلاص کردی. < گفت، >به آن رعنا گفتم، [سیاح بچه مرا از بهر همین مصلحت آورده بود. {۵۷۳ر} اما حالا در پیش] <sup>۱۱</sup> این جوان یک فلوس نیست. +<sup>۱۲</sup> اگر به خانه خود بری، این قلندر بچه مفت و رایگان از تو کام دل حاصل میکند. به در<sup>۱۳</sup>

۱ تحیر [ت] [د]

۲ یک [د]

۳ خلاص [د]

۴ برفتم [د]

۵ سه صد [ت]

۶ تناز [ت]

۷ به [د]

۸ آن [د]

۹ شدم [د]

۱۰ شدیم [ت] [د]

۱۱ × [د]

۱۲ حالا [د]

۱۳ زودی [د]



بیت<sup>۱</sup>

هزار شیوه بکار است دلربایان را      نه هر که برد دلی رسم دلبری داند

چون در<sup>۲</sup> نزدیک میان رسید، در غایت چستی و چالاکی دست به گردن فقیر انداخته، محکم گرفت. فقیر در غایت غضب میخواست که آن بی باک را بر زمین زنم. آن رفیق جانی گفت، «خاموش باش که خود را بر تلف انداختی.» چون آواز او را شنیدم، خود را به تکلف نگاه داشتم و آن رعنا به زبان عربی چیزی میگفت. مفهوم فقیر نمیشد و آن رفیق به زبان عربی بسیار ماهر بود. +<sup>۳</sup> گفت، «این جماعه فاحشه هستند. ماه به ماه <۵۶۱پ> در خزینۀ پادشاه<sup>۴</sup> خرج میدهند. حالا در میان مصر قاهره دوازده هزار فاحشه دفتری هست. از این مردم زورتر کس در این ولایت ها نمی باشد. اُشتلم شما +<sup>۵</sup> کار نمی آید. نوعی تدبیر کار فرموده، از دست این جماعه خلاص نشوید، از دست این رعنا خلاص شدن شما +<sup>۶</sup> صورت نمی بندد و حالا شما را محکم گرفته است. میگوید که به منزل ما تشریف فرمایند<sup>۷</sup>، <چنانچه گفته است.><sup>۸</sup>

{۵۷۲پ} مثنوی<sup>۹</sup>

مبادا کس که از زن بهره<sup>۱۰</sup> جوید      که اندر شوره هرگز گل نروید

- ۱ × [د]
- ۲ × [ت][د]
- ۳ آن برادر [د]
- ۴ پادشاهی [ت]
- ۵ به [د]
- ۶ اکنون [ت][د]
- ۷ فرماید [ت]
- ۸ [ت]
- ۹ بیت [د]
- ۱۰ مهر [د]

بیرون<sup>۱</sup> گذاشته، (۶۲۷) فقیر<sup>۲</sup> به اتفاق یک<sup>۳</sup> سیاحی<sup>۴</sup> و<sup>۵</sup> جهان نوردی یمنی<sup>۶</sup> در کمال چستی و چالاکی به درون شهر شتافتیم.

### [گرفتار شدن فقیر به دست زن بیباکان و به چندین تدبیر خلاص شدن]

القصة. [۷<sup>#</sup> چون در میان چار<sup>۸</sup> سو رسیدیم، در غایت آبادی بود. دو جانب رسته را به دوکانهای خوش عمارت آراسته اند. در هر جا پری رویان عربی گروه گروه < ۵۶۱ر > نشسته، به عیش و عشرت خود مشغول اند. فقیر آن حال را دیده، انگشت تحیر به دندان گزیدم. از رفیق خود پرسیدم. گفت، > همانا مگر فاحشه های مصر را نه شنیده اید. این است که می بینید. < چون این سخن از این<sup>۹</sup> برادر شنیدم، خاموش شدم. در آن وقت بود که از میان آنها یک پری زادی برخواست. همه آنها { ۵۷۲ر } از جای بر جستند. دو کنیز ماه رو از دو جانب او در آمده، از زینه فرود آمده، خرامان خرامان چون کبک دری رو به جانب رسته آورد. در غایت حسن و جمال بود. به زر و<sup>۱۰</sup> زیور خود را آراسته و یقین فقیر شد، +<sup>۱۱</sup> بزرگ آن جماعه بود.

۱۳ فقیر با [د]

۱۴ معشوقه [د]

۱۵ یعنی [د]

۱ معه خدمتکاران خود در آن جا [د]

۲ × [د]

۳ × [ت] [د]

۴ سیاح [د]

۵ × [د]

۶ × [ت]

۷ [ت]

۸ چهار [ت] [د]

۹ آن [د]

۱۰ × [ت]

۱۱ که [د]

و گوارا<sup>۱</sup> ترین آبها است.

### [بیت]

در مزه چون شیر آب حیات در خوشی همشیره آب حیات<sup>۲</sup>

و همان رود +<sup>۳</sup> از زمان آدم +<sup>۴</sup> تا بالوقت در آن کول<sup>۵</sup> منجمد میشود و تمامی آبهای کوه نیز آن جا جمع میشود و<sup>۶</sup> جای بر آمد<sup>۷</sup> آب معلوم نیست. < ۵۶۰ پ > با وجود این امر عجیب که +<sup>۹</sup> یک انگشت نه کم میشود و نه زیاد نمیدانند که حکمت چیست. زبده کلام آن که از آن جا کوچیده، بعد سه منزل در ولایت غزه [داخل شدیم]<sup>۱۰</sup>. آن شهری بود، در کمال معموری. از هر جنس فواکه موجود. { ۵۷۱ پ } خصوص اناری داشت که در هیچ اقلیم نمیباشد. در نزد او +<sup>۱۱</sup> انار جلال آباد و شهر سبز خوشه چین او باشد. به یک فلوس سیاه پنج انار بزرگ میداد. روز دیگر از آن موضع خرم کوچیده، رو به مقصد آوردیم. ده شب و روز در آن بیابان خونخوار راه می پیمودیم. الا ریگ چیزی را نمیدیدیم. روز دهم از آن بیابان بی پایان خلاص یافته، در موضع شهر شمایل رسیدیم و از جهة خوراک که<sup>۱۲</sup> کاروانیان بسیار به تنگ آمده بودیم، +<sup>۱۳</sup> معشوق<sup>۱۴</sup> خود +<sup>۱۵</sup> ماهر افندی را [در

- |    |                  |
|----|------------------|
| ۱۷ | تخمین [د]        |
| ۱  | لطیف [د]         |
| ۲  | × [ت] [د]        |
| ۳  | بزرگ [ت] [د]     |
| ۴  | علیه السلام [د]  |
| ۵  | بحر [د]          |
| ۶  | تمام [د]         |
| ۷  | × [ت]            |
| ۸  | آمدن [د]         |
| ۹  | در چهار فصل [ت]  |
| ۱۰ | وارد گردیدیم [د] |
| ۱۱ | گویا [د]         |
| ۱۲ | مردم [د]         |

عجایبات<sup>۱</sup> دنیا همان جا را بیان میکند که نیم آن رود جانب < ۵۶۰ > شامش<sup>۲</sup> سرما و<sup>۳</sup> جانب مصرش<sup>۴</sup> گرما<sup>۵</sup>. (۶۲۶) الحق<sup>۶</sup> نیک ملاحظه کردم که صاحبان کتاب حق گفته اند. روز دیگر از آن منزل کوچیده، راه طی میکردیم. در اثنای<sup>۷</sup> راه اتفاقاً [گذار ما]<sup>۸</sup> در چاه یوسف علیه السلام { ۵۷۱ ر } افتاد که برادران در آن چاه انداخته بودند. +<sup>۹</sup> در آن جا فرود آمدیم. از خشت پخته کاروان سرای ساخته اند. فقیر به دست خود ریسمان انداخته، دیدم، هفت گز بود و حالا مانند سردابه است و نمیدانم به<sup>۱۰</sup> مرور ایام [و انقلاب روزگار]<sup>۱۱</sup> به این درجه رسیده است. یا مؤرخان<sup>۱۲</sup> در سخن مبالغه کرده اند.

القصه. روز دیگر از آن جا کوچیده، در میانه شهر کنعان و تبریه نزول فرمودیم و [حالا کنعان]<sup>۱۳</sup> خراب شده است و تبریه آباد، در غایت خوبی. در آن جا به اصطلاح رومیان هفت چشمه مسمی به<sup>۱۴</sup> چشمه قدرت که همه وقت به<sup>۱۵</sup> گرمی<sup>۱۵</sup> او دست میسوزد و کولی دارد، در کمال وسعت، +<sup>۱۶</sup> دور او تخمیناً<sup>۱۷</sup> دوازده فرسخ و گرد او همه کوه و آب او [صاف و لطیف

- |    |                                    |
|----|------------------------------------|
| ۱  | تعجبات [د]                         |
| ۲  | شام رویه اش [د]                    |
| ۳  | نیم [د]                            |
| ۴  | مصر رویه اش [د]                    |
| ۵  | گرم [د]                            |
| ۶  | فقیر [ت] [د]                       |
| ۷  | اثنایی [ت]                         |
| ۸  | گذارم [د]                          |
| ۹  | و [ت]                              |
| ۱۰ | × [د]                              |
| ۱۱ | × [د]                              |
| ۱۲ | صاحبان مؤرخان [ت]، صاحبان کتاب [د] |
| ۱۳ | کنعان حالا [د]                     |
| ۱۴ | هفت [د]                            |
| ۱۵ | از [د]                             |
| ۱۶ | و [ت]                              |

میگویی<sup>۱</sup>. > آن بیچاره خواموش نشست. در آن وقت به فقیر از مردم شهر حلب ماهر افندی نام ترک بچه رفیق شد. در نهایت حسن و<sup>۲</sup> جمال و هنوز خط سبزش به گرد {۵۷۰پ} عارضش ندمیده، از رفاقت آن گل اندام از شادی به پراهن نمیگنجیدم. در میان فقیر و آن پری چهره چنان دوستی پذیرفت که چون دو مغز بادام جان و<sup>۳</sup> تن به یک پوست بود.

### بیت<sup>۴</sup>

متصل ما را خیال روی جانان بر دل است  
من غلام آن پری رویم<sup>۵</sup> که عاشق<sup>۶</sup> پرور است

### ذکر رفتن فقیر از شام جنت نظیر به صوب مصر قاهره

بالاخر بعد از پانزده روز +<sup>۷</sup> به رفاقت آن پری رو از آن ولایت بی نظیر رخت اقامت بر جانب مصر قاهره بستیم و در محافه<sup>۸</sup> عالی کرایه کرده، متوجه مقصد شدیم<sup>۹</sup>. بعد از طی مسافت در موضع جسر یعقوب علیه السلام وارد گردیدیم. آن موضع است، در نهایت خوبی و<sup>۱۰</sup> اما کسی نیست و رود<sup>۱۱</sup> بزرگ از میان کوه می آید. به کول<sup>۱۲</sup> +<sup>۱۳</sup> تبریه میریزد. چنانچه صاحب کتاب عجایب المخلوقات و سیر<sup>۱۴</sup> البلاد در کتاب خود میفرماید، یکی از جمله

۱ میگوی [د]

۲ [ت]

۳ × [ت]

۴ × [د]

۵ رویی [د]

۶ عاشیق [ت]

۷ فقیر [د]

۸ شدم [د]

۹ × [د]

۱۰ رودی [د]

۱۱ × [ت][د]

۱۲ به [د]

۱۳ سر [د]

شرافت شام جنت نظیر دیگر<sup>۱</sup> اثبات حاجت نیست. مستمعان خود مطالعه (۶۲۵) فرمودن گیرند.

{۵۷۰ر} الغرض. روزی در جامع یحیی نبی<sup>۲</sup> علیه السلام با چندی از سیاحان طرح مجلس افکنده بودیم. در آن وقت فقیر بی اختیار خندیدم. شخصی بود، ملا خدای بپردی نام، در کمال پیری. در عصر شاه مراد بی والنعمی قبه طلالی قطب چهاردهم<sup>۳</sup> ثمرقند را<sup>۴</sup> دزدیده<sup>۵</sup> برده بود. +<sup>۶</sup> در آن شهر چندین سال باز سکونت اختیار کرده +<sup>۷</sup>، همان کس سبب خنده را از فقیر پرسید. +<sup>۸</sup> گفتم، <چه خوش مردمانی که در این ولایت می آیند، باز گشته به جانب ما وراء النهر میروند. چنانچه گفته است.

#### بیت

شهر ما شهر بتان است چه زیبا شهر است

هیچ عاقل به جهان ترک چنین جا نکند

آن پیر نیز خندید. فقیر گفتم، <سبب خنده چیست.> او گفت، <هر کس که در این ولایت آمد، همین سخن را گفته است و بر نان و نصیب <۵۵۹پ> چه میفرماید<sup>۹</sup>. انشاء الله زنده باشم، شما را هم خواهم دید > +<sup>۱۰</sup>. فقیر گفتم، <اختیار جزئی در بنده است. تو بیکار

۱ دیگر [د]

۲ یحیی [س]

۳ چاردهم [ت]

۴ او [د]

۵ دوزدیده [ت]

۶ و [ت][د]

۷ بود [ت]

۸ فقیر [د]

۹ میفرماید [د]

۱۰ گفت [د]

>خدایت<sup>۱</sup> سلام میگوید. بعد میفرماید که بگو به دوستم محمد که خود میگفت که بی امت قدم در [بهشت نمی نهم]<sup>۲</sup>. اگر<sup>۳</sup> جنت را در فوق خلق کرده باشم، در فوق شام کرده ام. در زمین کرده باشم. در تحت زمین شام کرده ام [و اگر]<sup>۴</sup> معلق کرده باشم، بر دیوار شام کرده ام. +<sup>۵</sup> به چه سبب در آن جا آمده است. بهترین اولاد آدم چون این پیام از حضرت رب العزت شنید، در کمال تعجیل به جانب مدینه منوره مراجعت فرمود<sup>۶</sup> و حالا آن زمین زیارت گاه است. <۵۵۹ر> به قدم النبی<sup>۷</sup> اشتها<sup>۸</sup> دارد. نشانه قدم +<sup>۹</sup> آن حضرت [علیه السلام]<sup>۱۰</sup> موجود است. نکته سنجان بلاغت را آن که اگر کسی گوید که در آن وقت وحی نازل نشده بود. این سخن [از کجا است]<sup>۱۱</sup>. جواب این که تواند بود که رویای صالحه باشد. از بس که پیغمبر +<sup>۱۲</sup> علیه السلام فرمود<sup>۱۳</sup>، رؤیاء المؤمن جزء من ست<sup>۱۴</sup> و اربعین جزء من النبوة +<sup>۱۵</sup>. و اکنون به

- 
- ۱۱ نبی [ت] [د]  
 ۱۲ × [د]  
 ۱۳ گفتند [د]  
 ۱ خدای تعالی [د]  
 ۲ جنت نهم [د]  
 ۳ × [د]  
 ۴ × [د]  
 ۵ و اگر [ت]  
 ۶ فرموده [ت]، فرمودند [د]  
 ۷ نبی [د]  
 ۸ مبارک [د]  
 ۹ × [د]  
 ۱۰ انگاشت [د]  
 ۱۱ صلی اله [ت]  
 ۱۲ فرموده [د]  
 ۱۳ سته [د]  
 ۱۴ صلح [د]

چشم خود طوطیا ساختم و سه روز اعتکاف نشستم. بعد از آن جا متوجه دمشق شدم. بعد از طی مسافت در [دیهه ای]<sup>۱</sup> رسیدم، آن را قدیفه مینامند. در آن جا یوسف پروانچی<sup>۲</sup> مذکور به چندین خاری دنیای دون را وداع کرده، رو به عقبی آورده است. قضا فرصت نداده است،<sup>۳</sup> به شام جنت نشان در آید. بالاخر <۵۵۸پ> از آن<sup>۴</sup> منزل کوچیده، در ممالک دمشق شام وارد گردیدم.

ذکر رسیدن فقیر به شام جنت نظیر و<sup>۴</sup> بعد از چند روز متوجه مصر قاهره شدن زبده کلام آن که فقیر چون داخل شهر شدم، عقل از من زایل شد. در<sup>۵</sup> خوبی و نراکت آن شهر از تعریف مستغنی است.

## [بیت]

شهر چو بهشت از نیکویی      چون باغ ارم به تازه رویی<sup>۶</sup>

چنانچه نقل است که جناب حضرت خیر البشر از حضرت خدیجه کبرا مال گرفته، جهة تجارت متوجه شام شریف شد.<sup>۷</sup> بعد از قطع مراحل یک فرسخ به شهر نزدیک آمده، نزول اجلال فرمود<sup>۸</sup>. {۵۶۹پ} در آن وقت بود که از جناب حضرت کبریایی<sup>۹</sup> جبرئیل [علیه السلام]<sup>۱۰</sup> مأمور شده، به صحبت حضرت نبینا<sup>۱۱</sup> علیه [الصلاة و] السلام رسیده، گفت<sup>۱۲</sup>،

۱ دهه ای [د]

۲ که [ت]

۳ جا [د]

۴ × [د]

۵ × [د]

۶ × [ت][د]

۷ شدند [د]

۸ فرمودند [د]

۹ کبریا [د]

۱۰ امین [د]



گرفتیم و از آن بلای سخت مفت و رایگان خلاص شده، شکر کنان و خنده زنان راه طی می نمودیم. رفیقان و چندی از آن سرو قدان ارمنی ها<sup>۱</sup> از جواب فقیر تحسین ها نموده، ماشاء الله میگفتند.

القصه. بعد از طی مسافت به منزل رسیده، از رنج راه بر آسودیم، <پ> چنانچه<sup>۲</sup> گفته اند.

### مصراع<sup>۳</sup>

اگر افسانه ها خواب آورد من قصه ها دارم

زبدۀ کلام این<sup>۴</sup> که در آن جهان گردی گذارم به موضع تورپاق قلعه سی <۵۵۸ر> افتاد که در ایام ماضیه و<sup>۵</sup> نامیه امیر تیمور صاحبقران با سلطان روم بایزید ایلدوروم محاربه کرده بود و حالا در نهایت خرابی یک روز آن جا آسودیم و از آن جا به ولایت قیصریه وارد گردیدیم<sup>۶</sup> و آن شهری بود، نهایت بزرگ و آباد و از آن ولایت نیز رو به مقصد آورده، (۶۲۴) قطع راه میکردیم<sup>۷</sup> و از شهرهای بزرگ عبور [می نمودیم]<sup>۸</sup>. بعد از چندین محنت و مشقت در ولایت لاتکیه رسیدم. آن شهری است، در غایت {۵۶۹ر} وسعت و در کمال معموری و قبر سلطان الاولیا و غوث الاتقیا جناب سلطان ابراهیم ادهم آن جا است. چون به آستان بوسی<sup>۹</sup> آن قبلۀ ارباب حقیقت مشرف شدم، در نهایت خرسندی خاک آن آستانه<sup>۱۰</sup> + به

۱ ارمنی [ت]، ارمنها [د]

۲ به حکم آن که [د]

۳ × [د]

۴ آن [ت][د]

۵ در ایام [ت]

۶ گردیدم [ت]

۷ × [ت]

۸ میکردم [ت][د]

۹ میکردم [د]

۱۰ را [ت]

داشت که از آن جا گذریم. باز به راه باریک به کوه صعود میکردیم. اگر یک تفنگ دار باشد، صد هزار کس +<sup>۱</sup> او را به دست آوردن متعذر بود. آن دزدان<sup>۲</sup> همان جای وسیع را کمین گاه<sup>۳</sup> خود ساخته بودند و مایان در اندیشه بودیم که به چه تدبیر از آن مهلکه نجات می یافته باشیم و<sup>۴</sup> در آن وقت بود که یکی از آن دزدان<sup>۵</sup> پیش آمده، پرسید که <شمایان چه کسید و از کجا می آید و غبار بسیاری که در عقب شمایان نمایان میشود، چیست. > رفیقان گرنگ خواستند که موافق واقع<sup>۶</sup> جواب گویند. فقیر در کمال چُستی به سخن دروغ<sup>۷</sup> مصلحت آمیز +<sup>۸</sup> به از راست<sup>۹</sup> فتنه انگیز عمل نموده، جواب دادم که<sup>۱۰</sup> <ما فراشان خورشید پادشاه ایم. از برای درستی کردن منزل سبقت نمودیم و آن غباری که می بینی، > ۵۵۸ پ.ح. < پادشاه معدن<sup>۱۱</sup> است. +<sup>۱۲</sup> از روم با تجمل پادشاهی می آید. اینک رسید. > چون این سخن آن دزدان از فقیر شنیدن همان، { ۵۶۸ پ } [ به جمله ]<sup>۱۳</sup> رو به گریز آوردن همان و ندانستند که غبار +<sup>۱۴</sup> سم سمند نصارا<sup>۱۵</sup> زنان بود.

القصة. مایان در کمال سرعت از آن زمین گذشته، در غایت چُستی خود را در کوه

- ۱ باشد [ت]
- ۲ دوزدان [ت]
- ۳ گاهی [ت]
- ۴ × [د]
- ۵ دوزدان [ت]
- ۶ واقع [ت]
- ۷ دروغ [ت]
- ۸ را [ت]
- ۹ [د]، راستی [س] [ت]
- ۱۰ × [د]
- ۱۱ عدن [د]
- ۱۲ که [ت]
- ۱۳ × [ت]، جمله [د]
- ۱۴ ارمنی زنان بود. القصة. [ت]
- ۱۵ نصاری [د]

است و اینک میرسد و این < ۵۵۸ ه.ج. > مژده بر تمام شهر منتشر گشت. همه خاص و<sup>۱</sup> عام شادیهها میکردند. در آن حین چهار<sup>۲</sup> صد زن<sup>۳\*</sup> ارمنی که هر کدام در حسن و<sup>۴</sup> جمال به آفتاب عالم تاب هم سری میکردند، چنانچه جماعه گورجستانی و ایشان در حسن و<sup>۵</sup> جمال شهره آفاق اند. در آن ولایت جمع شده، اراده زیارت به صومعه خود داشتند. در میان ایشان از ده مرد بیش کسی دیگر نبود. روز دیگر +<sup>۶</sup> ما ده قلندر متوجه مقصد شدیم. قریب دو فرسخ راه قطع کرده بودیم که ایشان بر لب رودی فرود آمده، به قهوه خوردن مشغول شدند<sup>۷</sup> و ما ده قلندر مع چندی از آن ماه پیکران متوجه راه شدیم. در راه در آن پری چهره ها از هر مقوله سخن میکردیم. تخمیناً<sup>۸</sup> یک سنگ راه طی کرده بودیم که از قضا چهل دزد<sup>۹</sup> جرار همه مسلح<sup>۱۰</sup> ما را کمین کرده [بوده اند]<sup>۱۱</sup>. چون از این بلای { ۵۶۸ ه.ج. } ناگهانی واقف<sup>۱۲</sup> شدیم، همه از جان شیرین دست شسته، منتظر قتل و یغمای خود شدیم و اما آن زمین کوهستان بود که ( ۶۲۲ ه.ج. ) +<sup>۱۳</sup> راه او از بالا بر لب دریا میفرامد. تخمیناً<sup>۱۴</sup> لب دریا سیصد<sup>۱۵</sup> قدم +<sup>۱۶</sup> مسافت

- ۱ × [د]
- ۲ چار [د]
- ۳ [د]، زنی [س] [ت]
- ۴ × [ت]
- ۵ × [ت]
- ۶ بالاتفاق [ت]
- ۷ شدن [ت]
- ۸ تخمین [ت]
- ۹ دوزد [ت]
- ۱۰ مصلح [ت] [د]
- ۱۱ بودند [ت] [د]
- ۱۲ واقیف [ت]
- ۱۳ نمودار [د]
- ۱۴ تخمین [ت]
- ۱۵ سه صد [ت]
- ۱۶ راه [ت]

[القصه. از آن جا]<sup>۱</sup> به جماعه شیطان پرست رسیدم. آنها شیطان را ملک الطاوس می‌گفتند. در میان آن سکان تُف کردن نبود و<sup>۲</sup> هر کس ندانسته<sup>۳</sup>، تُف کند، او را به قتل میرساندند<sup>۴</sup> و آنها تُف خود را به رویمان [از دهن]<sup>۵</sup> می‌گرفتند و از آن مردم به چندین عذاب خلاص شده، در میان جماعه کوردیه<sup>۶</sup> افتادم<sup>۷</sup>. در سه جا فقیر به دزدان<sup>۸</sup> دوچار آمدم. به چندین تدبیر و حيله خلاص شدم. اگر بیان کنم، سخن به طول می‌انجامد. +<sup>۹</sup> به هر کدام او<sup>۱۰</sup> شروع رود، +<sup>۱۱</sup> مستمعان را<sup>۱۲</sup> ملال خاطر می‌گردد. بنابر آن به همین قدر اکتفا کردم<sup>۱۳</sup> <۵۵۷پ.ح.> (۶۲۳ح.) یکی از آن جمله این بود که چون در ولایت مرسمان وارد گردیدم، در آن وقت راه مسدود بود. احدی به جانب شهر معدن<sup>۱۴</sup> نمی‌رفت. از بس که حرامیان {۵۶۷پ} راه را مکرر زده، چندی بازرگان را به قتل رسانیده، مالشان را به تاراج برده بودند. بنابر آن ما ده قلندر گردن خار خار در آن ولایت روز می‌گذرانیدیم. اتفاقاً خبر رسید که سلطان روم خورشید پادشاه نام ندیم خود را در ولایت معدن حاکم کرده، فرستاده

- ۱ بعد از قطع راه [د]
- ۲ × [ت]
- ۳ نداشت [د]
- ۴ میرسانیدند [د]
- ۵ × [ت]
- ۶ کوردی [د]
- ۷ افتادیم [د]
- ۸ دوزدان [ت]
- ۹ و در آن مراحل به چندین شهرهای بزرگ وارد گردیدم. [ت]، و در آن مراحل به چندین شهرهای بزرگ وارد گردیدیم. [د]
- ۱۰ × [د]
- ۱۱ به [ت][د]
- ۱۲ × [د]
- ۱۳ کردیم [د]
- ۱۴ عدن [د]

آمد که اگر کوه باشد، بعد از ده روز خواهیم رسیدن<sup>۱</sup>. آن سیاهی تا رفت، بزرگ شد. در میان دو ساعت کوه بودن او معلوم شد<sup>۲</sup>. بعد از آن نفسی گذشته بود که اشجارهای ولایت (۶۲۳) نمودار شد. دانستم<sup>۳</sup> که کشتی چه مقدار سریع السیر<sup>۴</sup> بوده است. چون به ساحل دریا رسیدیم، با زورچه های خورد<sup>۵</sup> از کشتی به شهر بر آمدم. آن شهری بود، در کمال نزاکت و لطافت و<sup>۶</sup> در غایت معموری. از هر گونه فواکه در آن جا موجود و فواره های عالی در هر منزل جاری و در کنار آن شهر کوهی است، به<sup>۷</sup> نهایت بلندی و در میانه آن کوه مزاری است که به حضرت امام اشتهار دارد، در غایتی<sup>۸</sup> با صفا، {۵۶۷ر} یک جانب او دریای شور و یک جانب او شهر. مثل آن موضع در ربع مسکون البته نخواهد بود و این ولایت<sup>۹</sup> + <۵۵۷پ> اول مقدمه طوبعات<sup>۱۰</sup> ممالک آنه دول است. به شام شریف منتهی<sup>۱۱</sup> می شود<sup>۱۲</sup> و در آن وقت فقیر نهایت مرض بودم. ده روز در آن منزل بهشت آیین از رنج سفر دریا آسودم. [بعد دو]<sup>۱۳</sup> خچیر باد<sup>۱۴</sup> رفتار کرایه کرده،<sup>۱۵</sup> متوجه ممالک شام جنت نظیر شدم.

- ۱ رسید [د]
- ۲ گشت [د]
- ۳ دانستند [د]
- ۴ سیر [د]
- ۵ در آمده [ت]
- ۶ × [د]
- ۷ در [د]
- ۸ غایت [ت] [د]
- ۹ سیناب [د]
- ۱۰ × [ت] [د]
- ۱۱ انتها [د]
- ۱۲ یابد [د]
- ۱۳ × [د]
- ۱۴ خوش [د]
- ۱۵ از آن جا [د]

< ۵۵۶پ > [تمام شد]<sup>۱</sup>. هنوز لنگر به زمین نرسیده بود، چنانچه<sup>۲</sup>

بیت<sup>۳</sup>

آن نه دریا که بود صد قلزم      صد چو طوفان نوح در وی کم  
موج او سر بر آسمان میزد      یعنی از ماه تا به ماهی بود

القصه. بعد از +<sup>۵</sup> یک شب و روز الا آسمان و آب چیزی به نظر مرئی نمیشد. آفتاب از آب طلوع میکرد. باز به آب غروب میکرد. ده شب و روز بدین منوال راه می<sup>۶</sup> پیمودیم. کشتی چنان سریع السیر بود که سنگی را در کمال قوت به پیش اندازیم. باز در میان کشتی می افتاد. روزی ملاحان شادیهها نموده، از مردم مژدگانی گویان یک تنگه +<sup>۷</sup> دو تنگه جمع نموده<sup>۸</sup> میگرفتند. فقیر گفتم، <سبب چیست> گفتند، <نزدیک به خشکی آمدیم> فقیر هر چند نظر میکردم، غیر از آب و<sup>۹</sup> آسمان چیزی به نظر مرئی نمیشد. به دوربین هم ملاحظه نمودم، چیزی معلوم نبود. {۵۶۶پ} عاقبت یکی از ملاحان پرسیدم که دلیل نزدیک آمدن خشکی کدام است. <گفت، <اینک نگاه کن> دیدم دو مرغابی در فلک طیران میکند. گفت، <نشانه +<sup>۱۰</sup> خشکی > ۵۵۷ر> همین است> به دل گفتم، ماشاالله. سه روز دیگر راه قطع کردیم. روز چهارم بود که باز ملاحان مژدگانی طلب نمودند. فقیر به دوربین نیک ملاحظه کردم، مثل سیب چیزی به نظر معلوم میشود. گفتند، <همان کوه است> به خاطر فقیر

۱ گذاشتند [د]

۲ × [د]

۳ قصیده [د]

۴ به [د]

۵ قطع [ت]

۶ × [ت]

۷ و [د]

۸ کرده [د]

۹ × [ت]

۱۰ نزدیک آمدن [د]

از بهر سیر استنبول گذشتیم. به راه سیناب تذکیره<sup>۱</sup> یعنی خط راه گرفتیم و وداع کردم. در حال آن امارت پناه بزرگ ناخدا را [طلب کرد]<sup>۲</sup>. فقیر را به او سپرد. رخصت اجازت داد.

### ذکر<sup>۳</sup> [اختیار کردن]<sup>۴</sup> فقیر سفر دریای شور را

+<sup>۵</sup> روز دیگر فقیر در کشتی بزرگ که او را غراب میگفتند، در آمدم. آن کشتی بود، +<sup>۶</sup> در کمال بزرگی. +<sup>۷</sup> دوازده توب در میان او بود. قریب (۶۲۲) هزار کس [در او]<sup>۸</sup> موجود بود و سه آشیانه داشت<sup>۹</sup>. روز دیگر بادبانها را در او<sup>۱۰</sup> تعبیه کرده، به چندین<sup>۱۱</sup> تجمل لاجول گویان متوجه {۵۶۶} دریای شور شدیم. آن بحری بود که نه ته داشت و نه پایان. نقل است که یکی از سلطانهای<sup>۱۲</sup> روم از برای دانستن کنهیت دریا را<sup>۱۳</sup> امر کرد که طناب اندازند. چون ریسمان انداخته، لنگرها<sup>۱۴</sup> را گذاشتند، هزار و<sup>۱۵</sup> پانصد گز ریسمان

۱ تسکیره [ت]، تسکیره [د]

۲ طلبید [د]

۳ × [ت]

۴ اراده [د]

۵ خلص کلام آن که [ت]

۶ که [ت]

۷ و [ت] [د]

۸ × [د]

۹ بوده است [د]

۱۰ آن [ت] [د]

۱۱ چند [ت]

۱۲ سلطانان [د]

۱۳ × [ت]

۱۴ لنگر [د]

۱۵ × [ت] [د]

سودا خانه و از هر ملک تجار بسیار می آید. بعد از چند روز حاکم آن جا عبد الله پادشاه احوال فقیر را شنید<sup>۱</sup> و<sup>۲</sup> در پیش خود طلبید<sup>۳</sup> و بسیار گرامی داشت. در آن وقت بود که حاکم سیناب خواجه<sup>۴</sup> حسن پادشاه که دو بار امیر حاج شده بود، تشریف آورد و او نیز فقیر را در پیش خود طلب نمود.<sup>۵</sup> به پیش او رفتم. دیدم که در میان خیمه عالی نشسته است. +<sup>۶</sup> از دو جانب محرمان صف زده اند و او در کمال پیری. چون چشم او به فقیر افتاد، از جای بر خواست. از دست فقیر گرفت. به پیش خود<sup>۷</sup> نشانید<sup>۸</sup> {۵۶۵پ} و بسیار شفقت پدرا نه کرد و با هم بسیار اختلاط کردیم. فقیر از وی تذکیره<sup>۹</sup> طلب نمودم که به دار السلطنة روم روم. گفت، >افندیم، حالا احوال +<sup>۱۰</sup> استنبول بسیار مذبذب است. هیچ کشتی نه آمده است. مگر از جانب سیناب از بس که سلطان <۵۵۶ر> محمود افندیم یعنی سلطان روم جماعه ینگى چریک را و [بیک تاشیان]<sup>۱۱</sup> را قهر کرده اند. به یک روز هفتاد هزار کس به قتل رسیده است. حالا به روم رفتن خوب نیست. چند روز صبر کنند. عنقریب راه گشاده میشود. بعد روند. خوب است. < از آن جا که اشتیاق بیت الله غلبه کرده بود، به حکم آن که

## بیت

جمال کعبه چنان مرده اندم به نشاط      که خارهای مغیلان حریر می آید

- ۱ شنیده [ت]
- ۲ × [د]
- ۳ طلب نمود [ت][د]
- ۴ حاجی [د]
- ۵ فقیر [د]
- ۶ و [د]
- ۷ × [ت]
- ۸ نشانید [د]
- ۹ تیسکره [ت]، تیسکره [د]
- ۱۰ ولایت [ت][د]
- ۱۱ لشکر باشیان [د]



القصه. فقیر<sup>۱</sup> جانی مفتی از لجه غرقاب آن ورطه بیرون بردم. آن کافران دیدند که صیدشان از دام جست. به چندین غم و اندوه به +<sup>۲</sup> شهر باز گشتند. فقیر در آن جا لحظه ای آسودم<sup>۳\*</sup>. بعد از آن جا سواری نموده، آهسته آهسته بعد از سه روز در نشیمن گاه برادرم شهزاده ملک قاسم نزدیک رسیدم<sup>۴</sup>. آن برادر این خبر را شنیده، استقبال نمود. چون چشم به<sup>۵</sup> یک دیگر افتاد، گریه کنان یک دیگر را در کنار گرفتیم. قریب دو ساعت مجال سخن کردن نبود. بعد از آن سخن گویان به اتفاق آن برادر به منزل او +<sup>۶</sup> فرود آمدیم. چند روز از رنج حبس و از محنت راه آسودیم. آن {۵۶۵ر} برادر طریقه دوستی باید و شاید به جای آورد. به فقیر یک کنیز و یک غلام (۶۲۱) و سه اسب خوب انعام نمود. بعد از یک ماه از آن یار جانی رخصت اجازت یافته، به همان خدمتکارهای<sup>۷</sup> خود [که یکی عبد الله و یکی ابراهیم نام داشت،]<sup>۸\*</sup> متوجه قلعه حنیفه شدیم و از یک دیگر وداع نمودیم.

### بیت<sup>۹</sup>

بو بین مفارقت جان و تن چگونه بود

به جان دوست که هجران هزار چندان است

<۵۵۵پ> بعد از طی مسافت در آن شهر وارد گردیدیم. آن شهری بود، بر لب دریای شور که ترکان او را قره دنگیز میگویند<sup>۱۰</sup>. بزرگترین اسکله های آن بحر است. در غایت

۱ و [د]

۲ جانب [د]

۳ [ت]، آسودیم [س] [د]

۴ رسیدیم [ت] [د]

۵ بر [ت]

۶ آمده [د]

۷ خدمتکاران [د]

۸ [ت]

۹ مصراع [ت]

۱۰ مینامند [د]

جا بودند، قریب<sup>۱</sup># به سیصد<sup>۲</sup> کس بود، همه را بر آورده، نجات دادند. هر کدام ایشان به هر جانب راه گریز را اختیار نمودند. در آن وقت بود که قراولان شهر خبردار شده<sup>۳</sup>، مردم ولایت نیز واقف شده، بیرم خود را ویران کرده، مشعل ها به دست گرفته، به گیر و دار بسیار متوجه حبس خانه شدند. چون این حال را فقیر مشاهده نموده، به اتفاق آن {۵۶۴پ} مبارزان +<sup>۴</sup> در غایت سرعت آمده، خود را به کشتی گرفتیم<sup>۵</sup>. در آن حین قراولان لب دریا خبر یافته، در شبه تیر گرفتند. +<sup>۶</sup>

القصه. فقیر با مبارزان مثل برق از دریا عبور نموده، به شکرانه خلاصی<sup>۷</sup># خود دو رکعت نماز +<sup>۸</sup> ادا کردم. +<sup>۹</sup> در آن وقت بود که لب دریا را چنان مشعل گرفته بود که گویا چراغان دویم [اورون بر پا شد، چنانچه میگوید.]<sup>۱۰</sup>

#### [مثنوی]

در آن هنگامه آتش باد بر دست مسیحا بود کز وی برق می جست  
<۵۵۵ر> فلک سان قلعه با هر سوی رونده چو خرمنهای گل گلهای چیده<sup>۱۱</sup>

۱ [د]

۲ سه صد [ت]

۳ شدند و [ت][د]

۴ فقیر [د]

۵ گرفتم [ت]

۶ ابیات

در آن هنگامه آتش باد بر دست سحابی بود کز وی برق میجست

فلک سان قلعه با هر سوی دیده چو خرمنهای گل گلهای چیده [د]

۷ [ت][د]

۸ شکر [د]

۹ و [ت]

۱۰ اوروں بر باشد، چنانچه میگوید [ت]، پادشاه اوروں گویا بر پا کرده باشند. [د]

۱۱ × [د]

چندین چستی و چالاکی متوجه حبس خانه شدند. چون بر در بندی خانه رسیدند، چهار<sup>۱</sup> کس<sup>۲</sup> بوده گی را به قتل رسانیدند و کلیدها را گرفته، یک به یک در بندی خانه ها را گشاده، به جای فقیر رسیدند. در آن وقت فقیر با چندین غم غصه از درگاه کار ساز بنده نواز خلاصی خود را طلب نموده، منتظر همان شب می نشستم و این رباعی را با چندین ناله میخواندم.

{۵۶۴ر} رباعی

الله ترا عزیز میدارم و بس      با عزت آنکه نیست مانند تو کس  
الله در این واقعه دستم گیری      الله همین زمان به فریادم رس

[نجات یافتن فقیر از آن گرداب ضلالت به لطف الهی]<sup>۳</sup>

به ناگاه +<sup>۴</sup> شعاع مشعل آن ظلمات خانه را چون روز روشن منور ساخت. به زبان چرکسی به آواز بلند چیزی میگفت و زبان ایشان را فهمیده نمیشد. نیک ملاحظه کردم، +<sup>۵</sup> نام فقیر را میبرند. <sup>۶</sup> بلا توقف به آواز بلند جواب دادم. ایشان دانستند که من<sup>۷</sup> در آن جا هستم. در آن خانه را به چندین محنت و<sup>۸</sup> مشقت به تبرهای فولادی پاره پاره کرده، (۶۲۰) در آمدند. <۵۵۴پ> دست فقیر را بوسیده، سخنها میگفتند. فقیر قطعاً به زبان<sup>۹</sup> ایشان نمی افتادم. بالاخر در غایت چستی از آن عفریت خانه بیرون خرامیدم<sup>۱۰</sup> و بندیانی که در آن

- ۱ چار [ت]
- ۲ کسی [د]
- ۳ [ت]
- ۴ بود که [د]
- ۵ که [د]
- ۶ فقیر [د]
- ۷ فقیر [د]
- ۸ × [د]
- ۹ سخن [د]
- ۱۰ خرامیدیم [د]

بیرم شدم، [چنانچه گفته اند].<sup>۱</sup>

بیت

(۶۱۹) من چه گویم در کمال کبریای حضرتت

آفرین باد آفرین کز هرچه گویم برتری

القصه. به <sup>۲</sup> آن خدمتکار [را که] <sup>۳</sup> خط فقیر رسید، بلا توقف راه چرخس را پیش گرفت<sup>۴</sup>، از دریا عبور نموده، در کمال تعجیل در یک شب و روز {۵۶۳پ} خود را به خدمت برادرش شهزاده ملک قاسم رسانید و خط را به دست آن برادر سپرد. چون چشم برادرش به آن خط افتاد، گریه آغاز نهاد. بلا توقف به اطراف و جوانب کس فرموده، به یک روز بست مبارز کینه خواه را جمع نمود. چیز<sup>۵</sup> بسیار انعام فرمود<sup>۶</sup>. + وعده<sup>۷</sup> بسیار<sup>۸</sup> کرده، به خلاصی فقیر رخصت اجازت داد و آن مبارزان از خدمت برادرش شهزاده ملک قاسم مرخص شدند و<sup>۹</sup> در کمال سرعت بر لب دریا آمدند و دو کشتی در آن جا حاضر ساخته، شب سیوم که وعده گاه بود. نیم از شب گذشتن بعد آن مبارزان چون باد از دریا عبور نموده و<sup>۱۰</sup> کشتی ها را <۵۵۴ر> در آن جا گذاشته و<sup>۱۱</sup> شمشیرهای خود را چپ و<sup>۱۲</sup> راست در میان بسته، به

۱ × [د]

۲ × [ت][د]

۳ × [د]

۴ گرفته [ت][د]

۵ چیزی [ت]

۶ نمود و چیز بسیار هم [د]

۷ و [ت]

۸ × [ت][د]

۹ × [د]

۱۰ × [د]

۱۱ × [د]

۱۲ × [ت]

بیت<sup>۱</sup>

آن که هرگز نشنود گوش تو فریاد من است  
و آن که هرگز نگذرد بر خاطرت یاد من است  
چه نویسم غم هجران تو ای جان جهان  
که فراق به کمال است و غم بی پایان  
چه کنم قصه پر غصه ایام فراق  
{۵۶۳ر} چون نسازی صنما خسته دلم را درمان  
نه چنین رفت میان من و تو عهد و وفا  
نه چنان<sup>۲</sup> بود مرا با تو نگار ایمان

روز دیگر بود که <sup>۳</sup> همان کافر بیچاره مثل عادت معهود آمد. فقیر نیز پنج طلا و آن خط را به درون کاسه انداخته، به او دراز کردم. گفتم، <در کاروان سرا رو. در فلان حجره به این صورت کسی هست. این خط را به دست او بده و خود باز گرد.> آن بیچاره با<sup>۴</sup> چندین [وهم و هراس]<sup>۵</sup> از آن بلاخانه کاسه را گرفته، بیرون رفت. روز دیگر آمد و<sup>۶</sup> گفت، <خط را سلامت برده، سپردم. > {۵۵۳پ} بسیار خرسند<sup>۷</sup> شد. به من پنج طلا او نیز داد. <گفت. رفته، کوی من رفتم. فقیر به چندین محنت و مشقت از لطف الهی امیدوار شده، منتظر<sup>۸</sup>

۱۴ در خط [د]

۱ × [ت]، ایات [د]

۲ چنین [د]

۳ باز [ت]

۴ به [د]

۵ بیم و ترس [د]

۶ × [ت][د]

۷ خورسند [ت]

۸ شب [ت][د]

آواره و سرگردان. در حال<sup>۱</sup> من رحم کن. > گفت، > من مردی ام<sup>۲</sup>، بسیار ناتوان. [این که می بینی]<sup>۳</sup> خدمت بندگان را میکنم و این جایی که تو (۶۱۸) در آمدی، خلاصی نیست. اما سه روز میشود که در<sup>۴</sup> تحت احسان تو در آمده ام. اگر خدمت داشته باشی، بفرمای. اگر از دستم بیاید، دریغ ندارم. > گفتم، > یک خط دهم. برده، به کسی سپار. > گفت، > به چشم. > گفتم، > کمتر کاغذ و قلم {۵۶۲پ} بیار. > گفت، > این کار > ۵۵۳ر > از دستم نمی آید. اگر خطی باشد، میبرم، [و الا نه]<sup>۵</sup> > گفت. بیرون رفت. فقیر در بحر تفکر غوطه زدن گرفتم. بعد از تأنی بسیار به خاطر آمد که +<sup>۶</sup> کاغذی بود<sup>۷</sup> که به او طلا پیچانیده بودم. +<sup>۸</sup> آن<sup>۹</sup> را گرفتم و کاردچه<sup>۱۰</sup> فرنگی داشتم. او را گرفته، انگشت خود را چاک کردم<sup>۱۱</sup> و خون [از وی جاری]<sup>۱۲</sup> شد. به نوک همان کاردچه از خون خویش به آن کاغذ به چندین [محنت و]<sup>۱۳</sup> مشقت چند سطر مدعا را به برادرم شهزاده ملک قاسم نوشتم و نزدیک بودن بیرم اهل کفره را نیز نوشتم که بعد از ده روز یک شب و روز جای خالی است و یک شقه به نام خدمتکار خود نوشتم. +<sup>۱۴</sup> چون خط را به اتمام رسانیدم و این بیت را نیز +<sup>۱۵</sup> درج کردم.

- ۱۲ شدید [د]
- ۱۳ اینکه میبینی [ت]
- ۱ حق [د]
- ۲ هستم [ت][د]
- ۳ × [ت][د]
- ۴ به [د]
- ۵ × [ت][د]
- ۶ کمتر [د]
- ۷ می بود [د]
- ۸ و او در کمال فرسودگی بود. [د]
- ۹ او [د]
- ۱۰ ساختم [د]
- ۱۱ جریان [د]
- ۱۲ × [ت][د]
- ۱۳ و [د]

اتفاقاً در آن وقت بیرم بزرگ اوروسان رسیده بود. سه شب و روز فقیر در آن جا به حالی که [میگذراندم، گذشت]<sup>۱</sup> و این شعر بر زبانم جاری بود.

### شعر<sup>۲</sup>

<۵۵۲پ> با که گویم حال خود چون محرم رازم نماند  
{۵۶۲ر} چاره سازی چون کنم چون یار دمسازم نماند

۳+

این دم از کوی امید آواره می باید شدن  
چاره چون از دست شد بیچاره می باید شدن

از قضا هر روز یک<sup>۴</sup> کسی از بیرون پنجره آمده، یک نان سیاه و یک کاسه آش گندم می آورد. به دست خود از سوراخی پنجره دراز میکرد و میرفت. +<sup>۵</sup> سخن هم نمیکرد و او را نمیدیدم. +<sup>۶</sup> در آن وقت به کیسه فقیر پنجاه طلای بجاقی بود. روز اول یک طلا به کاسه انداختم. روز دوم دو طلا، روز سیوم سه طلا، [روز چهارم چهار طلا]<sup>۷</sup> به کاسه او انداختم. +<sup>۸</sup> بالاخر<sup>۹</sup> آن کس [آهسته به زبان آمد. <sup>۱۰</sup> گفت، > شما چه کسید و از کجایید که به این محنت<sup>۱۱</sup> گرفتار [شده اید]<sup>۱۲</sup>. < گفتم، > ای یار جانی، چه میپرسی. [نیک مردی]<sup>۱۳</sup> هستم،

۱ میگذشت [ت]، میگذشت، میگذراندم [د]

۲ بیت [د]

۳ بیت [د]

۴ × [د]

۵ و [ت]، چیزی [د]

۶ هم [د]

۷ × [ت]، روز چارم چار طلا [د]

۸ روز چهارم چهار طلا [ت]

۹ × [د]

۱۰ آمد. آهسته به زبان اوروسی [د]

۱۱ بلا [د]

آن باد پیمای ابلهی یعنی وزیر گفت، > به پادشاه<sup>۱</sup> صورت واقعه را نویسم<sup>۲</sup>. هرچه پادشاه فرماید، آن میشود. < فقیر را (۶۱۷) به آن دو محرم گفت، > حکیم خان را به حبس خانه برید. < اتفاقاً [فقیر در آن وقت]<sup>۳</sup> به خدمت > ۵۵۲ر < کار خود به زبان پارسی گفتم، > در کاروان {۵۶۱پ} سرا رو. + در آن<sup>۴</sup> حجره باش. از خدای عالم چه می آید. < و آن بیچاره [که عبد الله نام داشت،]<sup>۵</sup> منتظر وقت بود. نمیدانست +<sup>۶</sup>، من چه شدم. القصه. مع آن دو محرم به آن شب تاریک به چندین خاری و زاری از شهر +<sup>۷</sup> برآمده، به بندی خانه رسیدیم. بعد از چندین دربند به جای رسیدیم<sup>۸</sup> که زهره دوزخ از بیم آن موضع می ترقید. در یک خانه ای در آوردند که همه او از پنجره آهن ساخته بودند. در غایت تاریکی [غیر از]<sup>۹</sup> سنگ ریزه چیزی دیگر در آن جا موجود<sup>۱۰</sup> نبود. محرمان به آن پاسبانان عفريت منظر سپردند و آنها فقیر را به درون خانه انداخته، در را قفل کرده<sup>۱۱</sup>، قورغاشم در آن قفل [ریختند و]<sup>۱۲</sup> گفتند، > کسی به این شخص هم سخن نشود. قصه کوتاه. فقیر را در آن جهنم تنها گذاشتند. خود متوجه شهر شدند.

#### بیت

طوطی خوش سخن و باغ بهشتم جا بود      دانه ناچیده به دام قفس صیّادم

- ۱ خدمت [ت]، خدمت [د]
- ۲ نویسم [د]
- ۳ در آن وقت فقیر [ت] [د]
- ۴ و [ت]
- ۵ فلان [د]
- ۶ [ت]
- ۷ که [ت]
- ۸ بیرون [ت] [د]
- ۹ رسیدم [ت]
- ۱۰ الا [ت] [د]
- ۱۱ × [ت] [د]
- ۱۲ کرد و [د]
- ۱۳ ریخت [د]



انداخته اید. من بیخبر در آن<sup>۱</sup> جا رسیدم. دیدم که شما [نبوده اید]<sup>۲</sup>. خواستم که بیرون شوم. حکیم خان در کمال چستی از میانم گرفته، تنگ در آغوش خود کشید. +<sup>۳</sup> میخواست، +<sup>۴</sup> از گلستانم گل<sup>۵</sup> مراد چیند. اینک شما رسیدید، چنانچه<sup>۶</sup>

### مصراع<sup>۷</sup>

پیش جانانه ما پنبه و پوندانه<sup>۸</sup> یکی است >

و این سخن به پدر خود تقریر نمود. وزیر<sup>۹</sup> رو به فقیر آورده، گفت، > از خدا نمیترسی<sup>۱۰</sup> که مهمان ما شده ای، این خیانت از تو صادر میشود. حالا چون است که<sup>۱۱</sup> به خون تو دست شویم. > این ماجرا را از آن [بحر شیطنت]<sup>۱۲</sup> شنیده، انگشت حیرت به دندان گزیده، در غرقاب اندیشه فرو رفتم. رو به وزیر آورده، گفتم، > هر کس به [منزل کسی]<sup>۱۳\*</sup> رود، او گنه کار خواهد بود. <

### [بیت]

تو تیغ مزن و بگذار تا من بیدل      نظاره میکنم و آن چهره نگارین را]<sup>۱۴</sup>

- 
- |    |                                  |
|----|----------------------------------|
| ۱  | این [د]                          |
| ۲  | نبودید [ت] [د]                   |
| ۳  | و [ت]                            |
| ۴  | که [ت] [د]                       |
| ۵  | گلهای [د]                        |
| ۶  | × [د]                            |
| ۷  | × [د]                            |
| ۸  | پُندانه [ت] [د]                  |
| ۹  | × [د]                            |
| ۱۰ | نترسیدی [ت]                      |
| ۱۱ | × [ت] [د]                        |
| ۱۲ | ساحره [د]                        |
| ۱۳ | [د]، منزلی کس [س]، منزلی کسی [ت] |
| ۱۴ | × [ت] [د]                        |

بیت<sup>۱</sup>

من بودم و گنج<sup>۲</sup>ه صراحی و سرودی غم را که [نشاند و]<sup>۳</sup> بلا را که فرستاد

از آن جا که سپهر مشعبده<sup>۴</sup> از پرده نیلگون خود هر ساعت بازی دیگر در کارش کرد،

چنانچه

## مثنوی

نقشی عجب از طلسم خانه      انگیخت مشعبد زمانه  
ناگاه غمی<sup>۵</sup> بهم برآمد      [بازی که]<sup>۶</sup> شبی ز غم برآمد  
نی غم که محیط عمر گاهی      نی شب که جهان جهان سیاهی

< ۵۵۱ > در آن وقت بود که در خانه را در غایت شدت زدند. دانستم که به بلای گرفتار شدم. (۶۱۶) چون در را گشادیم، دیدم<sup>۷</sup> که وزیر شمشیر [برهنه در دست]<sup>۸</sup> دارد. با چهار محرم در غایت غضب داخل خانه شد. دید که گفته کنیزان بیان واقع بوده است. خواست آن دختر را پاره پاره کند. <sup>۹</sup> دختر کیاد گفت، < دست باز دار و سخن مرا گوش کن. > به مجرد شنیدن سخن دختر وزیر خود را نگاه داشت. < ۵۵۱ پ > دختر گفت، < من شنیدم که شما با وجود وداع { ۵۶۱ ر } کردن باز به منزل حکیم خان رفته، طرح مجلس

۱ × [ت]

۲ گنجی [ت][د]

۳ نشاند [ت]، نشان داد [د]

۴ مشعبد [ت]

۵ × [د]

۶ تاریک [ت]

۷ دیدیم [ت][د]

۸ بر دست برهنه [د]

۹ آن [د]

بلا توقف گفتم، >ای فرنگی دختر، خویشان را به حسن و<sup>۱</sup>\* جمال از سایر مقیدان  
سلسله بشریت چون سرو آزاد سرفراز میدانی و بر همه<sup>۲</sup>\* نیکوان جهان خود راجع میشمی و  
نمیدانی که آبادی کارخانه الهی منحصر بر یک وجود نباشد و باغ آفرینش موقوف  
>۵۵۱پ.ح. <+ نمی باشد. از بس که در زیر این مقرنس چندین گلشنی است و در هر  
گلشن هزاران گل به رنگ و<sup>۴</sup> بو بهتر از یک دیگر شکفته، اگر مرا مثل تو در پیش یکی از آن  
جمله نشینی، مانند سهادر پیش آفتاب دیگر خود را نه بینی و در رنگ و<sup>۵</sup>\* بویش +<sup>۶</sup> قدری  
ندارد. < چنانچه گفتم.

## بیت

(۶۱۷ ح.) تو مگوی<sup>۷</sup>\* که در این دهر شکفتم تنها

بس که در زیر فلک مثل تو چندین گلها است

چون فرنگی دختر از شنیدن این مقدمه عرق رشک در حرکت آمده، عرق<sup>۸</sup> لجه تشویر  
گشته، {۵۶۰پ} عرق خجالت بر جبین آورده، در بحر تحیر فرو رفت.  
القصه. در آن گفتگو بودیم که<sup>۹</sup> به حکم آن که

- 
- |   |                  |
|---|------------------|
| ۱ | [ت][د]           |
| ۲ | [ت]، هم [س][د]   |
| ۳ | موقوف [ت]        |
| ۴ | [د] ×            |
| ۵ | [د]              |
| ۶ | گل [ت]، هیچ [د]  |
| ۷ | [د]، مگوی [س][ت] |
| ۸ | غرقه [د]         |
| ۹ | [د] ×            |

[وزیر در کمال سرعت متوجه خانه ما شده بود]<sup>۱</sup> (۶۱۶ ح.) مجمل سخن آن که در آن وقت +<sup>۲</sup> کنیزان حرم ماجرای آن زیبا را به وزیر گفته بودند. در معرض قبول نه افتاده بود. [بنابر آن]<sup>۳</sup> زنان در کمین او بودند. حالا که آن سمن<sup>۴</sup> بو به منزل فقیر خرامید، آن کنیزان واقف گشته، وزیر را آگاهی دادند.

< ۵۵۱ ه.ج. > القصة. در اثنای گرمی هنگامه [آن فرنگی دختر] فریفته حسن و جمال خود<sup>۵</sup> شد و از تنگی حوصله لبریز غرور گشته، در حال سرخوشی و بی حجابی باده بی اختیار به زبان آورد که > ای قلندر بچه والا مرتبه، اگرچه گستاخی است و از آیین ادب به غایت بعید. اما میخوام که زمانی غرور سیاحی و بنای جهان گردی را بر طاق بلند گذاشته، سر رشته انصاف از دست ندهی و بی خوش آمد از روی راستی بیان فرما که نقاش ازل هیچ پیکری را از این نوع بشر به حسن و جمال چون من پری چهره را { ۵۶۰ ه.ج. } در کارخانه تکوین مع<sup>۶</sup> قلم تقدیر بر صفحه ایجاد تصویر کشیده باشد. هیچ دیدی و شنیدی. > به حکم آن که

بیت<sup>۸</sup>

قادر قدرت +<sup>۹</sup> دو طاق ابرویم را کج کشید

یا ز حیرت دست او لغزید یا مسطر نداشت

۱ [ت]

۲ که [ت]

۳ × [ت]

۴ سیمین [د]

۵ خویش [ت]

۶ × [ت]

۷ به [ت]

۸ × [د]

۹ و [د]

نفس اماره گرفتار شده بود که از چشم های او فواره شهوت میجوشید. در غایت چستی دست به گردن فقیر حمایل کرد. گفت، < اکنون جای هرزه گویی<sup>۱</sup> نیست. >

### مثنوی<sup>۲</sup>

در ایام جوانی نیست نیکو      زدن چون غنچه نقش چین بر ابرو  
کسی گر بوسه ام لذت پذیرد      گر آب زنده گی نوشد نمیرد

فقیر<sup>۳</sup> گفتم.

### مصرع

زین فکر در گذر که به جایی<sup>۴</sup> نمیرسد

چون<sup>۵</sup> التجا را از حد اعتدال [در گذرانیدم]<sup>۶</sup> و آن زیبا نیز از فقیر {۵۵۹پ} چندان<sup>۷\*</sup> < ۵۵۱ر > درجه مبالغه را به درجه کمال رسانیده، (۶۱۶) تکلیف ما لا یطاق میکرد. فقیر چون سپند در مجمر اندوه وطن ساخته، حیران آن امر شدم، گفتم.

### بیت<sup>۸</sup>

تیمار غریبان سبب ذکر جمیل است  
جانا مگر این قاعده در شهر شما نیست

۱ گوی [د]

۲ × [د]

۳ × [ت] [د]

۴ جای [ت] [د]

۵ فقیر [ت] [د]

۶ گذراندم [د]

۷ [د]، چند [س] [ت]

۸ × [د]

این غافل که فلک کج رفتار در هر لحظه منصوبه نو بر پا میکند که<sup>۱</sup> انسان در عالم رویا مشاهده نفرموده، به حکم آن که

### مصراع

اختیار اول سایدی راحت اختیار ایتماسمودیم

خلص کلام این<sup>۲</sup> که همان شب در غایت بشاشت صحبت میکردیم. چون نیمه ای<sup>۳</sup> از شب گذشته بود که آغاز خواب کردیم. اول لشکری که به سر ما < ۵۵۰ پ > +<sup>۴</sup> فلک [زده ها]<sup>۵</sup> تاخت آورد، سپاه خواب بود.

زبده کلام آن که در آن وقت صدایی<sup>۶</sup> به گوشم رسید. بعد تق تق در شد. { ۵۵۹ ر } خدمتکار فقیر گفت، < کیست. > گفت، < آشنا. ما را وزیر یک<sup>۷</sup> خط داده، فرستاده است که به دست محمد<sup>۸</sup> حکیم خان میدهم. > فقیر گفتم، < صبح بیایید. > و او بسیار مبالغه نمود +<sup>۹</sup>. لا علاج آن خدمتکار ساده لوح سخن آن کیاد عمل نموده، در را گشاد. دیدم که آن رعنا با چندین زیب و<sup>۱۰</sup> زینت با دو کنیز ماه روی، یکی را شمع کافوری و دیگری را شیشه می بر دست، در غایت چستی برق زنان خود را به درون خانه گرفت و در خانه را محکم بو<sup>۱۱</sup> بست. چون این حال را +<sup>۱۲</sup> مشاهده نمودم، دست از جان شیرین هزار بار شستم. آن رعنا چنان به

- ۱ × [د]
- ۲ آن [د]
- ۳ نیم [د]
- ۴ ما [ت]
- ۵ زده [د]
- ۶ صدای [ت]، صدای پا [د]
- ۷ × [ت]
- ۸ × [ت] [د]
- ۹ و التجا کرد [ت] [د]
- ۱۰ × [ت]
- ۱۱ × [ت] [د]
- ۱۲ فقیر [د]

< بگو<sup>۱</sup>. > آن کنیز<sup>۲</sup># گفت که<sup>۳</sup> <ملیکه با حکیم خان تعشقی<sup>۴</sup> پیدا کرده است. میخواهد<sup>۵</sup> که با هم عرق بحر تجرع باده پیمایند. حیف است که در خاندان ارباب نام نیک گلی<sup>۶</sup> چنین شکفته شود. سالها زخم این فضیحت و رسوایی<sup>۷</sup> به<sup>۸</sup> هیچ مرهمی به اصلاح نتواند<sup>۹</sup> آورد. > وزیر این سخن را شنید، چون موی به هم پیچید. چیزی نگفت. خاموش نشست<sup>۱۰</sup> و این ماجرا را آن ماه پیکر شنید، در بحر تفکر فرو رفت<sup>۱۱</sup>. چون مار در آتش هجر میسوخت. روز < ۵۵۰ ر> دیگر به پیش وزیر از جهة وداع رفتم و با هم سخن میکردیم. در عین محاوره نیک { ۵۵۸ پ} ملاحظه کردم که طبع او به<sup>۱۲</sup> فقیر منحرف شده است. بعد از ساعتی آن ماه رو به چندین ناز و تمنا خرامان خرامان چون طاوس مست (۶۱۵) آمده، به کرسی خود نشست. اما در غایت ملول و محزون بود.

القصة. فقیر به وزیر وداع کردم. +<sup>۱۳</sup> در کمال خرسندی متوجه قوش خود شدم. وزیر از برای یاد آوری به فقیر دو طپانچه فرنگی و چهار شیشه عطر عالی انعام نمود. چون از منزل خود به کاروان سرا آمدم، با چندی از بازرگانان اتفاق کردیم که صبح بر آمده، متوجه قلعه حنیفه شویم. به این قرار فقیر باز به منزل خود مراجعت فرموده، به سر رشته سفر پرداختیم. از

۱ بگوید [د]

۲ [د]

۳ × [د]

۴ تعشق [د]

۵ میخواهند [د]

۶ گل [ت]

۷ رسوای [ت][د]

۸ × [د]

۹ نتوان [د]

۱۰ بنشست [د]

۱۱ رفته [د]

۱۲ از [ت]

۱۳ و [د]

## بیت (۶۱۴)

نازنین را عشق ورزیدن نه زبید جان من شیر<sup>۱</sup> مردان بلاکش پا در این غوغا نهند

گفت، >از سر این سودا هرگز نخواهم گذشت. هزار جان خود را در این راه باخته ام. مگر وقتی که ترا به دست آرم.< گفت. در آن ماجرا +<sup>۲</sup> چشم آن گل پرهن به انگشتی فقیر افتاد. گفت، >انگشتی که پادشاه داده بود، این است.< فقیر گفتم، >بلی.< جست. از دستم کشید. به دست خود انداخت. انگشتی یاقوتی که به دست داشت، از انگشتی فقیر چندان بهتر بود، به دست فقیر انداخت. دست فقیر را گذاشت و به جای خود بنشست. در آن وقت وزیر از بیرون آمد. به عیش و عشرت مشغول شد. فقیر از مجلس ایشان <۵۴۹پ> مرخص<sup>۳</sup> شد.<sup>۴</sup> به قوش خود آمدم. در تدبیر کار خود شدم. در آن وقت از برادرم {۵۵۸ر} شهزاده ملک قاسم دو خط رسید. از بسکه در میان<sup>۵</sup> ما و او یک دریا حایل بود، یک خدمتکار خود را مع چیز و چاره از دریا گذرانیده<sup>۶</sup>، به پیش آن امارت پناه فرستادم و خود نیز ارتکاب رفتن داشتم. در آن وقت که در قصر وزیر آن پری چهره به فقیر گفت گو داشت، یکی از کنیزان وزیر از آن سر مطلع شده بود. به وزیر عرض<sup>۷</sup> نمود که >اکنون این بنده<sup>۸</sup> را طرفه واقعه و مکالمه<sup>۹</sup> به نظر در آمده که به<sup>۱۰</sup> اظهار آن جرأت نمیتوانم کرد.< وزیر گفت،

۱ شیر [ت]

۲ بود که [د]

۳ رخصت [ت]

۴ شده [د]

۵ میانه [د]

۶ گذرانده [د]

۷ عرضه [د]

۸ بنده [د]

۹ هنگامه [د]

۱۰ با [د]

۱۱ × [د]



چند روز سکونت اختیار کردم. هر روز در پیش وزیر به آن پری روی مکرر صحبت اتفاق می افتاد. به رمز و کنایه و به اشارت چشم و ابرو سخن میکرد. فقیر هرگز به خود نگرفته، به نادانی می انداختم. روزی به خانه وزیر طرح مجلس افکنده بودیم و آن پری پیکر نیز در آن جا<sup>۱</sup> با کنیزان ماه پیکر حاضر بود. به خوردن می اشتغال داشتند. هر چند به فقیر التجا کردند، قبول نفرمودم. اتفاقاً وزیر از بهر کاری بیرون خرامید. خانه از اغیار خالی ماند. فقیر نیز خواستم که بیرون روم. آن آفتاب خاور در کمال چستی چون سرو آزاد از جای برجست و از دست فقیر گرفت و گفت.

### > مصراع<sup>۲</sup>

گرچه تو ترکم کنی ترک تو نتوان گرفت<sup>۳</sup>

تا کی به نادانی می اندازی. به رمز و<sup>۴</sup> ایما کار به جای نرسید. می باید به حال ما<sup>۵</sup> <۵۴۹ر> پردازی. < چون این سخن صریح از آن فرنگی دختر شنیدم، چون {۵۵۷پ} بید لرزه بر اندامم افتاد. در غایت التجا گریه کنان گفتم، > ای سر آمد نازنینان، مرا وا گذار. به خون من<sup>۶</sup> سرگشته ضامن<sup>۷</sup> مشو و این ماجرا را وزیر داند، از هزار جانم یک جان خلاص نمیشود. +<sup>۸</sup> هم به خانه تو نام مهمانی دارم. از تو پری زاد این حرکت بیجا نمی زیید. > و این بیت را خواندم.

- |   |           |
|---|-----------|
| ۱ | خانه [د]  |
| ۲ | × [ت]     |
| ۳ | کنم [د]   |
| ۴ | × [ت]     |
| ۵ | من [د]    |
| ۶ | منی [ت]   |
| ۷ | ضامین [ت] |
| ۸ | و [ت][د]  |

اختیار کنم، به سر من همین فرنگی دختر آب خواهد ریخت و هم اصل آن وزیر از فرنگ آمده بود. از جهت دانا بودن به درجه وزارت رسیده بود.

قصه کوتاه. بعد از ساعتی از وزیر رخصت طلب نمودم. وزیر گفت، >حالا نوخبر رسیده است که سلطان روم مع لشکریان خود بلوای عام کرده است. معلوم نیست که سبب چیست و<sup>۱</sup> حالا همه راه ها مسدود شده است. می باید چند روز صبر کنید، راهها گشاده شود. بعد متوجه آن صوب گردید، خوب است.< گفت. در حال به چیزهای فقیر کس فرمود که<sup>۲</sup> از کاروان سرا (۶۱۳) بیارند. فقیر هر چند التجا کردم که به حالم گذار، قبول [نکرد و]<sup>۳</sup> آن پری چهره خنده کنان به پدر میگفت که >دوام از حکیم خان سخن میکردید که به خدمت پادشاه او را دیدیم و در میان ما و<sup>۴</sup> وی آشنایی<sup>۵</sup> بسیار است و<sup>۶</sup> حالا که به پای خود در ولایت شما آمده اند<sup>۷</sup>. به جای دیگر گذاشتن شما از روی کلانی >۵۴۸پ< نیست.< گفته، از وزیر آن کافر کیش ظالم به آمدن فقیر چند<sup>۸</sup> درجه {۵۵۷ر} زیاده مبالغه مینمود، [به حکم آن که

هله ای عشق کهن سال که هر روز نوی

زیر فرمان تو هر جا که ضعیف است قوی]<sup>۹</sup>

عاقبت بعد از ماجرای بسیار به حالم نگذاشته، چیز و چاره را مع دو خدمتکار از کاروان سرای آورده، از پیش خود خانه ای در غایت خوبی تعیین فرمود. فقیر چار و<sup>۱۰</sup> ناچار

۱ × [د]

۲ × [د]

۳ نفرمود که [د]

۴ × [ت]

۵ آشنای [د]

۶ × [د]

۷ است [ت]

۸ چندان [د]

۹ × [ت][د]

۱۰ × [ت][د]

ماه شب چهارده<sup>۱</sup> بدر منیر بر هزاران زینت در میان آلات جواهر غوطه خورده و به سان آفتاب {۵۵۶هـ} [عالم آرا]<sup>۲</sup> یک پهلوی نشسته، زلف مسلسل مانند مشک +<sup>۳</sup> بر ماه دو هفته پیچیده، +<sup>۴</sup> دو ابرو دو سایه بان <۵۴۷پ> معنیر بر تارک عبهر به طناب غمزه به نگاه کرشمه سنج عاشقان را صید میکرد و به کمند طره تابداری خورشید جهانتاب +<sup>۵</sup> از فیروزیه<sup>۶</sup> حصار چرخ به قید می آورد، [چنانچه گفته اند.]<sup>۷</sup>

## نظم

لب چو برگ گلی که تر باشد      برگ آن +<sup>۸</sup> گل پر از شکر باشد  
چشم چون نرگسی که خفته بود      فتنه در خواب او نهفته بود  
آب گل خاک ره پرستانش      گل کمر بند زیر دستانش

[کافر بی باک با وجود دختر بودن آن]<sup>۹</sup> از حرکت های چشم او چنان مشاهده کردم که هزار دریای مکر فواره میزد<sup>۱۰</sup>. در شیوه کیادی علم اوستادی می افراشت و در مکتب تلبیس ابلیس را حکمت مکاید درس می آموخت. به چندین استغنا می نشست. چون وزیر به اتفاق فقیر به کرسیهای زرین آرام گرفتیم و از هر جانب سخن میکردیم. گاه گاه به گوشه چشمزد دیده، به سوی آن پری چهره نگاه میکردم. آن تنّاز نیز نگاه فقیر را به چندین {۵۵۶پ}> ۵۴۸هـ< اوستاگی به حرکت های دلیرانه میگرفت و یقین فقیر شد که اگر سکونت

- ۱ چارده [ت]
- ۲ عالمگیر [د]
- ۳ تر [د]
- ۴ و [ت] [د]
- ۵ را [د]
- ۶ فیروزیه [ت]، فیروزه [د]
- ۷ × [د]
- ۸ پر [د]
- ۹ با وجود دختر بودن آن کافر بی باک [د]
- ۱۰ میزند [د]

یافته، به<sup>۱</sup> بیرون استقبال نمود. چون چشم فقیر {۵۵۵پ} به او افتاد، [چنانچه گفته اند].<sup>۲</sup>

### مصراع

به چشمم گرم می آید به یک جا دیده ام او را

دانستم<sup>۳</sup>، این همان چهار وزیری که در پیش پادشاه دیده بودم <۵۴۷ر> و با هم سخن کرده بودیم. یکی از آن است که به حکومت آن ولایت مأمور شده بوده است و او نیز در غایت تواضع فقیر را از دستم گرفته، احوال پرسیده، شادیها میکرد. چون داخل حرم شده، به خانه او در آمدم، دیدم که<sup>۴</sup> خانه پر زیبا و همه او را به آینه فرنگی گرفته است و جای خالی او را به حل طلا و لاجورد<sup>۵</sup> اصل چنان کار کرده است که<sup>۶</sup> از عقل بشری بیرون است.<sup>۷</sup> از دست راست او<sup>۸</sup> بست کنیز<sup>۹</sup> ماه روی عنبر موی در میان<sup>۱۰</sup> طلا غرق شده، صف زده اند و از دست چپ بست جوان ماه روی [پری پیکر]<sup>۱۱</sup> صف [زده اند]<sup>۱۲</sup>، به لباس های طلا دوزی و شمشیرهای طلا به گردن حمایل کرده، منتظر خدمت ایستاده اند.<sup>۱۳</sup> در پیش گاه خانه یک زن (۶۱۲) پیر در کمال خوش لباسی، در بالای کرسی طلا نشسته و در پیش او دختری چون

- ۱ × [د]
- ۲ × [د]
- ۳ که [د]
- ۴ × [د]
- ۵ لاژورد [د]
- ۶ × [د]
- ۷ × [د]
- ۸ × [د]
- ۹ کنیزی [ت]
- ۱۰ آلات [د]
- ۱۱ زهره جبین [د]
- ۱۲ زده [د]
- ۱۳ و [ت] [د]

آمده، دستم را بوسید و عذر خواهی نمود و به جای خود نشانید و گفت، <اوصاف شما را قبل از این شنیده بودم. نمیدانستم که به جانب روم از کدام جانب میگذرید. می باید که (۶۱۱) حاکم این ولایت وزیر را البته بینید.> فقیر گفتم، <مرا بسیار درد {۵۵۵} سر آمده. به خطم دست مان.> هر چند مبالغه نموده، التجا کرد، قبول نکردم. لا علاج به خطم دست ماند. <۵۴۶پ> فقیر را تا بیرون محکمه خانه گسیل کرد.

### ۱+ ذکر گرفتار شدن فقیر در حبس وزیر از بهر [فرنگ دختری]<sup>۲</sup> او

القصه. ۳+ فقیر متوجه کاروان سرا شدم، ۴+ چون به کاروان سرا رسیدن همان، دو جوان<sup>۵</sup> ماه روی رسیدن همان. در غایت آداب آمده، دستم را بوسید و راست ایستاده، گفت، <برادر<sup>۶</sup> شما وزیر خدمت [شما را]<sup>۷</sup> طلب میکند. هر آینه تشریف نفرمایند، خود به خدمت میرسم.> میگوید. از سخن او در گرداب خیال غوطه زدن گرفتم. بعد از تأنی و<sup>۸</sup> ملاحظه بسیار گردن خار خار با همراهی آن دو جوان به عرابه نقره افتاده، متوجه قصر وزیر شدم. چون نزدیک بارگاه رسیدم، دیدم، منزل<sup>۹</sup> در غایت خوبی، دو جانبه لشکریان سلاط صف زده اند و تویهای اژدها پیکر از دو جانب دروازه بارگاه چیده اند و خانهای بزرگ +<sup>۱۰</sup> همه منقش و طلاکاری. بعد از چندین بندرگاه به نزدیک نشیمن گاه وزیر رسیدم. +<sup>۱۱</sup> از آمدن فقیر خبر

- ۱ حکایت [س]
- ۲ فرنگی دختر [د]
- ۳ چون [د]
- ۴ فقیر [د]
- ۵ جوانی [ت]
- ۶ برادری [د]
- ۷ جناب شما را [ت]، جنابانه [د]
- ۸ × [ت]
- ۹ منزلی [د]
- ۱۰ و [د]
- ۱۱ وزیر [د]

شهرهای فرنگ افتاد. [۱] آن شهری بود، در غایت زیبایی<sup>۲</sup> و در کمال معموری. تمام عمارت او از سنگ بود. چنان سنگ را استادان<sup>۳</sup> تراشیده، مصفا ساخته بودند که گویا از یک سنگ تراشیده باشند<sup>۴</sup>. در غایت شفافی و قلعه ای داشت، به چرخ زنگاری هم سری میکرد و مردم او همه از بازرگانان فرنگ<sup>۵</sup> بود<sup>۶</sup> که از خوبی موضع در آن جا سکونت اختیار کرده بودند. دوکان<sup>۷</sup> {۵۵۴پ} و حمام و [کاروان سراها]<sup>۸</sup> را چنان [زیب و آرا]<sup>۹</sup> داده بودند که<sup>۱۰</sup> عقل به پایان آن<sup>۱۱</sup> نمیرسید و لال میماند.

زبدۀ کلام آن که به کاروان سرای آن <۵۴۶ر> ولایت نزول کردم. سه روز از رنج راه آسودم. روز چهارم تفرج کنان از کاروان سرا بیرون خرامیدم و رسته های شهر را تماشا میکردم. اتفاقاً گذارم به محکمه خانه پادشاهی افتاد. به خاطرم رسید که به خط خود دست مانانم<sup>۱۲</sup>. به این اندیشه داخل دیوان خانه پادشاهی شدم. دیدم که چندین جوانان<sup>۱۳</sup> ماه پیکر دفترها مینویسند. بزرگ آنها به کرسی نقره نشسته، حکم میکند. چون چشم آن گبر به فقیر افتاد، گفت، <چه کسی و از کجایی<sup>۱۴</sup>.> فقیر چیزی نگفتم. خط خود را به دست او دادم. گفتم، <دست مان. > چون نظر او به خط افتاد، سپندوار از جای برجست. در کمال آداب

- 
- |    |                       |
|----|-----------------------|
| ۱  | × [د]                 |
| ۲  | زیبای [د]             |
| ۳  | استادان [ت] [د]       |
| ۴  | ساخته بودند [د]       |
| ۵  | × [ت]                 |
| ۶  | بودند [د]             |
| ۷  | دکان [ت]، دکان ها [د] |
| ۸  | کاروان سرای ها [د]    |
| ۹  | آرا و زیب [د]         |
| ۱۰ | × [د]                 |
| ۱۱ | او [د]                |
| ۱۲ | مانانام [د]           |
| ۱۳ | جوان [د]              |
| ۱۴ | کجای [د]              |

ذکر<sup>۱</sup> اراده<sup>۲</sup> کردن فقیر به سوی مقصد

در آن وقت سرما به پایان رسیده<sup>۳</sup>، فصل حمل به سر آمد و تمام اشجار خود را بیاراست و کوه و<sup>۴</sup> دشت را سبزه و لاله فرو گرفت. [فقیر در آن وقت]<sup>۵</sup> متوجه {۵۵۴} دار السلطنة روم شدم. بعد از قطع راه به ده روز به جنگل (۶۱۰) مازندران رسیدم. [بعد از رفتن دانستم]<sup>۶</sup> که راه آن جانب مسدود [بوده است]<sup>۷</sup>. ناچار گردن خار خار به دست راه راست گشته، <۵۴۵پ> بعد از محنت بسیار به دریای<sup>۸\*</sup> قوبان<sup>۹</sup> رسیدم<sup>۱۰</sup>، [آن دریایی بود،]<sup>۱۱</sup> در کمال بزرگی و آن دریا در میان ولایت اوروسیه و چرکس حایل افتاده است. رو به کافرستان نهاده، از آن جا لب بر لب دریا راه می پیمودم<sup>۱۲</sup>. در هر جا میرسیدیم، [غیر از]<sup>۱۳</sup> اهل کفر<sup>۱۴</sup> مسلمانی<sup>۱۵</sup> را<sup>۱۶</sup> نمیدیدیم و از شهرهای بزرگ عبور مینمودیم. در آن وقت اتفاقاً گذارم در لب [دریایی مسمی به دوشنیکه اسکه]<sup>۱۷</sup>، یعنی به زبان اوروسی معشوق آباد. [از

- 
- |    |   |
|----|---|
| ۱  | × [ت]   |
| ۲  | ایراده [ت]  |
| ۳  | رسید و [ت][د]   |
| ۴  | × [ت]   |
| ۵  | در آن وقت فقیر [د]                                      |
| ۶  | دیدم [د]  |
| ۷  | بود [د]   |
| ۸  | [د]، دریایی [س][ت]                                      |
| ۹  | × [د]   |
| ۱۰ | رسیدیم [ت]  |
| ۱۱ | × [ت][د]  |
| ۱۲ | پیمودیم [ت][د]  |
| ۱۳ | الا [د]   |
| ۱۴ | کفره [د]  |
| ۱۵ | چیزی [د]  |
| ۱۶ | × [ت]   |
| ۱۷ | در ولایت از شهرهای فرنگ افتاد، مسمّا به دو شبک اسکه [د] |

آمد. رفتن خود را اظهار کرد. یک دیگر را در کنار گرفتیم. سر و روی یک دیگر را می بوسیدیم. بعد از گریه بسیار به چندین داغ و<sup>۱</sup> حسرت با هم دیگر وداع {۵۵۳پ} کردیم و<sup>۲</sup> این بیت به زبان فقیر جاری بود.

<۵۴۵ر> بیت

رفتی رفتی خدا نگهدار تو باد شمس و قمر و ستاره ها یار تو باد

وله<sup>۳</sup>.

تو میرفتی و من شور قیامت ساز میکردم  
شکست رنگ تا پر میفشاند آواز میکردم

بعد از چندین وقت خبر رسید که آن یار جانی از آن مهلکه به چندین محنت خلاص شده، تمام ولایت خود را فرو [گرفت و]<sup>۴</sup> بر سریر سلطنت قرار یافته است. این خبر را شنیده، از شادی به پراهن نمیگنجیدم. پی در پی از آن برادر<sup>۵</sup> جانی به نام فقیر خط آمده، تکلیف ولایت خود مینمود، [چنانچه گفته اند].<sup>۶</sup>

نظم<sup>۷</sup>

کسی را که گیتی ز چاه خمبول بر آرد رساند به اوج قبول  
عجب گر نه دعوی شاهی کند سر سر کشان در کمند افکند

۱ × [ت][د]

۲ × [د]

۳ × [د]

۴ گرفته [د]

۵ برادری [ت]

۶ × [د]

۷ بیت [د]



بیت<sup>۱</sup>

[ز انقلاب اندیشه کن ما را به چشم کم مبین

در دیار خویش ما هم آبروی داشتیم]<sup>۲</sup>

فقی‌ر در بحر تفکر فرو رفتم. بعد از ساعتی انگشت قبول به دیده نهادم. از بس که در آن <۵۴۴پ> وقت کسل فقیر رو به بهبودی (۶۰۹) آورده بود و مرض علاج پذیر شده بود، لا علاج متوجه قصر حاکم شدم. از بسکه در میان ما و او آشنایی پذیرفته بود، چون حاکم فقیر را دید، از جای +<sup>۳</sup> برخواست و<sup>۴</sup> به جای<sup>۵</sup> خود نشانید. فقیر صورت واقعه را گفتم که یک خدمتکار<sup>۶</sup> ما اراده روم دارد. خود بسیار بیمار خوابیده است. به این شکل و به این شمایل. صورت آن برادر را<sup>۷</sup> یک به یک گفتم. یک خط بدهید، زود رود<sup>۸</sup>. از بس که رسم است، صورت هر کس نه نویسند، خط نمیدهند. بنابراین<sup>۹</sup> برادرم شهزاده ملک قاسم این تدبیر اندیشیده بود. بلا اهما‌ل حاکم خط فرموده، حاضر کرد. فقیر خط را گرفته، به قوش خود مراجعت نمودم و آن خط را به برادرم سپردم. آن یار جانی چنان خرسندی<sup>۱۰</sup> میکرد که به تقریر راست نمی آید. بعد از چندین<sup>۱۱</sup> روز رفتن او نزدیک شد<sup>۱۲</sup>. [مخفی شبی به منزل فقیر]<sup>۱۳</sup>

۱ × [ت][د]

۲ × [ت]

۳ خود [د]

۴ × [د]

۵ پیش [د]

۶ خدمتکاری [ت]

۷ × [د]

۸ × [د]

۹ آن [د]

۱۰ خورسندی [ت]

۱۱ چند [د]

۱۲ آمد [د]

۱۳ شبی مخفی به منزل فقیر [ت]، مخفی به منزل فقیر [د]

نمود و تضرع<sup>۱</sup> نمود. فقیر چیزی به رویش اظهار نکردم، به حکم آن که [گفته اند].<sup>۲</sup>

### مصراع

مردی نبود فتاده را پای زدن

چون او از فقیر مرخص شده، متوجه بیت الله<sup>۳</sup> + شد.

### حکایت +<sup>۴</sup> شهزاده ملک قاسم

در آن وقت از گردش فلک کج رفتار یکی از خان زاده های ولایت چرکس شهزاده ملک قاسم نام جوانی خوب صورت<sup>۵</sup> زیبا منظری به جنگ اوروس دستگیر شده، افتاده بود. اتفاقاً در میان ما و او آشنایی پذیرفت. چنان به یک دیگر الفت گرفتیم که یک ساعت از یک دیگر جدایی<sup>۶</sup> نداشتیم. روزی به پیش فقیر آمد و<sup>۷</sup> گفت، >ای یار جانی، مشکلی دارم. +<sup>۸</sup> حل کن و تدبیری اندیشیده ام. از برای خلاصی خود نیک تأمل فرما. < گفتم، >به جان منت دارم. اگر از دستم آید، هیچ مضایقه نکنم. < گفت، >به نام کسی به صورت من از محکمه اوروس خط گرفته بدهید. شاید اگر<sup>۹</sup> به این تدبیر از این بلا خلاص شوم و سبب نجات من شوی<sup>۱۰</sup>. [اگر زنده مانم، تا قیامت]<sup>۱۱</sup> {۵۵۳ر} در حکم تو باشم، [به حکم آن که

۱ جزع [د]

۲ × [د]

۳ شریف [ت][د]

۴ برادرم [ت]

۵ صورتی [د]

۶ جدای [ت][د]

۷ × [د]

۸ مالا مغل [د]

۹ که [د]

۱۰ شوید [ت]

۱۱ تا قیامت اگر زنده مانم [د]

آمد، در هیچ ولایت اوروسیه <۵۴۳پ> ندیده بودم. در آن شهر سه جماعه مردم<sup>۱</sup> بسیار است، مردم<sup>۲</sup> + اسلام نوغی و اوروس و ارمنی و از مردم گورجستان و ایران هم بسیار است و<sup>۳</sup> اما از مردم (۶۰۸) ما وراء النهر کمتر است و چند [کاروان سراهای]<sup>۴</sup> عالی دارد که در هیچ ولایت نیست و از هر شهر بازرگان موجود و از<sup>۵</sup> هر جنس متاع<sup>۶</sup> مهیا و فواکه های<sup>۷</sup> که در آن ولایت موجود است، در هیچ ولایت اوروس نمیباشد. در کمال شیرینی [فقییر در آن ولایت هشت ماه]<sup>۸</sup> بر بستر ناتوانی به چندین خاری خوابیدم. در آن وقت بود که سیادت پناهی برادرم مومن خان شیخ الاسلام از جانب حج به چندین خواری و زاری تشریف آورد<sup>۹</sup>. چند روز در آن جا مکث کرد<sup>۱۰</sup>. از آن جا متوجه وطن مالوف شد<sup>۱۱</sup>، [چنانچه گفته اند].<sup>۱۲</sup>

## بیت

به دخل و خرج خود هر دم نظر کن      چو دخلت نیست خرج آهسته تر کن

{۵۵۲پ} و در آن حین یوسف پروانچی که سلسله جنبان این امر [شد و]<sup>۱۳</sup> سبب جلای وطن فقییر شده بود، به چندین بی آبرویی<sup>۱۴</sup> به پیش فقییر <۵۴۴ر> رفت و گریه آغاز

- 
- |    |                               |
|----|-------------------------------|
| ۱  | خلق [د]                       |
| ۲  | اهل [ت] [د]                   |
| ۳  | × [ت] [د]                     |
| ۴  | کاروان سرای های [د]           |
| ۵  | × [د]                         |
| ۶  | متاعی [د]                     |
| ۷  | فواکه یی [د]                  |
| ۸  | هشت ماه فقییر در آن ولایت [د] |
| ۹  | آوردند [ت] [د]                |
| ۱۰ | کردند [ت] [د]                 |
| ۱۱ | شدند [ت] [د]                  |
| ۱۲ | × [د]                         |
| ۱۳ | شده [د]                       |
| ۱۴ | آبروی [د]                     |

پادشاه را به دست او دادم. چون باز گشت کرده، به کشتی رسید و خط را<sup>۱</sup> مطالعه نمود، بلا توقف چندی آمده، به فقیر عذرهای خواستند<sup>۲</sup>. بلا اهمال مع اسپان <۵۴۳ر><sup>۳</sup> به کشتی در آورد و محترم داشت و کشتی را به جانب دریا [رها کرد]<sup>۴</sup>. اتفاقاً چنان بادی سخت بر خواست که یاد از طوفان نوح علیه السلام میداد. از قضا در آن وقت در طبیعت فقیر مرضی<sup>۵</sup> مستولی شد. مزاج از حد اعتدال [برگشت]<sup>۶</sup>. چنان بیماری شدت کرده بود که گاه به هوش بودم، گاه بیهوش میبودم. در آن حین صعوبت دریا و شداید سفر بدان<sup>۷</sup> غایت بود که اگر گام می نهادیم، در کام نهنگ بلا می افتادیم و در هر موج دریا طوفان +<sup>۸</sup> فواره میزد. ملاح هادی گشته، به چندین عذاب الیم. بعد از سه روز از آن لجه طلاطم به ساحل دریا رسانید. شکر کنان از آن دریای خون خوار نجات یافته، بیرون شدیم. دیدیم که<sup>۹</sup> شهری در کمال خوبی. اما همه آن جماعه قلماق بودند. یک روز در آن جا مکث کردیم. روز دیگر متوجه مقصد شدیم، در غایت سرعت. {۵۵۲ر} بعد از سه شب و سه<sup>۱۰</sup> روز در ولایت اشترخان وارد گردیدیم و<sup>۱۱</sup> آن ولایتی است، در غایت<sup>۱۲</sup> بزرگی و<sup>۱۳</sup> آبادی. عمارتهایی<sup>۱۴</sup> که در آن ولایت به نظر فقیر در

- ۱ × [د]
- ۲ خواست [د]
- ۳ با هم [ت]
- ۴ سر داد [د]
- ۵ مرض [ت] [د]
- ۶ گذشت [ت]
- ۷ در آن [د]
- ۸ بلا [ت] [د]
- ۹ × [ت] [د]
- ۱۰ × [د]
- ۱۱ × [د]
- ۱۲ کمال [د]
- ۱۳ در غایت [د]
- ۱۴ عمارتهای [د]

میگوید.<sup>۱</sup>بیت<sup>۲</sup>

نشستم بر لب دریای حسرت رشته بر دستم  
که شاید ماهی مقصود آید باز در شصتم

القصه. بعد از یک شب و روز از میان دریا کشتی نمایان شد. بادبانی در کمال رفعت بر بسته و آن کشتی را دیده، خرسندیها میکردیم. چون نزدیک ساحل رسیدند، ما فلک زده ها را دیده<sup>۳</sup>، انگشت تحیر به دندان گزیدند<sup>۴</sup> و همه او اوروس (۶۰۷) بود. +<sup>۵</sup> بسیار التجا کردیم. قبول نکرد. دانستم<sup>۶</sup> که اگر از این جماعه<sup>۷</sup> مانیم، غیر از هلاکی دیگر چیزی باقی نمیماند. آن کافران بی دین هر چند +<sup>۸</sup> مبالغه نموده، التجا میکردیم، قبول نمیفرمود<sup>۹</sup>. عاقبت دیدم<sup>۱۰</sup> که کار از دست رفت. به زبان اوروسی به آواز بلند گفتم. > در میان شمایان کسی باشد که خط خوانده<sup>۱۱</sup> تواند. < یکی گفت، < بلی داریم. > گفتم، < خطی دارم، یک درجه خان. بعد اختیار تو داری و اگر نخوانی، وای بر حال شمایان باد<sup>۱۲</sup>. > { ۵۵۱ پ } چون از فقیر این سخن شنیدند، بعد از ساعتی یک گبری به زور قچه سوار شده آمد. فقیر خط

۱ × [د]

۲ × [د]

۳ دیدند [د]

۴ گزیدن [ت]

۵ و [د]

۶ دانستیم [ت]

۷ جماعت [د]

۸ ما [د]

۹ [د]، نمیفرمودند [س] [ت]

۱۰ دیدیم [ت]

۱۱ خواندن [د]

۱۲ × [ت] [د]

عرا به فرود آمدیم و سلام کردیم، آن پیر فقیر را<sup>۱</sup> مع دو خدمتکار خود به آن حال مشاهده نمود. در حیرت افتاد و احوال پرسید. صورت واقعه را بیان نمودیم. به مجرد شنیدن سخن گریه آغاز کرد. گفت، <چه خوش طالعی<sup>۲</sup> داشتید که از این بیابان جان به سلامت بردید.> بعد به مهمانداری ما قیام نمود. دو روز از رنج راه بر<sup>۳</sup> آسودیم. بعد روی<sup>۴</sup> به آن پیر آورده، التجا کردم که <تو مسیحا نفسی و ما بیجان شد<sup>۵</sup> و تو خضری و ما گم کرده<sup>۶</sup> راهان را از پیش خود محروم مگردان و از حال ما بیچارگان نظر<sup>۷</sup> عنایت دریغ مدار و ما را از این بیابان خونخوار به کنار آبادی رسان.> پیر گفت، <ای فرزندی، در غایت ضعف و ناتوانی. پیری در ملک بدنم فرمان روا گشته، بی دستگیری عصا نتوانم بر خواست، از دست من چه می آید.> فقیر تا رفته<sup>۸</sup>، مبالغه نمودم. عاقبت آن پیر +<sup>۹</sup> به حالم رحم آورد<sup>۱۰</sup>. پنج طلا دادیم. راه بری را قبول نمود. روز دیگر با همراهی پیر متوجه [دشت پیمای کربت]<sup>۱۱</sup> +<sup>۱۲</sup> شدیم. بعد از سه شب و<sup>۱۳</sup> روز به چندین {۵۵۱ر} محنت و مشقت بر لب دریای ایدل رسیدیم که یاد <۵۴۲پ> از دریای قلزم میداد. در کمال بزرگی. پیر از همان جا دعا کرد. به جانب خانه خود مراجعت فرمود<sup>۱۴</sup>. فقیر با دو خدمتکار خود بر لب دریا منتظر لطف الهی شده نشستیم، [چنانچه

- 
- |    |              |
|----|--------------|
| ۱  | × [د]        |
| ۲  | طالع [د]     |
| ۳  | × [د]        |
| ۴  | رو [ت] [د]   |
| ۵  | شده [ت] [د]  |
| ۶  | گشته [د]     |
| ۷  | نگاه [د]     |
| ۸  | رفتم [ت] [د] |
| ۹  | را [د]       |
| ۱۰ | آمد [د]      |
| ۱۱ | × [د]        |
| ۱۲ | مقصد [ت]     |
| ۱۳ | [د]          |
| ۱۴ | نمود [ت] [د] |

درختانش مانند افعی سم +<sup>۱</sup> آموده\*<sup>۲</sup> و گیاهش به سان مار ارقم هلاهل آلوده بود، [چنانچه گفته اند.]<sup>۳</sup>

### قطعه

چو پشته پشته در او راه های خار و<sup>۴</sup> خشک  
چو پاره پاره در او خانه های ریگ روان  
زمین او همه مار است و کژدم و حشرات  
به بادهاش در او شیر شرزه از حیوان

از مشاهده این همه بیم انگیزی و بلا خیزی آن بیابان هزار بار دست از جان (۶۰۶)  
شیرین شسته<sup>۵</sup>، تن به قضا در دادیم. چار و<sup>۶</sup> ناچار در آن بیابان آتشبار راه می پیمودیم. +<sup>۷</sup>  
بعد از ده روز +<sup>۸</sup> از دور +<sup>۹</sup> خرگاه نمایان شد. شکر کنان در کمال تعجیل متوجه آن جانب  
شدیم. چون به<sup>۱۰</sup> نزدیک خرگاه رسیدیم، پری را دیدیم<sup>۱۱</sup> از مردم قزاق {۵۵۰پ} سمن مویی<sup>۱۲</sup>  
بنفشه بویی<sup>۱۳</sup> <۵۴۲ر> قامت خمیده، عصایی<sup>۱۴</sup> بر دست در سایه خرگاه مربع نشسته، چون از

- 
- |    |   |
|----|---|
| ۱  | قاتل [د]  |
| ۲  | [د]، آماده [س] [ت]  |
| ۳  | × [د]   |
| ۴  | × [ت] [د]   |
| ۵  | شستد [د]  |
| ۶  | × [د]   |
| ۷  | اسبان از رفتار باز ماند. مایان هر دم منتظر مردن می بودیم. [ت] [د] |
| ۸  | ناگاه [ت] [د]   |
| ۹  | سه [ت]  |
| ۱۰ | × [د]   |
| ۱۱ | دیدم [ت] [د]  |
| ۱۲ | موی [ت] [د]   |
| ۱۳ | بوی [ت] [د]   |
| ۱۴ | عصای [ت] [د]  |

ذکر<sup>۱</sup> رفتن فقیر به چندین محنت و مشقت در ولایت اشترخان

+<sup>۲</sup> بعد از چند روز از آن ولایت برآمده، متوجه اشترخان شدم. بعد از قطع<sup>۳</sup> مسافت در قلعه حبیق وارد گردیدم و<sup>۴</sup> آن ولایتی<sup>۵</sup> بود، در غایت<sup>۶</sup> بزرگی و آبادی و<sup>۷</sup> سه روز در آن جا از رنج راه برآسودم<sup>۸</sup>. راه متعارف که از آن جا تا<sup>۹</sup> اشترخان به چهل روز میرفتند، او را فقیر گذاشته، به راه غیر متعارف متوجه مقصد شدم<sup>۱۰</sup>. +<sup>۱۱</sup>

## مصراع

{۵۵۰ر} راه اگر هموار باشد شکوه از دوری مکن

بعد از سه روز در ریگستانی <۵۴۱پ> رسیدم<sup>۱۲</sup> که هوایش چون هوای<sup>۱۳</sup> دوزخ عذاب انگیز +<sup>۱۴</sup> و فضایش<sup>۱۵</sup> چون فضای جهنم عقوبت خیز، آبهایش به سان آب عذاب قطع روده میکرد. +<sup>۱۶</sup> دم به دم آوازه‌های با هول به دماغم رسیده، در کاسه سر مغز را میسوخت و

- 
- |    |                         |     |
|----|-------------------------|-----|
| ۱  | ×                       | [د] |
| ۲  | فقیر نیز [ت]            | [د] |
| ۳  | طی                      | [د] |
| ۴  | ×                       | [د] |
| ۵  | ولایت                   | [د] |
| ۶  | کمال                    | [د] |
| ۷  | دو                      | [د] |
| ۸  | آسودیم                  | [د] |
| ۹  | [د]، با [س]             | [ت] |
| ۱۰ | شد                      | [د] |
| ۱۱ | به این مصراع عمل نکرده، | [د] |
| ۱۲ | رسیدیم [ت]              | [د] |
| ۱۳ | فضای                    | [د] |
| ۱۴ | بود                     | [د] |
| ۱۵ | فضایش                   | [د] |
| ۱۶ | و [ت]                   | [د] |



{۵۴۹پ} راه روی نتایم و اگر هر مژه در دیده من سنانی شود، نظر <۵۴۱ر> به مهمی دیگر نه افکنم. <چنانچه<sup>۱</sup>

### مصراع

هر که میل گنج دارد رنج می باید کشید

چون این سخن از فقیر شنید، گفت، <اختیار شما<sup>۲</sup> است. اما باز گشت به پیش ما بیایید. <<sup>۳</sup> بسیار شفقت و مرحمت میکنیم. <فقیر > بسیار خوب. <<sup>۴</sup> بالای چشم. > گفتم.

### مصراع

گر عمر بود باز به خدمت برسم

و<sup>۵</sup> یک ناس دان [و یک]<sup>۶</sup> انگشتی الماس خود را مع سیصد<sup>۷</sup> بجاقی<sup>۸</sup> + انعام فرمود<sup>۹</sup> و خطی داد که در تمامی<sup>۱۰</sup> ممالک اوروسیه در هر جا محمد حکیم خان روند<sup>۱۱</sup>، محترم دارند. در آن وقت سنه ۱۲۴۰ بود، که<sup>۱۲</sup> رخصت داد. روز دیگر به جانب پای تخت خود مراجعت نمود.

- 
- |    |                |
|----|----------------|
| ۱۶ | رود [ت]        |
| ۱  | × [د]          |
| ۲  | ترا [ت] [د]    |
| ۳  | به شما [د]     |
| ۴  | و [د]          |
| ۵  | × [د]          |
| ۶  | خود را معه [د] |
| ۷  | سه صد [ت]      |
| ۸  | نیز [د]        |
| ۹  | نمود [د]       |
| ۱۰ | تمام [د]       |
| ۱۱ | رود [ت]        |
| ۱۲ | به فقیر [د]    |

بود. <sup>۱</sup> اگر هر کدام او را در قید کتابت آریم، سخن به طول می انجامد.  
 خلص کلام بعد از فراغ مجلس پادشاه روی به فقیر آورد. گفت، <محمد<sup>۲</sup> حکیم خان  
 می باید که همراه ما به پای تخت پتربور روید.> فقیر در جواب گفتم، <صاحب اختیارید.>  
 گفت، <چرا پیش نرفتید؟> فقیر گفتم، <وقتی <sup>۴</sup> + در قید محمد علی خان ماده<sup>۵</sup> بودم،  
 عهد کرده بودم که اگر از این حبس سلامت بر آیم تا به <sup>۶</sup> بیت الله شریف نروم، آرزوی هیچ  
 جای<sup>۷</sup> را اختیار نکنم. بنابراین جای را اختیار نمیکنم.> او گفت، <راه قبله شما مردم دور<sup>۸</sup>  
 و پرافت است.> فقیر<sup>۹</sup> این بیت را خواندم <sup>۱۰</sup> +.

### بیت

(۶۰۵) در بیابان چون به شوق کعبه خواهی زد قدم  
 سرزنش ها گر<sup>۱۱</sup> کند خار مگیلان غم مخور

و گفتم، <<sup>۱۲</sup> + در این نیت به مثابه صادق که اگر هر مویی<sup>۱۳</sup> بر سر<sup>۱۴</sup> تیغی گردد<sup>۱۵</sup>، از این

- ۱ و [ت]
- ۲ × [د]
- ۳ نرفتی [د]
- ۴ که [د]
- ۵ × [ت] [د]
- ۶ × [د]
- ۷ نجا [د]
- ۸ بسیار مشقت [د]
- ۹ × [د]
- ۱۰ × [د]
- ۱۱ و ترجمه کردم [د]
- ۱۲ [ت] [د]، که [س]
- ۱۳ من [ت]، و من [د]
- ۱۴ موی [ت] [د]
- ۱۵ سری [ت]

پنجره های آهنین تعبیه کرده و بسیاری خانه از آهن بود و گبران عفریت منظر و دیو سیرت در آن جا پاسبانی میکردند و آن موضعی بود که از بدی هوایش آتش دوزخ آب میشود و از ترس [آتش دوزخ]<sup>۱</sup> بر خود می هراسد. از معاینه چنین جای پر هول هوش از سر فقیر پرید<sup>۲</sup> و اضطراب بر طبیعتم استیلا یافت. چون بید از باد لرزیدن گرفتم و از غایت ترس سبو سبو عرق از چهره ام چکیدن<sup>۳</sup> گرفت. بندیان را گروه گروه موافق جریمه اش به جای پر عذاب گذاشته بودند و چندین گونه عقوبت میکردند.

زبدۀ کلام آن که پادشاه تمامی<sup>۴</sup> آن موضع<sup>۵</sup> را سر به<sup>۶</sup> سر دیده<sup>۷</sup>، روی به فقیر آورده، گفت، <در ولایت شما مثل این نوع محبوس خانه هست. > فقیر گفتم، <نیست و نخواهد بود. > بعد از {۵۴۹ر} ساعتی بیرون خرامید. به عرابه خود نشست. فقیر را به عرابه گوبرناتور اشارت کرد. همراه متوجه قصر شدیم. چون به منزل خود رسید، <۵۴۰پ> طرح<sup>۸</sup> مجلس بر پا کرد. بازی<sup>۹</sup> گران و نیرنج بازان<sup>۱۰</sup> در آن صحبت رقص و حقه بازی میکردند. از عقل بیرون بود. هیچ صاحب<sup>۱۱</sup> ریمیا و سیمیا دان<sup>۱۲</sup> [آن را]<sup>۱۳</sup> در خوابش ندیده [و نشنوده]<sup>۱۴</sup>

۱ عذاب جهنم [د]

۲ پررید [ت]

۳ ریختن [د]

۴ تمام [د]

۵ مواضع ها [ت]، جا [د]

۶ × [د]

۷ دید [د]

۸ × [د]

۹ بازین [د]

۱۰ بازین که [د]

۱۱ × [د]

۱۲ سیمیا دانی [د]

۱۳ × [د]

۱۴ × [د]

میگویند. چون پادشاه از سیر و گشت فارغ یافت، رو به بندی خانه آورد. [مردم شهر]<sup>۱</sup> به<sup>۲</sup> دربندی خانه مردم ازدحام کرده بودند. اتفاقاً فقیر نیز در میان نظاره گیان نظاره میکردم. پادشاه به در<sup>۳</sup> خانه آمده، از عرابه فرود آمد. خواست که داخل بندی خانه شود. از قضا چشم پادشاه به فقیر افتاد. بلا توقف به پیش خود طلبید و<sup>۴</sup> از دست فقیر گرفت<sup>۵</sup>. متوجه بندی خانه شد. مردمان [تماشا بین]<sup>۶</sup> این<sup>۷</sup> حال را دیدند و<sup>۸</sup> در<sup>۹</sup> بحر تفکر فرو رفتند که این چه کس بود که پادشاه در حق او {۵۴۸پ} این قدر شفقت و مرحمت نمود. به حکم آن که

## بیت

(۶۰۴) مجنون به کوه و دشت و بیابان غریب نیست

هر جا که رفت خیمه زد و بارگاه ساخت<sup>۱۰</sup>

چون به رفاقت پادشاه مع چهار وزیر و ده محرم بعد از چندین دربند +<sup>۱۱</sup> <۵۴۰> داخل بندی خانه شدیم. دیدم<sup>۱۲</sup> که سرایی<sup>۱۳</sup> در کمال بزرگی و خانهای +<sup>۱۴</sup> در غایت کلانی و

۱ × [د]

۲ بر [ت]

۳ دربندی [د]

۴ × [د]

۵ گرفته [د]

۶ تماشای [ت]

۷ آن [د]

۸ × [د]

۹ به [ت]

۱۰ کرد [د]

۱۱ آهنین [د]

۱۲ دیدیم [د]

۱۳ سرای [ت][د]

۱۴ درون به درون [د]

پادشاه چنان خنده غلبه کرده بود که خود را به تکلف نگاه [می داشت]<sup>۱</sup>. بعد از ساعتی ایشان را رخصت داد. به فقیر چنان صحبتش [گرم شده]<sup>۲</sup> بود که در آن شب به کس<sup>۳</sup> دیگر قطعاً تکلم نکرده است و از هر جانب سخن در میان افتاد<sup>۴</sup>. بسیار از<sup>۵</sup> احوالات ما وراء النهر +<sup>۶</sup> می پرسید. قریب به سحر شده بود که فقیر را رخصت اجازت داد. باز همان [محرمان فقیر را به مسکنم]<sup>۷</sup> آورده گذاشتند و ایشان به جانب قصر مراجعت فرمودند. روز دیگر پادشاه از بهر تفرج شهر با چندین تجمل بیرون خرامید. بعد از سیر ولایت مثل +<sup>۸</sup> کاروان سرا {۵۴۸ر} و لشکرگاه [و صورت خانه و دفتر خانه]<sup>۹</sup> و بیمار خانه ها که آن جا طبیبان افلاطون طبع بیماران را طبابت میکردند و حرامی [خانه ها]<sup>۱۰</sup> که رسمی<sup>۱۱</sup> است که در هر جا بچه حرامی در وجود آید، مادرش شب آورده، به قصر حرامیان میگذارد. بزرگ ایشان او را گرفته، به تربیت او می پردازد. در هر شهر اوروسیه از بهر حرامیان +<sup>۱۲</sup> قصرهای عالی بنا کرده اند <۵۳۹پ> و لباس و [خوراک ایشان]<sup>۱۳</sup> را پادشاه میدهد. از بهر خواندن حرامیان ملاها تعیین فرموده است. در هر شهر چندین هزار حرامی موجود است، ایشان بعد از بزرگ شدن موافق دانش شان به کار پادشاهی مشغول میشوند. ایشان را پسر پادشاه

- 
- |    |  |
|----|--|
| ۱  | داشت [د]   |
| ۲  | برار کرده [د]  |
| ۳  | کسی [ت] [د]  |
| ۴  | می افتاد [د]   |
| ۵  | × [د]  |
| ۶  | را [ت]   |
| ۷  | محرمان در مسکن خودم [د]  |
| ۸  | صورت خانه و دفتر خانه و چیزی که به کار خانه پادشاهی به کار میرود و [د] |
| ۹  | × [د]  |
| ۱۰ | خانه [د]   |
| ۱۱ | رسم [د]  |
| ۱۲ | چندین جا [ت]   |
| ۱۳ | خوراک شان [ت]  |

بسیار شفقت نموده، سخن گفت. فقیر نیز به زبان اوروسی جواب های شافی دادم. [از بس که در آن وقت به زبان اوروسی وقوف پیدا کرده <۵۳۸پ> بودم،]<sup>۱</sup> پادشاه از زبان دانی فقیر بسیار خرسندیها نمود. در پیش پادشاه چهار وزیر نشسته بود، نه محرم پری پیکر به جواهر غرق شده، راست ایستاده بودند. دو خان قزاق که از اولاد چنگیز خان بودند، ایشان نیز در آن مجلس حاضر بودند. اما لوح حال ایشان از نقش دانش معراً و<sup>۲</sup> [وجود ایشان]<sup>۳</sup> از طراز هنر مبراً و از علم محاوره. چیزی نخوانده +<sup>۴</sup>، در کمال گرنگی می نشستند و حرکت های بیجا در صحبت +<sup>۵</sup> از آنها<sup>۶</sup> صادر میشده است. پادشاه تمسخر نموده، به وزیران خود {۵۴۷پ} به گوشه چشم اشارت مینمود. ایشان به ناس کشیدن خود مشغول بودند. نمیدانستند که چه مضمون ها در مجلس طی میشود. دانستم که از صحبت ایشان پادشاه را گرانی [آمده است]<sup>۷</sup>. روی به فقیر آورده<sup>۸</sup>، گفت، <ایشان چرا سخن +<sup>۹</sup> را نمیدانند.> فی الفور فقیر این بیت را خواندم.

## بیت

از فضل و هنر اگر بپرسی<sup>۱۰</sup> سر پنجه گرفتن است و یان باش

پادشاه گفت، <این بیت فارسی را به زبان اوروسی ترجمه کنید <۵۳۹ر> تا که ما دانیم.> (۶۰۳) فقیر در حال به زبان اوروسی ترجمه کردم. به مجرد فهمیدن این بیت به

- 
- |    |                    |
|----|--------------------|
| ۱  | x [ت]              |
| ۲  | در [ت]             |
| ۳  | وجودشان [ت][د]     |
| ۴  | اند [د]            |
| ۵  | او [ت]، پادشاه [د] |
| ۶  | ایشان [د]          |
| ۷  | آمد [د]            |
| ۸  | آورد [د]           |
| ۹  | گفتن [ت][د]        |
| ۱۰ | بپرسید [ت][د]      |

محمد<sup>۱</sup> حکیم خان در پیش ما آمده، ساعتی صحبت کرده روند. < فقیر سخنهاى مرحمت آمیز او را غایبانه شنیده، عاشق دیدن او شدم، چنانچه<sup>۲</sup>

### مصراع

نادیده<sup>۳</sup> ترا ز دیده<sup>۴</sup> دوستر داشتمت

القصه. فقیر انگشت قبول به دیده نهاده، متفق محرمان در عرابه<sup>۵</sup> کفره<sup>۵</sup> نشسته، {۵۴۷ر} در آن نیم شبی متوجه بارگاه پادشاه شدم<sup>۶</sup>. چون به نزدیک قصر رسیدیم<sup>۷</sup>، از عرابه فرود آمده<sup>۸</sup>، به درون کوشک خرامیدیم<sup>۹</sup>. بعد از چندین بندر خانه<sup>۱۰</sup> که پادشاه نشسته بود، رسیدیم<sup>۱۱</sup>. چون از در خانه در آمدیم<sup>۱۲</sup>، نظر پادشاه به فقیر افتاد. بلا توقف از جای بر<sup>۱۳</sup> خواست. چند قدم پیش آمده، از دست فقیر گرفت و در<sup>۱۴</sup> پیش خود جای داد. رسم و قاعده<sup>۱۵</sup> آنها است که به هر کس<sup>۱۵</sup> میخیزند، خصوص بزرگ زاده باشد، +<sup>۱۶</sup> به زبان اوروسی

- ۱ × [د]
- ۲ × [د]
- ۳ نادید [د]
- ۴ دید [د]
- ۵ × [د]
- ۶ [ت][د]، شدی[س]
- ۷ رسیده [ت][د]
- ۸ آمدم [ت]، آمدیم [د]
- ۹ خرامیدم [ت]
- ۱۰ خانه ای [ت]
- ۱۱ رسیدم [ت]
- ۱۲ آمدم [ت]
- ۱۳ بر پا [ت]، به پا [د]
- ۱۴ از [د]
- ۱۵ بر [ت][د]
- ۱۶ بعد [د]

گویا از دور کوه است. از آتش و درختی است. از آتش که در درون<sup>۱</sup> آتش شکفته است و عکس آن کوه آتش به دریا زد و<sup>۲</sup> در زیر دریا + کوه آتشی پیدا شد و آن جانب شهر + نشیمن گاه پادشاه و بر لب دریا از بهر تماشا چنان زن و مرد هجوم کرده بودند که از دویست هزار کس بیش بود و آن شب چراغانی شده بود که دیده روزگار ندیده +<sup>۵</sup> و نشینده +<sup>۶</sup>.

{۵۴۶پ} مثنوی<sup>۷</sup>

گل مهتابی<sup>۸</sup> افشاندی در آن طور      ز دامن جای شبنم غنچه نور  
تماشا گشت چندان حسرت انگیز      که از گشتن بر آمد چرخ گلریز

گویند خراجات چراغان همان شب را در قید کتابت آورده بودند<sup>۹</sup>. دوازده هزار طلا صرف شده بود. شب دیگر فقیر در منزل خود با چندی از بازرگانان<sup>۱۰</sup> ما وراء النهر طرح صحبت<sup>۱۱</sup> افکنده، نشسته بودم که ناگاه از در همان محرم گوبرناتور مع محرم خاص پادشاه در آمد. در غایت آداب دست فقیر را بوسید و بنشست. گفت، >پادشاه احوال میپرسند و میگویند، [که محمد]<sup>۱۲</sup> حکیم خان در ولایت ما خوش آمده اند. < ۵۳۸ > فقیر از ترس گردن خار خار تعظیم می کردم. بعد از ساعتی (۶۰۲) گفت، >پادشاه مهربانی میکنند که

۱ × [د]

۲ × [د]

۳ نیز [ت] [د]

۴ در [د]

۵ است [د]

۶ است [ت] [د]

۷ × [د]

۸ مهتاب [د]

۹ بوده اند [د]

۱۰ بازرگان [د]

۱۱ مجلس [د]

۱۲ × [د]



بزرگ +<sup>۱</sup> شمردم. به هر کدام او چندین شمع روشن میشود. باقی را از این قیاس باید کرد.

### مصراع

چراغان فلک مفت تماشا است

القصه. در برابر قصر گوبرناتور رو به جانب دریا در میان توقی {۵۴۶ر} [یک طناب]<sup>۲</sup> جای خالی بود. +<sup>۳</sup> پادشاه حکم نمود که آن جا را از چوب مثل پیش طاقی<sup>۴</sup> مدرسه سازند. در کمال رفعت همان روز چندین اوستادی<sup>۵</sup> چابک دست گویا از چوب کوهی [بر پا ساختند]<sup>۶</sup>، در غایت بلندی. در میان او مثل پنجره از چوب ساخته بودند. چندین عرابه قندیلهای ریزه در غایت تنگی از هر رنگ از شیشه ریخته<sup>۷</sup> بودند. حاضر آورده اوستادان دانا به صورت درخت هر رنگ را به جای<sup>۸</sup> خود چنان چیدند که جای کوه چوبین خالی نماند <۵۳۷پ> و در میان آن قندیلچه ها روغن صاف انداخته، روشن کردند. روشنی به +<sup>۹</sup> شیشه زد و<sup>۱۰</sup> هر کدام شیشه رنگ خود را نمودار کرد.

### مصراع<sup>۱۱</sup>

از شیشه همان برون<sup>۱۲</sup> تراود که در او است

- |    |                 |
|----|-----------------|
| ۱  | را [د]          |
| ۲  | کمتر [د]        |
| ۳  | بر لب دریا [د]  |
| ۴  | طاق [د]         |
| ۵  | اوستای [ت] [د]  |
| ۶  | ساخته بودند [د] |
| ۷  | ساخته [د]       |
| ۸  | جایی [د]        |
| ۹  | آتش [د]         |
| ۱۰ | × [د]           |
| ۱۱ | × [د]           |
| ۱۲ | × [د]           |

حکم نمود که مشق توب کنند و<sup>۱</sup> در [میدان صد توب]<sup>۲</sup> حاضر بود. [چنان به تقلید محاربه<sup>۳</sup> {۵۴۵پ} توبچیان]<sup>۴</sup> چابک دست به هم در افتاده، جنگ میکردند که از صدای توب لرزه بر<sup>۵</sup> زمین زمان افتاده بود و عالم چنان تاریک گشته بود که یاد از ظلمات میداد. پادشاه دید که کار بزرگ شد. بلا توقف منع فرمود. بعد از زمانی عالم روشن گشت. نیک ملاحظه نمودیم، با وجود بازی بودن نه کس به آتش توب سوخته بود و [سه کس]<sup>۶</sup> از کثرت آدم<sup>۷</sup> به تحت پا مانده، نابود [شده بود]<sup>۸</sup>. [بعد از آن]<sup>۹</sup> پادشاه از آن جا با فریادونی به جانب شهر مراجعت کرد و به قصر نزول <۵۳۷ر> فرموده<sup>۱۰</sup>، [حکم نمود]<sup>۱۱</sup> که<sup>۱۲</sup> شهر را سه روز آیینہ بندی<sup>۱۳</sup> و سه شب چراغان کنند. چون این (۶۰۱) خبر به<sup>۱۴</sup> تمام شهر شیوع یافت، [مردم شهر را]<sup>۱۵</sup> چنان آیینہ بندی کرده بودند که عالم را شعاع آیینہ گرفته بود. +<sup>۱۶</sup> شبها چنان چراغان میکردند که +<sup>۱۷</sup> از روشنی روز روشن تر بود. فقیر به یک رسته سیصد<sup>۱۸</sup> قنديل

- ۱ × [د]
- ۲ آن جا چند توب در میدان [د]
- ۳ به محاربه توب به تقلیدی چنان [د]
- ۴ به [د]
- ۵ چندی [د]
- ۶ مردم [ت]
- ۷ شدند [ت][د]
- ۸ چون [د]
- ۹ فرمود و [ت]، فرمود [د]
- ۱۰ حکم فرمود [ت]، مناری زناند [د]
- ۱۱ × [ت]
- ۱۲ کنند [د]
- ۱۳ بر [د]
- ۱۴ شهر را مردم [ت]
- ۱۵ جای نبود که از آیینہ خالی باشد [د]
- ۱۶ البته [د]
- ۱۷ سه صد [ت][د]

کرد و اطراف و جوانب را [نظر می کرد]<sup>۱</sup>. بعد از ساعتی به درون قصر خرامید و مردم نظاره گیان به خانه خود مراجعت فرمودند. روز دیگر منادی زدند که لشکریان اطراف آن ولایت جمع شوند که پادشاه {۵۴۵ر} دیده، علوفه<sup>۲</sup> میدهد. چون این خبر بر تمامی<sup>۳</sup> تابعات<sup>۴</sup> شهر شیوع یافت، روز دیگر چنان لشکر جمع شده بود که جای گنجایش نداشت و پادشاه به اسب کوه پیکر هامون نورد سواری نموده، با چندین [شأن و شوکت]<sup>۵</sup> بیرون +<sup>۶</sup> خرامید. در آن موضع میدانی بود، در<sup>۷</sup> غایت وسعت و مسطح و تمامی<sup>۸</sup> خاص و<sup>۹</sup> عام را از شهر بیرون کشیده، در آن جا حاضر ساختند<sup>۱۰</sup>. در آن دشت سپاهیان اسپکی به یک جانب صف زدند. قریب بست هزار اسپکی بود، به یک جانب توب خانه مع چهل <۵۳۶پ> هزار سلات، به +<sup>۱۱</sup> جانب پادشاه به امرای خود صف [زده، و در]<sup>۱۲</sup> یک جانب اهالی شهر. بعد از آن پادشاه تنها از یک سر گشته سپاه را از نظر گذرانید. بعد حکم فرمود که ایشان تقلید جنگ را کرده، مشق تفنگ کنند. به مجرد شنیدن امر او سلاتان به چند تقسیم شده، به چندین الوان به هم در آمیختند. چنان<sup>۱۳</sup> تفنگ آتش میخورد که عالم را صدای تفنگ فرو گرفته بود. بعد

۱۳ چون [د]

۱ نظاره کرد [د]

۲ اولوفه [د]

۳ تمام [د]

۴ توابعات [ت]

۵ شوکت شان [د]

۶ شهر [د]

۷ ر [ت]

۸ تمام [د]

۹ × [د]

۱۰ ساخت [د]

۱۱ یک [د]

۱۲ زده، به [د]

۱۳ بی تیر [د]

و در هیچ بیرم اهل کفر<sup>۱</sup> مانند آن مشاهده ننموده [اند، چنانچه گفته اند.]<sup>۲</sup>

### نظم<sup>۳</sup>

در آن روز از کثرت خاص و عام      ز بسیاری و ازدحام عوام  
در آن روز راه نفس بسته بود      ز حمل خلایق زمین خسته بود

فقیر در پیش قصر گویرناتور آمده، منتظر بودم. ناگاه شش عرابه سه او طلا و سه او نقره بود که به هر کدام +<sup>۴</sup> شانزده اسب<sup>۵</sup> بسته {۵۴۴پ} بودند<sup>۶</sup>، با چندین تجمل رسید. از آن شش عرابه یکی بلا اهمال به در +<sup>۷</sup> بُت خانه بزرگ رسید. [دانستم که]<sup>۸</sup> در آن جا پادشاه بود. بعد پادشاه با یک محرم خاص خود از عرابه فرود آمده، داخل دیر شد. دو ساعت به بُت پرستی مشغول بود<sup>۹</sup>. در آن وقت تمام مردم شهر در آن جا جمع شده بودند. بعد از ساعتی پادشاه بیرون آمده، متوجه قصر شد. همه مردم شهر دو جانبه صف زده، سر میزدند. پادشاه نیز به دست خود بورک را از سر گرفته، به ایشان سر میزد. متوجه قصر شده، در بالای کوشک مع گویرناتور <۵۳۶ر> و یک وزیر و یک محرم خاص بر آمد. چون نیک ملاحظه کردم، +<sup>۱۰</sup> پادشاهی بود، غایت خوش حسن و قدی بلندی داشت و گندم<sup>۱۱</sup> گون بود و چشم احوال داشت. +<sup>۱۲</sup> (۶۰۰) +<sup>۱۳</sup> در بالای قصر بیرون شد، از جیب خود دوربینی بیرون

۱ کفره [د]

۲ × [د]

۳ بیت [د]

۴ او سی دو اسب [د]

۵ × [د]

۶ بود [د]

۷ خانه [د]

۸ × [د]

۹ شد [د]

۱۰ بر آمد [د]

۱۱ گندوم [ت][د]

۱۲ چون [د]

## بیت

{۵۴۴} دستم نمیرسد به گریبان آرزو ز اغان خورند میوه شاخ بلند را

هنوز است که از<sup>۱</sup> نا شنیدن سرگذشت آن پری پیکر حسرت از دل نمیروند، به حکم آن  
که

یک بار رخ<sup>۲</sup> نگار دیدن هوس است در آرزویی<sup>۳</sup> دوباره بسیار کس است

در [دیگر روز]<sup>۴</sup> به اتفاق سوداگران به چهار باغ بر آمده، طرح مجلس انداختیم.

ذکر ملاقات کردن فقیر به پادشاه<sup>۵</sup> اوروس و مرحمت نمودن او بر من درویش

در آن وقت بود، + آمدن پادشاه اوروس از بهر تفرج در آن ولایت بر همه خلق منتشر  
گشت<sup>۷</sup>. سه روز انتظاری<sup>۸</sup> پادشاه را میکشیدند. روز چهارم خاص و عام با غلبه تمام به نشاط  
و سرور از شهر بیرون شتافته، تمامی<sup>۹</sup> صحرا را فرو گرفته بودند. +<sup>۱۰</sup> اجتماع خلائق از مرد و  
زن در [آن روز]<sup>۱۱</sup> به [مرتبه ای رسیده]<sup>۱۲</sup> بود که در هیچ عید و نوروز<sup>۱۳</sup> اهل اسلام <۵۳۵پ>

۱ × [د]

۲ [د]، رخی [س] [ت]

۳ آرزوی [د]

۴ روز دیگر [د]

۵ پادشاهی [ت]

۶ که [ت]

۷ گشته [د]

۸ انتظار [د]

۹ تمامت [د]

۱۰ و [ت] [د]

۱۱ مضایق [د]

۱۲ مرتبه [د]

۱۳ نوروزی [د]

اند. <sup>۱</sup>

## بیت

پری نهفته رخ و دیو در کرشمه و ناز  
بسوخت عقل ز حیرت که این چه بو العجبی است

بعد از آن<sup>۲</sup> آن گل پرهن از شنیدن این سخن یک درجه خنده آغاز نهاد. بعد از آن سر خود را در پیش افکنده، در بحر تفکر فرو رفت. بعد از ساعتی سر خود را برداشت و گریه آغاز کرد. دامن دامن گوهر بر گلبرگ رخسار خود ریخته، گفت.

بیت<sup>۳</sup>

سراست در این سینه که گفتن نتوانم      گفتن نتوانم +<sup>۴</sup> نهفتن نتوانم

<چه می پرسید. گلی بودم، از چمن اشراف و دری بودم، از درج تجارت. از بازرگان زاده های ولایت بادکو به ممر انقلاب فلک کج رفتار با پدر خود گذارم در این ولایت افتاد. > ۵۳۵< در آن حین بود که گوبرناتور از در در آمد و آن پری چهره خاموش نشست. [از استماع مقدمه حکایت او جراحات دلم تازه شد و دریای غم در سینه در جوش آمد. <sup>۵</sup> ندانستم که سرگذشت او چه بود. بعد از ساعتی گوبرناتور فقیر را رخصت داد و آن گل بدن را به آن گبر گذاشته، به جانب (۵۹۹) قوش به چندین داغ حسرت مراجعت کردم<sup>۶</sup> و این بیت بر<sup>۷</sup> زبان جاری بود.

۱۲ × [ت]

۱ × [د]

۲ این [د]

۳ [ت]

۴ و [ت]

۵ × [ت]

۶ فرمودم [د]

۷ به [د]

{۵۴۳} بسیار مخور [خوی مکن] <sup>۱</sup> فاش <sup>۲</sup> مساز همچون اسرار

کم کم خور که گاه خور و پنهان خور کس پی نبرد

چون چشم گوبرناتور به فقیر افتاد، از جای خود برخواست. به جای خود نشانید و در <sup>۳</sup> کمال شفقت گفت، <از آن جا که (۵۹۸) خدمت شما را دوست میدارم، بنابراین به این صحبت [خاص خود] <sup>۴</sup> طلب نمودم. فقیر نیز اظهار خرسندی کردم و آن پری نژاد <sup>۵</sup> + احوال فقیر را از گوبرناتور پرسید و او تقریر کرد. از نگاه مرحمت آمیز او دانستم که دل او مایل سخن کردن فقیر شد و از هر جانب سخن ها میکردیم <sup>۶</sup>. صحبت بسیار برار گرفت، تا رفته، آن گل اندام به فقیر سخن میکرد و فقیر نیز جوابهای شافی میدادم. در آن حین گوبرناتور بیرون برآمد. فقیر یار را بی اغیار یافته، گفتم، <ای سرآمد نازنینان، مشکلی دارم. <sup>۷</sup> + حل سازی. > گفت، <بگو. > گفتم، <با این همه نازکی و نازنینی که گل در پیش چهره بهار نیت > {۵۳۴} خود را از خار خار تر داند <sup>۸</sup> و ماه در برابر رخ نگارینت بیقدرتر از آبگینه مینماید، به مصاحبت این دیو چون افتادی. به چنین عفریت چه سان دل می نهی که این خاتم به انگشت مدعای هراهرمنی موافق نه و در این هنگامه به کلید ابرام {۵۴۳} هر بولهوسی [نگشود و] <sup>۹</sup> چه صعوه را با بلبل دم همزبانی زدن نشاید، تو نه آن صیدی <sup>۱۰</sup> که به دام هر صیادی گرفتار آیی و نه آن نخلی که به اهتراز هر <sup>۱۱</sup> نسیمی به حرکت در <sup>۱۲</sup> آیی. > [چنانچه گفته

۱ × [د]

۲ پاش [ت]

۳ از [ت]

۴ × [د]

۵ فی الحال [ت]

۶ میکردم [د]

۷ از روی کرم [ت] [د]

۸ میداند [ت]

۹ نگشوده [ت]، نگشاید [د]

۱۰ مرغی [د]

۱۱ × [د]

## بیت

شوخی ارمنی دختر یار عیسوی ملت      یا بیا مسلمان شو یا مرا نصارا کن

آن پری چهره گاه گاه چون طاوس مست از بهر تفرج به رسته های شهر میخرامید. خاص و عام برای تماشای او بر سر او هجوم {۵۴۲پ} میکردند. حاکم آن ولایت گوبرناتور نیز به آن پری پیکر عشقی داشت. روزی فقیر در قوش خود نشسته بودم. جمعی از بازرگانان ما وراء النهر<sup>۱</sup> به پیش فقیر آمده، التجا کردند که خدمت شما از گوبرناتور رخصت گیرید. ما مردم طوی داریم. سه چار روز در چهار<sup>۲</sup> باغ<sup>۳</sup> رفته، جشن برپا کنیم. فقیر سخن ایشان را قبول نموده، متوجه قصر گوبرناتور شدم. چون به قصر خاص او رسیدم، محرم او نبود. بعد از ساعتی آمد. گفت، <گوبرناتور کاری دارد. هر خدمت باشند<sup>۴</sup>، فرمایند. به جان میکنم.> فقیر صورت واقعه را بیان کردم. بلا توقف بر خواسته، به درون خرامید. بعد از لحظه ای در غایت تعجیل خنده کنان به پیش <۵۳۴ر> فقیر آمد. گفت، <گوبرناتور خدمت شما را طلب میکند.> فقیر بلا اهمال به اتفاق او متوجه قصر شدیم. بعد از چندین دربند به جای خاص او رسیدیم<sup>۵</sup>. داخل خانه شدم. دیدم که آن ارمنی دختر مثل ماه شب چهارده عالم را روشن کرده، به مستی به کرسی زرین تکیه زده نشسته است.

رباعی<sup>۶</sup>

گر باده خوری تو با خردمندان خور رازت ندرد  
یا با صنمی شکر لبی<sup>۷</sup> خندان خور با تو نگرد

۱ النهر [د]

۲ چار [ت]

۳ او [د]

۴ باشد [ت]

۵ رسیدم [د]

۶ × [د]

۷ لب [د]



گل {۵۴۲} و<sup>۱</sup> دو شفتالو<sup>۲</sup> کنده بودم. [باغبان بسیار]<sup>۳</sup> در آشفته. از آن جا که گوبرناتور فرموده بود، هیچ علاج نمییافت، به زبان فقیر این بیت جاری بود.

#### بیت<sup>۴</sup>

باغبان گل نگرفتم به من آزرده<sup>۵</sup> مباش  
پاره های جگر است این که به دامن دارم

در غایت فجی یکی را خوردیم، دیگر را در<sup>۶</sup> شهر بردیم<sup>۷</sup>. مردمانی که میوه را در عمر خود ندیده بودند، در حیرت افتادند. آن را دست به دست گرفته، میگشتند و میوه (۵۹۷) چنان قدری داشت که در هر درخت چند میوه انداخته باشد، در وقت گل کردن به زیر آن گل خطی نوشته گذاشته اند، تا کسی نگیرد.

الغرض. <sup>۸</sup> در آن عصر در آن ولایت ارمنی دختری برآمده بود که نگار<sup>۹</sup> چابک و نازنین گل اندام که پری بر جمالش دیوانه میگشت و حور بر حسن کامل عیارش نقد جان نثار میکرد. دل بر آتش رخسار او چون دانه سپند میسوخت، متاع خرد و صبر غارت شده هندوی خال سیاهش نقد جان و دل تاراج کرده، ترک مست نگاهش از گوشه چشم جادویش <۵۳۳پ> بهر بوالهوس<sup>۱۰</sup> می افتاد<sup>۱۱</sup>. دیوانه میساخت، [به حکم آن که گفته اند.]<sup>۱۲</sup>

- ۱ × [د]
- ۲ شیفته [د]
- ۳ باغبانی [د]
- ۴ × [د]
- ۵ آزرده [ت]
- ۶ × [ت]
- ۷ بردم [ت]
- ۸ و [ت]
- ۹ نگاری [د]
- ۱۰ بولهوس [د]
- ۱۱ نظر میافتاد [د]
- ۱۲ × [د]

{۵۴۱پ} و درختان بسیار<sup>۱</sup> بی میوه موجود و درخت میوه دار معدوم از جهة سردی هوا تمامی<sup>۲</sup> ولایت اوروس به همین طریقه است. مگر اشترخان و سری تاو به جای دیگر درخت نمیباشد. +<sup>۳</sup> مگر همان توقی و در آن چار<sup>۴</sup> باغ قصرهای عالی ساخته بود و<sup>۵</sup> از هر جنس درخت میوه دار و انواع<sup>۶</sup> گل در چلک های چوبین بنشانده تربیت کرده، +<sup>۷</sup> در زمستان از جهة درختان خانهای بزرگ از آینه ساخته، به درون او آتش میکرده است. به همین طریق [تربیت کرده]<sup>۸</sup>، آن درختان از سرما زدن محفوظ مانده<sup>۹</sup>، به کمال میرسیده<sup>۱۰</sup> است. اگر اختیار کند که برده، به جای دیگر نشاند و چهار<sup>۱۱</sup> باغی بر پا سازد، [مردم آن]<sup>۱۲</sup> را امر میکرد. درختان<sup>۱۳</sup> را و گل ها را مع چلکش برداشته، آورده مینشانیده اند<sup>۱۴</sup>. خواه خیابان <۵۳۳ر> سازند، خواه شش در شش، خواه هشت در هشت سازند. چه نوعی که دل خواهد، چار<sup>۱۵</sup> باغ<sup>۱۶</sup> جعلی حاضر سازند، +<sup>۱۷</sup> حاضر بود. در آن جا از درخت میوه دار تا گل قریب پانصد چلک بود که همه به وایه رسیده بود. اما میوه او مزه نداشت. فقیر از وی یک دامن

۱ بسیاری [د]

۲ تمام [د]

۳ بنابر آن در آن جا نبود و بر جای دیگر مطلق درخت نبود. [د]

۴ چهار [د]

۵ × [ت]

۶ نوع [د]

۷ است [د]

۸ است [ت]، نگاه میداشته است [د]

۹ مانده است [ت]، میمانده است [د]

۱۰ برسیده [د]

۱۱ چار [ت]

۱۲ مردمان [ت]، مردم [د]

۱۳ درخت ها [د]

۱۴ می گذاشتند [د]

۱۵ چهار [ت]

۱۶ باغی [ت]

۱۷ و [ت]

از این بیت بسیار خرسند<sup>۱</sup> شد. بعد از ساعتی خط خود را طلب نموده، گرفتم و باز [از برای پیش پادشاه رفتن تکلیف]<sup>۲</sup> کرد و بسیار التجا نمود. فقیر باز جواب گوبرناتور اول را گفتم<sup>۳</sup>. دید که به اختیار نمیشود. لا علاج فرو گذاشت. اما گفت، <اگر دلگیر شوند<sup>۴</sup>، گاه گاه به چار<sup>۵</sup> باغ ما تشریف (۵۹۶) فرمایند<sup>۶</sup>.> از شهر یک فرسخ بیرون چار<sup>۷</sup> باغی داشت که بی اجازت او [در آن جا کسی]<sup>۸</sup> رفته نمیتوانست. در کمال خوبی و زیبایی<sup>۹</sup> موضع دلپذیر<sup>۱۰</sup> و مرغزار بی نظیر بود. چنانچه روی زمینش از کثرت سبزه ها مانند سقف آسمان آراسته بود و از عکس ریاحین عطر بیزش پرزاغ چون دم طاوس نموده، [چنانچه گفته اند]<sup>۱۱</sup>.

### مثنوی<sup>۱۲</sup>

<۵۳۲پ>

ز هر سو چشمه ای چون آب حیوان	چراغ لاله هر جانب فروزان
بنفشه رسته و سنبل دمیده	نسیم صبح جیب گل دریده
شقایق بر یکی پای ایستاده	چو بر شاخ زمرد جام باده

- ۱ خورسند [ت]
- ۲ تکلیف پیش پادشاه رفتن [د]
- ۳ دادم [د]
- ۴ شوید [د]
- ۵ چهار [د]
- ۶ فرمایید [د]
- ۷ چهار [د]
- ۸ کسی در آن جا [ت][د]
- ۹ زیبای [د]
- ۱۰ دلپذیر [ت]
- ۱۱ × [د]
- ۱۲ نظم [د]

گفت، < تشریف فرمایند<sup>۱</sup>. گوبرناتور منتظر<sup>۲</sup> شما است. > فقیر بر خواستم. با همراهی<sup>۳</sup> آن پری چهره متوجه قصر شدیم. گوبرناتور استقبال نموده، به حرمت تمام در<sup>۴</sup> قصر در آورد و گفت، < روزی که خدمت شما از ولایت خود بر آمدید. ما از احوال شما واقف هستیم و مدعای ما این که خدمت شما در پتربور رفته، پادشاه ما را بینید و آرزوی پادشاه ما<sup>۵</sup> همین است. از بس که رسم و قاعده<sup>۶</sup> ما این که کسی را به زور به پیش پادشاه فرستانیم، این نیست. هر آینه دأب و قانون ما مثل شما مردم باشد، ما<sup>۷</sup> تا بالوقت<sup>۸</sup> خدمت شما را به پیش پادشاه هزار بار میفرستادیم. > فقیر گفتم، < از جهة خوبی ولایت است، ><sup>۹</sup> چند وقت میشود که در این<sup>۱۰</sup> جا < ۵۳۲ > سکونت اختیار کردیم<sup>۱۱</sup>. هر آینه ولایت شما مثل<sup>۱۲</sup> + ما وراء النهر میشد. یک روز ایستادن با<sup>۱۳</sup> محال بود. > گفتم. +<sup>۱۴</sup> این بیت را { ۵۴۱ } خواندم و به زبان اوروسی ترجمه کردم، [ این است. ]<sup>۱۵</sup>

## بیت

بایست آن جا که آزاری نباشد      کسی را با کسی کاری نباشد

- 
- |    |                        |
|----|------------------------|
| ۱  | فرمایید [د]            |
| ۲  | دیدن [د]               |
| ۳  | همراه [د]              |
| ۴  | به [د]                 |
| ۵  | نیز [ت]                |
| ۶  | × [د]                  |
| ۷  | الوقت [ت]              |
| ۸  | که [د]                 |
| ۹  | آن [د]                 |
| ۱۰ | کردم [د]               |
| ۱۱ | ولایت [ت]              |
| ۱۲ | ما [ت]، × [د]          |
| ۱۳ | و [د]                  |
| ۱۴ | بیت این است [ت]، × [د] |

## دیدن فقیر گوبرناتور پادشاه اوروس را

القصه. روز دیگر [فقیر لا علاج]<sup>۱</sup> گردن خار خار متوجه قصر گوبرناتور شدم. چون به پیش قصر رفته، مشاهده نمودم، آن قصر در کنار شهر رو به دریا افتاده است. از جهت خوبی قصر عقل فرو ماند. در کمال بزرگی و به<sup>۲</sup> چندین آشیانه و<sup>۳</sup> دریچه ها<sup>۴</sup> از آینه فرنگی ساخته اند. همه رو به دریا گشاده اند. در برابر قصر او به جانب دریا کمتر توقی بر لب دریا واقع +<sup>۵</sup> است و اشجارهای بزرگ در آن جا موجود و از آن<sup>۶</sup> توقی یک<sup>۷</sup> طناب زمین را از برابر قصر گشاده، چنان زمین را مسطح کرده، خیابانها ساخته، نشیمن گاهی کرده است که عقل باز میماند.

خلص کلام آن که فقیر در آن (۵۹۵) قصر داخل شدم. به قصر همان محرم خاص گوبرناتور رفتم. چون او را دیدم، در بالای کت به خواب ناز استراحت کرده است. از روی گستاخی دست او را محکم <۵۳۱پ> گرفتم. چشم مست خود را وا کرد. فقیر را دید، سپندوار از جای بر جست. شادیهها نمود {۵۴۰پ} و بسیار محترم داشت. بلا توقف لباسهای خود را در بر کرد. +<sup>۸</sup> <من به پیش گوبرناتور روم.> گفت<sup>۹</sup>. فقیر <بسیار خوب.> گفتم. ما را وا<sup>۱۰</sup> گذاشته<sup>۱۱</sup>، خود به پیش گوبرناتور رفت<sup>۱۲</sup>. بعد از ساعتی بود که در کمال تعجیل آمد.

۱ × [د]

۲ × [د]

۳ × [د]

۴ دریچه هایی که [د]

۵ شده [د]

۶ این [د]

۷ چهار [د]

۸ گفت [د]

۹ × [د]

۱۰ × [ت][د]

۱۱ گذاشت [د]

۱۲ خرامید [د]

وطن آواره و<sup>۱</sup> سیلی<sup>۲</sup>\* ایام خورده {۵۳۹پ} و زخم چوگان فلک بارها دیده و از ستاره منحوس و طالع واژگون<sup>۳</sup>، به عقوبت ها مکرر مبتلا شده، از بخت نا مساعد مذلت ها کشیده و از چندین مرگ نقد<sup>۴</sup> خلاص شده، اختیار سیاحت کرده، به این دیار رسیده ام. مرا با حکام چه دخل. < چون سخن فقیر را شنید، فقیر را فرو گذاشت. روزی خواستم که خط خود را به دیوان خانه پادشاهی برده، دست مانانم. چنانچه رسم است که در هر ولایت کس را<sup>۵</sup> گذارش افتد، به خط خود دست میماناند. بنابر آن فقیر خط خود را به دیوان خانه پادشاهی فرستادم. چون چشم میرزای دیوان به خط فقیر افتاده است، بلا توقف به گوبرناتور برده، داده است. فقیر هر چند +<sup>۶</sup>، التجا کردم، قبول نفرمود. گفت، <خط خدمت شما را گوبرناتور گرفته است. از او طلب کنید. > قبل از این مقدمه گوبرناتور <۵۳۱ر> محرمی داشت، در غایت<sup>۷</sup> رعنائی<sup>۸</sup> و در کمال<sup>۹</sup> زیبایی<sup>۱۰</sup>. فقیر به او یک بار در کاروان سرا یک ساعت طرح مجلس افکنده<sup>۱۱</sup> بودم. او نیز به دیدن گوبرناتور تکلیف کرده بود. فقیر قبول {۵۴۰ر} نکرده بودم.

بیت<sup>۱۲</sup>

سبزه پامال است بر زیر درخت میوه دار در میان اهل دولت بار و<sup>۱۳</sup> خاری بیشتر

۱ × [ت]

۲ [د]، سلی [س] [ت]

۳ واژون [ت]

۴ سخت [د]

۵ × [د]

۶ رفته [ت] [د]

۷ کمال [د]

۸ رعنائی [د]

۹ غایت [د]

۱۰ زیبای [د]

۱۱ کرده [د]

۱۲ × [ت] [د]

۱۳ × [د]

بازرگانان میبهرند، در آن جا به کار میرود.

### بیت

رو به هند آوردن سوداگران بیوجه نیست روزگار آینه را محتاج خاکستر<sup>۱</sup> کند

القصه. فقیر از آن تجار مذکور به پانصد طلا متاع بها کرده گرفته، {۵۳۹} اختیار<sup>۲</sup> بازرگانی کردم. بعد از هفده روز از آن ولایت برآمده، در کمال تعجیل به چپر سوار شده، به چهار روز به ولایت توریسکه رسیدم و آن شهر بسیار ولایت آراسته و پیراسته بود. چند روز در آن جا ساکن شدم. بعد از فروختن متاعهای خود باز مکرر به چپر نشسته، متوجه به<sup>۳</sup> ولایت اورون<sup>۴</sup> بر شدم. بعد از قطع مراحل به آن بلده رسیدم<sup>۵</sup>. شهری دیدم، در غایت معموری و آبادی و در کمال بزرگی و زیبایی<sup>۶</sup>. زمین او در کمال بلندی و دریای بزرگ از تحت آن شهر عبور میکند. یک سمت شهر دریا است که +<sup>۷</sup> در غایت بزرگی. بی کشتی گذشتن ممنوع و آن شهر +<sup>۸</sup> نشیمن گاه گوبرناتور +<sup>۹</sup> بود. در آن جا از بازرگانان<sup>۱۰</sup> ما وراء النهر بسیار کس سکونت اختیار کرده اند. فقیر را به جای عالی فرآوردند. از جهة خوبی شهر فقیر نیز چند روز سکونت اختیار نمودم. رفتن (۵۹۴) فقیر را <۵۳۰پ> گوبرناتور آن ولایت شنیده، دو محرم خود را فرستاده، تکلیف قصر خود کرد. فقیر گفتم، <من مردی هستم، از

۱۰ تمام [د]

۱ خاستر [ت]، خاکسر [د]

۲ اختیاری [ت]

۳ × [ت]

۴ شدیم [د]

۵ رسیدیم [د]

۶ زیبای [د]

۷ دریا [د]

۸ نیز [د]

۹ دیگر [ت]

۱۰ بازرگانی [ت]، بازرگان [د]

شهری در کمال نزاکت و زیبایی<sup>۱</sup> و عمارت‌های عالی بر پا [ترتیب داده اند]<sup>۲</sup> و در میان شهر بازاری [ساخته اند]<sup>۳</sup>، در کمال خوبی و رسته های عالی از دو جانب رسته، دوکانهای مرتفع [بنا کرده اند]<sup>۴</sup>. در هر دوکان از هر جنس متاع پر کرده.

### بیت

به هر سو دوکانی شد آراسته مهیا در او هر چه دل خواسته

<۵۲۹پ> در هیچ اقلیم نظیری و عدیلی<sup>۵</sup> نداشت. در ولایت اوروس بر دو جا سالی یک بار بازار می باشد، یکی ایریت و یکی مکریا و از هفت اقلیم بازرگانان از بهر سودا جمع میشوند تا یک ماه بنابر آن {۵۳۸پ} در آن بازار چنان مال جمع (۵۹۳) میشود که در هیچ اقلیم موجود نمی باشد. چنانچه فقیر در آن بازار فرنگی بچه ای را مشاهده نمودم، در کمال لطافت و از هر جنس متاع می فروخت. یقین فقیر این است که تمام<sup>۶</sup> مال ما وراء النهر را جمع کنند، به یک دوکان او برابری نخواهد کرد.

زبدۀ کلام این که آن ولایت در کمال برودت هوا برف چنان بسیار می بارید که به راه ها اسب کشتن متعذر<sup>۷</sup> بود. بنابر آن در عرابها تجار<sup>۸</sup> به جای اسب سگ بسته، بار میکشاندند. شب در غایت درازی و روز در کمال کوتاهی، چنانچه در شهر بولغار که حالا خراب است و شهر قزان آباد، در هوای تابستان دو کم پنجاه روز نماز خفتن نمی خوانند. از کوتاهی شب و شفق فرو نمی رود که آفتاب طلوع میکند. این چنین ایریت بالعکس او است. از آن جا تا<sup>۹</sup> ظلمات یک هفته راه است. <۵۳۰ر> روغن و ریسمانی که از تمامی<sup>۱۰</sup> ترکستان

۱ زیبایی [د]

۲ ساخته اند [ت] [د]

۳ ترتیب داده اند [ت]

۴ ساخته اند [د]

۵ مثلی [د]

۶ تمامی [ت]

۷ متعسر [د]

۸ × [د]

۹ × [د]



کمال سرعت راه می پیمودیم\*<sup>۱</sup>. هوا چنان سرما بود که [پرنده ها]<sup>۲</sup> از طیران باز میماند. عرابه<sup>۳</sup> او مثل صندوق میباشد. در میان او به چندین ق<sup>۴</sup> پوستین خود را پیچیده خوابیده<sup>۴</sup> بودیم. وقت کرایه سر خود را میبر داشتیم. دیگر نمیدانستیم که ما به کجا میرویم، گاه گاه از برای نقض وضو لا علاج از عرابه فرود می آمدیم<sup>۵</sup> و گبران دیده، تمسخر میکردند و میخواستیم که در<sup>۶</sup> آتش ایشان گرم شده، جای < ۵۲۹ > شویم<sup>۷</sup>. ما را در میان خوکان جای میدادند. چرا که خوک ایشان مثل سگ خانگی میباشد. در آن وقت آرزو میکردم که یکان مسلمان را { ۵۳۸ > بینم. دیگر هیچ آرزویی<sup>۸</sup> در خاطر نمیماند. به آن دشواری راه قطع میکردم. بعد از پانزده روز در ولایت ایربیت رسیدم. از ولایت شمی تا این جا به راه کاروان دو ماهه راه بود که ما به هفده روز آمدیم. دیدم شهری است، بسیار عظیم<sup>۹</sup> و + آباد و از هر اقلیم تجار موجود<sup>۱۰</sup>. خصوص مردم ما وراء النهر را دیدم<sup>۱۱</sup>، از شادی به پراهن نمیگنجیدم<sup>۱۲</sup>. بعد از جستجوی بسیار رفیقان خود را یافتیم. در قصر عالی فرود آمدیم. همان شب شکر کنان از رنج راه بر آسودیم. روز دیگر [از برای تفرج]<sup>۱۳</sup> بیرون خرامیدیم. دیدم،

- ۱ [ت][د]، پیمودم [س]
- ۲ پرنده [ت]
- ۳ قبت [د]
- ۴ × [د]
- ۵ آدمم [د]
- ۶ به [د]
- ۷ شوم [ت][د]
- ۸ آرزو [ت][د]
- ۹ عظمت [د]
- ۱۰ بسیار [د]
- ۱۱ موجو [ت]
- ۱۲ دیدیم [د]
- ۱۳ [ت]، نمیگنجیدیم [س][د]
- ۱۴ تفرج کنان [د]

[تا شصت]<sup>۱</sup> بلای سیاه اند و آفت مال و جاه و گلشن خزان دیده و خانه<sup>۲</sup> باران رسیده و چشمه انباشته و زمین ناکاشته و ازدهای بی گنج و معدن محنت و رنج. < [چنانچه گفته اند].<sup>۳</sup>

نظم<sup>۴</sup>

زن چوز پنجه قدم آن سو نهد      مرد همان به که به یک سو جهد  
زن که چو از پنجه پنجه بجست      عاقبة الامر در افتد به شصت<sup>۵</sup>

فقیر به زبان اوروسی ترجمه کرده، گفتم، <ای ملیکه، این سخن را از خود نمیگویم. تمام حکما اتفاق کرده، در کتابهای خود نوشته اند. > ملیکه +<sup>۶</sup> چون این سخن را شنید، چنان خنده بر وی غلبه کرده بود که <۵۲۸پ> خود را به تکلف نگاه میداشت. بعد گفت، <هر چه گفتمی، {۵۳۷پ} راست میگوی. > از جهت وقت خوشی خود گفت، چه مطلب داری. > گفتم، <پاش پورتنی فقیر را کرم فرمای<sup>۷</sup>، یعنی خط ما را بده. > باز استغنا نمود. بعد از ساعتی دیدم که مستی آن گل پرهن به درجه کمال رسیده است. باز سخن را اعاده کرده، بسیار التجا کردم و خط را طلب نمودم. این دفعه لا علاج از روی مستی در حال خط فقیر را مهر کرد و<sup>۸</sup> به دستم داد و رخصت اجازت فرمود. سحر پگاه به قوش خود آمده، بلا توقف شکر (۵۹۲) کنان در عرابه نشسته، روی<sup>۹</sup> به کافرستان آوردیم. در غایت خرسندی<sup>۱۰</sup> و در

- ۱ × [د]
- ۲ عمارت [د]
- ۳ [د]
- ۴ قطعه [د]
- ۵ شست [د]
- ۶ از فقیر [د]
- ۷ بگوی [د]
- ۸ فرما [د]
- ۹ × [د]
- ۱۰ رو [د]
- ۱۱ خورسندی [ت]

## بیت

دانم که مرا قوت می خوردن نیست      باری به تماشای شما می آیم

سخن فقیر در معرض قبول افتاد. به حال گذاشت و<sup>۱</sup> اما مجلس ما بسیار در گرفته بود و از هر جانب سخنها میکردم و دل او را شاد میگردانیدم<sup>۲</sup>. به امید آن<sup>۳</sup> که نوعی کرده، خط را به دست آرم. از بس که در آن وقت به زبان او روسی (۵۹۱) مهارتی پیدا کرده بودم. بالاخر رو<sup>۴</sup> به فقیر آورد و گفت، <حکیم خان، راست بگوی، در نزد تو زن چند ساله مرغوب است.> گفتم، <زن جوان و نورسیده باشد که نفس عجایز طراوت عارض [را بو]<sup>۵</sup> برد و مباشرت با ایشان ضعف و سستی آرد.

## قطعه

آن زنی را که پشت شد چو کمان      نفسش راست همچو تیر شود  
{۵۳۷ر} <۵۲۸ر>

صحبت دختری که جان بخشد      زهر قاتل شود چو پیر شود

و زنان از ده سالگی تا بست سالگی موضع امن اند و محل امید، و از بست تا سی آرام دل طالبان اند و لذت جان راغبان اند<sup>۶</sup> و از سی تا چهل خداوند مال و فرزند اند<sup>۷</sup> و ارباب همت بلند و از چهل تا پنجاه در بند نام و ناموس و بر حضور زرق و سالوس و<sup>۸</sup> از پنجاه

- 
- |   |             |
|---|-------------|
| ۱ | × [د]       |
| ۲ | میساختم [د] |
| ۳ | این [د]     |
| ۴ | روی [د]     |
| ۵ | × [د]       |
| ۶ | × [د]       |
| ۷ | × [د]       |
| ۸ | اما [د]     |

و<sup>۱</sup> درد نشسته بودم. دو جوان<sup>۲</sup> زیبا رو و دو کنیز عنبر مو<sup>۳</sup> از در در آمد و<sup>۴</sup> به زبان اورو سی سلام کرد. در غایت آداب ایستاد. فقیر اشارت کردم، بنشست<sup>۵</sup>. گفت، <ملیکه +<sup>۶</sup> شما را طلب میکند.> فقیر چون این سخن از ایشان شنیدم، در گرداب فکر فرو رفتم<sup>۷</sup>. بعد از اندیشه بسیار چار نا چار با یک خدمتکار خود متوجه قصر گوبرناتور شدم. از چندین دربند گذشته، به نشیمن گاه او رسیدم. دیدم، خانه ای در کمال بزرگی، همه را به آب طلا زرافشان ساخته اند و آینه های فرنگی در سقف های او مندرج کرده اند و چندین شمع کافوری و مومی روشن ساختند<sup>۸</sup> و شعاع خانه عالم را فرو گرفته است و کنیزان ماه روی<sup>۹</sup> از دو جانب او صف زده اند و آن سر خیل گلرخان با چند ندیم خود در میان +<sup>۱۰</sup> در بالای کرسی زرین نشسته، می<sup>۱۱</sup> ناب {۵۳۶پ} میخورد. +<sup>۱۲</sup> چند مطربان ساز مینواختند <۵۲۷پ> و به زبان اورو سیه<sup>۱۳</sup> چیزی میخواندند. چون چشم ملیکه به فقیر افتاد، سپندوار از جای خود<sup>۱۴</sup> بر خواسته، استقبال نمود. از دست فقیر گرفته، باز از پیش خود جای داد و بسیار سخنها میفغانه میگفت و از می ناب تکلیف نمود. گفتم. +<sup>۱۵</sup>

- ۱۱ تنها [د]
- ۱ × [ت]
- ۲ جوانی [ت]
- ۳ [ت][د]، مویی [س]
- ۴ × [د]
- ۵ نشست [د]
- ۶ خدمت [ت][د]
- ۷ [ت][د]، فتم [س]
- ۸ ساخته اند [ت]، کرده اند [د]
- ۹ رو [د]
- ۱۰ خانه [ت][د]
- ۱۱ و [د]
- ۱۲ اورو سی [ت][د]
- ۱۳ × [ت]
- ۱۴ که [ت]

## بیت

گنج و<sup>۱</sup> زر گر نبود گنج قناعت باقی است  
آن که آن داد به شاهان به گدایان این داد

و خط طلب نمودم. چرا که حاکم شمی به فقیر خط نداده، به این ولایت حواله کرده بود و آن پری چهره گفت، <ما<sup>۲</sup>\* بی امر گوبرناتور<sup>۳</sup> به خدمت شما خط داده نمیتوانیم.> از بس که رسم و دأب ایشان این است که اگر شوهرشان نباشد، امور ملک را زن میپرسد. چون این سخن از آن ماه روی<sup>۴</sup> شنیدم، گریه به فقیر مستولی شد. به چندین غم و درد به قوش خود باز گشتم. چرا که به رخصت پادشاه عاید شود، به شش ماه می باید که جواب آید. بنابر آن فقیر در بحر تفکر فرو ماندم. (۵۹۰) بازرگانانی که رفیق بودند، این سخن را شنیده، فقیر را در آن کافرستان [با دو خدمتکارم]<sup>۵</sup> گذاشته، متوجه مقصد شدند. فقیر با دو خدمتکار +<sup>۶</sup> {۵۳۶ر} سه روز<sup>۷</sup> در میان گبران [سرگردان و حیران]<sup>۸</sup> ماندم.

<۵۲۷ر> بیت<sup>۹</sup>

نه از رفیق وفا و نه از حیات امید      نه از سپهر بشارت نه از زمانه نوید

شب چهارم نیمه<sup>۱۰</sup> از شب گذشته بود [که به دو خدمتکار]<sup>۱۱</sup> به قوش خود به چندین غم

- 
- |    |                      |
|----|----------------------|
| ۱  | [د]                  |
| ۲  | [ت] [د]، من [س]      |
| ۳  | گوبرنات [ت]          |
| ۴  | رو [د]               |
| ۵  | یکه و تنها [د]       |
| ۶  | خود [د]              |
| ۷  | روزی [د]             |
| ۸  | حیران و سرگردان [د]  |
| ۹  | × [ت]                |
| ۱۰ | نیمه ای [ت]، نیم [د] |

## قطعه

زلف خود در نظرم بشکستی      خار در چشم ترم بشکستی  
ای فرنگی دل<sup>۱</sup> و دستت شکند      هم سر و<sup>۲</sup> هم کمرم بشکستی

چون فقیر را دید، از جای برخاست. چند قدم پیش آمده<sup>۳</sup>، از پیشانی ام بوسید و از دستم گرفته<sup>۴</sup>، به پیش خود برده، به کرسی زرین نشانید. در آن وقت از ترس لرزه به<sup>۵</sup> اندامم افتاده بود که این چه حرکت بیجا بود که در میان امرا از زن گوبرناتور سر بر<sup>۶</sup> زد و از رسم و دأب ایشان فقیر غافل بودم. شاعری میگوید.

بیت<sup>۷</sup>

{۵۳۵پ} بوسه ای کردی تو کافر این قدر ناز تو چیست  
گر پشیمانی<sup>۸</sup> بیاتا باز برجایش نهم

القصة. از<sup>۹</sup> کمال لطف<sup>۱۰</sup> و شفقت احوال پرسید و مکرم <۵۲۶پ> داشت. به چه نوعی که شوهر او گوبرناتور تکلیف به<sup>۱۱</sup> پیش پادشاه کرده بود، او نیز همان سخن را گفت. فقیر باز همان جواب اول را گفتم.

۱ دلی [ت]

۲ [د][ت]

۳ آمد [د]

۴ گرفت [د]

۵ بر [ت][د]

۶ × [ت]

۷ × [د]

۸ پشیمانی [ت]

۹ در [د]

۱۰ × [د]

۱۱ × [د]

مییامند. بعد از چندین دربند فقیر را به دیوان خانه بردند. دیدم، همه امرا صف زده، +<sup>۱</sup> در میان خانه به کرسی طلا زن گوبرناتور نشسته، در غایت <۵۲۶ر> حسن و جمال، ماه شب چهارده<sup>۲</sup> که<sup>۳</sup> به مدد اقتباس نور<sup>۴</sup> لمعه رخسارش شب تیره را {۵۳۵ر} درخشان<sup>۵</sup> تر از روز روشن ساختی و چراغ جهان افروز آفتاب که قندیل طاق سپهر است، با پرتو شمع مجلس<sup>۶</sup> آرای او تاب [نیاورده، در محاق افتادی].<sup>۷</sup> به حکم آن که

### بیت

ماه نیکو است ولی روی تو زیباتر از او است  
سرو دلجو است ولی قد تو بالاتر از او است

چنان در میان جواهر غوطه خورده بود<sup>۸</sup> شعاع سنگ پاره خانه را فرو گرفته بود. و یک فوطه<sup>۹\*</sup> [کشمیری بر گردن]<sup>۱۰</sup> انداخته و لباس زرین در غایت نفیسی در بر کرده است و [به سر]<sup>۱۱</sup> عریان یک شانه الماس نشان بر موی زده، به چندین استغنا به<sup>۱۲</sup> امرای خود سخن میگرد.

- 
- |    |                     |
|----|---------------------|
| ۱  | و [ت] [د]           |
| ۲  | چارده [ت]           |
| ۳  | × [د]               |
| ۴  | × [د]               |
| ۵  | رخشان [د]           |
| ۶  | روی دل [د]          |
| ۷  | نیاوردی [د]         |
| ۸  | است [د]             |
| ۹  | [د]، فوته [س] [ت]   |
| ۱۰ | کشمیر سر [د]        |
| ۱۱ | به سری [ت]، سری [د] |
| ۱۲ | با [د]              |

داشت. بالاخر با ده عرابه به هر کدام او دو بازرگان به چپر نشسته، متوجه آن صوب شدیم. در هر عرابه شش اسب می بستند و در هر سه فرسخ اسب کرایه<sup>۱</sup> را تازه میکردیم. <۵۲۵پ> شب و روز در هیچ جا یک ساعت آرام نگرفته<sup>۲</sup>، {۵۳۴پ} راه می پیمودم<sup>۳</sup>. بسیار میشد که در یک شب و روز پنجاه فرسخ زمین طی میکردیم. چون در ولایت اومیسکه رسیدیم، آن ولایتی بود، در غایت بزرگی<sup>۴</sup> و آبادی، قریب پنجاه<sup>۵</sup> هزار خانه وار +<sup>۶</sup>، همه کافر<sup>۷</sup>، الا یک +<sup>۸</sup> مسلمان که از جهة سودا در آن جا سکونت اختیار نموده بود. فقیر آن جا فرود آمدم. از قضا آن مسلمان هم در آن جا نبود. بهر سودا به جایی<sup>۹</sup> رفته بود.

خلص کلام آن که قبل از ما پنج روز پیش گوبرناتور مع همان گل اندام به خدمت پادشاه رفته بود. اما امرای او فقیر را میدانست<sup>۱۰</sup> و زن او فقیر را از شوهر خود شنیده بود. به مجرد آمدن فقیر را شنیده، [در کمال تعجیل محرم]<sup>۱۱</sup> آمده، گفت، <خدمت شما را زن گوبرناتور طلب میکند> فقیر با یک خدمتکار خود متوجه قصر گوبرناتور شدم<sup>۱۲</sup>. چون در بارگاه او<sup>۱۳</sup> رسیدم، دیدم، چنان عمارت بر پا (۵۸۹) ساخته است که<sup>۱۴</sup> عقل در حیرت

- ۱۱ غایت [د]
- ۱ کرایه [د]
- ۲ نا گرفته [ت]
- ۳ پیمودیم [ت] [د]
- ۴ بزرگ [د]
- ۵ چهل [د]
- ۶ بود [د]
- ۷ کافرستان [د]
- ۸ خانه [د]
- ۹ جای [ت] [د]
- ۱۰ میدانستند [د]
- ۱۱ محرمی در کمال تعجیل [د]
- ۱۲ شدیم [ت] [د]
- ۱۳ × [د]
- ۱۴ × [د]



## بیت

چو کعبه قبله صاحب<sup>۱</sup> شد از دیار بعید  
روند خلق به دیدارش از بسی فرسنگی<sup>۲</sup>

و گوهرناتور بسیار مبالغه نمود. دانست<sup>۳</sup> که

مصراع<sup>۴</sup>

هزار بیت و<sup>۵</sup> غزل پیش جبه حیران است

لا علاج از فقیر دست شست. روز دیگر به مقر خود مراجعت فرمود. در آن وقت در  
بساط فقیر چیزی نبود، الا یک جبدوق کندل و یک فوطه<sup>۶</sup>. هر دو را به سیصد<sup>۷</sup> طلا  
فروختم. یک بازرگانی پنج صد طلا قرض وعده داد که در بازار ایریبت رفته، ادا نماید،  
[چنانچه گفته اند.]<sup>۸</sup>

بیت<sup>۹</sup>

رزق اگر چند بی گمان برسد      شرط عقل است جستن از درها

فقیر چار و<sup>۱۰</sup> ناچار مرتکب سفر ایریبت شدم. در آن وقت سرما در غایتی<sup>۱۱</sup> شدت

۱ حاجت [ت][د]

۲ فرسنگ [ت][د]

۳ دید [د]

۴ × [د]

۵ × [ت]

۶ [د]، فوطه [س]

۷ سه صد [ت][د]

۸ × [د]

۹ × [ت]

۱۰ × [ت]

مصراع<sup>۱</sup>

جز خجالت چه کشد مرد فقیر از مهمان

ساعتی طرح مجلس انداخته، باز به قصر خود مراجعت فرمود. خلاص کلام این که هفت روز در آن جا بود<sup>۲</sup>. هر روز به یک دیگر صحبت میکردیم. روزی در عین محاوره بسیار التجا کرده<sup>۳</sup>، به<sup>۴</sup> فقیر گفتم، +<sup>۵</sup> > از پادشاه ما به ما<sup>۶</sup> خط آمده است که اگر حکیم خان آرزوی دیدن ما را و این ولایت ها را کنند، در کمال عزت و حرمت به این جانب فرستان. اگر شما قبول فرمایید، پادشاه در باره شما بسیار مهربانیها دارد. < فقیر به دل گفتم، از خویش و<sup>۷</sup> # جگر مسلمان چه دیدم که از کافران بیگانه بینم. چرا که در آن وقت محمد علی خان ماده<sup>۸</sup> > ۵۲۵ ر < کافر نشده بود. دیگر<sup>۹</sup> جواب گوبرناتور گفتم، > من از ملک و<sup>۱۰</sup> مال و از خویش و تبار آواره شده، به چندین (۵۸۸) محنت و مشقت به این دیار {۵۳۴ ر} رسیده ام. نیت دارم که تا زیارت بیت الله +<sup>۱۱</sup> نکنم، آرزوی هیچ کار ندارم.

- 
- |    |                 |
|----|-----------------|
| ۱  | × [ت]           |
| ۲  | بودم [د]        |
| ۳  | کرد [د]         |
| ۴  | بر [ت]          |
| ۵  | × [ت]، که [د]   |
| ۶  | من [ت] [د]      |
| ۷  | [د]             |
| ۸  | × [ت]، غازی [د] |
| ۹  | در [د]          |
| ۱۰ | × [ت]           |
| ۱۱ | را [ت] [د]      |

خصوص صورت حضرت عیسی علیه السلام و حضرت مریم را و چهار فرشته مقرب را چنان از طلا و جواهر بزرگ در غایت شباهت به ایشان تصویر کشیده اند که گویا به فهم کس سخن میکرده باشد و چندین راهبان لباسهای (۵۸۷) فاخر<sup>۱</sup> از هر گونه در بر کرده، چیزها به زبان<sup>۲</sup> + میخواند و زننها و دختران امرای آن ولایت به یک جانب صف زده اند. +<sup>۳</sup> امراء و سرکرده ها به یک جانب صف زده اند. صد بچه دوازده ساله به زبان خود به آواز بلند<sup>۴</sup> خوش به یک مقام چنان انجیل میخواندند<sup>۵</sup> که سنگ آب میشد. گاه گاه همه ایشان سر به سجده میمانند. به دست خود اشارتها میکنند. در آن وقت به فقیر چنان خنده غلبه کرده بود که به هیچ تدبیر خود را نگاه داشته نمیتوانستم. اتفاقاً آن پری پیکر در پیش فقیر حاضر بود، دست فقیر را گرفت. محکم زیر کرد. به گوشه چشم اشارت کرد که جای خنده نیست. فقیر خود را به تکلف نگاه داشتیم. <۵۲۴پ> بعد از فراغ بت پرستی همه به خانه خود مراجعت نمودند. فقیر نیز به اتفاق گوبرناتور<sup>۶</sup> به قصر او رفتیم. از هر گونه اطعمه و اشربه {۵۳۳پ} در پیش فقیر کشید. فقیر از ترس چیزی تناول میکردم<sup>۷</sup>. بعد از فراغ مجلس به فقیر یک ساعت نامه فرنگی<sup>۸</sup> اعلا و یک دوربین فرنگی انعام فرمود و رخصت داد. باز به اتفاق همان سمن بو به قوش +<sup>۹</sup> باز گشتیم<sup>۱۰</sup>. روز دیگر از کمال مروت و شفقت با وجود کلانی به مسکن فقیر آمد، [چنانچه گفته اند.]<sup>۱۱</sup>

۱ فاخری [د]

۲ × [د]

۳ و [ت] [د]

۴ × [د]

۵ میخوانند [د]

۶ [د]، گوبرنات [س] [ت]

۷ نکردم [ت]

۸ [د]

۹ خود [د]

۱۰ گشتم [ت]

۱۱ × [د]

فرستادند که خفه نشوند. تو به پیش شان باش تا وقتی که ما از بت پرستی خود فارغ شویم. < آن پری پیکر پیام گوبرناتور را<sup>۱</sup> به فقیر رسانید. > {۵۲۳پ} اما در کمال اضطراب میگفت، < افسوس که امروز از نماز بزرگ ماندم<sup>۲</sup>. > رسم ایشان این بود که اهل اسلام را به بت خانه خود راه نمیدادند. < فقیر از این بی خبر از بی طاقتی آن پری رو {۵۳۲پ} فقیر را رحم آمد. گفتم، < ما هم همراه تو به بت خانه از بهر تماشا میرویم. > به حکم آن که

### بیت

مرادی است به کفر آشنا که چندین بار به کعبه بروم و بازش بر همین آوردم

چون این سخن از فقیر شنید، در کمال خرسندی در غایت چستی<sup>۳</sup> + سپندوار از جای برخواست. به خدمت گوبرناتور دوید و بر گوش گوبرناتور<sup>۴</sup> این سخن را گفت. گوبرناتور<sup>۵</sup> بسیار خندید. متوجه قصر شد. به پیش فقیر آمد. گفت، < از آن جهت که<sup>۶</sup> شما را دوست میدارم، به دیر خود میبرم. نباشد، رسم و دأب ما نیست که اهل اسلام را به صومعه خود بریم. > گفت. تنها فقیر را از دستم گرفت. متوجه صومعه شد<sup>۷</sup>. همه زن و مردی که نظاره میکردند، انگشت حیرت به دندان گزیده، میگفتند، < وزیر پادشاه اوروس این شخص را به این درجه گرامی میدارد. > نمیدانستند که رسم و قاعده ایشان این بود که بزرگ زاده ای از ولایتی در مملکت ایشان غریب افتد، حرمت او به ایشان واجب میبوده است.

القصه. چون به در صومعه رسیدیم {۵۲۴ر} و داخل آن دیر بزرگ شدیم، دیدم، در کمال {۵۳۳ر} وسعت و<sup>۸</sup> رفعت و بسیار زینت داده اند و صورت بسیار از طلا ساخته اند.

۱ × [د]

۲ مانندیم [ت]

۳ چون سپند [ت]، مثل [د]

۴ گوبرنات [ت]، او [د]

۵ [د]، گوبرنات [س] [ت]

۶ × [د]

۷ شدیم [ت] [د]

۸ [د]

آمده، نظاره میکردیم. همه مردمی که در آن نظاره گاه حاضر بودند، آشنایی گوبرناتور<sup>۱</sup> را به فقیر به این نوع دیدند<sup>۲</sup>، همه انگشت تحیر به دندان گزیدند.

### بیت<sup>۳</sup>

عزیز کرده نگردد به پیش<sup>۴</sup> مردم خار

به چشم دیده همان جا<sup>۵</sup> است چشم اعدا را

{۵۳۲} چون گوبرنات سلات پیاده خود را به چندین قسم تعلیم میداد، عقل در کار ایشان در میماند. بعد روی به سپاهی<sup>۶</sup> اسبکی آورد. ایشان را نیز به چندین الوان تعلیم داد. اتفاقاً همان روز بیرم ایشان بود، رهبانان درهای صومعه را گشاده و ناقوس های بزرگ را در صدا آورده، همه خورد و<sup>۷</sup> بزرگ وزن و مرد منتظر گوبرنات بودند<sup>۸</sup>. در آن حین همان جوان برنا از پیش (۵۸۶) گوبرناتور در غایت تعجیل به پیش فقیر آمده<sup>۹</sup>، گفت >گوبرناتور میفرماید که امروز عید بزرگ ماست. به دیر خود در آمده، دو ساعت نجومی تاخیر میکنم<sup>۱۰</sup> و نماز میخوانم<sup>۱۱</sup>. بعده<sup>۱۲</sup> به خدمتشان میروم<sup>۱۳</sup>. در قوش خود نروید<sup>۱۴</sup> و ما را به خدمت شما

۱ گوبرنات [ت]

۲ دیده [د]

۳ × [د]

۴ حشم [د]

۵ × [د]

۶ سپاه [د]

۷ [د]

۸ می بودند [د]

۹ آمد و [د]

۱۰ میکنیم [د]

۱۱ میخوانیم [د]

۱۲ بعد [ت][د]

۱۳ میرویم [د]

۱۴ نروند [د]

عنبر موی با لباسهای زرین در عرابه ای نشسته که همه او را (۵۸۵) به تنگه<sup>۱</sup> طلا گرفته، شعاع او عالم را روشن ساخته و هشت اسب کوه پیکر <۵۲۲پ> +<sup>۲</sup> هامون نورد همه به یک رنگ بسته، به چندین تجمل رسید. فقیر آن گل پرهن را دیده، سپندوار از جای خود بر جستم. به اتفاق او در عرابه نشسته، متوجه قصر گوبرناتور شدیم. چون نزدیک رسیده<sup>۳</sup>، دیدم، میدان<sup>۴</sup> در غایت وسعت و دور او همه قصرهای عالی و چهار بت خانه<sup>۵</sup> بزرگ در غایت رفعت {۵۳۱پ} و در کمال زینت و ناقوس های بزرگ و کوچک به او آویخته و چهار هزار سلاتی<sup>۶</sup> مع تفنگ ایستاده و هزار سپاهی<sup>۷</sup> اسپکی [نیز حاضر بود]<sup>۸</sup> و چندین محرمات صف زده، خود گوبرناتور با هژده سردار خود که هر کدام<sup>۹</sup> + به یک ولایت حاکم بود، در ایوان بسیار بزرگ ایستاده بود. +<sup>۱۰</sup> مسلمان و کافر قریب بست هزار کس مجتمع بود<sup>۱۱</sup>. چون فقیر آن جا رسیدم، گوبرناتور سر خود را عریان کرده، تنها از زینه ایوان فرود آمده، از دست فقیر گرفت. باز همراه خود از زینه بر آمده، در غایت لطف و شفقت احوال پرسید و گفت، <جناب شما در بالای قصر ما بر آمده، تماشا کنید. ما سپاهی<sup>۱۲</sup> خود را تعلیم دهیم. > فقیر با دو خدمت <۵۲۳ر> کار خود مع یک محرم گوبرناتور<sup>۱۳</sup> در بالای قصر او بر

۱ تنوگه [ت]

۲ پیکر [ت]

۳ رسیدم [د]

۴ میدانی [د]

۵ خانی [ت]

۶ سلات [د]

۷ سپاه [د]

۸ ایستاده بود که هر صد اسب به یک زنگ [د]

۹ او [ت] [د]

۱۰ و [د]

۱۱ بودند [د]

۱۲ سپاه [د]

۱۳ گوبرنات [ت]

دوخته، در غایت نمود و شمشیر طلا در میان بورک خود را به دست گرفته، +<sup>۱</sup> سر عریان از در در آمد. +<sup>۲</sup>

### رباعی

نو مزللف صنمی می آید      بوی ریحان تری می آید  
همچو ناقوس دلم میرقص      از خدا بیخبری می آید

و دست فقیر را بوسید. به زبان اوروسی چیزی گفت و راست ایستاد و اوروس دیگر زبان دان در پیش او حاضر بود. در حال سخن او را ترجمه کرد. گفت، <گوبرناتور\*<sup>۳</sup> محرم خاص خود را به خدمت > {۵۲۲ر} شما فرستاده است. پیام میرساند که خوش آمده اند. <فقیر محو تماشای آن پری پیکر شده بودم. نمیدانستم که چه جواب بدهم. بعد از ساعتی گفتم، > بنشین. < آن نصارا بچه به چند آداب تعظیم در پیشم نشست و صحبت ما به واسطه ترجمه زبان {۵۳۱ر} گرم شد. در آن وقت آن صنم چون سرو آزاد از جای خود برجست، [چنانچه گفته اند].<sup>۴</sup>

### بیت

قدش را سرو گفتم آن صنم آزاد جست از جا  
رخش را ماه گفتم مهر من از آسمان آمد

و از زبان گوبرناتور گفت، <فردا خدمت شما به خانه ما تشریف میفرمایید. یا ما به خدمت شما آییم. > به این نوع اداهای معشوقانه کار فرمود و<sup>۵</sup> از زبان گوبرناتور به قصر او تکلیف نمود. فقیر انگشت قبول به دیده نهاده، روز دیگر را وعده کردم. همان شب به چندین مشقت روز کردم. منتظر راه او بودم که ناگاه آن پری پیکر به چهار غلام بچه ماه روی

۱ به [د]

۲ چنانچه [د]

۳ [د]، گوبرناتور [س][ت]

۴ چنانچه گفته [ت]، × [د]

۵ × [د]

های شهر سبز که بوی آن ولایت به مشام کس<sup>۱</sup> می آید. +<sup>۲</sup>

### مصراع

خنده دارد هر کسی او را غروری در<sup>۳</sup> سر است

زبدۀ کلام این<sup>۴</sup> که اومیسکه نام شهری است، در کمال بزرگی و آبادی. از شمی چهار روزه راه دور است و شهرهای آن جانب همه به حاکم آن (۵۸۴) ولایت تابع اند. [نام حاکم آن جا]<sup>۵</sup> به گوبرناتور<sup>۶</sup>\* اشتها<sup>۷</sup> دارد و او رفتن فقیر را شنیده، غایبانه طرح آشنایی در میان انداخت و سرگذشت فقیر را نوشته، به پای تخت به خدمت پادشاه اوروس نوشته<sup>۸</sup>، فرستاد.

### ذکر<sup>۹</sup> صحبت داشتن فقیر به گوبرناتور<sup>۱۰</sup> یعنی وزیر پادشاه اوروس

و بعد از چندین وقت بر سبیل سیر و گشت در ولایت شمی وارد گردید. {۵۳۰پ} روز دیگر فقیر به اوتاق خود به چندین غم و غصه می نشستم. به یک ناگاه جوان آفتاب رویی<sup>۱۱</sup> [سبزۀ خط به گرد عارضش نو دمیده،]<sup>۱۲</sup> در غایت حسن و جمال و لباس طلادوزی در بر و زنجیرهای باریک طلا بر سینه آویزان در کمال زیبیش و طومارهای طلا بر سینه او

۱ من [د]

۲ به حکم آن که [د]

۳ بر [ت] [د]

۴ آن [د]

۵ × [د]

۶ [د]، گبورنات [س] [ت]

۷ × [ت]

۸ × [ت]

۹ گوبرناتور [د]

۱۰ روی [ت] [د]

۱۱ × [ت]



اگر داشته باشد، از پادشاه<sup>۱</sup> کسی<sup>۲</sup> آمده، آن جا را خراب میسازد و صاحب خانه را تأدیب میکند. بنابر آن است که اگر کسی در ممالک < ۵۲۱ ر > اوروسیه صد شهر بزرگ<sup>۳</sup> را سیر کند، یک جا خانه ویرانه<sup>۴</sup> و کوچه کج به نظر نمی در آید. در آن ولایت از هر شهر مردم بازرگان<sup>۵</sup> مجتمع میشوند<sup>۶</sup>. + الحق بسیار ولایت سوداخانه و در کمال ارزانی و اما از بابت فواکه و اشجار چنان خالی است<sup>۷</sup> که یک شلغم از بیضه عنقا به قدرتر و یک سایه بید از سایه طوبی نایاب تر و هوای آن ولایت چنان سرما + که آب یخ به سه گز میرسید. برودت هوای او<sup>۸</sup> را از این قیاس باید نمود و از ما وراء النهر + از شهرهای بزرگ مردمان اشراف جهة تجارت در آن ولایت رفته، از مردم قزاق خانه وار<sup>۹</sup> { ۵۳۰ ر } شده، سکونت اختیار [نموده اند]<sup>۱۰</sup>. از آن مردم فرزندها در وجود آمده است. ایشان را چله قزاق می نامند. در کمال بی باکی از خصلت انسان [خنده را خداوند تعالی]<sup>۱۱</sup> در طبیعت ایشان چنان مستولی گردانیده است که غیر از خنده کردن چیزی را نمیدانند و مخصوص آن جماعه است و این فعل را فقیر در هیچ اقلیم و در هیچ جنس انسان مشاهده نکرده ام<sup>۱۲</sup>، < ۵۲۱ پ > مگر میر بچه

- ۱ پادشاهی [د]
- ۲ کس [د]
- ۳ بزرگی [د]
- ۴ ویرانه ای [د]
- ۵ × [د]
- ۶ شده اند [د]
- ۷ جهت بازرگانی [د]
- ۸ بود [د]
- ۹ × [ت]، بود [د]
- ۱۰ × [د]
- ۱۱ و [ت]
- ۱۲ خانه دار [ت]
- ۱۳ کرده اند [د]
- ۱۴ خداوند تعالی خنده را [د]
- ۱۵ نکردم [د]

نخواستیم که این کتاب<sup>۱</sup> از سرگذشت خود خالی ماند، لا علاج از هزار یکی در کمال قصیری بیان میکنم. در بالا مذکور شد که فقیر از<sup>۲</sup> + محمد علی خان < ۵۲۰ پ > ماده<sup>۳</sup> به چندین محنت و مشقت خلاص شده، در ولایت شمی رسیده، چند روز سکونت اختیار کردم، [چنانچه سعدی میفرماید.]<sup>۴</sup>

## بیت

سعدیا حب وطن گرچه صحیح است و لیک

نتوان مرد به سختی که من آن جا زادم

القصه. فقیر آن ولایت را مشاهده نمودم. انگشت حیرت به دندان گزیده، در بحر تفکر فرو رفتم. چون که<sup>۵</sup> آن ولایت در غایت خوبی و زیبایی بود (۵۸۳) و دریای عظیم از جانب چین می آید و از پیش { ۵۲۹ پ } آن شهر میگذرد و مردم به کشتی ها عبور میکنند. منتهای این رود به بحر حذر میریزد. +<sup>۶</sup> خانه های آن ولایت را همه<sup>۷</sup> از چوب ساخته اند. در کمال صفای<sup>۸</sup> و از آینه های بزرگ به جای در نصب کرده اند<sup>۹</sup>، به راه عام دریچه ها گشاده اند و طرح ولایت را هشت در هشت بنا فرموده اند. در شاه راه او +<sup>۱۰</sup> هیچ جا کجی ندارد و

۱۴ می یابد [ت][د]

۱۵ و سبب ملال خاطر می گردد [ت][د]

۱۶ × [د]

۱ کتابت [د]

۲ شر [د]

۳ × [ت]، غازی [د]

۴ × [د]

۵ × [د]

۶ و [ت]

۷ × [د]

۸ صفای [د]

۹ کرده [ت][د]

۱۰ در [ت][د]

پیش محمد علی خان ماده<sup>۱</sup> آورد. + مست بوزه بود<sup>۲</sup>، به تکلف کنار گرفت. به جای مناسب تعیین نمود. بعد از چند روز [امیر عمر خان]<sup>۳</sup> همشیره برادرم اسحاق دیوان بیگی که عمک بچه امیر عمر خان است، در عقد خود < ۵۲۰ ر > در آورد. چند وقت از کلفت ایام بر آسود. چون چندی بر این بگذشت، اجل گریبان گیر آن پادشاه نا دیده جهان شده، به چندین درد و حسرت از دنیای پر ملال دامن چید و نعلش او را در بخارا فرستادند. هر چند این سخن را در مقام خود در سلک تحریر کشیده بودیم، با وجود همان چیزی که در عصر محمد علی خان ماده<sup>۵</sup> در وقوع آمده است، قصیرتر گردانیده، بیان میکنیم، انشاء الله تعالی. { ۵۲۹ ر } گستاخی را امید عفو است.

ذکر احرام بستن فقیر به صوب مکه معظمه و مدینه منوره و مشاهده نمودن بعض<sup>۷</sup> عجایب و

غرایب دنیا را در آن راه<sup>۸</sup> بی پایان

نکته سنجان بلاغت را پوشیده نماند که این فقیر بی سر و پا هفت سال در عالم

سیاحی اقلیم ها را سیر کردم<sup>۹</sup> و عجایب و غرایب عالم را بسیار<sup>۱۰</sup> مشاهده نمودم. خواستم که

آن<sup>۱۱</sup> را در سلک تحریر در<sup>۱۲</sup> آرم. چون مشاهده نمودم، سخن به<sup>۱۳</sup> طول می انجامد<sup>۱۴</sup> +<sup>۱۵</sup> و نیز<sup>۱۶</sup>

۱ × [ت]، غازی [د]

۲ آن [د]

۳ × [د]

۴ × [ت]

۵ × [ت]، غازی [د]

۶ میکنم [د]

۷ بعضی [د]

۸ راهی [ت]

۹ نمودم [ت][د]

۱۰ × [ت][د]

۱۱ او [د]

۱۲ × [د]

۱۳ بسیار [ت][د]

قلعه ساخت.<sup>۱</sup> گدای بای دادخواه ولد داول پروانچی را با هزار مرد جرار گذاشته، خود متوجه خوقند شد. بعد از پنج<sup>۲</sup> < ۵۱۹ پ> منزل به مقصد رسید. به دایره نواختن مشغول شد.<sup>۳</sup> +

بیت<sup>۵</sup>

آدمیت نه به منطق نه به ریش نه به جان  
طوطی هم نطق و بز هم ریش و خر هم جان دارد

القصه. در آن وقت بود، خبر آمد که امیر عمر خان از برادر خود امیر نصر الله<sup>۶</sup> + فرار نموده، به راه کوهستان به مرغینان آمده است. به استقبال کس فرستاد<sup>۷</sup> و چون امیر عمر خان نزدیک آمده بود، جناب سیادت پناهی ایشان توره خواجه و<sup>۸</sup> + سلطان خان { ۵۲۸ پ } هر دو عزیزان رفته، به محمد علی خان ماده<sup>۹</sup> التجا نمودند که [به هر حال]<sup>۱۰</sup> پادشاه (۵۸۲) بخارا است. می باید که از برای استقبال او<sup>۱۱</sup> برادر خود سلطان محمود خان را فرمایند. محمد علی خان ماده<sup>۱۲</sup> سخن ایشان را به کره قبول نموده، رخصت اجازت داد. چون نورچشمی از برادر ناپاک خود مرخص شد، با تجمل بسیار امیر عمر خان را استقبال نموده، با آبروی تمام به

۱ ساخته [د]

۲ چند [د]

۳ گشت [د]

۴ چنانچه [د]

۵ × [د]

۶ خان [ت]

۷ فرمود [د]

۸ ایشان [د]

۹ × [ت]، غازی [د]

۱۰ عمر خان [د]

۱۱ × [ت] [د]

۱۲ × [ت]، غازی [د]

قراتینگین به خوقند تشریف فرمودند.<sup>۱</sup> + در میان محمد رحیم دیوان بیگی و محمد علی خان ماده<sup>۲</sup> (۵۸۱) در غایت آشنای و رفت و آمد بود و از بابت دنیا معمور ساخته بود. همان دفعه اسب جبدوق کندل مع لباسهای مروارید دوزی و همان کمر مرصع که امیر حیدر +<sup>۳</sup> فرستاده بود، او را با همراهی سید قل دیوان بیگی به پیش محمد رحیم دیوان بیگی فرستاد. در آن وقت بود که حق قلی پسر خود را بر سبیل دامادی با تجمیل بسیار به ولایت اوراتپه فرستاد. چون در آن ولایت < ۵۱۹ ر > رسیدند، امارت پناهی محمد رحیم دیوان بیگی ایشان را به این شأن و شوکت دید. عرق عطیت<sup>۴</sup> در حرکت آمد. همه ایشان را در قید کشید و مال ایشان را ضبط نمود و این خبر را محمد علی خان ماده<sup>۵</sup> شنیده<sup>۶</sup>، با لشکر فرغانه متوجه مقصد شد. بعد از سه منزل به ولایت خجند رسید. از آن جا { ۵۲۸ ر } سواری نمود. بعد از یک منزل در ولایت اوراتپه وارد گردید<sup>۷</sup>. به محاصره و مقاتله مشغول شد و نیز محمد رحیم دیوان بیگی شرایط قلعه داری را به جای آورده، به انداختن تیر و تفنگ پرداخت و مدت محاصره به طول انجامید و محمد علی خان ماده<sup>۸</sup> دید که کار<sup>۹</sup> پیش نمی‌رود. از لشکر کشیدن های بیمورد خود هزار بار پشیمان گشت<sup>۱۰</sup>. از آن جا کوچیده، در دو فرسخ اوراتپه<sup>۱۱</sup> در موضع سرای نزول نمود. امرا التجا نمودند. سه روز در آن جا سکونت اختیار<sup>۱۲</sup> نمود و آن موضع را

۱ بردند [ت] [د]

۲ در آن چین بود که [د]

۳ × [ت]، غازی [د]

۴ پادشاه [د]

۵ غضب [د]

۶ × [ت]، غازی [د]

۷ × [د]

۸ گردیده [ت]

۹ × [ت]، غازی [د]

۱۰ کاری [د]

۱۱ گشته [د]

۱۲ راه [د]

۱۳ × [ت]

## بیت

بد میکنی و <sup>۱</sup> نیک <sup>۲</sup> طمع میداری جز بد نبود جزای بد کرداری

ذکر <sup>۳</sup> آشتی کردن محمد علی خان ماده <sup>۴</sup> با میر حیدر پادشاه

در آن آوان بود که میان <sup>۵</sup> امیر حیدر <sup>۶</sup> و محمد علی خان ماده <sup>۷</sup> آشنای پذیرفت. ایلچیان دانا رفت و آی میکردند و امیر حیدر <sup>۸</sup> + <۵۱۸پ> عصمت الله بی را با هدیه های خوب مع کمر مرصع به پیش محمد علی خان ماده <sup>۹</sup> فرستاد و او جناب سلطان خان را مع عظیم بای دادخواه فرستاد. در آن وقت امیر حیدر <sup>۱۰</sup> + در بالای خطای قیچاق به محاصره اشتغال داشت. ایشان آمده، در میان امیر حیدر <sup>۱۱</sup> + و مردم {۵۲۷پ} خطای قیچاق مصلح شده <sup>۱۲</sup> و امیر حیدر پادشاه <sup>۱۳</sup> سخن سیادت پناه را قبول نموده <sup>۱۴</sup>، از سر گناه مردم خطای قیچاق در گذشت و اصلاح پذیرفته <sup>۱۵</sup>، به جانب بخارا مراجعت فرمود و جناب سلطان خان به راه

- ۱ تو [ت]
- ۲ نیکی [د]
- ۳ × [ت]
- ۴ × [ت]
- ۵ میانه [د]
- ۶ پادشاه [د]
- ۷ × [ت]، غازی [د]
- ۸ پادشاه [د]
- ۹ × [ت] [د]
- ۱۰ پادشاه [د]
- ۱۱ پادشاه [د]
- ۱۲ شدند [د]
- ۱۳ [د]
- ۱۴ نمود [د]
- ۱۵ پذیرفت [د]

همه در گریه و زاری افتادند و سیادت پناه را به عرابه خطای <۵۱۸ر> انداخته، به پیش خاقان به خان بالیغ فرستادند، [چنانچه گفته اند].<sup>۱</sup>

### بیت

طول عمر و<sup>۲</sup> عرض لذت‌های رنگارنگ او  
پیش از این بوده است اکنون چند روزی<sup>۳</sup> بیش نیست

مدت حکومتش نه ماه بود و مدت عمرش در آن وقت [قریب به]<sup>۴</sup> چهل سال رسیده بود و امرا و بزرگ زاده‌های خوقند که از محمد علی خان {۵۲۷ر} ماده<sup>۵</sup> کنده، به سیادت پناه پیوسته بودند، در این مقدمه بسیار<sup>۶</sup> ایشان فرار نموده، به خوقند آمدند. این خبر را محمد علی خان ماده<sup>۷</sup> شنیده، ایشان را در پیش خود طلبیده، بسیاری سیادت پناهان را ریش و<sup>۸</sup> بروت‌شان را تراشانید و چندی را حبس نموده<sup>۹</sup>، امر فرمود<sup>۱۰</sup> که به جای نان کنجاله<sup>۱۱</sup> دهند و دو خاندان بزرگ را کاری ساخت که در قید کتابت آوردن محال است، [به حکم آن که گفته اند].<sup>۱۲</sup>

۱ × [د]

۲ × [ت]

۳ روز [ت]

۴ دو کم [د]

۵ × [ت]، غازی [د]

۶ بسیاری [ت]

۷ × [ت]، غازی [د]

۸ × [د]

۹ فرموده [د]

۱۰ نمود [د]

۱۱ کنجاره [ت]

۱۲ × [د]

## بیت

نه هر که طرف کله کج نهاد و<sup>۱</sup> تند نشست

کـلاه داری و آیین سـروروی داند

در آن وقت از خاقان چین به سرداران خود خط رسید که سعی بلیغ نمایند و کاری کنند که جهانگیر خواجه +<sup>۲</sup> به دست آرند<sup>۳</sup>. سرداران این پیام را شنیده، [به دست آوردن سیادت پناه شدند]<sup>۴</sup> و چندی از مسلمانان +<sup>۵</sup> از بهر دنیا دین خود را به یک جو میفروختند، به خطایان همدستان <۵۱۷پ> شده، ضمناً به سیادت پناه خط نوشته، وعده دادند که اگر سیادت پناه بار دیگر به این حدود قدم رنجه فرمایند، حکومت کاشغر را مکرر به جناب سیادت پناهی تفویض مینماییم<sup>۶</sup>. چون این خبر به سمع جهانگیر خواجه رسید، آن برادر<sup>۷</sup> خون گرفته بلا توقف با تنی چند {۵۲۶پ} متوجه مقصد شد. چون نزدیک ولایت کاشغر رسید، در میان کوهستان لشکریان خطای کمین کرده بودند. راه سیادت پناه را گرفتند. جهانگیر خواجه چون آن حال را مشاهده نمود<sup>۸</sup>، دانست که فلک چه منصوبه انگیخت. چار و<sup>۹</sup> ناچار راه فرار اختیار نموده، کوهی بود، در غایت رفعت، در آن جا صعود کرد و لشکریان خطای گرد آن کوه را مرکزوار در میان گرفته، متوجه بالا شدند. سیادت پناه دید که کار از دست رفته است. گردن خار خاران از (۵۸۰) کوه نزول نمود و لشکریان [اهل کفر]<sup>۱۰</sup> سیادت پناه را دستگیر نموده، به ولایت کاشغر داخل شدند. چون اهل اسلام آن حال را مشاهده نمودند،

۱ × [ت]

۲ را [ت]

۳ آید [د]

۴ در تدبیر به دست آوردن سیادت پناه شدند [ت]، در تدبیر سیادت پناه را به دست آوردن شد [د]

۵ که [د]

۶ میفرمایند [د]

۷ برادری [ت]

۸ نمودند [ت]

۹ × [ت][د]

۱۰ کفر [د]



چون ایشان از سیادت پناهی رخصت اجازت یافته، در غایت سرعت به<sup>۱</sup> یک منزل راه پیش رفتند. از آن جانب لشکر کفره رسیده<sup>۲</sup>، در آن موضع دو<sup>۳</sup> لشکر +<sup>۴</sup> ملاقی شده، به هم در آمیختند. چنان جنگی شد که خاک رزمگاه از خون کفر و<sup>۵</sup> اسلام گلناری گشت. عاقبت نسیم ظفر از جانب اهل کفره وزید و لشکر اسلام روی گردان شده، جنگ کرده، می آمدند و لشکر کفره آتشی بود که در نیستان افتاده<sup>۶</sup>، تر<sup>۷</sup> و خشک را برابر میسوخت و قدم پیش می نهاد. به همین نوع <۵۱۷ر> محاربه نموده، (۵۷۹) در ولایت کاشغر وارد گردید و مسلمانان را به درجه شهادت میرسانید و بسیاری ایشان راه فرار اختیار نمودند. از آن جمله سیادت پناه برادر محمود خان توره خان و پسر<sup>۸</sup> محمود خان توره خواجه و پسر جناب سلطان خان موسی خان ایشان<sup>۹</sup> را دستگیر نموده، به جانب چین فرستاد {۵۲۶ر} و حکومت کاشغر باز به کفار خطای قرار یافت. در آن شب در عین گیر و دار جهانگیر خواجه با تن<sup>۱۰</sup> چند دل از ملک و<sup>۱۱</sup> مال برکنده، در غره شهر رجب +<sup>۱۲</sup> سنه ۱۲۴۱ بود که راه گریز اختیار نمود. به چندین محنت و مشقت خود را به بیلاق الای گرفت، [چنانچه گفته اند.]<sup>۱۳</sup>

- 
- |    |                   |
|----|-------------------|
| ۱  | × [ت]             |
| ۲  | رسید [د]          |
| ۳  | × [د]             |
| ۴  | کفر و اسلام [د]   |
| ۵  | × [ت]             |
| ۶  | افتاده بود [د]    |
| ۷  | تر [ت]            |
| ۸  | پسری [د]          |
| ۹  | ایشانان [ت]       |
| ۱۰ | تنی [د]           |
| ۱۱ | × [ت]             |
| ۱۲ | المرجب [د]        |
| ۱۳ | چنانچه [ت]، × [د] |

گفته اند. <sup>۱</sup>

## بیت

دریاب کنون که دولتت هست به دست      که این دولت تو میرود از <sup>۲</sup> دست به دست

از آن جا که قابلیت ذاتی نبود، هر چند دولت خواهان از این قبیل سخنهای حکمت آمیز به چندین دلیل عرض کردند، مفید نه افتاد، تا رفت، برادرم به کار نا مناسب مبالغه نمود و <sup>۳</sup> این خبر بر تمام ولایت خطا < ۵۱۶ پ > و ختن منتشر شد و سرداران اهل کفره <sup>۴</sup> نیز از این حال وقوف یافتند <sup>۵</sup>. دانستند که لباس حکومت در بر آن سیادت پناه راست نمی آید. با لشکر انبوه به راه غیر متعارف متوجه مقصد شدند. در غایت تعجیل طی مسافت نموده، قریب به سه روزه راه { ۵۲۵ پ } به ولایت کاشغر رسیدند و این خبر را جهانگیر خواجه شنیده <sup>۶</sup>، در گرداب غم غوطه زدن گرفت. بلا توقف برادرم <sup>۷</sup> جناب خان <sup>۸</sup> توره خان را و پسر <sup>۹</sup> بیک مراد بی خدایار بیک <sup>۱۰</sup> را امیر لشکر ساخته، با لشکر انبوه به جنگ کفره فرستاد.

## [بیت]

تدبیر خود امروز کن ای خواجه که فردا      هر چند که فریاد کنی سود ندارد <sup>۱۱</sup>

- 
- |    |                      |
|----|----------------------|
| ۱۱ | [د]                  |
| ۱  | × [د]                |
| ۲  | × [د]                |
| ۳  | [د]                  |
| ۴  | کفر [ت]              |
| ۵  | یافته [د]            |
| ۶  | شنید [د]             |
| ۷  | برادر [ت]            |
| ۸  | سلطان خان [ت]، × [د] |
| ۹  | پسری [ت]             |
| ۱۰ | بی [د]               |
| ۱۱ | × [ت] [د]            |

ذکر<sup>۱</sup> معزول شدن<sup>۲</sup> جهانگیر خواجه از ولایت کاشغر به تدبیر امرای خطای آن سیادت پناهی  
 بخت بر گشته را به دست آورده، به درجه<sup>۳</sup> شهادت رسانیدن  
 و هم در آن وقت حوصله<sup>۴</sup> برادر<sup>۵</sup>م جهانگیر خواجه به پایان رسید و دولت را غنیمت  
 ندانست و بر امور ملک نه پرداخت. دوام با مردمان < ۵۱۶ ر > دون صحبت داشتی، [چنانچه  
 گفته اند.]<sup>۶</sup>

## بیت

ابر را بین که چون همی نالد هر<sup>۷</sup> دم از همنشین ناهموار

و نشه<sup>۸</sup> او در آن وقت از حد اعتدال گذشته بود. دوام با پری چهره های کاشگری و  
 اغاچه های سیاه چشم عنبر موی و با ساقیان { ۵۲۵ ر } گل رخ می ناب میخورد و کار ( ۵۷۸ )  
 لشکریان معطل ماند. همه در این کار سیادت پناه انگشت به دندان گزیده، در تعجب  
 بودند<sup>۹</sup> و چندی از<sup>۱۰</sup> خیر خواهان او مکرر عرض<sup>۱۱</sup> نمودند. عمری به بیدولتی روزگار  
 گذرانیدید. حالا که حضرت کار ساز بنده نواز [دولت بی اندازه]<sup>۱۲</sup> عطا فرموده است که در  
 هیچ پادشاهی نیست، می باید که<sup>۱۳</sup> قدر این دولت را دانید، تا که<sup>۱۴</sup> پشیمانی نیارد، [چنانچه

نگذار که ره کند؟ (نا خوانا) را دشمن که؟ (نا خوانا) میتوان دوخت [ت]،

دشمن چو بینی ناتوان لاف از بروت خود مزن

مغزی است در هر استخوان مردی است در هر پیرهن [د]

۱ × [ت]

۲ شدنی [ت]

۳ × [د]

۴ همه [د]

۵ نشاء [ت] [د]

۶ بود [د]

۷ × [د]

۸ عرضه [د]

۹ دولتی بی اندازه [ت]، دولتی [د]

۱۰ × [ت]

بیت<sup>۱</sup>

<۵۱۵پ> از این نوید مبارک که ناگهان آمد

بشارتی به دل و مژده ای به جان آمد

از کمال خرسندی تمام<sup>۲</sup> ولایت اهل<sup>۳</sup> اسلام از غل و غش اهل کفره<sup>۴</sup> پاک شدند<sup>۵</sup>  
و جهانگیر خواجه حکومت ولایت ختن را به پسر<sup>۶</sup> سیادت پناهی محمود خان توره خواجه که  
جین او بود، نامزد فرمود و ولایت یارکند را به برادر خود<sup>۷</sup> + انعام فرمود و امارت آق سو را  
به عمر علی خواجه ولد خان خواجه<sup>۸</sup> + {۵۲۴پ} انعام فرمود<sup>۹</sup>، علی هذا القیاس. چون  
جهانگیر خواجه بر تمام ولایت هفت شهر کاشغر فرمان روا گشت و خاطر خود را به تور خود  
از جانب خطای<sup>۱۰</sup> جمع ساخت و ندانست که حکما گفته اند که<sup>۱۱</sup> بر عجز دشمن رحمت مکن  
که اگر قادر شود، بر تو نبخشاید، [چنانچه گفته اند.]<sup>۱۲</sup>

## بیت

۱۳+

- ۱ × [ت]
- ۲ تمامی [ت]، کل [د]
- ۳ × [د]
- ۴ کفر [ت]
- ۵ شد [د]
- ۶ پسری [ت]
- ۷ محمد خواجه [د]
- ۸ بزرگ [د]
- ۹ نمود [د]
- ۱۰ خطا [د]
- ۱۱ × [د]
- ۱۲ × [د]
- ۱۳ مکرر [س]،

امروز بکش چو میتوان گشت کانش چو بلند شد جهان سوخت

و محمد علی خان ماده<sup>۱</sup> به چندین محنت و مشقت بعد از طی مسافت به ولایت خوقند وارد گردید. به بوزه خوردن و کبوتر پرانیدن<sup>۲\*</sup> مشغول شد. چون جهانگیر خواجه بعد از مراجعت < ۵۱۵ ر > لشکر خوقند با لشکر انبوه گلباغ را چون نگین انگشتی در میان گرفته، به محاصره و مقاتله مشغول گشت. مدت محاصره به طول انجامید. جهانگیر خواجه باز گشت نموده، به دولتخانه خود نزول اجلال فرمود. در آن وقت لشکر خطای دوازده هزار +<sup>۳</sup> در گلباغ بود. از بابت خوراک بسیار<sup>۴#</sup> به تنگ آمده بود. شبی متفق شده، قلعه { ۵۲۴ ر } گلباغ را خالی گذاشته، همه پیاده قرار بر فرار اختیار نمودند و این خبر به سیادت پناه رسید، بلا توقف سواری نموده، متوجه آن صوب گردید. غازیان پر دل در غایت سرعت رسیده، (۵۷۷) به جنگ پیوستند. بعد از ساعتی لشکر<sup>۵</sup> انبوه از اهل اسلام رسیده، دست به قتل اهل کفره گشادند و کافران نیز این حال را دیده، از روی جهل یک دیگر را به قتل میرساندند.<sup>۶</sup> بعد از ساعتی از دوازده هزار کس یک کس باقی نماند و سیادت پناه با فتح و<sup>۷</sup> نصرت به مقر خود نزول فرمود. این خبر را تمام ولایت هفت شهر شنیده، اهل اسلام [آن جا]<sup>۸</sup> کفره [آن جا]<sup>۹#</sup> را به قتل میرسانیدند، [چنانچه گفته اند].<sup>۱۰</sup>

۱ × [ت]، غازی [د]

۲ پُرانیدن [س]، پُراندن [د]

۳ کس [د]

۴ [ت][د]

۵ لشکری [ت]

۶ میرسانید [د]

۷ × [ت]

۸ × [ت]

۹ [ت][د]

۱۰ × [ت][د]

سیادت پناه به جانب دولتخانه خود مراجعت فرمود و محمد علی خان ماده<sup>۱</sup> رو به قلعه گلباغ آورده، به محاصره مشغول شد. (۵۷۶) مدت پنج روز لشکر فرغانه +<sup>۲</sup> در غایت سعی و کوشش به جای آوردند. نسیم ظفر از هیچ وجه نوزید و بسیاری<sup>۳</sup> از اهل اسلام به درجه شهادت رسیدند. عاقبت شبی از شبها<sup>۴</sup> لشکر فرغانه خود +<sup>۵</sup> به خود <۵۱۴پ> دروغ گرفته، آماده گریز شدند.

### مصراع

بشتاب که وقت کار در میگذرد

و محمد علی خان ماده<sup>۶</sup> این حال را مشاهده نموده، حیران و سراسیمه شده، به هر سو چشم او می تافت. نمیدانست که به کدام تدبیر از این مهلکه خلاص یابد. {۵۲۳پ} بیچاره تدبیر را هم نمیدانست که در آن وقت کار فرماید. مثل گاو مرده می نشست. عاقبت امر را دیدند که کار از دست میرود. لا علاج او را به اسب سوار کرده، در کمال تعجیل راه خوقند را پیش گرفتند و بسیاری<sup>۷</sup> امر او<sup>۸</sup> بزرگ زاده های خوقند از وی کنده، به سیادت پناه پیوستند و جهانگیر خواجه به هر کدام ایشان موافق حال خود مهربانی<sup>۹</sup> نمود، [چنانچه گفته اند].<sup>۱۰</sup>

### بیت

هر جا که رسم مهر و وفا بیشتر بود      جمعیت و<sup>۱۱</sup> حضور و صفا بیشتر بود

۱ × [ت]، سید غازی [د]

۲ به فتح گلباغ [ت][د]

۳ بسیار [د]

۴ شب [د]

۵ و [س]

۶ × [ت]، غازی [د]

۷ بسیار [د]

۸ [د]

۹ مهربانی ها [ت]

۱۰ × [د]

۱۱ [ت][د]

ذکر<sup>۱</sup> روی دیدن سیادت پناهی برادرم جهانگیر خواجه به محمد علی خان ماده<sup>۲</sup>  
 القصه. روز دیگر سیادت پناه امرا و لشکریان خود را چنان آرا داده بود که [غرق در  
 میان]<sup>۳</sup> طلا و آهن گشته بود و +<sup>۴</sup> سه لک کس در آن لشکر<sup>۵</sup> جمع آمده بودند. در عصر هیچ  
 پادشاهی این چنین جمع آمد را کسی ندیده بود و نشنیده بود و<sup>۶</sup> به چندین شأن و شوکت  
 سواری <۵۱۴ر> نموده، متوجه لشکرگاه فرغانه شد. چون نزدیک رسیدند، چشم محمد علی  
 خان ماده<sup>۷</sup> و لشکریان او به این تجمل افتاد. انگشت تحیر به دندان گزیدند<sup>۸</sup>، +<sup>۹</sup> در بحر  
 حیرت فرو رفتند +<sup>۱۰</sup> چنان در دل محمد علی خان {۵۲۳ر} ماده<sup>۱۱</sup> وهم افتاده بود که دل  
 ناپاکش چون<sup>۱۲</sup> ناقوس میلرزید. لا علاج گردن خار خار به جانب سیادت پناه متوجه شد. هر  
 دو لشکر نزدیک یک دیگر آمده، صف کشیدند و سیادت پناه مع جناب سلطان خان و محمد  
 علی خان ماده<sup>۱۳</sup> مع حق قلی پیش آمده، یک دیگر را در کنار گرفتند. سیادت پناه روی به  
 محمد علی خان ماده<sup>۱۴</sup> آورده، گفت، <خوش آمدی<sup>۱۵</sup>. فتح قلعه گلباغ به شما تعلق دارد.> و

- ۱ × [ت]
- ۲ × [ت]، غازی [د]
- ۳ در میان غرق [د]
- ۴ گویند [ت]
- ۵ لشکری [د]
- ۶ × [ت]
- ۷ × [ت]، غازی [د]
- ۸ گزیده [د]
- ۹ و [ت]
- ۱۰ و [د]
- ۱۱ × [ت]، غازی [د]
- ۱۲ مثل [د]
- ۱۳ × [ت] [د]
- ۱۴ × [ت]، غازی [د]
- ۱۵ آمدید [ت] [د]

## بیت

تا بود پروانه و خورشید و<sup>۱</sup> مه بر شش جهة شمع اقبالش چراغ افروز نه خرگاه باد<

جناب سلطان خان میفرمایند، <چون این سخن از ایشان شنیدم، انگشت تحریر به دندان گزیدم. بلا توقف کس همراه کرده، همچنان گفته او را کردم و دیگری نقل کرد که یکی +<sup>۲</sup> بازرگان<sup>۳</sup> ختن در آن وقت (۵۷۵) به خدمت <۵۱۳پ> جهانگیر خواجه آمده، یک صندوق جواهر خود را نذر کرد و سیادت پناه جمله بازرگان آن ولایت را جمع نموده، بهای او<sup>۴</sup> را پرسید<sup>۵</sup>. همه عاجز آمدند. بعد از گفتگوی<sup>۶</sup> بسیار بر آن قرار داده، عرض<sup>۷</sup> نمودند که دوازده ساله بچه را راست گذارند {۵۲۲پ} و طلا ریختن گیرند، هر وقت آن بچه ننماید، بهای او شده باشد و دیگری نقل کرد که یک بازرگان دختری از ولایت یارکند آمد. ششصد غلام زر خرید خود مکمل و مصلح را به خدمت سیادت پناه +<sup>۸</sup> نذر کرد. اکنون دولت سیادت پناه را از اینها قیاس باید نمود. حاجت بیان نیست، +<sup>۹</sup> [چنانچه گفته اند].<sup>۱۰</sup>

## بیت

که بسی روزگار می باید که چنین سلطنت به دست آید

۱۳ × [د]

۱ × [ت]

۲ از [ت]

۳ بازرگانان [ت]

۴ جواهر [د]

۵ پرسیدند [ت]

۶ گفت گو [ت]، گفت و گوی [د]

۷ عرضه [د]

۸ جهانگیر خواجه [د]

۹ اگر راست باشد [ت]

۱۰ × [د]



داشت، به حکم آن که <sup>۱</sup>

### مصراع

قدر زر زرگر شناسد قدر جوهر جوهری

بعد از آن جناب سلطان خان او را به پیش محمد علی خان ماده <sup>۲</sup> تکلیف کردند <sup>۳</sup> و او جواب داد که >یک بار از خاطر جناب شما بر آمده، او را در بالای اسب ملاقات میکنم. دو باره روی او را نخواهم دید. اگر به همین شرط قبول فرمایند، خوب و الا خود میدانید.< جناب سلطان خان سخن <sup>۴</sup> او را قبول فرمودند <sup>۵</sup>. فقیر از زبان <۵۱۳ر> جناب <sup>۶</sup> سلطان خان بارها شنیده ام که میگفت <sup>۷</sup>، >در آن وقت حشمت و شوکت بارگاه جهانگیر خواجه را چنان مشاهده نمودم که تمام حاکمان ما وراء النهر را جمع کنند، {۵۲۲ر} یکی از خوشه چینان او باشد و چنان مال دنیا در خزینة او جمع شده بود که در خزینة هیچ پادشاهی موجود نبود و <sup>۸</sup> سه کس به پیش من آمده، عرضه نمودند <sup>۹</sup> که هر کدام مایان از برای نذر به خدمت جهانگیر خواجم <sup>۱۰</sup> پنجاه یامبوکی آوردیم. یک هفته میشود که به مایان نوبت نمیرسد و ما سرگردان میگردیم. چه میشود که [مهربان شده] <sup>۱۱</sup>، یکان خدمتکار خود را فرمایند که نذر خود [به خدمت شان] <sup>۱۲</sup> منظور کرده، دعا کنیم، به حکم آن که [گفته اند]. <sup>۱۳</sup>

۱ گفته اند [د]

۲ × [ت]، غازی [د]

۳ کرد [ت]

۴ × [ت]

۵ فرمود [ت]

۶ پدرم [د]

۷ میگفتند [ت]

۸ [د]

۹ نمود [ت]

۱۰ خواجه [د]

۱۱ مهربانی نموده [د]

۱۲ را [ت]، را به خدمت جهانگیر خواجم [د]

بید در لرزه در<sup>۱</sup> آمد. ندیمانی که احوال او را میدانستند، گفتند، > ما شنیدیم که در میان<sup>۲</sup> قلعه گلباغ چند خزینه از یامبو پر بوده است. اگر شما روید، در سهل درجه فتح میشود. همه خزینه<sup>۳</sup> در تحت تصرف شما میدر آید. < چون محمد علی خان [سید غازی]<sup>۴</sup> نام یامبو را شنید، چون میمون نامبارک در خنده آمد. بلا توقف با لشکر فرغانه متوجه آن صوب گشت. در آن وقت برادر محمد رحیم دیوان بیگی عبد الرحمن بیک از اوراتپه به سیصد<sup>۵</sup> کس و از شهر سبزپسر محمد صادق دیوان بیگی الوغ بیک به دو صد کس رسیده، ملحق شدند.

القصه. محمد علی خان ماده<sup>۶</sup> بعد از قطع راه در آن ولایت وارد گردید و اما از جانب سیادت پناه کسی به استقبال نه بر<sup>۷</sup> آمد. از این وجه وهم بر دل محمد علی خان ماده<sup>۸</sup> > ۵۱۲پ< مستولی گشت و چندی از<sup>۹</sup> ندیمان خود را به خدمت سیادت {۵۲۱پ} پناه میفرستاد. سیادت پناه استغنا ورزیده، موافق طبع محمد علی خان [سید غازی]<sup>۱۰</sup> جواب نمیگفت. عاقبت محمد علی خان [سید غازی]<sup>۱۱</sup> دید که کار نمیشود. لا علاج (۵۷۴) جناب سیادت پناه سلطان خان خواجه کلان را مع حق قلی دادخواه و بهادر خواجه دسترخانچی را به پیش جهانگیر خواجه فرستاد. آمدن<sup>۱۲</sup> + سلطان خان را جهانگیر خواجه شنیده، چند قدم پیش آمده، استقبال نمود و به جای خویش فرود آورد و بسیار محترم

- ۱ × [د]
- ۲ درون [ت]
- ۳ [ت][د]
- ۴ × [ت]، غازی [د]
- ۵ سه صد [ت]
- ۶ × [ت]، غازی [د]
- ۷ × [د]
- ۸ × [ت]، غازی [د]
- ۹ × [د]
- ۱۰ × [ت]، غازی [د]
- ۱۱ × [ت]، غازی [د]
- ۱۲ جناب [د]

سبیل حکومت گذاشته بودند<sup>۱</sup>، دید که کار از دست رفت. لا علاج به خدمت سیادت پناه شتافت. خواست که تقصیر حال<sup>۲</sup> خود را عرض<sup>۳</sup> نماید و<sup>۴</sup> مردم اسلام هجوم کرده، به امر سیادت پناه آن را در همان جا به قتل رسانیدند و سیادت پناه با چندین شأن و شوکت در ولایت کاشغر<sup>۵</sup> داخل شده، بر سریر سلطنت بنشست، [چنانچه گفته اند.

### فرد بیت<sup>۶</sup>

(۵۷۳) همین است کار سپهر سپنج گهی گور یابد گهی تاج و گنج

### ذکر حکومت برادرم سیادت پناهی جهانگیر خواجه در ولایت کاشغر

القصه. برادرم بر تمام هفت شهر کاشغر فرمان روا گشت و این خبر بهجت اثر بر تمام<sup>۷</sup> ربع مسکون شایع شد و نیز محمد علی خان [سید غازی]<sup>۸</sup> شنیده، عرق بخل او در حرکت آمد<sup>۹</sup>. پی در پی به خدمت سیادت پناه بر سبیل آشنایی ایلچی فرستاد. سیادت پناه نیز ایلچیان سخندان فرستاده، گفت، >ما غزای گلباغ را از برای او گذاشتیم. {۵۲۱}> {۵۱۲}> اگر بیاید، به اتفاق یک دیگر آن قلعه را از خداوند تعالی طلب میکنیم.< چون ایلچیان به پیش محمد علی خان [سید غازی]<sup>۱۰</sup> آمدند و خط خود را داده، صورت واقعه را بیان فرمودند، چون محمد علی خان [سید غازی]<sup>۱۱</sup> نام غزا را شنید، چون

۱ بود [د]

۲ × [د]

۳ عرضه [د]

۴ × [ت] [د]

۵ [د]

۶ × [د]

۷ تمامی [ت]

۸ × [ت]، غازی [د]

۹ آمده [ت]

۱۰ × [ت]، غازی [د]

۱۱ × [ت]، غازی [د]

بود<sup>۱</sup>. بعد از ساعتی نیک ملاحظه نمود که ایشان همه<sup>۲</sup> غلام و خدمتکار سیادت پناه {۵۲۰ر} میباشند. از شادی بلا توقف نشانه سیادت پناه را گفت. ایشان به مجرد شنیدن سلامتی<sup>۳</sup> سیادت پناه شکر کنان در غایت <۵۱۱ر> تعجیل به خدمت سیادت پناه شتافتند. از همه<sup>۴</sup> پیشتر چستی کرده، آن ندیم این خبر بهجت اثر را به سیادت پناه رسانید. چون سیادت پناه این پیام را شنید، از شادی به پیراهن نمیگنجید و شکر ایزد تبارک و تعالی به جای می آورد<sup>۵</sup>.

### مصراع

گم شد خزان رنج و بهار طرب رسید

در آن وقت بود که تمامی<sup>۶</sup> لشکر اسلام گریبان چاک گریه کنان به خدمت سیادت پناه در آن گورستان رسیده، همه یک باره به پای سیادت پناه افتادند. گویا در آن روز حشری بر پا شد که از نوحه و زاری غازیان زلزله در زمین و زمان افتاده بود. بعد از آن سیادت پناه را به چندین عزت و حرمت به اسب باد پیمای خوش رفتار سوار کرده، با تجمل تمام رو به مقصد آوردند. چون این خبر را اهالی<sup>۷</sup> ولایت کاشغر شنیده، [کلان و]<sup>۸</sup> خورد و بزرگ متوجه سیادت پناه شدند. چون سیادت پناه به نزدیک ولایت رسید، همه<sup>۹</sup> علما {۵۲۰پ} و امرا و فقرا سیادت پناه را استقبال نموده، به دست بوسی او مشرف <۵۱۱پ> میشدند. در آن وقت حاکم کاشغر که مردم خطای از جانب خود نیابتاً دولت خواه ساخته، در میان شهر بر

۱ بود [د]

۲ × [د]

۳ به [س]

۴ × [ت]

۵ آوردند [ت]

۶ تمام [د]

۷ اهالیه [ت]

۸ کلن [د]

۹ × [ت]

به جهنم شتافتند.<sup>۱</sup>

[بیت]

مجاهدان شرف اینچنین از آن دارند که در غزا کمر جهد بر میان دارند<sup>۲</sup>

و لشکریان اسلام خاطر خود را از کار کفره فارغ ساخته، به سراغ سیادت پناه بودند که ناگاه<sup>۳</sup> حسن خواجه با دوازده هزار غازی مصلح از جانب قیزیل سو رسیدند. دیدند که از سیادت پناه +<sup>۴</sup> آثاری نیست<sup>۵</sup>. همه در غرقاب تفکر [فرو رفتند]<sup>۶</sup>. دیوانه وار به هر سو میدویدند. در آن وقت که<sup>۷</sup> آفتاب خاور به<sup>۸</sup> این نه سپهر زنگاری فرمان فرما گشت و عالم را به شعاع خود فرو گرفت. اتفاقا آن ندیم<sup>۹</sup> بیچاره در آن موضع حیران و سرگردان میگشت. غازیان او را به دست آورده<sup>۱۰</sup>، از سیادت پناه خبر<sup>۱۱</sup> پرسیدند و +<sup>۱۲</sup> بیچاره ایشان را نمیشناخت، بلکه ایشان را سپاه<sup>۱۳</sup> خطای گمان کرده، منکر<sup>۱۴</sup> (۵۷۲) +<sup>۱۵</sup> سیادت پناه [می

۱۵ نیافت [د]

۱ رفتند [د]

۲ × [ت] [د]

۳ × [ت] [د]

۴ هیچ [ت]

۵ نه [د]

۶ شدند [د]

۷ × [ت] [د]

۸ بر [د]

۹ ندیمی [ت]

۱۰ آوردند [د]

۱۱ × [د]

۱۲ آن [د]

۱۳ سپاهیان [د]

۱۴ منکری [ت]

۱۵ منکر [س]

بیت

[دری که]<sup>۱</sup> بر رخ بختی<sup>۲</sup> فلک بخاری بست

به لطف خویش گشاید یا<sup>۳</sup> مفتاح الابواب<sup>۴</sup>

مجمّل سخن آن که در آن حین که سیادت پناه رو به گریز نهاد و لشکریان خطای سر مزار را متصرف شد، قبل از این دو روز به جماعه<sup>۵</sup> چوم باغیش<sup>۶</sup> آمدن خود را معلوم ساخته<sup>۷</sup>، پیام فرستانیده<sup>۸</sup>. +<sup>۹</sup> به مجرد شنیدن نام جهانگیر خواجه از غازیان پر دل قریب شش هزار مبارز جراری<sup>۱۰</sup> خنجر گذار در آن سحری به آن موضع رسیدند. دیدند که مردم خطای در آن جا مسلط شده است. از سیادت پناه هیچ<sup>۱۱</sup> آثاری نیست. لا علاج دست به شمشیر برده، اهل کفره و مسلمان به هم در آمیختند. چنان جنگی شده بود که جوی از خون مسلمانان<sup>۱۲</sup> به جانب جنت روان<sup>۱۳</sup> {۵۱۹پ} بود و جوی از خون ناپاک کفره به دوزخ جریان میکرد. عاقبت بعد از محاربه بسیار نسیم ظفر از جانب اهل اسلام وزید و مشرکان رو به فرار <۵۱۰پ> آوردند. [در آن وقت]<sup>۱۴</sup> از چهار هزار لشکر خطای<sup>۱۵</sup> یکی نجات نیافته<sup>۱۶</sup>، همه

۱ دریک [ت]

۲ بختم [د]

۳ × [ت]

۴ ابواب [د]

۵ باقیش [ت] [د]

۶ گردانیده [د]

۷ فرستاده بود [ت] [د]

۸ از ایشان [د]

۹ جرار [د]

۱۰ × [د]

۱۱ مسلمان [د]

۱۲ جاری [د]

۱۳ [ت] [د]

۱۴ خطا [د]

نهادند. دیگر ایشان به درجه شهادت رسیدند، چنانچه گفته اند.

### بیت<sup>۱</sup>

نشسته یکی فتنه بلای دیگری خواست    نارفته یکی غصه بلای دیگر آمد

و لشکریان خطای در آن تاریکی<sup>۲</sup> شب سیادت پناه را میجست. سیادت پناه قدری راه قطع کرد. دید که از این مهلکه خلاص شدن از قوت و فعل بشری دور<sup>۳</sup> است. لا علاج تن به قضا در داد. +<sup>۴</sup> به گور ویرانه ای در آمده، هر دو منتظر مرگ [می نشستند]<sup>۵</sup> و آن ندیم سر گردان به آن جای پر بیم میگشت. {۵۱۹ر} در آن زمان حضرت آفریده گار خواست که<sup>۶</sup> به قدرت کامله خود [جهانگیر خواجه ای را]<sup>۷</sup> که از حیات (۵۷۱) خود صد بار دست شسته [بود <۵۱۰ر> و]<sup>۸</sup> در زنده گی اختیار گور کرده بود، +<sup>۹</sup> او را از خاک مذلت بر داشتند.<sup>۱۰</sup> چند وقت افسر سر او را به ثریا رسانید<sup>۱۱</sup>، [چنانچه گفته اند].<sup>۱۲</sup>

۱۴ و یک ندیم دیگر [د]

۱ × [د]

۲ تاریک [د]

۳ بیرون [د]

۴ و [ت]

۵ نشست [ت][د]

۶ × [د]

۷ خواجه ای را [ت]، جهانگیر خواجه [د]

۸ × [د]

۹ خواست که [د]

۱۰ داشته [ت][د]

۱۱ رساناند [د]

۱۲ × [د]

اند، وارد گردید و جد اعلی خود ایشان آفاق خواجه که در آن جا مدفون است<sup>۱</sup> و سیادت پناه<sup>۲</sup> مذکور از هر دو عزیز مدد و استعانت طلبیده، به سر رشته کار خود شد، در آن وقت آفتاب غروب نمود. + این خبر را مردم خطای شنید، قریب چهار هزار کس از گلباغ بر آمده، متوجه مزار گشت<sup>۳</sup>. چون در آن جا رسید، به محاصره و مقاتله مشغول شد و سیادت پناه نیز به انداختن تیر و تفنگ پرداخت<sup>۴</sup>، چنانچه گفته اند.

### فَتْحَه

قرص خورشید در سیاهی شد یونس اندر دهان ماهی شد<sup>۵</sup>

{ ۵۱۸ پ } در آن وقت بسیاری لشکر<sup>۶</sup> سیادت پناه رو به فرار آوردند. < ۵۰۹ پ > با هفته<sup>۷</sup> کس جنگ میکرد. در آن وقت جهانگیر خواجه حسن خواجه نام ندیم<sup>۸</sup> خود را به جانب قیزیل سو فرستاد. آن [موضعی بود]<sup>۹</sup>، در غایت کثرت اهل اسلام و ایشان را از آمدن سیادت پناه واقف گردانید<sup>۱۰</sup>. در آن حین لشکر کفره غلبه کرده، به یک حمله > به مزار < داخل > شدند. [و یک ندیم دیگر]<sup>۱۱</sup> و سیادت پناه مع عیسی دادخواه<sup>۱۲</sup> + رو به گریز

۱ اند [ت] [د]

۲ پناهی [د]

۳ بیت

قرص خورشید در سیاهی شد یونس اندر دهان ماهی شد [د]

۴ گشته [ت]، شد [د]

۵ پرداختند [ت]

۶ فرد [ت]

۷ × [د]

۸ لشکری [ت]، لشکریان [د]

۹ [ت] [د]، هفته [س]

۱۰ ندیمی [ت]

۱۱ موضع است [ت] [د]

۱۲ گرداند [د]

۱۳ × [د]



القصه.<sup>۱</sup> چون [چند روزی بدین]<sup>۲</sup> بگذشت، باز سودای<sup>۳</sup> هوای کاشغر بر سر سیادت پناه افتاد، به چندین حيله و<sup>۴</sup> نیرنگ از آن جا بیرون بر آمده، خود را به اسب های راه وار گرفته، راه فرار اختیار نمود.<sup>۵</sup> در کمال تعجیل در سه شب و<sup>۶</sup> روز از تابعات خوقند خود را بیرون کشید.<sup>۷</sup> در موضع آلائی رسیدند و از آن جا کوچیده، به قلعه تاش قورغان وارد گردیده، کوس حکومت را نواخت. این خبر در اطراف و جوانب آن حدود شایع شد و بسیاری مردم قیرغیز در پیش سیادت پناه هجوم کردند. در آن وقت عیسی دادخواه حاکم اندجان و خدیار میرزا که از بزرگ زاده های خوقند بود، از محمد علی خان ماده<sup>۸</sup> کنده، به سیادت {۵۱۸ر} پناه پیوستند.<sup>۹</sup> یک سال در آن حدود استقامت نموده، بعد از آن با لشکر انبوه <۵۰۹ر> متوجه کاشغر شدند.<sup>۱۰</sup> در آن راه های باریک با چندین محنت و مشقت راه می پیمودند<sup>۱۱</sup> و بسیاری مردم قیرغیز به جانب وطن خود مراجعت فرمودند.<sup>۱۲</sup> عاقبت (۵۷۰) سیادت پناه<sup>۱۳</sup> مذکور با چندی<sup>۱۴</sup> از ندیمان خود بعد از زحمت بسیار به مزار فیض آثار قطب الاولیا غوث الاتقیا سلطان صادق بورا خان که یکی از جمله هفت سلطان

- ۱ × [د]
- ۲ چند روزی بر این [ت]، چندی بر این [د]
- ۳ × [ت]
- ۴ × [د]
- ۵ نمودند [ت][د]
- ۶ × [ت]
- ۷ کشیدند [د]
- ۸ غازی [ت][د]
- ۹ و سیادت پناه [د]
- ۱۰ شد [د]
- ۱۱ پیمود [ت][د]
- ۱۲ فرمود [ت]
- ۱۳ پناهی [د]
- ۱۴ چند [د]

دستگیر نموده، به چندین خاری (۵۶۹) و بی آبروی<sup>۱</sup> به ولایت خوقند آوردند و محمد علی خان ماده<sup>۲</sup> سیادت پناهان را حبس نمود. بعد از سه روز توره خان را از حبس بیرون آورد<sup>۳</sup>. به حالش گذاشت و جهانگیر خواجه در حبس ماند. +<sup>۴</sup> در آن آوان سنه ۱۲۳۸<sup>۵</sup> بود که در ولایت خوقند از تعفن هوا چنان زلزله ای شد که در هیچ عصر و در هیچ قرنی<sup>۶</sup> کسی ندیده و نشنیده بود و بسیاری مردم در تحت خانه<sup>۷</sup> مانده، هلاک شدند {۵۱۷پ} و بسیار<sup>۸</sup> خانه ها<sup>۹</sup> منهدم شد و<sup>۱۰</sup> مردم از نی خانه ها ساخته بودند، چنانچه در <۵۰۸پ> +<sup>۱۱</sup> کوهستان خوقند چند خانه وار مردم به زیر زمین فرو<sup>۱۲</sup> رفتند و زمین چنان کفیده بود که به<sup>۱۳</sup> زیر زمین غیر از بخار سیاه چیزی +<sup>۱۴</sup> دیگر<sup>۱۵</sup> مرئی نمیشد و آنها مثل فواره برآمده، به زمین ها جاری میشد. مدت شش ماه بسیاری روز در میان میلرزید.

## [بیت]

نصرت از او طلب که به میدان قدرتش هر ذره پهلوانی و هر پشه صفدانی<sup>۱۶</sup>

۱ آبرویی [ت]

۲ × [ت]، غازی [د]

۳ آورده [ت] [د]

۴ گویند [ت]

۵ ۱۲۴۸ [ت]

۶ قرن [د]

۷ خانه ها [ت]

۸ بسیاری [د]

۹ خانه [د]

۱۰ × [د]

۱۱ در [ت]

۱۲ × [د]

۱۳ در [د]

۱۴ چیزی [ت]

۱۵ × [د]

۱۶ × [ت] [د]

بیت<sup>۱</sup>

در عاشقی به میر حسن تا شوی تمام نشنیده که هر که بمرد او تمام شد

مدت حکومتش دو سال بود و<sup>۲</sup> مدت عمرش [چهارده ۱۵]<sup>۳</sup> سال بود<sup>۴</sup>.

ذکر احوال گریختن<sup>۵</sup> برادرم سیادت پناهی جهانگیر خواجه +<sup>۶</sup> به ولایت کاشغر

در آن وقت که<sup>۷</sup> امیر عمر خان به سیادت پناه از درون ارک جای داده<sup>۸</sup>، به حال او می پرداخت و محمد علی خان {۵۱۷ر} ماده<sup>۹</sup> چون به حکومت نشست، به حال او نه پرداخت. از این وجه <۵۰۸ر> سیادت پناه بسیار از بابت روزگار به تنگ آمده، با همراهی برادر سیادت پناهی محمود خان +<sup>۱۰</sup> توره خان و چند دیگر متفق شده، راه گریز پیش گرفته، متوجه ولایت کاشغر شدند و این خبر به محمد علی خان ماده<sup>۱۱</sup> رسید. بلا اهمال از تعاقب ایشان کس فرمود و مبارزانی که مامور این امر شده بودند، در غایت سرعت راه قطع میکردند. بعد از سه شب و +<sup>۱۲</sup> روز در کوهستان اندجان از عقیب ایشان رسیده<sup>۱۳</sup>، سیادت پناهان را

۱ × [د]

۲ × [د]

۳ پانزده [ت]، چهارده [د]

۴ [ت][د]

۵ × [د]

۶ و سلطنت او [د]

۷ [ت][د]

۸ داد [د]

۹ × [ت][د]

۱۰ و [س][د]

۱۱ × [ت]، غازی [د]

۱۲ سه [ت]

۱۳ رسیدند [د]

بهشت آیین از رنج راه برآسودیم. بعد [از آن]<sup>۱</sup> از آن جا کوچیده، متوجه ولایت اوروسیه شده، راه می پیمودیم. بعد از سی روز به چندین محنت و الم در ولایت شمی (۵۶۸) وارد گردیدیم. چند روز در آن ولایت اختیار سکونت کردم، [چنانچه گفته اند].<sup>۲</sup>

### بیت

در غم افتادم و ز اندوه غم آزاد شدم در بلا ماندم و از بیم بلا وار ستم

قصه کوتاه. در آن وقت که محمد علی خان ماده<sup>۳</sup> جناب قبله گاهم و فقیر را رخصت اجازت داد. بعد از چند روز خدمتکار قدیمی قبله گاهی حق قلی را به عمل دادخواهی [سرافراز کرد]<sup>۴</sup>، بل تمام امور ملک را به او حواله < ۵۰۷ پ > کرد و یوسف پروانچی که امیر لشکر امیر عمر خان بود { ۵۱۶ پ } و سلسله جنبان این امر شده، جناب قبله گاهم را و فقیر را جلای وطن کرده<sup>۵</sup> بود، او را محمد علی خان ماده<sup>۶</sup> گرفته، خانه او را به تاراج برد و خود او را از عقیب فقیر به ولایت اوروسیه فرستاد و بعد از چند روز ایر نظر دیوان بیگی و خوشوقت قوشبیگی را به درجه شهادت رسانید و خود به جانور پرانی [و کبوتر بازی]<sup>۷</sup> مشغول شد و هم در آن وقت برادرش عبد الله خان که در ولایت تاشکند بر سریر امارت می نشست، او را به پیش خود طلب نموده، به دست خود آن نادیده جهان را به درجه شهادت رسانید. آری فنای هر موجودی از قبیل<sup>۸</sup> واجبات است و بقای هر ممکنی از مقوله ممتنعات است.

- ۱۵ شبان [د]
- ۱ × [ت]
- ۲ × [د]
- ۳ × [ت]، غازی [د]
- ۴ سرافرازی بخشید [د]
- ۵ ساخته [د]
- ۶ × [ت]، غازی [د]
- ۷ × [د]
- ۸ جمله [د]

از پرستاران جدا مانده<sup>۱</sup> و از خواب و<sup>۲</sup> خور بیگانه شده، نی همدم و همراز [و نی]<sup>۳</sup> دلیل چاره ساز در شب تار [هول انگیز]<sup>۴</sup> و بیابان بلا جوش و مرگ خیز سراسیمه و سرگردان به هر جا<sup>۵</sup> افتان و خیزان میرفتیم. با این همه<sup>۶</sup> زحمت گاه به یاد دوستان و گاه بر تنهایی<sup>۷</sup> و جدایی خود دامن دامن گوهر از دیده می افشاندیم<sup>۸</sup>، [چنانچه گفته اند.]<sup>۹</sup>

#### مثنوی

از هر مژده اشک آتشی‌نی      میریخت به هر گلی زمینی  
کردیم خروش بیخودانه      میرفت سرشک دانه دانه

هفت شبانه روز بدین مشقت مسافت بعیده و راه {۵۱۶ر} دراز که <۵۰۷ر> چون زلف مهوشان تیره و تاریک بود، قطع کرده، به هنگامی که صبح ثانی از جور روزگار ستم کیش نفس میشمرد، به مرغزاری رسیدیم، در غایت نزاکت و اشجارهای او سر به ثریا<sup>۱۰</sup> کشیده و چشمه های خوشگوارش<sup>۱۱</sup> از هر گوشه جوشیده و بیدهای<sup>۱۲</sup> زیبا به هر طرف غلطیده. چون به آن سر منزل<sup>۱۳</sup> رسیدیم، شکر حق تعالی<sup>۱۴</sup> را به جای آورده، سه شبانه<sup>۱۵</sup> روز در آن منزل

- ۱ گشته [ت]
- ۲ [ت][د]
- ۳ به [ت]
- ۴ هولناک [د]
- ۵ منزل [د]
- ۶ × [ت]
- ۷ تنهای [د]
- ۸ افشاندیم [د]
- ۹ × [د]
- ۱۰ [ت]، سریا [س][د]
- ۱۱ خوشگوار [د]
- ۱۲ بید مجنون؟ [ت]، سبزه های [د]
- ۱۳ زمین [د]
- ۱۴ × [ت][د]

[میرداشت]<sup>۱</sup> و آب چنان +<sup>۲</sup> قدر داشت<sup>۳</sup> که یک قطره آب<sup>۴</sup> در آن دشت خونخوار به جای صد قدح آب حیات میگذشت و قولن و بولن یعنی گوره خر دشتی و آهو چنان در آن بیابان بسیار بود که کاروانیان راه نمی یافتند که از میان گله گوره خر گذرند<sup>۵</sup> و بسیار صید میکردیم. در آن وقت هوا چنان گرم بود که (۵۶۷) از بی آبی وحشیان آن دشت گله گله به جای خود افتاده، بسیاری مرده بودند.

### مصراع<sup>۶</sup>

در تنور آفتابش میشود مرغان کباب

از تعفن آن جیفه ها چنان عالم را<sup>۷</sup> بو گرفته بود که از همه زحمت این مشقت تر بود. از دیده سیل سرشک خون در گشاد {۵۱۵پ} و از سوز دل فغان فلک <۵۰۶پ> شکاف بر داشتند. در آن صحرای خونخوار و بیابان بلا خیز از آه با دردناک<sup>۸</sup> و بیچاره گی میرفتیم، تا آن که بانوی چرخ به حجاب مغرب فرو شد و شب پرده ظلمانی بر رو کشید<sup>۹</sup> و از زلف محبوبان تیره تر شد. از سایه خود<sup>۱۰</sup> هراسیدن گرفتیم. هر برگ گیاه از دهنای خونخوار به نظر می در آمد و از مسند ناز و از<sup>۱۱</sup> چار بالش اقبال بر خواسته و از [پدر و مادر]<sup>۱۲</sup> آواره گشته و

۱ بر میداشت [د]

۲ به [د]

۳ بود [د]

۴ × [د]

۵ گذر کنند [د]

۶ ع [د]

۷ × [ت]

۸ درد [ت]

۹ × [ت] [د]

۱۰ خودها [د]

۱۱ × [د]

۱۲ پدر مادر [ت]، خان و مان [د]

به جرم خاک و<sup>۱</sup> فلک در نگاه باید کرد  
که این کجا است به<sup>۲</sup> آرام و<sup>۳</sup> آن کجا ز سفر

درخت اگر متحرک شدی ز جای به جای نه جور ارّه کشیدی و نی<sup>۴</sup> جفای تبر  
بعد از پنج منزل در موضع چو رسیدیم. لشکریان تاشکندی از آن جا از فقیر رخصت  
یافته، به جانب وطن مراجعت فرمودند. فقیر نیز از کل وهم برآمده، به شکر گذاری واجب  
تعالی مشغول شدم. و این بیت<sup>۵</sup> به زبانم جاری بود.

### بیت<sup>۶</sup>

غم روزی مخور بر هم مزن اوراق دفتر را  
که پیش از طفل خالق<sup>۷\*</sup> پر کند پستان مادر را

روز دیگر از آن جا کوچیده، بعد از سه منزل در موضع {۵۱۵ر} تلاس وارد <۵۰۶ر>  
گردیدیم و<sup>۸</sup> دو روز در آن جا از رنج راه بر آسودیم، روز چهارم کوچ کرده، رو در<sup>۹</sup> بیابان بد  
بخت آوردیم. الحق بیابانی بود، اسم با مسمّا در غایت<sup>۱۰</sup> بد بختی. خار مغیلانی دارد که در  
هیچ بیابانی نمی باشد، مگر آن جا. به<sup>۱۱</sup> پای چهار پایان رسیدن همان، از پا ماندن همان.  
سه شب و روز در آن بیابان بی پایان قطعا آب موجود نبود، هر کس به اشتر خود به مشک

- 
- |    |                    |
|----|--------------------|
| ۱  | × [ت]              |
| ۲  | ز [د]              |
| ۳  | × [ت]              |
| ۴  | نه [د]             |
| ۵  | نظم [ت]            |
| ۶  | × [د]              |
| ۷  | [د]، خالِق [س] [ت] |
| ۸  | × [ت] [د]          |
| ۹  | به [د]             |
| ۱۰ | غایتی [ت]          |
| ۱۱ | در [ت]             |

به درجه شهادت رسانیدند\*<sup>۱</sup>.

### بیت<sup>۲</sup>

<۵۰۵پ> تیری که اجل زند سپرها هیچ است  
این محتشمی و سیم و زررها هیچ است  
چندان کسه به روزگار در می نگریم  
نیکی +<sup>۳</sup> نیک است +<sup>۴</sup> [آن دیگرها] +<sup>۵</sup> هیچ است

{۵۱۴پ} چون کاروان نُوغی رسیدند، قریب پانصد کس از مردم بازرگان بودند و هزار اشتر پر بار در<sup>۶</sup> قطار داشتند. با آن صد سپاهی<sup>۷</sup> تاشکندی متوجه راه شدیم، چنانچه گفته اند.

### نظم

به شهر خویش درون مرد بی خطر باشد  
به کان خویش درون بی بها بود گوهر  
سفر مربی مرد است و آستانه جاه  
سفر خزانه مال است اوستاد هنر

۱۲ نازنین شان [ت][د]

۱۳ نازنین شان [د]

۱ [ت][د]، رسانید [س]

۲ × [ت]، قطعه [د]

۳ که [د]

۴ و [ت]

۵ دیگرها [د]

۶ × [د]

۷ سپاه [د]



چنانچه گفته است، هر که<sup>۱</sup> دست از جان بشوید، هرچه در<sup>۲</sup> دل دارد، بگوید. گاه محمد یوسف تونقاتر<sup>۳</sup> به فقیر آمده، میگفت که >احتمال دارد که [همین از برای]<sup>۴</sup> دخیل کرده باشد.< فقیر میگفتم.

### مصراع

<۵۰۵ر> در جان بازی چه جای بازی باشد

گاه از<sup>۵</sup> حرکت‌های او چنان خنده بر فقیر<sup>۶</sup> غلبه میکرد که در هیچ حال نکرده باشم و گاه در حال او {۵۱۴ر} چنان گریه مستولی میشد که در هیچ وقت نکرده باشم. به این رسوایی<sup>۷</sup> راه می پیمودیم. چون به منزلگاه<sup>۸</sup> خود نزول کردیم، بعد از ساعتی سپاهیان به پیش ما آمده، گفتند که محمد علی خان ماده<sup>۹</sup> به ما حکم کرده، فرستاده است که فاضل بیک را مع محمد یوسف تونقاتر به جانب خوارزم فرستانند. جناب شما را با همراهی کاروان به جانب ولایت اوروسیه روانه کنند. چون این خبر را شنیدیم، همه در بحر تحیر فرو رفتیم. نمیدانستیم که چه تدبیر کنیم. لا علاج خوش خوش هرچه گویند، قبول میفرمودیم. بعد از ساعتی از آن صد کس شش نفر آمده، فاضل بیک را مع محمد یوسف تونقاتر<sup>۱۰</sup> از ما جدا کرده، به سفر آخرت روانه کردند. چون به یک فرسخ زمین رسیدند، آن دو بیگناه را به امر محمد علی خان ماده<sup>۱۱</sup> سر [نازنین ایشان]<sup>۱۲</sup> را از تن [نازک آنها]<sup>۱۳</sup> به چندین خاری جدا کرده، (۵۶۶)

۱ کس [د]

۲ بر [د]

۳ [د]

۴ به من از برای [ت]، محمد علی خان سخن [د]

۵ به [د]

۶ من [ت]

۷ رسوای [د]

۸ منزلگاهی [ت]

۹ × [ت][د]

۱۰ [د]

۱۱ × [ت]، غازی [د]

بیت<sup>۱</sup>

سخت است پس از جاه تحمل کردن      خو کرده به ناز جور مردم بردن

و خود او در غایت شادی محفل آرای میگرد و<sup>۲</sup> از منصوبه<sup>۳</sup> فلک غدار بی خبر که فردا به سر او چه بازیچه می اندازد.

القصة. روز دیگر از آن جا سواری نموده، راه <۵۰۴پ> طی میگردیم. در اثنای راه رفتن<sup>۴</sup> همان مبارزی که محمد یوسف تونقاتر را همراه آورده بود، مخفی به فقیر گفت که <محمد یوسف تونقاتر<sup>۵</sup> هم جلای وطن شده است. (۵۶۵) {۵۱۳پ}> به خدمت شما عرض میکنم. > به مجرد شنیدن این سخن به فقیر چنان خنده غلبه کرد که قریب بود که از خود روم. چرا که در عصر امیر عمر خان محمد یوسف تونقاتر<sup>۶</sup> به فقیر و به<sup>۷</sup> محمد علی خان ماده<sup>۸</sup> و دیگر امرای ذوی<sup>۹</sup> الاحترام دخلک بود، بنابر آن آن سر را نگاه داشتن به فقیر متعذر بود. لا علاج تونقاتر را به پیش خود طلب نموده، صورت واقعه را بیان نمودم. حمل به دخل کرده، باور نکرد و<sup>۱۰</sup> بسیار مبالغه کردم. یقین او شد که او نیز رفیق ما بوده است. سر [را به جیب]<sup>۱۱</sup> تفکر فرو برد. بعد از ساعتی چنان گریه به او غلبه کرده بود که زلزله در زمین افتاد. زبان بر فحش محمد علی خان ماده<sup>۱۲</sup> دراز<sup>۱۳</sup> کرد. هر چند مردم مانع آمدند، مفید نه افتاد.

۱ × [ت]

۲ × [د]

۳ × [د]

۴ [د]

۵ [د]

۶ × [د]

۷ × [ت]، غازی [د]

۸ ذو [د]

۹ × [ت]

۱۰ در بحر [د]

۱۱ × [ت]، غازی [د]

۱۲ × [د]

بیت<sup>۱</sup>

<۵۰۴ر> رفتیم ما و درد تو بردیم یادگار      بریاد ما تو هم دل خود را نگاه دار

دل از ملک و مال برکندم. با رفاقت فاضل بیک مع صد کس + <sup>۲</sup> حاکم {۵۱۳ر} تاشکند + <sup>۳</sup> به ما همراه کرده بود، متوجه کشور غریبی شدیم.

## [بیت]

اگر پرسند که آن مسکین کجا رفت      بگو بگریخت از دسته زمانه<sup>۴</sup>

چون در لب دریای عرس رسیدیم، همان شب محمد یوسف تونقاتر مع یک سپاهی<sup>۵</sup> محمد علی خان ماده<sup>۶</sup> رسیدند. چون ایشان را دیدیم<sup>۷</sup>، امید از بوده نی خود صد بار کنسیم<sup>۸</sup> و از ایشان احوال پرسیدیم<sup>۹</sup>. گفتند، > ما را محمد علی خان ماده<sup>۱۰</sup> حکم کرده است که حکیم خان را تا<sup>۱۱</sup> ولایت ترکستان گسیل کرده بیایید. بنابر آن به خدمت شما آمدیم. < همان شب محمد یوسف میخواست، فقیر را به حکایت‌های دلکش و لطیفه‌های مرغوب غم از دل برآرد. اما فقیر حالتی داشتم که به هیچ تدبیر غم از دل نمیرفت، [به حکم آن که]<sup>۱۲</sup>

۱ × [ت]

۲ که [د]

۳ که [ت]

۴ × [ت][د]

۵ سپاه [د]

۶ × [ت][د]

۷ دیدم [د]

۸ کندم [د]

۹ پرسیدم [د]

۱۰ × [ت][د]

۱۱ با [ت]

۱۲ × [د]

<۵۰۳پ> چون نزدیک دیوان خانه دیدم که رسید، حله سبز در بر داشت {۵۱۲پ}  
و سله سرخ بر سر، [چنانچه گفته اند.]<sup>۱</sup>

### بیت (۵۶۴)

زین گلستان در کمین لاله زار دیگریم      عالمی محو گل و من داغ آن دستار سرخ

بلا توقف سپندوار از جای بر خواستم و در آغوش محبت تنگ در کنار گرفتم. چنان  
بر من حالتی روی داده بود که زار زار چون ابر نو بهار گریه میکردم و او نیز بر<sup>۲</sup> حال من گریه  
میکرد. بعد از ساعتی محفل گرم شد و تمام شب به یک دیگر غم و شاد میگفتیم و هر زمان  
به زبانم این بیت جاری بود، [چنانچه گفته اند.]<sup>۳</sup>

### بیت

تو چو میروی به<sup>۴</sup> پیشش به رخس نظاره کن      که امید باز گشتن کس از این سفر ندارد<sup>۵</sup>

خلص کلام این<sup>۶</sup> که همان روز اسباب سفر را حاکم تاشکند مهیا کرد. عظیم بای  
دادخواه و تنگری قلی شیغاول [و محمد یوسف تونقاتر]<sup>۷</sup> فقیر را گسیل<sup>۸</sup> کردند. فقیر نیز به  
آن سرو قد<sup>۹</sup> این بیت را + مکرر [کرده، وداع کردم].<sup>۱۱</sup>

۱ × [د]

۲ به [د]

۳ × [د]

۴ ز [ت]

۵ ندار [ت]

۶ آن [د]

۷ × [د]

۸ گوسیل [ت]

۹ وداع کردم [د]

۱۰ در وقت وداع [د]

۱۱ خوانده وداع کردم [ت]، میخواندم [د]

به خنده از ثریا نور میریخت      نمک از سینه<sup>۱</sup> پرشور میریخت

از بزرگ زاده های ولایت تاشکند بود. فقیر به او<sup>۲</sup> تعشقی داشتم که {۵۱۲ر} همه از این سر واقف بودند. در آن وقت چشم فقیر به پدر آن معشوق<sup>۳</sup> افتاد که به سر رشته<sup>۴</sup> + ما می پردازد. یقینم شد که حاکم تاشکند او را به محافظت ما تعیین کرده است. در حال او را در پیش خود طلب نمودم. از احوال فرزندش پرسیدم. در جواب گفت که<sup>۵</sup>، <دور روز میشود که خدمتکار شما از خوقند آمده است. به خواندن اشتغال دارد. > چون این نوید شنیدم، از شادی به پیراهن نمیگنجیدم. در حال محرم خود را به او همراه کرده، به پیش حاکم فرستادم. چون ایشان به پیش لشکر رفته، صورت واقعه را بیان نمودند<sup>۶</sup>، لشکر قوشبیگی بلا اهمال آن پری رو را به دیدن فقیر رخصت داد. همان شب [به انتظاری به سر]<sup>۷\*</sup> بردم. روز دیگر بود که چون آفتاب خاور با همراهی پدر از دور خرامان خرامان می آید<sup>۸</sup>، [چنانچه گفته اند].<sup>۹</sup>

#### رباعی<sup>۱۰</sup>

دیدم صنمی که با پدر می آید<sup>۱۱</sup>      از ترس پدر طرز دیگر<sup>۱۲</sup> می آید<sup>۱۳</sup>  
کاش آن صنم سرو قد سیم اندام      مانند مسیح بی پدر می آمد

۱      پسته [د]

۲      آن پری چهره [د]

۳      معشوقه [ت] [د]

۴      کار [د]

۵      × [د]

۶      فرمودند [د]

۷      [د]، انتظار می [س]، انتظاری می [ت]

۸      آمد [ت] [د]

۹      × [د]

۱۰      قطعه [د]

۱۱      آمد [ت] [د]

۱۲      دگر [د]

۱۳      آمد [ت] [د]

[چنانچه گفته اند.]<sup>۱</sup>مثنوی<sup>۲</sup>

در چرخ بو<sup>۳</sup> بین [و در]<sup>۴</sup> نوردش صد بوالعجبی<sup>۵</sup> به هر نوردش  
 <۵۰۲پ> از راز فلک جریده بگشای از هر بن موی دیده بگشای  
 بینای خط ز مـانـه می باش حیران نگار خانه می باش

چون از دریا عبور نموده، در موضع<sup>۶</sup> شهیدان وارد شدیم، در آن شب محمد یوسف تونقاتر که ندیم امیر عمر خان بود، با دو خدمتکار فقیر رسید. گفت، <محمد علی خان ماده<sup>۷</sup> فقیر را {۵۱۱پ} فرستاده است که خدمت شما را تا ولایت ترکستان گسیل کنم.> روز دیگر از آن جا کوچیده، به دو منزل به ولایت تاشکند (۵۶۳) رسیدیم و لشکر قوشبیگی به جای مناسب فرود آورده<sup>۸</sup>، به مهمانداری قیام نمود. قبل از این مقدمه در وقت خوقند بودن به خدمت امیر عمر خان جوانی بود، آفتاب سیما، پیرامون گلشنش سبزه خط نو دمیده و گرد رخس از خط مشکین معاینه، بر گرد ماه هاله دویده، قدش تازه نهالی در چمن شباب رسته و چهره بختش را روزگار به آب اقبال شسته، [چنانچه گفته اند.]<sup>۹</sup>

## مثنوی

کشیده قامتی چون تازه شمشاد به آزادی غلامش سرو آزاد<sup>۱۰</sup>  
 دو لعلش از تبسم در شکر ریز <۵۰۳ر> دهانش در تکلم شکر آمیز

- ۱ × [د]
- ۲ نظم [د]
- ۳ به [د]
- ۴ بهر [ت]
- ۵ بولعجبی [د]
- ۶ [د]، مواضع [س] [ت]
- ۷ × [ت] [د]
- ۸ آورد [د]
- ۹ × [د]
- ۱۰ آواز [ت]

ایشان همراه بود. چون چشم او به فقیر افتاد، دوید. به پیش فقیر آمد. در کمال آداب گفت،  
 <محمد علی خان ماده<sup>۱</sup> فقیر را به خدمت شما فرستاده است که از جانب من دل <۵۰۲ر>  
 شان را پر کن<sup>۲</sup>>، گفت، چند<sup>۳</sup> قسم های غلیظ یاد کرد و گفت، <جناب شما را نیز به حج  
 رخصت کرد.> و<sup>۴</sup> چون از او این سخن شنیدم، یک چیز اطمینان خاطر گشت.

### بیت

نوید<sup>۵</sup> باد صبا دوشم آگهی آورد که روز محنت و<sup>۶</sup> غم رو به کوتهی آورد

و آن عفریت منظران از ندیم محمد علی خان ماده<sup>۷</sup> این حرکت را دیدند<sup>۸</sup>. همه به  
 اکرام فقیر مبالغه نمودند. در حال اسب یورغه مهیا ساختند. فقیر سواری {۵۱۱ر} نموده، در  
 میان آن گله خوک میرفتم.

### مصراع

که میدان زمین جای وسیع است

چون از شهر بیرون شدیم، صبح دمید. در آن جا دیدم که فاضل بیک ابن ناربوتی بی  
 والنعمی که در حبس بود، او را نیز جلای وطن کرده، عظیم بای دادخواه و تنگری قل شیغاول  
 بر آورده، منتظر فقیر ایستاده بودند. فقیر ایشان را دیدم، به یک دیگر ملاقات کردیم.  
 دانستم که فقیر و فاضل بیک بیچاره بندی بودیم. امارت پناهان با دوصد کس جرار ما را  
 گسیل میکرده است. بعد گردن خار خار به پیش ایشان افتاده، متوجه دیار غربت شدیم،

- ۱ × [ت][د]
- ۲ کم [ت]
- ۳ [ت]
- ۴ × [د]
- ۵ برید [د]
- ۶ × [ت]
- ۷ × [ت]، غازی [د]
- ۸ دید [د]

بزرگ شخصی در غایت حسن و جمال ایستاده {۵۱۰ر} و دو مرد دیگر، ایشان نیز در غایت خوبی ایستاده اند. فقیر از دیگری<sup>۲</sup> سوال کردم که ایشانان کیستند. او گفت، >آن که تنها ایستاده است، حضرت محمد اند، علیه الصلوة و السلام و آن دو کس یکی عمر فاروق و یکی دیگر حیدر کرار ند، رضی الله عنهما.< چون این سخن را از آن شخص شنیدم، لرزه بر اندام افتاد. خواستم که به پای مبارک حضرت<sup>۳</sup> خیر البشر افتم. در حال >۵۰۱پ< از خواب بیدار شدم و حالت خود را دیگر گون یافتم. این خواب را از جمله رؤیای صالحه پنداشتم. به مضمون حدیث شریف، قال علیه السلام من رانی فی المنام فقد رانی فان الشیطان لا یتمثل بی، نه از قبیل اضغاث احلام بود. بعده دل بر بوده نی نهاده، منتظر خلاصی خود<sup>۴</sup> بنشستم.

#### نجات یافتن فقیر از قید محمد علی خان ماده<sup>۵</sup> و رو به غربت آوردن

در آن وقت بعد از گذشتن سه روز شبی از شبها قریب صبح با چندین غم و غصه روی نیاز به درگاه ذات اقدس آورده، می نشستم. ناگاه در بیرون چهار باغ آواز مردم بسیار شد و در آن حین بود که مردم بسیار {۵۱۰پ} شمشیرهای برهنه در کمال تعجیل آمده، دیوان خانه ای که فقیر نشسته بودم، درهای آن خانه را گرفتند. فقیر چون آن حال را مشاهده نمودم، هزار بار دست از جان شیرین شسته بودم، به حکم آن که

#### بیت

قتل این خسته به شمشیر تو تقدیر نبود      ورنه هیچ از دل بیرحم تو تقصیر نبود

(۵۶۲) در آن وقت بود که محمد علی خان ماده<sup>۶</sup> ندیمی داشت، بسیار مقرب در میان

۱ کمال [ت]

۲ کس دیگر [د]

۳ × [ت]

۴ × [ت]

۵ × [ت]، غازی [د]

۶ × [ت]، غازی [د]



به در قصر فقیر احدی نماند و بر طبیعت ایشان دارو از دو جانب چنان عمل کرده بود که مجال سخن کردن و حرکت کردن نبود و هر کدام ایشان به هر جا به چندین مشقت از پا در افتاده بودند. عاقبت چندی به کسل مهلک گرفتار شدند و چندی به هلاکت رسیدند و فقیر تماشا کنان خود را به نادانی انداخته، می نشستم. عاقبت آن خبر روز دیگر به محمد علی خان ماده<sup>۱</sup> رسید. آن ابله دو محرم را فرستاده، از فقیر سبب حدوث این واقعه را پرسید. <۵۰۱ پ. ح.> فقیر جواب دادم که فقیر را به ایشان سپرده بود. ایشان را به فقیر {۵۰۹ پ} نه سپرده بود که <sup>۲</sup>+ خبردار باشم. آن محرم از فقیر این جواب را شنیدند، به محمد علی خان ماده<sup>۳</sup> رفته، جواب فقیر را گفتند. آن ابله چیزی نگفت. روز دیگر به جای آن ملعونان مریض دیگر سگان آمدند. اما آن حادثه را ابلهان ندانسته، نوع جدا تصرف میکردند. بنابر آن دیگرانی که بودند، از ترس خود به خدمت فقیر مبالغه مینمودند.

نکته سنجان بلاغت را پوشیده نماند که هر چند این سخن در این جا در سلک تحریر آوردن حاجت نبود، اما به سببی نوشته شد، امید این که به کرم قبول +<sup>۴</sup> عفو فرمایند. <۵۰۱ ر> القصه. چهار ماه به این طریقه در حبس محمد علی خان ماده<sup>۵</sup> ماندم و هر شب (۵۶۱) به مشام پیام مرگ میرسید. به چندین ترس و هراس عمر میگذرانیدم. اتفاقا شبی از شبها در غایت ملول و محزون نشستم و میگفتم.

### بیت

دولت گیتی که تمنا کند      با که وفا کرد که با ما کند

اتفاقا چشمم را خواب در ربود. در عالم رؤیا چنان مشاهده نمودم که بر لب دریای

۸ گردیدند [ت]

۱ × [ت]، غازی [د]

۲ از احوال ایشان [ت]

۳ × [ت]، غازی [د]

۴ فرموده [ت]

۵ × [ت]، غازی [د]

{۵۰۸پ} و آن عفريت منظران که در محافظت فقير مامور بودند، شب به دور کوشک مشعل ها روشن کرده و آتش ها افروخته و شمشيرهای<sup>۱</sup> <۵۰۱ر> عربان به دست گرفته، تا صبح دور مسکن فقير را چرخ زده، به های و<sup>۲</sup> هوی بسيار صبح ميکردند و روز اين چنين پاسبانی ميکردند. <۵۰۱ر.ج.> در آن وقت بود که در طبيعت فقير ثقلی عارض گشته بود. خواستم که آن ماده را به واسطه<sup>۳</sup> مسهل از خود رفع کنم. بنابر آن محرم خود را از بهر دوا به بازار فرستادم. آن محرم گرنگ از روی نادانی قريب دويست عدد حب السلاطين آورده بود. اتفاقاً در آن وقت فقير از بهر طهارت بيرون خراميده بودم. چون چشم فقير به پاسبانان افتاد، نيك ملاحظه کردم که همه<sup>۴</sup> ايشان را خواب غفلت در ربنده است و بر يک ديگ بزرگ شورباي بي صاحب ميچوشد. الا فقير آن جا پشه ای پر نميزند<sup>۳</sup>، خواستم که فرار اختيار نمايم. باز مردی دامنگير خيال شد. از بهر اين سودا گزشتم<sup>۴</sup> و هم در آن وقت (۵۶۰) در طبيعت فقير چنان شوخی استيلا يافته بود که هيچ تدبير دفع آن موجود نميشد. لا علاج {۵۰۹ر} همان دو صد دانه<sup>۵</sup> حب الملوک را آهسته آورده، در ديگ ايشان انداختم. خود در کمال اوستاگی به جای خود مراجعت نموده، فارغ البال خود را به نادانی انداخته، نشستم. احدی پي نبرد، [به حکم آن که]<sup>۵</sup>

## مصراع

خطای رسمیده دیرلار که لؤ تجمله لؤ

القصة. آن گمراهان از خواب غفلت بيدار شده، در کمال اشتها آن شوربا<sup>۶</sup> را تناول فرمودند. بعد از ساعتی هر کدام ازار<sup>۷</sup> خود را در بغل گرفته، اختيار کنج چهار باغ کردند<sup>۸</sup>.

۱ شمشیرها [د]

۲ × [ت] [د]

۳ نمی زد [ت]

۴ گذشتیم [ت]

۵ × [د]

۶ [ت]، شورباها [س] [د]

۷ ايزار [ت]

قطعه<sup>۱</sup>

به سالهای فراوان عمرهای دراز  
 که خلق بر سر ما بر زمین بخواهد رفت  
 چنان که دست به دست آمده است ملک به ما  
 به دستهای دیگر<sup>۲</sup> همچنین بخواهد رفت

بعد از ساعتی باز<sup>۳</sup> همان غلام بچه از بیرون شادی کنان [آمد و]<sup>۴</sup> گفت، همان ده  
 کس در حین داخل شدن بودند که چندی از محرمان محمد علی خان ماده<sup>۵</sup> در غایت سرعت  
 آمده، ایشان را باز پس بردند<sup>۶</sup>. این نوید را شنیده، به شکرانه<sup>۷</sup> حضرت<sup>۸</sup> ایزد تعالی مشغول  
 شدم و این قطعه را به حسب حال خود<sup>۹</sup> میخواندم.

بیت<sup>۱۰</sup>

دو روز حضر<sup>۱۱</sup> کردن از مرگ روا نیست  
 روزی که قضا باشد و<sup>۱۲</sup> روزی که قضا نیست  
 روزی که قضا باشد کوشش نکند سود  
 روزی که قضا نیست در او مرگ روا نیست

- 
- |    |                  |
|----|------------------|
| ۱  | نظم [د]          |
| ۲  | دگر [د]          |
| ۳  | [د]              |
| ۴  | آمده [ت] [د]     |
| ۵  | × [ت] [د]        |
| ۶  | برد [ت] [د]      |
| ۷  | × [ت] [د]        |
| ۸  | × [د]            |
| ۹  | قطعه [ت] [د]     |
| ۱۰ | حذر [ت]، حذر [د] |
| ۱۱ | × [ت]            |

و همان شب نیم از شب گذشته بود که غلام بچه ای داشتم. از بیرون گریه کنان آمد<sup>۱</sup>. گفت، > مدت ها میشود که ده جلاد خونخوار با شمشیرهای برآ به بیرون کوشک آمده اند، به قتل شما به یک دیگر تکلیف میکنند. به<sup>۲</sup> پیش در ایستاده اند. اما [هیچ کدام یک] <sup>۳</sup> از ایشان جرأت کرده، قدم پیش نمی مانند. < فقیر این سخن را<sup>۴</sup> از غلام بچه شنیدم. فی الفور این بیت به زبان جاری شد، [چنانچه گفته اند. #<sup>۵</sup>

بیت<sup>۶</sup>

[ای بر قتلتم مگر کرنی ملازمت قصد غریبی کردن نازک خیالی بسته

{ ۵۰۸ } و هم گوید،<sup>۷</sup>

مگر تیغ اورسه اول ظالم بویون سونمی<sup>۸</sup> [نیتای آخر]<sup>۹</sup>  
نه ینگلیغ کیلسه بوی نین تولغتای<sup>۱۰</sup> حقنی قضاسیدین

(۵۵۹) سپندوار از جای +<sup>۱۱</sup> بر جستم. آفتابه ای بود، پر آب. بلا توقف > ۵۰۰ پ<  
طهارت کردم و<sup>۱۲</sup> دو رکعت نماز نفل ادا نمودم. منتظر مرگ نشسته، میگفتم.

۱ آمده [ت][د]

۲ × [د]

۳ هیچ کدام یکی [ت]، یکی [د]

۴ × [د]

۵ [ت]

۶ × [ت]

۷ × [ت][د]

۸ نمای [د]

۹ نیتی کتی [ت]

۱۰ تولغتی [ت]، تولغتار [د]

۱۱ خور [ت]

۱۲ × [د]

## بیت

صبحی که آفتاب عالم افروز      سر<sup>۱</sup> شب را جدا کرد از تن روز

و محمد علی خان ماده<sup>۲</sup> دو صد افغان و مروی بی پیران که هر کدام ایشان عمر سعد و  
شمرذی الجوشن را یکی از غلامان خود شمردندی، از پیش محمد علی خان ماده<sup>۳</sup> مرخص  
شدند. در کمال تعجیل آمده، [و در]<sup>۴</sup> قصر فقیر را چون حلقه میم در میان گرفته، به  
محافظت فقیر پرداختند و از آن چهل محرم چهار محرم {۵۰۷پ} باقی ماند. دیگر همه راه  
خانه خود را پیش گرفتند<sup>۵</sup>، به حکم آن که

بیت<sup>۶</sup>

ز بی دولت گریزان باش چون تیر      وطن در کوی صاحب دولتان گیر

<۵۰۰> ر آنی که نمک خورده بود و بوی وفا در مشام او رسیده بود، آمده، میدیدند  
و احوال می پرسیدند و آنی که نمک حرام بود و از وفا بوی نبرده بود، سراغ ما را نمیکرد،  
چنانچه گفته اند.<sup>۷</sup>

## قطعه

هوای جهان را صفایی<sup>۸</sup> ندیدم      جهان وفا را هوایی ندیدم  
به پایان رسیده شب عمر و<sup>۹</sup> هرگز      ز شمع امانی ضیایی ندیدم

۱ سری [د]

۲ × [ت]، غازی [د]

۳ × [ت]، غازی [د]

۴ دور [د]

۵ گرفت [ت] [د]

۶ × [ت]

۷ است [د]

۸ صفای [د]

۹ [ت] [د]

بیت

سعدیا راست روان گوی سعادت بردند راستی کن که به منزل نرسد کج رفتار

۱+

بزرگان از فقیر این سخن را شنیدند، همه نا امید گشتند. فقیر در حال ایر نظر بیک را طلبیده، ولایت را به او سپردم. به جای خود نشانده، با چهل محرم متوجه خوقند شدم، چنانچه گفته اند.

بیت

مرغ دست آموز را چندان که کس دور افکند

با نشاط بال آید باز چون گویی<sup>۲</sup> بیا

در کمال تعجیل از دریای سیحون عبور نموده، نیم از شب گذشته بود که به نزدیک خوقند آمدم و این خبر را محمد علی خان ماده<sup>۳</sup> و جمع <۴۹۹پ> امرای او شنیده، انگشت حیرت به دندان گزیدند. {۵۰۷ر} چرا که از فقیر در هیچ وقت این امید نداشتند،<sup>۴</sup> عاقبت چهل سوار جرار به استقبال فقیر فرستادند و ایشان یک فرسخ<sup>۵</sup> از خوقند بیرون به فقیر دوچار آمده، در غایت آداب ملازمت کردند و در آن صحرا در بیرون شهر فقیر چهار باغی داشتم، مسمی به نوبهار. (۵۵۸) در کمال خوبی و نزاکت. در آن جا عمارت ساخته بودم، بسیار عالی. در آن منزل نزول کردم. بامداد که سوار سپاه مردان افلاک سنان شعاع افروز تیغ خون آشام روز لشکر خسرو انجم را هزیمت داد و آفتاب خاوری<sup>۶</sup> نیزه های قهر راست کرده، سپر خونخواری بر او کشید.

۱ سعد یا راست رون گوی دهرت دهر راستی کن که به منزل [س] [د]

۲ گوی [د]

۳ × [ت]، [غازی] [د]

۴ آدمی زاده گی را به این درجه به جا می آرم [ت]

۵ فرسنگ [ت]

۶ خاور [ت]

اکنون صلاح دولت آن است که ایر نظر بیک را دستگیر نموده، [کل کشتی ها]<sup>۱</sup> را به این جانب دریا کشیده، +<sup>۲</sup> منتظر محاربه شدن بهتر می نماید. از بس که هوا در غایت سردی و برودت است، از دریا عبور نمودن او از عقل بیرون است و دیگر محمد رحیم دیوان بیگی پسر امیر عالم خان ابراهیم خان که به اتالیق خان اشتها دارد، در قلعه دهکت انداخته، ولایت (۵۵۷) خجند را به تنگ آورده است +<sup>۳</sup> و بسیاری امرا و امرزاده های خوقند به پیش فقیر بود<sup>۴</sup>. بنابر آن دولتخواهان فقیر +<sup>۵</sup> از حد زیاده مبالغه نموده، التجا مینمودند که در این وقت محمد علی خان ماده<sup>۶</sup> را به هیچ حال حرکت کردن صورت نمی بندد و فرصت را از دست داده، خود را به مهلکه انداختن شما از حکمت دور است، چنانچه گفته اند.

### بیت

وقت هر کار نگهدار که در آخر کار آه سودت نکند ناله به جای نرسد

{۵۰۶پ}> ۴۹۹ر< فقیر از امرای خود این سخن را شنیدم، در بحر تحیر فرو رفتم. بعد از اندیشه بسیار گفتم، >من به هیچ کس بدی نکردم و بدی هم نمیکنم، انشاء الله تعالی و در راه خود راست هستم. هر کس کج باشد، جزای او را واجب تعالی خواهد داد. از برای یک نفس خود عالمی را به اضطراب انداختن مناسب خود نمی بینم +<sup>۷</sup> و این بد نامی را هم به هیچ حال به گردن نمیگیرم، <گفته، این بیت را خواندم. +<sup>۸</sup>

۱ و کلی کشتی ها [ت]، کل کشتی [د]

۲ تابعات خوقند را تاخته و تاراج کرده [ت]

۳ اتالیق خان را طلب نموده، بر بستر حکومت نشاندن در کار است [ت]

۴ بودند [د]

۵ به آوردن اتالیق خان [ت]

۶ × [ت]، غازی [د]

۷ و هم از آوان طفولیت تا وقت شبابی بر یک لحف خوابیده، از محمد علی خانی مادر زن چه دیدم

که از؟ (ناخوانا). خلص کلام آن که، [ت]

۸ این است [ت]

کس معتمد خود را از<sup>۱</sup># بهر احوال گرفتن به پیش فقیر فرستاد. در آن وقت به نزد فقیر چهار هزار مبارز جرار موجود بود و آن امارت پناه به بست کس آمده بود. چون دو دولتخواه<sup>۲</sup> + به نزد فقیر آمده، گفت که جناب قبله گاهیتان دست از کار سپاهی گری باز داشته، [اراده حج کردند و]<sup>۳</sup> به مصلحت محمد علی خان ماده<sup>۴</sup> امارت این ولایت را به ایر نظر دیوان بیگی تفویض نمودند و اینک امارت پناه در بیرون [ایستاده است]<sup>۵</sup>.

### ذکر گرفتار شدن فقیر بی جنایت در حبس محمد علی خان ماده<sup>۶</sup>

چنانچه گفته اند.

#### بیت<sup>۸</sup>#

در باب من ز روی حسد یک دو ناسپاس      دمها زدند کوره تذویر تافتند<sup>۹</sup>  
و اندر شب ظلام به سعی کمال فکر      موی غرض به ناوک حیلت بتافتند  
رغمأ با هم همه نیکی به من رسید      ایشان جزای فعل بد خویش یافتند

و چون این خبر را فقیر شنیدم، دانستم که چرخ زنگاری چه شعبده {۵۰۶ر} بر سر من<sup>۱۰</sup>\* سرگشته بر پا [کرده است]<sup>۱۱</sup>. با وجود دانستن، از جهت حق بودن، <۴۹۸پ> بلا اهمال به استقبال کس فرمودم و امرای فقیر جمع شده، گفتند که فلک شیوه دیگر انگیخت.

- ۱ [ت]
- ۲ او [ت]
- ۳ × [ت]
- ۴ × [ت]، غازی [د]
- ۵ رسیده است [ت]
- ۶ × [ت]
- ۷ × [ت]، غازی [د]
- ۸ [ت]
- ۹ [د]، یافتند [س] [ت]
- ۱۰ [د]، منی [س] [ت]
- ۱۱ کرد [ت]



قطعه<sup>۱</sup>

سفر کن چو جای تو ناخوش بود      که هنجار گفتن بدان ننگ نیست  
<۴۹۷پ> و گر تنگ گردد ترا جایگاه      خدای جهان را جهان تنگ نیست

بعد از طی مسافت در آن ولایت رسید. این خبر را محمد رحیم خان شنیده، به استقبال ایشان پسر خورد خود را<sup>۲</sup> که رحمان قلی خان نام داشت، مع چندی از امرا امر نمود و ایشان جناب قبله گاهم را به عزت تمام در ولایت خیره رسانیدند و محمد رحیم خان از جای خود بر خواسته،<sup>۳</sup> چند قدم پیش آمده، در کنار مرحمت خود کشید و مهربانیهای بی اندازه کرده، به جای مناسب تعیین نموده، به مهمانداری مشغول گشت، [چنانچه گفته اند].<sup>۴</sup>

## بیت

(۵۵۶) مسافر را مجاور به جان پرورد      که نام نکویش به عالم برد

در آن آوان که جناب قبله گاهم را از خوقند بیرون کردند، با چندین اندیشه و تأنی ایر نظر دیوان بیگی را به جای فقیر {۵۰۵پ} فرستادند و آن امارت پناه از محمد علی خان ماده<sup>۵</sup> رخصت اجازت یافته<sup>۶</sup>، دست از جان خود هزار بار شسته، <۴۹۸ر> لاحول گویان متوجه<sup>۷</sup> توره قورغان شد. چون از دریا عبور نمود، به نزدیک آن ولایت فرود آمد<sup>۸</sup>.<sup>۹</sup> دو

۱ رباعی [د]

۲ × [ت]

۳ و [ت]

۴ به حکم آن که [د]

۵ مادر زن [ت]، غازی [د]

۶ یافت [ت]

۷ ولایت [ت]

۸ آمده [د]

۹ و [ت]

## بیت

پس از گل باغبان بیحرمتی بیند عجب نبود  
سزایش این بود از همنشینان زنده میماند

<۴۹۷ر> در آن وقت حق قلی بی را طلب نموده، کمر مرصع خود که به او شش هزار طلا خرج شده بود، از میان گرفته، داد که هر کس به ما حقی داشته باشد، بدهند. در آن حین فوجی از معتمدان محمد علی خان ماده<sup>۱</sup> آمده، عرض کردند که جناب شما را به حج رخصت دادند. مهربان شده، تشریف فرمایند. جناب قبله گاهی نیز قبول نموده، متوجه تاشکند شد. از تعاقب جناب شان هرچه لازمه سفر است، محمد عالم محرم باشی نام خدمتکار نمک حلال<sup>۲</sup> با یازده کس گرفته، به ولایت تاشکند رسید. از آن جا سواری نموده، به ولایت یسی که حالا به ترکستان اشتهار دارد، وارد گردیدند.

## مصراع

هر که بر دور بتی پیمانه ای نوشید و<sup>۳</sup> رفت

{۵۰۵ر} دو سه روز در آن جا به زیارت جناب قطب الاولیا خواجه احمد یسوی بود، بعده<sup>۴</sup> از آن جا کوچیده، به قافله خوارزم متوجه ولایت اورگنچ شد<sup>۵</sup>، به حکم آن که [گفته اند].<sup>۶</sup>

۱ مادر زن [ت]، غازی [د]

۲ بود [ت]

۳ × [ت]

۴ بعد [ت]

۵ شدند [د]

۶ × [د]

بیان نمودند. جناب قبله گاهی<sup>۱</sup> دانست که فلک کج رفتار غدار چه منصوبه<sup>۲</sup> نو بر پا کرده است. در جواب ایشان گفت، >محمد علی خان ماده<sup>۳</sup> عین مدعای دل ما را گفته است، عمری است، به همین آرزو بودیم. اما میسر نمیشد. حالا <۴۹۶پ> شده است. بسیار خرسند شدیم.<

### مصراع

بر زبان بود ترا آنچه مرا در دل بود

>اما خود +<sup>۳</sup> رفته، از محمد علی خان ماده<sup>۴</sup> فاتحه گرفته، بعد اراده<sup>۵</sup> بیت الله میکنم.<<sup>۵</sup> گفته، متوجه قصر او شد. هر چند آن دو سردار مانع آمدند، مقبول نشد. چون به قصر محمد علی خان +<sup>۶</sup> جناب قبله گاهم رسید<sup>۷</sup>. این خبر را محمد علی خان ماده<sup>۸</sup> شنیده، انگشت تحیر به دندان گزید و چنان ترس غلبه کرده بود که چون برگ بید میلرزید. امرایی که در پیش او بودند، دیدند که وهم بر طبیعت او بسیار مستولی شد. لا علاج بیرون دویده، جناب قبله گاهم را در دیوان خانه<sup>۹</sup> امیر در آوردند. قریب دو ساعت آن جا {۵۰۴پ} بود<sup>۱۰</sup> و چون مهم سازان (۵۵۵) کار خانه<sup>۱۱</sup> تقدیر مهر منیر را در قصر سپهر مستدیر به نهان خانه<sup>۱۲</sup> مقرر رسانیدند. چون این حال را جناب قبله گاهی مشاهده نمودند<sup>۱۳</sup>، دست از جان شیرین شسته و این بیت را میخواندند، [به حکم آن که]<sup>۱۴</sup>

- ۱ قبلگاهی ام [د]
- ۲ مادر زن [ت]، غازی [د]
- ۳ ما [ت]
- ۴ مادر زن [ت]، غازی [د]
- ۵ میکنیم [ت]
- ۶ مادر زن [ت]، غازی [د]
- ۷ رسیدند [د]
- ۸ مادر زن [ت]، غازی [د]
- ۹ بودند [د]
- ۱۰ نمود [ت]
- ۱۱ چنانچه گفته اند [ت]، × [د]

خیبثت زبان به غیبت<sup>۱</sup> ما گشادند. در این نوبت سخن ایشان موافق طبع آن شمر مشرب افتاد.

## قطعه

{۵۰۳پ} میندیش در حق مردم بدی      که آری بلا بر سر خویشان  
نه بینی که رنج فراوان کشد      که چاهی کند بهر من چاه کن

(۵۵۴) و بدان امر هم داستان شد و هم در آن روز سید دادخواه و سمندر بی را به خدمت جناب قبله گاهم<sup>۲</sup> فرستاد که در زمان <امیر عالم خان> <۴۹۶ر> و امیر عمر خان< بارها اراده بیت الله کردند. جناب شانان رخصت اجازت ندادند. حالا از جناب سیادت پناهی دوست و دشمن [به ما هرچه]<sup>۳</sup> گفته اند، اکنون مناسب این مینماید که به جانب مکه معظمه تشریف فرمایند<sup>۴</sup>، گفت. چون به خدمت قبله گاهم آن دو مبارز را فرستاد و<sup>۵</sup> ایشان از پیش محمد علی خان ماده<sup>۶</sup> رخصت اجازت یافته، متوجه چهار باغ فقیر شدند.

## بیت

من در اندیشه که چون سایه کنم بر سر او      او در آن غم که چه سان بر کندم بنیادم

اتفاقا جناب قبله گاهم از باغ در شهر تشریف داشتند. در اثنای راه دوچار آمدند. ایشان جناب قبله گاهم را دیدند. از اسب فروز آمده، تعظیم کردند و بر اسب خود سواری {۵۰۴ر} نمودند. بعده جناب قبله گاهم از ایشان احوال پرسیدند<sup>۷</sup>. ایشان صورت واقعه را

- 
- |   |                 |
|---|-----------------|
| ۱ | غیب [ت]         |
| ۲ | معصوم خان [ت]   |
| ۳ | هرچه به ما [ت]  |
| ۴ | فرماید [ت]      |
| ۵ | × [ت]           |
| ۶ | × [ت]، غازی [د] |
| ۷ | پرسید [ت]       |

مرصع خاصهٔ امیر با یرلیخ حکومت توره قورغان و<sup>۱</sup> نمنگان و<sup>۲</sup> کاسان انعام نموده، رخصت اجازت داد. چون فقیر از محمد علی خان ماده<sup>۳</sup> مرخص شدم، مع سید غازی خواجه فیضی و سید قلی دیوان بیگی متوجه آن ولا شدم. از دریای سیحون عبور نموده، در ولایت توره قورغان وارد گردیدم. به امارت آن مملکت {۵۰۳ر} قیام نموده، به سر رشتهٔ رعایا و سپاه شدم.

قصه کوتاه. چون در عصر امیر عالم خان و امیر عمر خان بسیاری مصلحت ملکی به جناب قبله گاهم<sup>۴</sup> راجع میشد، بنابر آن آتش رشک و حسد که لازمهٔ ذات اکثر جاه و جلال است، <۴۹۵پ> در کانون سینه سایر ارکان دولت خصوصاً چند ملعون شمر نژادان بودند که به همگی همت متوجه آن بودند که به صرصر غمز و سعایت نهال کامرانی ملک شجرهٔ زندوگانی<sup>۵</sup> جناب قبله گاهم را و فقیر را پژمرده و بیطراوت سازند.

#### بیت<sup>۶</sup>

مبادا در پی هیچ آفریده      زبانها پر غرض گردن کشیده  
گل فرصت ز خار وقت چیدند      صلاح کار در افساد دیدند

و جویبار اعتبار و اختیار ما را به خاک مذلت و ادبار انباشته، زمام مصلحت ملک را به قبضهٔ اقتدار خودها در آرند<sup>۷</sup>. اما در زمان خلافت امیر عمر خان فردوس مکانی اصلاً تدبیر ایشان به هدف مراد نرسیده بود. در اوایل ایام حکومت محمد علی خان ماده<sup>۸</sup> از غایت

۱ × [د]

۲ × [د]

۳ مادر زن [ت]، غازی [د]

۴ معصوم خان [ت]

۵ زندگانی [د]

۶ × [ت]، قطعه [د]

۷ آورند [ت]

۸ مادر زن و [ت]، غازی [د]

وظیفه آن که طایفه ای از فضلا که هر کدام در کتابهای خود نوعی قصه بیان فرموده اند، فقیر نیز غریب و حوادث عالم بوقلمون را که به سر فقیر آورده بود، بی کم و کاس لباس عبارت و کسوت استعارت پوشانیده، در سلک قصه کشیدم. الحمد لله به منزل مقصود رسیدم، آری،

### مثنوی<sup>۲</sup>

ز من بالاتران این نقل گفتند      به بازوی کسان این نقل سُفتند  
به دولت داشتن<sup>۳</sup> اندیشه را پاس      نشاید لعل سفتن جز به الماس

### {۵۰۲ پ} نظم<sup>۴</sup>

هر که آمد حکایت نو ساخت      علم و دانش از سخن افراخت  
چون بهار حیات او دی شد      نامه ز ندوگانیش<sup>۵</sup> طی شد  
دیگری گلشن سخن آراست      داستان نو و کهن پیراست

هو الله الموفق و المعین.

مجمّل سخن این که <۴۹۵ ر> چون محمد علی خان ماده<sup>۶</sup> (۵۵۳) بر سریر حکومت نشست، مهمات امور ممالک فرغانه را به امرای ذوی الاحترام وا گذاشت و خود آمادۀ لهو طرب گشت. بعد از هشت روز به فقیر اسب کوه پیکر هامون نورد مع جبدوق کندل خاصۀ امیر عمر خان را با همراهی بورک مروارید دوزی و پوستین روباه سیاهی<sup>۷</sup> او را مع کمر

۱ × [د]

۲ قطعه [د]

۳ داشتند [د]

۴ مثنوی [د]

۵ زندگانیش [د]

۶ مادر زن [ت]، غازی [د]

۷ سیاه [د]

به هر سو میروم نام و نشان خود نمیدانم  
 چو مرغ پی پرو بال آشیان خود نمیدانم  
 به غارت رفته عشقم فغان خود نمیدانم  
 خمار آلوده ام سود و زیان خود نمیدانم  
 به یک پیمانه سودا میکنم دنیا و عقبی را

{۵۰۲ر} <۴۹۴پ.ح. > چه میپرسی ز شوق انتظار خاطر محزون

منم جویان خلاق که هست او قادر<sup>۱</sup> بیچون  
 چرا پیوسته می نالی به کوه وادی<sup>۲</sup> هامون  
 که از عشق حقیقی نیست دردی بر سر مجنون  
 به چشم آهوان مشکن خمار چشم لیلی را

ز دیوان سخن گر بشنود هنگامه صایب  
 برد باد صبا در کوی جانان نامه صایب  
 اگر از بحر می آرد برون علامه صایب  
 در آن کشور که گردد گوهر افشان خامه صایب  
 رگ ابر بهاران میکند طومار دعوی را

<۴۹۵ر.ح. > خداوندا پیدا است که از دل شکسته چه آید و از دست فرو بسته چه

گشاید. الهی.

### بیت

هر چند نباشد سخنم را سرو بن      از چاشنی قبول بی بهره مکن

۱      قادیر [ت]

۲      وادیه [ت]

نگه از پای + بیرون آورد<sup>۲</sup> خار تمنی را

محبت پیشه را سوی تو میلی میشود و نه  
 خراب از شوخی حسن<sup>۳</sup> تجلی میشود و نه  
 اگر یابد کسی وصلش طفیلی میشود و نه  
 به اندک نسبتی عاشق تسلی میشود و نه  
 به آهو نسبت دور<sup>۴</sup> است چشم شوخ لیلی را

غبار من چو صبح از هر طرف سعی نفس دارد  
 که برد امان آن خورشید تابان دست رس دارد  
 فغان و ناله ام در گوش آواز جرس دارد  
 توجه بیشتر از عاشقان با بوالهوس<sup>۵</sup> دارد  
 کریمان دوست میدارند مهمان طفیلی را

چه میپرسی ز احوال من مجنون سرگردان  
 ز دست خوب رویان دل به غارت داده هجران  
 به صد محنت رساندم خویش را در کوی آن جانان<sup>۶</sup>  
 به حمد الله نمردم آن قدر کز گردش دوران  
 (۵۵۲) قدح در دست مینا در بغل دیدیم تقوی را

۱ که [ت]

۲ برد [ت]

۳ حسنی [ت]

۴ دوری [د]

۵ بولهوس [د]

۶ جهانان [ت]



قطعه<sup>۱</sup>

ز صایب که این یک غزل را بخواست      به ذیل<sup>۲</sup> مخمس بیاراست راست  
بود این مخمس از آن شهریار      که اشعار صایب شد آینه دار

مخمس<sup>۳</sup>

خیال عارضت از دل برد فکر تسلی را  
کشد رمز تکلم در جنون ارباب معنی را  
به جان بخشی لبّ باطل کند اعجاز عیسی را  
صفای ساعدت نیلی شمارد دست موسی را  
بناگوش تو سازد تازه ایمان تجلی را

چه مضمون داشت یا رب سر بیاض نامه قاصد  
که عَقلَم بر جنون زد در هوای جلوّه شاهد  
محبت فیض ها دارد که این جا غافل است عابد  
طریق عقل را بر عشق رجحان میکند زاهد  
عصایی بهتر از صد شمع کافوری<sup>۴</sup> است اعمی را

{۵۰۱پ} <۴۹۴پ> مرا در خاک و خون افکند یاد چشم فتانش

به دل پرورده ام عَمری هوای زخم پیکانش  
فرنگی زاده دین بیگانه و ابرو کمان خوانش  
به چندین سوزن الماس حیران است مژگانش

۱ × [ت]، مثنوی [د]

۲ [ت]، ذیل [س] [د]

۳ × [ت]

۴ [د]، کافور [س] [ت]

قامتیغه جنت ایچره بنده طوبی گوییا  
 بل مسیح انفاسیدین دور [که علو] <sup>۱</sup> اولوب آب بقا  
 بو چمن اوزره مگر کیم پیشه سی بولمیش <sup>۲</sup> حیا  
 ایکیلور گلبن کبی گلشنده اول گلگون قبا  
 کیم خرام ایلارده نخل ارغوان دیرلارانی

قهر ایتکان چاغده توغریدور تفنگی کوگسیمه  
 اوق آتر گر بولسه یوق ایرمیش درنگی کوگسیمه  
 <۴۹۴ر> ایل کمان ایلار کورنده داغ رنگی کوگسیمه  
 غمزه دین هر دم تیگار مژگان خدنگی کوگسیمه  
 ناز پرور دلربا ابرو کمان دیرلارانی

اول جفا جو بستر ناز اوزره گاهی یاستانیب  
 گاه گاهی کوز آجیب ناز اویقوسیدین اویغانیب  
 {۵۰۱ر} ناز و انداز و کرشمه برله هریان تولغانیب  
 سرمه دین کوزلار قرا دور عارضی گلگل یانیب  
 باغ ارا قویسه قدم سرو روان دیرلارانی

عارضینگدین ظاهر اولمیش هر زمان فیض چمن  
 نکهت زلفینگدین ایرمیش دور خجل مشک ختن  
 (۵۵۱) نقطه خالینگ زخندانینگده دور ای سیمتن  
 خضر خطینگ چشمه حیوان اوزه توتمیش وطن  
 کیم مسیح و خضرغه دار الامان دیرلارانی

۱ سو [ت]، که [د]

۲ اولمیش [ت]

(۵۵۰) در محمل شوق تو دل فریاد دارد چون جرس  
نی عشق دانم نی هوس شوق توام سرماییه بس  
ای صبح یک عالم نفس اندیشه هر<sup>۱</sup> مسکنت

دیوانه شوق تو دل دارد سراغت کو به کو  
لیکن نشان منزلت پیدا نشد از هیچ سو  
<۴۹۳پ> هم ظاهر و هم باطن<sup>۲</sup> خلقی است اندر جستجو  
حسن حقیقت رو برو سعی فضول آینه جو  
بیدل چه پردازد بگو ای یافتنها جستنت

### { ۵۰۰پ } مثنوی

پری پیکری را که دل خواستش      به وصف مخمس بیاراستش  
بود این مخمس ز بیداد آن      که تیغ جفا میزند هر زمان  
که جور بتان جمله راحت بود      ستم گر نماید مروت بود

### مخمس

منگا یتکان ناوکینگ آرام جان دیرلارانی  
زخم لار کیم تنده دور داغ نهان دیرلارانی  
دلده قالغان قانلو پیکان دین نشان دیرلارانی  
آتکان اوقونگ جسمیمه روح روان دیرلارانی  
زخم پیکان یوق که چشم خون فشان دیرلارانی

۱ دل [ت]

۲ باطنی [ت] [د]

امروز فیض جلوه ات پوشیده از چشم رمل<sup>۱\*</sup>  
 در نو بهار لم یزل جوشیده از باغ ازل  
 <۴۹۳ر> نه آسمان گل در بغل یک برگ سبز گلشت

{۵۰۰ر} اندیشه صد ذو فنون در فکر ذات شد زبون  
 عمری است با قد نگون نی صبر دارد نی سکون  
 نه طاق چرخ نیلگون ایستاده این جا بی ستون  
 دل از تحیر کرد خون بر عقل زد برق جنون  
 شور دو عالم کاف و نون یک لب به حرف آوردنت

خود عاشق حسن خودی بر شوق خود پوشیده ای  
 از مظهر کون و مکان چون بوی گل جوشیده ای  
 خود ساقی جام بقا از دست خود نوشیده ای  
 هر جا برون جوشیده ای خود را بخود پوشیده ای  
 در نور شمع مضمحل فانوسی پیراهنت

از داغ سودای تو دل دارد دو صد گنجینه ها  
 ذرات پیدا میکند شوق ترا از سینه ها  
 مهر رخت پرداخته از سینه رنگ کینه ها  
 جوش محیط کبریا بر قطره بست آینه ها  
 ما را بما کرد آشنا هنگامه ما و منت

دارم امید از در گهت ای داور فریاد رس  
 گوید چه سان حمد ترا این بینوای هیچ کس

با صد حدوث کیف و کم از مزرع آباد قدم  
(۵۴۹) یک ریشه بر شوخی زند تخم دو عالم خرمنت

بحث دو عالم ماجرا یک فرد از توجیه تو  
شد چشم غفلت پروران بیدار از تنبیه تو  
تقدیس در باغ جهان گل کرده از تنزیه تو  
تنزیه صد شبنم حیا گل کرده از تشبیه تو  
جان صد عرق آب بقا گل کرده لطف تنت

دارد گلستان رنگبو از جلوۀ رعنائیت  
خلقی ز هستی تا عدم دیوانه و سودائیت  
خواباند خلقی را به خون افسون بی پروائیت  
تجدید ناز آشفته‌گی<sup>۱</sup> رنگ لباس آراییت  
بی پرده گی دیوانگی طرح نقاب افکندنت

ای پرتو حسن ترا آینه شد دنیا<sup>۲</sup> و دین  
سرگشته شوق ترا ملک<sup>۳</sup> سلیمان در نگین  
دارد فلک از مهر و مه داغ غلامی بر جبین  
در وادی شوق یقین صد طور موسی آفرین  
خاکستر پروانها محو چراغ ایمنت

از شوخی اظهار تو ای پادشاه لم یزل  
نام ازل اسم ابد از کلک صنعت یک غزل

۱ [ت] آشفته [س] [د]

۲ [ت]، دنیای [س] [د]

۳ [ت]، فلک [س] [د]

آن وقت زن<sup>۱</sup> منصور خواجه متوفا آی بی بیش را در حال به عقد خود در آورد، به حکم آن که

### مصراع<sup>۲</sup>

سالی که نکو است از بهارش معلوم

و این چند<sup>۳</sup> مخمس از زاده طبع آن شاهی<sup>۴</sup> مرحوم است.

### مثنوی

شه<sup>۵</sup>\* دین و دنیا شهنشه عمر      که دریای طبعش بود پر گهر  
چو بحر معانی شود موج خیز      بود کلک در پاش او نکته ریز  
ز بیدل پسند آمدش این غزل      مخمس بیاراستش بی بدل  
بود این مخمس ز سلطان دین      که شد شعر بیدل از آن دل نشین

### مخمس

عمری است چون باد صبا دارم سراغ گلشت  
آواره چون بوی گلم در آرزوی ————— سکنت  
موج گهر در هر قدم از جستجوی معدنت  
ای پر فشان چون بوی گل بیرنگی از پیراهنت  
عنقا شوم تا گرد من یابد سراغ دامت

{۴۹۹پ} <۴۹۲پ> تا این بساط نه فلک اظهار کردی از عدم

کلک قضا تصویر زد بر هستی آدم رقم

نظم تعیین در جهان تحریر کردی بی قلم

۱ زنی [ت]

۲ × [د]

۳ سه [ت]

۴ شاه [د]

۵ [ت]، شهی [س] [د]

انداخته<sup>۱</sup> نماز کردند و تابوت او را<sup>۲</sup> بر داشته، از کمال حزن و غم و غایت غصه و الم به جای اشک سیلاب خون از دل‌های پر خون جاری کرده<sup>۳</sup>.

### مصراع<sup>۴</sup>

ز مژگان شد روان جویی<sup>۵</sup> پر از خون

فغان و زاری به اوج فلک زنگاری رسانیده، به گورخانه آباً و اجداد<sup>۶</sup> برده، به طریقه شریعت غرا دفن کردند و خویش و تبار و ارکان دولت امیر عمر خان لباس مصیبت پوشیده، تا یک هفته متصل به اطعام و ختمات {۴۹۹ر} کلام مجید قیام نمودند. <۴۹۲ر> روز هفتم چنانچه آیین سلاطین حشمت قرین تواند بود، به کشیدن آتش بزرگ پرداختند و خلاق را محمد علی خان ماده<sup>۷</sup> از لباس تعزیت بیرون آورده و خود به جای پدر نشست. در

بهر کس داده ای یک بار دیگر نیز با من ده      ذکوة جنس خود را بوسه ز آن لعل شکر بار  
به شوق ذوق می کشم از هر دو کتف تو      گراز بهر من انعام سازی جامه زردار  
در آید نو گل بیطاقتی یک ساعتی باشد      درون خانه ات هر گه رقیب شوم بیک دیدار  
کشم فریاد میسازي که اندازی به جانش آن      پی قتل رقیب از نیام آن تیغ جوهر دار  
زنم بر درگه تو تا به وقت صبحیدم هر شب      به خود در ایمن ز این آتش قبا دیگر بار  
ننوشی آب لو تا سرش یک دم نه بنشینی      مقام چشمه زمزم که باشد جای فیض آثار  
دو پایش را به بالا سازم بینم به او را      که چون بسته است اوستا میخ نعل موزد زنکار  
(۵۴۹ح)

ز تنگی درد اگر سازد به من گو تا کشم یک دم      ز پایت موزه را ای شاهد موزون خوش رفتار  
تو در جای فراغت هر شبی جامی برون از در      سری کوی ترا اشک روان دیده خونبار [د]

۱ اندازه [ت]

۲ [ت][د]

۳ کردند [د]

۴ × [د]

۵ جوی [ت][د]

۶ او [ت]

۷ مادر زن [ت]، × [د]

دارند و امرا از روی حسد به یک دیگر نیز مخالفت نکنند. به وقوع این بیعت خاطر خورد و بزرگ اطمینان یافت، در آن وقت امرا فقیر را فرمودند. فقیر محمد علی خان ماده<sup>۱</sup> را از حرم بیرون آوردم. سادات و علما و امرا محمد علی خان [ماده را به]<sup>۲</sup> نمد سفید انداخته، بر مسند حکومت به جای پدر بنشاندند. مولانا حاذق تأریخ نیکو گفته [است. تأریخ این است.]<sup>۳</sup>

<۴۹۱پ> تاریخ<sup>۴</sup>

جستم ز صبح جمعه چو تأریخ فوت او  
زد سینه چاک چاک ز خود همچو آه رفت  
{۴۹۸پ} با تاج لعل گفت بر اورنگ خسروی  
بنشست شاهزاده والای و شاه رفت

وله<sup>۵</sup> ایضاً.

دی<sup>۶</sup>\* حاذق دل سوخته<sup>۷</sup> میگفت قصاید امروز سر تربت او مرثیه خوان رفت  
گفتم چه نویسم پی تأریخ خرد گفت از خطه فرغانه عمر قدر زمان رفت

قصه کوتاه. بر نهج سنت سید المرسلین غسل و تجهیز و تکفین نموده، امرا (۵۴۸) +  
و ارکان دولت نعش مغفرت قرین او را برداشته، در صحن قصر امیر بر جنازه رحمت

۱ مادر زن [ت]، غازی [د]

۲ را به [ت]، غازی [د]

۳ × [ت]

۴ [ت]

۵ × [ت]

۶ [ت]، در [س] [د]

۷ سوخته خسته [د]

۸ (۵۴۸ح.) قبیح ملیح مولوی جامی

گاهی اندازم گاهی کشم در هر شبی صد بار غم تو بر دلم آه از نهاد سینه افکار



انوار طلعت خورشید حشمتی که عالمی از فروغ عظمتش<sup>۱</sup> به فراغت بودند، در مغرب اینما تکنونوا<sup>۲</sup> یدر ککم الموت معدوم شد<sup>۳</sup>. منشور حیات جمشید عظمتی که جهانی از وفور معدلتش مرفه (۵۴۷) الحال زندوگانی<sup>۴</sup> مینمودند. به توقیع کل من علیها فان مختوم گشت و<sup>۵</sup> آوازه کوس شاهی که هر شام و<sup>۶</sup> سحر بشارت فتح و<sup>۷</sup> ظفر در هر شهر و کشور منتشر میگرددانید، به یک بار فرو نشست و آواز فغان رعیت و سپاهی در این مدت کسی نشنیده بود. از صعوبت {۴۹۸ر} این مصیبت بلند گشته، به ایوان و<sup>۸</sup> کیوان پیوست.

### شعر<sup>۹</sup>

<۴۹۱ر> ز مرگان دمبدم خوناب میریخت  
مگو خوناب خون ناب میریخت  
ز دست جور دوران جفا جوی  
گاهی بر سینه میزد گاه بر روی

القصه. جناب قبله گاهم از پیش امیر عمر خان بیرون خرامید. جمله امرا ذوی الاحترام را جمع نموده، به دیوان خانه امیر محفلی ساختند. آن گاه تمام اولیای دولت دست بر کلام مجید<sup>۱۰</sup> سبحانی نهاده، مراسم عهد و پیمان در میان آوردند که محمد علی خان ماده<sup>۱۱</sup> را به جای پدر بنشانند و حاکم خود دانند، در دولتخواهی و خدمتکاری مراسم سعی و اهتمام مرعی

۱ عظیمش [د]

۲ نو [ت] [د]

۳ شد و [ت]، شدند [د]

۴ زندگانی [ت] [د]

۵ × [ت]

۶ × [د]

۷ × [ت] [د]

۸ × [د]

۹ مثنوی [د]

۱۰ حمید [ت]

۱۱ × [ت] [د]

قدیم و قدرت کامله قیوم مفهوم است که پیوسته مقتضای آن بوده که سر هر سرور که به افسر  
پرزبور آراسته گردد، عاقبت دست از تمشیت امور مملکت دنیوی < ۴۹۰ ر > باز داشته، به  
مقام عافیت انجام عقبی<sup>۱</sup> خرامد. +<sup>۲</sup> همواره بر این منوال جریان پذیرفته که اقدام میمنت  
انجام هر ذو الاحتشامی که در دار الملک ربع مسکون و بساط بسیط بوقلمون تخت جسته، به  
بخت مشرف باشد، آخر الامر از تنگنای هیاکل ملول و متنفر گشته، به ساحت وسعت خلد  
برین توجه فرماید، [به حکم آن که]<sup>۳</sup>

#### قطعه

ای دل به جهان ثبات امری است محال      پیوسته سرور او است مقرون به ملال  
هر کوکب مسعود که بنمود جمال      بس زود کمال او پذیرفت زوال

القصه. مرض به آن جوهر پاک آمیزش گرفت و الم به آن ذات میمنت { ۴۹۷ پ }  
صفات به<sup>۴</sup> تداخل پذیرفت. هر چند اطباء در معالجه سعی مینمودند، عکس مطلوب نتیجه  
میداد و ساعت به ساعت ضعف مزاج روی در تضاعف و ازدیاد می نهاد. مدت هفده<sup>۵</sup> روز  
در بستر نا توانی خوابید. [هژدهم ربیع < ۴۹۰ پ > الثانی روز جمعه]<sup>۶</sup> دوازدهم جدی سنه  
۱۲۳۷ به وقت طلوع آفتاب روح مقدسش به حظایر قدس پرواز نمود.

#### بیت

وقت جان دادن فلاطون این دو حرفی گفت و<sup>۷</sup> رفت  
حیف دانا مردن و افسوس نادان زیستن

۱ اخروی [د]

۲ و [د]

۳ × [د]

۴ × [ت]

۵ [ت][د]، هفتده [س]

۶ روز جمعه هژدهم ربیع الثانی [د]

۷ × [ت]

گفتن پرداخت. چنانچه دیوانی در غایت خوبی به زبان<sup>۱</sup> ترکی و پارسی تصنیف کرده است، بنابر آن<sup>۲</sup> بسیاری با شاعران شیرین کلام صحبت داشتی و ساقیان سرو قد قدح می ناب را در گردش در آوردی. یک ساعت و یک نفس مجلس او از می خوردن و از شعر گفتن خالی نبود و این رباعی عمر خیام و این بیت خواجه حافظ دوام بر زبان او جاری بود.

### رباعی

ایزد بهشت وعده با ما می کرد      پس<sup>۳</sup> خوردن می حرام با ما کی کرد  
حمزه<sup>۴</sup> به عرب اشتر شخصی پی کرد      پیغمبر ما حرام می با وی کرد

### <۴۸۹پ> بیت خواجه حافظ

عیب می جمله بگفتی هنرش نیز بگویی<sup>۵</sup>      نفی حکمت مکن از بهر دل عامی چند

در آن آوان که فصل تابستان به پایان رسید و فصل زمستان به سر آمد، امیر عمر خان خواست،<sup>۶</sup> مثل عادت معهود به جانب مرغینان و اندجان از بهر (۵۴۶) شکار تشریف فرماید و این خبر را شنیده، امرا به سر رشته اسباب شکار پرداختند. {۴۹۷ر} در آن حین بود که طبیعت امیر عمر خان از کثرت شرب می از حد اعتدال منحرف گشته، رو به بیماری آورد.

### ذکر انتقال امیر عمر خان از دار غرور<sup>۷</sup> به دار البقاء

سرور قاطبه علماء عالم را معلوم است و طایفه فضلاء بنی آدم را که حکمت شامله حی

۱ زبانی [ت]

۲ پرداخت و [د]

۳ بس [ت]

۴ حمزه [ت]

۵ بگو [ت][د]

۶ که [د]

۷ الغرور [ت]

## [مصراع]

به سان گل که به صحن چمن بر افروزد<sup>۱</sup>

القصه<sup>۲</sup>. در آن آوان که خوشوقت قوش بیگی و ارسلان بیک دادخواه مع آدینه قل پروانچی از امیر عمر خان مرخص شده، رو به ثمرقند آوردند. بعد از سه کوچ در موضع ینگی قورغان وارد گردیدند. <۴۸۸پ> روز دیگر امارت پناه<sup>۳</sup> برادر ام اسحاق دیوان بیگی و حاکم اورگوت کته بیک پروانچی و آدینه قل پروانچی و مأمور<sup>۴</sup> دادخواه و خوشوقت {۴۹۶ر} قوش بیگی و ارسلان بیک دادخواه (۵۴۵) و دیگر امرا و عمل داران آن جانب با لشکر انبوه متوجه ولایت ثمرقند شدند و<sup>۵</sup> آن ولایت را چون حلقه میم در میان گرفته، نزول اجلال فرمودند. روز دیگر به محاصره و مقاتله پرداختند. مدت محاصره یک هفته به طول کشید. در میان ایشان چند درجه چنان جنگی واقع شد که از کشته ها پشته بر داشتند. بالاخر اسحاق دیوان بیگی و دیگر امارت پناهان دیدند که کار<sup>۶</sup> پیش نمی رود. از آن ولایت کوچیده، هر کس به مقر خود مراجعت فرمود. از آن جمله خوشوقت قوش بیگی و ارسلان بیک دادخواه مع لشکر خود به راه بیابان به جانب تاشکند متوجه شدند. بعد از طی مسافت به چندین محنت و مشقت در ولایت تاشکند <۴۸۹ر> وارد گردیدند. از آن جا به خدمت امیر عمر خان رسیده، کورونوش دادند و از تعاقب ایشان بعد از چند روز اسحاق دیوان بیگی از ولایت پنج شنبه روگردان شده، به خدمت امیر عمر خان رسیده، او نیز به دست بوسی<sup>۷</sup> + مشرف شد. در آن وقت امیر عمر خان به عیش {۴۹۶پ} و عشرت [مشغول شده]<sup>۸</sup>، به شعر

۱ × [ت][د]

۲ [ت]

۳ پناهی [ت][د]

۴ معمور [ت]

۵ چون [ت]

۶ کاری [ت][د]

۷ او [د]

۸ پرداخته [ت]

لطف و مرحمت قمر رکابی دور نخواهد بود. امیر سخن ایشان را قبول نموده، به جانب لشکرگاه خود مراجعت نمود و همان روز به آته<sup>۱</sup> قل پروانچی مع بزرگان خطای قپچاق به هر کدام ایشان لباسهای علی حده انعام نمود و خوشوقت قوش بیگی را و ارسلان بیک دادخواه را همراه کرده، رخصت اجازت داد و خود امیر روز دیگر از آن جا کوچ نموده، به جانب اوراتپه<sup>۲</sup> مراجعت فرمود. +<sup>۳</sup> بعد از<sup>۴</sup> سه کوچ به<sup>۵</sup> موضع نو وارد گردید و حکومت آن <۴۸۸ر> ولایت را {۴۹۵پ} به پسر داول پروانچی به گدای بای بی ارزانی فرمود<sup>۶</sup>. روز دیگر از آن جا کوچیده، متوجه خجند گشت. چون این خبر را فقیر و محمد علی خان ماده<sup>۷</sup> شنیده، به اتفاق یک دیگر +<sup>۸</sup> تمام امرای خجند در موضع تنگی رفته، استقبال نمودیم. چون چشم امیر به فقیر و محمد علی خان ماده<sup>۹</sup> افتاد، در غایت شفقت و مرحمت در کنار خود کشیده، مهربانی های<sup>۱۰</sup> پادشاهانه نمود و از آن جا با چندین شأن و<sup>۱۱</sup> شوکت در ارک خجند نزول اجلال فرمود و سه روز در آن ولایت از رنج راه بر آسود و دست عطا بر خاص و عام بر گشاد. روز چهارم از آن شهر کوچیده، متوجه دار السلطنت خوقند شد. بعد از سه کوچ به دولتخانه خود وارد گردیده، به عدل و داد پرداخت.

- ۱ آدینه [د]
- ۲ خجند [ت]
- ۳ و [د]
- ۴ [د]
- ۵ در [د]
- ۶ بخشید [د]
- ۷ مادر زن [ت]، غازی [د]
- ۸ با [ت]
- ۹ × [ت] [د]
- ۱۰ مهربانی هایی [ت]
- ۱۱ × [ت]

چندین محنت و مشقت خود را به قلعه گرفتند، دست به قتل و تاراج گشادند و بسیاری را اسیر نمودند. چون امیر عمر خان خاطر خود را از فتح قلعه جمع نمود، با فر فریدونی مراجعت نموده، به آوردی خود نزول اجلال فرمود و این حال را حاکم ضامین بردی یار مشاهده نمود. دست از جان شیرین شسته، منتظر مرگ نشست. روز دیگر سیمرغ زرین جناح خورشید عالم را به شعاع خود منور ساخت. امیر عمر خان با سمند باد پیما سواری نموده، در صبحی که علم بیضای خورشید عالم از افق مشرق [هوادار گشته] <sup>۱</sup>، مثل روز گذشته لشکر مظفر لوا را صف در صف ترتیب داد <sup>۲</sup>. روی <sup>۳</sup> به قلعه آورده، خواست به یک حمله دمار از مردم قلعه بر آرد. امراء ذوی <sup>۴</sup> الاحترام زانوزده، عرض <sup>۵</sup> نمودند.

#### مثنوی

به عبرت <sup>۶</sup> نهادند سر بر زمین      زبانی پراز پوزش و آفرین  
{۴۹۵} که ای شاه دریا دل پاکدین      فروزنده تاج و تخت و <sup>#</sup> نگین  
<۴۸۷پ> سر و جان ما از ره دین و داد      فدای سم و <sup>۸</sup> مرکب شاه باد

اگر جناب جهان پناهی حکم فرمایند، لشکر مظفر اثر در یک ساعت وجود (۵۴۴) قلعه را عدم سازند <sup>۹</sup>. اما از آن جا که حزم و اندیشه از جمله لوازمات سلطنت است، رعایه باید فرمود و هم چندی به غلامان جان سپار احتمال شکست شدن هست. هزار مثل این قلعه به یک ناخن مبارز درگاه نمی ارزد. اگر از روی پادشاهی مردم قلعه را به حالش گذارند، از

- ۱ هوا داشته [د]
- ۲ داده [د]
- ۳ رو [د]
- ۴ ذو [ت] [د]
- ۵ عرضه [د]
- ۶ عزت [د]
- ۷ [ت]
- ۸ × [ت]
- ۹ میسازند [ت]

فرمایند، در سهل درجه تمام ولایت ما وراء النهر فتح خواهد شد. از آن جا که خدا نخواسته بود، چندین امر بیهوده در میان افتاد و رفتن امیر به آن جانب منع شد. اما در آن وقت مدت محاصره به بست روز کشیده بود و در میان لشکر یک چیز<sup>۱</sup> قحطی<sup>۲</sup> + راه یافته بود و گرمی<sup>۳</sup> هوا چنان گرم بود که آب در جوی {۴۹۴ر} میجوشید. خصوص نمک چنان نایاب بود که از گوگرد احمر چندان قدر داشت و لشکریان از بی نمکی ورم کرده، به راه عقبی شتافتن گرفتند. <۴۸۶پ> چون امیر عمر خان این حال را مشاهده<sup>۴</sup> نمود، روز دیگر به اسب کوه پیکر هامون نورد سواری نمود. به جانب قلعه<sup>۵</sup> ضامین چه که نیم فرسخ از ضامین بزرگ بالاتر است، آن حصن حصین قلعه<sup>۶</sup>، در غایت بلندی و آن قلعه را لشکر نصرت اثر چون نگین انگشتی در میان (۵۴۳) گرفته، به محاصره پرداختند. در آن وقت بود که امیر عمر خان به نفس نفیس خود نزدیک قلعه آمد<sup>۷</sup>، کل لشکریان فرغانه را حکم بر گرفتن قلعه نمود. ایشان از امیر فاتحه گرفتند. در غایت چستی و چالاکی مثل سیل به یک حمله داخل قلعه شدند. در آن وقت مردمانی که به درون قلعه بودند، سپاه نصرت اثر را چنان در شب<sup>۸</sup> تیر گرفته بودند که تیر تفنگ مثل ژاله می بارید و چندی از امارت پناهان و مبارزان را به سوی عدم فرستاد<sup>۹</sup> و پاره ای را مجروح ساخت<sup>۱۰</sup>، مثل حاکم نو<sup>۱۱</sup> + داول پروانچی و بوته میر آخور باشی به سوی عدم خرامیدند {۴۹۴پ} و یک پنجه<sup>۱۲</sup> شاهی پروانچی حاکم خجند را به شمشیر <۴۸۷ر> قلم کردند و چندی دیگری<sup>۱۳</sup> مبارزان را به راه بقا فرستادند. چون مبارزان کینه خواه به

۱ چیزی [ت] [د]

۲ هم [د]

۳ × [د]

۴ مشاهد [ت]

۵ قلعه ای است [د]

۶ آمده [د]

۷ فرستادند [ت]

۸ ساختند [ت]

۹ و [س]

۱۰ دیگر [ت]

[چون فقیر]<sup>۱</sup> از محمد علی خان ماده<sup>۲</sup> این سخن را شنیدم، در غرقاب (۵۴۲) فکر فرو رفتم. از آن جا که نگاه های عاشقانه او به خاطر می آمد، هزار قسم او را به یک جو نمیگرفتم و از آن جا که این امر در میان کفر و اسلام<sup>۳</sup> محال بود و قسم های غلیظ یاد کرده بود، انگشت تحیر به دندان گزیده، نمیدانستم که به کدام جانب حکم کنم. بعد از ملاحظه<sup>۴</sup> بسیار به خاطر آمد که حمل مؤمن بر صلاح، احتمال دارد که انسان ملک نیست، بشر است، من غلط کرده باشم. بالاخر حمل به غلط فهمی خود کردیم. از پی<sup>۵</sup> آن دعوا گذشتیم و اما عاقبت گل کرد.

{۴۹۳پ} رباعی

در حقیقت قرب و بعد مردم دنیا غلط

آشنائیهـا غلط نا آشنائیهـا غلط

پشت و روی این ورق را بارها گردانده ایم

خط غلط معنی غلط املا غلط انشا غلط

<۴۸۶ر> القصه. امیر عمر خان در<sup>۶</sup> محاصره و مقاتله مشغول بود. در آن وقت آنه قل پروانچی مع امرای خطای قپچاق و قراقلیپاق با چهار هزار مبارز خنجر گذار آمده، به کورونوش امیر مشرف شد<sup>۷</sup> و از جانب دانیال اتالیق از شهر سبز اولیا محرم باشی بر سبیل ایلچی گی آمد. او نیز به رکاب بوسی امیر مشرف شد و همه ایشان در غایت التجا عرض<sup>۸</sup> کرده، تکلیف نمودند که اگر جناب جهان پناهی مهربان شده، تا در ولایت ثمرقند قدم رنجه

۱ فقیر چون [د]

۲ × [ت]، غازی [د]

۳ لا [ت] [د]

۴ تأنی [د]

۵ سر [د]

۶ به [د]

۷ شدند [د]

۸ عرضه [د]



## بیت

برای یک دمه شهوت که خاک بر سر او زبون زن شده بی دین شدن نمیخواهد

از بس که به فقیر<sup>۱</sup> محمد علی خان ماده<sup>۲</sup> از آوان طفلی تا<sup>۳</sup> زمان شبابی<sup>۴</sup> به یک دیگر چنان گستاخ بودیم که چیزی در میانه ما و او<sup>۵</sup> مخفی باشد نبود. از آن جا که سخن دین و دنیا در آن جا مندرج بود، بنابر آن از روی برادری و راستی باید و شاید سخت گفتم. چون محمد علی خان ماده<sup>۶</sup> از فقیر این سخن ها را شنید، دید که فقیر پوستین {۴۹۳} خود را چپه پوشیده ام. از غایت بیم امیر عمر خان نه از وهم خدا چنان لرزه در اندامش <۴۸۵پ> [افتاده بود]<sup>۷</sup> که چون برگ بید لرزیده، آغاز گریه و زاری نمود و قسم های غلیظ از وهم خود یاد کرد که اصلاً و قطعاً آرزوی این کار نه در دل دارم، نه بر زبان. گمان بدی که در حق من [کرده اید]<sup>۸</sup>، صریح و<sup>۹</sup> غلط [کرده اید]<sup>۱۰</sup>. این امر از من در هیچ وقت صادر نخواهد شد و<sup>۱۱</sup> این بیت را خواند.

## بیت

ای فلاطون دعوی علم تو فهم<sup>۱۲</sup> دیگر است  
آنچه فهمیدی نه فهمیدی که فهمیدن نداشت

- ۱ و [د]
- ۲ جثه انکان [ت]، غازی [د]
- ۳ به [د]
- ۴ شباب [ت]، شبانی [د]
- ۵ وی [ت] [د]
- ۶ × [ت]، غازی [د]
- ۷ افتاد [ت]
- ۸ کردید [ت] [د]
- ۹ [ت]
- ۱۰ کردید [ت] [د]
- ۱۱ × [ت]
- ۱۲ فهمی [ت]

پری پیکر مشاهده نمودم. از بس که قبل از این مقدمه در راه تاشکند در دو موضع از دور +<sup>۱</sup> نگاه بیجای او پی برده بودم، اما به کسی اظهار نکرده بودم، حالا که هیچ عاشق به معشوق نکرده گی نگاه های دزدی را از پسر در حق مادر دیدم. حمیت دین و بحر ناموس در حرکت وحوش<sup>۲</sup> آمد و چون مار در آتش قهر میسوختم، اما در آن وقت آن گل پیرهن اصلا و قطعا از این سر واقف نبود.

### مصراع

دامنش ز آن پاکتر باشد که ما گوئیم پاک

بالاخر فقیر از جای خود سپندوار (۵۴۱) برجسته، راه قوش را گرفتم. چون به جای خود رسیدم، خود را به تکلف نگاه میداشتم. در آن وقت بود که محمد علی خان از حرکت فقیر پی برده، از تعاقب من آمد. فقیر بی اختیار {۴۹۲پ} مجلس را خلوت کرده، رو به محمد علی خان آورده، به فحش گفتم که<sup>۳</sup> <عقل نفیست<sup>۴</sup> را چه شد که نفس خبیثت<sup>۵</sup> بر او > (۴۸۵ر) غالب آمد. مگر تو ایمان نداری و از خدا و رسول امید نداری. این چه فعل بدی بود که از تو صادر شد و چه بلا زد که به نفس اماره گرفتار شده، به راه ابلیس در آمده، و<sup>۶</sup> دین و دنیای<sup>۷</sup> خود را می بازی. از انقراض عالم تا بالوقت این کار نه از مؤمن به وقوع آمده است و نه از کافر، مگر شیرویه که جزای خود را یافت. حالا چون است که به پدرت امیر عمر خان +<sup>۸</sup> صورت واقعه را بیان کنم. از هزار جانت یک جان خلاص نشود. <گفتم و این بیت را خواندم.

- ۱ از [ت]
- ۲ وجوش [ت]
- ۳ × [ت] [د]
- ۴ نفست [د]
- ۵ خبیست [ت]
- ۶ × [د]
- ۷ دنیایی [ت]
- ۸ بعد از آمدن [ت]

میگذشت. اتفاقاً روزی بعد از سلام آن عفت پناهی گذار فقیر به در خانه ای افتاد که در آن خانه دختر سید غازی خواجه فیضی زن اناق<sup>۱</sup> امیر عمر خان خان پادشاه بود که<sup>۲</sup>

### رباعی

رخش چون مهر بی همتا در آفاق      به جفت ابروان چون ماه نوطاق  
ز رویش پیکر خورشید در تاب      ز لعلش جوهر یاقوت سیراب

[آن پری چهره]<sup>۳</sup> از بهر فقیر چای پخته<sup>۴</sup> بود. فقیر بر در خانه او نشسته، چای میخورد. از بس که مادر فقیر آن شیرین عصر را دختر خود خاند، به حالش می پرداخت. بنابر آن خصوصیت آن پری چهره به ما مردم {۴۹۲ر} از دیگر حرمهای امیر بیشتر بود و در امور [کلی و جزوی]<sup>۵</sup> میان را به خود مربی می پنداشت. [الحق همچنین هم بود.]<sup>۶</sup> در آن وقت بود که محمد علی خان ماده<sup>۷</sup> <۴۸۴پ> آمد. فقیر را دید +<sup>۸</sup>. او نیز به چای خوردن مشغول شد و صحبت ما برار گرفت. از هر جانب سخن میکردیم.

### مصراع

بلای جانی<sup>۹</sup> بود حسنی که با این آبرنگ افتد

در آن حال فقیر از محمد علی خان ماده<sup>۱۰</sup> حرکتهای عاشقانه و نگاههای اسیرانه به آن

۱ اناق [ت] [د]

۲ × [د]

۳ × [ت]

۴ ساخته [د]

۵ جزوی و کلی [د]

۶ × [ت]

۷ غازی [ت] [د]

۸ آمد [د]

۹ جان [ت]

۱۰ غازی [د]

ذکر پند دادن فقیر محمد علی خان [ماده را از راهی خطا]<sup>۱</sup>

نکته سنجان بلاغت را مخفی نماند که هر چند تحریر این سخن در این جا مناسب نبود، از بس که این امر بر تمام ما وراء النهر، غلط گفتم، بل تمام ربع مسکون منتشر شد، تا قیامت بر دفترها ثبت خواهد یافت، بنابراین آن فقیر از اول تا به<sup>۲</sup> آخر از این مقدمه<sup>۳</sup> واقف بودم. از روی گستاخی سطری چند نویسم<sup>۴</sup>. امید از ذوی<sup>۵</sup> العقلا این که کرم نموده، عفو فرمایند، [چنانچه گفته اند].<sup>۶</sup>

## بیت

ز دشت بیخودی می آیم از وضع ادب دورم  
جنونی گر کنم ای شهریار<sup>۷</sup> هوش معذورم

خلص کلام این<sup>۸</sup> که در آن وقت که امیر عمر خان فقیر و محمد علی خان<sup>۹</sup> +<sup>۱۰</sup> {۴۹۱پ} مع حمله نشینان پرده عصمت به ارگ خجند گذاشته، خود به جانب قلعه ضامین (۵۴۰) خرامید. فقیر و محمد علی خان را دأب و قاعده<sup>۱۱</sup> ما <۴۸۴ر> و هم فرمایش امیر عمر خان این بود که هر روز سه مراتب و چهار مراتب بی تقیل در ارگ به پیش حرم محترم او ماه لار آیم که از همه حرمهای امیر بزرگتر بود، به فقیر از مادر خود چندین درجه شفقت او بهتر بود، سلام میکردیم و ساعتی نشسته، باز به جای خود مراجعت میفرمودیم. هر روز بدین منوال

۱ × [ت]، غازی از کار خطا [د]

۲ × [ت] [د]

۳ سر [د]

۴ نوشتن [د]

۵ ذو [ت] [د]

۶ × [ت] [د]

۷ شهریان [ت]

۸ آن [د]

۹ غازی [د]

۱۰ را [ت]

در غایت التجا روی آورد. نگذاشت<sup>۱</sup> که قدمی پیش رویم.

### بیت

پیران سخن به تجربه گویند گفتمت      هان ای پسر که پیر شوی پند گوش کن

و میان چار و ناچار سخن آن پیر را مبذول<sup>۲</sup> داشته، به مقر خود مراجعت فرمودیم و چندی مبارزان خود را پیش فرمودیم و محمد رحیم دیوان بیگی دید که صید مقصود او به دام نه افتاد، به حکم آن که

### مصراع

عنقا شکار کس نشود دام باز چین

{۴۹۱ر} لا علاج گردن خار خار همان اطراف و جوانب را تاخت و تاراج نموده، به وطن خود مراجعت فرمود. +<sup>۳</sup> این خبر را فقیر و محمد علی خان ماده<sup>۴</sup> شنیده، در بحر تحیر <۴۸۳پ> فرو رفتیم. انگشت حیرت به دندان گزیده، شکر حضرت<sup>۵</sup> ایزدی را به جای می آوردیم. هر آینه به سخن اتالیق عمل نکرده، بیرون<sup>۶</sup> میخرامیدیم. مثل توت میریختیم، مست بودیم، هشیار شدیم. +<sup>۷</sup> خواب بودیم، بیدار شدیم. من بعد به لهو و<sup>#</sup> طرب مشغول نشدیم. به سر رشته قلعه داری پرداختیم.

۱ نماند [د]

۲ مبزول [ت][د]

۳ و [د]

۴ غازی [ت][د]

۵ × [ت][د]

۶ [د]، بروی [س]، پیش [ت]

۷ و [د]

۸ [ت][د]

دیده بودیم و نه در هشیاری.

مجمل سخن آن که محمد رحیم دیوان بیگی از احوال و اوضاع ما خوب وقوف یافته<sup>۱</sup> و از جانب امیر عمر خان نیز خاطر خود را جمع ساخته<sup>۲</sup> و بیشه را از شیر خالی یافت. با لشکر انبوه در غایت تعجیل شبگیر زده، متوجه ولایت خجند گشته، مانند خدایار بی والنعمی و سیادت پناهی<sup>۳</sup> محمود خان در عصر خود تدبیری اندیشیده بودند که ذکر او در بالا مذکور شد، او نیز به راه ایشان رفته، در موضع دنبای آمده، کمین کرده و چندی لشکریان را حکم نمود که در کمال تعجیل رفته، نزدیک شهر را تاخت نموده، مراجعت فرمایند. ایشان همچنان کردند. چون این خبر را فقیر و محمد علی خان ماده<sup>۴</sup> شنیده، بی اندیشه {۴۹۰پ} از روی کم تجربه گی سواری نموده، متوجه محاربه محمد رحیم دیوان بیگی شدیم و این خبر را قاسم اتالیق شنیده، در غایت سرعت از تعاقب ما <۴۸۳ر> در موضع تنگی رسیده، حيله خدایار بی و محمود خان را<sup>۵</sup> بیان نمود و ما را از جنگ منع نموده، گفت.

### بیت

ورچه کس بی اجل نخواهد مرد — تو مرو بر دهان اژدرها

فقیر و محمد علی خان ماده<sup>۶</sup> از روی غرور و بی حزمی سخن او را (۵۳۹) قبول نکرده، متوجه آن صوب شدیم. + قاسم اتالیق دید که کار نمیشود. لا علاج از اسب خود را به زیر انداخته<sup>۸</sup>، به یک دست عنان فقیر را و به<sup>۹</sup> یک دست عنان محمد علی خان را گرفته،

۱ یافت [د]

۲ ساخت [د]

۳ پناه [د]

۴ غازی [ت] [د]

۵ × [ت]

۶ غازی [ت] [د]

۷ و [د]

۸ انداخت [د]

۹ بر [ت]

هامون نورد سواری نموده، متوجه قلعه ضامین شد. {۴۸۹پ} بعد از طی مسافت قلعه ضامین محل نصب سالکان طریق رزم و پرخاش گشته، لشکر نصرت اثر آن قلعه را چنان مرکزوار در میان گرفته، به محاصره <۴۸۲ر> و محاربه پرداختند که<sup>۱</sup> از غریو و سورون سپاه لرزه در زمین افتاد. در آن وقت محمد رحیم دیوان بیگی بردی یار ولد تورسون دیوان بیگی را به حکومت آن قلعه گذاشته بود و آن مبارزت پناهی طریق قلعه داری را باید و شاید به جای آورد. دست به انداختن تیر و تفنگ بر گشاد و داد مردی را میداد. چنانچه سابقاً کلک [جهان آرا]<sup>۲</sup> در سلک تحریر کشید که چون امیر عمر خان، فقیر و محمد علی خان ماده<sup>۳</sup> را مع حریمهای محترم در عروس ولایت گذاشته، خود متوجه آن صوب گشت. فقیر و محمد علی خان (۵۳۸) در کمال شبابی و در غایت مستی دولت طاوس رفتاران و آهوچشمان خجند<sup>۴</sup> را جمع نموده، با ساقیان لاله رخ می ناب را چنان در گردش در آوردیم که یک ساعت از می خوردن خالی نبودیم. چنانچه گفته است.

#### رباعی

شراب لعل مروق به جام گفت که من  
چهار گوهرم اندر چهار جای مدام  
{۴۹۰ر} ز مردم بر تاک و عقیق در شیشه  
سهیل در خم و آفتاب اندر جام

و با مطربان زهره جبین که ناهید و<sup>#</sup> خسرو را یکی از خوشه چینان <۴۸۲پ> خود میشمردی، به سر میبردیم و داد بزم را میدادیم. در آن وقت بود که در عین عیش و عشرت ما فلک کج رفتار نخواست که چند روزی دم بیغم زنیم. +<sup>۶</sup> منصوبه ای بر پا کرد که نه در خواب

۱ × [ت] [د]

۲ بیان از آن [د]

۳ مادر زن [ت]، غازی [د]

۴ خجندی [د]

۵ [ت]

۶ و [د]

کوچیده، با شأن و<sup>۱</sup> شوکت به دار السلطنه خوقند نزول اجلال فرمود و به داد و دهش مشغول گشت. چون چندی بر این بگذشت، در آن وقت بود که برادر ام اسحاق دیوان بیگی از بالای پنج شنبه فرار نموده، به راه تاشکند بعد از مشقت بسیار به خدمت امیر آمده، به دست بوسی او مشرف گردید.

### ذکر لشکر کشیدن امیر (۵۳۷) عمر خان به صوب اوراتپه و ضامین

در آن آوان سنه ۱۲۳۷ در اول فصل تابستان، خسرو ممالک علوی از مکنک در بروج {۴۸۹ر} شتوی ملول گشته، به جانب بیت الشرف خویش نهضت کرده، در تنقیص محصوران حصار فیروزه کار <۴۸۱پ> کوشیده، شرایط گیتی ستانی را<sup>۲</sup> به جای آورده بود که امیر عمر خان تمام ولایت فرغانه را جارچی زناید<sup>۳</sup> که مرکوب سواری که هستند، از این سفر خیریت اثر نمانند<sup>۴</sup>، به رکاب بوسی همایون متوجه آن صوب گردند که<sup>۵</sup> هر کسی<sup>۶</sup> عمداً و قصداً اختیار رفتن نکند، سر او بر باد و مال او به تاراج [خواهد رفت]<sup>۷</sup> و این پیغام بر تمام ممالک فرغانه شیوع یافت. چنان لشکری فراهم آمده بود که نه در کوه میگنجید و نه در هامون. امیر با چندین شوکت و شان از دار السلطنه خوقند لوای نصرت اهتمام به صوب خجند بر افراخت و طی منازل و مراحل نموده، به آن ولایت بی مانند وارد گردید. سه روز به درستی لشکر پرداخت. فقیر و محمد علی خان ماده<sup>۸</sup> را<sup>۹</sup> مع حمله نشینان پرده عصمت در ارک خجند گذاشته، روز چهارم خود با فر فریدونی و دبدبه صاحبقرانی به اسب کوه پیکر

۱ × [ت]

۲ × [د]

۳ زناند [ت]

۴ نماند [د]

۵ × [د]

۶ آن کسی [د]

۷ × [ت]

۸ غازی [د]

۹ × [ت]



چه تدبیر از این بحر مواج نجات یابد.

### نظم<sup>۱</sup>

نمود هر حبابش آسمانی      خط هر موج او چون کهکشانی  
چو جنبیدی به هنگام تلاطم<sup>۲</sup>      بگردی سیر ماه<sup>۳</sup> افلاک و انجم

القصه. امیر سراسیمه وار به هر کدام سخن میگفت و آن عفت پناهان احوال را بدین گونه بدیدند، فغان از ایشان برآمد و فقیر بی اختیار لباس از بر کشیدم. خواستم که خود را به دریا اندازم. امیر در غایت غضب به ترکی گفت، <مگر نشنیده ای که کیمه گه کیرگان نی جانی پر.> فقیر خاموش لاحول گویان به هر جانب کشتی میدویدم. مردمانی که دو جانب لب دریا نظاره میکردند، {۴۸۸پ} همه دست افسوس به هم سوده، گریه کنان لب بر<sup>۴</sup> لب دریا به هر سو میدویدند.

### بیت

<۴۸۱ر> خدا کشتی آن جا که خواهد برد

اگر ناخدا جامه بر تن درد

بعد از مشقت و زحمت بسیار به لطف الهی کشتی رو به بهبودی آورد و اسپان متوجه کنار دریا شدند. بعد از ساعتی صحت و سلامت به ساحل دریا رسیدند و از آن غرقاب دریا نجات یافته<sup>۵</sup>، شکر کنان از کشتی برآمده، به خیمه<sup>۶</sup> فلک<sup>۶</sup> احتشام خود خرامید و از آن جا به اسب باد پیمای خود سواری نموده<sup>۷</sup>، در موضع شهر امیر وارد گردید. روز دیگر از آن جا

۱ × [ت]، مثنوی [د]

۲ تلاطم [ت] [د]

۳ [د]، با [ت]

۴ × [ت]

۵ یافتند [ت]

۶ ملک [ت] [د]

۷ نمود [د]

## رباعی

عروس صبح به زهت سرای کشور فیض      گشود<sup>۱</sup> به رقع مشکین شام از رخسار  
رسید صیت ظهور سکندر خورشید      نمود زنگی<sup>۲</sup> شب رو به زنگبار فرار

روز دیگر به حکم امیر کلهم امرا از دریا عبور نموده، در منزل شهر امیر که بنای خود او بود، وارد گردیدند و امیر با بلقیس نژادان عفت شعار بر لب دریای سیحون نزول فرمود و<sup>۲</sup> به نظر خود زنهای امرا و کنیزان سمن بو را گذرانید و خود با حرملهای محترم [و قریب با]<sup>۳</sup> بست عدد از حجله نشینان و سه مرد فقیر و محمد علی خان ماده<sup>۴</sup> و میرزا رحیم پروانچی که کوک<sup>۵</sup> امیر بود و یکی خود امیر. در آن وقت میرزا رحیم پروانچی زانوزده، عرضه نمود که<sup>۵</sup> <شهریارا، به این دریای خون خوار بی ناخدا، به امید مایان که در عمر خود نکردیم و ندیدیم، به نفس نفیس به این کشتی داخل شدن جناب قمر رکابی را<sup>۶</sup> از حکمت دور و از خرد بعید مینماید.> امیر عرض او نشنید. به کشتی داخل شد و هر چهار مایان چهار اسب +<sup>۷</sup> در کشتی بسته، به دریا انداختیم. {۴۸۸ر} چون قدری راه قطع کرده بودیم که هر کدام سر<sup>۸</sup> کلابه<sup>۹</sup> خود را گم کردیم. <۴۸۰پ> نمیدانستیم که چه نوع نگاه داریم و اسپان جوکمیش (۵۳۶) کردن گرفتند. در آن وقت از دست فقیر اسبی که نگاه داشته بودم، اتفاقا خطا خورد. رو به خشکی آورد و کشتی در میان دریا چرخ میزد و مایان تن به قضا در دادیم و امید از خود کنديم. امیر این حال را مشاهده نمود، در بحر تفکر غرق شد، نمیدانست که به

۱ گشاد [ت]

۲ × [د]

۳ × [ت]، و گل چهره ها قریب با [د]

۴ غازی [د]

۵ × [د]

۶ × [ت]

۷ را [د]

۸ سری [د]

۹ کلاویه [ت]

کنیزان ماه پیکر در حال چایهای خوشبو حاضر ساختند. بعد از شرب چای به خود آمدیم. در روشنائی مشعل چشم به حال یک دیگر افتاد. دیدیم که سه غلام حبشی حاضر نشسته و مردم حبش<sup>۱</sup> (۵۳۵) گویا در نزد ما از شیر سفیدتر و از آینه مصفاتر<sup>۲</sup>. [چنانچه گفته است. گردش دوران گلی ما را چنین پژمرده ساخت  
ورنه در این باغ ما هم رنگبوی داشتیم]<sup>۳</sup>

چون حال خود را به آن مکروهی مشاهده کردیم، چنان خنده بر ما غلبه کرده بود که خود را نگاه داشتن متعذر<sup>۴</sup> بود و آن غم سخت در حال به شادی انجامید و آن محنت و مشقت که کشیده بودیم، همه از یاد رفت. از برای روی شستن به طلب آب به هر سو دویدیم و حریمهای محترم و کنیزان عنبر مو که از ترس خود را به تکلف نگاه میداشتند، بی اختیار در خنده افتادند.

القصة. همان روز در آن موضع از رنج راه آسودیم<sup>۵</sup>، تا محلی که خازن گنج خانه {۴۸۷پ} صنع در مخزن صبح را گشود، طلّیعه رایت اسکندر <۴۸۰ر> خورشید [از جانب]<sup>۶</sup> خاور نمایان گردید.

۱۴ میخندیدند [ت][د]

۱ زنگوار [د]

۲ مینمود [د]

۳ × [ت]

۴ [د]، متعسر [س][ت]

۵ × [ت]

۶ × [ت]

آواز سگی بر آمد، غلط گفتم، > بل<sup>۱</sup>. < از هزار آواز بلبل بهتر به گوش میرسید. چون آواز سگ را شنیدیم، شادی کنان متوجه آواز [آن سگ]<sup>۲</sup> شدیم. قدری راه رفته بودیم که به دیهی<sup>۳</sup> وارد گردیدیم. چون نیک ملاحظه کردیم که آن ده [نبوده است]<sup>۴</sup>، ولایت اخسی بود. + ما آن جا آمده، ندانسته، از روی سرگشتگی حیران و سرگردان می‌گشتیم. چون به این عمر دو باره واصل شدیم، شادی کنان در موضعی که حجله نشینان پرده عصمت بودند، وارد گردیدیم، [به حکم آن که]<sup>۵</sup>

رباعی<sup>۶</sup>

شب یلدای مرا شد اثر صبح پدید  
یافت قفل غم از فاتحه صبح کلید  
{۴۸۷ر} گل<sup>۷</sup> از خار جفا دید خدا را منت  
کز گلستان وفا باز گل<sup>۸</sup> بخت دمید

< ۴۷۹پ> جناب امیر و<sup>۹</sup> فقیر و محمد علی خان ماده<sup>۱۰</sup> را ایشان بدین حال مشاهده نمودند. در حیرت افتادند. پاره ای گریه میکردند و چندی که [در طبع او شوخی]<sup>۱۱</sup> غالب

- 
- |    |                              |
|----|------------------------------|
| ۱  | × [ت] [د]                    |
| ۲  | او [د]                       |
| ۳  | دهی [ت] [د]                  |
| ۴  | × [د]                        |
| ۵  | نبود [ت] [د]                 |
| ۶  | که کیها شده است که [ت]       |
| ۷  | به حکم آن که گفته [ت]، × [د] |
| ۸  | قطعه [د]                     |
| ۹  | وگر [د]                      |
| ۱۰ | گلی [د]                      |
| ۱۱ | [ت] [د]                      |
| ۱۲ | غازی [ت] [د]                 |
| ۱۳ | شوخی در طبع او [د]           |

جانب مقصد آوردیم. چون در آن وقت از شهر بیرون خرامیده بودیم که بعد از ساعتی به قدرت الهی چنان باد سخت<sup>۱</sup> پیدا شد که +<sup>۲</sup> باد [ثمود و هود]<sup>۳</sup> در پیش او گویا<sup>۴</sup> نسیم صبحگاهی بود. مشت مشت خاک بر چشم مردم زدن گرفت. و<sup>۵</sup> هندوی شب عالم را فرو گرفت، به حکم آن که

### بیت

قرص خورشید در سیاهی شد یونس اندر دهان ماهی شد

+<sup>۶</sup> عالم کون و فساد چنان تاریک و ظلمانی شده بود که زین اسب را نمیدیدیم. به آن محنت (۵۳۴) و مشقت راه می پیمودیم. در آن حین راه را گم کردیم و نمیدانستیم که به کدام جانب میرویم. اگر راه قطع میکردیم، هم از روی سر گشتگی باز مکرر به همان جای سابق می آمدیم. در آن وقت نیم از شب گذشته بود، از پنج هزار کس به نزد امیر در آن زمان از چهل کس زیاده نبود و مایان دست از زندگانی هزار بار شسته بودیم <۴۷۹ر> و جای هم نبود که {۴۸۶پ} نزول فرماییم +<sup>۷</sup> هر چند سعی میکردیم که<sup>۸</sup> به دیهی<sup>۹</sup> فرود آییم، نشان ده را نمی یافتیم. لا علاج خوش خوش راه می پیمودیم. در آن وقت به<sup>۱۰</sup> پیش امیر از پنج کس زیاده نمانده بود. سحر نزدیک رسیده بود و امیر و مایان از هلاکت رفته بودیم. مجال حرکت نمانده بود. دل از بودنی بر کندهیم و منتظر مرگ بودیم. در آن حین بود که از نزدیک

۱ سختی [د]

۲ گویا [د]

۳ عاد [د]

۴ × [د]

۵ × [د]

۶ و [ت]

۷ و [د]

۸ × [د]

۹ دهی [ت][د]

۱۰ در [د]

بوخچه<sup>۱</sup> < ۴۷۸ ر > لباس از دیبای رومی و یرلیغ به عمل خان خانان سرافرازی { ۴۸۵ پ }  
بخشیده بود.

## [بیت]

حق تعالی چون دری قسمت شاد هر کسی را آنچه می بایست داد]<sup>۲</sup>

روز دیگر حرم محترم را به جانب اخیسی رخصت اجازت فرمود. خود با امرای ذوی<sup>۳</sup>  
الاحترام با فر فریدونی و شوکت خسروی متوجه نمندگان شد. در کنار شهر جایی است، به  
بهار قلعه اشتهار دارد، در غایت خوبی و زیبایی<sup>۴</sup>. در کمال بلندی شادروان عظمت و اقتدار  
به اوج فلک دوار بر افراشت و فراشان چابک دست قالین های ابریشمی و مسندهای  
کیمخابی<sup>۵</sup> را بگسترانیدند و بکاوالان پادشاهی از هر گونه اطعمه لطیفه و اشربه لذیذه مهیا  
ساختند. در آن وقت امیر عمر خان با چندین شأن و تجمل به آن منزل دل گشا نزول اجلال  
فرمود و ساقیان لاله رخ و سرو قدان گل اندام جام شراب را در گردش در آورده، دل حاضران  
مجلس را از پا در می انداختند و مطربان زهره جبین ناهید آهنگ به تلقین های تازه دل  
کوچک و<sup>۶</sup> بزرگ را به صوت<sup>۷</sup> های عشاق به صید میبردند. در آن وقت چنان مردم<sup>۸</sup> آن  
جانب هجوم کرده بودند که از صد هزار زیاده بود. در آن روز چنان < ۴۷۸ پ > جشن بر پا  
ساختند که در آن زمان و<sup>۹</sup> عصر { ۴۸۶ ر } هیچ پادشاهی به وقوع نه آمده است. بعد از فراغ  
مجلس دست به عطا گشاد. روز دیگر قبل از عصر از آن منزل بهشت آیین کوچیده، رو به

۱ بوخچه [د]

۲ × [ت] [د]

۳ ذو [ت] [د]

۴ زیبایی [ت] [د]

۵ کیمخا [ت] [د]

۶ × [ت] [د]

۷ سوت [ت]

۸ مردمان [د]

۹ و در [ت]، در [د]

اعظم سید سلطان جلال الدین آن جا می باشند<sup>۱</sup>. چون به آن ولایت وارد گردیدیم، یک شب در آن جا سکونت اختیار کردیم. روز دیگر از آن منزل بی مانند سواری نموده، در موضع سفید بلان رسیدیم. در آن جا شهدا ما تقدم بسیار اند<sup>۲</sup> و جایی است، در کمال خوبی و نزاکت. همان روز امیر به زیارت بزرگان پرداخت و [نیز در آن وقت]<sup>۳</sup> [نذور و]<sup>۴</sup> صدقات به مستحقان بخشید.

### بیت

بر آستان تو آمد سر ارادت ما      اگر قبول تو افتد زهی سعادت ما

<sup>۵</sup> از آن جا مراجعت نمود. باز مکرر در ولایت کاسان نزول نمود. {۴۸۵ر} روز دیگر از آن جا کوچیده، <۴۷۷پ> شکار کنان در ولایت توره قورغان وارد گردید. چند روز به نای و نوش و شکار و صید طیور و وحوش و صحبت با سیمتن و<sup>۶</sup> گل اندام و موانست با حور نژادان دل آرام به سر برد. خاطر خطیر خود را از جمیع خیالات به<sup>۷</sup> پرداخت و لوای بهجت و سرور و عیش و حضور بر افراخت. در آن آوان بود، خبر رسید که حاجی میر قربان مع دو ایلچی محمد رحیم خان تحفه هایی که خلیفه روم سلطان محمود خان جهت امیر عمر خان فرستاده بود، ایشان همراه خود می آرند. امیر این خبر را شنید. محمد یوسف تونقاتر را به استقبال ایشان فرمود و تونقاتر ایلچیان را استقبال نموده، به خدمت امیر رسانیده، به کورونوش همایون داخل کرده، به دست بوسی امیر مشرف شدند و ایشان را امیر بسیار محترم داشت. به جای مناسب فرود آورد و چیزی که از سلطان روم آمده بود، یک شمشیر کندل، یک جفت طیانچه اعلی و دو ساعت نامه خوب (۵۳۳) و دو دوربین بی نظیر و یک

۱ باشد [ت] [د]

۲ است [ت] [د]

۳ × [د]

۴ × [ت]

۵ و [د]

۶ بر آن [د]

۷ بو [د]

در آن آوان بود که امیر عمر خان با امرا و محرم و یساول با چندین تجمل متوجه آن صوب گشت و حجله نشینان پرده عصمت و کنیزان ماه پیکر نیز از تعاقب امیر کوچ کرده، اراده آن ولا<sup>۱</sup> گردیدند<sup>۲</sup>. در آن روز در دیه<sup>۳</sup> بچقیر که بزرگترین دیهات<sup>۴</sup> آن جانب است، به فقیر تعلق داشت، نزول فرمود. همان شب فقیر طریقه مهمانداری را باید و شاید به جای آوردم.

## بیت

نظر کردن به درویشان منافی نیست بر بزرگی

سلیمان با همه حشمت نظرها داشت به امورش

روز دیگر از آن جا کوچ نمود<sup>۵</sup>. بر لب دریای سیحون وارد گردید. همان روز و شب تمام<sup>۶</sup> امرا را از دریا گذرانید. روز دیگر تمام حجله نشینان پرده عصمت<sup>۷</sup> رسیدند. با همراهی ایشان امیر از دریا عبور نمود. فقیر را در میان ایشان گذاشته، خود با شوکت پادشاهی {۴۸۴پ} متوجه آن ولایت شد. همه خورد و بزرگ <۴۷۷ر> آن جانب استقبال نموده، به رکاب بوسی او مشرف شدند. امیر با دبدبه بسیار در ولایت توره قورغان اعلام اقتدار (۵۳۲) بر افراخت<sup>۸</sup> بعد از خفتن مایان نیز مع حرم وارد گردیدیم. روز چهارم از آن جا به جانب کاسان متوجه شدیم و آن شهری است، در غایت خوبی و نزاکت. در تمام ولایت فرغانه مثل او در خوبی هیچ یکی از شهرها به او برابری نمیکنند و قبر پدر حضرت مخدوم

۱ ولایت [ت]

۲ کردند [ت] [د]

۳ دهه [ت] [د]

۴ دهات [ت] [د]

۵ نموده [د]

۶ [د]

۷ غفت [د]

۸ و [د]



متکفل شده، از حبس بیرون کشیدند و امیر [عمر خان]<sup>۱</sup> سیادت (۵۳۱) پناهان را در بیرون نگذاشت. کوچانیده، به ارگ در آورد و<sup>۲</sup> اما سیادت پناهان به اختیار خود می‌گشتند.

ذکر رفتن امیر عمر خان<sup>۳</sup> به سوی ممالک توره قورغان و نمنگان و کاسان [از بهر تفرج]<sup>۴</sup> + چون سال دیگر دوران فصل شتا به نهایت و اختتام رسید، فصل بهار که خنجر بیداد سبزه را آب داده، پیکان غنچه به دست نسیم سوده شد. سنان<sup>۵</sup> نیزه خار به حمایت مهد گل بر خواست و سپر زرکوب گل پیش تیر باران ابر بهاری آمد. درع سیمایی آب از صیقل صفا شعاع بر آیین سپهر انداخت و تیر رد از کمان قوس و قزح<sup>۷</sup> جهیدن گرفت.

#### قطعه

{۴۸۴ر} <۴۷۶پ> ابر نوروزی علم بر گوشه افلاک زد  
وز خروش فاخته گل جامه بر تن چاک زد  
آبخورده نسترن<sup>۸</sup> در چشم نرگس خاک ریخت  
لاله خیمه در جوار سوسن چالاک زد

۱ [ت]

۲ [ت][د]

۳ از بهر تفرج [د]

۴ × [د]

۵ چون سال دیگر دوران فصل شتا به نهایت و اختتام رسید و آثار بهار سپاه ریاحین و ازهار به فضای صحرا و به ساتین کشید و جنود برودت و سرما از هجوم لشکر فروردین منهزم گشت و خاقانی شرقی انتساب آفتاب خانه بهرام را مسخر ساخت و رأیت نخوتش از چرخ هفتم در گذشت.

#### نظم

سلطان جهان نورد ایام زد خیمه بتخت گاه بهرام  
افراخت علم ز لاله در دشت عالم ز سپاه سبزه پر گشت اخره (با خط بطلان)[د]

۶ سنانی [د]

۷ قزح [ت]

۸ نسترن [ت][د]

بیارد، آن ملعونان نمیگذاشتند. بالاخر به چندین گفتگو چیلیم را آورد. چون چشم آن سیادت پناهان به چیلیم افتاد، گویا جان<sup>۱</sup> تازه یافتند و هر دو برادر چیلیم را به دست<sup>۲</sup> + یک دیگر داده، نوبت به نوبت چنان میکشیدند که قریب بود که آب چیلیم آتش گیرد. از فقیر حالت<sup>۳</sup> گریه رفته، چنان خنده غلبه کرده بود که خود را به تکلف نگاه میداشتم. قبل از این مقدمه سیادت پناه [نشئه خود را از فقیر]<sup>۴</sup> مخفی میداشت. وقت را یافته، گفتم، >حالا هم مخفی میدارید، یا اقرار میشوید.< چون این سخن از فقیر شنید، سر خجالت به پیش افکنده<sup>۵</sup>، بعده<sup>۶</sup> گفت.

### مصراع

آن جا که عیان است چه حاجت به بیان

در حال محرم خود را فرمودم، قدری افیون پنهان<sup>۷</sup> آورد. به سیادت پناه دادم. چنان از فقیر خرسند شده بود که گویا هفت شهر او را در آن جا موجود کرده باشم، غلط گفتم، >بل هفت اقلیم را مهیا کرده بودم. چون {۴۸۳پ} از پیش<sup>۸</sup> + سیادت پناه<sup>۹</sup> مراجعت نمودم<sup>۱۰</sup>، >۴۷۶ر< حاجبان یک به یک صورت واقعه را به خدمت امیر عرضه نمودند. امیر غایبانه از فقیر در غضب آمد. بعد از سه روز جناب هدایت پناه ایشان ذاکر خواجه مرشد امیر بل همه<sup>۱۱</sup> امرای خوقند بودند، به مصلحت جناب قبله گاهم به نزد امیر رفته، هر دو سیادت پناه را<sup>۱۱</sup>

۱ [د]، جانی [س] [ت]

۲ گویا [ت]

۳ حال [د]

۴ نشاء خود را از فقیر [ت]، از فقیر نشاء خود را [د]

۵ افکند [ت] [د]

۶ بعد [ت] [د]

۷ مخفی [د]

۸ آن [د]

۹ پناهی [د]

۱۰ فرمودم [د]

۱۱ × [ت]

واقعہ پاک سازد. من در حال پاک میسازم. آن گبر از فقیر این جواب شنید، دید کہ مشّت به درفش راست نمی آید. لا علاج گردن خار خار به جای خود رفتہ، قرار گرفت.

### بیت

سخت گور را سخن سخت به اصلاح آرد    چرک پراهن پولاد به صابون نرود

(۵۳۰) و فقیر به نزدیک سیادت پناہ رسیدم. چون چشم برادرم به فقیر افتاد، گریہ کنان از جای بر جست. یک دیگر را در کنار گرفتیم. به فقیر نیز گریہ غلبہ کرد. به حال ایشان گریہ می کردم و این +<sup>۱</sup> بیت به زبان جاری بود.

### نظم<sup>۲</sup>

کلبہٗ احزان شود روزی گلستان غم مخور  
 بشکفد گلہای وصل از خار ہجران غم مخور  
 گرچہ<sup>۳</sup> گردون از بد دوران او سر گشتہ ای  
 آید این سر گشتگی روزی به پایان غم مخور<sup>۴</sup>  
 ہر غمی را شادی در پی بود دلشاد دار  
 هیچ دردی نیست کور نیست درمان غم مخور<sup>۵</sup>  
 {۴۸۳ر} بی سحر ہرگز نماند شام بی صبری مکن  
 ہرچہ<sup>۶</sup> دشوار است روزی گردد آسان غم مخور<sup>۷</sup>

در آن حال بہ محرم خود فرمودم کہ چیلیم بیار و محرم خواست کہ چیلیم <۴۷۵پ>

۱ چند [د]

۲ ابیات [د]

۳ گرچہ [ت]

۴ × [ت]

۵ × [د]

۶ گرچہ [د]

۷ × [د]

تنگ آمد. خصوص یک شب و <sup>۱</sup># + <sup>۲</sup> روز حال او <sup>۳</sup> به چندین محنت و مشقت گذشت. روز دیگر باز گشت سلام امیر اتفاقا گذار فقیر در آن جا افتاد. برادری و خویشی دامن گیر شد. نخواستیم که سیادت پناه را ندیده <sup>۴</sup> گذرم.

## بیت

دوست آن باشد که گیرد دست دوست در پریشان حالی و افتاده گی

لا علاج متوجه آن جا گشتم. چون به در آن حویله رسیدم، افغانان مریخ هیئت و غلامان عفريت منظر را [دیدم که] <sup>۵</sup> به دست هر کدام ایشان گوروز<sup>۶</sup> و خنجر و آی بالتو گرفته، نشسته اند. آن دیو سیرتان فقیر را دیدند. همه از جای بر جسته، سلام کردند. دیدند<sup>۷</sup>، فقیر آرزوی دیدن سیادت پناه دارم. در حال بزرگ ایشان به <sup>۸</sup> پیش فقیر آمده، مانع شده<sup>۹</sup>، گفت، <اگر جناب شان به پیش سیادت پناه تشریف فرمایند، > ۴۷۵ ر < سر میان بر باد خواهد رفت و مال ما به تاراج.

## [بیت]

چون ترا اندر حریم قرب خود ره داد شاه از نفر پرده و از طعن دربان غم مخور<sup>۱۰</sup>]

فقیر در جواب آن ملعون گفتم، <سر ناپاک ترا امیر {۴۸۲ پ} بعد از شنیدن این

- 
- |    |                    |
|----|--------------------|
| ۱  | [ت][د]             |
| ۲  | یک [د]             |
| ۳  | × [د]              |
| ۴  | نا دیده [ت][د]     |
| ۵  | × [ت]              |
| ۶  | گوروز [ت]، گرز [د] |
| ۷  | که [ت]             |
| ۸  | × [ت]              |
| ۹  | شد و [ت]           |
| ۱۰ | × [ت][د]           |

### ذکر حبس کردن امیر عمر خان برادر سیادت پناهی جهانگیر خواجه را

بعد از وفات سیادت پناه محمود خان چند روز {۴۸۱پ} گذشته بود که باز به سر برادر سیادت پناهی جهانگیر خواجه فیضی هوای تسخیر ولایت کاشغر افتاده و ارتکاب گریختن کرده<sup>۱</sup>، بل از شهر بیرون خرامیده بود که امیر از این واقعه خبر یافته، از عقیب سیادت پناه کس فرمود. سیادت پناه دانست که از این سفر خلاصی ندارد. لا علاج به راه دیگر باز مراجعت فرموده، در شهر داخل شده، به خانه خود آمده، به نادانی انداخته، بنشست<sup>۲</sup>. با وجود +<sup>۳</sup> از تدبیر سیادت پناه امیر واقف گشته، سیادت پناه را مع برادرش (۵۲۹) محمد خواجه نزدیک قصر خود حویچه<sup>۴</sup> بود، آن جا برده، حبس نمود و صد افغان را به محافظت سیادت پناهان گذاشته، امر نمود که در پیش سیادت پناه پشه پر نزنند و تماکو و از جنس [نشه ای احدی]<sup>۵</sup> نبرد که سرش بر باد خواهد رفت و مالش به تاراج. هر روز از خدمتکاران<sup>۶</sup> امیر یک بار طعام و آب طهارت میبردند. <۴۷۴پ> دیگر آرایبی کسی نبود که در آن جا قدم نهد. چون غضب امیر به این درجه رسید، همه برادران از سیادت پناه منکر شدند، چنانچه<sup>۷</sup>

### بیت

{۴۸۲ر} به هر جا پا نهادم پای امیدم به سنگ آمد  
به هر کس لاف یکرنگی زدم آخر دو رنگ آمد

از بس که برادر جهانگیر خواجه بسیار افیون و کوکنار میخورد، حال او بسیار به

۱۳ قیاس باید کرد [ت]

۱ کرد [د]

۲ نشست [د]

۳ او [ت]

۴ حویچه ای [ت]

۵ نشأ احدی [ت]، نشأ ای کسی [د]

۶ خدمتکار [ت]

۷ به حکم آن که [ت]، × [د]

آبروی تمام برده، به خاکدان سپردند. مدت عمرش پنجاه و <sup>۱</sup> هفت سال و مدت حکومتش در اوراتیپه دوازده سال <sup>۲</sup>. در میان سیدها <sup>۳</sup> مثل او سپاهی نگذاشته است. کار او بسیار است. به هر کدام (۵۲۸) شروع رود، سخن به طول می انجامد. یکی کار او این بود که در عصر <۴۷۳ پ> بابا دیوان بیگی برادر <sup>۴</sup> خدایار بی والنعمی در ولایت فلغر به قلعه اورمیتن حاکم بود. در آن زمان در عصر شاه مراد بی میر حسین بیک ولد شاه مراد بی والنعمی که <sup>۵</sup> حاکم ثمرقند بود و جین {۴۸۱ ر} شاه مراد بی والنعمی <sup>۶</sup> محمد یوسف خواجه به امر والنعمی با لشکر بسیار متوجه کوهستان شده، بعد از قطع راه به مشقت بسیار به سر سیادت پناه رسیدند. [در آن وقت] <sup>۷</sup> سیادت پناه بی خبر بود. به پیش او کسی نبود، مگر شاگرد پیشه ها و لشکریان منقیت <sup>۸</sup> قلعه را محاصره نموده، آغاز جنگ کردند. در آن روز در غایت باران بود. سیادت پناه دید که کار نمیشود. لا علاج به هژده کس پیاده برآمده، بر آن لشکر بیکران به هم در آمیخت و چندی را هلاک ساخت. در آن وقت از دور مردم کوهستان جمع شده، نمایان شدند و لشکریان منقیت <sup>۹</sup> خود به خود فرار نموده، مراجعت فرمودند و آن حال را سیادت پناه مشاهده نمود <sup>۱۰</sup>. ایشان را فرو نگذاشته <sup>۱۱</sup>، قدم پیش می ماند. بعد از جنگ بسیار سیصد کس را اسیر کرد و چندی به هلاکت رسید. با فتح {و} نصرت به قلعه خود مراجعت <۴۷۴ ر> فرمود <sup>۱۲</sup>. شجاعت او را از این [باید قیاس نمود] <sup>۱۳</sup>.

۱ [ت][د]

۲ بود [د]

۳ سید [ت][د]

۴ دادر [د]

۵ × [ت]

۶ × [د]

۷ × [د]

۸ منغیت [ت][د]

۹ منغیت [ت][د]

۱۰ نموده [د]

۱۱ نگذاشت و [د]

۱۲ نمود [ت][د]

رباعی<sup>۱</sup>

یک چند روز<sup>۲</sup> صحبت نیکان کن اختیار  
تا طبع<sup>۳</sup> نیکویت ز [سمک تا سما]<sup>۴\*</sup> شود  
نشیده ای که هر چه به کان نمک فتد  
در سهل<sup>۵</sup> روز بگذرد<sup>۶</sup> آن هم نمک شود

{۴۸۰پ} در آن زمان وفات سیادت پناه را شنیده، این تأریخ +<sup>۷</sup> را گفت.

## تأریخ

شعرا طبع صافیدین هزیان      بولدی تأریخ رحلتی جاری  
تونقـاتر ایدی آه و واه بیلـه      اولدی محمود خان احراری

آری گفته است.

## قطعه

گردون در آفتاب سلامت که را نشاند      که آخر چو صبح اولش اندک بقا نکرد  
خیاط روزگار به بالای هیچ کس      پراهنی ندوخت که آخر<sup>۸</sup> قبا نکرد

روز دیگر امیر به جنازه آن سیادت پناهی<sup>۹</sup> و تمام امرا و فقرای خوفند جمع شده، به

۱ قطعه [د]

۲ × [ت]

۳ نام [د]

۴ [ت][د]، سما تا سمک [س]

۵ یک چند [د]

۶ نگذرد [ت]

۷ ترکی [د]

۸ آن را [د]

۹ پناه رفت [ت][د]

نمیشناخت. هر کس به حال خود شد. در آن وقت همراه امیر به پیش قلعه قوش تیگرمان رسیدیم. به آن روز قیامت برادرم سیادت پناهی محمود خان با وجود مرض بودن که همه [اعضایش را آماسیده بود]<sup>۱</sup>، از لشکر پیشتر آمده، امیر عمر خان را استقبال نموده، به قلعه خود تکلیف نمود. <۴۷۲پ> امیر خندید. چیزی نگفت و دانست که کار سیادت پناهی<sup>۲</sup> شده است و حرکت های نامناسب بی اختیار به وقوع می آید. فقیر را امر فرمود<sup>۳</sup> که سیادت پناه تصدیع نکنند. به قلعه خود مراجعت {۴۸۰ر} فرمایند<sup>۴</sup> و خود امیر در غایت سرعت راه طی میکرد. قبل از نماز عصر در ولایت خجند نزول اجلال فرمود. همان روز (۵۲۷) از پای دولت قوش بیگی اشکیل را گرفته، سر و پا مع اسب جبدوق انعام فرمود و سه روز در آن ولایت از رنج راه بر آسود. روز چهارم سواری نموده، متوجه مقصد گشت. بعد از سه منزل به دولتخانه خود رسید. به عدل و داد پرداخت.

### ذکر وفات سیادت پناهی محمود خان

در آن آوان که کسل سیادت پناهی محمود خان در غایت صعب شد. قلعه را به دولت خواهان امیر گذاشته، خود متوجه خوقند شد<sup>۵</sup>. بعد از پنج روز به شهر آمده، داخل شد. روز دیگر از این دار الفناء<sup>۶</sup> به دار البقا رحلت نمود. در آن زمان محمد یوسف تونقاتر که ندیم امیر بود و تمام شعرا به او تعلق داشت و عامی بود، <۴۷۳ر> اما از صحبت نیکان بهره ای برده، شعر مشق میکرد. به حکم آن که

۱ اعضایشان را آماس گرفته بود [ت]، اعضایش ماسیده بود [د]

۲ پناه [د]

۳ نمود [ت] [د]

۴ فرماید [ت]

۵ گشت [ت]

۶ فنا [ت]



در آن وقت در میان قوشون از هر وجه قحطی افتاده بود. خصوص تماکو به نهجی نایاب شده بود که شخصی یک اسب تماکو داشت. به صد<sup>۱</sup> طلا فروخت و خود فقیر یک چیلیم تماکو را به یک اسب گرفتم. اتفاقاً همان روز به خدمت امیر نشسته بودیم. میرزا رحیم پروانچی یک خلته چه تماکو آورده، به خدمت امیر (۵۲۶) گذاشت. تخمیناً<sup>۲</sup> صد مثقال بود. امیر از آن کار امارت پناهی خرسندیها نمود و در تحت مسند خود گذاشت، چرا که به خدمت امیر هم تماکو نمانده بود. در آن حین از روی گستاخی چشم امیر را خطا کرده، یک کف برداشتم. بعد از ساعتی بیرون رفتم. محمد علی خان ماده<sup>۳</sup> بسیار التجا کرد. چهار یک او را به او دادم. دیگر<sup>۴</sup> او را به خود نگاه داشته، به احتیاط تمام میکشیدم. در آن وقت تماکو آن قدر قدر یافته بود که یک چیلیم اندازند، بی مبالغه صد کس میکشید و مدت <۴۷۲ر> محاصره در آن وقت به هژده روز کشیده بود. امیر دید که از محاصره آن ولایت هیچ نفعی نبوده است. دانست که مصلحت مصلحت اول {۴۷۹پ} بوده است. اکنون پشیمان<sup>۵</sup> میخورد. نفعی نداشت.

### بیت

دست بر دست میزند که دریغ نشنیدم حدیث دانشمند

زبده کلام این که امیر خوب مطالعه فرمود که کار از دست رفته است. روز دیگر لا علاج گردن خار خار دولت قوش بیگی را قید نموده، همراه خود به جانب دار السلطنة خوقند مراجعت نموده، به چهار کوچ در موضع خیر آباد وارد گردیدیم. روز دیگر از آن جا کوچیده، متوجه خجند شدیم. در اثنای راه چنان باد<sup>۶</sup> سخت برخواست، کس<sup>۷</sup> یک دیگر را

۱ سی [ت]

۲ تخمین [ت][د]

۳ غازی [ت][د]

۴ دیگری [د]

۵ پشیمانی [ت][د]

۶ بادی [ت][د]

۷ کسی [ت][د]

قپچاق و قره قلیاق به هر کدام ایشان موافق حال خود<sup>۱</sup> عمل و سر و پای عالی سرافرازی بخشید {۴۷۸پ} و [برادرم اسحاق دیوان بیگی را]<sup>۲</sup> یرلیغ و لباس خاصه خود مع اسب جبدوق طلا الاقیش و از هر جنس مال انعام نموده، بر سبیل امارت بر ایشان همراه کرده، فرستاد و در آن وقت در میان خطای قپچاق انه قل دادخواه و مامور<sup>۳</sup> بی نام را حاکم ساخته بودند. امیر هر دوی ایشان را پروانچی کرده، لباس خود<sup>۴</sup> و اسب جبدوق طلا با همراهی اسحاق دیوان بیگی فرستاد. چون اسحاق دیوان بیگی در آن جا رفته، کوس امارت نواخت<sup>۵</sup>، در آن وقت مردم ولایت جیزخ از بابت آب بسیار به تنگ آمده بودند. روزی از روی لا علاجی با پانصد سپاه کینه خواه سیرمه قلیج شده، بر آمده، به سر حاکم شهر خان به<sup>۶</sup> جیلودار ایناق ریختند. چنان جنگی شد که از کشته ها پشته برداشتند و از خون بهادران خاک رزمگاه حنایی بست. سه ساعت نجومی از هر دو جانب تیر چنان آتش میخورد که در میان میدان تیر و<sup>۷</sup> تفنگ مثل ژاله می بارید. بعد از محاربات <۴۷۱پ> بسیار هر دو لشکر از هم جدا شدند. به جیلودار ایناق سه تیر رسیده بود. کار او شده بود. {۴۷۹ر} بعد از سه روز آن مبارز معرکه میدان دنیای<sup>۸</sup> فانی را وداع نمود<sup>۹</sup>، رو به آخرت<sup>۱۰</sup> آورد.

### [بیت]

بهار عمر بسی دلفریب {و} رنگین است ولی چه سود که دارد خزان مرگ از پی<sup>۱۱</sup>

۱ × [د]

۲ به برادرم اسحاق دیوان بیگی [د]

۳ عمور [ت]

۴ خوب [ت][د]

۵ بنواخت [د]

۶ × [د]

۷ [ت][د]

۸ دنیایی [د]

۹ نموده [د]

۱۰ آخری [د]

۱۱ × [ت][د]

ابلهی بود، از غایت بیم < ۴۷۰ پ > به خدمت امیر در<sup>۱</sup> آمده، عرض<sup>۲</sup> نمودند که مثل محمد رحیم دیوان بیگی بر این کس را در عقیب گذاشته و ولایت جزخ را نیز پر تافته، +<sup>۳</sup> به سخن پنج شش خطای { ۴۷۸ ر } قیچاق عمل نموده، حزم را اندیشه نکرده، در میان دشمن داخل شدن، جناب خورشید کلاهی، از حکمت دور مینماید. امیر عمر خان چون این سخن شنید، در بحر تفکر فرو رفت +<sup>۴</sup> آن جا که فتح بخارا نصیب او نبود، سخن ایشان مقبول افتاده، سفر آن جانب را منع فرمود و کشورگشایی<sup>۵</sup> خود را در توقف انداخت.

## بیت

دولت نه به اکتساب علم و هنر است      و<sup>۶</sup> [بستی احکام] قضا و قدر است

القصه.<sup>۸</sup> روز دیگر فقیر و محمد علی خان ماده<sup>۹</sup> +<sup>۱۰</sup> حکم نمود<sup>۱۱</sup> که با لشکر انبوه رفته، ولایت ثمرقند را از خدای عالم طلب نمایند. ما این نوید را شنیده، در غایت خرسندی به سر رشته کار خود بودیم که باز آن دو راه زن به خدمت (۵۲۵) امیر در آمده، عرضه نموده است که در این جای پر خطر لشکر نصرت اثر را تقسیم نمودن نیز از حکمت دور است +<sup>۱۲</sup> امیر باز سخن ایشان را قبول نموده، مایان را منع فرمود. روز دیگر امرای خطای < ۴۷۱ ر >

۱ × [ت]

۲ عرضه [د]

۳ محض [د]

۴ و [د]

۵ کشورگشای [د]

۶ × [ت]

۷ بستی الطاف [ت]، بسته الطاف [د]

۸ × [د]

۹ × [ت]، غازی [د]

۱۰ را [ت]

۱۱ فرمود [د]

۱۲ و [د]

نیز سعی بلیغ نموده، عرضه کردند که اگر جناب معدلت<sup>۱</sup> پناهی به دولت سواری نموده، متوجه بخارا شوند، کسی نیست، +<sup>۲</sup> مانع جناب قمر رکابی شود < ۴۷۰ ر > و آن (۵۲۴) بیچاره ها نیز بسیار التجا نموده، مکرر عرض کردند. مفید نه افتاد، [به حکم آن که]<sup>۳</sup>

## بیت

شد پیمبر به مشورت مأمور { ۴۷۷ پ } تو چرا زین طریق باشی دور

در آن حین بود که پی در پی قاصدان سبکرو از شهر سبز از پیش دانیال اتالیق خط آوردند. مضمون خط نیز عرض امرا بود<sup>۴</sup> تا حتا در کتابت خود این بیت را نوشته بود که<sup>۵</sup>

## بیت

همه کار جهان ناموس و ننگ است و گر نه نیم نان روزی تمام است

و<sup>۶</sup> آن جا که خدا نخواست<sup>۷</sup>، این سخنها کارگر نه آمد. در آن روز فقیر از بهر دیدن کسلی<sup>۸</sup> سیادت پناه<sup>۹</sup> محمود خان در خیمه او رفته بودم. جناب قبله گاهم<sup>۱۰</sup> ایشان سلطان خان و محمود خان نیز مصلحت مذکور را در غایت مبالغه از فقیر عرض کرده، به خدمت امیر فرستادند. فقیر رفته، به خدمت امیر در کمال التجا از روی دولت خواهی و گستاخی عرض کردم. امیر قبول نموده بود. در آن وقت قاسم اتالیق نام ترسنده ای بود و یوسف پروانچی نام

۱ جهان [د]

۲ که [ت]

۳ × [د]

۴ [ت]

۵ × [د]

۶ × [ت]

۷ خواست [ت]

۸ کسل [د]

۹ پناهی [ت] [د]

۱۰ قبلگاهی [د]

داری بیزار شده بود<sup>۱</sup>، یک روزه عمر آن حال را از جمله زندوگانی<sup>۲</sup> نمیشمرد<sup>۳</sup>. در آن وقت اولیای<sup>۴</sup> دولت جمع شده، به خدمت امیر عمر خان عرض نمودند که صلاح دولت این است که به چندین سال این نوع حادثه ها به عالم کون و فساد به وقوع می آید. حالا شنیدیم که +<sup>۵</sup> دانیال اتالیق <۴۶۹پ> هفت قلعه منقیت<sup>۶</sup> را گرفته و ولایت قرشی را به تنگ آورده است {۴۷۷ر} و جماعه اورگنجی به امر محمد رحیم خان تا بخارا را<sup>۷</sup> تاخت نموده، بل به دروازه شهر آتش سر داده است و خطای قپچاق و قره قلیاق و کل اوزبک میان کال بلوا نموده، دولت قوشبیگی حاکم ثمرقند را به قید کشیده و دست به ثمرقند دراز کرده اند و امیر حیدر پادشاه خانه نشین شده است. اکنون مصلحت این که این حصن حصین با سر رشته را وا گذاشته، بلا توقف متوجه ثمرقند شوند. هر آینه در این کار اهمال ورزند، پشیمانی خواهد آورد.

### مصراع<sup>۸</sup>

چرا عاقل<sup>۹</sup> کند کاری<sup>۱۰</sup>\* که بار آرد پشیمانی

در آن وقت از بزرگان +<sup>۱۱</sup> خطای قپچاق و قره قلیاق با هزار جوان شیر افکن دولت قوشبیگی را مع تارتوق و بیلاکات بسیار به رکاب بوسی امیر آمده، کورونوش دادند و ایشان

- 
- ۱ بودند [ت]
  - ۲ زندگانی [ت][د]
  - ۳ نمیشمردند [ت]
  - ۴ ارکان [ت]
  - ۵ مردم کنگس و [ت]
  - ۶ منغیت [ت][د]
  - ۷ [ت][د]
  - ۸ ع [ت]
  - ۹ [د]، کاری [س][ت]
  - ۱۰ [د]، عاقل [س][ت]
  - ۱۱ در آن وقت بود که [ت]

تفنگ آتش میخورد. خرگاه<sup>۱</sup> که امیر می نشست، نیم بالای او به بیش<sup>۲</sup> نمایان بود. چنان میزد که مثل ستاره آسمان غلبیر ساخته بود.

### مثنوی<sup>۳</sup>

چو دریای خونخوار چون ژرف<sup>۴</sup> رود      به دروازه شهر آمد فرود  
از این پس سراپرده شهریار      کشیدند یک سوی پیش حصار

و آن شب امیر حکم نمود، تا صبح مبارزان ظفر قرین از دسته های شاخچه پیش برده، خم<sup>۵</sup> و راست کوچه ها و سرکوبها ساخته، <۴۶۹ر> از میرگنان {۴۷۶پ} که<sup>۶</sup> در شب تاریک از چشم مور میزدند، آن جا گذاشت و منجنیق و عرابه و توپ ها را نیز آن جا برده<sup>۷</sup>، روز دیگر مردم قلعه را چنان در تحت توپ (۵۲۳) گرفته بودند که در میان ولایت جیزخ تیر توپ مثل ژاله می بارید. آرا<sup>۸</sup> کسی نبود که<sup>۹</sup> از قلعه سر بیرون کند. در آن وقت میانه قلعه و سرکوب ایشان به پنجاه قدم زمین<sup>۱۰</sup> مسافت داشت و گورکاوان نیز نقب را به اور رسانیده بودند. در آن وقت حکومت آن ولایت از جانب امیر حیدر پادشاه به<sup>۱۱</sup> برادر حکیم قوشبیگی به عبد الرسول دادخواه تعلق داشت، آن گورچین<sup>۱۲</sup> داد مردی را داد. اما خود چنان<sup>۱۳</sup> از قلعه

۱ سراپرده ای [ت]، سراپرده [د]

۲ بدیش [د]

۳ قطعه [د]

۴ ژرو [د]

۵ چپ [ت]

۶ [ت]

۷ حاضر ساختند [ت]

۸ آرای [ت]، آرای [د]

۹ × [د]

۱۰ [ت][د]

۱۱ × [د]

۱۲ گوردل؟ [ت]

۱۳ قوشونیان [ت]

گرفته بودند که مثل ژاله (۵۲۲) می بارید. همهٔ امرا و ندیمان در نزد<sup>۱</sup> امیر بودیم و<sup>۲</sup> امیر محمود نام پایگی داشت، در آن وقت به امیر چیلیم می داشت. از قضا تیر به پیشانی او رسید و در افتاد و چیلیم بر زمین خورد [و نغزی]<sup>۳</sup> به حال<sup>۴</sup> امیر راه نیافت و محمود را در کنار بردند. بعد از ساعتی به خود آمد. مجروح گشته بود. امرا چون این حال را مشاهده نمودند، در تفکر افتادند. آرای<sup>۵</sup> کسی نبود که<sup>۶</sup> لب گشاید. لا علاج بر<sup>۷</sup> رمز ایما رو به قبله گاهم آوردند. جناب سیادت پناهی از روی گستاخی از جای خود بر خواسته، از دست امیر گرفت<sup>۸</sup> و گفت<sup>۹</sup>، <ای شاه +<sup>۱۰</sup>>، این نوع حرکت را عقلا از جمله شجاعت نمی شمارند. مهربان شده، {۴۷۶ر} از کنارتر تماشا کنند، بهتر می نماید. امیر سخن <۴۶۸پ> جناب شان را قبول نموده، به پنه دیوار آمده، بنشست و حکم نمود که خرگاه<sup>۱۱</sup> خاصه را آن جا آورده، بر پا کنند. این سخن را از زبان امیر شنیده، همه در حیرت افتادند و سراپرده را در حال بر پا کردند. همان روز در پیش امیر از لشکریان تا مرده و زخم<sup>۱۲</sup> [یره دار]<sup>۱۳</sup> شده، به پنج صد کس رسیده بود و از جانب<sup>۱۴</sup> سرداران هم کسی بسیار مجروح شده بود. همه به خدمت امیر به آن منزل پر بیم به چندین ترس و وهم گذاشتیم. اما تمام شب یک نفس خالی نبود، از قلعه

- ۱ سر [د]
- ۲ × [ت]
- ۳ ذره ای بیم [ت]، نغز [د]
- ۴ [ت] [د]
- ۵ آرای [ت]
- ۶ × [د]
- ۷ به [ت] [د]
- ۸ گرفتند [د]
- ۹ گفتند [ت] [د]
- ۱۰ عالم [د]
- ۱۱ سراپرده [ت] [د]
- ۱۲ × [ت]
- ۱۳ دار [د]
- ۱۴ × [د]

نی<sup>۱</sup> که به آق تون مشهور بود، در پوشید و در<sup>۲</sup> بارگی قمر مسیر که (۵۲۱) به هما کوک اشتها داشت، نشسته، متوجه تعبیه سپاه کشورگیر گردید و در برانغار حاکم مرغینان قربان بیک دادخواه و حاکم اندجان عیسی دادخواه و حاکم شهر خان جلودار ایناق با جمعی از اهل تهوور معاونت ایشان را پیش نهاد {۴۷۵ر} همت ساخته، رأیت فتح آیت بر<sup>۳</sup> افراخت و جوانغار لوای نصرت را به وفور شوکت حاکم توره قورغان و<sup>۴</sup> نمندگان ایر نظر دیوان بیگی و حاکم چست خوشوقت قوشبیگی و حاکم خجند شاهی پروانچی استحکام پذیرفت و بسیار از سپاه ظفر قرین به مدد او <۴۶۷پ> تعیین پذیرفت و حاکم تاشکند لشکر قوشبیگی و حاکم قورمه محمد شریف دادخواه و حاکم نوداول پروانچی به هواداری قراولی مقرر گشت و دیگر سرداران و امرا مع<sup>۵</sup> امیر عمر خان در سایه لوای همایون قرار گرفتند. به این ترتیب و به این نسق سمند هامون نورد را به جولان آورده، متوجه جیزخ شدند و آن ولایت را چون حلقه میم در میان گرفته، از چهار جانب او نزول اجلال فرموده، به تعبیه متجنیق و عرابه و غیر دیگر<sup>۶</sup> آلات محاصره پرداخت. روز دیگر آفتاب زرین بال ربع مسکون را مسخر نمود. امیر عمر خان به نفس نفیس خود از روی تهووری به صد قدم زمین به قلعه نزدیک رسید و بر دیواری بر آمده، مربع نشست و کلهم لشکریان فرغانه را حکم نمود که سری<sup>۷</sup> کسی یک بند شاخ آورده، انداختن گیرند. آن ولایت {۴۷۵پ} در غایت کثرت اشجار بود. از بسیاری لشکر در چهار ساعت نجومی از خس و خاشاک چنان پاک ساختند که به دندان کافتن چوبی یافت نمیشد و مبارزان کینه خواه <۴۶۸ر> بند شاخ را گرفته، در تاز آمده، به نزدیک قلعه انداخته، مراجعت میفرمودند. بسیاری به تیر می پرید و جمعی زخم گین میشد. در آن وقت در پیش امیر از بند شاخ کوهی بر پا ساخته بودند. در آن حال مردم قلعه چنان در شبه تیر

۱ را [ت]

۲ × [د]

۳ [ت][د]

۴ [ت]

۵ × [د]

۶ به [د]

۷ [ت][د]، سر [س]



نموده، در موضع آق تپه آمده، دعا کرد. اما در غایت بیماری بود. با وجود [مرض خود]<sup>۱</sup> از سفر نماند. چون امیر عمر خان ولایت اوراتپه را به دست چپ گذاشته، قطع راه نمود<sup>۲</sup>، بر لب دریای سیحون در موضع خیرآباد نزول فرمود، [به حکم آن که]<sup>۳</sup>

### بیت

نهنگ آن است که با دریا ستیزد      نه آن که آبرو بر جوی ریزد

روز دیگر از آن جا کوچیده، بعد از دو منزل دیگر در موضع چهار باغ دیوانه که یک فرسخ است در قلعه جیزخ، وارد گردید و خدام موکب امیر آن شب تا روز بنابر قرب باغی جانبین که یکی حاکم اوراتپه برادر امارت پناهی محمد رحیم دیوان بیگی {۴۷۴پ} و دیگر<sup>۴</sup> ایلغریانی که در جزخ بودند، اشارت عالی به نفاذ انجامید که مراسم حزم و نگهبانی به تقدیم رسانیده، تهیه اسباب مقاتله کرده، خود را آماده معرکه کار و زار گردانیده، صباح روز دیگر جمشید بیضا علم یعنی خورشید انجم حشم به عزم رزم جوشن <۴۶۷ر> زر نگار ظفر آثار در پوشید و قدم در فضای معرکه سپهر دوار نهاد و<sup>۵</sup> سپاه شب را مغلوب گردانیده، منهزم ساخت.

### مثنوی<sup>۶</sup>

صبحاحی که آفتاب افراخت رأیت      رساند اوقات ظلمت را به غایت  
به میدان راند نورانی مواکب      به تیغ افشانند سرهای کواکب

و امیر عمر خان مغفر مرصع کندل خالدار جهره نی<sup>۷</sup> بر سر نهاد و جوشن خالدار جهره

۱ مریض بودن [د]

۲ نموده [د]

۳ × [د]

۴ دیگری [ت] [د]

۵ × [ت]

۶ قطعه [د]

۷ را [ت]

دولت قوش بیگی را در قلعه ینگی قورغان دستگیر نموده، ملک و اموال او را به تاراج برده اند. تمنای آن {۴۷۳پ} دارند که مملکت ثمرقند را نیز به دست آرند. < و آن مرد زانو زده، به خدمت امیر عمر خان عرضه نمود که > چندی از تیل چیان حاکم خجند شاهی پروانچی در کمال تعجیل طی مسافت نموده، از موضع جوپار قوروغی مردی از جماعه قره قلیپاق را دستگیر < ۴۶۶ر > نموده<sup>۱</sup>، آورده، حالا به آستان بوسی می آیند<sup>۲</sup>. این خبر را او میگوید. < گفت<sup>۳</sup>، سر زد. برپا خواست. بعد از ساعتی [بود که]<sup>۴</sup> تیل چیان آن اسیر را به خدمت امیر آوردند. امیر احوال پرسید. آن بندی صورت واقعه را بالتفصیل به خدمت امیر عرضه نمود. متحقق شد که این خبر راست بوده است. بعد از شنیدن این خبر امیر عمر خان چون گل شکفت. بلا توقف نقاره زده، از آن منزل کوچید. بعد از یک کوچ دیگر در ولایت خجند وارد گردید. دو روز در آن بلده ساکن گشته، لشکر و اسب را فراهم آورده، روز سیوم رایت<sup>۵</sup> نصرت آیات امیر محفوظ به عنایات سبحانی از ولایت خجند کوچ کرده، به عزم یوروش جیزخ و ثمرقند نهضت فرمود و سپاه ظفر دستگاه به سان عساکر سبزه {۴۷۴ر} و لاله اطراف دشت و کوه را فرو گرفته، (۵۲۰) +<sup>۶</sup> تزلزل در زمین و زمان ظهور نمود<sup>۷</sup>.

#### مثنوی<sup>۸</sup>

سپاه خدیو مظفر لوا      بجنبید چون بحر خضر از جا  
ز سر تا قدم غرق آهن همه      دل و جان پر از کین دشمن همه

< ۴۶۶پ > در آن وقت سیادت پناه محمود خان از قلعه قوش تیگیرمان استقبال

۱ کرده [ت] [د]

۲ آید [ت] [د]

۳ [ت] [د]

۴ × [ت]

۵ رایات [د]

۶ روز یکشنبه دستلاب کرده که؟ کد؟ اول غچه؟ [د]

۷ نموده [د]

۸ قطعه [د]

نوکر گرفته، به چهل هزار کس غیر از آورده بازارچی با حشمت تمام +<sup>۱</sup> در تأریخ سنه ۱۲۳۶ بود که [متوجه اوراتپه شد.]<sup>۲</sup>

### مثنوی<sup>۳</sup>

چون خسرو مهر از سر نو      بر برج حمل فکند پرتو  
افراخت برای نیک خواهی      در اوج شرف لوای شاهی

[تمام لشکر ممالک فرغانه را فراهم آورده، با شأن و شوکت پادشاهی با چندین تجمل متوجه اوراتپه شد.]<sup>۴</sup> بعد از یک منزل {۴۷۳ر} در موضع کان بادام وارد گردیده، در بارگاه فلک احتشام خود با فریدونی و شکوه جمشیدی با ندیمان خود می نشست. از قضا از دور شخصی در کمال تعجیل می آمد. چون چشم حاضران <۴۶۵پ> مجلس به او افتاد، هر کس چیزی گفت<sup>۵</sup> و امیر این بیت را میخواند.

### بیت

(۵۱۹) یا رب این شخص را چه افتاد است

کـــــه بدین اضطراب می آید

هیچ معلوم نیست کز چه سبب

این چنین با شـــــتاب می آید

آن مرد چون به نزدیک سرآورده رسید، اودی چیان و شغاولان دوانیده، به خدمت امیر آوردند. بلا توقف مژده گانی طلب نموده، عرضه نمود که >امیر حیدر پادشاه به پسر بزرگ خود امیر حسین توره در میان بخارا مخالفت کرده اند و تمام اوزبک سر برداشته، در حدود میان کال بلوای عام شده است و جماعه خطای قیچاق و قره قلیاق متفق گشته، حاکم ثمرقند

۱ و با شأن و شوکت پادشاهی و با چندین تجمل [د]

۲ [د]

۳ قطعه [د]

۴ القصه. [د]

۵ میگفت [د]

محاربه سخت واقع شد. از آن جا که ستاره بخت سیادت پناهی در هبوط افتاده بود و کوکب طالع برادر محمد رحیم دیوان بیگی در اوج بود و<sup>۱</sup> در هر سه جنگ هم ظفر از جانب سپاه<sup>۲</sup> محمد رحیم دیوان بیگی وزید و شکست به جانب لشکریان<sup>۳</sup> سیادت پناه افتاد و<sup>۴</sup> سیادت پناه دانست که بخت برگشته بوده است و این بیت را میخواند.

### بیت

{۴۷۲پ} که سر کشید در این بوستان که سر نکشید  
ز ریشه<sup>۵</sup> جگرش دسته دسته سنبل آه

و محمد رحیم دیوان بیگی هر سه فتح را از جمله عطاهای غیبی<sup>۶</sup> شمرده، وهم سیادت پناه را از دل بر آورده، فارغ البال <۴۶۵ر> بنشست.

ذکر لشکر کشیدن امیر عمر خان به صوب<sup>۷</sup> اوراتیپ و جیزخ و ثمرقند و<sup>۸</sup> بی [نیل مقصود]<sup>۹</sup> بر گشته، افسوس کردن آن شاه

در آن وقت که آفتاب عالم تاب از برج حوت کوچ کرده، به برج حمل رسید، امیر عمر خان [در وقت]<sup>۱۰</sup> ظهور لاله و گل و اجتماع جنود ریاحین و سنبل توکل بر صانع جز و کل کرده، به بست هزار سوار خنجر گذار [را کلاً]<sup>۱۱</sup> مواجب داده، بست هزار دیگر را قراقزان و

- 
- |    |                             |
|----|-----------------------------|
| ۱  | × [ت][د]                    |
| ۲  | لشکریان [ت][د]              |
| ۳  | سپاه [ت]                    |
| ۴  | [ت][د]                      |
| ۵  | رشته [ت]                    |
| ۶  | غیب [ت][د]                  |
| ۷  | سوی [د]                     |
| ۸  | × [ت][د]                    |
| ۹  | مصلحت [د]                   |
| ۱۰ | هنگام [د]                   |
| ۱۱ | او کلکای و [ت]، را کلاً [د] |

## مثنوی

چو گلگون گشت از می روی ساقی      نماند از هوش مستان هیچ باقی  
مـغنی از نوای روح پرور      به رقص آورده گردون مدور

<۴۶۴ر> مطبخیان چرب دست و خان سالاران شیرین زبان هر زمان اغذیه لذیذه و  
مطعومات لطیفه از هرچه در حوصله خیال گنجد، افزون از آن چه به احاطه دایره احتمال در  
آید، بیرون و فاکهه مِمّا یتخیرون و لحم طیر مِمّا یشتهون میکشیدند و قافله جوع را از معده  
خواص و عوام بر وجهی که رجوع ممکن نباشد، میکوچانیدند، [به حکم آن که]<sup>۱</sup>

## بیت

ز جنس خوردنیها هرچه خواهی      ز مرغ آورده حاضر تا بماهی

و بر این نهج چندین روز بساط نشاط مبسوط بود و امیر عمر خان در بزم خرمی و  
دوستکامی نشسته، به لوازم جشن و سور قیام مینمود و<sup>۲</sup> اما الحق نتیجه نداد. در کم فرصت  
امیر به کسل صعب گرفتار شد. عاقبت به آن مرض از دنیا خرامید.

مجمّل سخن این که {۴۷۲ر} بعد از این واقعه سیادت پناه بسیار از بهر قلعه امیدوار  
شده، مبالغه نمود. عاقبت امیر عمر خان لا علاج شد. قلعه قوش تیگیرمان که واقع است، در  
مابین<sup>۳</sup> خجند و اوراتپه، <۴۶۴پ> حکومت آن بلده را مع توابعاتش به سیادت پناهی<sup>۴</sup>  
تفویض نمود. چون سیادت پناهی<sup>۵</sup> محمود خان از خدمت امیر مرخص شد، رخصت اجازت  
یافت. بلا توقف متوجه آن قلعه شده، بعد از طی مسافت به قلعه قوش تیگیرمان وارد  
گردید. همه همت خود را به امید ولایت اوراتپه گماشت. چون این خبر را محمد رحیم  
(۵۱۸) دیوان بیگی شنید، چون موی در آتش وهم می پیچید. در میان لشکریان ایشان سه

۱ × [د]

۲ × [ت]

۳ میانه [ت][د]

۴ پناه [د]

۵ پناه [د]

{۴۷۱} ر {مثنوی} #۱

به الماس تجلّد گوهری سفت      که نتواند قلم کیفیتش گفت

اما یقین +<sup>۲</sup> این است که آن خاندان سیادت در حاله بکارت ماند<sup>۳</sup>، [چنانچه میگوید.] #۴

مثنوی

به راه جاه اگر چه تیز و<sup>۵</sup> تک بود      به وقت کامرانی سست رگ بود

<۴۶۳ پ> روز دیگر که فراشان قضا و قدر شامیانه زر نگار آفتاب را در فضای بزمگاه سپهر بر افراختند و از فروغ طلعت جمشید خورشید عرصه ربع مسکون را منور و مزین ساختند.

بیت

روز دیگر که بزمگاه سپهر      گشت روشن ز فر طلعت مهر

امیر عمر خان در خرگاه سپهر اشتباه طوی خانه بر تخت بخت نشسته، مجلس عیش و بساط نشاط به نور جبین (۵۱۷) خورشید قرین امرای ذو الاحترام آرایش یافت و فروغ جامهای شراب ارغوانی و شعله رطلهای راح ریحانی بر صفحات رخسار همگنان تافت. تاب آفتاب عارض ساقیان سیمین ساق اطراف آن محفل را نور و صفا بخشید و نغمات دلفریب مطربان {۴۷۱ پ} خوش آواز حضور و سرور باده پرستان را زیاده گردانید، [به حکم آن که] #۶

۱ [د]، بیت [ت]

۲ فقیر [د]

۳ مانده [ت] [د]

۴ [د]

۵ × [ت] [د]

۶ [د]

تتق عصمت تو پرده بینایی وهم  
 به رقع روی عفاف سبل و چشم خیال  
 باد فراش پذیر از سر گستاخ روی  
 ساحت پاک تو میرفت<sup>۱</sup> به گیسوی شمال  
 ملکش گفت مرو پیش که آن جا که تویی<sup>۲</sup>  
 مرغ اندیشه نیارد که بجنباند بال  
 سایه اش چون روح نامرئی است ز آن کز عکس خویش  
 باشد اندر گیسوی او نور پنهان دایما  
 {۴۷۰پ} تا نیندازد نظر بر سایه چترش سپهر  
 (۵۱۶) میکشد در دیده میل آتشین خورشید را  
 به رقع دین پرورش هر دم علی رغم حسود  
 پادشاهی را دثار و پارسایی را شعار  
 معجز عصمت پناهت میکند هنگام عدل  
 افسر شاهان عالم را به برهان شرمسار  
 دامن پاکش نه گر روزی رسیدی بر زمین  
 مر تیمم را کجا بودی دلیل معتبر

القصه<sup>۳</sup>. قضات و علما و اشراف و فضلا را در مجلس همایون نشانیدند و به مقتضای شریعت غرا آن بلقیس زمان را عقد بستند و چون مشاطه تقدیر پرده زر دوزی روز را از پیش روی عروسان شبستان آسمان بر گرفت، ماه و مشتری در حجله نیلوفری آغاز دلبری کرده، مقارنه ایشان صفت تیسر<sup>۴</sup> پذیرفت. امیر عمر خان به خلوتخانه خاص خرامیده، آن قمر پیکر زهره جبین را در بر کشیده، کام دل از او حاصل گردانید. به قول مردم.

۱ میروفت [ت] [د]

۲ توی [ت] [د]

۳ [د]

۴ تیسیر [د]

خاموش شد<sup>۱</sup>.

[قطعه

رزق مقصومی است از اول مقرر کرده اند  
هیچ کس را بیش از آن حاصل نمی گردد به جهد  
هرچه می آید ز بیش {و} کم بدو خرسند باش  
کانچه خواهی ز آسمان نازل نمیگردد به جهد<sup>۲</sup>

فقیر چون از خدمت ایشان مرخص شده، به خدمت امیر رفته، بالتفصیل اول تا<sup>۳</sup> آخر  
به وقوع آمده گی سخن را گفتم. امیر در ظاهر هیچ<sup>۴</sup> نمیگفت. اما در باطن چون گل  
میشکفت. بعد از دو روز طوی به وقوع پیوست. چنان طوی بر پا کردند که {۴۷۰ر} از عقل  
بشر<sup>۵</sup> بیرون بود. همان شب نکاح امیر عمر خان فقیر را <۴۶۳ر> و محمد علی خان ماده<sup>۶</sup> را  
مع چندی از حجله نشینان عفت حکم نمود که رفته، آن در<sup>۷</sup> درج خاندان سیادت را بیارید.  
مایان از خدمت امیر مرخص شده، آن بقلیس عهد و خدیجه زمان را با چندین تجمل به قصر  
امیر آوردیم.

<۴۶۳ر.ح. بیت<sup>۸</sup>

ای نظیر تو در اندیشه چو تقدیر محال

داده ایزد همه چیزت از مثل و مثال

- 
- ۱ شدند [ت][د]
  - ۲ × [ت][د]
  - ۳ و [د]
  - ۴ چیزی [د]
  - ۵ بشری [ت][د]
  - ۶ × [ت][د]
  - ۷ × [د]
  - ۸ × [ت]، ابیات [د]



این<sup>۱</sup> سخنها شنیدند، خاطر خود از جانب امیر جمع نموده، به اتفاق یک دیگر به خانه جناب ایشان سلطان خان خرامیدند. بعد از ساعتی امیر فقیر را امر نمود که >هرچه سخن در میان سیادت پناهان گذرد، بی کم و کاس به خدمت ما آمده، تقریر نمای.< فقیر انگشت قبول به دیده نهاده، به خدمت سیادت پناهان رسیدم. دیدم که ایشان<sup>۲</sup> به یک دیگر گفتگو دارند. جناب قبله گاهم به جناب قبله گاهم<sup>۳</sup> سلطان خان سخنهای درشت میگویند. جناب سلطان خان نیز مثل امیر<sup>۴</sup> + قسمها یاد کرد<sup>۵</sup> که >من اصلا و قطعا از این سخن خبر ندارم، او را کرده است. برادرم محمود خان کرده است. چون هر دو سیادت پناه {۴۶۹پ} از ایشان نیز این جواب را شنیدند، فی الفور (۵۱۵) سواری نموده، به خانه خود مراجعت فرمودند و فقیر را به خدمت سیادت پناهی >۴۶۲پ< محمود خان فرمودند. فقیر به خدمت سیادت پناه رفتم. آمدن فقیر را شنیده، پیش آمده، بسیار در<sup>۶</sup> [گرامی داشتن]<sup>۷</sup> فقیر مبالغه مینمود<sup>۸</sup>. فقیر در غایت خجالت میبودم. بالاخر صورت واقعه به خدمت سیادت پناه گفتم. سیادت پناه سر در بحر تفکر فرو برد. بعد از ساعتی گفت، >هرچه شد، شد. اکنون پشیمانی سود ندارد.< این جواب را از سیادت پناه شنیدم. بلا توقف به خدمت قبله گاهی رفته، بیان [واقعه را عرض]<sup>۹</sup> نمودم. چون از فقیر این سخن را شنیدند، دانستند که از برای دنیا سیادت پناه ناموس قیمت خود را به [کم بهایی]<sup>۱۰</sup> فروختند. انگشت تحیر به دندان [گزید و]<sup>۱۱</sup>

- ۱ نوع [د]
- ۲ ایشانان [ت]
- ۳ [ت][د]
- ۴ عمر خان [ت]
- ۵ کردند [ت]
- ۶ به [ت]
- ۷ اکرام [د]
- ۸ مینمودند [ت]
- ۹ واقعه عرض [ت]، واقع عرضه [د]
- ۱۰ بهای کم [ت]
- ۱۱ گزیدند و [ت]، گزیده [د]

گذشته در میان افتاد. جناب قبله گاهم رو به امیر آورده، گفت، >حالا شنیدیم که خدمت شما دست به خاندان نبوت<sup>۱</sup> دراز کردید. از روی دولتخواهی میگوییم که هیچ کدام از گذشته گان شما این را<sup>۲</sup> نکرده است<sup>۳</sup>. امید این که از خدمت شما هم به وقوع نه آید و از هیچ کس این امر سر بر نزده است و اگر به وقوع آمده باشد، هم چندان<sup>۴</sup> نتیجه نبخشیده است.< و این بیت را خواندند.

## بیت

به اولاد پیمبر دست بردن به خون خویش باید دست شستن

فقیر شش سال تا وفات او نه در سفر نه در حضر یک روز از امیر جدا نشده ام. در هیچ وقت به زبان خود قسم جاری نکرده است<sup>۵</sup>، مگر همان روز که از روی غضب قسم یاد کرد و گفت.

مصراع<sup>۶</sup>

{۴۶۹ر} چنین حرفی نگوید هیچ عاقل

[و گفت]<sup>۷</sup> >این کار از من نشد، بل از سیادت پناهی محمود خان شده است که بازار قل مهتر را در میان ماند. ما را به حال خود نمیگذارد.< اما در ظاهر >۴۶۲ر< به روی سیادت پناهان این نوع سخن میگفت. اما فقیر احوال<sup>۸</sup> او را میدانستم که دل او چون پروانه در اضطراب بود که آن همای اوج سیادت را کی به دام خود آرد. چون سیادت پناهان از امیر

۱ سیادت [ت]

۲ امر [ت]، کار را [د]

۳ اند [ت] [د]

۴ چندان [ت] [د]

۵ × [ت] [د]

۶ ع [ت]، × [د]

۷ که [ت] [د]

۸ × [ت]

ابریشیم، چنانچه از جانب پدری احراری و از جانب مادری مخدوم اعظمی. او را سیادت پناه محمود خان مخفی به امیر عمر خان وعده دادند<sup>۱</sup> که آن ناموس سیادت را در عقد تو میدر آریم. چون امیر از روی کم تجربه گی آن نوید را شنید، به پیراهن نگنجید. بالراس و العین گفته<sup>۲</sup>، انگشت قبول به دیده نهاد. {۴۶۸ر} از بس که فتور دولت امیر عمر خان به سر آمده بود، نمیدانست که چه فعلی از وی سرزند که سبب نیستی او گردد. بالاخر بنا بر آن از روی غرور پادشاهی <۴۶۱ر> و غلبه نفس اماره ضمناً به سیادت پناه محمود خان کس مانده، از جاده خود تجاوز نموده، از روی جرأت به آن خاندان سیادت گستاخی نموده، آن سراپرده عصمت را خواستگاری نمود. از آن جا که برادرم محمود خان به حکومت چنان عاشق بودند که هزار دختر و ناموس نیک<sup>۳</sup> را به یک کلوخ قلعه میفروختند، [به حکم آن که]<sup>۴</sup>

### بیت

کسی که لقمه ای از خان و جاه و دولت خورد

به فقر و فاقه قناعت نمیتواند کرد

بلا توقف به خدمت ایشان سلطان خان رفته، این سر را در میان انداخت. آن سیادت پناه از این خبر جان گداز چون موی در آتش می پیچید. بعد از گفتگوی بسیار به گردن برادر نیز ماند و این واقعه بعد از دو روز بر تمام شهر منتشر گشت و سیادت پناهان جناب توره خواجه خواجه کلان و جناب قبله گاهم این حادثه را شنیده، در بحر تفکر فرو رفتند. بلا توقف سواری نموده، به خدمت امیر رفتند. {۴۶۸پ} اتفاقاً [فقیر در آن وقت]<sup>۵</sup> به خدمت امیر بودم. چون امیر آمدن سیادت پناهان را شنید، رو به فقیر آورده، به ترکی گفت، <معصوم خان > {۴۶۱پ} آکام البته مندین کاهیب کیلیب (۵۱۴) تورلار<، گفت. بلا توقف از جای خود برجست. ایشان را استقبال نموده، به جای خود نشاند. بعد از ساعتی حادثه

۱ داد [د]

۲ گفت [د]

۳ × [ت] [د]

۴ [ت] [د]

۵ در آن وقت فقیر [ت] [د]

خدمت امیر عمر خان در کمال التجا عرضه نمود که اگر جناب خسرو آفاق از روی پادشاهی مرحمت و شفقت نموده، کاشکی یکان قلعه ای مهربانی نمایند. امید این که ولایت اوراتپه به چهل روز به دست در آید. از بس که برادر سیادت پناهی<sup>۱</sup> به امید اگر و مگر تدبیر خود را از چندین وجه کج باختند، بنابر این غیر از بی آبرویی<sup>۲\*</sup> ثمر<sup>۳</sup> دیگر نبخشید، به حکم آن که

## بیت

اگر را با مگر هم جفت سازی      از او فرزند زاید کاشکی نام

القصه. امیر عمر خان این سخن را شنید. در بحر تفکر فرو رفت و بعد از آن {۴۶۷پ} در میان امرا مصلحت انداخت.

## بیت

در هر کاری مشاورت می باید      کار بی مشاورت نکو نآید

هر کس به قدر استعداد خود چیزی <۴۶۰پ> گفتند. جناب قبله گاهم این امر را قبول نفرمود. گفت، شما سیادت پناه را به چندین خاری از ولایت او معزول نموده، دستگیر کرده، آوردید. اکنون باز به جای میمانید که ولایت<sup>۴</sup> خود<sup>۵</sup> + گیرد. از سر این هوس در گذرید و سیادت پناه این سخن را شنیده، از جناب قبله گاهی گیله آغاز کرد. پس جناب قبله گاهم چیزی نگفتند<sup>۶</sup> و در آن (۵۱۳) آوان بود که جناب قبله گاهم ایشان سلطان خان<sup>۷\*</sup> خواجه خواجه کلان در پس پرده عصمت حجله نشینی داشت. از خاندان سیادت که تار و پود

۱ پناه [د]

۲ [ت]، آبروی [س] [د]

۳ ثمری [د]

۴ را [د]

۵ را [ت]

۶ نگفت [ت]

۷ [د]

بعد از طی مسافت از دریای سیحون عبور نموده، در موضع اخسی نزول فرمودند. چون نیم از شب گذشته بود که ایر نظر دیوان بیگی چهار جلاد بیباک را امر کرد. آن بی رحمان به سر آن بیگناه آمده، به فتیله<sup>۱</sup> تفنگ خفه کرده، هلاک نمودند<sup>۲</sup>. به جوال انداخته، در آن نیم شبی به دریای سیحون انداختند.

### بیت

(۵۱۲) به تندی سبک دست بردن به تیغ به دندان گزند<sup>۳</sup> نیست<sup>۴</sup> دست دریغ

چون این خبر غم اندوز بعد از سه روز بر تمام ولایت خوقند < ۴۶۰ ر > منتشر شد، { ۴۶۷ ر } همه انگشت حسرت به دندان گزیدند<sup>۵</sup> و افسوس میکردند و مدت عمرش شصت و شش سال بود<sup>۶</sup>. در آن وقت مولانا حاذق تأریخ +<sup>۷</sup> نیکو [گفته، این است. <sup>۹</sup>

### تأریخ<sup>۱۰</sup>

کلک دیوان قضایش پی تأریخ بگفت زد رقم مرگ رجب هژدهم شهر رجب

ذکر<sup>۱۱</sup> تزویج نمودن امیر عمر خان از خاندان سیادت و آن کار بر وی نا

مبارک آمدن

چون چندی بر این بگذشت، در آن وقت بود که سیادت و نجابت پناه محمود خان به

۱ پیلته [ت] [د]

۲ کردند [ت] [د]

۳ گزی [د]

۴ [د]، چست [س] [ت]

۵ گزیدیم [د]

۶ × [ت]

۷ × [د]

۸ او را [د]

۹ گفته [ت]، گفت [د]

۱۰ [ت] [د]

۱۱ × [ت]

## قطعه

شها [عالم اندر]<sup>۱</sup> پناه تو باد      زمین و زمان نیک خواه تو باد  
 کلید در فتح بادت به دست      سر<sup>۲</sup> دشمنان زیر پای تو باد

و<sup>۳</sup> در آن حین بود که رجب قوشبیگی آمد. +<sup>۴</sup> به دوزانوی ادب بنشست. شاه و وزیر به یک دیگر سخن میکردند. باز بر سر همان سخن گذشته آمد و رجب قوش بیگی به عهد و پیمان مبالغه مینمود و دلیرانه سخن میگفت و این بیت را رجب قوش بیگی مکرر میخواند.

## بیت

مشنو سخن هر کس و بشنو سخن من      کار باب غرض راست به هر باب سخنها

بعد از گفتگوی بسیار خلعت ملوکانه خود را از بر کشیده، به رجب قوشبیگی انعام فرمود<sup>۵</sup> و رخصت اجازت داد و<sup>۶</sup> رجب قوشبیگی در غایت خرسندی به خانه مرخص شد. روز دیگر این ماجرا بر تمام ولایت شیوع یافت. همه امرا و فقرا شنیده، شادیا کردند. اما فقیر <۴۵۹پ> میدانستم که سخن چیست. چون چندی {۴۶۶پ} بر این بگذشت.

القصة. در آن وقت ایر نظر دیوان بیگی را از حکومت ولایت قورمه عزل نموده، ولایت توره قورغان و نمندگان را به او تفویض نمود. رجب قوش بیگی و ایشان توره اوراق کلان را حکم نمود که ایر نظر دیوان بیگی را به ولایت توره قورغان برده، نصب گردانند<sup>۷</sup>. چون ایشان از خدمت امیر عمر خان رخصت اجازت یافتند، در آن وقت امیر به ایر نظر دیوان بیگی فرمود که رجب قوشبیگی را در آن جانب هلاک کند. امرا متوجه آن صوب گشتند.

۱ عالمی در [د]

۲ سری [د]

۳ × [د]

۴ و [ت]

۵ نمود [د]

۶ چون [ت]

۷ گردانید [د]

نامی ارباب نام و ننگ از پای در آورد و صاعقه<sup>۱</sup> است که در یک نفس زورقهای عافیت و حیات +<sup>۲</sup> عام را <۴۵۸پ> به دست طوفان چهار موجه بحر حوادث {۴۶۵پ} و انقلاب سپارد و هر پادشاه<sup>۳</sup> غافل بی بصیرت که به مقتضای عدم احتیاط دست در حلقه آمیزش و اختلاط آن فرقه سفله خوی بی آبرو زد، عنقریب پای<sup>۴</sup> سلامتیش بسته فتراک انواع عقوبات گردیده و هر خسرو جاهل پست فطرتی<sup>۵</sup> که بنابر قلت شعور نقد وقار را از کف اختیار به سودای موافقت آن گروه قبایح کردار داد، هرگز در بازار کامل عیار فیروز بختی و اعتبار<sup>۶</sup> در جیب تصرف ندید.

## بیت

هر که با ناجنس بنشیند دمی      عمرها بار پشیمانی کشد  
[کیم که نا جنسی ایله اولتورسه دمی      آغوسی در پشیمانلیق آنی]<sup>۷</sup>

القصه. امیر روزی در حرم نشسته، مثلث میخورد. غیر از فقیر و محمد علی خان کسی در پیش او حاضر نبود. در عین مستی محمد علی خان ماده<sup>۸</sup> را فرمود که رجب قوش بیگی را بیار. محمد علی خان ماده<sup>۹</sup> بیرون دوید. فقیر به خدمت ساقی بودم. رو به فقیر آورد. به زبان ترکی گفت، <ایت رجب کیلسه، مندین باخبر بول>، گفت. شمشیر خود را از میخ گرفته، به زیر زانوی خود <۴۵۹ر> ماند. چون فقیر از زبان امیر این سخن را شنیدم، لرزه به اندامم افتاد. {۴۶۶ر} و هزار بار دست (۵۱۱) از زندگانی آن بیگانه قدردان شستم، گفتم.

- ۱ صاعقه ای [ت][د]
- ۲ خاص و [د]
- ۳ پادشاهی [ت]
- ۴ پایی [د]
- ۵ فطرت [ت]
- ۶ اعتباری [ت]
- ۷ × [ت]
- ۸ × [ت][د]
- ۹ × [ت][د]

القصه. روزی کتابتی از زبان رجب قوش بیگی به نام پسرهای امیر عالم خان نوشتند و مهری به نام رجب قوش بیگی از صابون کنده، به آن خط زیر کرده، کتابت را به امیر عمر خان منظور گردانیدند.<sup>۱</sup> یک دزد<sup>۲</sup> را هم حامل رقعہ گفته، همراه خط آوردند و تعلیم دادند که آن کس گوید که این سخن حق است و آن [دو مرد]<sup>۳</sup> از ترس همچنین میگفت.

### مصراع

حسودان از جهان کلی بر افتد

القصه. چون چشم امیر به آن خط افتاد، انگشت حیرت<sup>۴</sup> به دندان گزیده، در بحر تفکر فرو رفت و نمیدانست که این معمای {۴۶۵} سر بسته <۴۵۸> را به که تقریر کند. بالاخر به جناب قبله گاهم اظهار کرد و جناب شان هم حمل به سخن بد گویان کردند و بسیار مانع آمدند. اما از آن جا که سخن بد گویان و همان خط جعلی (۵۱۰) مع آن دو<sup>۵</sup> دزد تعلیمی به امیر عمر خان کارگر شده بود، به هیچ وجه رجب دیوان بیگی را به حلالی حکم کرده نمیشد، بل استحاله دیگر هم داشت. چون جناب قبله گاهم طبع امیر را به او منحرف مطالعه فرمودند، لا علاج به رضای امیر نگاه کردند و خاموش بنشستند. آری صحبت ارباب سعادت و موافقت اصحاب نجابت تاج آدمیت [و فیروزمندی گوهریست]<sup>۶</sup>، گران بها و راه منزل [اعتبار است]<sup>۷</sup> جاودانی، خضر<sup>۸</sup> است، راه نما. از موانست و مجالست گمراهان سیاه دل و غافلان بیحاصل که خار صحرای شقاوت و جغد ویران ضلالتند، دوری و اجتناب جستن بر همه کس لازم و واجب است، زیرا که صحبت سفله و ناجنس سیلابی است، قصر نیک

۱ کردند و [ت]

۲ دو [ت]، × [ت]

۳ دزد [د]

۴ تحیر [ت] [د]

۵ × [د]

۶ × [ت]

۷ اعتبارات [ت] [د]

۸ خضری [ت] [د]



صحت و سلامت عبور نمودیم و از آن جا کوچیده، به دار السلطنة خوقند نزول اجلال فرمود.  
به بارگاه خود نشست<sup>۱</sup>. به عیش و عشرت پرداخت.

### شعر

خواب در روز باد خوش آمد      روز میغ است صید نیکوتر  
{۴۶۴ر} روز باران شراب را شاید      با بتان لطیف مه پیکر  
<۴۵۷ر> روز صافی به بارگاه نشین      کارها را به عدل بیرون بر

### ذکر شهادت امارت پناهی رجب قوش بیگی به ولایت اخسی

چون چندی (۵۰۹) بر این بگذشت، در آن عصر چندی از فتنه جویان و ناتوان بینان مکرر به گوش امیر عمر خان رسانیدند که رجب قوش بیگی در عین پیران سالی از جاده خود منحرف شده، نمک حرامی را پیشه خود ساخته، به پسران عالم خان که در ولایت قراتیگین به دست شاه عبد العزیز خان می باشند<sup>۲</sup>، ضمناً کس فرستاده، از سلطنت دار الملک مملکت خوقند امیدوار گردانیده است. امیر عمر خان چون این سخن از حسودان شنید، در آشفت و ایشان را از مجلس دور انداخت. بعد از چندین وقت آن بی پیران فرصت یافته، این مقدمه را باز گوش رس امیر کردند. امیر باز تغافل ورزید. سخن ایشان را مسموع نفرمود. باز فرصت یافته، از این ماجرا گذشته<sup>۳</sup>، باز آن ابلیس طینتان به سر همان سخن گذشته، آمده، اعاده کردند {۴۶۴پ} <۴۵۷پ> و به چندین شیطنت از راه مکر و تذویر در آمد کرده، یک چیز طبع امیر عمر خان را از رجب قوش بیگی منحرف گردانیدند. آن بی باکان دانستند که تدبیرشان موافق تقدیر خواهد افتاد. میان را از هزار جا بسته، به این امر نا مناسب اقدام نمودند.

### قطعه

غرض گویان چو با هم یار گردند      عزیزان بی جنایت خار گردند  
خوش آمد گوگر از دنیا بر افتد      خلل در کار شاهان کمتر افتد

۱ بنشست [د]

۲ باشد [د]

۳ گذشت [د]

سودی نداشت.

### مصراع

از پشیمانی چه سود اکنون که کار از دست رفت

نزد اهل دانش نهفته نماند که در آن سفر سعادت نشان از عطاهای امیر و چیزهای دیگر فقیر مشاهده کردم، از عقل دور و از فهم بعید بود. اگر هر کدام او را در سلک تحریر آرم، سخن به طول می انجامد، بنابر آن [به اختصارش کوشیدم]<sup>۱</sup>. تا مستمعان را ملال خاطر نگردد، [چنانچه مولانا بلدای میفرماید.

### بیت<sup>۲</sup>

گفت ای که آن سخا را ید بیضای دیگر

همچو خورشید به خاک سیه افشاند زر]<sup>۳</sup>

خلص کلام<sup>۴</sup> آن که چون امیر عمر خان از کار طوی فراغت یافت، {۴۶۳پ} حکومت ولایت تاشکند را به فرزند ارجمندش عبد الله خان تفویض نمود <۴۵۶پ> و لشکر قوشیگی را در پیش او گذاشته، خود به جانب دار السلطنة خوقند مراجعت فرمود. بعد از یک کوچ در ولایت قورمه وارد گردید. از آن جا کوچیده، باز مکرر به همان راه پیش مع حجله نشینان پرده عصمت روی آورد و سه شب و روز مثل اول به آن کوهستان و بیشه ها سر گردان به چندین محنت و مشقت گذشته، در موضع قمیچ قورغان وارد گردید. روز دیگر از آن جا سواری نموده، بر لب دریای سیحون نزول اجلال فرمود و همشیره ها و کل<sup>۵</sup> حریمهای خود را در یک کشتی انداخت و کشتی بان را نگذاشت که در پیش کشتی آید. دو ندیم خود را انداخته، مع فقیر و محمد علی خان به جای ناخدا شده، به چندین ترس و هراس از دریا

۱ قصیرتر گردانیدم [ت][د]

۲ × [د]

۳ × [ت]

۴ × [ت]

۵ کلن [د]

در غایت تعجیل خود را به خدمت امیر رسانید. دید که ندیمان دیوان خانه را چنان شفت<sup>۱</sup> و<sup>۲</sup> زمین کرده اند، +<sup>۳</sup> آلا شمع مجلس چیزی نیست. چون حال را بدین منوال دید، دست افسوس به هم میسود و امیر از حرکت‌های او بخنده افتاده بود. بعده<sup>۴</sup> امیر روی<sup>۵</sup> به او آورد. +<sup>۶</sup> گفت، چیزی یاب و بستان. محمد یوسف تونقاتر به شش جانب چشم انداخت. چیزی به نظر او مرئی نشد. در آن وقت بر جست. از دست غلام خاصه او که لشکر قوشبیگی بود<sup>۷</sup>، گرفت. گفت، حالا کالای خود را یافتم. فردا این غلام را به خرکاری می اندازم. چون این {۴۶۳} خوش ذهنی<sup>۸\*</sup> از او صادر شد، امیر چنان در خنده افتاده بود که مجال سخن کردن <۴۵۶> ر<sup>۹</sup> نداشت و ندیمان از این خوش خیالی +<sup>۱۰</sup> تحسین ها کرده، پشیمان<sup>۱۱</sup> میخوردند که چرا مایان<sup>۱۲</sup> این صید فربه را از دست دادیم. عاقبت بزم به اتمام رسید. خاتم خود را از فقیر طلب نمود و کمر مرصع به فقیر بخشید و در بدل خاتم لباسهای فاخر و اسب خاصه مع جبدوق طلا و یک دیهه<sup>۱۳</sup> آباد قریب سه هزار طلا اقطاع<sup>۱۴</sup> به فقیر بخشید و لشکر قوش بیگی در آن مستی مثلث در حال از محمد یوسف تونقاتر خود را (۵۰۸) به هزار طلا خرید. روز دیگر محمد یوسف تونقاتر از کرده خود پشیمانیها میکرد و افسوس میخورد. اما +<sup>۱۵</sup>

۱ شفت [ت] [د]

۲ × [ت]

۳ که [ت]

۴ بعد [ت]

۵ رو [ت] [د]

۶ و [ت]

۷ × [د]

۸ [د]، زهنی [س] [ت]

۹ او [ت]

۱۰ پشیمانی [ت] [د]

۱۱ ما [ت]

۱۲ دهه [ت] [د]

۱۳ مطاع [ت]

۱۴ پشیمانی [د]

بعده، به هر کدام شعرا سر و پای علیحده و اسب مع جبدوق نقره و غله و تقدینه<sup>۱</sup> انعام فرموده<sup>۲</sup>، از دنیا بی نیاز گردانید. چون خان سالاران از هر جنس اطعمه لذیذه و اشربه لطیفه حاضر <۴۵۵ر> ساختند و بعد از فراغ طعام کورونوش همایون به پایان رسید. امیر عمر خان با چندین فر خسروی به قصر خود خرامید و امرای ذو الاحترام و سرداران نامدار هر کدام متوجه قصر خود شدند و شب [و روز]<sup>۳</sup> در عیش و عشرت پرداختند. امیر هفت روز به همین دستور کورونوش میداد. روز هشتم [به تمام امرا و لشکریان فرغانه]<sup>۴</sup> دست عطا برگشاد.<sup>۵</sup> به هر کدام ایشان موافق حال خود لباسهای فاخر بخشید. مدت انعام او هفت روز طول کشید. بسیاری را در آن مورد<sup>۶</sup> نه قبت لباس بخشید و<sup>۷</sup> در آن وقت شبی با ندیمان خود جشن برپا ساخت که هیچ بیننده ندیده (۵۰۷) و هیچ شنونده نشنیده بود و<sup>۸</sup> در آخر بزم امیر حکم نمود، چیزی که در پیش ما حاضر هست، ندیمان بردارند. چون این سخن حاضران از امیر شنیدند، {۴۶۲پ} هر کس چیزی را به دست آورد. از آن جمله فقیر کمر مرصع او را مع خاتمش در ربودم و اسحاق دیوان بیگی پوستین روباه سیاه او را گرفت و شاهی پروانچی شمشیر کندل او را <۴۵۵پ> برداشت و یوسف پروانچی بورکه مروارید دوزی او را مالک شد و هر کدام<sup>۹</sup> علی هذا القیاس. چیزی در پیش او باقی نماند، آلا پلاس و خانه. در آن وقت محمد یوسف تونقاتر نام ندیمی داشت، در غایت سخنوری<sup>۱۰</sup> و شیرین کلام بود. اتفاقا قبل از این مقدمه از برای طهارت بیرون رفته بود. از این خبر واقف گشت.

۱ زر [د]

۲ فرمود و [د]

۳ × [ت] [د]

۴ تمام امراء و لشکریان فرغانه را [د]

۵ و [ت]

۶ مورد [د]

۷ × [د]

۸ × [د]

۹ کدامی [ت]

۱۰ سخنور [ت] [د]

{۴۶۱پ} شاه بزنی شاهمیز سلطان بزنی سلطانمیز  
دور بزنی دوریمیز دوران بزنی دورانمیز

(۵۰۶) یا الهی دولت و اقبالین افزون ایلاغیل  
عمردین سرشار بر خوردار ممنون ایلاغیل  
سلطنت باییده یارب انی معمور ایلاغیل  
میر نی<sup>۱</sup> تیر دعاسین زود مقبول ایلاغیل  
<۴۵۴پ> شاه بزنی شاهمیز سلطان بزنی سلطانمیز  
دور بزنی دوریمیز دوران بزنی دورانمیز

القصه. در آن حین دیگر شعرای شیرین کلام که چهل تن در پایه سریر اعلی حاضر بودند، قصیده های غرا گذرانیدند و از آن جمله مولانا حاذق بود که شش رباعی را از برای تأریخ طوی عبد الله خان مشق کرده بود. به طریق تتبع بر مولانا محتشم کاشی که هزار و بست و هشت طبقه تأریخ مستخرج میکرده<sup>۲</sup> و شعرای آن عصر از این صنعت عاجز آمدند، الا سه کس [مولانا خاطف و مولانا خجالت و جناب سیادت پناهی سلطان خان ادا و از]<sup>۳</sup> جمله رباعیهای مولانا حاذق یکی این است.

#### رباعی

چون یافت جهان به عصر وی طوی دگر  
جم جاه جهان سوری به صد زینت و<sup>۴</sup> فر  
{۴۶۲ر} سر کرد به شهزاده که شد بزم همه  
جوش طرب جام می شاه عمر

۱ نینگ [ت] [د]

۲ میگردد [ت] [د]

۳ اول جناب سیادت پناهی سلطان خان ادا و دیگر مولانا خاطف و مولانا خجالت و از آن [ت]

۴ × [ت]

کورو نوش همایون داخل شده، به جای خود نشستم<sup>۱</sup>. در آن کورو نوش جناب سیادت پناهی محمود خان را به پیش فقیر<sup>۲</sup> نشانید و سیادت پناهی جهانگیر خواجه<sup>۳</sup> و سید غازی خواجه را<sup>۴</sup> به عمل فیضی گی<sup>۵</sup> سرفراز کرد و حق قلی را بی کرد و برادر امیر حیدر پادشاه امیر حسین در آن وقت آن جا بود، به جای دیوان بیگی نشانید و او در مدح امیر عمر خان قصیده<sup>۶</sup> ترکی نیک گفت<sup>۷</sup> و این سه بند از آن است.

### قصیده مخمسی<sup>۷</sup> +<sup>۸</sup>

ای کونگل ممتاز ایرور خانلار ارا خاقانمیز  
برچه عالمنی مسخر ایلاگان سلطانمیز  
<۴۵۴ر> قیسی سلطان شاه شاهان شاه ترکستانمیز  
سید عالم امیر المسلمین خاقانمیز  
شاه بزنی شاهمیز سلطان بزنی سلطانمیز  
دور بزنی دوریمیز دوران بزنی دورانمیز

گرچه کوب کیزدوک جهانده خار و زار و در به در  
تابتوک آخر بارگاه حضرت سلطان عمر  
رشته اخلاص ایله خدمتگا باغلاب میز کمر  
شکر لله قیلدی بزگا لطف و شفقت دین نظر

۱ بنشستم [د]

۲ خود [د]

۳ را [ت]، را به عمل فیضی گی سرفرازی بخشید [د]

۴ نیز [د]

۵ فیضی [د]

۶ گفته [د]

۷ مخمس [ت] [د]

۸ <ح> مثل مخمس نوشته شده؟، کاتب غلط داشت؟ [ت]

القصه. روزی که طوی بزرگ به وقوع پیوست، امیر عمر خان <۴۵۳ر> به یوسون چینگیز خانی و به کورونوش صاحبقرانی<sup>۱</sup> برپا ساخته، لباس خسروی در بر کرد و تاج شاهی بر سر نهاد. با چندین شأن و شوکت بر سریر جهانبانی نشست<sup>۲</sup> و امرای ذوالاحترام هر کدام به اورون خود قرار گرفتند و بزرگ زاده های عمل دار {۴۶۰پ} از هر دو جانب به سر او صف زدند و پروانچیان و دادخواهان و ایشیک اقاباشیان و توقصا به یان هر کدام عصاهای طلا بر دست گرفته، به جای خویش آرام گرفتند و یساولان و تواچیان به سر رشته کار پرداختند. در آن وقت حکام هر ولایت تارتوق های بیشمار و پیش کش های بی اندازه از هر جنس اقمشه کشیدند، مثل<sup>۳</sup> در لعلی ها، طلا و درهم (۵۰۵) و یانبو<sup>۴</sup> و از پوستین روباه سیاه و قاقوم و سمور و سنجاب و شالهای کشمیری و [کیمخابهای گجراتی]<sup>۵</sup> و دیبای رومی و مخمل فرنگی و توارهای خطایی<sup>۶</sup> و زربفت های اوروسی و از جانوران شُنقار و توی غون و باز و بهری و شاهین و چرغ و اشتران قطاری<sup>۷</sup> بیلمایه<sup>۸</sup> باد رفتار و اسپان تازی نژاد خوش رفتار مع زین <۴۵۳پ> و<sup>۹</sup> جبدوق کندل و طلا و نقره و قاتیران راه وار و از غلام بچه های خوش زلف طاوس رفتار و از کنیزان ماه رخ زهره جبین. از هر کدام پاره ای سر کرده های بزرگ نه نه منظور نظر امیر کردند و هر کدام یک بوقچه لباس خاصه که مخصوص<sup>۱۰</sup> امرا به تقلید [میساخته {۴۶۱ر} بودند]<sup>۱۱</sup> بسیاری او مروارید دوزی بود. در آن وقت به فقیر لباس ملوکانه پوشانیده، به عمل نقیبی دار السلطنة خوقند سر افرازی بخشید. فقیر به

- ۱ را [د]
- ۲ بنشت [د]
- ۳ جواهرات قیمتی و [ت]
- ۴ یامو [د]
- ۵ کیمخای گجراتی [ت]، کیمخابهای بناری [د]
- ۶ خطای [ت] [د]
- ۷ قطار [د]
- ۸ بل بیلمایه [ت] [د]
- ۹ [ت]
- ۱۰ امیر [ت]
- ۱۱ ساختند بودند [ت]، میساختند [د]

گشته بود، در بزم عیش و نشاط نشست و هر یک از امرا و سر کرده ها به قصر خود قرار گرفته، به تجرع<sup>۱</sup> راح ریحانی و استماع<sup>۲\*</sup> الحان و آغانی<sup>۳</sup> قیام نمودند و در ایام فرح و سرور در خاطر جمهور نزدیک و دور سرایت کرده، مهندسان هنر پیشه و صنایع نیکو اندیشه انواع لعبهای غریبه و اصناف امرهای<sup>۴</sup> عجیبه به عرصه ظهور رسانیدند و هر طایفه مناسب حرفه خود صورتی نادر و پیکری بدیع مآثر ظاهر گردانیده و در آن اوقات از اصحاب حسن و ملاحه و نغمه سرایان صاحب صباحت ساعت به ساعت در محفل ارباب بزم و عشرت (۵۰۴) بسیاری مهیا بودند و به نغمات خوش الحان و ترنمات روح افزای شادمانی خاص و عام را زیاده میکردند. فروغ چینی های<sup>۵</sup> جانانی که از مثلث های شرعی مالامال بود، می <۴۵۲پ> + پرستان را نور<sup>۶</sup> صفا بخشیدی و تاب عارض ساقیان ماه پیکر که به شعاع آفتاب برابری میکرد، مجلس مستان را چون فضای سپهر برین روشن {۴۶۰ر} میگردانید. پری چهره های نغمه سنج گهی از ساز دلکش حاضران مجلس را مست و مدهوش میساختند و در آن ایام بهجت انجام بکاوان آستان فلک احتشام هر دم از هر گونه اطعمه و اشربه مهیا میساختند و از بسیاری اطعام لذیذه و از وفور اشربه لطیفه رسم گرسنگی در آن وقت از میان مردم بزم برداشته شد. چنانچه مولانا حاذق در مثنوی خود میفرماید.

#### مثنوی

ز اقسام طعام الوان کشیدند	دمی صد خان به چندین رنگ چیدند
ز انواع تکلف بود حاضر	زیاد از آنچه می آید به خاطر
نخوردن گشت مرغوب طبیعت	چو سیری جوش زد از دیگ رغبت
طبیعت را به ترشی میل افتاد	چو پر بر چرب و شیرین نیل افتاد

۱ نجر؟ [ت]

۲ [د]، اسماع [س] [ت]

۳ آغانی [ت] [د]

۴ امور [د]

۵ چینی هایی [ت]

۶ می [ت]

۷ و [د]



گردانید. در آن وقت رای امیر عمر خان چنان اقتضا کرد که فرزند ارجمندش عبد الله خان را طوی نموده، بر سریر سلطنت آن ولایت نشاند و زمام اختیار حکومت آن شهر کمترین غلامان او به لشکر قوشبیگی گذارد. از بس که عبد الله خان بچه بود، هنوز عمرش از چهارده سال تجاوز نکرده بود.

زبدۀ کلام آن که امیر عمر خان به ترتیب اسباب طوی پرداخت. فرمان داد که قصر لشکر قوش بیگی را<sup>۱</sup> جهت آن کار تعیین فرمود. هر یک امرای ذو الاحترام را و نوینان را به منزلهای مناسب امر نمود و آن قصر را در غایت زیب و زینت بر افراخت.

### مثنوی<sup>۲</sup>

به هر سواز آن قصر فردوس اثر  
شد افراخته قصرهای دگر<sup>۳</sup>  
مزین به دیبای روم و فرنگ  
ز اجناس زر دوزی هفت رنگ  
به هر یک نشسته بتی<sup>۴</sup> مه جبین  
<۴۵۲ر> چو در قصر زیبا چنان حور<sup>۵</sup> + عین  
{۴۵۹پ} ز مردم ربوده دل و<sup>۶</sup> دین همه  
فرح بخش جانهای غمگین همه

القصة. امیر عمر خان هر روز به آن قصرهای<sup>۷</sup> خاصه +<sup>۸</sup> که به طلا و لاجورد منقش

۱ × [ت]

۲ نظم [د]

۳ دیگر [ت]

۴ بت [د]

۵ وی [د]

۶ × [د]

۷ قصرها [ت]

۸ همان [ت]

القصه<sup>۱</sup>. شش ساعت نجومی خوش خوش در میان آن تخته سنگ امید از زندگانی کنده، به چندین الوان محنت و مشقت می نشستیم. بعده از قدرت الهی و الطاف نامتناهی او تعالی آن یلدای ظلمانی از عالم کون و<sup>۲</sup> فساد بر داشته شد و عالم امکان شفاف و نورانی گشت و مایان شکر کنان خودها را به بالای اسپها<sup>۳</sup> گرفته، متوجه راه شدیم و هر کدامی از کنجی بر آمده، یک دیگر را در آغوش [کشید و]<sup>۴</sup> به عمر دو باره مبارک بادیها میگردیم. بعد از ساعتی محمد علی خان مع حریمهای محترم رسیدند. {۴۵۸پ} به اتفاق یک دیگر [خنده زنان]<sup>۵</sup> و شادی <۴۵۱ر> کنان راه طی نموده، وقت غروب آفتاب عالمتاب در موضع قیزیل ارچه وارد گردیدیم. در آن روز از جهت برودت هوا چندی هلاک شدند و بسیاری را دست و پا بیکار شد. روز دیگر از آن جا کوچیده، چندین کوه و بیشه را قطع نموده، به چندین محنت و مشقت خود را در ولایت کیراوچی رسانیده، از رنج راه بر آسودیم و ایر نظر دیوان بیگی طریق مهمانداری را به جای آورد. از آن جا سواری نموده، روز دیگر در قلعه توی تپه وارد گردیدیم. روز دیگر از آن جا کوچیده، متوجه مقصد شدیم و امرا و سپاه ممالک تاشکند استقبال نموده، همه به رکاب بوسی امیر عمر خان مشرف شدند. در آن حین امیر در بیشه دریای چیلچیق داخل شد. به جانور پرانی مشغول گشت و چنان شکاری کرد که هیچ بیننده نه دیده و هیچ شنونده نشنیده بود. در آن وقت بود که لشکر قوش بیگی از شهر تالاب دریای چیلچیق که از شهر قریب دو فرسخ است، از هر جنس کالای قیمتی بگسترانید<sup>۶</sup>، (۵۰۳) مثل شال {۴۵۹ر} کشمیری <۴۵۱پ> و کیمخابی<sup>۷</sup> گجراتی و مخمل دوحابه و ماووتی توقوز قت و زربفت فرنگی و امیر عمر خان با چندین حشمت و دبدبه پادشاهی در مملکت تاشکند سایه افکن شده، از قدوم میمنت لزوم خود آن ولایت را عطر فشان

۱ × [د]

۲ [ت]

۳ اسپان [ت][د]

۴ کشیده [ت]، کشیدیم [د]

۵ خندان [د]

۶ گسترانید [د]

۷ کیمخابی [ت]، کیمخای [د]

دو اسب را به بند شمشیر خود محکم از پایش بستم. فقیر و آن پری پیکر در میان تخته سنگی در آمده، از جان شیرین هزار بار دست شسته، منتظر مرگ نشستیم. هر دم به گوش ما پیام اجل از جانب زمهریر و صداهاى پر وهم کوه و نیستان میرسید و این بیت را میخواندیم.

### بیت

یک سودم اژدها و یک سودم تیغ      شکر است بهر دمی که میدارد دوست

و صدای چندین جانور و سباع مهیب میشنیدیم و نهایت خوف و هراس داشتم<sup>۱</sup> که دو باره زندگانی را به خود حرام گردانیده بودیم. اتفاقاً در آن جا گذار<sup>۲</sup> یک گله خوک افتاد. خوکان اسپان را دیده، چنان رمیده، نی کردند که ما گم گشته راهان در تحت پای خوکان چون گوی پایمال شده، می غلطیدیم. چون این حال را مشاهده نمودیم، به خاطر آمد که به بالای مرده صد چوب. این بلای تازه از کجا بر خواست، گفته، لاحول میخواندیم. عاقبت به خیر گذشت و ما سالم ماندیم. چنانچه میگوید.

### مصراع

{۴۵۸ر} رسیده بود بلایی ولی به خیر گذشت

{۴۵۰پ} در آن وقت دیگ معده چنان در جوش آمده بود و گرسنگی بر طبیعت<sup>۳</sup> چنان غلبه کرده بود که اگر در آن حال یک پرچه نان قاق جوین میسر میشد، به جای هزار قلیه های (۵۰۲) نرگسی<sup>۴</sup> و حلوائ یخ در بهشتی میگذشت.

### قطعه

گر همه زر جعفری دارد      مرد بی توشه بر نگیرد کام  
در بیابان فقیر سوخته را      شلغم پخته به که نقره خام

۱ داشتیم [ت]

۲ [ت][د]، گذاری [س]

۳ ما [د]

۴ [د]، نرگسی [س]، نرگسی [ت]

قطعه<sup>۱</sup>

معلمش همه شوخی و دلبری آموخت  
جفا و ناز و عتاب و ستمگری آموخت  
من آدمی به چنین قد و شکل و خوی و روش  
ندیده ام مگر \* آن<sup>۲</sup> شیوه از پری آموخت

در آن وقت اسب از جهت سردی هوا شوخی نموده، بازی کردن آغاز نهاد. از بس که آن اسبی بود، خاصه امیر به یورغه توروک اشتها داشت، تند تیز گام و سیمین سم و زین لگام که اگر عنان او رها کردند، بر صبای جهان پیمای پیشی گرفتی و شمال گیتی نورد به گرد گردوی نرسیدی، تا سبز خنگ فلک بر حوالی کرّه خاک میگردد. نظیر<sup>۴</sup> (۵۰۱) آن [اسب را]<sup>۵</sup> هیچ بیننده نه دیده و هیچ شنونده نشنیده بود، تا ابلق روزگار عرصه دوّار را می پیماید، چنانچه میفرماید.<sup>۶</sup>

## مثنوی

گردون گردی جهان نوردی      کز چشمه مهر آب خوردی  
هر بار که در عرق شدی غرق      باران بودی او در میان برق<sup>۷</sup>  
هر بار که در نورد رفتی      صد بار صبا بگرد رفتی

القصه. فقیر دیدم که کار از دست می‌رود. لا علاج از اسب فرود آمدم {۴۵۷پ} و عنان اسب او را گرفته، آن ملکه را به چندین مشقت نیز از <۴۵۰ر> اسب فرود آوردم و هر

- ۱ × [ت][د]
- ۲ [ت][د]، نگر [س]
- ۳ این [د]
- ۴ نظر [ت]
- ۵ است که [ت]
- ۶ × [د]
- ۷ [ت]، غرق [س][د]

وقت هوا چنان صاعقه ای بود که دم به دهن یخ می بست. در آن وقت نور چشمی سلطان محمود خان سه ساله بود. از جهة سردی هوا بی طاقتی کرد. لا علاج بزرگان حجله نشینان عصمت مثل همشیره امیر [عمر خان]<sup>۱</sup> <۴۴۹ر> والده فقیر و حرم محترم امیر مادر محمد علی خان ماه لار آیم و چندی<sup>۲</sup> دیگر از اسب نزول کرده، از بهر خاطر {۴۵۶پ} سلطان محمود خان<sup>۳</sup> آتش سرداده، خود را به گرم<sup>۴</sup> کردن پرداختند. فقیر و محمد علی خان با چندی از کنیزان سمن بو از کار ایشان بیخبر راه طی میکردیم. در آن وقت بود که از قضا هوا چنان تاریک و ظلمانی گشت که کسی یال اسب خود را نمیدید و برف باریدن گرفت و باد غریدن آغاز نهاد و هر کس به حال خود شده،<sup>۵</sup> دست از جان شیرین شسته، به هر طرف روی آوردن گرفتند.

### بیت

رهی<sup>۶</sup> تاریک بیم مرگ سرمای چنین سختی  
کجا پروای ما دارند میخواران مجلسها

القصة. در آن نیستان پر وهم فقیر و محمد علی خان و دختر سید غازی خواجه که زن محترم امیر بود، هر سه به یک جا افتاده بودیم. در آن وقت بر طبیعت محمد علی خان چنان ترس و بیم افتاده بود که چون بید میلرزید، روی به فقیر آورده، گفت، <من از مردم خبر گیرم.> گفته، پس گشته، طبل زنان، راه گریز اختیار نمود. فقیر و آن بیچاره در میان کوهستان <۴۴۹پ> و بیشه تنها ماندیم و فقیر نیز اختیار مراجعت نمودم. آن پری پیکر گریه آغاز کرد و نگذاشت که فقیر یک قدم پس گردم، {۴۵۷ر} به حکم آن که

۱ × [ت]

۲ چند [ت]

۳ × [ت]

۴ گرمی [ت][د]

۵ و [د]

۶ ره [د]

در آن شب آن جا به سر بردیم و زنانی که در راه محنت کشیده بودند، به خدمت امیر از فقیر دادخواه شده، عرضه نمودند که حکیم خان به حال ما نپرداخت. <۴۴۸پ> چنانچه [گفته اند].<sup>۱</sup>

### بیت

به دوران امیر المسلمین آخر چه ظلم است این  
می ناب مشقت ما خوریم دیگر کند مستی

{۴۵۶ر} از بس که<sup>۲</sup> امیر از فقیر کاهش داشت، فقیر نیز از روی گستاخی استغنا نموده، به ایشان خدمت نمیکردم، بلکه شوخیهای بیهوده سر بر میزد. چون امیر از این حال واقف گشته<sup>۳</sup>، فقیر را به پیش خود طلب نموده، پوستین سموری خود را از بر کشیده، مهربانی نمود و اسب خاصه خود را نیز انعام نمود<sup>۴</sup>. از سر گناه در گذشت و حکم نمود که به ایشان خدمت نمای. فقیر به جان و<sup>۵</sup> دل قبول نموده، به خدمت آن آهو چشمان خوقندی متصدی شدم.

### بیت

فلک کی میتواند ساختن ما را جدا از تو  
تو مطلوبی و من طالب تو از مایی و ما از تو

روز دیگر از آن جا<sup>۶</sup> کوچیده، رو به راه آوردیم. دیدیم راهی است، در غایت سختی و چندین درجه از راه طی نموده مشقت تر بود. [لا علاج راه قطع]<sup>۷</sup> (۵۰۰) میکردیم. در آن

۱ گفتند [د]

۲ × [د]

۳ گشت [د]

۴ نموده [ت][د]

۵ × [ت]

۶ منزل [ت][د]

۷ چار ناچار قطع راه [د]

هزار کس را امیر امر<sup>۱</sup> فرمود که یک منزل پیش گردند. بعد حکم نمود که حرملهای محترم با کنیزان ماه پیکر از عقیب ایشان کوچ کنند. چون آن پریزادان عازم سفر شدند و عرابه‌هایی<sup>۲</sup> که خود را انداخته، آورده بودند، چار ناچار در آن کوهستان گذاشته، ارتکاب اسب سواری نمودند و حال<sup>۳</sup> آن که پری چهره‌های خوقند در عمر خود اسب سواری را نکرده‌اند. در آن وقت از تبیل<sup>۴</sup> امیر سیصد اسب باد پیما را<sup>۵</sup> آورده، کشیدند. بسیاری او خاصه<sup>۶</sup> امیر بود. چون ایشان به چند رسوایی به اسپان راکب شدند و با چندین عذاب متوجه راه کوه شدند و خود امیر با امرا و لشکریان از عقیب مایان کوچ نموده، یک فرسخ از حرم پس میگشت. در آن وقت در میان زنان غیر از فقیر و محمد علی خان کسی نبود که به حال ایشان پردازد. از جهت برودت هوا اسپان بازی میکردند <۴۴۸ر> و زنان را گرفته، {۴۵۵پ} بر زمین میزدند (۴۹۹) و پاره‌ای را دستش میشکست و چندی را سرش میکفید و آنی که در سواری چُست و چالاک بود، مثل پیره زن‌های مکاره فقیر با<sup>۵</sup> محمد علی خان از روی شوخی و نادانی در تحت دم اسب مست ایشان خار میماندیم. به مجرد خار ماندن اسپان فربه اوشتولوم<sup>۶</sup> کرده، زنان را واژگون چنان بر زمین میزد و پاره‌ای را سر میشکست و پاره‌ای از هوش میرفت. به همین رسوایی راه می‌پیمودیم. راه بسیار سخت و مشقت بود. گاه در میان چولگاه به نیستان میرفتیم و گاه به کوه‌های بزرگ می‌پیچیدیم و باز به راه‌های باریک به توقی نزول میکردیم. همان روز از صبح تا عصر به آن عقوبت راه طی کرده، در موضع پسته لیک وارد شدیم. +<sup>۷</sup> آن موضعی بود، در میان کوهستان و هم<sup>۸</sup> نیستان، ولی<sup>۹</sup> کوه او سر به ثریا کشیده،

- 
- ۱ × [ت]
  - ۲ عرابه‌های [د]
  - ۳ حالا [ت] [د]
  - ۴ × [ت]
  - ۵ و [د]
  - ۶ اشتولوم [ت]
  - ۷ و [د]
  - ۸ × [د]
  - ۹ و هم توقی و [د]

نشینان حرم و کنیزان عنبر موی بل بسیاری زنان امرا با چندین تجمل و شوکت <۴۴۷ر> پادشاهی متوجه آن صوب گشت. {۴۵۴پ} چون بر لب دریای سیحون رسید، خود مع حررها از دریا عبور نموده، در موضع قمیچ قورغان نزول فرمود و امرا و لشکریان از عقب او گذشتند. به امیر (۴۹۸) ملحق شدند. در آن روز فقیر از روی گستاخی وقت را غنیمت یافته، از امیر مخفی در موضع یر\*<sup>۱</sup> مسجد که شکارگاه او بود، رفته، چنان شکار کردم که در عمر خود مثل آن نکرده بودم. در آن وقت امیر فقیر را سراغ کرده بود. هر کس نوع جدا جواب داده بودند، امیر به علم فراست دانسته بود که فقیر<sup>۲</sup> آن جا رفته ام. به غایت از فقیر رنجیده بود.

### مصراع

قرب سلطان آتش سوزان بود

چون فقیر در کمال سرعت از عقب او آمده، از دریا عبور نموده، در آن موضع مذکور خود را به نادانی انداخته، به نظر امیر در آمدم. چیزی نگفت. اما چند دخل غضب آلود کرد.

### مصراع

ناخن دخل به جا از سینه خارم میکشد

روز دیگر از آن جا سواری نموده، راه متعارف دوان را وا گذاشته، رو به راه غیر معهود که به اون یکی بویناق اشتهار داشت که در این چند سال کسی نگذشته<sup>۳</sup> بود، <۴۴۷پ> الّا سباع و دواب وحشی که {۴۵۵ر} آن سرزمین را مکان ساخته بودند، رو به آن سو آورد.<sup>۴</sup> در [موضع مذکور که<sup>۵</sup> مسمی به<sup>۶</sup> بادام چشمه است، فرود آمد. روز دیگر

۱ [ت][د]، ایر [س]

۲ محقر (فقراء؟) [د]

۳ نگشته [ت]

۴ آورده [د]

۵ × [د]

۶ موضعی که ؟ (ناخوانا) [ت]



مصراع<sup>۱</sup>

اگر گناه بو<sup>۲</sup> بخشند شرمساری هست

و امیر عمر خان بسیار خندید. رو به فقیر آورد و گفت، <تنبیه سادات همین قدرها است، از این زیاده<sup>۳</sup> نمیباشد.> بعده<sup>۴</sup> به سیادت پناه <۴۴۶پ> رخصت اجازت داد. {۴۵۴ر} جهانگیر خواجه شادان و خندان از خدمت امیر مرخص شد. به مسکن خود شتافت. بعد از چندین وقت جناب قبله گاهم دو باره گناه حق قلی را از امیر عمر خان طلبید<sup>۵</sup>. امیر گفت، <روی آن نمک حرام را نخواهم دید. اما تقصیرش را به شما گذشتم و خود او را نیز به شما بخشیدم.> جناب قبله گاهم او را از یار مزار آورده<sup>۶</sup>، به پیش خود نگاه داشت<sup>۷</sup>.

## ذکر طوی کردن امیر عمر خان فرزند ارجمندش عبد الله خان را در ولایت تاشکند و آن

## ممالک را به او تفویض نمودن

سنه ۱۲۳۶<sup>۸</sup> بود که امیر عمر خان خواست که نور چشمش عبد الله خان را در ولایت تاشکند برده، طوی پادشاهانه و جشن خسروانه برپا ساخته، حکومت آن ممالک را به آن فرزند دل بندش تفویض نماید. چون آفتاب<sup>۹</sup> در برج جدی +<sup>۱۰</sup> در غایت سردی هوا، امیر عمر خان تمام بزرگان مملکت فرغانه را فراهم آورده، +<sup>۱۱</sup> با امرای خوقند مع کل حجله

۱ × [د]

۲ به [ت]

۳ زیاد [د]

۴ بعد [ت] [د]

۵ طلبیدند [ت]، طلبیده [د]

۶ آورد [د]

۷ داشتند [ت]

۸ ۱۲۳۴ [ت]

۹ خورشید [ت]

۱۰ بود [ت]

۱۱ و [د]

آن جا بود، یکی از محرمان خاصه از بهر فقیر فرستاده بود. فقیر بلا توقف سواری نموده، عازم خدمت او شده بودم که در آن حین برادرم جهانگیر خواجه مع ملّا دوشن رسیدند. چون چشم ایشان به فقیر افتاد، اسب را مهمیز داده، به پیش فقیر آمدند و یک دیگر را در کنار گرفتیم و احوال پرسدیم. دیدم که احوال سیادت پناهی بسیار متغیر و از امیر عمر خان بسیار ترس دارد. فقیر دلداریه‌ها دادم. بعده<sup>۱</sup> برادرم سیادت پناهی رو به فقیر آورده، گفت، برادرا، <۴۴۶ر> ما گنه کاریم. نمیدانیم، به کدام روی {۴۵۳پ} امیر را دعا میکرده باشیم<sup>۲</sup>. از شما هیچ جدایی نداریم، گفت. فقیر لا علاج همراه آن سیادت پناهی متوجه یر مسجد<sup>۳</sup> شدیم. چون در آن قصر عالی رسیدیم، سیادت پناه را در بیرون وا گذاشته، فقیر به خدمت امیر رفتیم و صورت واقعه را بیان کردم. امیر بسیار خرسند شد و آن سیادت پناه را در پیش خود طلبیده، بسیار مکرم داشت. لباسی که در بر داشت، در حال (۴۹۷) کشید. در بر آن سیادت پناه پوشانید. سخنه‌ای پدرانه گفت. اما در آن حین در پیش امیر عمر خان کباب قاز حاضر بود. یک بُرده از آن کباب گرفته، به دست خود به دهن جهانگیر خواجه انداخت. به زبان<sup>۴</sup> ترکی گفت، <حضرت ایشانیم، خوب چیننگ. توزی بار مو.>، [به حکم آن که]<sup>۵</sup>

## مصراع

یک ذره نمک ز عالم خوبی به

و سیادت پناه تعظیم او را به جای می آورد، [به حکم آن که]<sup>۶</sup>

۱ بعد [ت] [د]

۲ [ت] [د]، باشم [س]

۳ مچید [د]

۴ زبانی [د]

۵ [د]

۶ × [د]

۷ [د]

به یر مسجد<sup>۱</sup> بر آمده بود و<sup>۲</sup> آن موضعی<sup>۳</sup> است، یک فرسخ به جانب غربی خوقند در غایت خوبی (۴۹۶) و نزاکت. تخمین چهار هزار طناب زمین نیستان و کول و زمین شالی افتاده است و بر لب آن شکار گاه پادشاهان خوقند است<sup>۴</sup>، قصری بنا کرده اند، در غایت ارتفاع و بلندی و خانهای منقش ساخته اند و یک جانب چار باغی است، در کمال خوبی و گلهای رنگارنگ شکفته و از هر جنس اشجار بی شمار و آبهای خوشگوار از هر جانب جاری.

## [شعر]

سنبل سیر نافه باز کرده      گل دست پر و دراز کرده  
سر و پی سبزه های نو خیز      از لؤلؤ تر زمرد انگیز<sup>۵</sup>

<۴۴۵ پ> {۴۵۳ ر} و در آن شکار گاه از هر جنس صید<sup>۶</sup> موجود، مثل قاز و بط<sup>۷</sup> و متصل آن نیستانی است که به چهار باغ دیوانه اشتهار دارد. در آن جا مرغ دشتی بی حد و حساب و<sup>۸</sup> آن شکار گاه را پادشاهان خوقند چنان ضبط میکنند،<sup>۹</sup> کسی را حدی و آرایبی نمی باشد، شکار کند<sup>۱۰</sup> و امیر عمر خان<sup>۱۱</sup> گاه گاهی به محرمهای<sup>۱۲</sup> محترم و کنیزان ماه پیکر در آن مسکن کوچیده، رفته، شکار میکرد و<sup>۱۳</sup> به عیش و عشرت مشغول میشد. از قضا

۱      مچیت [د]

۲      [د]

۳      موضع [ت]

۴      × [ت]

۵      بیت [ت]، × [د]

۶      شکاری [ت]

۷      مرغ آبی [ت]، آوردک [د]

۸      × [ت]

۹      که [ت]

۱۰      کردن امکان ندارد، در آن جا رفتن محل توقف [ت]

۱۱      در وقت شکار [ت]

۱۲      حریمهای [ت]

۱۳      × [ت] [د]

پشیمانی‌ها میکردند. سودی نداشت. به این بیت خود را تسلی میدادند، [این است.]<sup>۱</sup>

### بیت

یوسف گم گشته باز آید به کنعان غم مخور      کلبه احزان شود روزی گلستان غم مخور

القصه. چون جهانگیر خواجه و حق قلی بی طی مسافت نموده، با چندین محنت و مشقت<sup>۲</sup> لب تشنه و اشکم گرسنه<sup>۳</sup> به ولایت اندجان وارد گردیدند و<sup>۴</sup> این خبر بر تمام ممالک ما وراء النهر منتشر گشت. همه مسلمانان خرسندیها نموده، از بیم لشکر خطای بر آمدند و امیر عمر خان از آمدن سیادت پناهی مطلع شده، بسیار شادان گشت<sup>۵</sup>. از تشویش بلوای آن جانب فارغ البال نشست<sup>۶</sup>، به حکم آن که

### نظم

ساقی بیار باده بر افروز جام ما      مطرب بگو که کار جهان شد به کام ما  
ما در پیاله عکس رخ یار دیده ایم      ای بیخبر ز لذت شرب مدام ما

<۴۴۵ر> {۴۵۲پ} القصه. امیر عمر خان با ساقیان لاله رخ به خوردن می پرداخت. در آن وقت بود، ملا دوشن [بی را]<sup>۷</sup> و محمد شریف میرگن را فرمود که سیادت پناه را به عزت تمام به خدمت بیارند و حق قلی را غضب نموده، حکم فرمود<sup>۸</sup> که در ولایت یار مزار نشیند. چون ایشان از خدمت امیر مرخص شده، متوجه آن صوب گشته، به فرموده امیر عمل نمودند. پنج شش روز در مابین گذشته بود که اتفاقاً در آن وقت امیر عمر خان از بهر شکار

۱ × [ت] [د]

۲ به ولایت اندجان [ت]

۳ روی آوردند. چون [ت]

۴ [د]

۵ شده [د]

۶ بنشست [د]

۷ × [ت]

۸ نمود [ت] [د]

دولتخانه خود<sup>۱</sup> وارد گردید. به داد دهش پرداخت.

ذکر گریختن سیادت <۴۴۴ر> پناهی جهانگیر خواجه و حق قلی بی<sup>۲</sup> به صوب ولایت کاشغر [و بی مدعا باز گشتن]<sup>۳</sup> در سال مذکور

القصه. چون جهانگیر خواجه و حق قلی بی<sup>۴</sup> با چهل کس راه فرار اختیار نموده، در کمال تعجیل راه می پیمودند، بعد از سه روز از توابعات<sup>۵</sup> امیر عمر خان خلاص شدند. سه روز در آن سر زمین از رنج راه بر آسودند و در آن موضع قریب پانصد کس از جماعه قیرغیز جمع شده، متوجه کاشغر شدند. بعد از قطع راه در ولایت کاشغر رسیدند. جماعه خطای از آمدن جهانگیر خواجه مطلع شده، آماده جنگ و قتال شدند و جهانگیر خواجه به نزدیک گل باغ رفته، آهنگ جنگ نموده<sup>۶</sup>، اهل کفره نیز به محاربه پیوستند و<sup>۷</sup> دو توب خالی کرده بودند که مردم قیرغیز خود به خود ویران شده، راه فرار اختیار نمودند. چون سیادت پناهی و حق قلی کار را بدین منوال دیدند، عنان عزیمت به جانب (۴۹۵) ولایت خوقند گردیده<sup>۸</sup>، رو به گریز نهادند. در آن وقت اهل اسلام {۴۵۲ر} مردم کاشغر آمدن جهانگیر خواجه را باور نمیکردند و میگفتند که <۴۴۴پ> این بلوای قیرغیز است که کرده است. بعده<sup>۹</sup> یقین ایشان شد، الحق جناب سیادت پناهی بوده است که از بهر خلاصی مسلمانان و از جهت غزا تشریف نموده بوده است. بعد از یقین حاصل شدن مسلمانان دست افسوس به هم سوده،

۱ × [د]

۲ [د]

۳ [ت][د]

۴ [د]

۵ تابعات [د]

۶ نمود و [د]

۷ [د]

۸ تافته [ت]، نموده [د]

۹ بعد [ت][د]

پیش گرفتم و از قصر بیرون شدم، [به حکم آن که]<sup>۱</sup>

### مصراع

آن به که حذر نمایم از مجلس شاه

القصه<sup>۲</sup>. بعد از رنج بسیار کنج راحت به دست آورد و بعد از محنت بسیار {۴۵۱ر} به کام دل فایز گردید و غم بلوای خطا و ختن کلهم بر طرف شد و این بیت در زبان امیر جاری بود.

### بیت

<۴۴۳پ> (۴۹۴) گوهر پاک تو از مدحت ما مستغنی است

دست مشاطه چه با حسن خداداد کند

چون سلطان زرّین بال آفتاب از آغوش عروس عنبرین نقاب شب بر خواسته، سر از منظر صبح بر آورد. امیر عمر خان به کردار خورشید از مشکبوی عصمت و از<sup>۳</sup> حریم عفت بر آمده، به قانون شهریاران رونق افزای صدر بار عام شد و به سان خسرو بهار درم و دینار بر خلاق ایشار ساخته، اهل انجمن را به پیرایه های رنگارنگ و خلعت های ملوکانه بخشید و مانند بزم آرایان چمن خرم و خندان ساخت و سید غازی خواجه را طلب نموده، لباس خاصه مع اسب جبدوق شیومه نقره سر افزای بخشید. پس از آن که ادای<sup>۴</sup> طوی سرور و نشاط به سر آمد، امیر عمر خان آهنگ مراجعت دار الملک خوقند کرده، از شهر خان کوچیده، به ولایت مرغینان نزول اجلال فرمود و نماز عید قربان را در آن مملکت با چندین شأن و شوکت گذرانید {۴۵۱پ} و از آن جا کوچیده، متوجه مقصد شد. بعد از یک منزل به

۱ × [ت]

۲ [ت]

۳ [د]، در [س] [ت]

۴ × [د]

را می‌کردم، [به حکم آن که]<sup>۱\*</sup>

### مصراع

روز نیک از دست دادن نیست کار عاشقان

چرا که یکی از جملهٔ مهربانیهای<sup>۲</sup> امیر در حق فقیر این بود که هیچ کدام از حجله نشینان حرم محترم او از فقیر روی نمی پوشیدند. بنابراین {۴۵۰پ} این جرأت از فقیر صادر میشد. در آن هنگام بود که شراب مباشرت بر دماغ امیر عمر خان به جوش آمد و عرق حیا <۴۴۳ر> بر رخ آن دلربا چون دانهٔ شب‌نم پدیدار گشت. هنگام ناز و<sup>۳</sup> نیاز گرم شد. گرمی مشتری و نرمی صاحب کالا رونق و رواج گرفت، تا آن که ابر آذری<sup>۴</sup> آرزو در هوای کامیابی پس مراد بزیست. گل از بی‌حجابی باده<sup>۵</sup> بند قباچه بگشاد و در آغوش گل بنشست. غنچهٔ سمن امانی به اهتراز نسیم کامرانی بخندید و از بستان مقصود در صدف سیم گون گوهر سیماب فرو چکید، چنانچه میگوید.

### مثنوی

یک چند در آن کرشمه سازی	کردند دو <sup>۶</sup> غنچه بوسه بازی
گشتند به جلوه های <sup>۷</sup> گستاخ	پیچیده دو نخل شاخ در شاخ
افتاده به حجله نگارین	اندر شفق از شهاب و پروین

در آن وقت به فقیر چنان خنده غلبه کرده بود که طاقت نظر کردن نبود. لا علاج راه گریز

۱ [د]

۲ مهربانیهایی [ت]

۳ بازار [ت]

۴ آذری [د]

۵ باد [ت]

۶ چو [ت]

۷ جلوه گاه [د]

محفل با هم آمیختند. ساقیان سیمین عذار شراب لعل رنگ بزم طرب را آب و رنگ دادند.

قطعه<sup>۱</sup>

یکی مجلس آراست از رود و<sup>۲</sup> نی که طنبور سرخش بر آورده خور  
نوا<sup>۳</sup> عروس رخا<sup>۴</sup> + شگرف<sup>۵</sup> به قانون نوازان بر آورده حرف

[و خان پادشاه را به هزاران زیور و زینت بر سریر عروسی جلوه آرا ساختند و<sup>۶</sup>  
{۴۵۰} چون عروس انجمن روز گیتی رونق افزای حجله مغرب شد]<sup>۷</sup> و امیر عمر خان چون  
ماه دو هفته به کسوت نور آراسته، با فر فریدونی و شکوه<sup>۸</sup> کیقبادی <۴۴۲ پ> بر تخت  
خسروی نهاده، به حکم شریعت غراء مصطفوی و به دین سنت سنیه احمدی نکاح کرده، ماه و  
خورشید را هم چهره ساختند. گلبانگ تهنیت از بزم طرازان خطه خاک به گوش انجمن  
آرایان افلاک رسید. از بسیاری گلریز و عطر بیز صحن قصر رشک صحرای ختن شد و  
مراتب (۴۹۳) طوی انجام یافت و هوا خواهان محفل چون طایران چمن سو به سو پرواز  
کردند. گلشن اقبال را به کام بلبل و گل گذاشتند. صراحی مانند مستان سر به گوش ساغر  
نهاده، راز دل بیرون داد. شمع رازدار به دیده مالی حریم عشرت چشم سر<sup>۹</sup> بگشاد، الا فقیر  
که در عین شبابی بود، از روی شوخی و بی ادبی کمین کرده، تماشای<sup>۱۰</sup> قران آن ماه و آفتاب

۱ مثنوی [د]

۲ [د]

۳ نوا [ت]

۴ رخیان [ت]

۵ گران [ت]

۶ [د]

۷ چون عروس انجمن روز گیتی رونق افزای حجله مغرب شد و خان پادشاه را به هزاران زیور و زینت  
بر سریر عروسی جلوه آرا ساختند و [ت]

۸ شوکت [د]

۹ [د]

۱۰ تماشایی [د]



القصة. آن پری شمایل را از هر الوان پیرایه بیاراست و تمام روز به مشاطه کردن او پرداختند و آن شیخ زاده ای دروغ میگفت.

### بیت

کسب کمالات ما از مدد غیر نیست      غازه چه حاجت بود حسن خداداد را

### مثنوی

ماه را مشک رانده <sup>۱</sup> بر تقویم	غمزه را [کرده جادویی] <sup>۲</sup> تعلیم
چشم را سرمه <sup>۳</sup> فریب کشید	ماه را بر سر عتیب کشید
{۴۴۹پ} چهره را زیب ارغوانی داد	لاله را زیب خسروانی داد
تاج نرگس نهاده بر سر دوش	طوق غبغب کشیده <sup>۴</sup> تا بن <sup>۵</sup> گوش
<۴۴۲ر> در بر آسود سرو سیمین را	بست بر ماه عقد پروین را

القصة. آن پری چهره را با چندین تجمل به قصر امیر عمر خان بردیم. چنان جشن جمشیدی در بارگاه دولت و<sup>۵</sup> اسباب طرب و شادمانی مهیا ساختند که<sup>۶</sup> غلغل کوس اقبال در زمردین گنبد سپهر بو<sup>۷</sup> پیچید و آوازه<sup>۸</sup> خوش دلی بر اقطار عالم رسید. باده<sup>۹</sup> نشاط در جام طرب جوش زد و نغمه<sup>۱۰</sup> معنی<sup>۱۱</sup> در تار طرب نوای طنبور بر جسته، آهنگ پرده ای گوش کرد. چمن چمن گل دسته دسته ریحان بهر گوشه<sup>۱۲</sup> انجمن ریختند و نافه<sup>۱۳</sup> عطر عنبر از بهر مشام افروزی<sup>۱۴</sup>

۱ راند [د]

۲ کرد جادوی [د]

۳ نهاده [د]

۴ بون [ت]

۵ [د]

۶ × [د]

۷ به [ت] [د]

۸ × [ت]

۹ [د]، افروزیه [س] [ت]

ناچار سر رضا جنبانید. در حال آن حجله نشین پرده عصمت را پیش انداخته، آن سحری در قوش فقیر آورده، به والده سپردیم. الحق آن دختری بود، در غایت حسن و جمال و نهایت غنچ و دلال. در برابر رخ سیمینش زر آفتاب کم قدرتر و هزار زلیخا و شیرین یکی از خوشه چینان او بود و گل از رشک دهان شکرینش خواهد که چمن حالت غنچه گی از سر گیرد و آوازه حسنش به اکناف عالم رفته و اوصاف جمالش به اقطار امم رسیده.

#### بیت

بتی کز دیدن آن شکل و رفتار      بو<sup>۱</sup> بندد زاهد صد ساله زنار

و هم گوید.

#### قطعه

کی چو روی دلفریبت صورتی مانی کشد      ور کشد دامن بهر صورت پشیمانی کشد

{۴۴۹ر} صورت عابد فریب کافرت از هر ممر      ور بو<sup>۲</sup> بیند پارسا دست از مسلمانی کشد  
امیر عمر خان به دولخانه خود تشریف فرمود و والده فقیر <۴۴۱پ> آن مستوره را دختر خود ساخته، روز دیگر به رسم نازنینان حور شمایل همت بر تزیین او پرداخته، لباس گران بهای بر سرو قامت او راست کرد. از بس که در بساط ایشان چیزی نمانده بود، همه به تاراج رفته بود. همان روز در بر<sup>۳</sup> خود آن گل پیرهن لباسی داشت، در غایت کهنه و بر<sup>۴</sup> هر کنیز حواله میکردیم، نفرت نموده، قبول نمیکرد<sup>۵</sup>، به حکم آن که

#### بیت

لباس کهنه قدر دردمندان کم نمی سازد<sup>۶</sup>      اگر جوهر شناسی تیغ را عریان تماشا کن

۱ به [ت]

۲ به [ت]

۳ بری [ت]

۴ به [ت]

۵ نمینمود [ت]

۶ باشد [ت]

و سید غازی خواجه آغاز ناله و زاری کرد. گفت، <من مردی هستم، غریب و سرگردان و از وطن آواره. دخترم نامزد کسی +<sup>۱</sup>. عدلاً و عقلاً و عرفاً گرفتن امیر خوب<sup>۲</sup> نیست و اگر به زجر می‌گرفته باشند، خود میدانند.> گفت. باز گریه آغاز کرد. چون ایشان باز همان جواب سابق را شنیدند، مکرر به خدمت امیر آمده، بیان واقع را بالتفصیل عرضه نمودند، [به حکم آن که

### بیت

هر دو عالم قیمت خود گفته بود      نرخ بالا کن که ارزانی هنوز<sup>۳</sup>

امیر این سخن را [شنید، از ایشان]<sup>۴</sup> در حال در آشفته. فقیر را مع دسترخانچی در غایت غضب فرمود که آن مستوره را بلا توقف به خدمت رسانید. فقیر از خدمت امیر مرخص شدیم، گردن خار خار آن دو زن مکاره را<sup>۵</sup> با هم گرفته، به پیش خانه سید غازی خواجه رسیدیم.<sup>۶</sup> در آن وقت قریب سحر شده بود. فقیر روی نداشتم که به پیش آن خواجه بیچاره روم. عاقبت خود را {۴۴۸پ} در کنار کشیدم.<sup>۷</sup>

### مصراع

ز این میان گر بتوان به که کنارش گیرم

القصة. دسترخانچی مع دو پیره زن به پیش خواجه در آمده، سخندهای وحشت آمیز میگفتند و سید غازی <۴۴۱ر> خواجه سر در پیش افکنده، خاموش (۴۹۱) می نشست و عرق خجالت از جبین او جاری بود. بالاخر دید که مشیت به درفش راست نمی آید. چار و

- ۱ است [ت]
- ۲ مناسب [ت]
- ۳ × [ت]
- ۴ از ایشان شنید [ت]
- ۵ × [ت]
- ۶ رسیدم [ت]
- ۷ بیت [س]

دمدمه مترتب گشته، از برای خواستگاری در آن نیم شب پیش پدر دختر فرستاد و آن دو مکاره از خدمت امیر رخصت گرفته، متوجه خانه آن بیچاره ها شد و از این خبر جان گداز خواجه و توابعش واقف گشته، گریه و ناله آغاز کردند و آن مکاران طالب<sup>۱</sup> جواب شدند. خواجه گفت.

مصراع<sup>۲</sup>

از این آمد شدن مقصودشان چیست

اگر دختر را میگویند، این مستوره را (۴۹۰) به یکی از خویشاوندان<sup>۳</sup> خود فاتحه کرده ام<sup>۴</sup>. عنقریب است که در سلک ازدواج او کشم، چون پیره زنان از برادرم سید غازی خواجه این جواب شنیدند، بلا توقف صورت واقعه را به خدمت امیر آمده، عرض نمودند. امیر دانست که چون این مهم از چاره پردازان میسر نگشت. امیر پروانه وار در اضطراب آمده، {۴۴۸ر} باز آن دوزن<sup>۵</sup> مکاره را با همراهی بهادر خواجه<sup>۶</sup> دسترخوانچی فرستاد. چون ایشان به پیش آن خواجه<sup>۷</sup> غربت زده رفته، [سخن به سختی]<sup>۸</sup> کردند و گفتند، مگر نشنیده ای که گفته اند.

## بیت

<۴۴۰پ> هر که با فولاد دستان پنجه کرد ساعد سیمین خود را رنجه کرد

- 
- |   |   |
|---|---|
| ۱ | طلب [ت]   |
| ۲ | ع [د]   |
| ۳ | همشیره زاده [ت]   |
| ۴ | بلکه رسم ترکستان را به جای آورده، گاه از شربت یک دیگر چاشنی می چشید و [ت] |
| ۵ | × [ت]   |
| ۶ | به سختی سخن [ت]   |
| ۷ | × [د]   |

### ذکر تزویج نمودن امیر عمر خان دختر سید غازی خواجه را

در آن حین بود که امیر عمر خان کنیزی داشت، در غایت خوبی. زن (۴۸۹) حاکم آن جا بود. به پای<sup>۱</sup> خواسته، {۴۴۷ر} عرضه نمود که سید غازی خواجه اورا تپه گی را حضرت امیر غضب نموده، بدرقه کرده، مع کوچش به این ولایت فرستاده بودند، حالا در پشت این منزل کلبه ای ساخته، به چندین خاری و مشقت عمر میگذرانند. <۴۳۹پ> اما در پس پرده عصمت خان پادشاه نام دختری دارد که از مهر دیدار عارض آفتاب کردارش سپهر دوار همه چشم گردید و از شرم رخسار فیاض الانوارش مهر منیر نقاب سحاب در روی خود کشیده<sup>۲</sup>، سرو سهی از رشک رفتار قامت خوش خرامش پای در گل و بنفشه مشکین از غیرت زلف شمشادش به غایت منفعل، [به حکم آن که]<sup>۳</sup>

#### بیت<sup>۴</sup>

از این مه پاره عابد فریبی      ملایک صورتی طاوس زیبی  
که بعد از دیدنش صورت نه بندد      وجود پارسایان را شکیبی

طریق صواب آن است که او را در خلوتگاه مصاحبت خویش جای داده، از چنین غم بیهوده خود را نجات دهی. امیر [عمر خان]<sup>۵</sup> از استماع این سخن چون بلبل در هوای آن گلستان رعنائی<sup>۶</sup> بال شوق بگشود و نقاب شرم از چهره خود بر کشیده، غایبانه تیر عشق آن پری چهره را خورده، از مرکز عدل و راستی انحراف {۴۴۷پ} ورزیده، به دست آوردن آن پری پیکر را<sup>۷</sup> از مقربان محرمیت چاره جو گشت. در حال دو پیره زن که پیکر وجودش در کارخانه تکوین به رنگ تزویر <۴۴۰ر> صورت گرفته و ترکیبش از معجون هندسه و خمیر

۱ پا [د]

۲ [د]، کشید [س] [ت]

۳ [د]

۴ قطعه [ت] [د]

۵ × [د]

۶ رعنائی [ت]

۷ [د]

فرمودیم<sup>۱</sup>، بعد از مقدار<sup>۲</sup> قطع راه در ولایت اندجان وارد [گردیدیم و]<sup>۳</sup> به دست بوسی<sup>۴</sup> امیر عمر خان مشرف شدیم<sup>۵</sup>. صورت واقعه را یک به یک به خدمت امیر عرضه نمودم. {۴۴۶پ} چنان در طبیعت امیر خنده مستولی شده بود که خود را به تکلف نگاه میداشت و میگفت، غم چند روزه حالا یک چیز تخفیف یافت.

## بیت

به تن مقصّر از دولت ملازمتت ولی خلاصه جان خاک آستانه [تو است]<sup>۶</sup>

خلص کلام آن که روز دیگر از آن ولایت کوچیده، در مملکت شهر خان <۴۳۹ر> وارد گردید و حاکم آن جا غلامش [جلودار اناق]<sup>۷</sup> به خدمت قیام نمود. طریق مهمان داری را باید و شاید به جای آورد.

القصه. شبی فقیر با خدمتکاران خود به قوش نشسته بودم. امیر عمر خان پیاده تفرج کنان به دیدن همشیره خود والده فقیر تشریف فرمود. فقیر آن حال را مشاهده نموده، سپندوار از جای بر جسته، این بیت را خواندم.

## بیت

لطف کردی و صفا آوردی سایه دولت بر این گنج خراب انداختی

چون امیر عمر خان به خدمت خواهر داخل شد و طرح مجلس انداخت، فقیر به خدمت مشغول شدم.

۱ فرمودم [ت][د]

۲ × [د]

۳ گردیده [ت][د]

۴ بوس [د]

۵ شدم [ت]

۶ تست [ت][د]

۷ جلودار ایناق [ت]، جلودار اناق [د]

صورت اشتری را از سنگ سفید تراشیده اند. چوکیده، خوابیده است و از آن جا گذشتیم. باز به <sup>۱</sup># راه تنگ و تاریک {۴۴۶ر} دوچار آمد. مشعل های بزرگ با خود داشتیم. قریب باز هزار قدم رفتیم. خفاش های بزرگ را دیدم<sup>۲</sup>. مثل کبوتر و مرغ خانگی به ما مانع می آمد و مشعلها<sup>۳</sup> را به جناح خود زده، میکشند<sup>۴</sup>. در آن وقت (۴۸۸) به ما وهم غلبه کرد. از سر هر نفع و عجایب او در گذشتیم.

## بیت

<۴۳۸پ> راه ز اندازه برون رفته ایم      می نتوان برد که چون رفته ایم

از آن<sup>۵</sup> جا باز گشتیم. چه نوعی که صعود کرده بودیم، به همان نوع به هزار توبه و تضرع، لاحول گویان نزول کردیم.

## بیت

راه تاریک گشته شد روشن      کار دشوار مانده آسان گشت

چون به قوش خود صحت و سلامت رسیدیم<sup>۶</sup>، هزار بار به عمر دو باره به حضرت<sup>۷</sup> ایزد متعال شکر می کردم و خیرات و نذورات به مستحقان میدادیم<sup>۸</sup>. دو باره توبه نصوح خواندیم<sup>۹</sup> که یاد آن زمین را نکنیم<sup>۱۰</sup>. چون از آن زمین پر بیم سواری نموده، به جانب اندجان مراجعت

۱ [د]

۲ دیدیم [ت]

۳ مشعل [ت] [د]

۴ کور میکردند [د]

۵ این [د]

۶ رسیدم [ت] [د]

۷ × [ت] [د]

۸ میدادم [ت]

۹ خواندم [ت]

۱۰ نکنم [ت]

فقیر سودای دیدن آن زمین افتاد. دل بسیار راغب شد و از امیر رخصت اجازت طلبیده، متوجه آن زمین شدم. (۴۸۷) چون به آن موضع رسیدم، <۴۳۷پ> دیدم که کوهی است، در غایت بلندی و در آن جا از دور دو نردبان به نظر می آید و دهن غار نیز مرئی میشود. چون فقیر آن حال را مشاهده نمودم، طبیعت به دیدن آن طلسم دو چندان مایل گشت.

القصة. اسب ها را در آن جا گذاشته، با بست کس متوجه بالا شدیم. بعد از مشقت بسیار به نردبان اول رسیدیم. دیدیم که آن نردبان به مرور ایام پوسیده است و<sup>۱</sup> در زیر نگاه کنیم، اسپها<sup>۲</sup> مثل مورچه مینمایند. به هزار توبه و استغفار از آن نردبان به چندین محنت و زحمت گردن خار خار گذشتیم. به نردبان دویم رسیدیم. {۴۴۵پ} دیدیم که این از وی خراب تر چنان پوسیده است که نردبان اول را در پیش این [گویا این]<sup>۳</sup> نو تراشیده باشند. به پایان نگاه کنیم، مردمان گاه به نظر می آیند، + گاه نمی آیند. اگر از قضا پای کسی از آن جا لغزد، سر نگون به زیر افتد. به زمین رسیدن محال است. فقیر آن پل صراط را به این باریکی مشاهده نمودم. هزار بار از کرده خود پشیمان شدم و دست افسوس میزد. اما سودی نداشت، <۴۳۸ر> نه راه پیش رفتن و نه راه باز گشتن. عاقبت تن به قضا در دادم. با چندین عذاب و مشقت چار ناچار از آن گذشتم<sup>۵</sup>. بر لب غار رسیدم<sup>۶</sup>. چون داخل آن غار شدم<sup>۷</sup>، دیدم که طرح او مثل مسجد جامع و چهل اوستون<sup>۸</sup> دارد. از سنگ در کمال خوبی تراشیده اند. بست او واژگون ایستاده است. سرش به زمین نرسیده است و بست دیگری سرش به بالا نرسیده و<sup>۹</sup> از آن جا گذشتیم. قریب به هزار قدم به تنگی رفتیم. دیدیم که آن جا یک چیز وسعتی دارد و در آن جا یک آسیا آبی بسیار لطیف جریان میرود و در آن جا

- 
- |   |                     |
|---|---------------------|
| ۱ | × [ت]               |
| ۲ | اسپان [ت] [د]       |
| ۳ | × [ت]               |
| ۴ | و [ت]               |
| ۵ | گذشتیم [د]          |
| ۶ | رسیدیم [د]          |
| ۷ | شدیم [د]            |
| ۸ | استون [ت]، استم [د] |
| ۹ | [د]                 |



برار گرفت که در عصرش نه جمشید کرده بود و نه افراسیاب دیده بود. اما دل امیر به هیچ حال نمیشکفت. بالاخر به ولایت اندجان {۴۴پ} رسید و در آن جا حرم خاصه را مع دیگر زنان امرا گذاشته، متوجه ولایت اوش گشت. بعد از یک منزل در آن ولایت فردوس مانند وارد گردید و آن ولایتی است، در غایت خوبی و نزاکت. در میان شهرهای ما وراء النهر از وی خوش آب و هوا تر مملکت نمیباشد. امیر علی شیر نوایی<sup>۱</sup> در تأریخ ترکی خود تعریف آن ولایت را خوب بیان میفرماید و در آن جا کوهی است و در بالای آن کوه گنبد سفیدی است که شاه منصور پسکتی بنا کرده است و تأریخ شاه منصور این<sup>۲</sup> است.

### تأریخ

<۴۳۷ر> ای فاخته از بهر خدا بعد وفاتم یک لحظه به سر منزل من آمده کوکوی  
تأریخ وفات من منصور حزین را از مظهر الله برون آمده هوگوی

گویند یکی از خارق عادات او این بود که بعد از وفات او فاخته<sup>۳</sup> آمده<sup>۴</sup>، بر سر قبر او سروی بود. [در آن جا نشسته، تمام شب]<sup>۵</sup>، هوهو میگفت و آن خانه را مردم عوام تخت سلیمان نام نهاده، زیارت گاه ساخته اند. در هر سال فصل بهار چنان مردم مجتمع میشوند، لایعد و لایحصی. و یقین فقیر این که از مردم عرفات کم نخواهد بود. {۴۴۵ر} گویند قبر آصف ابن برخیا آن جا است.

القصة. چون امیر عمر خان سه روز در موضع بهشت آیین ساکن شد، روز چهارم از آن جا کوچیده، به جانب اندجان مراجعت فرمود. در اثنای راه فقیر<sup>۶</sup> شنیدم که در کوه آن موضع طلسمی است که آن را چهل اوستون<sup>۷</sup> می نامند. یکی از عجایبات دنیا است. به سر

۱ نوای [د]

۲ آن؟ [ت]

۳ فاخته ای [ت]

۴ × [د]

۵ تمام شب در آن جا نشسته [د]

۶ [د]

۷ [د]، ستون [س]، استون [ت]

چشم خود را وا کرد. فقیر را دید. برجست و مربع نشست و احوال پرسید. فقیر صورت واقعه را +<sup>۱</sup> بالتفصیل تقریر کردم. <۴۳۶ر> چون این ماجرا را #<sup>۲</sup> از فقیر شنید، سپندوار از جای برخاست و طهارت نمود و بیرون خرامید. مکرر از تعاقب ایشان کس فرمود و سیادت پناهی و حق قلی +<sup>۳</sup> در یک شب و<sup>۴</sup> روز چنان طی مسافت کرده بودند که اگر مبارزان امیر عمر خان شاهین تیز پر شده، طیران میکردند<sup>۵</sup>، به غبار ایشان نمیرسیدند<sup>۶</sup> و فرستاده های امیر در غایت تعجیل {۴۴۴ر} قطع راه پیموده<sup>۷</sup>، تعاقب مینمودند. عاقبت بعد از سه شب و روز اسپان ایشان از راه<sup>۸</sup> باز ماند. دانستند که صید مقصود از دام برجسته است. نا امید شده، لا علاج لب تشنه و شکم گرسنه مراجعت نموده، به خدمت امیر آمده، صورت حال را بیان فرمودند. چون امیر عمر خان از سیادت پناه نا امید گشته<sup>۹</sup>، در بحر تفکر فرو رفت. در آن وقت چنان بار غم افتاده بود که به کسی متکلم نمیشد و مردم آن حدود را چنان وهم زیر کرده بود که گویا لشکر خطای آمده، همه را به اسیری میبرده باشد<sup>۱۰</sup>.

## بیت

اگر بر دل پادشاهان غمی      پریشان کند خاطر عالمی

<۴۳۶پ> القصه. امیر عمر خان به آن دلگیری از موضع یار مزار کوچیده، شکار کنان (۴۸۶) به ولایت شهر خان نزول اجلال فرمود. از آن جا رو به اندجان آورد. در اثنای راه از روی سپاهی گری خود را به نادانی انداخته، به شکار پرداخت. از قضا در آن روز چنان شکار

- ۱ یک به یک [ت]
- ۲ [د]
- ۳ بی [ت]
- ۴ × [ت]
- ۵ میکرد [ت][د]
- ۶ نمیرسید [ت][د]
- ۷ فرموده [د]
- ۸ رفتار [ت][د]
- ۹ گشت [ت][د]
- ۱۰ باشند [ت][د]

## مثنوی

به بزم خسروی هر دم مگر / شدی خوانهای نعمت روح پرور  
به هر خانی ز نعمتهای شاهی / مهیا بود چندان که خواهی

و پیشکشهای لایق و ارمغانهای مناسب کشیدیم. همه را با ضم<sup>۱</sup> دیگر انعامها<sup>۲</sup> مهربانیها<sup>۳</sup> التفات فرمود. چون از آن باغ فرح افزا کوچیده، به یک منزل در موضع یار مزار وارد گردید و هر کدام <۴۳۵پ> امرا به جای مناسب نزول فرمودند و امیر دست عطا بر خاص و عام گشاد. در آن وقت بود که<sup>۴</sup> زبده<sup>#</sup> اولاد حیدر کرار برادرم جهانگیر خواجه و حق قلی با چهل مبارز راه (۴۸۵) فرار اختیار نموده، از بهر نیت غزا متوجه ولایت کاشغر شد. چون این خبر بعد از دمیدن صبح بر تمام ولایت منتشر گشت {۴۴۳پ} و وزارت پناهی امیر از تعاقب ایشان چندی از<sup>۵</sup> مبارزان را نامزد فرمود و آرای<sup>۶</sup> کسی نبود که امیر عمر خان را از این حادثه واقف گرداند. بالاخر به اتفاق یک دیگر فقیر را به این امر نامزد فرمودند، فقیر چون به حرم امیر داخل شدم، امیر را در خواب ناز خوابیده، دیدم. هر چند به کنیزان ماه روی عنبر موی<sup>۷</sup> التجا کردم که امیر را بیدار سازند<sup>۸</sup>، هیچ کدام ایشان جرأت نکردند. لا علاج پایش را به دست گرفتم، [به حکم آن که]<sup>۹</sup>

## مصراع

ز لطفش این دلیری از من آید

- ۱ ذمی [د]
- ۲ × [د]
- ۳ × [ت]
- ۴ [د]
- ۵ [د]
- ۶ آرای [ت] [د]
- ۷ بوی [د]
- ۸ سازید [ت] [د]
- ۹ × [د]

فرسخ زمین آمده، تکلیف نمودم. عرض فقیر را قبول نموده<sup>۱</sup>، در آن مکان مینو نشان نزول اجلال فرمود. فقیر را به آوردن حرم امر فرمود. فقیر نیز<sup>۲</sup> حرم محترم را<sup>۳</sup> به آن قصر دلگشا رسانیدم و به عیش و عشرت پرداختند. در آن اوقات از اصحاب حسن و ملاحه و نغمه سرایان صاحب صباحت<sup>۴</sup> سه شب و روز در مجلس ارباب عیش و طرب جمعی کثیر حاضر بودند و به نغمات دلگشایی<sup>۵</sup> و ترنمات فرح<sup>۶</sup> افزای نشاط برنا و پیر و صغیر و کبیر را می افزودند. فروغ جامهای بلورین که از شراب <۴۳۵ر> ناب مالا مال بود، می پرستان نور و صافی بخشید و تاب عارض ساقیان زهره جبین که به انوار آفتاب برابری مینمود، محفل مستان چون فضای سپهر برین روشن میگردانید.

#### مثنوی<sup>۷</sup>

پری پیکر بتان نغمه پرداز گهی از ساز دلکش گه ز آواز

#### شعر<sup>۸</sup>

{۴۴۳ر} نوای عیش و عشرت می سرودند نشاط باده نوشان میفزودند

در آن ایام بهجت انجام بکاوالان هر ساعت مایده های طعام به عدد کواکب چرخ فیروزه فام معد و مهیا میساختند و از وفور اطعمه لذیذه و کثرت اشربه لطیفه رسم آرزو و جوع از عرصه عالم بر می انداخت.

۱ نمود [د]

۲ × [ت]

۳ نیز [ت]

۴ صباح [ت]

۵ دلگشای [د]

۶ روح [د]

۷ قطعه [د]

۸ [ت]

غنچه گل خندان و شکفان به راه آن صوب گردید<sup>۱</sup>، در آن آوان از عزم او جناب قبله گاهم وقوف یافته، خواست که امیر را مهمانداری نمایند<sup>۲</sup>. در شرقی ولایت خوقند به چهار فرسخ<sup>۳</sup> در میان دشت خذلان چهار<sup>۴</sup> باغی داشتیم، در کمال لطافت و دلگشایی و طراوت و روح افزایی، بر کنار رودبار که چشمه خضر لب تشنه آب زلالش بود. کوثر و تسنیم نام جوی مرهون شکر نوالش. قصرهای منقش ترتیب داده که طعنه بر قصر قیصر و فغفور میزد، در مد نظر چهار<sup>۵</sup> باغی چون ساحت جنت مطراً و چون روضه ارم مسرت افزا، گلهای گونه گونه در وی شکفته و مرغان ترنم سرا بر سر هر شاخ گل نشسته.

## مثنوی

<۴۳۴پ> به هر بیخ گاهی در آن مرغدار      روانه شده چشمه خشگوار<sup>۶</sup>  
 هوای خوش و دشت های فراخ      درختان بار آور و سبز شاخ  
 [گیاه های]<sup>۷</sup> نورسته از قره بر<sup>۸</sup>      چو بر شاخ مینا بر آمول<sup>۹</sup> در

چون امیر عمر خان با امرای ذو الاحترام با چندین شأن و شوکت {۴۴۲پ} متوجه آن صوب گشت، از تعاقب او حرمهای محترم با کنیزان ماه رو (۴۸۴) با چندین تجمل خرامیدند. چون این خبر را جناب قبله گاهم شنیده، فقیر را به استقبال فرمود<sup>۱۰</sup>. فقیر به دو

- 
- ۱۰ × [ت]  
 ۱ گردیده [د]  
 ۲ نماید [د]  
 ۳ فرسخی [د]  
 ۴ چار [ت]  
 ۵ چار [ت]  
 ۶ خوشگوار [ت][د]  
 ۷ گیاهای [ت][د]  
 ۸ پر [ت]  
 ۹ آمون [د]  
 ۱۰ فرمودند [ت][د]

قطعه

بهری و شاهین و <sup>۱</sup># چرغ و <sup>۲</sup># باز را برداشتند  
 جلوه صید افکنی آن روز دیگر داشتند  
 <۴۳۳پ> از لب شیرین به تندی گرچه میگفتند تلخ  
 از ملاحظتها ولیکن شور محشر داشتند

سینه بازها از لعل و یاقوت آبدار و در شاهوار به گردن جانوران {۴۴۱پ} چون نگین  
 در زر گرفته، انداخته و سینه تار<sup>۳</sup> طومار گردن شب که ماه و اشهب صبح که خورشید است،  
 از رشک رنگ باخته و در آتش گداخته، قصاب بچه های خونریز از روی ستیز جلاجل و  
 زنگلهای زرین آن را چون دل نیم بسمل شهیدان و قربانیان تیغ عشق به چنگکهای مخلب سر  
 نگون آویخته و بندهای رنگارنگ، چون [ته های]<sup>۴</sup> فرنگ در گوشهای آن موزون قدان  
 (۴۸۳) زره های طلا و نقره را آویزد و از ریخته، با خلخال سیم و<sup>۵</sup> زر کردار را<sup>۶</sup> فتنه بر پا  
 انگیزخته، چکس ها چون پیش خدمتان چکمنهای نبات و سقرلات به دوش، چون میر شکاران  
 شکاری پی خدمتکاری دو دست بر سر زده، به یک پای راست چون سرو سهی ایستاده اند.  
 مهبای باز پردازی و شاهین و بهریها<sup>۷</sup> از طوماغه کلاه <۴۳۴ر> بر سر کج نهاده، از بیم نیزه و  
 خنجر و کلنگ در خیال جنگ میل مغفر بهادری از زر باعث یک یک به خود خودها نصب  
 نموده و تازیهای قلاده زرین<sup>۸</sup> و سیمین مرس در رکاب هر کس و خندان های داغدار به  
 چندین رنگ چون لاله {۴۴۲ر} و پلنگ در پیش میر شکار<sup>۹</sup> با وجود لب و<sup>۱۰</sup> لنج آویزان چون

۱ [ت][د]

۲ [د]

۳ × [د]

۴ توهای [د]

۵ × [ت]

۶ × [د]

۷ بهرین ها [د]

۸ [د]، زر [س][ت]

۹ شکاران [د]

به رحم و<sup>۱</sup> لطف سرداران خود دارد ز بس دستی  
 الهی دولت و<sup>۲</sup> اقبال و<sup>۳</sup> بختش پایدار آید  
 نمیدانم چه خاصیت بود با این شکار افکن  
 <۴۳۳ر> به آن صیدی که او دارد اجل سویش دوچار آید  
 {۴۴۱ر} بهار اندوه خلقی بین که کس در گلشن ملکش  
 اگر نشکفت گلگل در دل او خار خار آید  
 شهی بسیار آمد در زمین از ما در گیتی  
 کم افتاده است ز این سان کام بخش و<sup>۴</sup> کامکار آید

در آن ساعت با سعادت ترکان آهو چشم پلنگ خشم تذر و رفتار طوطی گفتار بهله های  
 زرتار را از میان خود<sup>۵</sup> گرفته.

### بیت

تا کمر بر بهله آن ترک نزاکت مست بست  
 نازکی بر خدمت موی میانش دست بست

چون جگر چاک چاک عاشقان بر دست خود پوشیده، شراب شوق میخانه صید افکن<sup>۶</sup>  
 صیاد فلک را شکست داده، چون دل مشتاقان بهله های از گلها و لاله های داغدار را به دست  
 نهادند.

- 
- |   |           |
|---|-----------|
| ۱ | [ت]       |
| ۲ | [ت][د]    |
| ۳ | [ت][د]    |
| ۴ | [ت]       |
| ۵ | [د] ×     |
| ۶ | افکنی [د] |

بر تفنگ آتش دهد در روز رزم ای دوستان  
 میبرارد دشمنان خویش را دود از دمار  
 تا فلک دارد سر<sup>۱</sup> از مهر و مه تاج از کله  
 باد دولت برقرار و تخت و<sup>۲</sup> بختش پایدار {۴۴۰پ} > {۴۳۲پ}

القصه. عزم بزم شکار کرده، مرغ دل صاحب پرواز صید افکنان و شکاریان را چون باز  
 مثل دأب هر ساله باز به دست آورده، از دار السلطنة خوقند، (۴۸۲) صانها<sup>۳</sup> الله تعالی<sup>۴</sup> عن  
 البلیات و الگزند، عنان موکب سعادت نشان به جانب مرغینان و اندجان<sup>۵</sup> و شهر خان تافت  
 و گرد راه چشم مهر و<sup>۶</sup> ماه جواهر سرمه بینایی یافت. زبان مردم به این غزل مترنم بود که<sup>۷</sup>

### شعر<sup>۸</sup>

به این نیت امیر المسلمین سوی شکار آید  
 که بهر صید دلها شایدم روزی به کار آید  
 می‌پرس از ماضی و<sup>۹</sup> مستقبل حال شکار او  
 به هر صیدی که او امسال<sup>۱۰</sup> خواهد کرد بار آید

- 
- |    |              |
|----|--------------|
| ۱  | سپهر [ت] [د] |
| ۲  | [ت]          |
| ۳  | صانه [ت] [د] |
| ۴  | × [ت]        |
| ۵  | اندگان [ت]   |
| ۶  | [ت] [د]      |
| ۷  | × [د]        |
| ۸  | غزل [د]      |
| ۹  | [ت] [د]      |
| ۱۰ | امثال [ت]    |



شاهین و<sup>۱</sup> صید به هم پیچیده، به خاک و<sup>۲</sup> خون آمیخته بود. در آن حین همان تورنه که از گله جدا شده بود، رسیده<sup>۳</sup>، به منقار خود شاهین را مجروح ساخته، تورنه صید شده را به چندین محنت و مشقت خلاص کرد<sup>۴</sup>. بعده هر دو در پرواز آمده، به گله خود رسیده، بدر رفتند. + از این کار عجیب همه لشکریان انگشت تحسین به دندان گزیده، {۴۴۰ر} در بحر تفکر فرو رفتند. ندانستند که حکمت چه بود. عقل لال و سرگردان ماند. چون <۴۳۲ر> محرمان بر سر شاهین رسیده، به خدمت امیر حاضر کردند، شاهین بیچاره به خاک و خون غلطیده بود. مجال نداشت که<sup>۵</sup> چشم گشاید و امیر فرمود که میر شکاران در معالجه او کوشند. چون امیر عمر خان به آن ترتیب و آن نسق تماشا کنان راه می پیمود و سادات و علما و فقرا گروه گروه استقبال نموده، دعا میکردند. با فتح و<sup>۶</sup> نصرت در دار السلطنة خوقند داخل شده، به دولخانه خود نزول اجلال فرمود. به عیش و<sup>۸</sup> عشرت مشغول گشت.

### ذکر شکار رفتن امیر عمر خان به صوب مرغینان و اندجان

در آن وقت سنه ۱۲۳۵ بود که امیر عمر خان شکار فرغانه را به خود مصمم کرد.

### نظم

آن جوان بخت سکندر تخت دارا گیر و دار

روی عالمگیر در یک روز خورشید اقتدار

۱ [د]

۲ [د]

۳ رسید [د]

۴ کرده [د]

۵ چون [ت]

۶ × [د]

۷ [د]

۸ [د]

چیان حاضر < ۴۳۱ ر > ساخته، از دور از اسب فرود آورده، دعا کنانیدند و شاه<sup>۱</sup> ابراهیم خان را امر کرد، دوانیده آورده<sup>۲</sup>، ملاقات نمود و ایلچیان این تجمل را مشاهده نمودند. در بحر تفکر فرو رفته، تماشا کنان میرفتند. +<sup>۳</sup> در آن وقت اتفاقاً یک گله تورنه در دشت میچرید. چون چشم امیر بدان تورنه ها افتاد، شاهین خاصه خود که به بوغدایق اشتها داشت، یکی<sup>۴</sup> تعجب او این بود که چهارده دم داشت. هر پرندۀ ای که هست، از دوازده دم زیاده نمیباشد.

مثنوی<sup>۵</sup>

چو او باز کردی پرو بال خویش      ز هیبت شدی سینه چرخ ریش  
وگر جانب آسمان تاختی      عقاب فلک پر بینداختی

به دست محمود خواجه جیلو<sup>۶</sup> قوش بیگی بود، حکم فرمود که<sup>۷</sup> به آن تورنه ها گذارد. خواجه مذکور<sup>۸</sup> بلا اهمال آن شاهین را تماغی از سر گرفته، { ۴۳۹ پ } وا گذاشت. آن شاهین تیز پر در پرواز آمده، چنان به گله تورنه [پیچیده بود]<sup>۹\*</sup> که گویا به آسمان صعود کرده باشد. گاه به نظر نظاره گیان مینمود < ۴۳۱ پ > و گاه نمینمود. همه انگشت تحیر به دندان گزیده، تماشا میکردند. بالاخیر یکی را از میان گله جدا کرده، به چنگال گرفته، به جانب زمین نزول کرد. چون نزدیک آمدن گرفت، امیر محرمان را حکم فرمود که (۴۸۱) از تعاقب او رفته، زود بیارند. چون محرمان در تاز میرفتند، هنوز به زمین نرسیده بود که از آن گله تورنه یکی جدا شده، خود را چوخ کرده، متوجه پایان شد. همه لشکریان نظاره میکردند. چون شاهین مع صید خود به زمین افتاد، هنوز میر شکاران و محرمان نرسیده بودند که آن

---

۱ شاهیم [ت]

۲ آوردند. امیر را [ت]

۳ سخن مقدم ؟ شده است این واقعه در شهر خان؟ به وقوع آمد. [ت]

۴ یک [د]

۵ قطعه [د]

۶ جلو [د]

۷ [د]

۸ × [د]

۹ [ت]، پیچیده اند [س]، پیچید [د]

## بیت

اسیر چشم خوبان خجندی گشته ام یک سر  
نمی آید به خاطر فکر ترکان ثمرقندم

در آن وقت خبر رسید که حاجی قربان با همراهی ایلچی محمد رحیم خان حاکم خوارزم رسید.

مجمّل سخن این که قبل از این مقدمه حاجی میر قربان به سلطان روم از جانب امیر عمر خان ایلچی شده، رفته، {۴۳۸پ} باز گشت به اورگنج وارد گردیده بود. محمد رحیم خان از حاجی مذکور مطلع شده، تحفه و هدایایی که سلطان محمود خان پادشاه روم به امیر عمر خان نامزد کرده فرستاده بود، او را محمد رحیم خان گرفته، ایلچی همراه کرده، فرستاد و<sup>۱</sup> امیر این خبر را شنیده<sup>۲</sup>، بسیار خرسند شد. <۴۳۰پ> به استقبال او کس فرموده، به جای مناسب فرود آورد و در آن حین بود، خبر رسید که برادر عبد العزیز خان شاه ابراهیم خان از برادر فرار نموده، به خدمت امیر رسید و از این خبر بهجت اثر نیز خرسندی نموده، (۴۸۰) به استقبال کس فرموده، او را نیز به جای مناسب فرود آورد. به مهمانداری قیام نمود<sup>۳</sup>. روز دیگر امیر از آن ولایت بی مانند کوچیده، در موضع قرقچی قوم وارد گردید و از آن جا کوچیده، در دیهه<sup>۴</sup> صابر تپه نزول اجلال فرمود. در آن شب به داد و دهش پرداخت و بعد از دمیدن صبح منادی دادند که لشکریان مجتمع شده، به کور و نوش همایون حاضر شوند. در آن وقت لشکریان را چنان آراسته و پیراسته بود که بسیاری ایشان در طلا و نقره غرق {۴۳۹ر} شده بودند.

زبدۀ کلام<sup>۵</sup> آن که امیر عمر خان با تجمل بسیار به اسب کوه پیکر هامون نورد سواری نمود. با دبدبۀ بسیار متوجه مقصد گشت. در آن حین ایلچیان مذکور را شغاولان و اودّی

۱ × [ت]

۲ شنید [د]

۳ نمودند [ت][د]

۴ دهه [ت][د]

۵ × [د]

سرکرده ها از امیر رخصت اجازت یافته، متوجه دشمن شد.<sup>۱</sup> در عین گرمی محاربه به لشکریان فاتحه داده، به سر ایشان تاخت آورده، به هم در آمیختند و چنان جنگ مغلوبه شد که از کشته<sup>۲</sup> پشته بر داشتند و از غبار سم سمند بهادران کینه خواه هوا تاریک و ظلمانی گشت و سپاهیان محمد رحیم دیوان بیگی رو به فرار آورده، < ۴۲۹ پ > قلیل از ایشان به چندین محنت و مشقت اسپان را خالی گذاشته، [پاره ای پیاده]<sup>۳</sup> خود را به خندق انداخته و پاره ای از ممر آب از آن جا<sup>۴</sup> به هزار<sup>۵</sup> عذاب خلاص شده، دروازه را خاک ریز کرده، به انداختن تیر و تفنگ پرداختند و سپاه نصرت اثر تعاقب نموده، بسیاری را به قتل (۴۷۹) میرسانیدند و چندی را اسیر میکردند. بالاخر با فتح و نصرت مراجعت نمودند. امیر را دعا کردند. امیر موافق خدمت هر کدام الطاف پادشاهانه و مرحمت خسروانه نمود. بالاخر دید که عروس این ولایت به آسانی به آغوش نمی آید. لا علاج روز دیگر از آن جا کوچیده، به کوه پایه اوراتپه { ۴۳۸ ر } وارد شدیم. در آن وقت عین گندم پزی بود. چنان گندم شده بود که اگر اسب و آدم در میانش در آید، نمینمود و امیر عمر خان حکم نمود که آتش در دهند. چنان آتشی در افتاده بود که تر و خشک برابر میسوخت. در سه شب و روز از دست لشکریان مور و ملخ تمثال نه در ده خانه و نه در باغ نخل و نه در دشت زراعت ماند < ۴۳۰ ر > و<sup>۶</sup> کوه و هامون<sup>۷</sup> را چنان از خس و خاشاک پاک ساختند که غیر از خاک و سنگ چیزی باقی نمانده بود. روز چهارم امیر عمر خان مراجعت فرموده، در موضع آق سو وارد گردید. روز دیگر از آن جا کوچنده، در ولایت خجند نزول اجلال فرمود. با پری چهره های آن عروس ولایت به عیش و عشرت مشغول شد. چنانچه از زاده طبع آن جهان پناه است که در آن وقت فرموده.

۱ شدن [د]

۲ کشته ها [د]

۳ پیاده پاره ای [ت]

۴ مهلکه [ت]

۵ هر [د]

۶ × [ت]

۷ ها [ت]

{۴۷۸} چون ایشان از آن ابله مرخص شدند، یک باره به سر دشمن تاخت {۴۳۷} آورده، به هم در آویختند و چنان بازار محاربه گرم شد که بایع مرگ پیر و جوان را به یک نرخ میفروخت و خاک رزمگاه از خون یلان گلگون شد.

## بیت

تف تیغ خنجر چنان بر فروخت      که در چشمه جرک ماهی بسوخت

مایان از کرده خود پشیمان شده، دست افسوس به هم میسودیم و نمیدانستیم که آتش فتنه را به چه تدبیر فرو نشانیم. در آن وقت از این حادثه بزرگ امیر عمر خان واقف گشته، در غایت تعجیل <۴۲۹> به سر ما آمده، صورت واقعه را استفسار نمود. ما از ترس چیزی نمیگفتیم، به حکم آن که

## مصراع

که از سوال ملولم که از جواب خجل

و<sup>۱</sup> دیگران از بیم مایان اظهار این امر را نمیکردند و امیر عمر خان >تا رفته، از حدوث امر مطلع شوم.< گفته، مبالغه مینمود. بالاخر ندیمان یقین دانستند که تا امیر سبب این جنگ را نداند، صورت ندارد که وا گذارد. عاقبت از وهم خود چار و<sup>۲</sup> ناچار به فقیر حواله کردند. چون امیر دانست که این بی ادبی از ما سر برزده است. ساعتی به فقیر در آشفت. فقیر گفتم.

## مصراع

{۴۳۷} این نیز به دولت همایون تو بود

بعده<sup>۳</sup> چیزی نگفت و سرداران دیگر را حکم فرمود که دشمن را قلعه گی کنند. چون

۱ [د]

۲ [د] ×

۳ بعد [ت][د]

به فقیر انعام فرمود. <sup>۱</sup> به محمد علی خان اسب خاصه خود همدم کوک نام که با باد برابری میکرد، التفات نمود. چون محمد رحیم دیوان بیگی سپاه نصرت دستگاه را بدین منوال مشاهده نمود، لا علاج از بیرون مراجعت فرموده، به شهر در آمد و دروازه ها را خاک ریز گردانیده، به قلعه <۴۲۸> ر داری پرداخت. چون امیر عمر خان به آن دبدبه و تجمل به ولایت اوراتپه [وارد گردید] <sup>۲</sup>، احدی در بیرون قلعه نبود. آن حصن حصین را چون نقطه نون در میان گرفته، نزول اجلال فرمود. به محاصره و محاربه پرداخت. چنان در تحت توپ گرفت که تیر توپ در میان شهر مثل ژاله می بارید. مجال دشمن نبود که سر از قلعه بر دارد. بعد از پیشین بسیاری لشکریان به جای خود مراجعت {۴۳۶پ} فرمودند و در آن وقت امیر عمر خان فقیر و محمد علی خان را به جای خود گذاشته، خود با <sup>۳</sup> چندی از ندیمان و محرمان را گرفته، از بهر تفرج و طهارت بر لب رود نزول فرمود. در آن وقت لشکریان محمد رحیم دیوان بیگی آهسته آهسته از شهر بیرون شده، به خواجه شهداء ولی مجتمع شده، در برابر ما <sup>۴</sup> صف زده، ایستاده بودند. در آن حین بود که امیر عمر خان یوسف پروانچی نام سردار کله بهادر داشت، به پیش مایان رسید. <۴۲۸پ> ما از روی بی تجربه گی و بچه گی به آن حیوان طینت گفتیم <sup>۵</sup> که امیر به ما امر کردند که لشکر فرموده، دشمن را قلعه گی کنید. آن غول بیابان به سخن ما عمل نموده، بالرأس و العین گفته، مراجعت فرمود. خوشوقت قوشبیگی را و میرزا رحیم پروانچی را و خان خواجه میر اسد و عبد کریم دادخواه هر <sup>۶</sup> چهار سرکرده را به جنگ فرمود.

## بیت

پر خرد از طرح سخن رانی او      دانست که کجا است نادانی او

- 
- |   |              |
|---|--------------|
| ۱ | و [ت]        |
| ۲ | رسید [ت] [د] |
| ۳ | × [د]        |
| ۴ | × [ت]        |
| ۵ | گفتم [د]     |
| ۶ | × [ت]        |

همان شب به درستی لشکر پرداخت. صباحی که جمشید خورشید لوای بیضا در فضای سپهر خضرا بر افراخت، {۴۳۵پ} امیر فریدون جاه به اسب باد پیما که هما کوک نام داشت، سواری نموده، به تعبیه سپاه شوکت دستگاه متوجه گشته<sup>۱</sup>، مقرر گردانید که لشکر قوش بیگی و شاهی پروانچی و محمد شریف دادخواه با جمعی دیگر از اهل جنگ و شین در هراول رأیت توکل بر افرازند و ایر نظر بیک دیوان بیگی و عبد الکریم دادخواه و خان خواجه میر اسد و جوقی دیگر از اهل تهور در برانغار پیکار اعدا را مطمح نظر همت سازند. در آن وقت به سیادت پناهی<sup>۲</sup> محمود خان سپاه اندجان را سپرد و خوشوقت قوش بیگی و میرزا رحیم پروانچی از جوانغار روی به معرکه کار و<sup>۳</sup> زار آرند و از سادات جناب ایشان توره خواجه <۴۲۷پ> خواجه کلان و جناب سلطان خان<sup>۴</sup> خواجه کلان و جناب قبله گاهم شیخ الاسلام و ایشان توره اوراق کلان<sup>۵</sup> و از امارت پناهان قاسم بی اتالیق و رجب قوشبیگی و میرزا مله دادخواه و دیگر امرائی<sup>۶</sup> که بودند، با زمره ای از نوینان در سایه علم بلند پایه پادشاهی در قلب توقف نمودند و همت عالی بر اعدام و افنای اعدا گمارند. به این ترتیب و به این نسق {۴۳۶ر} متوجه اوراتپه گشت. در آن حین سر<sup>۷</sup> کندل خاصه خود را مع اسب خاصه خود دولت توروک که در دوندی (۴۷۷) از باد سبقت میجست، [چنانچه گفته است].<sup>۸</sup>

### بیت

سیوردم و سیورسم و سیوریال      عجب نبود که پرد بی پر و بال

۱ گشت [د]

۲ پناه [د]

۳ [د]

۴ × [د]

۵ × [ت]

۶ امراء [ت] [د]

۷ سپر [ت]

۸ [د]

و چون بهار پر تنسیم نسیم عنایت الهی این غنچه ریاض پادشاهی در گلشن امید امیر عمر خان شکفت و مبشر اقبال خبر بهجت اثر تولد آن پسر عالی گهر را این فقیر در گوش جاننش رسانیده، مژده گانی طلبیدم. از کمال خرسندی به فقیر لباس خاصه خود را مع اسب تازی نژاد با جبدوق طلا انعام کرده، در غایت مسرت و سرور +<sup>۱</sup> تهیه اسباب جشن و سور فرمان فرمود و چند روز بساط نشاط مبسوط داشته، اقداح باده های خوشگوار از کف ساقیان لاله عذار تجرّع نموده، نام و لقب آن دلبد بر سلطان محمود خان والنعمی<sup>۲</sup> قرار گرفت و چند {۴۳۵ر} قابله زهره جبین جهت < ۴۲۶پ > ارضاع و تعهد آن مولود سعادت مند تعیین پذیرفت و شاهزاده در مهد عزت و مهربانی در حجره عطوفت کامرانی می یافت.

### ذکر لشکر کشیدن امیر عمر خان به صوب اوراتپه

چون چندی [بر این]<sup>۳</sup> منوال گذشت، سنه ۱۲۳۵ آفتاب در برج سرطان در عین گرمی هوا بود که امیر عمر خان تمام لشکریان فرغانه را (۴۷۶) فراهم آورده، با دبدبه بسیار متوجه مملکت اوراتپه گشت.

### مصراع

ظفر هم عنان نصرت اندر رکاب

در آن وقت اول سفر فقیر و محمد علی خان بود که امیر همراه خود برد. چون امیر عمر خان به سه منزل در ولایت خجند وارد گردید و<sup>۴</sup> دو روز < ۴۲۷ر > در آن بلده ساکن گشته، به درستی لشکر پرداخت. روز سیوم با تجمل بسیار رو به مقصد آورد. موضع خان قوروغی را محل لشکرگاه خود<sup>۵</sup> ساخت. روز دیگر از آن جا کوچیده، در دیهه<sup>۶</sup> سرای نزول فرمود.

۱ به [ت]

۲ × [د]

۳ بدین [ت][د]

۴ × [ت][د]

۵ [د]

۶ دهه [د]



ستانی را روشن ساخت و کامیابی <۴۲۵پ> از کتم عدم به سرا بوستان<sup>۱</sup> وجود قدم نهاد که سایه لطف و کرم بر مفارق طوایف بنی آدم انداخت.

### مثنوی<sup>۲</sup>

به فیض کردگار لایزالی      دری افزود در عقد معالی  
پدید آمد عجب فرخنده فالی      جمالش آفتاب بی زوالی  
وجودش نور بخش چشم امید      ظهورش موجب اقبال جاوید

در +<sup>۳</sup> سنه ۱۲۳۴ بود که یعنی<sup>۴</sup> امیر عمر خان را حضرت واهب العطایا از (۴۷۵) ماه لار آیم بنت رحمن قل اتالیق پسری کرامت فرمود که هم از اوایل ایام صبی انوار دولت و اقبال از جمال حالش میدرخشید و هم از مبادی آوان نشو<sup>۵</sup> و نما آثار شوکت و اقبال از جبین فرخنده فالش لایح میگرددید. ضیاء بشره مهر تنویرش مانند تابشیر صبح صادق خبر میداد که عنقریب آفتاب ابهت و کشور ستانی از مشرق امید این خلاصه دودمان رحیم خانی بر صفحات روزگار فرق آسایی خواهد یافت و صفای چهره<sup>۶</sup> {۴۳۴پ} خورشید مآثرش<sup>۷</sup> بسان لوامع ستاره سحری مشعر بود، به این معنی که به زودی <۴۲۶ر> شب ظلمانی مظلومان عالم فانی از فروغ معدلت این نقاوه اعیان خلافت و جهانبانی به روز شادمانی تبدیل خواهد یافت.

### مثنوی

بلی بی سخن صبح گیتی فروز      بود مخبر از روشنایی روز  
شود ظاهر از نور اقبال مهر      که سازد منور تمام سپهر

۱ بوستان [ت][د]

۲ نظم [د]

۳ سال [س][د]

۴ [د]

۵ نشاء [د]

۶ مآثرش [ت][د]

شه عشرت اندیش صاحب کرم کرام سپاه و سران حشم  
{۴۳۳پ} به قانون جمشید و آیین کی نبودند یک هفته خالی ز می

در آن شب بر جمله امرای ذو الاحترام انعام های<sup>۱</sup> پادشاهانه و احسانهای<sup>۲</sup> خسروانه نمود. از آن جمله به جناب قبله گاهم پوستین سموری سیاه چال و شمله عظیم خانی و یک شمشیر کندل و اسب کوه پیکر <۴۲۵ر> هامون نورد خاصه خود را مع جیدوق کندل و دو باز خاصه، یکی جیغاول گوهر داشت و<sup>۳</sup> دیگری یاقوت رمانی و یک کمر خاصه خود کندل که چهار هزار طلا خرج<sup>۴</sup> او شده بود و هر کدام موافق حالش علی هذا القیاس مهربانی دید. بعد از یک هفته از آن ولایت کوچیده، متوجه دولتخانه شد. بعد از دو منزل به مقصد رسید و از رنج راه بر آسود و به عدل و داد پرداخت، [به حکم آن که]<sup>۵</sup>

#### بیت

حلقه زرین چشم باز را از روی لطف دست عدلش زیور پای کبوتر کرده بود

و مملکت فرغانه را<sup>۶</sup> به یمن معدلت پادشاه فرزانه امیر عمر خان عزت افزای ریاض رضوان بود. [در آن وقت]<sup>۷</sup> دری<sup>۸</sup> نور بخش در عقد سلطنت و نامداری افزود و در<sup>۹</sup> خورشید درخشان از افق خلافت و کامکاری طلوع نمود، بلکه آفتاب از سپهر اولاد رحیم خانی {۴۳۴ر} به روضات احوال طبقات<sup>۱۰</sup> انسانی تافت که دیده امید صاعدان مصاعد کشور

- ۱ انعام [ت]
- ۲ احسان [ت]
- ۳ × [ت]
- ۴ خرجی [ت]
- ۵ [د]
- ۶ × [ت]
- ۷ × [ت]
- ۸ در [د]
- ۹ دری [ت] [د]
- ۱۰ [د]

<۴۲۴ر> در آن وقت به قدرت حضرت<sup>۱</sup> آلهی عالم کون و فساد چنان تاریک و ظلمانی گشته بود که یاد از شب هجران عاشقان میداد. بعد از ساعتی چنان برف<sup>۲</sup> گرفت که چشم گشادن نمیماند. سه شب و روز به حیثیتی برودت هوا اوج کرده بود که مجال کسی نبود که از جای خود جنبد و هر کس به جای افتاده بود و<sup>۳</sup> در آن وقت در میان مردم قحطی [افتاد و]<sup>۴</sup>. چیزی یافت نمیشد. اگر موجود شود، یکی به صد میخریدند. سه روز بدین منوال میگذشت. روز چهارم برودت هوا یک چیز تخفیف یافت. رو به بهبودی آورد و سیمرغ زرین بال آفتاب عالمتاب {۴۳۳ر} بر این عالم کون و فساد جلوه گر شد و از مهر شعاع خود عالم را روشن و مصفا ساخت.

خلاصه کلام آن که امیر عمر خان بلا اهمال از آن دشت بی پایان کوچیده، در کمال سرعت قطع مسافت نمود. در موضع یازیبیان وارد گردید. روز دیگر از آن جا کوچ کرده، متوجه یار مزار شد. مدت شکار در آن وقت قریب به یک ماه کشیده بود. به یار مزار نزول <۴۲۴پ> اجلال فرمود. دست عطا بر گشاد. روزی امراء ذوی<sup>۵</sup> الاحترام را جمع ساخته، ابواب فرح و نشاط بر گشاده و باده گلرنگ از دست ساقیان شوخ شنگ در گردش آمده و آواز چنگ از ساز مطربان خوش آهنگ بلند شد، [به حکم آن که گفته اند.]<sup>۶</sup>

نظم<sup>۷</sup>

به گردش در آمد می لاله گون	به آهنگ چنگ و نی و ارغنون
گرفته به کف ساقی گل عذار	شرابی به از لعل نوشین یار
مغنی به الحان مردم فریب	ببرد از دل اهل مجلس شکیب
(۴۷۴) ز بس خوردن رطلهای گران	برون رفت هوش از سر سروران

۱ × [ت] [د]

۲ برقی [د]

۳ × [د]

۴ افتاده بود [د]

۵ ذو [ت]

۶ × [د]

۷ مثنوی [د]

به هر دوی ما مع آن سیاه چشمی<sup>۱</sup> جواب داد. ما از خدمت امیر رخصت اجازت یافتیم. شکر کنان و خنده زنان به چرخ‌هایی که در راه گذاشته، رفته بودیم، شکار آهو کرده، متوجه قوش شدیم.

## بیت

به چشم خال میان دو ابرویش بنگر مگر که بر سر آهو است چرخ در طیران

چون به خرگاه خود رسیدیم، جان به سلامت بردیم. بعد از خفتن بود که امیر <۴۲۳پ> از شکار باز گشت نموده، به سراپرده خود وارد گردید. بعد از ساعتی بود که محرمی آمد. گفت، شما را امیر می‌خواهد. فقیر بلا توقف به خدمت او رسیده، دیدم، که<sup>۲</sup> در غایت شادان و خرم نشسته است و در پیش او خرمن آهو افتاده است. دانستم که شکار او برار کرده است. بعد رو به فقیر آورده، گفت، بعد از رفتن شمایان شکار ما بسیار برار کرد. هر آینه شمایان هم صبر مینمودید، بسیار صید میکردید. فقیر از جای خود بر خواسته، عرض نمودم که هر آینه به مایان رخصت نمیدادند، ما از سردی هوا و از گرسنگی می‌مردیم. شادی به غم منجر میشد. چون این سخن {۴۳۲پ} از فقیر شنید، بسیار خندید و در پیش خود جای داد.

## بیت

(۴۷۳) سخن را سخت نا سنجیده گفتم دُرّی نا سفتنی بود آن که سفتم

و در آن روز خود بست آهو انداخته بود. همان شب به عیش و عشرت گذرانیدیم. روز دیگر امیر خواست که مثل روز گذشته متوجه شکارگاه شود. ندانست که هیچ نوش بی نیش نیست و هیچ شادی بی غم نیست، به حکم آن که

## مصراع

گنج با مار است گل با خار مستی با خمار

۱ چشم [د]

۲ × [د]

چند سعی مینمودند که آهوها را به حیلۀ رام کرده، به سر ما آرند، از بوی پلته<sup>۱</sup> پی برده، آن وحشیان می رمیدند. وقت بسیار دیر کشید و مجالی نبود که حرکت کنیم. {۴۳۱پ} هوا در غایت سردی<sup>۲</sup> بود. اگر تف میکردیم، در حال یخ میکرد و ما هر دو به یک قبت جامه در بالای برف چار و<sup>۳</sup> ناچار از ترس امیر از هزار شکار آهوها بل از عمر بیزار شده، دندان به دندان مانده، می نشستیم و زمهریر چنان به ما تأثیر کرده بود که دست و<sup>۴</sup> پا از حرکت باز مانده بود و بالای مرده صد چوب. در آن وقت <۴۲۳ر> گرسنگی در طبیعت هر دوی<sup>۵</sup> ما چنان مستولی (۴۷۲) شده بود که اگر در آن وقت یک پرچه زغاره موجود میشد، هزار بار به جای کباب شامی و قدایف رومی میگذشت، [به حکم آن که]<sup>۶</sup>

## بیت

یک پرچه نان قاق و یک شلغم خام      بهتر ز هزار آهوان وحشی

عاقبت دیدم که کار از دست میرود. رو به محمد علی خان آورده، گفتم، هرچه بادا باد، کارد به اوستخوان<sup>۷</sup> رسیده است، تفنگ ها را خالی کن و از جای بر خیز و آهوها گریزند، شاید که از این بلا خلاص شویم. چون محمد علی خان این سخن از فقیر شنید، شادی کنان و نعره زنان به اتفاق یک دیگر همچنان کردیم و آهوان از<sup>۸</sup> آن جا رو به گریز نهادند و امیر از این کار ما {۴۳۲ر} در آشفت و در پیش خود طلب نمود. دید که ما از دست رفتیم، بنابر مصلحت این کار را از برای خلاصی جان خود کردیم. لا علاج یک درجه کاهش کرد. بعده<sup>۹</sup>

۱ پتله [ت]، فتیله [د]

۲ سرما [د]

۳ × [ت] [د]

۴ × [ت]

۵ دو [ت]

۶ [د]

۷ استخوان [ت] [د]

۸ × [د]

۹ بعد [ت] [د]

## بیت

توانی جهان را به شادی گذار      نه شادی بماند<sup>۱</sup> نه غم پایدار

در آن وقت امیر عمر خان از شکار مرغ سیر گشت، به شکار آهو به پرداخت و در موضع پنجه قم وارد گردید و آن موضع ریگستانی است، در غایت وسعت و گرد آن سرزمین قریب یک هفته راه است، از آبادانی دور. چون بدان<sup>۲</sup> بیابان بی پایان در آن سردی هوا نزول فرمود، روز دیگر با ده تن که چهار او از میرگنان شکار کن بودند و شش او از آهوچشان خوقند میبود. امیر رو به شکارگاه {۴۳۱ر} آهو آورد. در آن اثنا بود که یکی از آن پری رو که بهترین ایشان بود، فقیر با<sup>۳</sup> او تعشق داشتم، در غایت حسن و جمال بود.

## بیت

سرو من روزی که با شمشاد و<sup>۴</sup> گل یک جا نشست

یک سر و گردن به خوبی از همه بالا نشست

در تاز به سر ما گرفتاران چون آفتاب خاور و یا سایه هما پرتو افکند <۴۲۲پ> و گفت، امیر شما را و محمد علی خان را طلب میکند. چون این پیام از آن پری رو شنیدیم، سپند آسا از جای خود بر جسته، متوجه امیر شدیم. چون به خدمت امیر رسیدیم، دیدیم که بیابان را سوروگ سوروگ آهو گرفته است و گله گله میگردد. چون به جای خمیه<sup>۵</sup> زمین رسیدیم، امیر فقیر را و محمد علی خان را از اسب فرود آورد و<sup>۶</sup> خود به جانب آهو خرامید و ما هر دو در کمین آهو منتظر نشستیم و امیر نیز به جای از اسب نزول فرمود و شکاریان هر

۱      نمیماند؟ [ت]، نماند [د]

۲      به آن [د]

۳      به [ت]

۴      [ت]

۵      خمینه [ت]، خمی [د]

۶      [د]

تفنگ‌ها انداخته، به‌های هوی بسیار تفنگ‌ها<sup>۱</sup> را خالی کردن گرفتیم و مرغان گروه‌گروه پریده، به‌جانب بیشه خود را کشیدند. <۴۲۱پ> در یک ساعت آثار مرغ در ظاهر نماند. این حرکت بی‌جای ما سبب رنجش امیر گشت. به غضب به اسب خوش خرام خود سواری نمود. لا علاج به شکار باز پرداخت. از این کار بی ادبانه ما امرا خرسندیها<sup>۲</sup> میکردند. [چنانچه گفته اند.]<sup>۳</sup>

### بیت

مرکز پرگار دولت دل به دست آوردن است  
میتوان ملک دو عالم را از این خاتم گرفت

القصه. بازار شکار چنان گرم شد و برار گرفت که در عصر هیچ پادشاهی مثل آن شکار به وقوع نه آمده بود. باز گشت مرغی که افتاده بود، جمع نمودند. همان روز به چهل هزار رسیده بود. روز دیگر از آن جا کوچیده، ولایت اندجان را به پای میمنت لزوم خود عطر فشان گردانید و حاکم آن ولایت عیسی دادخواه طریق مهمانداری را باید و شاید به جای آورد. + سه شب و روز به ضیافت پرداخت {۴۳۰پ} و هر گونه اطعمه و اشربه مهیا ساخت و پیشکش‌های مناسب کشید و از هر جنس متاع و اقمشه منظور نظر امیر گردانید. اینچنین در آن سفر در هر ولایت که میرسیدیم، سرکرده‌های آن حدود به تقلید یک دیگر طریق مهمانداری را می افزودند.

زبدۀ کلام این که چون از اندجان سواری نموده، <۴۲۲ر> ده روز در میان نیستان هر روز منزل‌های تازه و شکارهای بی اندازه میکردیم. روز به شکار می پرداختیم. شب با ساقیان لاله رخ می ناب با کباب مرغ میخوردیم و با مطربان (۴۷۱) ناهید آهنگ صحبت میداشتیم.

۱ تفنگ [د]

۲ خرسندیهایی [د]

۳ × [ت]

۴ در [ت]

چون تیر به شیر کارگر آمد، چنان نعره ای زد که همه در لرزه آمد و خود از پا در افتاد و<sup>۱</sup> چون پادشاه عالم شکار پادشاه سباع کرد، نظاره گیان انگشت تحیر به دندان گزیده، تحسین و آفرین کردند<sup>۲</sup> و مایان آن [دو بچه شیر]<sup>۳</sup> را صید کردیم. امیر عمر خان باز گشت نموده، در دیهه<sup>۴</sup> {۴۲۹پ} قوبا نزول فرمود. همان شب به عیش و عشرت گذرانید. روز دیگر از آن جا کوچ کرده، در بیشه شهر خان رسیدیم. آن بیشه ای بود، در غایت وسعت و از هر نوع شکار موجود، در آن جا زمین زراعت نیز موجود بود. از برای دانه خوردن چنان مرغ بسیار آمده بود که گویا عالمی لاله زار شده، یا دشتی را به ماوت سرخ پوشانیده <۴۲۱ر> باشند و امیر عمر خان چون حال را بدین منوال مشاهده نمود، بازداران را منع نمود و<sup>۵</sup> خود از اسب فرود آمد و تفتنگ خاصه خود را گرفته، متوجه شکارگاه شد (۴۷۰) و امرای و<sup>۶</sup> بازدارانی<sup>۷</sup> که بودند، از این کار امیر ناخوش گشتند<sup>۸</sup>، آرایبی نداشتند که لب ظهور کنند. لا علاج به رمز و ایما به یک دیگر اشارت میکردند. در آن وقت امیر فقیر را و محمد علی خان را در پیش خود طلب نمود. گفت، تفنگ های خود را گرفته، یک جانب را هر دوی شما شکار کنید و یک جانب را ما شکار میکنیم. مایان<sup>۹</sup> لا علاج گردن خار خار انگشت قبول به دیده نهاده، هر دوی ما نیز<sup>۱۰</sup> متوجه شکار<sup>۱۱</sup> شدیم. چون در میان مرغان افتادیم، به یک دیگر {۴۳۰ر} چنان مصلحت را قرار دادیم که کاری کرده، مرغان را از این جا باید کیانید، تا که امرا منتظر نشوند. اگر چندی که خلاف طبع امیر بود، با وجود همان داروی بسیار در

۱ × [د]

۲ میکردند [د]

۳ بچه شیر [ت]، شیر بچه [د]

۴ دهه [ت] [د]

۵ [د]

۶ × [ت] [د]

۷ بازدارانی [د]

۸ گشته [د]

۹ [د]

۱۰ [د]

۱۱ شکارگاه [ت]



جانب هجوم آوردند. دیدند، شیری در غایت بزرگی. دو بچه به هم دارد. از غریدن او لرزه بر زمین و زمان افتاده است.

### بیت

هر بیشه گمان مبر که خالی است      باشد که پلنگ خفته باشد

<۴۲۰ر> و مردم گرد او را چون حلقه انگشتی در میان گرفته، به انداختن تیر و تفنگ اشتغال دارند\*<sup>۱</sup> و آن شیر گرین در یک ساعت سه کس را به سوی عدم فرستاد و چهار (۴۶۹) کس را مجروح ساخت و شش اسب را از پا در انداخت. در آن وقت خبر به امیر عمر خان رسید، آن ببر میدان دلاوری بلا توقف شکار خود را باز گذاشته، به تفنگ خاصه خود که به کیچکنه فرنگ اشتها داشت، از دست بهادر خواجه دسترخانچی گرفته، متوجه آن شیر یله شد. فقیر در آن وقت در پیش او حاضر بودم. همراه به سر شیر رسیدیم. دیدیم که در میان {۴۲۹ر} نیستان غریده، چرخ میزد. اما خود ظاهر نمیشد. امیر حکم نمود که<sup>۲</sup> آتش در نیستان اندازید. چون آتش در نی افتاد و دور شیر را آتش گرفت و شیر بی طاقت گشته، لا علاج آن پادشاه درنده خوش خوش به دشت قدم نهاد. +<sup>۳</sup> امیر عمر خان حکم نموده بود که کسی به این شیر مزاحم نشود و اگر ضرری به شیر رساند، خان و مان او تاراج است. بنابر آن همه از شیر دست <۴۲۰پ> باز داشته، نظاره میکردند و خود امیر<sup>۴</sup> عمر خان کمین کرده بود. چون شیر گرین از بیشه بیرون خرامیدن همان، از تفنگ امیر آتش خوردن همان. چنان شصت تیر در میان هر دو چشم او خورد که از دم او گذشته، بدر شد.

### بیت

فلک گفت رحمت [بر آن]<sup>۵</sup> دست باد      ملک گفت احسن فلک گفت زه

۱ [ت][د]، دارد [س]

۲ × [ت]

۳ و [ت]

۴ [ت]

۵ بدان [ت][د]

(۴۶۸) خلاص کلام آن که در<sup>۱</sup> سنه ۱۲۳۴ بود که با تجمل بسیار مع حرم محترم عنان عزیمت به صوب آن بلده کشید. بعد از یک کوچ در ولایت یار مزار که حاکم نشین مملکت مرغینان است، نزول اجلال فرمود. سه روز در آن جا مکث کرد و<sup>۲</sup> به عیش و عشرت و به داد و دهش مشغول شد. روز چهارم حکم نمود که<sup>۳</sup> {۴۲۸ر} تمام مردم +<sup>۴</sup> [اندجان و مرغیلان]<sup>۵</sup> پیاده و سواره +<sup>۶</sup> جمع شوند. چنان مردم هجوم کرده بودند<sup>۷</sup> که از چهل هزار کس فوق بود و بازی که در آن شکار جمع آمده<sup>۸</sup> بود، به سه هزار میرسید و کمترین دعاگویان او فقیر بودم که چهل باز به فقیر تعلق داشت و باز خاصه امیر به سیصد عدد میرسید و نه شُنقار<sup>۹</sup> داشت و چهل بهرین و شاهین کلان گیر بود و صد چرخ آهو گیر داشت و دو صد سگ شکاری و دو سگ همازاد داشت که از خان قزاق آمده بود. همه قلاده های طلا و نقره داشت و جُل پوش های مخمل بود. چون از ولایت یار مزار رجوع <۴۱۹پ> نمود، جوانان سرو قد از صد جا چون نی میان بسته، با چندین ناله سحری به آن خدمت میرسیدند. بعد از چهار فرسخ قطع راه در نیستان قوبا وارد گردیدیم. آن نیستانی بود که جنگل مازندران در پیش او از بیابان بغداد هم کم اشجارت تر بود و نی او سر به ثریا<sup>۱۰</sup> کشیده و در آن بیشه مثل شیر و گرگ و خوک و دیگر سباع لایعد و لایحصی بود. چون امیر عمر خان در آن بیشه داخل شد، دست به انداختن {۴۲۸پ} باز گشاد و مرغ دشتی آن مقدار بسیار بود که از پریدن هوا را گرفته بود. در آن وقت شکار چنان برار کرده بود که شکار جمشیدی یکی از خوشه چینان او میبود. در عین گرمی شکار از میان نیستان غریو از مردم بر آمد. همه شکار خود را گذاشته، به آن

- ۱ × [د]
- ۲ × [ت][د]
- ۳ × [ت]
- ۴ ولایت [ت]
- ۵ مرغیلان و اندجان [د]
- ۶ مردم [د]
- ۷ بود [د]
- ۸ آورده [د]
- ۹ شمقار [د]
- ۱۰ سر یا [د]

شد،<sup>۱</sup> به حکم آن که

### بیت<sup>۲</sup>

میکند پا به رکاب آن مه من می میرم      که چنین<sup>۳</sup> تنگ چرا زین به کنارش گیرد

بهرام چرخ از سهم تیرش مانند گور بر زمین آید و چون حرم سور با شست قرین سازد، شیر گردون به دامش افتد. بنابر آن به عزم تسخیر وحشیان دشت پیما و تعهد اقرار؟ هوانجات؟ صحرا منعطف ساخته، جانوران صید گیر به هر سو سر داده، شاهین تیز بال بسان شاهدان خوش سیماب طبع {۴۲۷پ} سنگ [آهنگی را]<sup>۴</sup>، کبک و درّاج را از هوا به زمین آورده و بازگیر [پرو و بالشی]<sup>۵</sup> از خطوط سفید و سیاه به چشم نیکوان مانده، مانندی که سیاه<sup>۶</sup> چشمان عشق ساز به سر پنجه<sup>۷</sup> مژگان دلهای بیدلان به چنگ آرند، در گرفتن تذرو به پرواز آمده، چنگال باز کرده و پلنگ چنگ به خون و برق آهنگ بیدرنگ فرو برده، به آهو گرفتن هنر ذاتی جوهری سعی آشکار ساخته و تازی تیز ناخن سبک خیز سخت گیر ناگهان چون اجل بر سر گور و گوزن رسیده، بر خاک [عدمی اندازد]<sup>۸</sup>.

### مثنوی<sup>۹</sup>

چو در نالیدن آمد طبلیک باز      در آمد مرغ مرد افکن به پرواز  
<۴۱۹ر> روان شد بر هوا باز سبک پر      جهان شد خالی از کبک و<sup>#</sup> کبوتر

۱ شده [د]

۲ × [د]

۳ چونین [ت]

۴ آهنگ گیرایی دیده [د]

۵ هر بالش [ت]، هر و بالش [د]

۶ سیه [ت][د]

۷ عدم انداخت [ت][د]

۸ رباعی [د]

۹ [د]

مملو شده بود<sup>۱</sup> که کسی < ۴۱۸ر > تعاقب رفتگی [از هزار گوسفند و صد اسب زیاده]<sup>۲</sup> مالک شده بود. از این قبیل بسیار بوده است. سه شب در آن جا ایستاده، سر رشته اسیران و مال ایشان را [قیام نموده]<sup>۳</sup>، متوجه ولایت جیزخ گشت. چون به آن قلعه رسید، مانند<sup>۴</sup> خط پرگار در میان گرفته، یک شب و یک<sup>۵</sup> روز به محاصره پرداخت. دید که غنچه مدعا (۴۶۷) به آسانی نمیشکفت. عنان عزیمت به صوب خوقند باز گردانید و<sup>۶</sup> بعد از طی مسافت با فتح و نصرت به ولایت خجند وارد گردید. چند روز از رنج راه بر آسود. { ۴۲۷ر } بعد از آن جا<sup>۷</sup> کوچ نموده، به سه منزل به دار السلطنه خوقند نزول اجلال فرمود و به عیش و عشرت مشغول گشت.<sup>۸</sup>

#### ذکر<sup>۹</sup> شکار رفتن امیر عمر خان به صوب مرغیلان و اندجان

از بس که رسم است به پادشاهان خوقند که هر سال آفتاب<sup>۱۰</sup> در برج سنبله شکار جوجه مرغ دشتی و بودانه و در برج جدی شکار شیر و آهو و مرغ دشتی به آن جانب میخرامند. چون در آن وقت امیر عمر خان مثل عادت معهود خواست که به مقتضای شیوه جهان داری و آیین کیکاوس برگزیده، اکثر اوقات به شکار صید پردازد و همواره بر آن کار اشتغال نماید. القصه. چون جهت < ۴۱۸پ > تسخیر نخجیر بر اشقر باد پیمای<sup>۱۱</sup> گران رکاب سوار

۱ بودند [د]

۲ از هزار گوسفند و صد اسب زیاد [ت]، به هزار گوسفند و صد اسب [د]

۳ قیام نمود. عبد [ت]، کرده [د]

۴ چون [د]

۵ × [د]

۶ [د]

۷ [د]

۸ شد [د]

۹ به [د]

۱۰ × [د]

۱۱ پیمایی [د]

سپهر مرتبت روشن ساخت<sup>۱</sup> {۴۲۶ر} و لوازم شکر و ثنای ایزد سبحانه و تعالی به جای آوردند (۴۶۶) و امیر عمر خان ظل ظلیل عاطفت و رأفت به مفارق متوطنان بلدان مملکت خوقند مبسوط فرمود.

### ذکر لشکر کشیدن امیر عمر خان به صوب جیزخ

چون چندی بر این بگذشت، به سر امیر عمر خان هوای تاخت جیزخ افتاد. مخفی لشکر فرغانه را فراهم آورد. چون لشکر ممالک فرغانه تمامی مجتمع گشت، امیر عمر خان تدبیر اندیشیده، به بهانه شکار به جانب مرغینان خرامید<sup>۲</sup> و تیل چیان محمد رحیم دیوان بیگی خاطر خود را از امیر جمع نموده، در کمال تعجیل طی مسافت کرده<sup>۳</sup>، به اوراتپه رسیده، خبر دادند که امیر عمر خان به جانب مرغینان خرامید. <۴۱۷پ> اکنون ایل اولوس به خاطر جمعی نشینند که از امیر وهمی نیست. چون این خبر را محمد رحیم دیوان بیگی شنید، در غایت فراغت بنشست. چون امیر عمر خان از خوقند کوچ کرده، به جانب مرغینان در موضع رشیدان که بهترین دهات آن حدود است، در آن وقت به فقیر تعلق داشت، نزول اجلال فرمود. از آن جا باز گشت نموده، {۴۲۶پ} در کمال تعجیل در یک شب شانزده فرسخ راه قطع نموده، در موضع جیکده لیک که<sup>۴</sup> بر لب دریای سیحون واقع است، وارد گردید. روز دیگر از آن جا بعد از پیشین کوچ کرده، در غایت سرعت راه می پیمود. وقت دمیدن صبح در موضع رباط در میان ایل وارد گردید. در همان شبگیر در یک شب بست فرسخ راه طی کرده بود.

القصه.<sup>۵</sup> لشکریان فرغانه چون گرگ گرسنه به رمه گوسفند افتاده، چنان ترک تازی کردند که در عصر هیچ پادشاهی به وقوع نه آمده بود و لشکریان فرغانه از هر جنس چنان

۱ ساخته [د]

۲ خرامیده [د]

۳ نموده [ت][د]

۴ [د]

۵ × [ت]

زیاده می پنداشت و در جرأت و جلالت اسفندیار رویین تن را غاشیه کش خویش می انگاشت، مانند پشه ضعیف نهاد که <۴۱۶پ> با تند باد ستیزد و مثال مواکب کواکب از اشعه انوار آفتاب بگریزد، از اهتزاز صرصر قهر پادشاه شجاعت پناه و لمعان سنان امیر نصرت دستگاه روی توجه به وادی فرار نهادند و مبشران تأیید الهی و کارساز<sup>۱</sup> تقدیر نامتناهی صیت روح {۴۲۵پ} +<sup>۲</sup> افزای فتح و فیروزی و بشارت دلگشای<sup>۳</sup> ظفر و بهروزی در دادند و امیر منصور گریختگان را تعاقب نموده، زمره ای از ایشان را<sup>۴</sup> به ضرب تیغ بهادران موکب نصرت نشان به قتل رسانیدند و فرقه ای را اسیر سر پنجه تسلط و اقتدار گردانیدند و امیر نصرت لوا سه شب و روز ولایت اوراتپه را چون نگین انگشتی در میان گرفته، در تحت توپ چنان گرفت<sup>۵</sup> که گله توپ تیر مثل +<sup>۶</sup> ژاله<sup>۷</sup> می بارید و محمد رحیم دیوان بیگی چنان به تنگ آمده بود که هر چند سعی بنمود<sup>۸</sup>، راه فرار موجود نبود. لا علاج تن به مردن داده، گردن خار خار به انداختن تیر و تفنگ می پرداخت و امیر عمر خان بعد از سه روز از جهت حرارت هوا که در آن وقت عین فصل سرطان بود، در طبیعت او عارضه ای روی نمود. <۴۱۷ر> لا علاج آن آهوی مانده شده را وا گذاشته، عنان عزیمت +<sup>۹</sup> به مقر عز و کرامت انعطاف داد. بعد از طی مسافت به دار السلطنة خوقند نزول اجلال فرموده<sup>۱۰</sup>، منتظران زوایای خدمتکاری و معتکفان خفایای امیدواری انتظار کشیده را از غبار موکب

۱۰ داستان [ت][د]

۱ کارسازان [ت]

۲ روح [س]

۳ دلگشایی [د]

۴ [د]

۵ [د]، گرفته [س][ت]

۶ شراکه [د]

۷ جاله [د]

۸ می نمود [ت]

۹ به مستقر [د]

۱۰ نموده [د]

مثنوی<sup>۱</sup>

دلیران دشمن کش تیز جنگ      سوی ترکش تیر بردند چنگ  
به هر تیر کز شست<sup>۲\*</sup> انداختند      یکی را از زین سرنگون ساختند

و<sup>۳</sup> در آن محل امیر عمر خان پر دل به قوت شجاعت {۴۲۵ پ.ح.} کامل و قدرت <۴۱۶ ر> و شهامت شامل کلهم سرداران را حکم نمود که بر سر دشمن تاخت آرند و خود نیز به نفس نفیس خود متوجه رزمگاه شده بود. در آن وقت جناب قبله گاهم و رجب قوش بیگی مانع آمده، جلاو امیر را گرفته، نگاه داشتند و سرداران به یک حمله داد مردی را داده، به صرصر تیغ قیامت اثر تزلزل در ارکان جمعیت ایشان افکنده، همه را پریشان [چون بنات النعش]<sup>۴</sup> ساختند. [در آن تاخت]<sup>۵</sup> چندی<sup>۶</sup> مبارزان عنان باز نکشیده، از گرمی جنگ همراه دشمن به شهر در آمده، دستگیر شدند. (۴۶۵) همان روز غیر از کشته چندین<sup>۷</sup> مبارز دشمن اسیر شده بود.

{۴۲۵ ر} مثنوی<sup>۸</sup>

هر چند که نخجیر بود تند و دلیر      فی الحال گریزان شود از حمله شیر  
تیهور مصاف باز بگریزد زود      آهو ببر هزبر کی ماند دلیر

و برادر<sup>۹</sup> محمد رحیم دیوان بیگی که در تاب و توان خود را از رستم داستان<sup>۱۰</sup>

۱ قطعه [د]

۲ [د]، شصت [ت] [س]

۳ [ت] [د]

۴ × [ت]، مثل بنات النعش متفرق [د]

۵ × [د]

۶ چند [د]

۷ بسیاری [ت]، چند [د]

۸ قطعه [د]

۹ و [د]

جلادت ظاهر ساخته، به پیش یسار<sup>۱</sup> سپاه ظفر مآل گشت و امیر رستم خصال (۴۶۴) آن حال را مشاهده فرموده<sup>۲</sup>، بهادران موکب همایون را امر فرمود {۴۲۵ر} و آن مبارزان کینه خواه سوروں انداخته، پیکان دلدوز به زهر قهر آب داده، خدنگ چهار [پر به زه]<sup>۳</sup> کمان کیانی نهادند<sup>۴</sup> و<sup>۵</sup> فغان کرنای و کوس به گوش نظاره گیان آسمان رسید و غبار سم ستوران نقاب کحل بر روی آفتاب < ۴۱۵پ> عالم تاب پوشید و نایره حرب آتش فنا در خرمن جانها افکند و تند باد حمله نهال بقا از جویبار وجود بر کند.

{ ۴۲۵ر.ح. } مثنوی<sup>۶</sup>

دلیران به کین رایت افراختند      به قصد سربیک دیگر تاختند  
چنان ریخت تیغ خارا شکاف      که شد لاله گون خاک دشت مصاف

در آن اثنا از برانغار +<sup>۷</sup> امیر شاهی پروانچی و عظیم بای پروانچی چند از سردار دیگر به یک حمله جوانغار محمد رحیم دیوان بیگی را منهزم ساخت و ایر نظر بی دیوان بیگی و توره خان میر اسد و قومی از سرکرده های دیگر از جانب چپ در میدان تاختند و بنیاد حیات فوجی از دشمنان را بر انداخته، به شبه تیر گرفتند و عقابان سهام خون آشام از آشیانه کمان در پرواز آوردند<sup>۸</sup>، [ به حکم آن که ]<sup>۹</sup>

۱ یساو [ت]

۲ فرمود [ت] [د]

۳ پرّه [د]

۴ نهاد [د]

۵ × [ت]

۶ نظم [د]

۷ سردار [ت]

۸ آمدند [د]

۹ × [د]



پروانچی و عظیم بای پروانچی و قمبر بی و محمود خواجه جلو قوش بیگی با جمع<sup>۱</sup> دیگر از اهل جنگ و شین از جوانغار روی به معرکه<sup>۲</sup> کار و<sup>۳</sup> زار آرند و جناب توره خواجه خواجه کلان و خدمت سلطان خان توره خواجه کلان و محمود خان و جناب قبله گاهی<sup>۳</sup> و قاسم بی اتالیق و سید قل دیوان بیگی و میرزا مله دادخواه و رجب قوش بیگی و یوسف پروانچی با زمره ای از نوینان در سایه علم بلند پایه پادشاهی در قلب توقف نمودند و همت عالی بر اعدام و افنای اعدا گمارند و از آن جانب محمد رحیم {۴۲۴پ} دیوان بیگی با قول آراسته خود در قلب توقف نمود. برادران را هراول<sup>۴</sup> ساخت. بر دو جلو<sup>۵</sup> خود پیاده میرگن <۴۱۵ر> انداخت. از دروازه شهر چهار یک فرسخ بر آمده، لشکر خود را چنان بیاراست که نظاره گیان انگشت تحیر به دندان گزیده، تحسینها<sup>۶</sup> میگردند.

بیت<sup>۷</sup>

چنین است اُسلوب<sup>۸</sup> آداب جنگ      یکی تاج یابد یکی گور تنگ

القصه<sup>۹</sup>. آن سپاه جنگجوی پرخاش جوی بدین ترتیب و آیین صف سپاه در برابر یک دیگر آتش خشم و کین مشتعل ساخته، بهادران پر دل به نوک پیکان جان گسل نایره خون ریز در چشم جوانان پر ستیز گشادند و دلیران رستم توان به ضرب شمشیر بران رخنه در جان جوانان انداخته، بقای ایشان را به باد فنا در دادند. لشکر قوش بیگی و میرزا رحیم پروانچی و محمد شریف بی پیش جنگ آن لشکر بود. محمد رحیم دیوان بیگی حمله آورده، آثار

۱ جمعی [د]

۲ [ت][د]

۳ قبلگاهم [ت][د]

۴ اراول [ت]

۵ جیلو [ت]

۶ تحسین و آفرین [د]

۷ قطعه [ت]

۸ [د]، اوسلوب [ت][س]

۹ × [ت]

و دلدل و رخس و شدید خسرو را یکی از بارکش های خود می شمرد، چنانچه در فوت آن اسب [یکی از شعرا که]<sup>۱</sup>، مولانا بهجت بود<sup>۲</sup> تاریخ نیکو گفته است.<sup>۳</sup>

### تاریخ

سوردوم تاریخی دیدی ظفر کوک اولدی  
تا میر آخور باشینی کیسمسه اصلاً بولمس

القصه. بهرام تیزچنگ بر اوج سما از بیم پیکان خون افشان سپر زرین آفتاب بر سر کشیده و نهنگ بی درنگ در قعر دریا از خوف سنان جان ستان ایشان جوشن پوش گردید.

### مثنوی<sup>۴</sup>

خدایو جهان گیر لشکر شکن      سپاهی بیاراست پولاد تن  
همه تند خوی و همه تیزچنگ      به صحرا چو شیر و به دریا نهنگ  
گرفته به کف خنجر خون فشان      ربوده به نیزه سر سرکشان

همان اسب مذکور<sup>۵</sup> را روز جنگ امیر عمر خان مع زین جبدوق {۴۲۴ر} کندل به قبله گاهم انعام فرمود و<sup>۶</sup> مقرر شد که لشکر قوشبیگی و محمد شریف بی و شیخ بدل میرزا و محمد صابر دستورخانچی <۴۱۴پ> و عبد الکرم دادخواه و میرزا رحیم پروانچی (۴۶۳) و خان خواجه صدر با قومی دیگر از بهادران پرخشم و کین در هراول رایت توکل بر افرازند و ایر نظر بی دیوان بیگی و توره خان میر اسد و محمد قلی پروانچی و مقصود خواجه توپچی باشی و چوقی دیگر از اهل تهور در برانغار پیکار اعدا را مطمح نظر همت سازند. شاهی

۱ × [د]

۲ × [د]

۳ × [ت]، بود [د]

۴ نظم [د]

۵ × [د]

۶ × [د]

به درستی کار جنگ پرداختند. صبحی که جمشید خورشید لوای بیضایی<sup>۱</sup> در فضای<sup>۲</sup> سپهر خضرا بر افراخت (۴۶۲) و مواکب<sup>۳</sup> کواکب را درع زر اندود پوشانیده، دفع جنود ظلمت ورود را پیش نهاد همت ساخت. امیر اسکندر جاه ضمیر مهر تنویر به تعبیه سپاه شوکت دستگاه متوجه گردانید. در آن روز امیر عمر خان اسب خاصه خود ظفر کوک نام داشت، در غایت خوش صورتی<sup>۴</sup> و در کمال خوش رفتاری، در دوندی با باد سبقت میجست.

### مثنوی<sup>۵</sup>

یکی دشت پیـــــمـــــای پرنده راه  
به تیزی و گرمی چو ابر سیاه  
که [هنگام تازش]<sup>۶</sup> شود چرخ گرد  
زمین کوب و<sup>۷</sup> دریا ترشح نور  
زاندیشه دل ســـــپـــــک پوی تر  
ز رای خـــــردمند ره جـــــوی تر  
{۴۲۳پ} بگشتی چپ و راست هنگام کار  
چوپرگزار بر نقطه ای چند بار  
<۴۱۴ر> چو شب بود در شب چو بشتافتی  
به یک روز بگذشته در یافتی  
چو بینایی دید بی رنج راه  
رسیدی به هر سو که کردی نگاه

۱ بیضای [د]

۲ فزای [د]

۳ موکب [د]

۴ صورت [د]

۵ نظم [د]

۶ اندام تازه ش [ت]

۷ [د]

چون میرزا رحیم پروانچی<sup>۱</sup> از خدمت امیر مرخص شد، به اتفاق امرا متوجه اوراتپه گشت. در موضع قیزیلی رسیده بودند که هیچ کدام از امرا جرأت کرده، قدم پیش نهد و میرزا رحیم پروانچی با سیصد مرد جرار در آن نیم شبی توکل به ذات اقدس کرده، {۴۲۲پ} متوجه اوراتپه شد. چون نزدیک شهر رسید، لشکریان <۴۱۳ر> محمد رحیم دیوان بیگی از آمدن پروانچی وقوف یافته، به هم در آویختند. چنان جنگی بر پا ساختند<sup>۲</sup> که محاربه پیشینیان از دفترها محو گشت و میرزا رحیم پروانچی داد مردی را داده، از میان شهر قوشون محمد رحیم دیوان بیگی را درانیده و بعضی آنها را کشته، خود را صحت و سلامت به خدمت پدر رسانید و رجب قوش بیگی را شب دیگر صحت و سلامت از میان آن مهلکه پرهایل خلاص کرده، ولایت اوراتپه را خالی گذاشته، به خدمت امیر عمر خان رسانید. به کورونوش حاضر ساخت. منظور امیر گشت و امیر دید که کار از دست رفته است. لا علاج عنان عزیمت به صوب خوقند باز گردانید و بعد از سه منزل به مقر خود قرار گرفت<sup>۳</sup>. در آن وقت از بیماری خود شفا یافت.

## بیت

باز اعتدال یافت مزاج شهنشهی  
روز نشاط آمد و بگذشت شام غم

و به داد و دهش مشغول گشت.

## ذکر لشکر کشیدن امیر عمر خان به صوب اوراتپه

سال مذکور لشکر نصرت اثر را فراهم {۴۲۳ر} آورده، به جانب خجند خرامید. بعد از چهار منزل در آن ولایت وارد گردید. سه روز <۴۱۳پ> در آن جا ساکن گشته، تمام لشکریان فرغانه را جمع نموده، متوجه اوراتپه گشت. همان روز در موضع آق سو نزول فرمود. روز دیگر از آن جا کوچ کرده، در ده یختان سرای وارد گردید. همان شب سپاهیان کینه خواه

۱ [د]

۲ ساخت [د]

۳ یافت [د]

به جانب قلعهٔ یام مراجعت فرمود و چون امیر عمر خان این خبر را شنید، در بحر تفکر فرو ماند. بعد از آن قاسم دیوان بیگی را از حکومت اوراتپه معزول ساخت و امارت آن ولایت را به رجب [قوش بیگی]<sup>۱</sup> تفویض نمود. چون این خبر را محمد رحیم دیوان بیگی شنید، از قلعهٔ یام ایلغر کرده، نیم از شب گذشته بود که ولایت اوراتپه را دزدیده، گرفت و ارک مغ را محاصره نمود<sup>۲</sup> و رجب قوش بیگی به انداختن تیر و تفنگ پرداخت. هر روز از دو جانب بازار {۴۲۲ر} جنگ گرم میشد و از خون دلاوران از کوچها جوی <۴۱۲پ> خون روان<sup>۳</sup> میشد. مدتی<sup>۴</sup> بر این منوال گذشت.

### ذکر لشکر کشیدن امیر عمر خان در بالای اوراتپه و ناامید گشتن از ولایت خجند

و این خبر را امیر عمر خان شنیده<sup>۵</sup>، با وجود بیمار بودن از روی شجاعت با لشکر انبوه متوجه آن صوب گشت، [به حکم آن که]<sup>۶</sup>

#### قطعه

زنده گئی ضعف یک دو روزهٔ تو      آتش فتنه در جهان افتاد  
تا ابد پیش ذات پاک ترا      از جهان هیچ آفتی مرساد

بعد از طی مسافت در ولایت خجند وارد گردید. دید که کار به جایی<sup>۷</sup> نمیرسد. لا علاج میرزا رحیم پروانچی که کوکل تاش امیر عمر خان و پسر اوگی (۴۶۱) رجب قوش بیگی بود، حکم فرمود که با دیگر سر کرده ها رفته، پدر را از آن مهلکه نجات داده، بیاید.

۱ دیوان بیگی [د]

۲ نموده [د]

۳ جاری [ت][د]

۴ مدت [د]

۵ [ت][د]، شنید [س]

۶ [ت]

۷ جای [ت][د]

از جانب خوقند [همه اهل]<sup>۱</sup> حرم به<sup>۲</sup> استقبال نموده<sup>۳</sup>، به مبارک بادی آمدند. فقیر هم در میان ایشان آمده، دعا کردم و چند روز به عیش و عشرت پرداخت. بعده<sup>۴</sup> متوجه خوقند شد. به سه منزل به دولتخانه خود نزول اجلال فرمود و از رنج راه بر آسود. بعد از چند روز سیادت پناهان را از حبس بیرون کرده، مهربانیهای<sup>۵</sup> پادشاهانه در باره ایشان کرد<sup>۶</sup> و به هر کدام ایشان حوالیهایی<sup>۷</sup> مناسب و قیشلاق های خوش حصول انعام (۴۶۰) فرمود و به حال ایشان پرداخت.

## بیت

چوب را آب فرو می نبرد حکمت چیست شرمش آید ز فرو بردن پرورده<sup>۸</sup> خویش

ذکر آمدن محمد رحیم دیوان بیگی از قلعه پشاغر به جانب قلعه یام و از آن جا آمده، اوراتپه را گرفتن

در آن وقت شنید که محمد رحیم دیوان بیگی ولد خدایار بی والنعمی از قلعه پشاغر سواری نموده، داخل قلعه یام شده است و از آن جا اوراتپه را {۴۲۱پ} تاخت نموده و سر کرده هایی که آن جا ایلغر بودند، بلا اهمال سواری نموده، به جنگ پیوستند. <۴۱۲ر> چنان جنگی شد که از کشته پشته بر داشتند. دلاوران به ناموس گرد نبرد به اوج طارم آبتوس رسانیدند. عاقبت نسیم ظفر از جانب محمد رحیم دیوان بیگی وزید و لشکر خوقندی رو به فرار نهادند و بسیاری را لشکریان یوز اسیر کردند، مثل خوشوقت قوش بیگی و اریس قل دیوان بیگی و زینت شاه و<sup>۹</sup> چندی از این قبیل. و محمد رحیم دیوان بیگی با فتح و نصرت

۱ تمام [د]

۲ [د]

۳ × [ت] [د]

۴ بعد [ت] [د]

۵ مهربانیهای [ت]

۶ مبذول داشت [د]

۷ حوالیهایی [د]

۸ [ت] [د]، پروردن [س]

۹ × [ت]

سیادت پناهان را از شر اوزبکان نجات داده، < ۴۱۱ ر > کسی را { ۴۲۰ پ } مجال نداد<sup>۱</sup> که چیزی از ایشان رباید و چون امیر عمر خان سیادت پناهان را به جانب خوقند مع سر کرده های او فرستاد، خود به ولایت اوراتپه داخل شده، به فرمان فرمایی مشغول شد.

### قطعه<sup>۲</sup>

دست وفا بر کمر<sup>۳</sup> عهد کن      تا نشوی عهد شکن جهد کن  
دور نگر کز سر<sup>۴</sup> نامردمی<sup>۵</sup>      بر حذر است آده می از آده می

روز دیگر اسحاق دیوان بیگی را حکم نمود که کوچ های سیادت پناهان را گرفته، به خوقند برد. چون اسحاق دیوان بیگی از خدمت امیر رخصت اجازت یافته، در آن برودت هوا به چندین محنت و مشقت متوجه خوقند شدند و امیر عمر خان خواجهها و امرای اوراتپه را و بزرگان اولوس را کلاً<sup>۶</sup> به جانب خوقند کوچانید، مثل سید غازی خواجه و توره خان و چند دیگر را به چندین خاری و زاری برد<sup>۷</sup>. از آن جا غضب نموده، به شهر خان بدرقه کرده، آق اوی لوک فرستاد و آن بیچاره گان<sup>۸</sup> چنان تاراج یافته بودند که یک قرص جو به نزد ایشان دایره<sup>۹</sup> فلک مینمود و یک گُرتۀ کهنه به نزد ایشان چون<sup>۱۰</sup> حله بهشت جلوه میکرد. { ۴۲۱ ر } چون امیر عمر خان از کار اوراتپه فارغ شد، حکومت آن < ۴۱۱ پ > ولایت را به قاسم دیوان بیگی تفویض نموده<sup>۱۰</sup>، خود به جانب خجند مراجعت فرمود. چون در آن ولایت وارد گردید،

۱ ندادند [ت]

۲ × [د]

۳ کمری [د]

۴ سر [د]

۵ نامردومی [د]

۶ کلن [ت] [د]

۷ خانه کوچ کوچانیده، به خوقند فرستاد [د]

۸ بیچاره [د]

۹ × [د]

۱۰ نمود و [د]

سپاه یوز ریختن<sup>۱\*</sup> همان. همچنان<sup>۲</sup> تاراج کردند که به ستر عورت چیزی نبود که خود را پوشانند<sup>۳</sup> و سر کرده های سیادت <۴۱۰پ> پناه را نیز دستگیر {۴۲۰ر} نمودند و برادرم جهانگیر خواجه و برادرش خواجه خورد را دو اوزبک لُچ<sup>۴</sup> کرده بودند. در آن حین<sup>۵</sup> جناب قبله گاهم خبر یافته، ایشان را از دست ظالمان بیباک نجات داده، خلعتهای<sup>۶</sup> مناسب پوشانیده<sup>۷</sup>، به پیش خود نگاه داشتند<sup>۸</sup> و حق قلی که کوچک ترین سر کرده سیادت پناه بود، جناب قبله گاهی<sup>۹</sup> گناهِش را از امیر عمر خان طلب نموده، گرفته<sup>۱۰</sup>، امیر بنابر<sup>۱۱</sup> از خاطرشان<sup>۱۲</sup> مهربانی نموده، از حبس خلاص داد. در آن وقت امیر عمر خان به قاسم دیوان بیگی و به محمد قلی دادخواه و به لشکر قوش بیگی حکم نمود که ایشان رفته، ولایت اوراتپه را مسخر نمایند. چون ایشان از امیر رخصت اجازت یافته، در کمال تعجیل رفته، به شهر در آمدند و به مُغ بر آمده، (۴۵۹) مال و اموال سیادت پناه را ضبط نمودند. در آن وقت جناب قبله گاهم دیدند که حرم سیادت پناهان تحت پا میشوند. از امیر عمر خان رخصت گرفته، خویش و جگر بندی<sup>۱۳</sup> را به جای آورده، در غایت سرعت آمده، آوردوی<sup>۱۴</sup>

---

۱ [د]، ریختند [س][ت]

۲ چنان [د]

۳ بیوشانند [ت][د]

۴ لوج [ت][د]

۵ وقت [د]

۶ خلعتها [د]

۷ پوشانید [د]

۸ داشتن [د]

۹ قبلگاهم [د]

۱۰ گرفتند [ت][د]

۱۱ × [ت][د]

۱۲ خاطری شان [ت]

۱۳ جگری [ت][د]

۱۴ حرم [د]



سیادت پناه را به خیمه شاهی دادخواه حکم نمود.<sup>۱</sup> چون ایشان به پیش سرا پرده امیر آمده، نشستند، به جناب قبله گاهم طرح مشاورت نموده، سخن ملکی<sup>۲</sup> + گفت و شنید < ۴۱۰ ر > میکردند. امیر عمر خان از { ۴۱۹ پ } شکاف خرگاه نظاره میکرد. در آن وقت امیر عمر خان سه ندیم خود را طلب نمود. بهادر خواجه دسترخانچی<sup>۳</sup> و عبد الکریم چاپوقچی<sup>۴</sup> و سید بوقچه بردار را امر نمود که به پیش سیادت پناهان حلوا برند. به این<sup>۵</sup> بهانه ایشان را دستگیر نمایند.<sup>۶</sup> ندیمان از خدمت امیر عمر خان مرخص شدند. به تعلیم مذکور به پیش سیادت پناهان رفته، دسترخان انداخته، حلوا را گذاشتند. دست جناب سلطان خان را بهادر خواجه دسترخانچی<sup>۷</sup> گرفت و دست جناب محمود خان را عبد الکریم چاپوقچی<sup>۸</sup> گرفت و دست توره خان را سید بوقچه بردار گرفت و هر سه سیادت پناهان را سپاهی گری گفته، در قید کشیدند و ایشان از کار فلک کج رفتار در غرقاب تفکر فرو رفته، میگفتند، [این را که]<sup>۹</sup>

### مصراع

ترا هرگز ندانستم<sup>۱۰</sup> بدین نامهربانها

القصه. بابا رحیم اناق<sup>۱۱</sup> توق خاصه را در حرکت آوردن همان، و<sup>۱۲</sup> لشکر فرغانه بر سر

۱ فرمود [ت] [د]

۲ را [د]

۳ چاپوقچی [د]

۴ دسترخانچی [د]

۵ آن [د]

۶ نماید [د]

۷ چاپوقچی [د]

۸ دسترخانچی [د]

۹ [د]

۱۰ ندانستم [د]

۱۱ ایناق [ت]، عناق [د]

۱۲ × [د]

خلص کلام این<sup>۱</sup> که امیر عمر خان به تمام لشکریان خبر داد که یم اسب را بدهند. بعد از پیشین سواری نموده، در غایت سرعت شبگیر زده، دشت شیراز را تاخت مینماییم. این خبر را شنیده، همه مردم به سر رشته خود شدند. در آن وقت امیر عمر خان به<sup>۲</sup> پسر <۴۰۹پ> رجب {۴۱۹ر} قوش بیگی بابا رحیم اناق<sup>۳</sup> +<sup>۴</sup> تعلیم داد که کدام وقتی که من حکم کنم، همان وقت توق خاصه را<sup>۵</sup> در حرکت اندازد<sup>۶</sup> و سر کرده های خود را امر نمود که وقتی که توق خاصه من<sup>۷</sup> در حرکت آید، شمایان بی توقف لشکریان یوزیه را در هر جا یافته، دستگیر نمودن گیرید. چون از این تدبیرها فارغ شد، به پیش جناب سلطان خان و سیادت پناهی محمود خان و توره خان کس فرستاد<sup>۸</sup> که مع سر کرده های خود بیایند. مصلحت داریم<sup>۹</sup>. چون محرم به خدمت ایشان رسید، سیادت پناهان،

مصراع<sup>۱۰\*</sup>

از دوست یک اشارت از ما به سر دویدن

گویان با دوازده سر کرده خود متوجه اوردوی امیر عمر خان شدند. چون به نزدیک خرگاه امیر عمر خان رسیدند، امیر حکم نمود که سیادت پناهان مع جناب قبله گاهم نشسته، مصلحت سواری را به یک جای قرار داده، به خدمت ما (۴۵۸) عرض<sup>۱۱</sup> نمایند و امرای<sup>۱۲</sup>

۱ آن [ت] [د]

۲ × [د]

۳ عناق [ت]، ایتاق [د]

۴ را [د]

۵ × [د]

۶ انداز [د]

۷ × [د]

۸ فرمود [د]

۹ دارم [ت] [د]

۱۰ [ت] [د]، ع [س]

۱۱ عرضه [د]

۱۲ امیر [د]

که عمداً خود را در آتش افروخته اندازند و یا با مار مصاحبت آغاز کند، چه این طایفه ناتوان بین دنی پیشه را در شوره زار مسلک ناصواب جز گیاه ارتکاب فتنه و انقلاب نروید و سالک نیت زشت ایشان به غیر از طریق بادیه گمراهی و مردم فریبی نه پیوندد.

### مثنوی<sup>۱</sup>

ز هم صحبتان دغل اختلاط      ضروری است بر خاص و عام احتیاط  
ندانند حق نمک خواره گی      ز انصاف دور اند یک باره گی  
(۴۵۷) ز تلبیس گرم است بازارشان      بود یار بازی دهی کارشان

القصة. سنه ۱۲۳۲<sup>۲</sup> در ماه جدی بود که لشکر ظفر اثر<sup>۳</sup> فراهم آورده، {۴۱۸پ} > ۴۰۹ر< لوای عزیمت به صوب اوراتپه برافراخت. بعد از سه کوچ به ولایت خجند وارد گردید. روز دیگر از آن جا کوچیده، به یک منزل در موضع نجانی که یک فرسخ است، در اوراتپه، نزول اجلال فرمود و سیادت پناه<sup>۴</sup> محمود خان از توجه امیر عمر خان واقف گشته، به چهار فرسخ زمین استقبال نموده، [بیرون خرامیده]<sup>۵</sup> بود. از آن موضع مذکور<sup>۶</sup> رخصت اجازت داد. روز دیگر سیادت پناهی بیچاره تمام لشکریان خود را جمع نموده، مع برادران و امرای شهر را خالی گذاشته، به خدمت امیر عمر خان رسیده، کورونوش داد و امیر دید که صید مقصود چست به مدعای طبع به دام آمده است.

### بیت

از هر که دلت گران<sup>۷</sup> آورد      او را سبک از میانه بردار

- ۱ نظم [د]
- ۲ ۱۲۳۳ [ت]
- ۳ را [د]
- ۴ پناهی [د]
- ۵ × [د]
- ۶ × [د]
- ۷ گرانی [د]

<۴۰۸ر> (۴۵۶) آن ابلیس طینتان متفق گشته، مکرر به سمع امیر عمر خان عرضه نمودن گرفتند\*<sup>۱</sup>. بالاخر سخن ایشان را امیر مسموع نموده، به گرفتن سیادت پناهی کمر بست.

## قطعه

با بدان کم نشین که صحبت بد      گرچه پاکی ترا پلید کند  
آفتابی بدین بزرگی را      ذره ابر ناپدید کند

[بنابر آن]<sup>۲</sup> حکما پادشاهان را به کوه بلند نسبت کرده اند. اگر چه درو معدن جواهر قیمتی است، اما بر او مسکن پلنگ و مار و مور و موزیات<sup>۳</sup> دیگر نیز می باشد. مراد به مار و پلنگ بد گویان و خوش آمد گویان و بخیلان اند و هم بر کوه رفتن دشوار است و هم مقام گرفتن مشکل و نیز گفته اند، خدمت سلاطین به مثابه آب است. بازرگان که سفر دریا اختیار کند، یا سیم<sup>۴</sup> به دست آرد<sup>۵</sup>، یا در غرقاب بلا هلاک شود.

## بیت

به دریا در منافع بیشمار است      اگر خواهی سلامت در کنار است

چرا که از ناجنسان<sup>۶</sup> بیوفا و لئیم {۴۱۸ر} طبعان خطا کار که رشته عهد و پیمان ایشان که از تلون مزاج و مخالفت رأی صد جا <۴۰۸پ> گسسته و غبار بیگانه جویی<sup>۷</sup> و فریبنده گی بر آئینه صفات نشسته، جهان جهان دوری و کناره جویند که از آن جماعت بیعاقبت فتنه جوی حقوق خدمتکاری و نمک خواره گی نیاید. فی الواقع با نامحرمان سرپرده نجابت و خردمندی و پست فطرتان عالم صلاح و پرهیزکاری دم مصاحبت و محرمیت زدن چنان باشد

۱ [ت][د]، گرفتن [س]

۲ و [د]

۳ موزیات [ت][د]

۴ سود [د]

۵ آید [د]

۶ ناکسان [د]

۷ جوی [ت][د]

مناسب فرود آورد. سه شب و روز به مهمانداری پرداخت. روز چهارم به اتفاق سیادت پناهی [سلطان خان]<sup>۱</sup> متوجه خوقند شد.

### بیت

ز جبر برادر بدر آمده به درگاه سلطان عمر آمده

چون این خبر را امیر عمر خان شنید، امرای خوقند را حکم {۴۱۷ر} نمود که استقبال نموده، به جای مناسب فرود آوردند. روز دیگر امیر به نزد <۴۰۷پ> خود طلبیده، در کنار عاطفت گرفته، بسیار محترم داشت و<sup>۲</sup> چند وقت به خدمت او بود. بعد از چندین وقت قلعه شهرخیه را به امید ثمرقند و خطای قیچاق تفویض نمود. یک سال در آن قلعه به امید بسیار بود. دید که غنچه مدعا به آسانی نمیشکفت. لا علاج باز به خدمت امیر به خوقند آمد. میانه [او و امیر]<sup>۳</sup> الفتی نمیرفت. جناب قبله گاهم به حال او پرداخت. بعد از چندین وقت به راه قراتگین فرار نموده، باز به شهر سبز مراجعت فرمود.

### ذکر دستگیر نمودن سیادت پناهی محمود خان را امیر عمر خان در بالای اوراتپه

چون چندی از این [برگذشت]<sup>۴</sup>، در آن وقت چندی از فتنه جویان و ناتوان بنیان که لازم است. در طینت انسان، سلسله جنبان این امر گشته، بر امیر عمر خان عرض<sup>۵</sup> نمودند که سیادت پناهی محمود خان ضمناً به امیر حیدر پادشاه ساخت. علاج این واقعه قبل از وقوع باید نمودن<sup>۶</sup>، چون کار از دست رود، پشیمانی سود نمیکند.

### بیت {۴۱۷پ}

علاج واقعه قبل از وقوع باید کرد دریغ سود ندارد چو رفت کار از دست

۱ × [د]

۲ × [د]

۳ امیر و او [د]

۴ بگذشت [ت] [د]

۵ عرضه [د]

۶ نمود [ت]

امیر رخصت اجازت یافته، در کمال تعجیل و<sup>۱</sup> در غایت خرسندی به جانب مقر خود مراجعت فرمودند. فلک نخواست که ایشان به خرسندی تمام<sup>۲</sup> به وطن تشریف فرمایند. منصوبه ای بر پا ساخت، [به حکم آن که]<sup>۳</sup>

## بیت

فغان ز کج روشیهای<sup>۴</sup> دهر نافرجام      وز این دورنگی وضع لیالی و ایام

مجمل سخن این که آن دو امارت پناه راه می پیمودند. در آن وقت از رفتن ایشان حاکم ثمرقند خبر یافته، باز گشت ایشان را کمین کرده بود. از قضا هر دو لشکر در میان کوهستان ملاقی شدند. در سهل درجه جنگ مردم کینگس خود به خود وهم کرده، قرار بر فرار اختیار نمودند و همه مال و اموالی که امیر عمر خان داده بود، بر باد دادند و خود به چندین محنت و مشقت از آن راه های باریک در سه شب و روز قطع مسافت نموده، با چند ندیم خود به شهر سبز وارد گردیدند. چون امیر عمر خان به اوراتپه {۴۱۶پ} وارد گردید، سیادت پناهی محمود خان <۴۰۷ر> طریق خدمت را به جای آورد. سه شب و روز به عیش و عشرت پرداخت. از آن ولایت کوچ کرده، به خجند نزول اجلال فرمود. آن عروس ولایت را به عز قدوم میمنت (۴۵۵) لزوم خود بیاراست و به عدل و داد پرداخت. بعد از سه روز از آن جا کوچ کرده، به سه منزل به دولخانه خود وارد گردید و از رنج راه بر آسود. در آن آوان بود که میر حسین خان ولد شاه مراد بی از جبر برادرش امیر حیدر پادشاه ولایت ثمرقند را وا گذاشته، به شهر سبز آمده، عمر میگذرانید. به سرش هوای خدمت امیر عمر خان افتاد. متوجه اوراتپه گشت و سیادت پناه محمود خان این خبر را شنیده<sup>۵</sup>، استقبال نمود<sup>۶</sup>. به جای

۱۲ آن [ت]

۱۳ [ت][د]

۱ [د]

۲ [د]

۳ × [د]

۴ روشیهای [د]

۵ شنید [د]

۶ نموده [د]

ذکر لشکر کشیدن امیر عمر خان به جانب ثمرقند و آن مدعا نشده، در موضع اورمیتن به نیاز

علی دیوان بیگی حاکم شهر سبز و دیده بر گشتن<sup>۱</sup>

چون چندی بر این بگذشت، باز هوای کشور گشایی<sup>۲</sup> {۴۱۵پ} به سر افتاد. با لشکر انبوه متوجه ثمرقند گشت. بعد از سه <۴۰۶ر> +<sup>۳</sup> کوچ به ولایت خجند وارد گردید و از آن جا به ولایت اوراتپه نزول اجلال فرمود و سیادت پناه محمود خان طریق مهمانداری را از حد قیاس بیش به جای آورد و در آن جا سفر ثمرقند را منع فرموده<sup>۴</sup>، متوجه ولایت اورمیتن شد. بعد از قطع منزل در موضع قیزیل سای وارد گردید. در آن وقت حاکم (۴۵۴) شهر سبز نیاز علی والنعمی و جمع میر +<sup>۵</sup> ها و امرای کینگس و از<sup>۶</sup> قلعه اورگوت کته بی پروانچی تشریف امیر عمر خان را شنیده، با هدیه ها و بیلاکات بسیار<sup>۷</sup> متوجه رکاب بوسی آن سلطان [باکرم شدند]<sup>۸</sup>. بعد از قطع مراحل در موضع مذکور به آستان بوسی رسیده، کورونش دادند و امیر عمر خان در باره آن دو امارت پناهی شفقت پادشاهانه و مرحمت خسروانه نمود. بعد از سه روز نیاز علی والنعمی را به عمل اتالیق سرفرازی بخشید و کته بیک را به عمل دیوان بیگی سرفراز گردانید و دیگر میر +<sup>۹</sup> ها را به<sup>۱۰</sup> قدر حالش عمل مهربانی نمود. به نیاز علی اتالیق {۴۱۶ر} باب کرم را چنان گشاد که در آن عصر از هیچ پادشاهی این نوع انعام به ظهور <۴۰۶پ> نه آمده بود و از هر جنس مال دنیوی نه نه بخشید. بعد از سه روز به آن دو امارت پناه رخصت اجازت<sup>۱۱</sup> داده، خود متوجه اوراتپه گشت و +<sup>۱۲</sup> دو<sup>۱۳</sup> امارت پناهان از

۱ گشتند [ت]

۲ گشای [ت]

۳ بعد از سه [ت]

۴ فرمود [د]

۵ بچه [د]

۶ حاکم [د]

۷ × [د]

۸ محترم شد [د]

۹ بچه [د]

۱۰ علی [د]

۱۱ × [ت][د]

اورنگ سلطنت بنشست.

## بیت

(۴۵۳) نزد خرد شاهی و پیغمبری چون دو نگین اندر یک انگشتی

و عمل چنگیز خانی < ۴۰۵ پ > به امرای خود نامزد فرمود، چنانچه ایشان توره خواجه  
مخدوم اعظمی و ایشان سلطان خان خواجه احراری را به عمل خواجه کلانی سرافرازی  
بخشید و جناب قبله گاهم را به <sup>۱</sup> عمل شیخ الاسلامی [مهربانی نمود] <sup>۲</sup> و فقیر را <sup>۳</sup> با وجود  
خورد بودن از روی شفقت و مرحمت { ۴۱۵ ر } به عمل تقیبنی نامزد فرمود. میرزا آخوند را  
قاضی کلان و رحمان قل بی را اتالیق و ایشان توره را اوراق کلان و میرزا قلندر را قاضی  
عسکر، ایشان خان مولانایی <sup>۴</sup> را <sup>۵</sup> فیضی و توره خان و خان خواجه را میر اسد، عمر علی  
خواجه و پادشاه خان را صدر، قاسم بیک را <sup>۶</sup> و اسحاق بیک را دیوان بیگی و محمد قلی  
بیک را میرزا و رجب را ث و سید قلی بیک و ایر نظر بیک و سید علی بیک را پروانچی و  
لشکر را اناق <sup>۷</sup> کلان، سلطان سید خواجه و مقصود خواجه را صدور و محمود خواجه را جلو  
قوش بیگی و میرزا مله و عبد الولی و شاهی و میرزا رحیم و داول را دادخواه و عظیم بای را  
توپچی باشی، محمد صابر را دسترخانچی، هکذا. اگر هر کدام عملداران را <sup>۸</sup> شروع رود، به  
طول می انجامد. بنابر این به همین قدر اکتفا کردیم.

بیت<sup>۹</sup>

هم شرع ز ملک ارجمندی دارد هم ملک ز شرع سر بلندی دارد

۱ [د]

۲ سرافراز گردانید [د]

۳ × [د]

۴ مولایی [د]

۵ × [د]

۶ × [د]

۷ ایناق [ت]

۸ × [ت]

۹ × [ت]



در کمال بزرگی. موافق نیت هر کس پر میشود، چنانچه گویند، یکی از بزرگان<sup>۱</sup> دشت قیچاق پنج صد گوسفند به آن دیگ ذبح کرده، انداخت. پر نشد و دیگری به پنج گوسفند پر ساخت و امیر عمر خان به هفتاد گوسفند < ۴۰۵ ر > پر کرد. این سخن در تمام ما وراء النهر شهرتی دارد و اما به نزد فقیر اعتبار ندارد. چون امیر عمر خان در تمام ولایت دشت قیچاق را<sup>۲</sup> از اگوزناق تا لب دریای خزر<sup>۳</sup> فرمان فرما گشت و حکومت یسی<sup>۴</sup> را به شیخ { ۴۱۴ پ } بدل میرزا تفویض نمود. خود به جانب خوقند مراجعت کرده، چون به ولایت تاشکند رسید، به وعده خود وفا نموده، رجب [قوش بیگی]<sup>۵</sup> را عزل نموده<sup>۶</sup>، به لشکر [دیوان بیگی]<sup>۷</sup> تفویض نمود و خود با فتح و نصرت روی به مقصد آورد. بعد از قطع بر و بحر و کوه به دار السلطنة خوقند رسید. به عدل و داد پرداخت.

#### [ذکر کوس پادشاهی زدن امیر عمر خان به دار السلطنة خوقند]<sup>۸</sup>

در آن وقت سنه ۱۲۳۰<sup>۹</sup> بود که امرا<sup>۱۰</sup> [آن عصر]<sup>۱۱</sup> فتوی دادند که هر پادشاهی که به دوازده هزار کس علوفه دهد، او را امیر المسلمین گفتن جایز است. در آن آوان امیر عمر خان وظیفه خور خود را در قید کتابت آورد. به چهل<sup>۱۲</sup> هزار رسیده بود، بنابراین امیر المسلمین نام نهاد و خطبه به نام خود خواند و سکه به نام خویش زد و تاج شاهی بر سر نهاد و بر

- ۱ بازرگان [د]
- ۲ [د]
- ۳ خزر [ت]
- ۴ یسو [د]
- ۵ دیوان بیگی [د]
- ۶ نمود و [د]
- ۷ قوشبیگی [د]
- ۸ × [ت]
- ۹ ۱۲۳۳ [ت]
- ۱۰ علما [ت]
- ۱۱ × [ت]
- ۱۲ بست پنج [ت]

کیمخاب<sup>۱</sup> به قدرتر بود<sup>۲</sup>، اگر اتفاقاً از <۴۰۴پ> +<sup>۳</sup> برای امید ثواب کسی گزیده کهنه میداد، در میان ایشان به تلاش می افتاد، به حکم آن که

## بیت

از بیابان عدم بر سر بازار وجود به تلاش کفنی آمده ای عریانی<sup>۴</sup> چند

یکی از شعرای آن عصر تاریخ او<sup>۵</sup> را نیکو گفته است<sup>۶</sup>.

## تاریخ

{۴۱۴ر}{۴۵۲}

داخل قلعه گشت در دم صبح      سروران سپاه شاه جهان  
می بر آید حساب تاریخش      صبح داخل شود به ترکستان

دیگری<sup>۷</sup> گفته.

تاریخ<sup>۸</sup>

گرفت نهم ماه جمادی الاول      ملازمان رکاب تو ملک ترکستان

چون رجب دیوان بیگی از تسخیر ولایت فارغ شد، به خدمت امیر عمر خان سیونچی گویان کس فرستاد و امیر عمر خان بعد از دو روز به آن ولایت وارد گردید. به آستان بوسی آن درگاه ملک پاسبان رسید و شرط زیارت را به جای آورد. گویند، در آن جا دیگی است،

۱ کیمخا [ت][د]

۲ می بود [ت][د]

۳ از [ت]

۴ عریان [ت][د]

۵ فتح آن ولایت [د]

۶ × [ت][د]

۷ دیگر [د]

۸ [د]

شد. امیر عمر خان سخن او را قبول نمود. بلا توقف متوجه آن ولایت گردید. چون از ولایت تاشکند بیرون شد، رجب دیوان بیگی را پیش جنگ ساخته، رخصت اجازت داد و خود از عقیب او سواری نمود. چون رجب دیوان بیگی با لشکر جرار کینه گذار متوجه یسوشد. ده روزه راه را در سه شب و روز در غایت تعجیل قطع نموده، [نیم شبی از یک فرسخ زمین سپاه را پیاده کرده، به آهستگی متوجه قلعه شد.]<sup>۱</sup> قبل از دمیدن صبح صادق به نزدیک آن ولایت رسانید.<sup>۲</sup> + چون<sup>۳</sup> [به دروازه رسیدند،]<sup>۴</sup> دیدند که دروازه بان را خواب غفلت ربوده است، چندی<sup>۵</sup> از مبارزان به چندین نیرنگ نردبان را به قلعه چنان چسبانیدند که نقل <۴۰۴> سنگ بند منار بخارا از خاطر مردم محو شد +<sup>۶</sup> و خود را پایه پایه به بالای قلعه گرفتند. +<sup>۷</sup> به زیر انداخته<sup>۸</sup>، به دروازه خانه رسیدند {۴۱۳پ} و دروازه بانانی که در خواب ناز غنوده بودند، همه را به تیغ بیدریغ چنان خوابانیدند که تا قیامت از جای بر نخیزند و خاطر خود را از شرایشان فارغ ساخته<sup>۹</sup>، دروازه را بر روی رجب دیوان بیگی باز کردند. بلا توقف خود را به مزار حضرت قطب الاقطابی گرفتند و آن بقعه ای است، از بناهای امیر تیمور صاحبقران<sup>۱۰</sup> که در غایت بلندی و هر کس خود را در آن مکان گرفت. شهر از آن کس میباشد. چون مردم شهر و لشکریان بخاری از این منصوبه فلک وقوف یافته، انگشت حیرت به دندان گزیدند و نمیدانستند که چه علاج کنند. حیران و سرگردان می بودند و لشکر فرغانه دست به قتل و تاراج باز کردند و چنان ترکتازی کردند که یک پرچه لته کهنه به نزد ایشان از جامه

۱ × [ت]

۲ رسیدند [د]

۳ از دو فرسخ زمین سپاه را پیاده کرده، به آهستگی متوجه قلعه شدند. [ت]

۴ × [د]

۵ چند [ت][د]

۶ این چنان است که در بالای مناره بخارا دو دانه خشک با هیچ آهنی زده اند. از طرف برادر و همشیره دزدان الآن هم باقی است. حکیم محمد. ۱۹۰۲. [ت]

۷ و [ت]

۸ انداختند [ت][د]

۹ ساختند و [ت]

۱۰ صاحبقرانی [د]

خود به جانب خوقند مراجعت نمود. بعد از پنج منزل به مقصد رسید. چند روز از رنج راه بر آسود. در آن آوان بود که برادرش اسحاق بیک ولد محمود بیک<sup>۱</sup> از <۴۰۳ر> عمک بچه خود<sup>۲</sup> + امیر حیدر پادشاه متوهم شده، به چندین محنت و مشقت {۴۱۲پ} فرار نموده، به شهر سبز آمد. نیاز علی دیوان بیگی قدم او را مبارک دانسته<sup>۳</sup>، گرامی داشت. از آن جا به ولایت اوراتیپه به پیش خاله زاده خود سیادت پناهی محمود خان آمد. از آن جا به رکاب بوسی امیر عمر خان آمده، کورنش داد و امیر او را بسیار محترم داشت و ندیم خود ساخت.

### ذکر لشکر کشیدن امیر عمر خان به صوب دشت قپچاق و فتح کردن ترکستان به فضل

#### حضرت<sup>۴</sup> ایزد متعال

سال دیگر به وقت فصل بهار با لشکر فرغانه متوجه تاشکند شد. چون از دریای سیحون عبور نموده و از کوه دوان گذشته، در ولایت قُرمه بر چولگه آهنگران وارد گردید و از آن جا کوچ نموده، در ولایت تاشکند نزول اجلال فرمود و رجب دیوان بیگی طریق خدمتکاری و مهمان داری را باید و شاید به جای آورد. در آن وقت قلعه یسو<sup>۵</sup> که حالا به ترکستان اشتها دارد و قبر سلطان الاولیا خواجه احمد یسوی آن جا است، در تحت تصرف امیر حیدر پادشاه <۴۰۳پ> بود. امیر عمر خان خواست که<sup>۶</sup> آن ولایت را مسخر<sup>۷</sup> نماید، به امرا مشورت انداخت. در آن میان رجب دیوان بیگی از میان برخاست. {۴۱۳ر} عرضه نمود که اگر جناب حضرت جهان پناهی ام بنده را از حکومت تاشکند عزل نمایند، به آستان بوسی خود در<sup>۸</sup> خوقند برند، بنده انشاء الله تعالی<sup>۹</sup> متصدی (۴۵۱) فتح آن ولایت خواهم

۱ بی [د]

۲ از [د]

۳ دانست [د]

۴ × [ت] [د]

۵ یسی [د]

۶ [د]

۷ تسخیر [ت]

۸ به [د]

۹ × [ت] [د]

می نماید. چون امیر عمر خان از امرا این سخن را شنید، از آن جا که<sup>۱</sup> شجاعت جبلی داشت. به حرف امرا التفات فرمود<sup>۲</sup>. جناب قبله گاهم را مع چهل محرم همراه خود گرفت و دیگر لشکریان را به رجب دیوان بیگی سپرد. خود متوجه شهر گشت. به امرا آرایی نبود که مکرر به خدمتش عرض کنند. چار و<sup>۳</sup> ناچار مهر سکوت بر دهان کرده بودند و سلامتی ذات خجسته صفات او را از خالق جز و کل میطلبیدند و چون امیر در شهر در آمد، سیادت پناهی<sup>۴</sup> شرط مهمانداری را چنانکه<sup>۵</sup> باید و {۴۱۲} شاید به جای آورد <۴۰۲پ> و<sup>۶</sup> بر سر او زرها<sup>۷</sup> نثار کرد و [بر تحت]<sup>۸</sup> پای او شال و زربفت و کیمخاب<sup>۹</sup> انداخت و از هر جنس مال پیش کش های بی اندازه کشید. بعد از فراغ مجلس به اتفاق سیادت پناه جناب امیر [عمر خان]<sup>۱۰</sup> به جانب اوردوی خود مراجعت فرمود. امرا و لشکریان شاه عالم را صحت یافتند. همه شادی کنان و خنده زنان این بیت را (۴۵۰) میخواندند.

### بیت

از این نوید مبارک که ناگهان آمد      بشارتی به دل و مژده ای به جان آمد

این کار امیر بر تمام ما وراء النهر منتشر شد. همه خاص و عام در تهوریه آن سلطان با کرم انگشت تحیر به دندان گزیده، تحسین و آفرین میکردند و بر کار سیادت پناه هم نیز ماشاء الله میگفتند و امیر به سیادت پناه مرحمت های پادشاهانه کرد و رخصت اجازت داد و

- ۱ × [د]
- ۲ نمود [د]
- ۳ × [ت] [د]
- ۴ پناه [ت] [د]
- ۵ × [د]
- ۶ × [د]
- ۷ زر و سیم [د]
- ۸ بر [ت]، به زیر [د]
- ۹ کیمخا [ت] [د]
- ۱۰ × [ت] [د]

عمر خان [جلای وطن ساخته] <sup>۱</sup>، {۴۱۱ر} به قراتگین به پیش عبد العزیز خان فرستاد. شاه عبد العزیز خان قدم آن دو خان زاده را مبارک دانسته، به تربیت ایشان <sup>۲</sup> مشغول شد. <۴۰۱پ> بعد از چندین وقت شنید که امیر حیدر پادشاه در بالای پشاغر آمد <sup>۳</sup>. آن قلعه ویران <sup>۴</sup> را آباد کرده، به محمد رحیم دیوان بیگی ولد خدایار بی والنعمی تفویض نموده است و خود اوراتپه را محاصره کردن در خاطر داشته است.

### ذکر لشکر کشیدن امیر عمر خان در بالای امیر حیدر پادشاه و این خبر را شنیده، باز گشتن (۴۴۹) امیر حیدر پادشاه به صوب ثمرقند

چون این خبر را امیر عمر خان شنید، بلا توقف با لشکر فرغانه متوجه اوراتپه شد. بعد از طی مسافت در آن ولا رسید و شنید که امیر حیدر پادشاه در بالای پشاغر قورولتای ساخته است. بلا اهمال با لشکر کینه خواه متوجه لشکرگاه منقیت <sup>۵</sup> شد و از آمدن امیر عمر خان امیر حیدر پادشاه وقوف یافته، سراسیمه از آن جا کوچ کرده، به جانب ثمرقند مراجعت فرمود. امیر عمر خان شبگیر زده، در کمال تعجیل خود را وقت طلوع آفتاب در قلعه پشاغر رسانید. دید که {۴۱۱پ} پی هست حیدر نیست و هم این لفظ تاریخ است و قلعه پشاغر را چون نگین انگشترین <sup>۶</sup> در میان <۴۰۲ر> گرفته، به محاصره پرداخت. بعد از سه روز کوچ کرده، به جانب اوراتپه مراجعت فرمود. چون به آن ولایت وارد گردید، امیر عمر خان خواست به شهر در آمده، به قوش سیادت پناهی محمود خان فاتحه خواند. امرا به خدمتش عرض نمودند که سیادت پناهی کوس مخالفت مینواخت، چند وقت میشود که لاف خدمتکاری میزند. به این قدر پادشاهی به ولایت غیر در آمدن از حکمت دور و از خرد بعید

۱ بدرقه نموده [د]

۲ [ت]، او [س] [د]

۳ آمده [د]

۴ ویرانه [ت]، ویرانی [د]

۵ منغیت [ت] [د]

۶ انگشتری [د]

### ذکر لشکر کشیدن امیر عمر خان به صوب جیزخ

و خود با لشکر انبوه سواری نمود. بعد از سه منزل به ولایت خجند نزول اجلال فرمود. روز دیگر از آن ولایت کوچ کرده، {۴۱۰پ} متوجه جیزخ شد. در آن حین سیادت پناهی محمود خان با <۴۰۱ر> +<sup>۱</sup> امرای اورا تپه به شش فرسخ زمین پیش باز آمده، ملاقات کرد و امیر عمر خان در باره آن سیادت پناهی مهربانیهایی<sup>۲</sup> پادشاهانه کرد. به مشاورت او در غایت تعجیل در سه شب و روز خود را به دشت شیراز رسانیده، ساکنان آن موضع را چنان [یغما کردند]<sup>۳</sup> که چه نوعی که از مادر به وجود آمده بودند، [به همان دستور عریان نمود]<sup>۴</sup>. به اسیری بردند.<sup>۵</sup> از آن جا باز گشت نموده، ولایت جیزخ را سه شب و روز چون نگین انگشتری<sup>۶</sup> محاصره نموده، متوجه مقصد شدند. از موضع خواص به سیادت پناه محمود خان انعامهای بی اندازه مهربانی نموده<sup>۷</sup>، رخصت اجازت داد. خود در ولایت خجند وارد گردید. چند روز به عیش و عشرت مشغول شد و از آن جا کوچ کرده، به سه منزل به مقصد رسید. به فرمان روایی<sup>۸</sup> پرداخت.

### بیت<sup>۹</sup>

چون همت او بلند چون بخت جوان      چون دولت او جوان جوان حکم روان

در آن وقت بود که دو خان زاده پسران امیر عالم خان اتالیق خان و مراد خان را امیر

۱ با [ت]

۲ مهربانیهای [ت]

۳ به یغما بردند [د]

۴ کرده [ت]

۵ × [د]

۶ انگشتری [د]

۷ نمود [ت][د]

۸ روای [ت][د]

۹ × [ت]

خود فرود آورده<sup>۱</sup>، به مهمانداری پرداخت. در آن حین عرض احوال خود را به خدمت امیر عمر خان کرده، فرستاد. چون جناب توره خواجه به مقصد رسید، سخن او را به امیر عمر خان گفت. امیر عمر خان بسیار خرسندیها نمود. بعد از {۴۱۰} چند روز جناب قبله گاهم <۴۰۱پ> را فرستاد و سیادت پناه محمود خان خواجه این خبر را شنید<sup>۲</sup>، تالب آق سو مع برادرش جناب<sup>۳</sup> ایشان سلطان خان استقبال نموده، به جای خود فرود آورد و<sup>۴</sup> به مهمانداری پرداخت. چنان [در ضیافت تکلف نمود]<sup>۵</sup> که هیچ بیننده ندیده +<sup>۶</sup> و هیچ شنونده نشنیده بود.

وزبده کلام آن که از امیر حیدر پادشاه کنده<sup>۷</sup>، به امیر عمر خان پیوست و عهد و پیمان را مستحکم کردند. بعد از چند روز جناب ایشان سلطان خان را همراه کرده، رخصت داد و خود تالب آق سو هر دو قبله گاهم را گسیل کرد و این بیت را می<sup>۸</sup> خواند.

بیت<sup>۹</sup>

(۴۴۸) فراق دوست اگر اندک است اندک نیست

درون دیده اگر نیم مو است بسیار است

چون هر دو قبله گاهی<sup>۱۰</sup> به پیش امیر رسیدند، امیر عمر خان جناب ایشان سلطان خان را بسیار گرامی داشت و مهربانیهای بی اندازه کرده، رخصت اجازت فرمود.

۱ آورد [ت][د]

۲ شنیده [ت]

۳ [د]

۴ × [د]

۵ به ضیافتی پرداخت [د]

۶ بود [ت]

۷ کند [د]

۸ × [ت]، در وقت وداع [د]

۹ [ت][د]

۱۰ قبلگاهم [د]



(۴۴۷) در آن وقت رجب دیوان بیگی از امیر عالم خان متوهم شده، به پیش امیر حیدر پادشاه رفته بود و از آن جا گریخته، به شهر سبز آمده، عمر میگذرانید. این خبر را شنیده<sup>۱</sup>، بلا اهمال در غایت تعجیل خود را به رکاب بوسی {۴۰۹پ} امیر عمر خان رسانیده، <۴۰۰ر> کورونوش داد. بعد از چند روز امیر عمر خان در باره آن شیر دل مهربانی های<sup>۲</sup> پادشاهانه کرد و حکومت تاشکند را به او بخشید. [در آن آوان بعد از چندین وقت در]<sup>۳</sup> میانه امیر عمر خان و امیر حیدر پادشاه دوستی پذیرفت و جناب سیادت پناهی<sup>۴</sup> توره خواجه [خواجه کلان را که]<sup>۵</sup> عمک قبله گاهی میباشند، بر سبیل رسالت به بخارا در<sup>۶</sup> پیش امیر حیدر پادشاه فرستاد و امیر حیدر پادشاه قدم<sup>۷</sup> شان را مبارک دانسته، بسیار گرامی داشت و عهد و پیمان نو<sup>۸</sup> با امیر حیدر پادشاه کردند<sup>۹</sup>.

### بیت

فرستاده باید که دانا بود      به گفتن دلیر و توانا بود

بعد از آن رخصت اجازت یافته، به جانب خوقند مراجعت فرمود<sup>۱۰</sup>. چون [در موضع]<sup>۱۱</sup> اوراتپه رسید<sup>۱۲</sup>، سیادت پناهی سلطان خان و محمود خان استقبال نموده، به جای

- ۱ شنید [د]
- ۲ مهربانی هایی [ت]
- ۳ بعد از آن [ت]، در آن آوان بعد از چند وقت [د]
- ۴ پناه [ت] [د]
- ۵ [د]
- ۶ به [ت] [د]
- ۷ قدمی [د]
- ۸ × [ت]، جدید [د]
- ۹ کرده اند [ت]
- ۱۰ فرمودند [ت]
- ۱۱ به ولایت [د]
- ۱۲ رسیدند [ت]

جا نقل نموده، به پیش پدر به خاکدانش آورده، سپردند. مدت عمرش هژده سال بود و از او سه فرزند طفل باقی ماند، حیدر خان و سریمساق خان و کته خان و یک دختر.

### ذکر جلوس امیر عمر خان به مسند شاهی

و<sup>۱</sup> چون امیر عمر خان به امر الهی به تخت شاهی چون رنگ بر سر بر حریر گل نشست. یا همچون نشأ در اجزای<sup>۲</sup> مل قرار و آرام یافت. {۴۰۹ر} خطبه از اسم همایونش چون پایه منبر بلندی گرفت و سگه از نام با احترامش رتبه ارجمندی حاصل کرد < ۳۹۹پ > و شعرای آن عصر جلوس او را عمر به عدل نشست، تأریخ یافته بودند. چون آن گوهر شاه وار بر سریر فرمان روایی قرار یافت، ممالک فرغانه را به زیور معدلت خود بیاراست و به عدل و داد پرداخت، [به حکم آن که]<sup>۳</sup>

### نظم<sup>۴</sup>

شد از انوار عدلش ملک روشن	ز فیض همتش گیتی چو گلشن
ز فتنه اهل عالم را امان داد	به عهدش عدل کسری رفت از یاد
اساس شرع از تیغش متین شد	دعا گویش همه روی زمین شد

و خمیرمایه این فتنه یعنی اریس قل بی<sup>۵</sup> و جمعه بای قیتاقی بود، سر آن دو حرام نمک را از تن ناپاکش با<sup>۶</sup> چندین خاری جدا کردند<sup>۷</sup>، به حکم آن که

### بیت

از ستم هر کس<sup>۸</sup> دلی را ریش کرد      آن جراحت بر وجود خویش کرد

- ۱ × [د]
- ۲ اجرای؟ [د]
- ۳ [د]
- ۴ ابیات [د]
- ۵ بیک [ت]
- ۶ به [د]
- ۷ کرد [د]
- ۸ کو [د]

تعجیل خود را به یک شب در ولایت تاشکند رسانید و بر مسند حکومت نشست و امرای تاشکند گوش به قمار بودند. از پرده غیب چه ظهور میکند. در آن وقت خبر شهادت امیر عالم خان رسید. چون این خبر را شنیدند، از بیم امیر عمر خان آن کافر نعمتان نمک حرام آن شاهزاده نادیده جهان را دستگیر نموده، به خدمت امیر عمر خان عرضه نمودند و امیر عمر خان این خبر را شنید. بلا اجمال بهادر خواجه و نظر بیک را به قتل آن شهزاده حکم نمود و آن دو جلاد در کمال تعجیل رفته، آن بیگناه را از ولایت تاشکند بیرون کرده، {۴۰۸پ} به جانب خوقند مراجعت فرمودند.<sup>۱</sup> چون به موضع چولگه آهنگران رسیدند، در آن<sup>۲</sup> (۴۴۶) شب<sup>۳</sup> +<sup>۴</sup> در<sup>۵</sup> درج سلطنت را<sup>۶</sup> که هنوز از جویبار سلطنت بهره <۳۹۹ر> نبرده بود که تند باد مرگ گلستان او را پژمرده ساخت<sup>۷</sup>، فرو ریخت.

#### مثنوی

اجل خانه تن به پرداختش	پس از تخت بر تخته انداختش
جهان کار از این گونه بسیار کرد	زمانه نخستین نه این کار کرد
همان است این چرخ <sup>۸</sup> فیروزه فام	که گردید گرد سر حام و سام
همان است این زال زیبا نقاب	که در عهد جم بود و افراسیاب

به زه کمان هلاک کردند. جسدش<sup>۹</sup> را به پیغمبر اُتا گذاشتند. بعد از چند روز از آن

- 
- ۸ × [د]  
 ۱ فرمود [د]  
 ۲ آن آن [د]  
 ۳ × [د]  
 ۴ آن [ت]  
 ۵ درر [د]  
 ۶ × [د]  
 ۷ ساخته [د]  
 ۸ چتر [د]  
 ۹ جسد مبارکش [ت]

<۳۹۸ر> سبحان الله الحی الذی لا یموت، در حال به حق لبیک گفت.

### نظم<sup>۱</sup>

جهان ای برادر نماند به کس      دل اندر جهان آفرین بند و بس  
(۴۴۵) مکن تکیه بر ملک دنیای زشت      که بسیار کس چون تو پرورد +<sup>۲</sup> گشت  
چو آهنگ رفتن کند جان پاک      چه بر تخت مردن چه بر روی خاک

در آن وقت یک فرسخ به خوقند رسیده بود. چون رحمان قل بی بر سر آن شهید مرحوم رسید و شاه را به آن حال مشاهده نمود، دود از نهادش بر آمد و خود را از اسب به زیر انداخت. روی خود را به پای آن قره باصره شهریار میمالید و گریه میکرد. بعد از ساعتی عرابه حاضر آوردند و آن در یتیم را به عرابه انداخته، متوجه خوقند شدند. چون این خبر به امیر عمر خان رسید، اگر چندی که به<sup>۳</sup> ظاهر بشاشت میکرد، اما در باطن عرق اخوت در حرکت آمده، در بوته جسرت میگذاخت و خاص و عام همه مرده او را استقبال {۴۰۸ر} نموده، به های هوی در شهر در آورده، به خاکدانش سپردند و از او سه فرزند پسر بود، یکی شهید مغفور شهزاده شهرخ، دویم <۳۹۸پ> شهید مغفور ابراهیم خان که به اتالیق خان اشتها داشت<sup>۴</sup>، سیوم مراد خان و سه عاجزه مخدره داشت، [آییم خان و اولوق خان و آفتاب خان]<sup>۵</sup> و<sup>۶</sup> مدت سلطنتش دوازده سال و مدت عمرش سی و شش سال بود.

### ذکر شربت شهادت چشیدن شهزاده شهرخ ابن امیر عالم خان

[در آن وقت]<sup>۷</sup> که شهزاده شهرخ خان<sup>۸</sup> از پدر بزرگوار رخصت یافت، در کمال

۱ مثنوی [د]

۲ و [ت] [د]

۳ در [د]

۴ دارد [د]، داشتند [ت]

۵ × [د]

۶ [ت] [د]

۷ و چون [ت]

+ بیت<sup>۱</sup>

فلک گفتا خوش است آن قبضه دست زمین گفت آفرین بادا بر آن دست

و<sup>۲</sup> پنج دیگر رو به فرار آوردند. در آن وقت از قضا یکی از آن جماعه که در جلادی  
شمر ذی الجوشن در نزد خود قطب عالم می‌شمرد، چون بلای ناگهان<sup>۳</sup> رسید و ایشان را از  
گریختن منع فرمود و<sup>۴</sup> آن ملعون رو به امیر آورد.

## مصراع

شیری که اسیر سگ شود هم ز قضا است

از شست<sup>۵</sup> تفنگ او تیر جگردوز آتش خورد. چنان کارگر آمد که جیه<sup>۶</sup> خالدار [چهری  
که]<sup>۷\*</sup> در ما وراء النهر شهرتی دارد، مثل پوست پیاز گذر کرد<sup>۸</sup>. از پشت آن خسرو جهان  
رسید. از سینه بی کینه او به در شد. پادشاهی که مملکت را قوی بود، از خانه زین به چندین  
خاری یال اسب را به دندان مبارکش گزید و گردن آن {۴۰۷پ} باد رفتار را به کنار گرفته،  
رویناکی بر زمین افتاد. خار و<sup>۹</sup> زار به خاک و خون غلطید.

+ بیت<sup>۱۰</sup>

سلیمانی افتاده در پای مور یکی پشه کرده بر فیل زور

۱ فرد [د]

۲ [د]

۳ ناگهانی [ت]

۴ × [ت] [د]

۵ شصت [د]

۶ جیب [د]

۷ [د]، چهره یی [س] [ت]

۸ کرده [د]

۹ [ت] [د]

۱۰ فرد [د]

سپری آزر می در روی شوم کشیده، به قدم بیوفایی پیش رفتند. پادشاه ناکام از صدمهٔ حملهٔ ترک تاز زمانه هر لحظه با دل پر خون و جان پر پیچ و تاب و چشم هزار چشمهٔ آب راه میرفت. دید که کار از دست رفته است. رو به محاربه نهاد. پادشاه شیر دل (۴۴۴) دست به شمشیر کرده، تنها میان آن گله خوک افتاده، داد مردی را میداد.

## بیت

که عنقا باز ماند از پریدن ز گنجشکان لگد باید کشیدن

و شمشیر تارک شکاف را از غلاف بر کشید\*<sup>۱</sup> و بسان شیر ژیان رو به گله خوک آورد، چنانچه گفته است.

## بیت

چو خسرو که تنها کند کار و<sup>۲</sup> زار چه یابد<sup>۳</sup> در آن دشت چندین سوار

و<sup>۴</sup> بر دشمنان حمله آورده، عقد جمعیت ایشان را که مانند ثریا مجمع آمده بودند. مثل بنات النعش متفرق و پریشان ساخت.

## {۴۰۷} بیت

به یک حمله آن شیر مردم شکار بر آورد از خیل دشمن دمار

سر دو ناپاک را به شمشیر قلم کرد. یکی از آن ملعون نیزه به آن <۳۹۷پ> پادشاه شیر<sup>۵</sup> دل حواله کرد و نیزه او را از دست ناپاکش امیر گرفته<sup>۶</sup>، سه دیگر را به ضرب نیزه هلاک کرد.

۱ [د]، کشیده [س] [ت]

۲ × [ت]

۳ باید؟ [ت] [د]

۴ × [ت]

۵ × [د]

۶ گرفت [ت] [د]

<۳۹۶پ> در باد سبقت می‌جست. از رفتار باز مانده بود. در آن حین ده ملعون نیزه دار از جماعهٔ قپچاق از همه پیش رسید و آن کور نمکان بی وفا و آن گمراهان جام جهان نمای اقبال را به سنگ عصیان بر هم شکست\*<sup>۱</sup> و بنای شادکامی را به تیشهٔ بدنای منهدم گردانیده و خرمن مراد را به دست عواصف ادبار [به باد]<sup>۲</sup> فنا داده و جماعهٔ قپچاق در توره کشی نامی دارند و در میان اوزبک از آن قوم بی باک تر نمیباشد. چنانچه عبید الله خان پادشاه بخارا را به چندین خواری به درجهٔ شهادت رسانیده بودند. ذکر او پیش گذشت. این جماعه هم از کار ناشایستهٔ گذشتگان خود ناگذشته، به مضمون کل شیء یرجع الی اصله و هم [گفته است]<sup>۳</sup>.

## بیت

عاقبت گرگ زاده گرگ شود      گرچه با آدمی بزرگ شود

+ غضب الله علیهم و لعنهم\*<sup>۵</sup> و اعد لهم جهنم لباس بی آزر می پوشیده، در ما بین ظالمان هم مشرب شده، اطراف آن سلطان جهان را فرو گرفتند.

## بیت

{۴۰۶پ} کو چشم که بنگرد بدان<sup>۶</sup> روی      کو پای که ره رود<sup>۷</sup> بدان سوی  
<۳۹۷ر> مر حشمت سلطنت را در شریعت ملک داری از واجبات ایمان است و هتک آن در طریقت جهانبانی از محرّمات است<sup>۸</sup>. وقعی نهادند<sup>۹</sup> و آن فعل حرام را مباح شمردند و

۱ [د]، شکسته [س] [ت]

۲ [ت] [د]

۳ [د]

۴ و [د]

۵ لهم [س]

۶ بر آن [د]

۷ کند [د]

۸ × [ت]

۹ نهاده اند [د]

## مثنوی

صبح که لشکر کش بیضا علم  
زد به سر قلعه نیلی قدم  
{۴۰۵ پ} <۳۹۶ ر> شست به خون چهره گلگون دهر  
کرد برون خنجر زرین قهر<sup>۱</sup>

مثنوی<sup>۲</sup>

سر صبح که این شاه فرخنده چهر  
قدم ماند بر فرق جنگ سپهر  
به خون تیغ آتش فشان آب داد  
کمند ستم به هر کین تاب داد

در آن وقت از پنج ندیم یک غلامش ظهور دیوان بیگی به خدمت او مانده بود. امیر  
عالم خان این بیت را مکرر میخواند<sup>۳</sup>.

## بیت

ای همنفسان آه که بی یار بماندیم      درد است غم و<sup>۴</sup> هجر گرفتار بماندیم

در آن وقت امیر عمر خان در هر طرف لشکریان را امر<sup>۵</sup> فرموده بود که از احوال امیر  
عالم خان باخبر باشند. ایشان (۴۴۳) به هر جا کمین میکردند. اتفاقاً به آن طرف پدر  
عروس امیر عمر خان رحمان قل بیک با سپاه اندجان به عنقادام مانده، منتظر می نشست.  
خبر رسید، پادشاه فرغانه تنها و سرگردان به این دشت بی پایان به درد و غم میرود. به  
رسیدن این خبر آن ملعونان بلا اهمال سواری {۴۰۶ ر} نموده، آن شیر میدان شجاعت را  
تعاقب نمودند و در آن وقت کمیت خوش خرام او که به ابناق بوز اشتهار داشت،

۱ مهر [ت]

۲ [د]

۳ که [ت]

۴ × [ت] [د]

۵ × [ت] [د]



{۴۰۵} <۳۹۵ر> القصه. امیر عالم خان چار و ناچار با چندین درد و<sup>#</sup> حسرت تن به قضا در داد. لب لب دریای سیحون <۳۹۵پ> متوجه بالا شد و حرمان محترم و کنیزان حرم که به میان همراه در آن شب ظلمانی در بادام چشمه مانده بودند، اگر این نوع روز سیاه را در خواب میدیدند، زهره ایشان آب میشد. در این دل شب از صاحب خود جدا مانده، به ناله و زاری در آمدند<sup>۲</sup>، به حکم آن که

### مصراع<sup>۳</sup>

بولمسون هیچ کیم که یارب بنده سلطانندین جدا

### مثنوی<sup>۴</sup>

همه بیچاره گان از تیغ و<sup>۵</sup> بیداد      ز هر سو ناله میکردند و فریاد  
که ای شب گر نه روز<sup>\*</sup> رستخیزی      چرا آخر سبک تر بر نخیزی

روز دیگر به چندین غم و اندوه متوجه خوقند شدیم و چون امیر عالم خان در کمال تعجیل قبل از دمیدن صبح به گذر اشت که به آق جر اشتها دارد، از دریا مثل نهنگ خون خاری<sup>۶</sup> عبور نمود. به ناگاه سفینه صبح صادق از لجه تاریک شب بر ساحل افق افتاد.

۱ [ت][د]

۲ آمد [د]

۳ × [د]

۴ قطعه [د]

۵ × [ت][د]

۶ [ت][د]، روزی [س]

۷ خار [ت]

< ۳۹۵ پ. ح. > به هشتاد و نود چون در رسیدی  
 بسا سختی که از گیتی کشیدی  
 در آن جا گر به صد منزل رسانی  
 بود مرگی به صورت زندوگانی<sup>۱</sup>  
 اگر صد سال مانی در یکی روز  
 { ۴۰۴ پ } بیايد رفت از این کاخ دل افروز  
 همان بهتر که خود را شاد داری  
 در آن شادی خدا را یاد داری  
 به وقت خوشدلی بر وقت پرتاب  
 دهان پر خنده داری چشم<sup>۲</sup> پر آب  
 چو بی گریه نشاید بود خندان  
 در این خندان نشاید بست دندان  
 چو صبح آن روشنان از گریه رستند  
 که برق خنده را بر<sup>۳</sup> لب [بو بستند]<sup>۴</sup>  
 (۴۴۲) بیاموزم ترا گر کار بندی  
 که بی گریه زمانی خوش نخندی  
 چو چندان کردی از پر خنده حالی  
 به خنده تنگ دستی را بمانی<sup>۵</sup>  
 نه بینی آفتاب و آسمان را  
 از آن خندد<sup>۶</sup> که خنداند جهان را

- 
- |   |                 |
|---|-----------------|
| ۱ | زندگانی [ت] [د] |
| ۲ | و [ت]           |
| ۳ | در [ت]          |
| ۴ | میستند [ت]      |
| ۵ | بمالی [ت] [د]   |
| ۶ | خنده [ت]        |

آری جهان پیوسته بر یک حال نمیماند<sup>۱</sup>. صحت در مقابل ضعف نهاده، تا موجب شکر گذاری گردد. دیگر سبب صبر و غنا موازه فقر آمده، تا آن مستدعی حمد جمیل و این باعث ثواب جزیل شود. سلیمان را خاتم ملک به دست دیو افتاد، تا دیگران از نکبات [مؤثر نگردد]<sup>۲</sup> و یوسف در قید زندان گرفتار گشت، تا خلق از وقوع حوادث منفعل نشوند<sup>۳</sup>.  
 <۳۹۵ ر.ح. > چنانچه نظامی<sup>۴</sup> در مثنوی میفرماید.

### مثنوی<sup>۵</sup>

نشاطی<sup>۶</sup> پیش از این بود آن قدم رفت  
 غروری<sup>۷</sup> کز جوانی بود هم رفت  
 {۴۰۴ ر} حدیث کودکی و<sup>۸</sup> خود پرستی  
 رها کن که آن خماری بود مستی  
 چو عمر از سی گذشت و یا خود از بیست  
 نمیشاید دگر چون غافلان زیست  
 نشاط عمر باشد تا چهل سال  
 چهل چون بگذرد ریزد پر و بال  
 پس پنجه نباشد تندرستی  
 بصر گندی پذیرد پای سستی  
 چو شصت آمد نه شست آمد پدیدار  
 چو هفتاد آمد افتاد آلت کار

۱ نماند [د]

۲ مؤثر نگرددند [ت]، مؤثر نگردد [د]

۳ نشود [د]

۴ نظام [ت]

۵ × [د]

۶ نشاط [ت]

۷ غرور [ت]

۸ × [ت]

لَا نَفْصَامَ لَهَا دست به عروه و ثقی صبر و توکل زده، روی از این کار نخواهم تافت.

نظم<sup>۱</sup>

ثابت قدم آن است که از جا نرود      گرچه سرگشته بود گرد زمین همچو فلک  
مثل سیمرغ که از جا نبرد طوفانش      نه چو گنجشک که افتد به دم باد تفنگ

هر چه کردم، به جان خود کردم. سخن ناصحان نشنیدم و خاطر از دغدغه آن برادرم و از امرا [کور نمک]<sup>۲</sup> فارغ نگردانیدم. تأسف لایفید است.

## بیت

چو خورشید تابنده شد نا پدید      شب تیره بر چرخ لشکر کشید

القصه. +<sup>۳</sup> همان شب که حوادث لیلة لیلاء نوای بود، پرده قیر فام < ۳۹۵ ر > (۴۴۱) ظلام به مقتضای وَجَعَلْنَا اللَّيْلَ لِبَاسًا بر سر آن محنت زده ایام { ۴۰۳ پ } سیاه و تاریک شد. پادشاه زمان را معلوم گردید که عمر گرامی که سرمایه امانی و سر دفتر کامرانی است، مساعدت نمیکند و بخت ارجمند معاضدت همی نماید، [به حکم آن که گفته اند].<sup>۴</sup>

## بیت

تو مپندار که دوران همه یکسان گذرد      گاه در وصل گهی در غم هجران گذرد

بیت<sup>۵</sup>

غافل مشو که قدرت ساقی ز جام دهر      گه صاف لطف میدهد و گاه درد قهر

۱ قطعه [د]

۲ نمک حرام [ت] [د]

۳ شب تاریک [د]

۴ × [ت] [د]

۵ [ت] [د]

باشند (۴۴۰) به خدا حواله می‌کنم. > پادشاه این ابیات را<sup>۱</sup> خواند.

### نظم<sup>۲</sup>

از دور فلک میرسدم دور تسلسل      هر چند که در دور محال است تسلسل  
تا چند توان درد و غم دهر کشیدن      فریاد که دیگر نتوان کرد تحمل  
با این همه سرگشته گئی دور و لیکن      بیرون نروم یک قدم از راه<sup>۳</sup> توکل  
بر دفتر اوزبک خط اخلاص نباشد      آری نبود معنی قرآن به ترسل  
امید که دست من افتاده بگیرند      آن روز که کار همه افتد به سرپل

پادشاه از این قبیل کلمات به ظهور آورده، از کینگاش ندیمان سر باز زده، این مصلحت موافق مزاجش نیامد. از آن جا که دلیری و غیرت مردانگی در سرشت داشت، اصغا نفرموده<sup>۴</sup>، حمل به ترس و گریز ساخته، به خود عار شمرده<sup>۵</sup>، گفت، > اگر ما را در اجل موعود تأخیری رفته باشد، مسبب الاسباب سببی بسازد. اگر مدت عمر <۳۹۴پ> به آخر رسیده، استعداد به عروۀ شهادت مقرون باشد، چه مضایقه است.

### بیت

{۴۰۳ر} سر ارادت ما و<sup>۶</sup> آستان حضرت او است

که هر چه بر سر ما می‌رود ارادت او است

چه کنم که اگر صد جوان جانباز به خود میداشتم، میدانستم که به این قوم یاغی و طاغی کور نمک چه کار و زار می‌کردم. دریغ ناکام از این جهان می‌روم. حالا هم باشد، تا جان در رمق داشته باشم. به این طایفه خوارج در افتاده، به مضمون فقد استمسک بالعروۀ الوثقی

۱ [د]

۲ که ابیات [د]

۳ [ت][د]، جاده [س]

۴ نفرمود [ت][د]

۵ شمرد [ت]، شمرد و [د]

۶ × [ت][د]

اختیار کرد.<sup>۱</sup> در آن شب تاریک کوه به کوه دشت به دشت سرگردان و حیران می‌گشتند. نمیدانستند که کجا روند. عاقبت در کان نمک رسیدند و آن پنج ندیم عرض نمودند،<sup>۲</sup> در این مقام این طریقه جرأت نموده، توقف ساختن امیر موجب پریشانی است، [به حکم آن که]<sup>۳</sup>

## بیت

زمانه چو عاجز نوازی کند      به تند اژدها مور بازی کند

اگر به ولایت اوراتپه به پیش سیادت پناهی محمود خان تشریف <۳۹۳پ> نمایند، عین صواب است.

الغرض. چون این مواد قتل و اسباب شهادت پادشاه ناکام در محکمه قضا به مقتضای کریمه اِذَا جَاءَ أَجْلُهُمْ لَا يَسْتَأْخِرُونَ سَاعَةً وَلَا يَسْتَقْدِمُونَ ثابت گردید<sup>۴</sup> و مکتوبات قضا مختوم به ختام کُلِّ مَنْ عَلَيْهَا فَانْ شده، ندای اِرْجِعِي اِلَى رَبِّكِ رَاضِيَةً مَرْضِيَّةً به مسامع {۴۰۲ر} پادشاه رسیده بود. گفت، >آری آنچه شما گفتید، به پیش سیادت پناهی محمود خان باید رفت، یک نوع مصلحتی است. لیکن از همت خویش چگونه رخصت یابم که دی روز به ضرب تیغ او را مطیع و منقاد خود<sup>۵</sup> گردانیده بودم. امروز به پیش او روم و دیگر به نفس خود عامه فقرا و برایا را پایمال رکوب حوادث گردانم و ملکی که به رفاهیت و آبادی او در این مدت سعی کرده باشم و عمری است، شمشیر زده، اکنون گشاده باشم. کنون به محض سلامتی یک جان خود عالمی را در معرض تلف اندازم. هر چه در ازل مقدر است، می بینم، گرد این بد نامی نخواهم گشت و از حوصله خود دور می بینم که <۳۹۴ر> به پیش دشمن روم، من به این طایفه امرا بدی نکرده ام که موجب این شده باشم. اگر آن نمک حرامان در خاطر بدی داشته

۱ کردند [ت]

۲ که [ت]

۳ [د]

۴ گردیده [ت][د]

۵ × [ت]

گشت. سر و پا برهنه میدویدند. کسی نبود که به حال ایشان پردازد. پدر به پسر نمی پرداخت و<sup>۱</sup> مادر به دختر. [چنانچه گفته اند.]<sup>۲</sup>

رهی<sup>۳</sup> باریک بیم مرگ سرمای بدین تندی

کجا پروای ما دارند سرمستان دولت ها

القصه. روز سیوم به بادام چشمه رسیدند. در آن وقت امیر عمر خان {۴۰۱} به همه راه ها لشکریان را فرموده بود و به قصد امیر عالم خان مثل سگ شکاری در تک و پو میگشتند. از قضا شادمان بیک و محمد شریف بی را به آن طرف نامزد فرموده بود. اتفاقا گذر ایشان به بادام چشمه افتاد. دانستند که امیر عالم خان مع اهل حرم در آن جا رسیده است. خواستند که دست به یغما برند. در آن شب تاریک جناب قبله گاهم امیر عالم خان را مخفی داشته، به پیش محمد شریف بی و شادمان بیک در غایت سرعت رفته، ایشان را سخنهای فحش گفته، از تاراج منع فرمود. در آن وقت فقیر هفت ساله بودم. چون نصف از شب گذشته بود که در آن وقت به گوش فقیر آواز گریه [حزین رسید]<sup>۴</sup>. فقیر چشم خود را آهسته گشاده، نگاه <۳۹۳ر> کردم که دو کس یک دیگر را در کنار گرفته، آهسته آهسته گریه میکردند. فقیر آن حال را مشاهده (۴۳۹) نمودم. از ترس خود چنان گریه کودکی دست داده بود که کوه ها به صدا و چشمه ها به جوش آمد. فی الحال کسی به دست خود دهنم را گرفت و به زبان ترکی [می گفت]<sup>۵</sup>، <دم تور>. فقیر نیک ملاحظه {۴۰۱} کردم که امیر عالم خان [بوده است]<sup>۶</sup>. به والده فقیر که همشیره او بود، وداع میکردند. بعد از وداع آن شیر بیشه<sup>۷</sup> شجاعت از پیشانی شور فقیر بوسید. به اسب سواری نموده، به پنج تن راه گریز را

۱ [ت]

۲ × [ت]، چنانچه گفته است [د]

۳ ره [د]

۴ آمدن گرفت [ت][د]

۵ گفت [د]

۶ بوده [ت]

۷ میدان [ت][د]

قریب دوصد زن و دختر همراه بود.<sup>۱</sup> در آن وقت در پیش امیر عالم خان از چهل کس بیش باقی نمانده بود و<sup>۲</sup> از امرا هم کسی موجود نبود، الا جناب قبله گاهی ام. بالاخر مشاورت در میان انداخته، مصلحت بر آن قرار یافت که در ولایت <۳۹۲ر> خجند [خالق قل میرزا که]<sup>۳</sup> منتظر مقدم امیر است، متوجه آن ولا باید بود. چون سخن ایشان به امیر مقبول (۴۳۸) افتاد، عنان عزیمت به ولایت خجند معطوف داشت. در آن وقت یکی از دولت خواهان امیر عمر خان دید که کار نمیشود. به<sup>۴</sup> دروغ تدبیر اندیشیده، به خدمت امیر عالم خان عرض نمود که یقین شنیدیم که خجند را امیر عمر خان {۴۰۰پ} مسخر نموده و [خالق قل]<sup>۵</sup> میرزا را دستگیر نموده، به خوقند [برده اند]<sup>۶</sup>. امیر عالم خان چون این خبر را شنیده<sup>۷</sup>، امید از آن ولا بر کند. در آن وقت حکومت تاشکند را به فرزند ارشدش شهزاده شهرخ تفویض نمود. رخصت اجازت داد.

القصة<sup>۸</sup>. امیر عالم خان چون<sup>۹</sup> دید که کار از دست رفته است و<sup>۱۰</sup> از آن راه عبور نمودن از عقل بشری بعید. لا علاج با چندین درد و حسرت به راه غیر معهود عنان عزیمت بر تافت. به پای توکل قطع مسافت میکرد و در راه های تنگ و کوه های پر سنگ اسب بسیار از رفتار باز می<sup>۱۱</sup> ماند و دو روز از صبح تا شام <۳۹۲پ> به مشقت تمام بر این منوال راه در نوردیدند و کنیزان ماه [روی که]<sup>۱۲</sup> از حنا بستن رنجه میداشت، از خون پا رنگین

۱ میبود [ت]

۲ [د]

۳ خالیق المیرزا [ت] [د]

۴ × [د]

۵ خالیق قل [ت] [د]

۶ بردند [ت] [د]

۷ شنید [ت] [د]

۸ [د]

۹ × [د]

۱۰ [ت]

۱۱ × [د]

۱۲ [ت]، [روی [س]، رو که [د]



دیگر عنان عزیمت به صوب دولتخانه تافت. بعد از یک منزل قلعه کیراوچی را چون دایره پرگار در میان گرفته، نزول اجلال فرمود و خوشوقت [در آن وقت]<sup>۱</sup> به انداختن تیر و تفنگ مشغول گشت. چون امیر عالم خان دید که کاری پیش <۳۹۱پ> نمیرود. لا علاج از آن جا کوچ نموده<sup>۲</sup>، در تحت دوان وارد گردید. روز دیگر از آن جا سواری نموده، خواست که به راه کلان متوجه کوه شود. چون به منزل<sup>۳</sup> قیزیل کوپروک رسید، دید که پیش را مردم کوهستان گرفته اند. خصوص جماعه پانغازیان که در تفنگ اندازی شهرت دارند، به انداختن تیر و<sup>۴</sup> تفنگ مشغول شدند و آن راهی بود، بسیار باریک و راه دیگر نداشت. امیر عالم خان {۴۰۰ر} چون این حال را مشاهده نمود، در بحر تفکر غوطه زدن گرفت و<sup>۵</sup> نمیدانست که<sup>۶</sup> چه تدبیر کند. در آن حال امرا و سپاه نمک حرام گروه گروه از امیر روی گردان شده، میرفتند و امیر با چندین درد و حسرت کف بر کف میزد و<sup>۷</sup> آه از نهادش می بر آمد. چنانچه گفته است.

بیت<sup>۸</sup>

حیف است که در زمره آدم [بری اش]<sup>۹</sup> نام  
آن را که حق [صاحب نعمت]<sup>۱۰</sup> شناسد

الغرض. اتفاقاً در آن سفر پر شور و شر حریمهای محترم و پری چهره های عنبر موی

۱ به خوشوقتی [د]

۲ نمود [د]

۳ موضع [د]

۴ × [ت]

۵ [ت]

۶ × [ت]

۷ × [د]

۸ × [د]

۹ بریش [د]

۱۰ نعمت صاحب [ت]

## بیت

که داند که فردا چه آید پدید مگر آن که فردا هم او آفرید

زبده کلام آن که چون امیر عالم خان از این خبر غم اندوز واقف گشت، امراء و ندیمان خود را جمع [نمود و] <sup>۱</sup> به اشارت <sup>۲</sup> و شاورهم فی الامر مصلحت در میان انداخت <sup>۳</sup>. عاقبت سخن بر آن قرار یافت که سید علی بیک را باز به تاشکند گذاشته، در پیش او ارسال بیک <sup>۴</sup> و لشکر را با مبارزان کینه خواه گذاشته، خود به جانب خوقند مراجعت فرماید <sup>۵</sup>. در آن وقت ظهور دیوان بیگی با لشکر انبوه به محاصره سیرام اشتغال داشت. به پیش خود طلب نمود. در این میان سواری امیر یک هفته به تأخیر افتاد. در آن وقت امیر عالم خان به مضمون الانسان عبید الاحسان <sup>۶</sup> + (۴۳۷) پیشه خود ساخته <sup>۷</sup>، خزینه را وا گذاشته، {۳۹۹پ} دست به عطا و انعام دراز کرد و در خزینه چون در نشاط باز بود و طلا و دراهم مثل برگ اشجار در زمین <sup>۸</sup> ریخته بود. هر چند میکرد که مرغ دل امرا را به دانه احسان صید کند. مفید نمی افتاد. <sup>۹</sup>

## مصراع

امتحان کردیم کار<sup>۱۰</sup> هر کسی معلوم شد

[و هیچ سودی نداشت.] <sup>۱۰</sup> در آن وقت ظهور دیوان بیگی به آستان بوسی رسید. روز

- 
- |    |                                     |
|----|-------------------------------------|
| ۱  | نموده [ت] [د]                       |
| ۲  | اشاره [ت] [د]                       |
| ۳  | انداختند [ت] [د]                    |
| ۴  | فرمایند [ت] [د]                     |
| ۵  | را [د]                              |
| ۶  | ساخت [د]                            |
| ۷  | زمین ها [ت]                         |
| ۸  | و هیچ سودی نداشت، به حکم آن که، [د] |
| ۹  | کاری [ت]                            |
| ۱۰ | × [د]                               |

خوقند شد. در کمال تعجیل از دوان گذر کرده، در موضع شهیدان نزول اجلال فرمود و از آن جا سواری نموده، از دریای سیحون عبور نموده، نیم از شب گذشته بود که با چهل کس داخل پای تخت خوقند [شد و]<sup>۱</sup> بر سریر جهانبانی قرار گرفت و بر بستر سلطنت آرام یافت و به داد و دهش پرداخت.

### مثنوی<sup>۲</sup>

به الطاف الهی صبح امید      دمید از مطلع اقبال جاوید  
بر آمد مهر از برج عنایت      عیان گردید شب غم را نهایت

### [ذکر خبر یافتن امیر عالم خان از کار برادر]<sup>۳</sup>

خلص کلام این که چون شهزاده عمر خان عنان عزیمت به صوب < ۳۹۰ پ > دار السلطنت خوقند معطوف داشت، روز دیگر این خبر بر تمام ولایت تاشکند منتشر شد. همه خاص و عام انگشت تحیر به دندان [گزیدند و]<sup>۴</sup> در بحر تحیر<sup>۵</sup> فرو رفتند و امیر عالم خان در خواب ناز استراحت کرده بود، یکی از ندیمان او این خبر وحشت اثر را<sup>۶</sup> عرض<sup>۷</sup> نمود. امیر به قوت و جلادت خویش مغرور { ۳۹۹ ر } از ظهور این حادثه جگردوز از بستر وحشت بر جست. خبردار شد. دانست که به اشارت العالم حادث فلک غدار چه بازیچه انگيخته است. از جرأت و جسارت امرا و سپاه متحیر شده بود. در آن وقت جناب قبله گاهم رفتن امیر عمر خان را به تفصیل تقریر نمودند، [به حکم آن که]<sup>۸</sup>

۱ شد [ت]، شده [د]

۲ قطعه [د]

۳ × [ت]

۴ گزیده [ت]، گزیده اند و [د]

۵ تفکر [ت] [د]

۶ × [ت]

۷ عرضه [د]

۸ × [د]

ناحق اقدام نمایند، [به حکم آن که]<sup>۱</sup>

<۳۸۹پ> نظم

در قتل شه ز روی حسد آن دو ناسپاس      دمها زدند کوره تزویر<sup>۲</sup> تافتند  
و اندر شب ظلام به سعی کمال خویش      موی غرض به ناوک حیلست شکافتند  
ز اعمال نفس اجر شهادت به شه رسید      ایشان جزای فعل بد خویش یافتند

{۳۹۸ر} تفصیل این اجمال عنقریب رقم زده کلک بیان میگردد. چون شهزاده عمر خان با امراء نمک حرام متفق گشته، مصلحت را بر آن قرار دادند که امیر عالم خان را در تاشکند وا گذاشته، خود متوجه خوقند شوند. در آن وقت امرا و کل بهادر و محرم و یساول همراه امیر عالم خان در تاشکند بودند. دیگر لشکریان در لب دریای چیلچیق که قریب یک فرسخ از شهر بیرون است، قورولتای ساخته بودند. چون شهزاده امیر عمر خان به<sup>۳</sup> امرای نمک حرام عهد و پیمان کرده، شب دیگر نصف از شب گذشته بود که با امرای بی وفا لباس بی آزرمی پوشیده، به کمیت خوش خرام سواری نموده، عنان عزیمت به صوب لشکرگاه تافته<sup>۴</sup>، چون به [اردوی رسیدند]<sup>۵</sup>، منادی <۳۹۰ر> کردند<sup>۶</sup> که امیر عالم خان را هلاک کردند. زمان زمان شهزاده عمر خان است<sup>۷</sup> و<sup>۸</sup> لشکریان چون این ندا را شنیدند، در آن شب تاریک<sup>۹</sup> چون بنات النعش پاره پاره شده، متوجه خوقند شدند و امیر عمر خان در غایت سرعت قبل از دمیدن صبح به جولگاه آهنگران در قلعه کراوچی وارد گردید. در آن جا {۳۹۸پ} (۴۳۶) خوشوقت را سردار کرده، چندی مبارزان را وا گذاشته، خود متوجه

۱ × [د]

۲ تذییر [س][ت][د]

۳ با [د]

۴ تافت [د]

۵ آورد و رسید [د]

۶ دادند [ت]

۷ × [ت]

۸ × [د]

۹ لشکریان [د]

بیت<sup>۱</sup>

مکن در مهمی که داری شتاب      که از راه<sup>۲</sup> تدبیر چنان بر متاب

تدبیر او این بود که چون به خدمت امیر عالم خان رسید و از امرا شکوه نمود و از سخن او امیر عالم خان از امرا بر آشفت و گفت، < شما > ۳۸۹ ر < مردم آن جماعه دیگر قزاق را قصداً خلاص کردید، می باید دو باره متوجه آن صوب<sup>۳</sup> گردید. > و امرا این سخن را از امیر شنیده، همه در اندیشه فرو رفتند و نمیدانستند که { ۳۹۷ پ } چه تدبیر کنند. چرا که در آن وقت عین جدی بود و لشکریان بسیار به تنگ آمده بودند. در خلال این احوال چندی از آزرده دلان سپاه که از نیش پیکان جگردوز بی عنایتی (۴۳۵) پادشاه زخم کاری خورده، ریش ناصورشان مرهمی نمی یافت و مرگ را به زندوگانی<sup>۴</sup> خویش ترجیح داشتند. به عداوت پادشاه کمر به اراقت خون او بسته، وقت یافته، قد راست کردند [و گفتند]<sup>۵</sup>

بیت<sup>۶</sup>

هر حيله اى كه در تصور عقل آمد      كردیم كنون<sup>۷</sup>\* دیوانگی می باید

مدتی بود که آن نمک حرامان در فکر و اندیشه آن بودند که دل از خصومت امیر عالم خان فارغ گردانند. خصوص ادریس قل بی و جمعه بای قیتاقي منتظر فرصت بودند که خورشید عالم افروز سلطنت را به سر آستین فریب و تزویر<sup>۸</sup> فرو نشانند<sup>۹</sup> و به ریختن خون

۱ × [ت]

۲ راهی [ت]

۳ × [د]

۴ زندگانی [ت] [د]

۵ × [د]

۶ × [ت]

۷ [د]، اکنون [س] [ت]

۸ تذویر [س] [ت] [د]

۹ نشانیده [د]

مرصع و اسبان کوه پیکر هامون نورد انعام فرمود و بر سر ایشان طلا و نقره ایثار کرد.

### قطعه

دو ملک زاده بلند ســـــریر      و این جهان بخش آن ولایت گیر  
عمر این خضر جاویدانی<sup>۱</sup> باد      رزق آن آب زنده گانی<sup>۲</sup> باد

(۴۳۴) القصه. پوست آن دو پادشاه سباع که صید دو پادشاه زاده بود، بر اشتراها آویخته، با چندین شأن<sup>۳</sup> و شوکت به ولایت تاشکند نزول اجلال فرمود. دو سه روز از رنج راه بر آسود. بعد از آن اریس قل بی و جمعه بای قیتاکی را سردار لشکر ساخته، به تاختن اولوس جماعه قزاق امر فرمود. چون ایشان از خدمت امیر عالم خان رخصت اجازت یافته، متوجه آن صوب گردیدند، در غایت سرعت شبگیر زده، قبل از دمیدن صبح به سر آن جماعه چون بلای ناگهانی رسیده، <۳۸۸پ> دست به قتل و تاراج گشادند. بسیاری را به اسیری میبردند. چنان یغما کردند که در یک پرچه لته محتاج بودند که<sup>۴</sup> ستر عورت خود کنند و دیگر جماعه ایشان این خبر را شنیده، قرار بر فرار اختیار نموده، به چندین مشقت {۳۹۷ر} و محنت از قتل و تاراج خلاص یافتند و ایشان خاطر خود را از جماعه دیگر جمع کردند. با فتح و نصرت به خدمت امیر عالم خان مراجعت نمودند. بعد از طی مسافت به نزدیک تاشکند رسیدند و این خبر را امیر عالم خان شنید. جناب شهزاده امیر عمر خان را حکم نمود که ایشان را استقبال نموده، به لشکریان چهارپاییکه اولجه گرفته بودند، قسمت کند. چون امیر عمر خان از خدمت برادر مرخص شد، چون به ایشان رسید، همه مال را قسمت کرد. به خدمت امیر عالم خان بر<sup>۵</sup> اتفاق امرا مراجعت فرمود. در آن ضمن تدبیری<sup>۶</sup> اندیشید.

۱ جاویدان [ت]، جاویدانی [د]

۲ زندوگانی [د]

۳ × [ت]

۴ [ت][د]

۵ به [ت]، با [د]

۶ تدبیر [ت][د]

را<sup>۱</sup># و اسبان را به یک حمله هلاک ساخت و لشکریان قوت این سرپنجه را مشاهده نموده<sup>۲</sup>، هر کدام مثل <۳۸۷پ> +<sup>۳</sup> موش از هزار انعام پادشاهی گذشته، خود را در کناره<sup>۴</sup> کشیدند و آرایبی کسی نبود که یک قدم پیش ماند. چون امیر عالم خان شجاعت پادشاه سباع را دید، انگشت تحیر به دندان گزیده، در بحر تحیر<sup>۵</sup> فرو رفت و نمیدانست که به چه تدبیر آن دو شیر یله را به دست آرد. در غایت غم و اندوه دست به یک دیگر میزد. از هیچ کس {۳۹۶ر} این عقده وا نمیشد. در آن حین بود که فرزند ارشدش شهزاده شهرخ از کمین چنان تیر بر گلوگاه شیر ماده زد که دمار از روزگارش بر آمده، به خاک و خون در افتاد و<sup>۶</sup># سوروں از مردم بر آمده، تحسین و آفرین میکردند و امیر عالم خان زبان به مدح فرزند دلبند گشاد. شادیهها مینمود. چون این حال را شهزاده عالمیان امیر<sup>۷</sup> عمر خان مشاهده نمود، عرق شجاعت و مردانگی در حرکت آمده، تفنگ خاصه خود را از دست محرم گرفته، متوجه آن شیر نر شد. چون این حال را ندیمان و دولتخواهان مشاهده نموده، هر چند مانع آمدند، مفید نه افتاد. در غایت غضب به سر شیر نر تاخت آورده، به یک تیر چنان از دل آن شیر نر<sup>۸</sup> <۳۸۸ر> زد که چشم نگشاده، به یک نعره واژگون غلطیده، رو به سوی عقبی آورد. نظاره گیانی که بودند، همه در کار شهزاده انگشت حیرت به دندان گزیده، دعای دولت او را کردند. چون امیر عالم خان +<sup>۹</sup> آن<sup>۱</sup> حال را از برادر مشاهده کرد، لب به اوصاف او گشاده، خرسندیها کرد<sup>۱۱</sup>، در حال به آن دو پادشاهزاده خلعتهای مروارید دوزی {۳۹۶پ} و کمرهای

۱ [ت][د]

۲ نمودند [د]

۳ مثل [ت]

۴ کنار [ت][د]

۵ تفکر [ت][د]

۶ [د]

۷ × [ت]

۸ یله [د]

۹ چون [د]

۱۰ این [د]

۱۱ کرده [د]

بر سریر سلطنت نشسته، حکم رانی میکرد. از قضا امیر عالم خان آن جا رسید. شیران بیشه چندی لشکریان امیر عالم خان را به سوی عدم <۳۸۷ر> فرستاد و بسیاری را مجروح ساخت.<sup>۱</sup> چون امیر عالم خان از آن حادثه وقوف یافت<sup>۲</sup>، بلا توقف جانور پرانی را منع نموده، به سر شیران تاخت آورد. چون به آن جا رسید، دید که یک جفت شیر<sup>۳</sup> در غایت بزرگی در میان بیشه غریبه، چرخ میزند. امیر عالم خان چون آن حال را مشاهده نمود<sup>۴\*</sup>، در غضب شد. به لشکریان حکم کرد که <زود باشید، آن دو سگ را دستگیر نمایید، والا شمایان را به عذاب سخت<sup>۵</sup> گرفتار خواهم کرد {۳۹۵پ}> و هر کس به قید آرد، از هر وجه دنیوی او را خوشنود میسازم. > چون امرا و<sup>۶</sup> مبارزان بیشه شجاعت این سخن از زبان امیر عالم خان شنیدند، این بیت را خواندند<sup>۷</sup>.

### نظم<sup>۸</sup>

داشتی در دل که عالم را بسوزی عاقبت      بالاخیر کردی به مردم آنچه در<sup>۹</sup> دل داشتی

یک باره به<sup>۱۰</sup> سر آن دو شیر<sup>۱۱</sup> هجوم کرده، به انداختن تیر و تفنگ پرداختند. چون شیران (۴۳۳) دیدند که کار از دست رفت. شعله خشم بر افروخت<sup>۱۲</sup> و نعره ای چند زد که زلزله در پیکر کوه و جوش به دریا و آتش در نی افتاد و سوی ایشان روی آورده، چند مبارزان

۱ ساخته [د]

۲ یافته [د]

۳ شیری [ت]

۴ [ت][د]، نموده [س]

۵ الهم [ت]

۶ × [د]

۷ خوانده [ت]

۸ بیت [د]

۹ بر [ت]

۱۰ بر [د]

۱۱ شیران [د]

۱۲ افروخته [ت]



که [احدی مرکب]<sup>۱</sup> سوار از این سفر نماند که سرش بر باد و مالش به تاراج خواهد رفت. در آن سفر چنان لشکر هجوم کرده بود که از مور و ملخ هم<sup>۲</sup> زیاده بود. (۴۳۲) چون امیر عالم خان با شاهزاده ها با چندین شوکت و<sup>۳</sup> شأن متوجه ولایت<sup>۴</sup> تاشکند شد،

### بیت

+ روان شد به اقبال فتح و ظفر به فیروزی<sup>۵</sup> و نصرتش راه بر

بعد از یک منزل از دریای سیحون عبور نموده، در موضع شهیدان <۳۸۶پ> نزول اجلال<sup>۶</sup> فرمود. روز دیگر از آن جا کوچ کرده، در ولایت قرمه در جولگه آهنگران وارد گردید. روز دیگر از آن جا کوچیده، به قلعه توی تپه نزول فرمود. روز دیگر از آن جا کوچیده، با دبدبه پادشاهی و شوکت خسروی متوجه مقصد گشت. اتفاقاً در آن سرزمین در لب دریای چیلچیق بیشه ای بود، در غایت وسعت. در آن نیستان از هر گونه حیوانات درنده<sup>۷\*</sup> و جانوران {۳۹۵ر} شکاری موجود بود. چون امیر عالم خان از احوال آن نیستان واقف گشت، به جانور پرانی پرداخت. چنان شکار برار کرد که شکار جمشید و سیاوش از دفترها محو شد<sup>۸</sup>. در آن حین عین گرمی شکار بود که غریو از مردم بر آمد. همه بر آن جا هجوم کردند. دیدند که<sup>۹</sup> یک جفت شیر گرین کوس مخالفت مینوازد. زبده کلام آن که در آن بیشه بی پایان عمرها بود که یک جفت شیر به سباع های دیگر

۱ احد مرکوب [ت] [د]

۲ × [ت]

۳ × [د]

۴ × [ت]

۵ اسب دولت زیر ران چتر ظفر بالای سر فتح و نصرت پیش و پس عون الهی راه بر [د]

۶ × [ت] [د]

۷ فیروزی [ت]

۸ × [ت] [د]

۹ [ت] [د]، درند [س]

۱۰ گشت [د]

۱۱ × [ت]

نشد و در چنین سفر تعجیل بی فایده نموده، ملک آramیده را سراسیمه کرد.

### بیت

هر که به تعجیل بر آورد دست      سنگ جفا پایه قدرش شکست

حکما گفته اند که تأنی و تأمل کارها را<sup>۱</sup> بیاراید. به<sup>۲</sup> سبب تعجیل بسی کارها به زیان آید. هر مهمی که به تأمل و آهستگی در آن شروع نمایند، غالب آن است که بر حسب دلخواه سرانجام یابد. هر کاری که به گرمی و سبکساری در آن خوض کنند، اگر به مراد از پیش رود، شاید که سبب پریشانی گردد.

### مثنوی<sup>۳</sup>

<۳۸۶ر> به آهستگی کار عالم بر آر      که در کار گرمی نیاید به کار  
چراغ ار<sup>۴</sup> به گرمی بیفروختی      چو خود را و پروانه را سوختی

و اهل تنجیم از واردات اشکال مختلفه و نحوس طالع عرض کردند و شرح کردند که امسال چنین مینماید که سعود از اوقات ساقط است و نحوس ناظر و<sup>۵</sup> اسد +<sup>۶</sup> درجه طالع و عاشر به درجات مظلمه رسیده، در این ولا مناسبت نیست که در هیچ امری شروع رود.

### {۳۹۴پ} بیت

زمانه به نیک و بد آبستن است      ستاره گهی دوست گه دشمن است

امیر عالم خان به سخنان منجمان التفات نفرمود و بر تمام ممالک فرغانه چرچی زناند

۱ × [ت]

۲ × [ت]

۳ قطعه [د]

۴ از [ت][د]

۵ [د]

۶ بر [ت]

## بیت

{۳۹۳پ} دشمن اگر چه خورد بود در طریق حزم  
او را بزرگ دان و غم کار خویش باش

خردمند آن بود که [از دشمن همیشه]<sup>۱</sup> ترسان باشد.

## بیت

نخستین نشان خرد آن بود که از بد همه وقت ترسان بود

القصه. دولتخواهان هر چند در باب قلع و قمع بنیاد آن گروه بی آزرم بد نهاد سعی و<sup>۲</sup>  
توجه نمودند. پادشاه تغافل ورزید.<sup>۳</sup>

مصراع<sup>۴\*</sup>

غافل مشو از هر که دلش آزردی

ذکر لشکر کشیدن امیر عالم خان بی سببی به مملکت تاشکند و مکر و غدر ساختن امراء و  
سپاه نمک حرام در آن ایام (۴۳۱) و زخم کاری خوردن و به درجه شهادت رسیدن آن

پادشاه ناکام <۳۸۵پ> از خنجر بیداد دهر نافرجام

چون پادشاه سفر تاشکند را<sup>۵</sup> اکثر در خاطر میگذرانیده، به دولت خواهان اظهار  
میکرد. محلی که آفتاب از برج شرف دلو به مرحله حوت کوچ فرمود، شهریار گیتی ستان را  
خاطر عاطر به یورش تاشکند در اضطراب آمده، هر چند که از جانب تاشکند و طرف دشت  
قیچاق موجب سواری به ظهور نیامده بود، پادشاه در تعجیل سفر بلا فایده بی اختیار شده،  
در عزیمت {۳۹۴ر} شتابان گردید و به حکم التانی من الرحمن و العجلة من الشیطان آگاه

۱ همیشه از دشمن [د]

۲ × [د]

۳ می ورزید [ت]

۴ [ت][د]، ع [س]

۵ × [د]

مستنکر سر در خلوتخانه تخیل فرو برده، بعد از آن گفت، >سهل مردمی که بر این جرأت اقدام نموده باشند، بسیار دور مینماید که از آن نام برده گان نسبت به چون من پادشاهی مکر و غدر به ظهور می آمده باشد، چه کس باشند که من به خود آنها را دشمن شمارم و مرا عار باشد که کمتر از بنده گان خود را خصم انگارم. کسی که با شیر ثیان زیاده سری ساخته، منظور نمیکرده باشد، چگونه از [قصد بد]<sup>۱</sup> شغالی ابا نماید و چه شده که از حیلۀ روباهی اندیشه مینموده باشد، [به حکم آن که]<sup>۲</sup>

## بیت

<۳۸۵ر> حریفی که او شیر را پی کند      که از روبه عاجزی چون کند +<sup>۳</sup>

+<sup>۴</sup> و بولته<sup>۵</sup> عن القدر آگاهم.

## بیت

که دیده دسته خاری شده منازع گل      که دیده گاه گلی گشته آفتاب اندای

امیر شیر دل دشمن را سهل و حقیر شمرده و<sup>۶</sup> حمل به کذب این مقوله نیز میکرد و در دل چندان وقعی نمی نهاد و دشمن<sup>۷</sup> خورد نباید انگاشت. دشمن اگر چه خورد بود، مکر و غدرش قوی است.

۱ سگ [ت]

۲ × [د]

۳ که از رو به عاجز چون کند [د]

۴ آدمی که از عربیت بهره ندارد، تهمت دانایی بر خود نهاده، بدان پیچش نماید، خود را شرمنده و رسوا سازد. یک عمر می باید بدین علم خوض نماید تا بهره ور گردد. غرض از این مقدمه آن که این عبارتی که در این مقام مکتوب است، بدین نهج است که صلت علی الاسد و بَلَّت عن النقد، یعنی صولت نمودی، تو بر شیر و بول کردی، تو از برّه گوسفند. این مثل را جایی زنند که مردی متهور و پهلوان از خصم عاجز فرو ماند. لمحرره محمد. [د]

۵ بولته [د]

۶ × [ت]

۷ دشمن را [ت]، × [د]

یافته است. چندانی ضیا و صفای<sup>۱</sup> خوشی ندارد. مخالفت ضمنا ما بین امرا و سپاه و ارکان اولیای دولت بدین سبب پدید آمد و<sup>۲</sup> پادشاه و امرا از یک دیگر متوهم شده، بد غرض گردیدند. {۳۹۲پ} عقیده و اخلاص کما ینبغی فی ما بین نماند.

### مثنوی<sup>۳</sup>

چو از لوح دل شست نقش وفا      به صد محنت و درد شد مبتلا  
وفا کن به هر کس ولینعمت است      که در بیوفایی بسی زحمت است

عاقبت<sup>۴</sup> امرا ضمناً به<sup>۵</sup> امیر عمر خان پرداختند و منتظر وقت میبودند. در آن وقت نزدیکان امیر عالم خان به عرض رسانیدند که رحمان قل بی و اریس قل بی و جمعه بای قیتاقی شوم آن دشمنان درون خانه به کفران والنعمت صاحب خود جسارت نموده، به<sup>۶</sup> اتفاق شهزاده عمر خان و چندی آزرده دلان سپاه قصد دارند که به ذات جناب عالی ضرر و زحمت رسانند و آن کور نمکان با صاحب خود در مقام بد اندیشی (۴۳۰) آمده، خاطر شوم <۳۸۴پ> خود را از دغدغه ای که دارند، فارغ گردانند. جناب پادشاه را دفع ضرر از نفس واجب است و لازم شده که به دفع آن کور باطنان حرام نمک مکار کوشیده، صحن گلزار مملکت را از خس و خاشاک آن مفسدان بیباک پاک گردانند و دست تعرض افساد آن طایفه بد اندیش کافر نعمت را از حریم بلاد خویش کوتاه سازند. اگر در چنین امر تغافل رود<sup>۷</sup>، مبادا {۳۹۳ر} پشیمانی آورد<sup>۸</sup> و<sup>۹</sup> کار از دست رود. امیر عالم خان از شنیدن این امر

۱ صفا [ت]

۲ [د]

۳ قطعه [د]

۴ × [ت]

۵ × [ت]

۶ با [ت]

۷ ورزند [د]

۸ آرد [د]

۹ × [ت]

در اضطراب آمد.

### بیت

اگر عاقل بود خصم تو بهتر      که با نادان شوی یار و برادر

<۳۸۳پ> جناب قبله گاهم از هم چشمان خود باز مانده، {۳۹۲ر} در این وقت بار گران ملک را تنهایی میکشید و از دست بی عنایتی امیر عالم خان جام ناخوشگوار زهر مینوشید. هر چند گرد سر و پای اندیشه گشته<sup>۱</sup>، از روی خیرخواهی و طریقه دولتخواهی به صلاح حال او سعی و توجه می نمود، به هیچ وجه میسر نمیشد. پادشاه عالم مست شراب تهور و به جلادت خود مغرور بوده، اصلاً و قطعاً اصفا نمیفرمود و به قول ناصح خیر خواه عمل نمیکرد و سخن صواب اندیش نمی شنید.

### بیت

مکن که اهل مروت سخن شنو باشند      هزار سال به یک نکته در گرو باشند

با آن که خرد به هزار زبان مضمون لیس<sup>۲</sup> الرأی<sup>۳</sup> کالبیان [ادا میکرد]<sup>۴</sup>.

### مصراع

کو دل که حدیث مشفقان گوش کند

اما آشنایی شهزاده عمر خان به جناب قبله گاهی از حد افزون بود. با وجود او آدمی زاده گی را به جای آورده، دولتخواهی امیر عالم خان را میکرد<sup>۵</sup> و دیگر امرا مثل اریس قل بی و جمعه بای قیتاکی و غیر دیگر دانستند که <۳۸۴ر> فتوری به آراستگی صفات پادشاه راه

۱ گشت [د]

۲ لیس [ت]

۳ الری [ت] [د]

۴ [ت] [د]

۵ میکردند [ت]

خسیس فرومایه بی همت همت خود را مصروف داشت و به صحبت ناکسان و غلیچه های کوهستان میل آورد. این اطوار ناشایسته < ۳۸۳ ر > امیر عالم خان سبب زوال دولت او آمده، صحبت ناکسان { ۳۹۱ پ } و نااهلان تأثیر کرد.

### قطعه

همنشینی کو لطیف و کامل است      راحت روح است و آرام دل است  
و آن که نادانی و غفلت وصف او است      صحبتش مانند زهر قاتل است

حکمای پیشین گفته اند، همنشین نیک مثل عطار است. اگر از عطر او [ به تو چیزی ] نرسد، اما<sup>۳</sup> از رایحه اش بهره مندی حاصل آید و همقرین بی عقل بد مانند کوره آهنگران است. اگر به آتش او نسوزی، اما از دود او متأذی شوی، [ به حکم آن که ]<sup>۴</sup>

### مثنوی<sup>۵</sup>

در<sup>۶</sup> مگذری<sup>۷</sup> از کوره آهنگران      که آتش دودی رسد از هر کران  
رو بر<sup>۸</sup> عطار کوه پهلوی او      جامه معطر شود از بوی او

و از صحبت ناخوش آن ناکسان پادشاه از راه صواب عدول نموده، خاطر عاطرش از<sup>۹</sup> امرا و سپاه و حشم و خدم به پرداخت. از چنین حالتی دلها در<sup>۱۰</sup> ( ۴۲۹ ) پیچ و تاب و خاطرها

۱ × [د]

۲ چیزی به تو [د]

۳ × [ت]

۴ × [د]

۵ قطعه [د]

۶ × [ت]

۷ گذر [د]

۸ بری [ت] [د]

۹ به [ت]

۱۰ در در [د]

ارم از رشک آن چار باغ سر در پیش افکنده، (۴۲۸) [به حکم آن که] <sup>۱</sup>#

### بیت

در دلم سعی شکفتن نیست از سیر <sup>۲</sup>چمن      ته به ته خون گردم از تن غنچه تصویر را

<۳۸۲پ> روز دیگر امیر عالم خان به چندین {۳۹۱ر} محنت و مشقت خود را در بالای سمند خوش خرام گرفته، خرامان خرامان با چندین تجمل متوجه چهار باغ شد و مردم دور و نزدیک امیر را سلامت دیدند. خاطر خود را جمع کرده، هر کس به [کار خود] <sup>۳</sup>پرداخت. چون امیر عالم خان به چهار <sup>۴</sup>باغ فقیر نزول اجلال فرمود، اطبای افلاطون طبع را جمع نموده، به مداوای مرض خود مشغول گشت. بعد از <sup>۵</sup>چهل روز زخم کارد روی به بهبودی آورد و داروی حکیمان به زخم <sup>۶</sup>کارگر آمد. از آن مهلکه خلاص شد.

### مصراع

هر کجا دردیست دارویی <sup>۷</sup>مقرر کرده اند

از چهار <sup>۸</sup>باغ فقیر سواری نموده، به دولتخانه خود وارد گردید و <sup>۹</sup>به عیش [و] عشرت مشغول شد و زن های مردم را خواه هم کفو باشد خواه <sup>۱۰</sup>نباشد، به غلچه های کوهستان <sup>۱۱</sup>داشته، دادن گرفت و از این پرده کار آدمیت شکست. بر تربیت مردم دون و زبون و جماعه

- |    |                       |
|----|-----------------------|
| ۱  | [د]                   |
| ۲  | سر [ت]                |
| ۳  | کاری [د]              |
| ۴  | چار [ت]               |
| ۵  | × [ت] [د]             |
| ۶  | درد [ت]               |
| ۷  | داروی [ت]، داروای [د] |
| ۸  | چار [ت]               |
| ۹  | × [ت] [د]             |
| ۱۰ | × [د]                 |
| ۱۱ | کوهستانی [د]          |



تا<sup>۱</sup> مرا<sup>۲</sup> نزنید که به این خدمت از کُن خود جدا نشویم. کون<sup>۳</sup> خود را به شما و شما را به خدا سپردم. < امیر عالم خان در آن حال به<sup>۴</sup> سخن کیچکنه خان میخندید و میگفت.

### بیت

وقت اجل است و جانگذاز است      که آخر چه محل هزل باز است

بالاخر آن دیوانه را پاره پاره ساختند و ندانستند که آن دیوانه این کار بزرگ را به فرموده کسی کرده است، یا به دیوانگی خود کرده است. معلوم نشد. چون امیر عالم خان را از خاک بر داشتند. همان ساعت جراحان و حکیمان را طلب نموده، < ۳۸۲ ر > به معالجه او کوشیدند. روز دیگر { ۳۹۰ پ } این خبر بر تمام شهر منتشر شد، بل در سهل روز در تمام ممالک شهرت یافت. ولایت مذبذب گشت. ندیمان به خدمت امیر عرض نمودند که اگر جناب عالی خود را به هر نوع به مردم نشان ندهند، خاطر مردم جمع نخواهد شد و فتنه بر تمام ممالک خواهد افتاد. بعده<sup>۵</sup> آتش آن فتنه را به هیچ تدبیر نتوان<sup>۶</sup> نشاندن. امیر عالم خان سخن ایشان را قبول نموده، به جناب قبله گاهم حکم نمود که در چار باغ شما رفته، چند روزی به مداوا میکوشیم<sup>۷</sup>. جناب قبله گاهی این نوید را شنیده، بلا توقف به سر رشته مهمانداری شد<sup>۸</sup> و آن چار باغ به جنوب خوقند از قصر امیر عالم خان چهار<sup>۹</sup> یک فرسخ دور افتاده است. چار باغی است در غایت خوبی و نراکت. اشجارهای او سر به ثریا کشیده و آبهای روان و سبزه های چون خط مهوشان بگرد چشمه رسته و از هر رنگ گل شکفته، باغ

۱ × [ت] [د]

۲ مارا [ت]

۳ کُن [د]

۴ از [ت]

۵ بعد [ت] [د]

۶ نتواند [د]

۷ میکوشم [د]

۸ شدند [ت] [د]

۹ چار [ت] [د]

حرکت کردن نداشت، [به حکم آن که]<sup>۱\*</sup>

مصراع<sup>۲</sup>

شیری که اسیر<sup>۳</sup> گربه گردد ز قضا است

[خلص کلام آن که]<sup>۴</sup>، چون کیچکنه خان خود را به چه تدبیر در آن تاریکی [به آن دالان]<sup>۵</sup> جای کرد و خوب تشخیص کرد که یک دست دیوانه به زمین آویزان (۴۲۷) به دست چپ کار میکند. کیچکنه خان خاطر خود را از شر دیوانه جمع کرد<sup>۶</sup>. در کمال چستی و چالاکی از جانب چپ دیوانه خیز کرده، دیوانه را چنان <۳۸۱پ> در بر کشید که طاقت حرکت بدان<sup>۷</sup> ناپاک نماند و بر زمین چنان زد که نقش بست. دیوانه {۳۹۰ر} به زیر غلطیده<sup>۸</sup> و کیچکنه خان در بالای او غلطیده، محکم گرفته، و<sup>۹</sup> نمیگذاشت و دیوانه خوابیده، کاردچه را حواله میکرد. کارد<sup>۱۰</sup> به جای نمیرسید. در آن وقت ندیمان هجوم کرده، به سر امیر عالم خان آمدند و شاه را زنده در میان غرقاب خون یافتند. همه در پای او افتادند و پاره ای پای دیوانه را میشکستند<sup>۱۱</sup>. کیچکنه خان در بالای دیوانه بود. دید که امیر زنده است. از روی خرسندی و ظرافت به ندیمان دیگر گفت. <با خبر باشید که<sup>۱۲</sup> پای دیوانه گفته بکن<sup>۱۳</sup>،

۱ [د]

۲ بیت [ت]

۳ اسیری [ت]

۴ × [ت]

۵ × [ت][د]

۶ کرده [ت]

۷ به آن [د]

۸ غلطیده [د]

۹ و [ت]، × [د]

۱۰ کار [ت]

۱۱ میشکست و [د]

۱۲ × [ت][د]

۱۳ کن [د]

[زبده کلام آن که]<sup>۱</sup>، در آن وقت که امیر عالم خان دیوانه را به دالان کشید، ندیمان او در حیرت افتاده، منتظر [می نشستند]<sup>۲</sup> که از پرده غیب چه ظهور میکند. ساعتی توقف کردند. دیدند که از شاه و گدا هیچ خبری نشد. لا علاج چند بیخبر پیش رفتند. دیدند که فلک منصوبه دیگر باخته است و دیوانه کاردچه برهنه در دست دارد و چرخ زده، بر جستجوی شاه میگردد. فریاد از نهاد ندیمان بر آمده، پیش دویدند. از همه پیش حافظ قوت خود را رسانید. دیوانه چنان در حلقوم<sup>۳</sup> حافظ قوت زد که کاردچه<sup>۴</sup> رنگ نگرفته، از رخسار او بر آمد. در حال در افتاد و از هوش برفت.<sup>۵</sup>

## بیت

من نه آنم کز درت جایی روم تا زنده ام      گر اجل دورم کند از کوی تو معذور دار

و از عقیب او محمود خواجه رسید و آن خواجه را نیز کاردی زد. اما کارد کارگر نه آمد. ندیمان دیگر این<sup>۶</sup> حال را مشاهده نمودند. <۳۸۱ر> انگشت تحیر به دندان گزیده، در بحر تفکر فرو رفتند و نمیدانستند که آن خوک {۳۸۹پ} تیر خورده را به چه تدبیر به دست آرند. در میان ایشان کیچکنه خان نام ندیمی داشت، بسیار هزل و مسخره، اما بسیار چابک دست بود، او رسید. دید که آن دیوانه ملعون دست از خون خود شسته است. اگر در آن وقت رستم و اسفندیار دوچار آید، در می افتد. خوب تأمل نمود که کار به زور نمیشود. تدبیر می باید اندیشید. چرا که وقت تنگ بود و ندیمان نمیدانستند که حال شاه به چه منوال است. اگر دیوانه امیر عالم خان را به آن خانه به جای خود می یافت، پاره پاره میکرد. به ضرب هژده کارد امیر چنان به دیوار [تکیه کرده، مربع نشسته]<sup>۷</sup> بود که قوت یک قدم

۱ × [ت]

۲ نشستند [ت]

۳ حلقه چشم [د]

۴ [ت][د]، کارچه [س]

۵ رفت [د]

۶ آن [ت]

۷ مربع نشسته، تکیه کرده [ت]

بیت<sup>۱</sup>

ای زبردست زیر دست آزار گرم تا کی بماند این بازار  
 <۳۸۰ر> به چه کار آیدت جهان داری مردنت به که مردم آزاری

دیوانه کاردچه را به سراسیمگی میزد. پرده شکم سلامت بود و هم دیوانه جثه<sup>۲</sup> خورد داشت و دستهای<sup>۳</sup> کوتاه و امیر عالم خان مرد هزیر بود. +<sup>۴</sup> دست در گریبان دیوانه بند بود و خود را گریزانیده بود<sup>۵</sup>. بنابراین کاردچه دیوانه موافق طبع کارگر نمی آمد. در آن وقت امیر عالم خان دید که کار از دست رفت. شمشیر از نیام بر کشید. دیوانه را وا گذاشته، در آن جای تاریک گردن دیوانه را چنان چاق کرده، زد که اگر هزار گردن دیوانه از هفت جوش میشد، قلم میکرد. چرا که پادشاهان خوقند لحظه ای شمشیر را از خود جدا نمیدارند. رسم و دأبشان این است، خواه در ملا و خواه در خلا. اتفاقاً شمشیر خطا افتاد. به کتف دیوانه خورد<sup>۶</sup> و یک دست دیوانه را فرود آورد و حالتی به امیر نمانده بود که شمشیر دویم زند و آن شیر میدان (۴۲۶) شجاعت مربع نشست. دیوانه به دست چپ {۳۸۹ر} کاردچه را گرفته، در آن تاریک<sup>۷</sup> امیر را <۳۸۰پ> میجست و امیر پر خون به پیش او نشسته بود، به حکم آن که

## مصراع

نگهدارنده اش نیکو نگه داشت

۱ قطعه [د]

۲ جسه [س][ت][د]

۳ دستها [ت]

۴ و [ت]

۵ × [ت]

۶ خود [د]

۷ تاریکی [د]

فروشی میکردند و مسلمانان را به راه تبلیس میفریفتند. جمله را جمع نموده، امتحان مینمود. آن را که کارش به شرع موافق بود، به عزت تمام رخصت اجازت میداد و آن را که کارش بر خلاف {۳۸۸ر} شرع می یافت، به چندین خاری توبه داده، رخصت میداد.

### بیت

باطن این قوم کافر کیش با ظاهر مسیح جمله قرآن در کنار است و صنم در آستین

(۴۲۵) و خود به خدمت هدایت پناه ایشان مولوی داخل شده، مشغولی < ۳۷۹پ > میکرد. طریقهٔ جهریه داشت و هر روز بعد از خفتن در آوردوی خود جهر میکرد.

### ذکر کارد زدن دیوانه امیر عالم خان را

از قضا هر روز دیوانه بچه ای در میان جهر دهن<sup>۱</sup> پر کفک [به جهر امیر]<sup>۲</sup> حاضر میشد و امیر عالم خان از وی واقف گشته، او را یکی از زندیقان پنداشته، دخل میکرد و مسخره بدل<sup>۳</sup> میداشت. روزی در عین گرمی جهر که حافظان خوش خان میخواندند و بسیاری مردم را جذبه گرفته، گریبان چاک دهن پر کفک مثل اشتر مست خواه راست خواه دروغ به هر گوشه می افتادند. در عین های و هوی مردم که قیامت صغری مینمود، در آن وقت همان دیوانه به حالی از پیش امیر عالم خان گذر کرد. امیر عالم خان از گریبان آن دیوانه گرفته، به دالان حرم کشید و آن دالان در غایت تاریکی بود. چند مشت به<sup>۴</sup> فرق دیوانه زد و دیوانه از قضا کاردچه ای بر ساق مسحی جای کرده بود<sup>۵</sup>. کاردچه را گرفته، {۳۸۸پ} هژده کارد بالای هم با شکم امیر زد. اما قضا نرسیده بود.

۱ دهن ها [د]

۲ [د]

۳ [د]

۴ بر [ت]، با [د]

۵ بوده [ت]

السلامة و العجلة مصباح الندامة را<sup>۱</sup> کار نمیفرمود، [به حکم آن که]<sup>۲</sup>

### بیت

تهور پسندیده عقل نیست جنون و تهور به معنی یکی است

امیر عالم خان در ثانی الحال از مسلک خانان ماضی و یاسای آبا {۳۸۷پ} و اجداد انحراف ورزیده، کارهای غیر معهود به ظهور آورد. اگر چندی که در ظاهر به مردم مکره<sup>۳</sup> مینمود، اما در باطن چند او بسیار خوب و زیبا بود. چنانچه کسانی که خود را به<sup>۴</sup> دروغ سیدزاده و شیخ زاده ساخته بودند، همه را منع نمود و در ترکستان رسم است که <۳۷۹ر> در هر جا درخت عظیم باشد، در آن جا [او را]<sup>۵</sup> علم ساخته، زنان [آن را]<sup>۶</sup> مزار پنداشته، لته می آویزند و چراغ در میگیرانند و از آن جا [استعانت میطلبند]<sup>۷</sup> و خود را در ضلالت می اندازند. امیر عالم خان از آن<sup>۸</sup> قبیل چیزها<sup>۹</sup> را از بیخ و بنیادش<sup>۱۰</sup> بر کند و گدایانی که متمول<sup>۱۱</sup> بودند، با وجود دولت داشتن گدایی میکردند، همه را جمع نمود. ساربان ساخت و به هر کدام ایشان یک اشتر سپرد که ایشان فربه کنند. در وقت بار به کارخانه پادشاهی حاضر سازند و دیگر شیخ تراشانی که بودند<sup>۱۲</sup>، خود را ولی ساخته +<sup>۱۳</sup>، بر دروغ کرامت

۱ × [ت]

۲ [ت]

۳ منکر [د]

۴ × [د]

۵ [د]

۶ × [ت][د]

۷ [ت]، طلب استعانت میطلبند [س]، طلب استعانة میکند [د]

۸ این [د]

۹ زمین [د]

۱۰ بنیاد [د]

۱۱ [د]، متمویل [س][ت]

۱۲ × [د]

۱۳ بودند [د]

## بیت

در صد هزار قرن سپهر پیاده رو      نارد چو تو سوار به میدان روزگار

آن پادشاه اکثر اوقات این ابیات را<sup>۱</sup> ورد خود کرده بود.

قطعه<sup>۲</sup>

{۳۸۷ر} چه سنجد در نگینم شهر خوقند      ز چینم تا خراسان در نگین باد  
به یک توران سمندم را چه جولان      مرا میدان همه روی زمین باد

امرا و سپاه و حشم و خدم در اوایل حال مهر و محبت امیر عالم خان را از صمیم قلب در دلها جای دادند و جان شیرین خود را <۳۷۸پ> فدای او کرده، (۴۲۴) حکم و فرمان همایونش را قضای جریان پنداشتند.

مصراع<sup>۳</sup>

به هرچه حکم بود بنده ایم و فرمان بر

فی الحقیقة امرا و سپاه از خلق و کرم پادشاه جهان چنان فریفته شدند که فوق او<sup>۴</sup> متصور نبود و لیکن<sup>۵</sup> امیر را تهتک مفرط در<sup>۶</sup> مزاجش مستولی شده، در جزئیات امور مملکت ساده دل و آسان گذارد و زود پشیمان آمد و از کمال تهور و فرط جلادت حزم را رعایت نمیفرمود و به صبر و وقار و تأنی و تأمل التفات نمیکرد و + کلمه التأنی حصن

۱ × [ت]

۲ بیت [د]

۳ ع [ت]

۴ آن [د]

۵ [ت][د]، لیکن [س]

۶ بر [ت][د]

۷ به [ت]

ذکر فتنه و آشوب در ممالک فرغانه چند روزی و سبب نامهربانی<sup>۱</sup> پادشاه سعید امیر عالم محمد بهادر خان به واسطه طغیان امراء عاصی و دعوی سپاه فتان و مقدمه<sup>۲</sup> زوال دولت آن

پادشاه ناکام، الحمد لله الذی<sup>۳</sup> خالق الجن و الانس

اما بعد بدان که امیر عالم خان پادشاهی بود، در آن عهد از گلزار سلطنت بدان طراوت و لطافت گلی نشکفت و بر جویبار {۳۸۶پ} مملکت بدان قامت و نصارت سروی نرست. شهریار کامیاب و کامران بود. منحلّی<sup>۴</sup> به عز و ابهت شاهی شجاعت او در بساط<sup>۵</sup> جهان مشهور و مذکور و مبارزت او بر صحایف زمان مزبور<sup>۶</sup>. شکل خوب و شمایل مرغوب داشت و منظری<sup>۸</sup> دلنواز و دستی<sup>۹</sup> خصم انداز. اگر تیر از شصت کمان به<sup>۱۰</sup> سر آمدی، جای گرفتی و اگر بر قلّه کوه افتادی، از پای در آوردی. لطمه موج غضب او از قهر بحر <۳۷۸ر> خاک بر ساحل دریا انداختی و صولت خشم او آتش از دل سنگ به صحرای ظهور رسانیدی و خاقانی بود، به زیور اوصاف حمیده و افعال پسندیده آراسته، روز کوشش چون شیر غرین همه عنف و گاه بخشش چون ابر همه کرم و لطف. هنگام داد، چون باد وزیده، بر قوی و ضعیف. وقت عدالت چون آفتاب تابنده، بر وضع و شریف. به همت چون دریا که در دهش از کاهش نیندیشد. در تهور مانند سیل که از فراز و نشیب نه پرهیزد.

۱ قتل [د]

۲ مقدمه [ت]

۳ × [د]

۴ منحلّی [د]

۵ بسیط [ت][د]

۶ × [د]

۷ مذبور [د]

۸ منظر [د]

۹ دست [د]

۱۰ بر [د]



جاری بود.

### بیت<sup>۱</sup>

از تاب آفتاب حوادث چه غم خوریم<sup>۲</sup> چون سایه بان لطف تو باشد پناه ما<sup>۳</sup>

[و امیر عالم خان به آن حمله داخل شهر شد و لشکریان دست به قتل و تاراج گشادند. بعد از یک روز امیر عالم خان حکم فرمود که کسی به کسی کار<sup>۴</sup> نداشته باشد و یغمای ترکان یک چیز تخفیف یافت. مردم شهر {۳۸۶ر} از بیم برآمدند]<sup>۵</sup> و امیر عالم خان تمام آن ولایت را در قبضه اقتدار خود در آورد. به انعام و احسان پرداخت. چون خاطر از مهمات آن مملکت فارغ ساخت، حکومت تاشکند را به سید علی بیک تفویض نمود و چند دیگر از<sup>۶</sup> امرا را به خدمت او گذاشت. خود به فتح و<sup>۸</sup> نصرت عنان عزیمت به صوب خوقند تافت. بعد از یک منزل در چولگاه آهنگران نزول فرمود. از آن جا کوچ کرده، از کوه دوان گذشته، بر لب دریای سیحون (۴۲۳) وارد گردید. روز دیگر <۳۷۷پ> از دریا عبور نموده، با چندین گیر و دار [و صولت]<sup>۹</sup> به دولتخانه خود رسید و به تخت ناز قرار گرفت و به عیش و<sup>۱۰</sup> عشرت مشغول گشت.

۱ × [د]

۲ خورم [د]

۳ من [د]

۴ کاری [ت]

۵ × [د]

۶ چندی [د]

۷ [ت]

۸ [ت]

۹ [ت][د]

۱۰ [ت]

## بیت

دامن دولت جاوید و گریبان امید      حیف باشد که بگیری و دگر\*<sup>۱</sup> بگذاری

کوس مخالفت نواخت و این خبر را امیر عالم خان شنید. آتش غضب در حرکت آمد. حکم نمود که تمام لشکریان فرغانه حاضر شوند. به فرموده آن امیر والا مرتبه لشکری<sup>۲</sup> از مور و ملخ بسیار جمع شدند<sup>۳</sup>، به دربار عالی حاضر آمدند و امیر عالم خان (۴۲۲) بلا اهمال با تجمل بسیار متوجه ولایت تاشکند شد، به حکم آن که

<۳۷۶پ> مثنوی

نه شاه و نه سالار لشکر بود      که نازک تن و نازپرور بود  
ترا افسر و گنج و فرمان دهی      حرام است اگر سر به بالین نهی

القصه<sup>۴</sup>. به یک منزل از دریای سیحون عبور نموده، در موضع شهیدان وارد گردید. روز دیگر از آن جا کوچ کرده، از کوه دوان گذشته، در ولایت قُرمه نزول فرمود. از آن جا به دو منزل به مقصد رسید. {۳۸۵پ} چون از آمدن امیر عالم خان حامد خواجه و قوف یافته، حیران و سرگردان میگشت. نمیدانست چه چاره کند. صعوه را به نزد چنگال عقاب چه مجال و موش را به پیش پنجه شیر چه تاب و<sup>۵</sup> توانا. با وجود همان گردن خار خار دل به محاربه نهاد. روز دیگر امیر عالم خان با لشکر قیامت اثر سواری نموده، متوجه خصم شد. چون به نزدیک دشمن رسید، به یک حمله به هم در آویختند. به جنگ پیوستن همان و از هم فرو ریختن دشمن همان و حامد خواجه دید که قضا کار خود را کرد. از آن مهلکه <۳۷۷ر> با چندین محنت و مشقت بیرون شد. دل از مال و ملک و از زن و فرزند بر کند. خوش خوش قرار بر فرار اختیار نموده، با چندین درد و حسرت متوجه بخارا گشت و این بیت به زبان او

۱ [ت][د]، دیگر [س]

۲ لشکر [د]

۳ شد [ت]، شده [د]

۴ [د]

۵ [ت]

شخصی کسی را پناه برده، به خانه اش بیاید. امکان ندارد که او را به دست دشمن سپارد. در آن وقت سیادت پناه چنان به تنگ آمده بود که آن بیچاره را به دست امیر عالم خان داشته داد و او را امیر به قتل رسانید و<sup>۱</sup> این بدنامی از سیادت پناهی مذکور تا انقراض عالم باقی ماند و بارها از زبان آن سیادت پناه شنیده ام. میگفت، <در دنیا کاری [کرده ام]<sup>۲</sup> که تدبیری ندارد. آری دیدیم<sup>۳</sup>،

### بیت

نیک ار کنی به جای تو نیکی کنند باز      ور بد کنی به جای تو از بد بتر کنند<sup>۴</sup>

چون امیر عالم خان صلح نموده<sup>۵</sup>، با فتح و نصرت به جانب خجند مراجعت فرمود، بعد از یک منزل در ولایت خجند وارد گردید. چند روز به عیش و عشرت مشغول گشت. از آن جا کوچ کرده، رو به مقصد <۳۷۶ ر> آورد. به سه منزل در ولایت خوقند نزول اجلال فرمود. چند روز از رنج راه بر آسود.

### ذکر لشکر کشیدن امیر عالم خان به صوب تاشکند

چون در آن وقت که شهزاده عمر خان سلطان خواجه ولد {۳۸۵ ر} یونس خواجه را دستگیر نموده، قلعه نیاز بیک را مسخر نموده، به حامد خواجه روی دیده، از سر گناه او در گذشته، متوجه خوقند گشته بود. بعد از چندین وقت نشئه<sup>۶</sup> بنگ بر سر او صعود کرده، هوای حکومت به حال او نگذاشت. قدم از جاده خود بیرون نهاد، [به حکم آن که]<sup>۷</sup>

۱ [ت]

۲ کردم [ت][د]

۳ دیدم [ت][د]

۴ نمود [ت][د]

۵ نشأ [ت][د]

۶ × [د]

القصه<sup>#۱</sup>. باز به عادت معهود به جنگ پیوسته<sup>۲</sup>، از [کشته پشته ها]<sup>۳</sup> بر داشتند و محمود خان دید که مشّت به درفش راست نمی آید و لشکریان<sup>۴</sup> امیر عالم خان تا رفت، غلبه نمود و<sup>۵</sup> مردم به تنگ آمدند. لا علاج محمود خان سخن صلح را در میان انداخت، [به حکم (۴۲۱) آن که]<sup>#۶</sup>

## بیت

چون ز دشمن کسی فراغت یافت      جانب خوشدلی عنان بر تافت

و امیر عالم خان سخن او را قبول نمود. گفت، >برادرش توره خان را و شکور<sup>۷</sup> علی توقسابه را و غیر آن چندی<sup>۸</sup> بزرگان یوز را <۳۷۵پ> آق اوی لوک بدهد<sup>۹</sup>. < و<sup>#۱۰</sup> سیادت پناهی قبول [نموده، برادر خود و چندی<sup>۱۱</sup> از]<sup>۱۲</sup> امرای خود را خانه کوچ داد. در آن وقت توله بای میرزا نام از امرای امیر<sup>#۱۳</sup> عالم خان گریخته، به اوراتپه در آمد. از بس که {۳۸۴پ} در ترکستان و غیر او<sup>۱۴</sup> دیگر ولایت در میان کافر و مؤمن نزد همگنان روشن است که<sup>#۱۵</sup>

- |    |                       |
|----|-----------------------|
| ۱  | [د]                   |
| ۲  | پیوستند [ت]           |
| ۳  | کشته ها پشته [ت][د]   |
| ۴  | لشکری [د]             |
| ۵  | × [ت]                 |
| ۶  | [د]                   |
| ۷  | شکر [د]               |
| ۸  | چند [د]               |
| ۹  | طلب نمود [ت]          |
| ۱۰ | [ت][د]                |
| ۱۱ | چند [ت]               |
| ۱۲ | نمود. برادر و چند [د] |
| ۱۳ | [د]                   |
| ۱۴ | × [د]                 |
| ۱۵ | [ت]                   |

و اکای گرامی ام محمود خان بارها شنیده ام که <sup>۱</sup># می گفتند، در آن وقت در بساط ما چیزی از خوراکی <sup>۲</sup> ذخیره <sup>۳</sup> نبود. بسیار به تنگ آمده بودیم.

روزی یکی از نوکران ما <sup>۴</sup> یک من گندم آورد، < ۳۷۵ ر > گویا که چند من جواهر کشیده باشد. اسپان ایشان پوست درخت می خوردند. در آن وقت از جانب جیزخ رجب بیک دادخواه منغیت با هزار مرد جرار شبگیر زده، متوجه اوراتپه شد. همه لشکریان او وهم کرده، در راه گریخته میماندند <sup>۵</sup>، عاقبت با صد کس نیمی <sup>۶</sup> از شب گذشته بود که دزدی به هر حال به مردی از یک طرف قوشون امیر عالم خان به اوراتپه [واصل شد] <sup>۷</sup> و چون سیادت پناهان { ۳۸۴ ر } از آمدن او واقف <sup>۸</sup> گشته، خرسندیها کرد <sup>۹</sup> و لشکریان او و فقراء اوراتپه یک چیز میان خود را بسته، دل به محاربه نهادند. روز دیگر عالم سیاه دل چون رخسار <sup>۱۰</sup> خوبان نورانی گشت و جمشید خورشید به تخت مینایی <sup>۱۱</sup> برآمد.

### بیت

ستاره سحر چون علم بر کشید      جهان حرف شب را رقم بر <sup>۱۲</sup> کشید

- 
- |    |                 |
|----|-----------------|
| ۱  | [د]             |
| ۲  | خوراک [د]       |
| ۳  | ذخیره [س][ت][د] |
| ۴  | × [ت]           |
| ۵  | براندند [د]     |
| ۶  | نیم [ت][د]      |
| ۷  | در آمد [د]      |
| ۸  | واقیف [ت]       |
| ۹  | کردند [ت][د]    |
| ۱۰ | رخساره [ت]      |
| ۱۱ | مینای [د]       |
| ۱۲ | در [ت]          |

منجنیق‌هایی که از بهر فتح قلعه درستی کرده بود، پیش انداخته<sup>۱</sup>، یورش کرد و از یک جانب در تحت توپ گرفته، توپخانه متوجه قلعه شد و از جانب (۴۲۰) یوانغار دیگر<sup>۲</sup> شهزاده<sup>۳</sup> عمر خان و ادریس قل بی کوچک و جمعه بای قیتاقی و دیگر امرا رو به قلعه آوردند و از جانب جوانغار شهزاده شهرخ و رحمان قل بیک<sup>۴</sup> و [خالق قل میرزا]<sup>۵</sup> و غیر دیگر یورش آوردند. در آن روز چنان آتش پیکار افروخته شد که سرها چون گوی در میدان غلطان شده، <۳۷۴پ> دستها چون علم قلم گردیده، باران مرگ باریدن گرفت. کس بسیار از هر دو جانب رو به منزل آخرت آوردند.

## بیت

چو شیران جنگی بر آویختند سپاهان در آن دشت<sup>۶</sup> خون ریختند

بعد از محاربات بسیار امیر عالم خان دید که فتح قلعه به آسانی میسر نمیشود. باز گشت نموده، +<sup>۷</sup> به آوردوی خود نزول فرمود. {۳۸۳پ} هر روز بهادران کینه خواه از خون خویش خاک میدان را گلگون میکردند. مدت محاصره به هژده روز کشید. در آن وقت جناب ایشان سلطان خان در پیش برادر بودند. این قدر تدبیرها از جناب شان به وقوع می آمد. [و الا آرای نبود که]<sup>۸</sup>، روباه با<sup>۹</sup> شیر بازی کند و صعوه به دم تفنگ ایستد و هم در آن وقت در میان شهر چنان قحطی شده بود که فقیر از زبان جناب قبله گاهم ایشان سلطان خان

۱ انداخت [د]

۲ × [د]

۳ شاهزاده [ت]

۴ بی [د]

۵ خالق قل المیرزا [ت]، خالیقل میرزا [د]

۶ جنگ [د]

۷ و [ت]

۸ نباشد آرا نبود [ت][د]

۹ به [د]

فرمود. آن شاهزاده از خدمت پدر رخصت اجازت یافته، از <۳۷۳پ> دریا عبور نموده، به ولایت چست رسید و بر مسند امارت بنشست<sup>۱</sup>. به داد و دهش مشغول گشت.

### {۳۸۲پ} ذکر لشکر کشیدن امیر عالم خان به صوب اوراتپه

چون چندی بر این بگذشت، امیر عالم خان خواست که باز سیادت پناهی محمود خان خواجه را گوشمال دهد.

مجمّل سخن آن<sup>۲</sup> که قبل از این مقدمه یازده مراتب بر سر اوراتپه لشکر کشیده، آن ولایت را بسیار به تنگ آورده بود. اگر هر کدام را خلّص بیان کنیم، سخن به طول می انجامد، تا مستمعان را ملال خاطر نگردد، بنابر این<sup>۳</sup> فقیر قصیرتر گردانیدم<sup>۴</sup> و این سفر دوازدهم بود که شروع میکنم.

زبده کلام آن که امیر عالم خان بر تمام ممالک فرغانه جارچی زناند که این سفری است، قیل قویروق که هر کس مرکب داشته باشد، سواری نماید. اگر احدی از این سفر نصرت اثر ماند، سرش بر باد میرود و مالش به تاراج. در آن مورد چنان لشکری جمع شده بود که نه درکوه <۳۷۴ر> میگنجید و نه در هامون.

القصه<sup>۵</sup>. به چندین شأن و شوکت سواری نموده، متوجه مقصد گشت. بعد از سه کوچ در ولایت خجند وارد گردید. از آن جا به یک کوچ قلعه اوراتپه را چون نگین {۳۸۳ر} انگشتی در میان گرفته، به محاصره و مقاتله مشغول گشت و سیادت پناهی نیز شرط قلعه داری را به جای آورده، به انداختن تیر و تفنگ پرداخت. روز دیگر امیر عالم خان عراوه<sup>۶</sup> و

۱ نشست [د]

۲ این [د]

۳ آن [ت] [د]

۴ [ت] [د]، گردانیدم [س]

۵ × [ت]

۶ × [ت]

۷ عراوه [ت] [د]

امیر<sup>۱</sup> عمر خان در عین نشاط و کامرانی به آن مخدّره زفاف مینمود و از دست ساقیان گل‌عذار جامهای باده خوشگوار تجرّع فرمود و از مشروبات اندجان عشرت فرموده، شراب ناب گلزار طرب را آب داده، غنچه دل شهزاده<sup>۲</sup> امیر عمرخان باغ باغ میشکفت و مغنی خوش الحان صوت دلنواز به گوش ناهید نغمه ساز رسانیده، به زبان حال میگفت.

## نظم

ساقی بیار باده بر افروز جام ما      مطرب بگو که کار جهان شد به کام ما  
ما در پیاله عکس رخ یار دیده ایم      ای بیخبر ز لذت شرب مدام ما

امیر عمر خان چند روز در غایت عیش و نشاط میگذرانید. <۳۷۳ر> بعد از آن {۳۸۲ر} متوجه مرغینان گشت. اتفاقاً در آن وقت قمر در عقرب بود و زحل ناظر به مریخ بود که آن عفت پناهی از شهزاده عمر خان آبتن شد. چون انقضای حمل به سر آمد، فرزند کریه منظری در وجود آمد. اختر<sup>۳</sup> شناسان آن عصر کوکب او را خوب مطالعه کردند، غیر از نحوست چیزی در طالع او نیافتند. گفتند، <اگر این فرزند در کمال رسد، چیزهای در کار دین و دنیا از او به وقوع آید که نه کافر کرده باشد (۴۱۹) و نه مؤمن.> بنابر آن نام او را بهترین نامها محمد علی خان نهادند. به امید این که شاید که به شرافت این دو نام نیک صالح گردد. ندانستند که السعید من سعد فی بطن امّه، الشقی من شقی فی بطن امّه، به حکم آن که

## بیت

صفت زشت نخیزد ز نکو کردن نام      مرد نبود زن اگر نام نهندش حیدر

و در آن آوان امیر عالم خان به<sup>۴</sup> فرزند ارشدش +<sup>۵</sup> شهرخ بی ولایت چُست را انعام

---

۱ [د] ×

۲ شاهزاده [ت]

۳ اخطر [ت][د]

۴ [د]

۵ به [س][ت]



قطعه<sup>۱</sup>

الهی تا جهان را آب و رنگ است      فلک را سیر و گیتی را درنگ است  
ممتع دارش از عمر جوانی      ز هر چیزش فزون ده زندوگانی<sup>۲</sup>

در آن وقت سنه ۱۲۲۰ بود که حکومت اندجان به رحمان [قلی بیک]<sup>۳</sup> تغایی امیر عالم خان تعلق [گرفته بود و او ماه لار آیم نام دختری در پس پرده عصمت داشت]<sup>۴</sup>. چون امیر عالم خان خواست که (۴۱۸) آن مخدّره را در عقد شهزاده امیر<sup>۵</sup> عمر خان در آرد. بنابر آن طوی بر پا ساخت که هیچ بیننده ندیده و هیچ شنونده نشنیده بود. با تحمل بسیار جناب قبله گاهم را سردار طوی کرده، به اندجان امر کرد. جناب قبله گاهم<sup>۶</sup> از پیش امیر عالم خان مرخص شده، متوجه مرغینان شد. چون این خبر را امیر عمر خان شنید، با امراء خود استقبال نمود. به جای خود فروز آورد. روز دیگر جناب قبله گاهم امیر عمر خان را {۳۸۱پ} بر سبیل دامادی گرفته، متوجه اندجان شد<sup>۷</sup>. چون آمدن ایشان را رحمان [قلی بیک]<sup>۸</sup> شنیده، استقبال نموده<sup>۹</sup>، به آوردوی خود فرود <۳۷۲پ> آورده، به مهمانداری قیام نمود. روز<sup>۱۰</sup> دیگر قضات و اکابر و اشراف مجتمع گشته، در ساعت سعد از اوج سلطنت با ناهید درج امارت عقد بست و چند روز بساط سور و سرور و عیش و حضور انبساط یافته، شهزاده<sup>۱۱</sup>

۱ × [د]

۲ زندگانی [د]

۳ قل بی [د]

۴ گرفته بود و او ماه لار آیم نام در پس پرده عصمت دختری داشت [ت]، داشت و رحمن قل بی در پس پرده دختری داشت ماه لار آیم نام [د]

۵ × [د]

۶ قبلگاهی ام [ت][د]

۷ شدند [د]

۸ قل بی [د]

۹ نمود [د]

۱۰ روزی [ت][د]

۱۱ شاهزاده [ت]

گزیده، در کار امیر عمر خان تحسین و آفرین [می کردند]<sup>۱</sup> و به کار خود شدند. بالاخر ایلچی تازه {۳۸۰پ} به خدمت آن شاهزاده فرستاده، خدمتکاری و فرمان برداری خود را اظهار کردند. شاهزاده سخن او را قبول نموده، گفت، «هر وقت حامد خواجه به ما روی بیند، از سر گناه او <۳۷۱پ> در میگذریم، والا نی<sup>۲</sup> و حامد خواجه این نوید را شنیده، به چشم قبول نمود. روز دیگر هر دو لشکر خود را بیاراستند<sup>۳</sup> و شهزاده<sup>۴</sup> عمر خان به کمیت خوش خرام سواری نموده<sup>۵</sup>، متوجه میدان گشت و از آن جانب حامد خواجه آمده، به دست بوس آن شاهزاده مشرف گشته<sup>۶</sup> و آن شاهزاده<sup>۷</sup> والا مرتبه<sup>۸</sup> در کمال لطف و مرحمت در کنار گرفته، مهربانیهای<sup>۹</sup> خسروانه نمود. ولایت تاشکند را با<sup>۱۰</sup> او گذاشته، خود به جانب قُرمه مراجعت فرمود. در موضع کِراوچی وارد گردید و از آن جا کوچ نموده<sup>۱۱</sup>، از کوه دوان به چندین محنت و مشقت گذشته، بر لب دریا نزول اجلال فرمود. روز دیگر از دریای سیحون عبور نموده، به دولتخانه خود رسید. به خدمت امیر عالم خان کورونوش داد و آن برادر در کنار گرفته، مهربانیهای پادشاهانه و الطاف خسروانه نمود و حکومت فرغانه را به آن شاهزاده<sup>۱۲</sup> {۳۸۱ر} والا مرتبه<sup>۱۳</sup> تفویض نمود. چون شاهزاده از خدمت برادر مرخص شد، به ولایت <۳۷۲ر> مرغینان رسید و بر مسند امارت بنشست<sup>۱۴</sup>. عروس آن مملکت را تنگ در آغوش کشید. به عدل و داد پرداخت. و زبان خاص و عام به این قطعه جاری بود.

۱ کردند [د]

۲ نه [ت]

۳ بیاراسته اند [د]

۴ شاهزاده [ت]

۵ نمود [ت][د]

۶ گشت [د]

۷ [د]

۸ مهربانیهای [ت]

۹ به [ت][د]

۱۰ نمود [د]

۱۱ × [ت]

۱۲ نشست [د]

مشاهده نموده<sup>۱</sup>، دیدند که کار از دست رفت. بلا اهمال برادر سلطان خواجه <۳۷۰ پ> حامد خواجه را بر مسند امارت نشانیده، شرط قلعه داری چنانکه<sup>۲</sup> باید و شاید به جای آورده، به انداختن تیر و تفنگ پرداختند. چون امیر عمر خان حال را<sup>۳</sup> بدین منوال دید، دانست که عروس مطلب به آسانی در کنار نمی آید. عنان عزیمت به صوب قلعه نیاز بیک معطوف داشت و آن قلعه ای است، بر سر آب تاشکند و کلید ولایت اوست، به غایت متانت و استواری مشهور و به کمال مناعت و محکمی بر السنه و افواه مذکور، طایر و هم تیز پر از عروج بر بروجش عاجز و کمند خیال اجبال از وصول به کنگره {۳۸۰ ر} فیضش<sup>۴</sup> قاصر، مرغان هوای فضایش با نسر طایر همراز و ماهیان خندق عمیقش با گاو زمین دمساز.

#### مثنوی

حصاری در بلندی رشک افلاک      به بی مثلی مثل در خطه خاک  
زبان کنگرش همراز انجم      وز او قاصر کمند وهم مردم

بر سر آن قلعه رسید<sup>۵</sup>. چون نگین انگشتی در میان گرفته <۳۷۱ ر> و<sup>۶</sup> یک شب و روز آن حصن حصین را چنان محاصره نمود که مردمانی که آن جا بودند، به غایت به تنگ (۴۱۷) آمده بودند. لا علاج به انداختن تیر و تفنگ می پرداختند. روز دیگر شهزاده عمر خان جمله لشکریان را یک باره فاتحه داد. لشکریان فرغانه به یک حمله داخل قلعه گشته، دست به قتل و تاراج گشادند و شهزاده عمر خان آن قلعه متین را مسخر نمود. در آن جا چندی از سپاهیان کینه خواه را گذاشته، خود بازگشت نموده، رو به ولایت تاشکند آورد. چون حامد خواجه و امرای تاشکند این حال را مشاهده نمودند، انگشت حیرت به دندان

۱ نمودند [ت] [د]

۲ [ت]

۳ [د]

۴ فیضش [ت] [د]

۵ رسیدند [د]

۶ [د]

محاربه برپا شد که جنگ رستم و اسفندیار از کتابها محو گشت و از خون یلان خاک میدان چون لعل بدخشان<sup>۱</sup> رنگین گشت، [به حکم آن که]<sup>۲</sup>

### بیت

(۴۱۶)

با بخت نیک هیچ کس<sup>۳</sup> را ستیز نیست مهر عروس ملک به جز تیغ تیز نیست

<۳۷۰> بعد از محاربات بسیار کوکب ظفر از جانب شهزاده عمر خان طلوع نمود و ستاره سلطان خواجه در هبوط افتاد. لشکریان تاشکند رو به فرار آوردند و سپاه ظفر اثر فرغانه تعاقب نموده، پاره ای را به قتل میرسانیدند و چندی را اسیر میکردند. در آن گیر و دار اتفاقا اسب سلطان خواجه پیش پا خورده<sup>۴</sup>، از پا در افتاد و آن خواجه فلحوس از خانه زین بر زمین افتاد. یکی از سپاهیان خوقندی این<sup>۵</sup> حال را مشاهده نموده، بلا توقف {۳۷۹پ} بر سر آن برگشته بخت [رسید و]<sup>۶</sup> او را دستگیر نموده، به خدمت امیر عمر خان آورد.

### بیت

سری که روی ز امرت کشید گردونش به بارگاه تو اکنون کشان کشان آورد

و شهزاده عمر خان این فتح بزرگ را به فال نیک گرفت و از جمله عطاها غیب شمرده، یوروش به جانب تاشکند آورد و امرای تاشکند چون سلطان خواجه را بدین حال

۱ بدخشانی [ت][د]

۲ × [د]

۳ کسی [ت][د]

۴ خورد [د]

۵ آن [ت][د]

۶ به [ت][د]

۷ رسیده [د]

فرمودند و از آن جا شب دیگر شبگیر زده، از دریای چیلچیق گذشته، قبل از طلوع صبح به سراپیل رسیده، دست به تاراج و<sup>۱</sup> یغما بردند و چندی را به<sup>۲</sup> قتل رسانیدند و بسیاری را اسیر کردند. در آن وقت به جای یونس خواجه پسر ارشدش سلطان خواجه به مسند امارت نشسته بود. این خبر وحشت اثر را شنید. هوش از سر آن نادیده کار پرید. نمیدانست، به چه تدبیر از آن<sup>۳</sup> مهلکه خود را نجات بدهد. بعد از فکر بسیار به خدمت امیر عمر خان ایلچیان دانا فرستاده، گردن تسلیم نهاد و<sup>۴</sup> امیر عمر خان سخن او را قبول فرموده، از سر گناه او در گذشت و ایلچی را <۳۶۹ پ> خلعت عالی انعام فرموده، از خود ایلچی همراه کرده، رخصت اجازت فرمود. چون ایلچی یان به پیش آن برگشته بخت رسیدند، صورت واقعه را<sup>۵</sup> بیان فرمودند. آن بی دولت را به<sup>۶</sup> سخن اول نیافتند و طبع او منحرف شده بود.

### بیت

هیچ عاقل<sup>۷</sup> نزنند تیشه به پای آرام از بهشت آن که برون آمده است آدم نیست

{۳۷۹} و آن خواجه بی تدبیر کوس مخالفت نواخته، با چندین اساس و دبدبه با لشکر تاشکند از شهر بر آمده، صف آراست و از آمدن او امیر عمر خان مطلع گشته، او نیز بر<sup>۸</sup> آراستن لشکر پرداخت. چون هر دو دریای مواج در حرکت آمدند<sup>۹</sup>، به یک دیگر در آویختند و مبارزان کینه خواه به خنجر تیز پر ستیز جگر یک دیگر را<sup>۱۰</sup> میدرانیدند<sup>۱۱</sup>. چنان

۱ به [د]

۲ [ت]

۳ این [ت] [د]

۴ × [ت]

۵ [د]

۶ در [د]

۷ عاقل [ت]

۸ به [ت]

۹ آمده [د]

۱۰ × [ت]

۱۱ میدرانند [ت]

وداع در آغوش لطف گرفت و<sup>۱</sup> سر و رویش بوسید و آب از دیده گان فرو ریخت، [به حکم آن که]<sup>۲</sup>

۳+

نظم

جدایی <sup>۴</sup> ز <sup>۵</sup> او بر دلش سخت بود	که او زیور افسر تخت بود
{۳۷۸} (۴۱۵)	
طلب کرد و بگرفت اندر برش	به صد مهر بوسید چشم و سرش
وز آن پس برون آمده پیش شاه	چو شیرژیان رو نهاده به راه
روان گشت شهزاده با لشکری	به روز دغا هر یکی صفدری
امیران فرغانه خیل سپاه	که چون هاله میرفت بر گرد ماه
به چندین تجمل همیرفت ساز	چو میرفت شهزاده سرافراز <sup>۶</sup>
ظفر همعنان نصرتش رهنمای	ز گرد سپاهش هوا مشکسای

### [ذکر لشکر کشیدن شاهزاده عمر خان به صوب تاشکند]<sup>۷</sup>

و آن در دریای شهریاری از خدمت برادر رخصت اجازت یافته، متوجه ولایت تاشکند شد. چون از دریای {۳۷۸ پ} سیحون عبور نمود<sup>۸</sup>، به راه دوان به چندین محنت و مشقت از کوه گذشته، در ولایت قرمه وارد گردیدند و از آن جا به چولگه آهنگران نزول اجلال

۱ [د]

۲ [د]

۳ ذکر لشکر کشیدن شاهزاده عمر خان به صوب تاشکند [ت]

۴ جدای [ت] [د]

۵ از [د]

۶ سرافراز [د]

۷ × [ت]

۸ نموده [د]

بلا توقف سواری نموده، در کمال تعجیل آمده، به اوراتپه داخل شد و آن ولایت را متصرف گشت و بر مسند امارت نشست.

### ذکر لشکر کشیدن امیر عالم خان به صوب اوراتپه

سال دیگر امیر عالم خان با لشکر فرغانه متوجه اوراتپه گشت. بعد از سه منزل در ولایت خجند وارد گردید. بعد از دو روز از آن جا کوچ کرده، بعد از یک منزل در ولایت اوراتپه نزول اجلال فرمود <۳۶۸پ> و آن مملکت را چون خط پرگار در میان گرفته، به محاصره و مقاتله پرداخت و سیادت پناهی اکای گرامی ام محمود خان نیز<sup>۱</sup> شرط قلعه داری را کماینبغی به جا<sup>۲</sup> آورده<sup>۳</sup>، به انداختن تیر و تفنگ پرداخت. هر روز مبارزان کینه خواه از هر دو جانب بازار محاربه را گرم میکردند. چندی از دار دنیا به ضرب شمشیر رو به دار عقبی می آوردند. مدت محاصره به طول کشید {۳۷۷پ} و سیادت پناهی محمود خان به خدمت امیر سخنهاي خوش<sup>۴</sup> و دلکش عرض نمود. سخن سیادت پناهی<sup>۵</sup> را امیر قبول نموده، آشتی کرده،<sup>۶</sup> به صوب خجند عنان عزیمت معطوف داشت. چون در آن ولایت وارد گردید، چند روز به عیش و عشرت پرداخت و از آن جا به جانب خوقند مراجعت فرمود. بعد از قطع راه به مقصد رسید. به درستی لشکر پرداخت. در آن وقت خبر رسید که یونس خواجه از دار دنیا به دار عقبی رحلت نمود. چون این خبر را امیر عالم خان شنید<sup>۷</sup>، لشکر به جانب تاشکند بیاراست و<sup>۸</sup> بعد از مشاورت بسیار رفتن خود را در آن ولا منع فرمود و شهزاده <۳۶۹ر> عالمیان امیر عمر خان را با امرای خوقند مع لشکر فرغانه نامزد فرمود. در هنگام

۱ [ت] [د]

۲ جای [ت] [د]

۳ آورد [ت]

۴ خوب [د]

۵ پناه [د]

۶ و [ت]

۷ شنیده [د]

۸ [د]

بلا اهمال با همراهی امیر عمر خان سواری نموده<sup>۱</sup>، به چادر<sup>۲</sup> آمد و آتش بلند افروخت و خوش خانان را حکم فرمود، به آواز بلند خوانند، تا که مردم دانند، امیر به جایش برقرار بوده است و از وهم برآیند و همچنان کردند. آنی که [او را]<sup>۳</sup> ناموس و شجاعت داشت<sup>۴</sup>، به پیش امیر حاضر شد و آنی که اندیشه نکرد، راه بازگشت اختیار کرده بود و امیر عالم خان همان شب از جهة تهور و شجاع بودن در آن جا گذاشت. روز دیگر آهسته آهسته به جانب اوراتپه مراجعت فرمود. چون در آن ولایت رسید، دانست که نگاه داشتن آن ولایت ممکن نیست. لا علاج اوراتپه را خالی گذاشته، به دو منزل به خجند رسید. بعد از سه روز از آن جا کوچ کرده، به سه منزل <۳۶۸ر> به خوقند وارد گردید.

خلص کلام این که در آن آوان که امیر<sup>۵</sup> حیدر پادشاه از بالای اوراتپه متوهم (۴۱۴) شده، به جانب بخارا مراجعت فرمود. در آن وقت رجب دیوان بیگی از امیر عالم خان متوهم شده، کنده، به امیر حیدر پادشاه پیوست و<sup>۶</sup> از کتّه قورغان جین خدایار بی {۳۷۷ر} والنعمی اکای گرامی ام سیادت پناهی به<sup>۷</sup> محمود خان خواجه را<sup>۸</sup> یرلیغ داده، به حکومت قلعه سنگ زار فرستاده بود و<sup>۹</sup> آن سیادت پناهی منتظر همین وقت می بود. این واقعه را شنیده، از سنگ زار،

### مصراع

غافل مشوز<sup>۱۰</sup> کار که فرصت غنیمت است

۱ نمود [د]

۲ جای خود [د]

۳ [د]

۴ بود [د]

۵ [د]، میر [س] [ت]

۶ [د]

۷ × [د]

۸ [د]

۹ × [د]

۱۰ به [د]



{۳۷۶ر} محاصره نموده<sup>۱</sup> است. بسیار مردم او به تیر پریده است و قوشون او خود به خود وهم کشیده، به جانب بخارا مراجعت فرموده است. امیر عالم خان این سخن<sup>۲</sup> را شنیده، بلا اهمال در کمال سرعت در ولایت اوراتپه وارد گردید. از آن جا طی مسافت نموده<sup>۳</sup>، به قلعه جیزخ نزول اجلال فرمود. آن قلعه +<sup>۴</sup> را چون نگین انگشتری<sup>۵</sup> در میان گرفته، به محاصره و مقاتله مشغول گشت. در آن وقت در ولایت جیزخ عبد الرسول دادخواه برادر حکیم قوش بیگی بود، او نیز شرط قلعه داری را به جای آورده، به انداختن تیر و تفنگ پرداخت. فلک کج رفتار خواست که<sup>۶</sup> منصوبه ای باز<sup>۷</sup> بر پا کند.

مجمّل سخن این که امیر عالم خان تدبیر را اندیشه نکرده، به قوش شاهزاده عالمیان امیر عمر خان رفت و طرح مجلس انداخت و لشکریان که امیر عالم خان را به جای خود ندیدند، خود به خود متوهم شده، در فکر جستن امیر عالم خان شدند و این <۳۶۷پ> بیم بر همه لشکر<sup>۸</sup> افتاد و<sup>۹</sup> امیر عالم خان از این بازی فلک واقف گشته و از کار بی تدبیر خود انگشت تحیر به دندان [گزید و]<sup>۱۰</sup> در بحر تحیر فرو رفت و این بیت را میخواند.

### {۳۷۶پ} بیت<sup>۱۱</sup>

هر که بی فکر و تأنی عملی گیرد پیش آخر الامر از آن کرده پشیمان گردد

- ۱ نمود [د]
- ۲ خبر [ت] [د]
- ۳ نمود [ت] [د]
- ۴ حسین [ت]
- ۵ انگشترین [ت]
- ۶ × [ت] [د]
- ۷ باز نو [ت]، تازه [د]
- ۸ لشکری [ت]
- ۹ [د]
- ۱۰ گزیده [د]
- ۱۱ [ت] [د]

بیت

{۳۷۵پ} <۳۶۶پ> فکر دور اندیش عالمگیر او در یک نفس  
کارها سازد که نتوان کرد در عمری چنان >

این سخن به عالم خان بسیار خوش آمد و <sup>#۱</sup> از سر قتل آنها در گذشت. غرض جناب <sup>#۲</sup>  
قبله گاهم آن بود که شاید از این راه مسلمانان از قتل نجات یابند. بعد از آن امیر <sup>#۳</sup> عالم  
خان اوراتپه را در تحت تصرف در آورده، در آن وقت تولد فقیر اتفاق افتاده بوده <sup>۴</sup> است.  
روز فتح قاصد مژده رسانیده است. [بعد از آن] <sup>۵</sup> امیر <sup>#۶</sup> عالم خان [در اوراتپه نیک قدم  
اناق] <sup>۷</sup> را حاکم کرده <sup>۸</sup> و ملا رحمت الله [و محمود اتالیق] <sup>۹</sup> را نیز در خدمت او گذاشته،  
عنان مراجعت به صوب خجند معطوف داشت و از آن جا به جانب خوقند مراجعت فرمود.  
چون به دولتخانه خود رسید، به کار سپاه پرداخت. چند وقت بر این گذشت.

ذکر لشکر کشیدن امیر عالم خان به صوب ولایت جیزخ بی کام دل بر گشتن

در آن وقت شنید که امیر حیدر پادشاه با لشکر بخارا آمده، ولایت اوراتپه را محاصره  
نموده <sup>۱</sup> است. این خبر را شنیده، بلا توقف با لشکر فرغانه متوجه آن صوب (۴۱۳) گردید.  
<۳۶۷ر> بعد از قطع مراحل در ولایت خجند رسید. شنید که امیر حیدر پادشاه اوراتپه را

۱ [د]

۲ [د]

۳ [ت][د]

۴ بود [د]

۵ القصة [د]

۶ [د]

۷ قدم اناق [ت]، در اوراتپه قدم عناق [د]

۸ × [د]

۹ × [ت][د]

۱۰ نمود [د]

لشکریان دست به قتل و تاراج دراز کردند. آتشی بود، در نیستان افتاد و خشک و <۳۶۶ر> تر {۳۷۵ر} برابر میسخت.

### بیت

آتشی را که سوخت خلق از آن جز به کشتن علاج نتوان کرد

و امیر عالم خان نیز داخل شهر گشت و لشکریان فرغانه امرای منقیت را اسیر کرده، به پیش امیر عالم خان می آوردند. مثل حاکم آن جا ملا ایر نظر بی و پسر<sup>۱</sup> او پیر نظر بی و بیک مراد پروانچی و برادر حکیم قوش بیگی قابل بی اناق<sup>۲</sup> و بسیار امرا و امرزاده های بخارا را لیج<sup>۳</sup> و عریان کشان کشان به چندین خاری و زاری به پیش امیر<sup>۴</sup> عالم خان آورده، جمع نمودند. سه هزار کس بود، از قتل باقی مانده، و امیر عالم خان همه را به<sup>۵</sup> کشتن حکم فرمود. در آن وقت در پیش امیر عالم خان جناب قبله گاهم حاضر بودند. روی به امیر عالم خان آورده، گفتند، >این جمعی را که حکم قتل فرمودند، [خود میدانند که]<sup>۶</sup> از امرای امیر حیدر پادشاه می باشند. هر گاه روزی چند در حبس باشند، امیر حیدر را از این وجه کدورت خاطر بیشتر خواهد بود. چه در کشتن این قوم، اگر دو سه روز<sup>۷</sup> دلگیر گردد، اما در حبس ایشان مادام الحبس مکدر خواهد بود. پس<sup>۸</sup> مناسب آن است که دشمن را بیشتر در غم و کاهش گذارند، [به حکم آن که]<sup>۹</sup>

۱ پسران [د]

۲ عناق [د]

۳ لوج [د]

۴ × [ت]

۵ بر [ت] [د]

۶ × [ت]

۷ روزی [ت] [د]

۸ [ت] [د]

۹ × [ت] [د]

همت ارباب کرم عریض<sup>۱</sup> و پهناور.

### مثنوی

قضاکنگرش را ز برج زحل      به بالا بر آورده چندین محل  
ته خندش از زمین در مفاک      دو چندان که از چرخ تا روی خاک

القصه. سپاه نصرت پناه آن قلعه رفعت دستگاه را مرکزوار در میان گرفتند و اسباب حصارگیری ترتیب داده، عراوه و منجنیق نصب کردند و امیر عالم خان نیز از موضع مذکور کوچ کرده، در قلعه استروشن نزول اجلال فرمود. روز دیگر از جانبین دست {۳۷۴پ} به انداختن [تیر و]<sup>۲</sup> تفنگ گشاده، لوازم محاصره و محاربه به جای آوردند. کمانهای رعد در خروش آمده، آتش <۳۶۵پ> در خرمن جمعیت دلیران انداخت و عقاب تیر از آشیانه<sup>۳</sup> کمان پرواز نموده، در کاخ دماغ پهلوانان نشیمن ساخت. بر این منوال بود و از هر طرف طایفه ای کشته گشت. کار اهل حصار به اضطراب انجامید. امیر عالم خان دانست که فتح الباب بر روی او خواهد گشاد. بنابر آن حکم فرمود که تمام لشکریان ممالک فرغانه مسلح<sup>۴</sup> و مکمل شده، از هر طرف آماده جنگ و قتال باشند. جنگ سلطانی خواهند نمود. سپاهیان او به فرموده عالی عمل نموده، منتظر فرمایش شده، حاضر شده، ایستادند.

سنه ۱۲۲۱ در پانزدهم ماه ثور روز شنبه وقت چاشت بود که امیر عالم خان به نفس خود سواری نموده، متوجه قلعه شده، لشکریان خود را فاتحه داد و آن مبارزان کینه خواه چون گرگ گرسنه سوارون و غوغا انداخته، به قلعه دویدند و به یک حمله خود را +<sup>۵</sup> میان شهر داخل کردند. چنان محاربه در میان شهر شد که از کشته<sup>۶</sup> [پشته ها]<sup>۷</sup> (۴۱۲) بر داشتند و

۱ [ت][د]، عرض [س]

۲ × [ت]

۳ آشیان [د]

۴ مصلح [ت][د]

۵ در [ت]

۶ کشته ها [ت][د]

۷ پشته [ت][د]

گشت. [بعد از چندین]<sup>۱</sup> وقت خبر رسید که امیر حیدر پادشاه با لشکر بخارا به نزدیک اوراتپه وارد گردیده است و بیک مراد بی استقبال نموده بوده<sup>۲</sup> است. او را گرفته، به درجه<sup>۳</sup> شهادت رسانیده است و ولایت اوراتپه را به ایر نظر بی منقیت تفویض نموده است<sup>۴</sup>، کل امرزاده های بخارا را در آن جا گذاشته، خود به جانب بخارا مراجعت فرموده است.

ذکر<sup>۵</sup> فتح نمودن امیر عالم خان مملکت اوراتپه را به یک حمله به مهربانی<sup>۶</sup> او تعالی چون این خبر را امیر عالم خان شنیده، با لشکر فرغانه بلا توقف متوجه اوراتپه گشت. بعد از قطع مراحل در ولایت خجند وارد گردید. از آن جا کوچ نموده، در موضع آق سو نزول اجلال فرمود. روز دیگر آفتاب جهان تاب از فروغ تیغ کشور گیر دیده متحصنان قلعه<sup>۷</sup> مستدیر را خیره ساخته، شعله<sup>۸</sup> برق جمشید خورشید لوامع تسخیر بر ساحت حصار فیروزه گار گردون انداخت. {۳۷۴ر} فرمان آفتاب شعاع نفاذ یافت که امرای انجم سپاه (۴۱۱) به شاهزاده والا مرتبه<sup>۹</sup> امیر عمر خان و اریس قل بی کوچک و رحمان قل بی و عبد الولی<sup>۱۰</sup> میرزا و رجب دیوان بیگی و [خالق قل]<sup>۱۱</sup> میرزا و جمعه بای قیتاقی <۳۶۵ر> با غلبه<sup>۱۲</sup> بسیار از لشکریان [گرد قلعه<sup>۱۳</sup> حصار]<sup>۱۴</sup> را پیش رفته، محل نصب خیام ظفر انجام سازند و مورچلیان بخش کرده، از روی جد و اهتمام به امر محاصره و محاربه پردازند. الحق آن حصار است، در غایت<sup>۱۵</sup> رفعت و حصانت، شبیه قلعه<sup>۱۶</sup> خیبر و سد سکندر خندق عمیقش به سان عرصه<sup>۱۷</sup>

---

۱ در آن [د]

۲ × [د]

۳ × [د]

۴ × [ت]

۵ [د]

۶ ولی [ت][د]

۷ خالقل [ت][د]

۸ رفته؟ گردید؟ [ت]

۹ × [د]

سو میدویدند و بیک مراد بی از این واقعه هایلّه واقف گشته، بلا اھمال با سپاه خود از ارک به زیر {۳۷۳} آمده، در میان شهر به جنگ پیوست. چنان جنگی ساخت که لشکریان فرغانه انگشت حیرت به دندان گزیدند. (۴۱۰) بعد از محاربات بسیار بیک مراد بی <۳۶۴> دید که کار از دست رفته است. گشته، به ارک داخل شده، به انداختن تیر و تفنگ مشغول گشت و امیر<sup>۱</sup> عالم خان نیز<sup>۲</sup> به شهر در آمده، ارک را چون نگین انگشتری<sup>۳</sup> در میان گرفته، به محاربه و مقاتله پرداخت. بعد از پنج روز بیک مراد بی بسیار به تنگ آمده<sup>۴</sup>، صلح را در میان انداخت. امیر عالم خان سخن او را قبول نموده، آشتی نمودند و بیک مراد بی کوچ خود را مع مال و اموال گرفته و ارگ را خالی گذاشته، با چندین درد و حسرت متوجه اورا تپه گشت.

## بیت

چون به قوت حریف خصم نه ای      حیلّه و مکر را ز دست مده

و امیر عالم خان عروس ممالک خجند را تنگ در آغوش گرفت. چند روز آھو چشمان و پری چهره های خجند را جمع نموده، به عیش و<sup>۵</sup> عشرت مشغول گشت، به حکم آن که شمس الدین حافظ شیرازی گفته.

## نظم

حافظ چو ترک غمزه خوبان نمیکنی      دانی کجا است جای تو خوارزم یا خجند

{۳۷۳} حکومت آن ولایت را به [خالق قل]<sup>۶</sup> میرزا گذاشته، خود به فتح و نصرت به جانب خوقند مراجعت فرمود. چون به مقصد رسید، به داد و دهش <۳۶۴> مشغول

- 
- |   |               |
|---|---------------|
| ۱ | × [ت]         |
| ۲ | [د]           |
| ۳ | انگسترین [ت]  |
| ۴ | آمد [ت] [د]   |
| ۵ | [ت]           |
| ۶ | خالقل [ت] [د] |

است و خود بر مسند حکومت نشست. {۳۷۲پ} [امیر عالم خان]<sup>۱</sup> این خبر را شنیده، بلا اهمال با لشکر انبوه متوجه خجند شد.<sup>۲</sup> چون در موضع کان بادیام رسیده، در آن وقت سنه ۱۲۲۱ بود که خبر وفات جناب سیادت پناهی حکیم توره جد فقیر رسید و<sup>۳</sup> امیر عالم خان <۳۶۳پ> شهزاده عالمیان امیر عمر خان را [رخصت اجازت داد]<sup>۴</sup> و آن شاهزاده<sup>۵</sup> در کمال تعجیل همان شب در خوقند رسید<sup>۶</sup>، روز دیگر سادات و علما و فقرا جمع شده، به های و هوی تمام<sup>۷</sup> نعش شان را برداشته، به خاکدان شان برده، سپردند. مدت عمر چهل و هشت سال بود.

## [قطعه]

آن کیست که دل نهاد فارغ نشست      پنداشت که مهلتی و تأخیری هست  
گوخیمه مزین که میخ میباید کند      گورخت منه که بار میباید بست<sup>۸</sup>

القصه<sup>۹</sup>. از منزل مذکور امیر عالم خان با سپاه جرار رجب دیوان بیگی را امیر لشکر ساخته، پیش فرمود. آن دانای صاحب تدبیر در کمال تعجیل شبگیر زده، قبل از دمیدن صبح خود را به دروازه خجند رسانیده، کمین کردند. دروازه بان از بازی فلک بیخبر دروازه فتح را<sup>۱۰</sup> بر روی ایشان باز کرد. ایشان منتظر آن وقت بودند. یک باره خود را به شهر داخل کردند. دست به قتل و تاراج گشادند و مردم شهر خجند از این غوغا در حیرت افتاده، به هر

۱ [د]

۲ شدند [ت]

۳ × [ت]

۴ رخصت ایجازو داد [ت]، گردانیده، فرستاد [د]

۵ شهزاده [ت]

۶ رفته [د]

۷ × [ت] [د]

۸ × [ت] [د]

۹ [د]

۱۰ × [د]

بیت<sup>۱</sup>

دام شیطان است دینه دانه لذتهای نفس مرغ دل را حرص دانه زود در دام افکند

و امیر عالم خان تعاقب نموده<sup>۲</sup>، پاره ای را به قتل میرسانید<sup>۳</sup> و بسیاری را اسیر میکردند. این فتح عظیم را امیر عالم خان از جمله عطایای غیبی<sup>۴</sup> شمرده، شکرانه فتح بزرگ را به جای می آورد. همان روز یونس<sup>۵</sup> علی خواجه و یوسف<sup>۶</sup> علی خواجه و از امرای تاجیک رجب دیوان بیگی داد مردی را دادند و امیر عالم خان از کار قتل و غارت [فراغت یافت]<sup>۷</sup>. با فتح و فیروزی از دریا عبور نموده، به جانب خوقند مراجعت فرموده<sup>۸</sup>، به مقر خود نزول اجلال فرمود. چند روز از رنج راه بر آسود. [تاریخ گریختن یونس خواجه بنگی را ملا محمد غازی رئیس تاریخ نیکو گفته، این است.

در دشت غوروم سرای امیر صفدر یونس خیره سر عجب رزم انگیخت  
بگرفت سر دشمن و تاریخش گفت بنگی بکنش نگاه ناکرده گریخت  
در سنه ۱۲۱۶. ]<sup>۹</sup>

ذکر<sup>۱</sup> مسخر نمودن امیر عالم خان ممالک خجند را

در آن وقت خبر رسید که بیک مراد بیک بابا پروانچی را به درجه شهادت رسانیده

- ۱ × [ت]
- ۲ نمود [د]
- ۳ میرساند [ت][د]
- ۴ غیب [د]
- ۵ یوسف [د]
- ۶ یونس [د]
- ۷ فارغ شد [د]
- ۸ نموده [د]
- ۹ [ت][د]
- ۱۰ × [ت]



و یقین او شد که هر روز طوی نمیشده است که او چلپک خورد. لا علاج گردن خار خار تن به قضا در داد. متوجه جنگ شد و<sup>۱</sup> هر دو دریای لشکر به هم [در آویختند]<sup>۲</sup> و از خون یلان آب سیحون گلناری گشت و خاک میدان حنایی<sup>۳</sup> بست. بعد از محاربات بسیار نسیم ظفر از جانب امیر عالم خان وزید و یونس خواجه مال و اموال و سپاه {۳۷۲ر} و خزینه را وا گذاشته، با چندین داغ و حسرت قرار بر فرار اختیار نمود. از آن مهلکه پرافت با چندین محنت و مشقت با پنج شش <۳۶۳ر> محرم<sup>۴</sup> خلاص یافته، راه تاشکند را پیش گرفت.<sup>۵</sup> در کمال تعجیل خود را به مقر (۴۰۹) خود رسانید. به کسل صعب گرفتار شد.

۳ × [ت] [د]

۱ × [د]

۲ در آویخته بودند [ت]، آویخته بودند [د]

۳ حنا [د]

۴ <۳۶۳ر.ح> و لشکر و پسر کلان و خورد <طوی می کنیم در خوقند> گویان، برده، بنابر آن که زعم کرده بودند که <در خوقند مردی مقاومت می کرده گی نمی باشد> گفته، بعد از آن به قهر او تعالی بما دوچار شده، آن دو تیر انداخته گی باشد. میرگنان تیر شاتان؟ در عقیب ناکی؟ می رفته و یا آتش نی گرفته، از این جهت زنبورک خواجه مانده، خودشان مع لشکر خودشان به تمامه آگاه شده گریخته اند. واضح باد.

ایشان و خود یونس خواجه به وزیرها گفته بودند که <این طریقه گریختن مایان از اثر آثار امداد جناب حضرت ایشان آفاق خواجه کاشغری و عزیزان خوقندی و اوزگندی می باشد> به لطف حضرت واجب تعالی در حق عالم خان و به غضب او تعالی در باره مایان و اعمان و سخن بیهوده گویان و شناونده خوش آمد کلامان از بدکاران ملازمان و خدمتکار آش و نان خوران گمراهان و الحق و نعم القادر هو الله کتابه الشریف.

بیان تاریخ گریختن ایشان یونس خواجه حاکم تاشکند از غوروم سرای مزبور را چنین طرز بعضی شعرای خوقند یافته بودند که

سنگی بکنش نگاه ناکرده گریخت

و بعضی گفته بودند که

شاشی بکنش نگاه ناکرده گریخت

و لفظ کن شاشی حرف یا ده؟ است، اسقاط کرده شود، هزار {و} دو صد [و] بست باقی می ماند.

سنه ۱۲۲۰. واضح باد. [ت]

۵ گرفته اند [ت]

بودند. فرصت را غنیمت یافته.

### مصراع

غافل مشو به کار که فرصت غنیمت است

در کمال تعجیل از همهٔ امرا پیش خود را به رزمگاه رسانیده، چشم دار آن<sup>۱</sup> بودند که در آن وقت یونس خواجه از موضع اشت< ۳۶۲ پ> کوچ کرده، میخواست که در موضع غوروم سرای نزول فرماید. سپاهیان خوقندی از چپ و راست بر آمده،<sup>۲</sup> چون گرگ به رمه تاخت آورده، سوروں بر داشته، در آویختند و یونس خواجه به گوشهٔ خاطر نداشت که سپاه خوقند از دریا عبور نموده، به او محاربه نمایند. این حال را مشاهده نمود. نشأ بنگ از سرش [هزار گز]<sup>۳</sup> پرید.

### مصراع

و آن جمله خیالها به یک دم بگریخت

۸ [ت][د]

۱ [د]

۲ < ۳۶۲ پ. ح. > در موضع غوروم سرای اندک قلعه دار سرکردهٔ کلان خویش خود شاه منصور خان ملقب به زنبورک خواجه تاشکندی الاصل در خجند پنج سال حاکم شده در عصر بیک مراد بیک قرق یوز حنیف؟ و وی از خواجه های حضرت شیخ خوانند طهور عمک بچه یونس خواجه حاکم تاشکند در محله قنار تیرک غربی مزار مذکور همان زنبورک خواجه مقتول را مانده اند. با همراهی دو صد نفر میرگان میلّتیق دار و خود یونس خواجه ایشان مع اتباع لشکر و پسر خورد و کلان در موضعی ایستاده اند که نیما نیم سنگ است و خودشان زیاده ترسیده اند. از صولت لشکر خان موصوف از این جهت شاه منصور خان ملقب را در این جا ماند. خودشان بعد از شام گریختند و تا وقت صبح زنبورک خواجه از کمال غیرت جنگ کرده، در وقت صبح تیر رسیده، مقتول گردیده و الحال مقبره شان در غوروم سرای است. و نسب شاه منصور خان به سلیمان خان شاه نشینی و به چند واسطه عصر به شیخ خوانند طهور میرسد. مرقد و مقبرشان در غوروم {سرای} مشهور است و از ایشان منصور خان ملقب به لقب معروف زنبورک خواجم نبیر و ابیرهٔ بسیاری در ولایت تاشکند است و بعضی از آنها تاشکندی می باشند. پسر پادشاه خواجه ایشان صدور رحمة الله علیه و ایشان نبیرهٔ دختری ایشان است بی واسطه، لراقمة الشریف. [ت]

{۳۷۱ر} هر چه تمام تر با لشکر قزاق متوجه جانب<sup>۱</sup> خوقند شد.

### قطعه

سالها اندیشه می پختم<sup>۲</sup> کز دور فلک  
کار ما آخر چنین یا آنچنان خواهد شدن  
<۳۶۲ر> یا بر این منوال گنج و سیم و زر خواهیم یافت  
یا در آن اقلیم حکم ما روان خواهد شدن

(۴۰۸) ندانست آن بیچاره که فلک کارها دارد که در یک ساعت عالمی را هم بود میکند و هم نابود. بالاخر از راه قرمه در کمال تعجیل از کوه گذشته، در موضع اشته وارد گردید و این خبر به سمع امیر عالم خان رسید. بلا توقف سواری نمود و قاصد باد رفتار را دو اسبه در خجند به پیش رجب دیوان بیگی فرستاد و خود با تجمل بسیار با فریادونی رو به جنگ یونس خواجه نهاد.

ذکر<sup>۳</sup> محاربه نمودن امیر عالم خان به یونس خواجه و او را مقهور گردانیدن به تأیید کردگاری

چون رجب دیوان بیگی از صورت واقعه وقوف یافته<sup>۴</sup>، خجند را وا گذاشته، مع لشکریان<sup>۵</sup> در کمال سرعت شبگیر زده، به یک شب از دریا عبور نموده، خود را به موضع غوروم سرا رسانید. در آن وقت که<sup>۶</sup> پسران ارشد خان خواجه یوسف علی خواجه و یونس علی خواجه که<sup>۷</sup> خون پدر را از یونس خواجه {۳۷۱پ} طلب میکردند و<sup>۸</sup> منتظر همین روز

۱ [د]

۲ پختیم [ت] [د]

۳ × [ت]

۴ یافت [د]

۵ لشکر [د]

۶ [د]

۷ [د]

چون امیر عالم خان خاطر خود را از کار بزرگ خواجه جمع کرد و آن ولایت را بسیار<sup>۱</sup> خوب ضبط نموده<sup>۲</sup>، به جانب خوقند مراجعت فرمود. +<sup>۳</sup> از دریا گذشته، به دولتخانه خود نزول اجلال فرمود. {۳۷۰پ} > {۳۶۱پ} چون چندی بر این گذشت، امیر عالم خان رجب دیوان بیگی را<sup>۴</sup> که بزرگترین امرای امیر عالم خان بود، امیر لشکر کرده، با سپاه بی عدد به جانب خجند فرستاد. در آن عصر<sup>۵</sup> فلک پر فتنه خواست که باز شعبده تازه<sup>۶</sup> بر پا کند.

ذکر لشکر کشیدن +<sup>۷</sup> یونس خواجه به خیال بنگ به صوب خوقند و گریختن او از آن مرز و

### بوم

[مجمعل سخن]<sup>۸</sup> آن که در آن وقت که یونس خواجه سیادت پناهی خان خواجه را گریزانده<sup>۹</sup>، دستگیر نمود. از شادی به پراهن نمی گنجید. به خیال بنگ به خاطر می آورد که اکنون در ربیع مسکون از من بزرگتر پادشاهی ذوالاحترام نخواهد بود. به همین تمنا و غرور بود. روزی به سرش هوای تسخیر ممالک خوقند افتاد. در آن وقت کوچک ترین فرزندان او هاشم خواجه نام بود، و او را با تجمل بسیار طوی کردن در خاطر داشت. اما اسباب طوی موافق طبع او موجود نبود. لا علاج به تاخیر افتاده بود. در آن وقت که خیال بنگ به سرش صعود کرد. بی اختیار حکم فرمود که امرا درستی کار خود را کرده، متوجه خوقند شوند که ما فرزند خود را بعد از فتح خوقند در آن جا طوی بزرگ میسازیم. به همین آرزوی محال

- 
- |   |                 |
|---|-----------------|
| ۱ | × [د]           |
| ۲ | نمود [د]        |
| ۳ | و [ت]           |
| ۴ | × [د]           |
| ۵ | وقت [د]         |
| ۶ | [د]             |
| ۷ | سیادت پناهی [ت] |
| ۸ | خلص کلام [د]    |
| ۹ | گریزانیده [د]   |

{۳۷۰} < ۳۶۱ ر> و<sup>#۱</sup> امیر عالم خان این خبر را بشنید<sup>۲</sup>، با وجود بندی<sup>۳</sup> بودن آن سیادت پناهی پاس خاطر داشته<sup>۴</sup>، [به حکم آن که]<sup>۵</sup>

### بیت

به دل گفتم کدامین شیوه دشوار است در عالم  
(۴۰۷) نفس در خون طپید و گفت پاس آشنائها

جناب هدایت پناهی ایشان مولوی و جناب سیادت پناهی جد فقیر ایشان حکیم توره را به استقبال بر آورده، به عزت تمام به پیش خود طلب نمود. چون به<sup>#۶</sup> نزدیک خیمه او سیادت پناهی رسید و<sup>۷</sup> خود امیر عالم خان استقبال نموده، یک دیگر را در کنار کشیدند و گریه آغاز نهادند. امرایی که حاضر بودند، ایشان نیز +<sup>۸</sup> در گریه افتادند. بعده<sup>۹</sup> به خیمه داخل شده، ساعتی طرح مجلس انداختند. بعد به قوش مله دیوان بیگی که حاکم اندجان بود، حکم فرمود و همان شب آن سیادت پناه را به درجه شهادت رسانید.

### بیت

همه باطن خراب و ظاهر آباد      به ظاهر نوحه گر اما به دل شاد

- |   |             |
|---|-------------|
| ۷ | دلی [ت]     |
| ۱ | [د]         |
| ۲ | شنیده [د]   |
| ۳ | بند [د]     |
| ۴ | داشت [ت]    |
| ۵ | × [ت] [د]   |
| ۶ | [د]         |
| ۷ | × [د]       |
| ۸ | همه [ت]     |
| ۹ | بعد [ت] [د] |

بخت و دولت به جانب خوقند مراجعت فرمود. از دریا عبور نموده، به دولتخوانه خود <۳۶۰پ> وارد گردید. چند روز از رنج قتال بر آسود.

القصه. بزرگ خواجه گریخته، {۳۶۹پ} در میان جماعه قرغیز رفت. چند روز در میان ایشان عمر گذرانید. بعد بسیار به تنگ آمد. پسران خود را در تاشکند به پیش یونس خواجه فرستاد. از او مدد خواست. یونس خواجه پسران او را نگاه داشت.

#### بیت

در طلب میکوشم ار یابم زهی عین طلب      ور نیابم سعی من افتد بزرگان را پسند

لا علاج متوجه مقصد گردید. بعد از قطع مراحل دو باره ولایت چست را مسخر نمود. بر مسند امارت بنشست.<sup>۱</sup>

#### ذکر لشکر کشیدن امیر عالم خان دفعه دوم به صوب چست

چون خبر<sup>۲</sup> آمدن بزرگ خواجه به سمع امیر عالم خان رسید. بلا اهمال با لشکر خوقند متوجه چست گشت. بعد از قطع منزل از دریا عبور نموده، به ولایت چست وارد گردید و بزرگ خواجه خواست که<sup>۳</sup> آماده جنگ و قتال گردد. در آن وقت بخت بر گشته بود و اجل گریبان گیر شده بود و<sup>۴</sup> امرا و فقرا روی گردان شده، بزرگ خواجه را دستگیر کرده<sup>۵</sup>، به پیش امیر عالم خان بر آمدند، به حکم آن که

#### بیت

در هر کاری ببايد تدبير ز<sup>۶</sup> نخست      ناید ز دل<sup>۷</sup> شکسته تدبير درست

۷ مانده [ت]

۱ نشست [د]

۲ خبری [ت][د]

۳ × [د]

۴ [د]

۵ نموده [د]

۶ [ت][د]

ظهر و هم به لشکر بزرگ خواجه افتاد و سیادت پناهی<sup>۱</sup> دانست که قضا<sup>۲</sup> کار خود را میکند. لا علاج گفت.

### بیت

ثبات دار نماید جمال کار درست در آب صورت جنبان درست ننماید

یک باره بر سر امیر عالم خان فرو ریخت و هر دو لشکر خونخوار به هم در آمیختند. چنان رستخیز بر پا شد که آواز صور اسرافیل {۳۶۹} نیست و نابود گشت و چنان غبار به فلک پیچیده بود که <۳۶۰ ر> ملکان فلک چشم خود را وا نمیکردند. پدر به پسر نمی پرداخت. برادر از برادر<sup>۳</sup> خبر نداشت و چنان محاربه شد که بیلۀ اجل (۴۰۶) سراسیمه به هر سو میدوید و پیر و جوان را به یک نرخ میفروخت و از خون یلان زمین رزمگاه چون یاقوت رمانی گشت.

### قطعه<sup>۴</sup>

دم نای روین در آمد به اوج      یم حرب گردید از خون به موج  
یلان قرعۀ جنگ انداختند      به مردانگی تیغ کین ساختند

بعد از محاربات بسیار کوکب بخت امیر عالم خان طلوع نمود و ستارۀ بزرگ خواجه در هبوط<sup>۵</sup> افتاد. قرار بر فرار اختیار نموده، به ولایت چست داخل شد و از آن جا با چندین درد و حسرت دل از ملک و مال بر کند. با تنی چند متوجه کوهستان شد و امیر عالم خان با فتح و نصرت ولایت چست را مع توابعاتش مسخر نموده و<sup>۶</sup> از جانب خود حاکم ماند<sup>۷</sup>. به

۷ × [ت] [د]

۱ پناه [د]

۲ قصاص [ت]

۳ دادر [د]

۴ مثنوی [د]

۵ هبوت [ت]

۶ [د]

شده، چهار توغ لشکر (۴۰۵) را به تنبیه او حکم فرمود. چهار سردار از دریا گذشته، نزدیک<sup>۱</sup> چست رسیدند. بزرگ خواجه شنیده، بلا اهمال سواری نموده، متوجه ایشان شد. در موضع خواجه آباد هر دو لشکر به هم در افتادند. بعد از جنگ بسیار بزرگ خواجه غلبه نمود. لشکر خوقندی رو به فرار آورد<sup>۲</sup> و ایشان تعاقب نموده، همه لشکر را مع سرداران دستگیر نمودند و بزرگ خواجه به فتح و نصرت به جانب مقر خود مراجعت فرمود. چون این خبر به امیر عالم خان رسید، انگشت تحیر به دندان گزیده، در غرقاب فکر فرو ماند. لا علاج جناب قبله گاهی را مع شهزاده عالمیان امیر عمر خان به خوقند وا گذاشت.

### ذکر<sup>۳</sup> فتح نمودن امیر عالم خان ممالک توره قورغان و چست را

چون امیر عالم خان با لشکری انبوه متوجه چست شد<sup>۴</sup>.

#### بیت

فتح و نصرت پیش و پس عون الهی راهبر اسب دولت زیر ران چتر ظفر بالای سر

{۳۶۸پ} بعد از طی مسافت از دریا عبور نموده، در موضع غوروم سرا وارد گردید. روز دیگر <۳۵۹پ> از آن جا کوچیده، در موضع مشهد نزول اجلال فرمود و این خبر را بزرگ خواجه شنیده، با لشکر بزرگ امیر عالم خان را استقبال نموده، نزدیک موضع مذکور وارد گردید. همان شب هر دو لشکر کینه خواه به قصد یک دیگر درستی جنگ را میکردند. چون آفتاب خاور از افق نیلگون فلک<sup>۵</sup> در این عالم پر فساد جلوه گر شد و شب تاریک به پایان رسید، دو دریای لشکر به یک دیگر رو به رو شده، صف کشیدند. دلاوران کینه خواه در آن میدان داد مردی را میدادند. از صبح تا وقت پیشین کار بر<sup>۶</sup> همین منوال بود. بعد از<sup>۷</sup>

۱ به نزد [د]

۲ نمود [د]

۳ × [ت]

۴ شدند [ت]

۵ [د]

۶ به [د]



<۳۵۸پ> چرا که سبب دولت او جناب<sup>۱</sup> سیادت پناه شده بود<sup>۲</sup>، نشه<sup>۳</sup> بنگ نماند که موافق آدمیزاده گی کار کند. بعد<sup>۴</sup> مع<sup>۵</sup> دیگر اسیران گرفته، به جانب تاشکند با چندین تجمل متوجه گردید. چون به مقر خود رسید، هفتاد کس از بزرگان خوقند را به قتل رسانید. بعد از سه روز ایشان خان خواجه را به سیس خانه در آورده، آویخته، به درجه شهادت رسانید. ایشان خان خواجه هفتاد سال عمر دیده بود. هژده سال در ولایت توره قورغان و نمنگان و دو نیم سال در ولایت خجند حکومت کرد. در آن وقت مملکت خجند را خالی یافته، بابا دیوان بیگی مع بیک مراد بی بالشرک بسیار از اوراتپه آمده، مسخر نمود، [چنانچه گفته اند].<sup>۶</sup>

### بیت<sup>۸</sup>

آخر دلم به آرزوی خویشان رسید

و آنچه<sup>۹</sup> از خدای خواسته بودم همان رسید

در آن آوان ایشان بزرگ خواجه مولانایی داماد ناربوته بی والنعمی بود، به ولایت چست حکم رانی میکرد. چون دانست که امیر عالم خان {۳۶۸ر} ایشان خان خواجه را به این تدبیر سبب هلاک او گشت، او نیز متوهم گشته، کوس مخالفت نواخت و توابعات <۳۵۹ر> خوقند را تاخت و تاراج [می نمود]<sup>۱۰</sup> و امیر عالم خان از حرکت بزرگ خواجه در غضب

۱ × [د]

۲ بودند [ت]

۳ نشأ [ت] [د]

۴ [د]

۵ × [ت]

۶ × [ت]

۷ × [ت]

۸ × [د]

۹ وانچ [ت]

۱۰ نمود [د]

ولایت تاشکند شد. بعد از قطع مراحل در ولایت {۳۶۷ر} قرمه در چول گاه آهنگران نزول اجلال فرمود و از آن جا شبگیر کرده<sup>۱</sup>، قبل از طلوع آفتاب به<sup>۲</sup> نزدیک ولایت تاشکند رسیده، [قبل از دمیدن صبح]<sup>۳</sup> دست به قتل و تاراج گشادند. چون این خبر وحشت اثر به یونس خواجه رسید و او بلا اجمال <۳۵۸ر> با لشکر بسیار سواری نموده<sup>۴</sup>، استقبال (۴۰۴) نموده، از عقیب ایشان میرفت. در موضع قراسو که نزدیک است به دریای چیلچیق، رسیدند. هر دو دریای لشکر به هم در آویختند. بعد از محاربات بسیار نسیم ظفر از جانب یونس خواجه وزید. لشکر خان خواجه رو به گریز نهاد و سپاه تاشکند تعاقب نموده، پاره ای را به قتل میرسانیدند و بسیاری را اسیر میکردند. اتفاقا در آن گریزه اسب خان خواجه پیش پا خورده، در افتاد. یکی از لشکریان یونس خواجه آن شیر میدان شجاعت را اسیر کرد.

#### قطعه

هر آن که گردش گیتی به کین او برخواست به غیر مصلحتش رهبری کند ایام  
کبوتری که دیگر<sup>۵</sup> آشیان نخواهد دید قضا همی بردش تا به سوی دانه و دام

به خدمت یونس خواجه برد. بعد دانستند، سیادت پناه گرفتار {۳۶۷پ} قید بلا شده است.<sup>۶</sup> یونس خواجه موافق حال<sup>۷</sup> خان خواجه محترم نداشت.

#### بیت

حیف است رنج بردن در حق چون تو یاری کز راه بیوفایی<sup>۸</sup> جز قصد جان نداری

۱ زده [د]

۲ × [د]

۳ × [د]

۴ نمود [ت]، نمود و [د]

۵ دگر [ت] [د]

۶ شده اند [ت]، شده [د]

۷ × [د]

۸ بیوفای [د]

{۳۶۶پ} اتفاقاً آن گنبد به مرور ایام فسرده شده بود، از قضا بر<sup>۱</sup> سر آن نادیده جهان فرو ریخت و چنان خوابانید که تا قیامت بر نخیزد و شیر علی بیک در میان ایشان عمر میگذرانید و این بیت را میخواند که<sup>۲</sup>

### بیت<sup>۳</sup>

<۳۵۷پ> در ناامیدی بسی امید است      پایان شب<sup>۴\*</sup> سیه سفید است

الغرض. و<sup>۵</sup> داود [قلی بیک]<sup>۶</sup> را به جانب بخارا بدرقه کرد و<sup>۷</sup> بعد از چند روز رستم بی آن نادیده جهان را نیز به گلوی نازنینش شربت شهادت ریخت. +<sup>۸</sup> چون عالم خان خاطر خود را از کار<sup>۹</sup> ایشان فارغ ساخت، حکم فرمود که دو سردار با سپاه خود در خجند به خدمت خان خواجه روند، جناب سیادت پناهی امیر لشکر شده، رفته<sup>۱۰</sup>، ولایت تاشکند [را رفته،]<sup>۱۱</sup> تاخت و تاراج نمایند. مدعای او دیگر بود.

ذکر لشکر کشیدن سیادت پناهی خان خواجه به صوب ممالک تاشکند و به درجه شهادت

رسیدن آن سیادت پناهی به دست یونس خواجه

چون لشکریان خوقند به خجند رسیدند، خان خواجه همه لشکر را جمع نموده، متوجه

۱ به [د]

۲ [د]

۳ × [ت]

۴ [ت][د]، شبی [س]

۵ [ت][د]

۶ قل بی [ت][د]

۷ [د]

۸ بیت [د]

۹ [د]

۱۰ × [ت][د]

۱۱ [ت][د]

حاجی بی در قید حیات بود<sup>۱</sup> و داود قلی<sup>۲</sup> بی و بیک بوته بی که ایشان هم <۳۵۷ر> از یک شاخ بودند، در سایه دولت ناربوته بی (۴۰۳) والنعمی روزگار میگذراندند و برادر خود رستم بی به حکومت کان بادام قیام مینمود و دو<sup>۳</sup> دیگر برادران طفل بودند. امیر عالم خان خواست که خاطر خود را از بیم ایشان جمع سازد. دل بر هلاک ایشان نهاد و اما<sup>۴</sup> این رسم خویش کشی در خانان<sup>۵</sup> خوقند از آن زمان باز ماند و حاجی بی و بیک بوته بی را به درجه شهادت رسانید. آری پایه قدر و منزلت انسانی از آن برتر است که منزل آسایش و تمتع او همین است، چنانچه گفته اند<sup>۶</sup>.

بیت<sup>۷</sup>

خط<sup>۸</sup> فنا به بنده<sup>۹</sup> آزاد میدهند حرف بقا به صفحه لیل و نهار نیست

الغرض. و<sup>۱۰</sup> از حاجی بی سه فرزند بود. اول الوغ بیک، دویم شیر علی بیک، سیوم بیک اوغول بیک و او طفل بود. الوغ بیک و شیر علی بیک را در عین پانزده و شانزده سالگی به جانب قیرغیز جلای وطن<sup>۱۱</sup> کرد و الوغ بیک و شیر علی بیک در میان قیرغیز بودند<sup>۱۲</sup>. روزی در آن جا گنبد کهنه ای بود، الوغ بیک در تحت او نشسته، خط مشق میکرد.

۱ بودند [ت]

۲ قل [ت] [د]

۳ [د]

۴ [د]

۵ میران [د]

۶ گفته است [د]

۷ × [د]

۸ خطی [د]

۹ بند [د]

۱۰ × [ت]

۱۱ بدرقه [د]

۱۲ بود [د]

شب و +<sup>۱</sup> روز مردم قلعه را سپاه نصرت اثر به تحت توپ و تفنگ گرفته، چنان به تنگ آوردند که به چشم گشادن فرصت نمیدادند. از قضا در عین گیر و دار تیری<sup>۲</sup> از تفنگ مبارزت پناهی عبد الولی<sup>۳</sup> میرزا آتش خورد <۳۵۶پ> و بر پیشانه<sup>۴</sup> شور<sup>۵</sup> بای بوته شور بخت خورد و از کار باز ماند، [به حکم آن که]<sup>۶</sup>

## بیت

با [ولی نعمت]<sup>۷</sup> ار برون آیی آسمانی که<sup>۸</sup> سر نگون آیی

مردم قلعه این حال را مشاهده نمودند. جان از دست و پای ایشان برآمده، هر کس به حال خود شد. از سستی دشمن سپاه خوقند واقف گشته، سوروں و های هوی را بلند کرده، به قلعه یوروش آوردند. به یک حمله داخل قلعه شدند. دست به قتل و تاراج دراز کردند و بای بوته بد بخت را با دو پسرش بسته، کشان کشان به پیش امیر عالم خان آوردند. امیر عالم خان بلا توقف حکم فرمود. ایشان را در آن جا سر زدند و قلعه زمرد شاه را مسخر نمود. حکومت آن بلده را به قبله گاهی باز تکلیف نمود. جناب شان قبول نفرمود. حاکم<sup>۹</sup> دیگر گذاشت. خود<sup>۱۰</sup> با فتح و نصرت به جانب خوقند مراجعت فرمود. چون به دولتخانه خود وارد گردید، چند روز {۳۶۶ر} به داد و دهش مشغول گشت. در آن وقت عمک گرامی اش

۱ یک [د]

۲ × [ت]، تیر [د]

۳ ولی [ت]

۴ پیشانی [د]

۵ شوری [ت]

۶ [د]

۷ والنعمی [د]

۸ [ت]

۹ به امراء [د]

۱۰ × [ت]

دارد، به قبله گاهی تفویض نمود. چون قبله گاهی از امیر عالم خان رخصت اجازت یافته، متوجه آن صوب گشت<sup>۱</sup>. بعد از یک منزل در آن ولایت رسید. مردم آن جا همه استقبال نموده، به عزت {۳۶۵ر} تمام در شهر در آورده، به جای مناسب فروز آوردند. در آن وقت حکومت آن بلده به بای بوته بهادر قلماق بزرگترین امرای ناربوته بی والنعمی قرار یافته بود و او در قلعه زمرد شاه که حاکم نشین آن جا است، قریب به اسپره یک فرسخ است، می نشست، <۳۵۶ر> (۴۰۲) این خبر را شنید و کورنمکی را پیشه خود ساخته، مخالفت آغاز نهاد، [به حکم آن که]<sup>۲</sup>

بیت<sup>۳</sup>

سینه ای را که تیره گشت ز عدو      اندرو هیچ روشنایی نیست  
بیوفایی مکن که مردم را      هیچ عیبی چو بیوفایی نیست

جناب قبله گاهی دانستند که آن نمک حرام لباس بی آزرمی در بر کرده است. لا علاج به جانب خوقند مراجعت فرموده، در کمال تعجیل به خوقند آمده، صورت واقعه به امیر عالم خان بیان فرمود.

ذکر لشکر کشیدن امیر عالم خان در بالای بای بوته<sup>۴</sup> نمک حرام و فتح شدن آن قلعه به لطف حضرت<sup>۵</sup> ایزد متعالی

القصه. به مجرد شنیدن سخن امیر عالم خان چون شیر غران آتش خشم او زبان زدن گرفت. بلا اهمال با لشکر فرغانه متوجه خصم گردید. بعد از قطع دو منزل آن قلعه را چون نگین انگشترین<sup>۶</sup> در میان گرفته، به محاربه {۳۶۵پ} و به مقاتله مشغول گشت. بعد از یک

۱ گردید [ت][د]

۲ × [د]

۳ رباعی [د]

۴ ناربوته [س][ت][د]

۵ × [د]

۶ انگشتری [د]

سه صاحب دولت مینگ آیم بنت امام قلی<sup>۱</sup> بی دادر<sup>۲</sup> اریس قلی بی ولد دوست قل بهادر و دوست قل بهادر از خواجه های چادک گرفته و سید بودن خود را این جماعه از آن جا اثبات میکنند، سیوم رستم بی، چهارم فاضل بی، پنجم یادگار بی. مادر هر سه میرزاده {۳۶۴پ} از کنیز است. چون ناربوته بی والنعمی از این خاکدان پر غرور دامن هستی را بر چید، وفات ناربوته بی والنعمی و بر تخت نشستن امیر عالم خان را اکمل خوقندی نیکو تاریخ گفته است<sup>۳</sup>، [و آن]<sup>۴</sup> این است.

### تاریخ

درید سینه خصم و برید پای عدو      پسر به جای پدر زیب داد مظهر ملک

<۳۵۵پ> سادات و علما و فقرا<sup>۵</sup> به اتفاق شهزاده عالمیان امیر عالم خان را بر سریر شهریاری و بر مسند جهاننداری به خوبترین ساعات بنشانند<sup>۶</sup>. خاتم شهریاری که [مثل همین عصر که]<sup>۷</sup> دست به دست بقرار میگشت، در انگشت اقتدار خسرو کامکار قرار یافت. به فرمان فرمایی مشغول گشت.

بعد از چند وقت همشیره عینی خود<sup>۸</sup> والده فقیر را در عقد قبله گاهی ام<sup>۹</sup> در آورده، چنان طوی ساخت که از تعریف مستغنی بود و حکومت اسفراین که<sup>۱۰</sup> حالا به اسپره شهرت

۹ بعد از آن [د]

۱ قل [د]

۲ دادری [ت]

۳ × [د]

۴ [ت]

۵ امراء [د]

۶ نشانند [د]

۷ × [ت][د]

۸ او [د]

۹ قبلگاهی [د]

۱۰ × [ت]

۱. در فوت آن شهزاده مولانا اکمل خوقندی تاریخ نیکو گفته [است، تاریخ محمد امین خان این است]<sup>۲</sup>

محمد امین خان جنت مکان      زمانی که بر بست رخت از جهان  
خرد گفت تأریخ آن ذو فنون      ز اقلیم فرغانه شد شه برون

[از او فرزند ذکور نماند.]<sup>۳</sup> ناربوته بی والنعمی سوگ فرزند را چند روز {۳۶۴} داشت و ختم کلام الله میکرد و بر مستحقان صدقات میداد. بعد از یک سال مردم را آش بزرگ داده، خلق را از عزا بر آورد. اما خود غم فرزند میخورد. عاقبت غم فرزند به کسل مهلک منجر شد و از پا در افتاد. هر چند حکما<sup>۴</sup> آن عصر به مداوای او کوشیدند، مفید نه افتاد. از دار دنیا به دار عقبی [او نیز]<sup>۵</sup> با چندین غم و غصه رحلت نمود. چنانچه [میگویند این نظم را.

#### نظم<sup>۶</sup>

دنیا که درو بوی وفا نیست پدید      باید که ز هرچه هست پیوند برید  
<۳۵۵> ر این صورت مرگ را در آینه عقل      از روی خرد همیشه می باید دید

مدت سلطنت او<sup>۷</sup> سی سال بود و مدت حیات او چهل و هشت سال بوده و از ناربوته بی والنعمی پنج فرزند ذکور و پنج از اناث باقی ماند. اول فرزند ارشدش محمد امین خان که مادر او قلمناق بود، دویم امیر عالم خان، بعده<sup>۸</sup> والده فقیر، سیوم<sup>۹</sup> امیر عمر خان، مادر هر

۱ و از او فرزندی از ذکور نماند [د]

۲ تاریخ محمد امین خان [ت]، × [د]

۳ × [د]

۴ حکمای [د]

۵ × [د]

۶ شاعری میگوید، [د]

۷ × [د]

۸ بعد [ت]



افراخت. بعده<sup>۱</sup> بر ضمائر ارباب دقایق و بر بصایر اصحاب حقایق مخفی و مستور نخواهد بود که دار دنیا محل حوادث و ممر نوایب است، چرا که از افق سپهر اعتبار خورشید دولتی طلوع نکرد که آخر به سرحد زوال نرسید و در عرصه حدوث بنای سلطنتی سر به گردون نکشید که از صدمه<sup>{۳۶۳پ}</sup> زلزله فنا از هم نریخت.

[زبدۀ کلام]<sup>۲</sup> آن که آن شاه زاده عالم که در عین شبابی و کامرانی فرمان فرمایی میکرد، به کسل صعب گرفتار گشت. چون قهرمان اجل رسید، از بیخ و بنیاد آن شاهزاده نادیده جهان چنان برکند که آثارش نماند.

[مرثیه این است]<sup>۳</sup>

ای فلک آهسته رو کاری نه آسان کرده ای  
ملک توران را به مرگ شاه ویران کرده ای  
آسمانی را فروز آورده ای از اوج خویش<sup>۴</sup>  
بر زمین افکنده ای با خاک یکسان کرده ای  
آفتابی را که خلق عالمش در سایه بود  
زیر مشّت گل به صد خارش پنهان کرده ای  
<۳۵۴پ> نیست کاری مختصر گر با حقیقت میروی  
قصد خون و [مال و ملک]<sup>۵</sup> هر مسلمان کرده ای

مدت سلطنت او در ملک<sup>۶</sup> فرغانه هشت سال و مدت حیاتش بست و هشت سال بود +

۶	به [د]
۱	بعد [ت] [د]
۲	× [د]
۳	× [د]
۴	ماه [د]
۵	ملک و مال [د]
۶	مملکت [د]

ملایک سحنه سی خورشیدنی حسنیگه سرکش دیب  
 آسیب ایلان توروب تعزیر ایتب گردونغه بند ایتی  
 (۴۰۱ح) یمان کوز تیگماسون دیب حسونگا ای خوبلار شاهی  
 جمالینگ آتشیغه دانه خالینگ سپند ایتی  
 منی قتل<sup>۱</sup> ایتکالی باشیمغه اول بیرحم جلا دیم  
 قاشیدین تیغ تارتیب تار گیسودین کمند ایتی  
 [بت نامهربانیم مست لایعقل چقیب ده کیم  
 باشیمغه سکر ایتیپ خاک تنیم گرد سمند ایتی]<sup>۲</sup>  
 فلک کجرو لیگیدین شکوه گر قیلسم تانگ ایرمس کیم  
 هماغه استخوان تشلاب چین غه طعمه قند ایتی  
 عجب یوق شکوه قیلسم شاهلاردین کیم زمان اهلی  
 که رخ دیک راست دین فرزین کجرونی پسند ایتی  
 {۳۶۴ر.ح.} > ۳۵۴ر.ح. < فلک هر کیمکه اعلا رتبه ایتسه بی سبب ایرمس  
 قویاش نی یرگه کیرمک لیک اوچون بیلگیل بلند ایتی<sup>۳</sup>  
 قیان باقیمو دیب محزون کونگل کوب انتظار اولدی  
 بحمد الله که مرگان ناوکیدین بهره مند ایتی

{۳۶۳ر.ح.} > ۳۵۳پ < چند روزی<sup>۴</sup> بنای نوش و شکار صید و وحوش و طیور و صحبت  
 با سیمین عذاران (۴۰۰) گل اندام و موانست با حورنژادان > ۳۵۴ر < دل آرام به سر برده،  
 خاطر خطیر را از جمع<sup>۵</sup> خیالات بو<sup>۶</sup> پرداخت و لوای بهجت و سرور و عیش و حضور بر

۱ قل [د]

۲ [ت]

۳ × [ت]

۴ روز [ت][د]

۵ جمله [د]

مشعل کش آفتاب انجم	دیوانه کن پری و مردم
از وسوسه چشم دیو بسته	تسبیح فرشتگان گسسته
فرموده گلاله سواری	داده مژده را سلاح داری
سر تا بقدم کرشمه و ناز	هم سرکش حسن و هم سرافراز

طبع موزون روان داشته، چنانچه چند بیت به مولانا فضلی سوال و جواب دارد. یکی از آن جمله این است. [سوال دختر این است.]<sup>۱</sup>

دل محزون به سر انگشت قضا در گره است  
یا رب این غنچه نشکفته کجا بگشاید

[جواب مولانا فضلی این است.]<sup>۲</sup>

ابر تا گریه نسازد نکند خنده چمن      گل سیراب تو از شبنم ما بگشاید

[و این غزل ترکی نیز از زاده طبع اوست]<sup>۳</sup>

ازل دهقانی [قدنیگ نخلینی]<sup>۴</sup> تا سربلند ایتی

محبت رشته سی کونگلوم قوشی بوینیغه بند ایتی

سنگا تقلید قیلیمیش گل که آسیب کوره بوینیغه

تیکان اوستیغه<sup>۵</sup> آنی اوتقوروب گردون ادب ایتی<sup>۶</sup>

۱ × [د]

۲ × [د]

۳ × [د]

۴ نخلنیگ قدینی [ت]

۵ اوستیده [ت]

۶ × [ت]

محبوب<sup>۱</sup> خود [کرد و]<sup>۲</sup> گفت، >آواز چینی به گوشم بسیار خوش آمد. می باید که تو همه را بشکنی، تا ذوق دل خود را بر آن شکستن<sup>۳</sup> چینی یابم.< و آن سیمتن<sup>۴</sup> همچنان کرد. مدعی محمد امین خان این بود که آن آفتاب طلعت از خجالت بر آید. همچنان شد، [چنانچه گفته اند].<sup>۵</sup>

## بیت

همای بر همه مرغان از آن شرف دارد که استخوان خورد و جانور نیازارد

{۳۶۳.ح.} {۴۰۰.ح} در آن عصر دختری بود، مسمی به مستوره بی بی و تخلص او معزّون. از رخ مهر فریش ماه برنج محاق افتاده و شکنج طره بر عارض عقیق رنگش چون بر چشمه جلوه داده، قامت سرو سهی از حسرت بالایش چون پشت بنفشه خم گرفته و ترک چشم نیم مستش متاع صبر از دل هوشمندان ربوده، بسکه حسن گلوسوز داشت، یمن چون سپند بر آتش رخسارش میسوخت و مرغ چمن چون پروانه گرد شمع بر دور رخس میگشت. بساط نبات از شرف پای بوسش خود را بر دیبای مصری عزیز میگرفت و پراهن خاک به علت هم آغوشیش پرند چینی<sup>۶</sup> + خارا می انگاشت. به حکم آن که گفته.

نظم<sup>۷</sup>

سلطان شکر لبان آفاق      شکرشکن شکیب عشاق  
{۳۶۳.ح.} {۳۵۴.ح.}<  
گردن زن عافیت فروشان      تشویش ده صلاح کیشان

۸ دویست [ت] [د]

۱ محبوبه [ت]

۲ آورد [ت] [د]

۳ شکسته [ت]، شکست [د]

۴ سیمبر [ت]

۵ × [ت]

۶ را [ت]

۷ × [د]

[قصه شهزاده محمد امین خان با معشوق خود]<sup>۱</sup>

و دلبری او این بود که [معشوق ای]<sup>۲</sup> داشت، در کمال حسن و رعنائی. در آن عصر بی همتا بود.

+ بیت<sup>۳</sup>

در کاروان دل ز متاع قرار و صبر چیزی به جا نماند کرد تاراج غمزه ات

روزی محمد امین خان جشن برپا کرده بود که هیچ بیننده نه دیده و هیچ شنونده نشنیده بود. در آن مجلس آن پری چهره شراب ناب را در گردش در آورده، عین اوج بزم بود که چرخ واژون از روی حسد نخواست که بزم بحضور دل به اتمام رسد و منصوبه ای انگيخت.

خلص کلام این که <۳۵۳پ> از قضا از دست آن گل پرهن کاسه چینی خطا یافت، بر<sup>۴</sup> زمین خورد. چون دل عاشقان پاره پاره گشت و عرق خجالت از جبین آن گل بدن جاری شد و محمد امین خان از روی فراست<sup>۵</sup> دانست که محبوب او شرمسار گشته، فکری اندیشید.

## مصراع

ذهن<sup>۶</sup> لطیف تو همه فکر نکو کند

در آن وقت از ولایت کاشغر {۳۶۳ر} از هر جنس اقمشه بسیار به هدیه [آمده بود و]<sup>۷</sup> در ضمن او [دو صد]<sup>۸</sup> کاسه چینی نیز موجود بود. محمد امین خان نظر به سوی

۱ × [ت]

۲ معشوقه ای [ت]

۳ فرد [د]

۴ به [ت][د]

۵ فراست [ت]

۶ ذهن [س][ت][د]

۷ آورده بودند [د]

مولانا<sup>۱</sup> نصرت در بدیهه گفت.

مصراع<sup>۲</sup>

سرت گردم طریق دلنوازی یادگیر از شمع

محمد امین خان بسیار خورسند<sup>۳</sup> شد. در آن وقت به گوش او آواز عرابه می آمد. پرسید که >این قدر <۳۵۳ر> عرابه بسیار از کجا است. >گفتند. (۳۹۹) >گندم ولایت فرغانه را امروز فقرا به انبار پادشاهی می آرند، چرا که حاکم نشین فرغانه موضع یار مزار است که یک فرسخ است، به مرغینان<sup>۴</sup>. >بعد مولانا نصرت را حکم فرمود که >هر چه قدر از غله عرابه باقی مانده باشد، به تو بخشیدم. <{۳۶۲پ}> مولانا نصرت<sup>۵</sup> گفت +<sup>۶</sup>.

مصراع

از دوست یک اشارت از ما بسر دویدن

بلا توقف دوید و<sup>۷</sup> باقی را صاحبی کرد. [که پانصد]<sup>۸</sup> عرابه غله مانده بود، [همه را]<sup>۹</sup> مالک شد. از زبان مولانا نصرت فقیر بارها شنیده ام.

- 
- |   |               |
|---|---------------|
| ۱ | مولا [ت]      |
| ۲ | [د]           |
| ۳ | خرسند [ت][د]  |
| ۴ | فرغانه [د]    |
| ۵ | [د]           |
| ۶ | که [ت]        |
| ۷ | [د]           |
| ۸ | پنج صد [ت][د] |
| ۹ | به همه [د]    |

و محمد امین خان را یقین حاصل شد که آن بیچاره گرفتار او بوده است. وظیفه تعیین نمود و خلعت داد و<sup>۱</sup> گفت، <کدام ۳۵۲پ> وقتی که صحبت ما را دلت خواهد، همان ساعت به خدمت ما بی اندیشه بیا، کسی ترا منع نکند. <آن سوخته آتش محبت از آن محبوب {۳۶۲ر} سرکش این سخن را شنید، قریب بود که از خورسندی<sup>۲</sup> جان به حق تسلیم کند.

### مصراع

شاد مرگ ایتمک مرادی بزلاری شاد ایتسه وه

القصة.<sup>۳</sup> آن عاشق پاک از خدمت معشوق<sup>۴</sup> خود مرخص شد. به حجره خود رفته، قرار گرفت. گاه گاه به خدمت محمد امین خان آمده، صحبت داشتی. به وصل معشوق به همین منوال عمر گذرانید.

### بیت

ای گشته دل ز تیغ جفای توام دو نیم      با من دو دل مباش که +<sup>۵</sup> یکدلم هنوز

و همت محمد امین خان این بود که روزی با ندیمان خود نشسته بود، در آن میان مولانا نصرت نیز<sup>۶</sup> بود. روی به او آورد. این مصراع<sup>۷</sup> را خواند و گفت، تضمین<sup>۸</sup> کن.

### مصراع

بگرد شمع قونغوز قونغوز پروانه پروانه

- ۱ × [ت][د]
- ۲ شادی [ت][د]
- ۳ × [ت][د]
- ۴ معشوقه [د]
- ۵ من [ت][د]
- ۶ هم [د]
- ۷ مصرع [س][ت][د]
- ۸ تطمین [ت][د]

(۳۹۸) غم یار است که آتش زده در هستی تو  
تا نمانده است به تو غیر ز غم نام و نشان  
باری آن یار کنون کیست بگو با من راست  
گفتم<sup>۱</sup> آن جا که عیان است چه حاجت به بیان  
شد بسی تند و غضبناک سر افکند به پیش  
ساعتی بود گرفتار لب خود در دندان  
بعد از آن گفت که ای هیچکس بی آزر  
تو که باشی که گشایی به چنین هرزه زبان  
<۳۵۲ر> جای دارد که به پاداش چنین گستاخی  
{۳۶۱پ} کنم از خنجر بیداد ترا قطع زبان  
گفت ای شاه نگفتی که بگو با من راست  
پیش تو چون به خیانت کنم آلوده دهان  
زیر لب خنده زد و گفت عجب عیاری  
گشته شاهان جهان<sup>۲</sup> صید<sup>۳</sup> + توای<sup>۴</sup> چرب زبان  
گفت در پیش زبان تو نشاید دم زد  
ما شنیدیم که عشاق ندارند زبان  
گفت آری اگر احوال نپرسد معشوق  
یار چون طالب حرف است خموشی نتوان  
پیش معشوق سخندان نتوان بود خموش  
پیش گل بلبل بیدل نکند ضبط فغان

۱ گفت [د]

۲ زمان [د]

۳ چو [د]

۴ تو [د]



## بیت

از<sup>۱</sup> آن روزی که در مکتب سبق بنیاد میکردم  
الف میگفتم و<sup>۲</sup> سروقدت را یاد میکردم <

چون چندی از این گذشت، هر روز حال بدین منوال بود. روزی محمد امین خان آن عاشق بیدل را در خلوت خانه خاص خود طلب نمود. گفت، <ای ملا، راست بگو، از سر خون تو در گذشتم. به سرت چه هوا افتاده است.> ملا گفت، <ای شهراده عالمیان، چه میپرسی. به درد بی دوا گرفتارم، مرا رنجه مده، به حالم وا گذار.> بعده<sup>۳</sup> یقین محمد امین خان شد که آن بیدل به یکی جادو<sup>۴</sup> چشمان گرفتار شده<sup>۵</sup> است. این چند نظم +<sup>۶</sup> از بیمار طبیب شریف هندو است که نوشتم، [بر خاند. ]<sup>۷</sup> +<sup>۸</sup>

## نظم

{۳۶۱ر} > ۳۵۱پ < خنده زد گفت کنون درد ترا دانستم  
درد یار است که جز یار ندارد درمان  
راست آری مرض این است که کردم تشخیص  
چون مرض یافته شد هست علاجش آسان  
در سرت کرده هوا اندکی اول تأثیر  
بعد از آن گشته هوا آتش افتاده بجان

- 
- ۱ در [ت] [د]
  - ۲ × [د]
  - ۳ بعد [ت] [د]
  - ۴ از جادو [ت]، آهو [د]
  - ۵ گشته [د]
  - ۶ را [ت]
  - ۷ خواند [ت]
  - ۸ که این است [ت]

شب و روز در بوته هجر میگذاخت و نمیدانست که چه تدبیر کند. هر روز به راه شکارگاه آن شاه زاده<sup>۱</sup> والا مرتبه برآمده، منتظر می نشست، [چنانکه گفت اند]<sup>۲</sup>

## بیت

دانند رفیقان که ره دور و دراز است از کوچه مقصود به بازار تمنا

چون چندی بدین منوال گذشت، روزی محمد امین خان به عادت معهود به سیر صحرا برآمد. چون چشم او بدان شوریده بخت افتاد، توجه خاطر او کارگر شده بود. میخواست که به آن عاشق صادق چیزی گوید، حیا مانع آمد. خاموش گذر کرد. بعد از چند وقت از {۳۶۰پ} نگاه های عاشقانه او آن شهزاده طرار دانست که آن غریب گرفتار و اسیر سروقدي شده است. روزی پرسید که <۳۵۱ر> ای ملا، از کجایی و چه کاره ای. <ملا [این بیت را خواند.]<sup>۳</sup>

## بیت

<خموشی را زبان دادم ادب را بی ابا کردم

به جانان هر چه بادا باد عرض مدعا کردم<sup>۴</sup>>

آن عاشق پاک گفت، <بنده از ولایت کوهستان<sup>۵</sup>، از بهر تحصیل به این دیار [آمده ام]<sup>۶</sup>>. میگفت و گریه میکرد. شهزاده گفت، <کدام کتاب را میخوانی. > ملا گفت، [ای شاه عالم،]<sup>۷</sup>

۱ شهزاده [ت]

۲ × [د]

۳ گفت، <ای شاه عالم، [د]

۴ کرم [ت]

۵ کوهستان [د]

۶ آمدم [د]

۷ × [د]

است. خط تعلیق را نیکو نوشتی. در علم موسیقی عدیل و نظیر نداشت. در شجاعت سر آمد شهزاده های همان عصر بود.

### [قصه عاشق شدن ملای قشلاق<sup>۱</sup> به شهزاده محمد امین خان<sup>۲</sup>]

مروت او این بود که در آن عصر ملایی بود، تاجیک، در غایت قشاقی، غذای او از خون دل بود و شرب او از آب چشم و لباس او دود آه بود. اگر یگان فلوس ماهی ندرتا<sup>۳</sup> به دست او افتادی، قارون را یکی از جمله<sup>۴</sup> [گماشته گان]<sup>۵</sup> خود می پنداشت. در بالای این قدر نیستی. اتفاقا در راه شکارگاه شهزاده محمد امین خان {۳۶۰} گذار آن ملای بی سر و پا افتاد. از قضا باز گشت شکار محمد امین خان بود. چون چشم ملا به آن شهزاده افتادن همان، از پا در افتادن همان. اما غافل از آن که ماهش شاه این کشور است و تاج سرش <۳۵۰پ> صاحب این مرز بوم است، [به حکم آن که]<sup>۶</sup>

### مصراع

عشق با تاجیک سرگشته ای حیران دادند

چون مرغ دل آن بیچاره صید آن شهباز بلند پرواز گشت، عنان اختیار از دست (۳۹۷) داد. دیوانه بود، دیوانه تر گشت. مجنون بود، مجنون تر گشت.

### بیت

ای که در کوچه معشوقه ما میگذری      با خبر باش که سر میشکند دیوارش

۱۴ نشینده [ت][د]

۱ قشاق [د]

۲ × [ت]

۳ ندره [س][ت][د]

۴ [ت][د]

۵ گماشته های [د]

۶ [ت][د]

شد. لا علاج ننگ و ناموس خود را به ناربوته بی والنعمی<sup>۱</sup> انداخت و والنعمی سخن او را قبول نمود، به شرط آن که خجند را به او خالی کرده بدهد و بابا دیوان بیگی نیز<sup>۲</sup> قبول نموده،<sup>۳</sup> خجند را به والنعمی تفویض نمود.

#### ذکر مصالحه نمودن ناربوته بی والنعمی با شاه مراد بی والنعمی<sup>۴</sup>

و<sup>۵</sup> چون والنعمی به خجند آمده، جد فقیر جناب سیادت پناهی ایشان حکیم توره را بر سبیل رسالت به پیش شاه مراد بی فرستاده، تکلیف مراجعت به<sup>۶</sup> بخارا نمودند<sup>۷</sup> و جناب سیادت پناهی {۳۵۹پ} به پیش شاه مراد بی رسید<sup>۸</sup>. [قدم شان]<sup>۹</sup> را مبارک دانسته، بسیار گرمی داشت و سخن ایشان را قبول فرموده، مصالحه نموده، به جانب بخارا مراجعت فرمود و ناربوته بی والنعمی حکومت خجند را به ایشان خان خواجه تفویض نموده<sup>۱۰</sup>، خود به جانب خوقند مراجعت فرمود. بعد از قطع منزل به دولتخانه خود وارد گردید. در آن وقت حکومت مرغینان را به فرزند ارشدش <۳۵۰ر> محمد امین خان تفویض نمود و حکومت توره قورغان را به فرزند دیگرش<sup>۱۱</sup> امیر عالم خان تفویض نمود. محمد امین خان شهزاده ای بود که در حسن سیرت و بر<sup>۱۲</sup> خلق همت با مروت در هیچ عصر کسی ندیده<sup>۱۳</sup> و نشنوده<sup>۱۴</sup>

۱ × [ت]

۲ × [د]

۳ ولایت [ت]

۴ × [د]

۵ [ت][د]

۶ × [د]

۷ نمود [د]

۸ رسیدند [ت]

۹ قدمی شان [ت]

۱۰ نمود [د]

۱۱ ارجمندش [د]

۱۲ × [ت]

۱۳ است [ت][د]

دانستند که < ۳۴۹ ر > به هر دو لشکر وهم افتاد. با چندین حسرت آن دو صاحب دولت یک دیگر را ندیده، به جانب دولتخوانه خود مراجعت فرمودند. بعد از رسیدن به مقصد به بزم و<sup>۱</sup> طرب مشغول شدند. در آن وقت بود که امیر عمر خان از کتم عدم به وجود آمد +<sup>۲</sup>. ناربوته بی والنعمی را صبح امید از مطلع مراد تبسم آغاز نهاد و بلبل طرب بر گلشن شادی در ترنم آمد، [به حکم آن که]<sup>۳</sup>

### بیت

از محیط فضل زیبا گوهری آمد پدید      بر سپهر شرع روشن اختری آمد پدید

تأریخ ولادت امیر عمر خان را اکمل خوقندی نیکو گفته است، { ۳۵۹ ر } الحق دری سفته است، این است.

### تاریخ<sup>۴</sup>\*

صد شکر با شهنشه دارای حق سلوک      دادش خدا یگانه ولی عهد جم سکوک  
سلطان عـقل از پی والا ولادتش      گفتا که شاه زاده عمر زبده ملوک

چون چندی بر این بگذشت<sup>۵</sup>، خبر وفات خدایار بی والنعمی در تمام ممالک ما وراء النهر شیوع یافت، شاه مراد بی والنعمی این خبر را شنیده، بلا توقف متوجه اورا تپه شد. بعد از طی < ۳۴۹ پ > مسافت نزدیک آن ولایت رسید. (۳۹۶) آمدن او را بابا دیوان بیگی که دادری<sup>۶</sup> خدایار بی والنعمی بود، به جای او در امارت [می نشست]<sup>۷</sup>، شنیده<sup>۸</sup>، بسیار متوهم

۱ [ت]

۲ در سنه ۱۲۰۰ هزار دو [د]

۳ × [ت] [د]

۴ [ت]، تاریخ این است [س]، × [د]

۵ گذشت [ت]

۶ برادر [ت]

۷ نشسته بود [د]

۸ شنید و [د]

و والنعمی از سرگناه برادر گذشت و ولایت اندجان را مسخر نموده، به ملکه دیوان بیگی تفویض نمود. خود به فتح و نصرت به جانب خوقند مراجعت فرمود. چون به منزلگاه خود رسید، به عیش و عشرت (۳۹۵) مشغول گشت. در آن آوان بود که ناربوته بی والنعمی و خدایار بی والنعمی خواستند که یک دیگر را روی دیده، عهد جدید نمایند. <۳۴۸پ> ایلچیان سخندان در میان رفت و آمد کرده، سخن را بر آن قرار دادند.

ذکر ناربوته بی والنعمی و خدایار بی والنعمی یک دیگر را به امید دیدن آمده و نا امید بر گشتن<sup>۱</sup>

القصه. هر دو صاحب دولت با لشکر بسیار متوجه دیدن یک دیگر شدند. بعد از طی مسافت ناربوته بی والنعمی در موضع قرقچی قوم نزول اجلال فرمود و خدایار بی والنعمی در موضع شوم قورغان وارد گردید. سه روز در آن مکان ساکن بودند. روز چهارم خواستند که هر دو صاحب دولت {۳۵۸پ} یک دیگر را دیده، در کنار کشند و غم و شاد چندین ساله را گویند. فلک حقه باز منصوبه ای انگیخت و نخواست که ایشان به مراد خود رسند، چنانچه میگوید.

### بیت

فرشته ای که وکیل است بر خزانه باد

چه غم خورد که نه بینند<sup>۲</sup> دو یار یک دگری<sup>۳</sup>

زبده کلام آن که همان روز چنان باد<sup>۴</sup> سخت برخواست که باد ثوموم<sup>۵</sup> عاد در پیش او گویا نسیم سحری باشد. مشت مشت خاک بر چشمان ایشان میزد. یک دیگر را نمیدیدند. لا علاج هر دو والنعمی به لشکرگاه خود باز گشتند، تا سه روز کار بدین منوال بود. عاقبت

۱ ایشان [د]

۲ بیند [ت]

۳ دیگری [ت]

۴ بادی [ت]

۵ ثمود [ت]

ایشان تا به موضع بیش آریق تاخت نموده، باز گشت نمودند<sup>۱</sup> و خدایار بی در کمال بیم و هراس مراجعت نمود<sup>۲</sup> و حاجی بی از آن جا به بخارا به پیش شاه مراد بی والنعمی رفت و او<sup>۳\*</sup> بسیار مهربانها نمود<sup>۴\*</sup>. بعد از چند روز از آن جا رخصت اجازت یافته، به راه فلغر و مسپاه<sup>۵</sup> و قراتگین متوجه اندجان شد. <۳۴۸ر> بعد از محنت و مشقت بسیار به مقصد رسید و آن ولایت را در تحت تصرف خود آورد و بحکم رانی مشغول گشت.

### ذکر مسخر نمودن [ولایت اندجان را ناربوته بی والنعمی]<sup>۶</sup>

+<sup>۷</sup> [چون ناربوته بی والنعمی این خبر را]<sup>۸</sup> شنیده، بالشکر انبوه متوجه اندجان شد. بعد از طی مسافت به مقصد رسید. و<sup>۹</sup> آن ولایت را چون خط پرگار در میان گرفت. به محاصره مشغول شد. بعد از دو روز در میان ایشان چنان جنگ واقع شد که هیچ بیننده مثل آن ندیده بود. بعد از محاربات {۳۵۸ر} بسیار نسیم ظفر از جانب ناربوته بی وزید. به یک حمله سپاهیان خوقندی به شهر داخل گردیدند و حاجی بی را دستگیر نموده، به خدمت ناربوته بی آوردند، [چنانچه گفته اند].<sup>۱۰</sup>

چون تیر قضا ز شصت<sup>۱۱</sup> تقدیر بجست هر گز نکند رد سپر تدبیرش

۱ نمود [ت]

۲ فرمود [د]

۳ [ت][د]، از [س]

۴ [ت][د]، دید [س]

۵ مسپا [ت][د]

۶ ناربوته بی والنعمی ولایت اندجان را [د]

۷ و [ت]

۸ این خبر را ناربوته بی والنعمی [د]

۹ × [د]

۱۰ × [ت]، چنانچه گفته است [د]

۱۱ شست [ت]

را مبارک دانسته، به مهربانی پرداخت. در آن آوان مادرشان عفت پناهی کینگس آیم دنیا را وداع کرده بود و سیادت پناهی خان خواجه در پس پرده عصمت دختری داشت،<sup>۱</sup> و آن مستوره را سیادت پناهی حکیم توره در عقد نکاح خود در آورد. چنان جشنی<sup>۲</sup> بر پا کردند که در آن عصر کسی ندیده و نشنیده بود.

### [بیت]

با چند هزار دیده فلک در هزار قرن      مجلس بدان تکلف و خوبی ندیده بود<sup>۳</sup>

از آن دو صاحب دولت بعد از انقضای مدت حمل در ساعت نیک فرزندی در وجود (۳۹۴) آمد. نام جناب شان را معصوم خان نهادند. الغرض<sup>۴</sup> در آن آوان که بهادر فرمان از خانان چنگیز بود، در ولایت تاشکند فرمان فرمایی میکرد. چون از دار فنا به دار بقا رحلت نمود، حکومت ولایت تاشکند به دست خواجه ها افتاد و<sup>۵</sup> هر کدام به تور خود کوس امارت میزدند. بعد از محاربات بسیار به مدد <۳۴۷پ> خان خواجه به سیادت پناهی یونس خواجه قرار گرفت و آن سیادت پناه تمام دشت قیچاق را فرو گرفت و به داد و دهش مشغول شد.

الغرض. در آن وقت که حاجی بی {۳۵۷پ} از توره قورغان فرار اختیار نمود، با چندین محنت و مشقت به ولایت تاشکند وارد گردید. چون از آمدن او یونس خواجه وقوف یافت، استقبال نموده، به جای مناسب فروز آورد. حاجی بی چند روزی از رنج راه بر آسود و از آن جا به اوراتپه آمد و خدایار بی والنعمی<sup>۶</sup> نیز او را محترم داشت. به اتفاق یک دیگر لشکر به جانب خوقند کشیدند. بعد از طی مسافت در موضع کان بادام وارد گردیدند<sup>۷</sup> و لشکریان

۱ نار آیم نام (با خط بطلان) [ت] [د]

۲ جشن [د]

۳ × [ت] [د]

۴ × [ت]، قصه کوتاه [د]

۵ × [ت] [د]

۶ × [ت]

۷ گردید [ت]



## مثنوی

{۳۵۶پ} یکی خصم او حاجی بیک دژم      که میکرد طغیان به او دم به دم  
چنانش فکند از فلک بر زمین      که خلق جهان گفت صد آفرین  
از این وجه شد صاحب آبرو      که گردید اعداش مغلوب او  
ز نیروی اقبال آن شهریار      بگردید آباد شهر {و} دیار

الغرض. در آن آوان که سیادت پناهی خان خواجه و جناب حکیم توره در دهبید به خدمت ایشان موسی خان خواجه روزگار میگذرانند. چون خبر وفات [ایریس قلی بیک]<sup>۱</sup> را خان خواجه شنیده، بلا توقف متوجه خوقند شده، به خدمت ناربوته بی والنعمی رسید. والنعمی مملکت<sup>۲</sup> نمندگان و توره قورغان را به او تفویض نمود. در آن وقت جناب سیادت پناهی ایشان آرتوق خواجه قبله گاهی حکیم توره، روح الله روحه، ایشان از دار فنا<sup>۳</sup> به دار بقا<sup>۴</sup> رحلت نمود و<sup>۵</sup> ایشان نیز از جناب هدایت پناهی ایشان موسی خان خواجه رخصت اجازت یافته، متوجه ولایت خجند شد. چون به خدمت قبله گاهی<sup>۶</sup> جناب سیادت پناهی ایشان آرتوق خواجه رسید، چند روز به خدمت قبله گاهشان بود<sup>۷</sup>. بعد از چندین<sup>۸</sup> <۳۴۷ر> روز از جناب قبله گاهی<sup>۹</sup> {۳۵۷ر} رخصت اجازت یافته، متوجه خوقند شد. ناربوته بی والنعمی چون از [آمدن ایشان]<sup>۱۰</sup> وقوف یافته، با امرای خود استقبال نمود و [قدم ایشان]<sup>۱۱</sup>

۱ ایریس قلی [ت]، ایریس قل بی [د]

۲ ممالک [ت]

۳ الفنا [د]

۴ البقا [د]

۵ [د]

۶ قبلگاهشان [د]

۷ بودند [د]

۸ چند [ت]

۹ قبلگاهشان [د]

۱۰ آمدن شان [د]

۱۱ قدم شان [د]

همان زخم هلاک شد. بعد از حدوث این قضیه اوراتپه و خجند فتح گردید. والنعمی<sup>۱</sup> در مسند امارت آن مملکت فارغ البال نشست. در آن وقت شهرخ بی برادر ناربوته بی والنعمی در کسل فراموش کاری مبتلا شد. بعد از چند روز {۳۵۶ر} دنیای فانی را وداع فرمود. رو به سوی عقبی آورد، (۳۹۳) [چنانچه گفته اند].<sup>۲</sup>

بیت<sup>۳</sup>

به زور و زر شاید رد احکام قضا کردن      نمیزید کسی را در قضا چون و چرا کردن

به جای او حکومت توره قورغان را به برادر کوچکش حاجی بی تفویض نمود. چون حاجی بی بر سریر امارت نشست، بعد از چندین وقت به والنعمی مخالفت آغاز نهاد.

ذکر<sup>۴</sup> لشکر کشیدن ناربوته بی والنعمی به جانب توره قورغان و مسخر نمودن آن ممالک را و<sup>۵</sup> چون این خبر را والنعمی شنید، بلا اهمال با لشکر بسیار متوجه توره قورغان شد. بعد از دو منزل از دریا عبور نموده، به مقصد رسید و توره قورغان را چون نگین انگشتری<sup>۶</sup> در میان گرفته، به محاصره مشغول شد و حاجی بی تاب مقاومت نداشت. لا علاج <۳۴۶پ> توره قورغان را خالی گذاشته، با چند محرم خود قرار بر فرار اختیار نموده، به راه کاسان رو به تاشکند آورد. والنعمی ولایت را مسخر نموده، به جانب خوقند مراجعت فرمود. چون به مقصد رسید، از رنج راه بر آسود. [چنانچه مولانا]<sup>۷</sup> فضلی میفرماید.

۱ [د]

۲ × [ت]

۳ × [ت] [د]

۴ × [ت]

۵ [د]

۶ انگشترین [ت]

۷ چنانکه مولانا [ت]

بیت<sup>۱</sup>

مدعی را کی رسد با چون منی لاف جدال  
کی تواند پشه با پیل دمان پهلوزند

{۳۵۵پ} ایشان را تعاقب کرده، میرفتند. به جایی<sup>۲</sup> رسیدند که خصم در کمین گاه  
منتظر وقت مینشست. ایشان را [در پیش]<sup>۳</sup> گذرانده، راهشان را گرفتند<sup>۴</sup>. و بر سر اریس  
قلی بی تاخت آورد<sup>۵</sup>. چون چشم اریس قلی بی به لشکر خدایار بی افتاد، انگشت حیرت به  
دندان گزید و در بحر تحیر فرو رفت. دانست که فلک این منصوبه را از جای دیگر باخته  
است. لا علاج یک درجه محاربه<sup>۶</sup> سخت بر پا کرد. بعده تاب مقاومت نه آورد<sup>۷</sup>. روی به  
هزیمت نهاد<sup>۸</sup>. [چنانچه گفته اند].<sup>۹</sup>

## بیت

کارش به جدل چو بر نیاید خوش خوش در حیلہ بر گشاید

در قلعه ای که موسوم<sup>۱۰</sup> به نمنگان که + <۳۴۶ر> از توابع استروشن است، در آمده،  
سه روز محصور گشتند و از تشنگی بسیار تنگ شدند. عاقبت الامر قلعه را خدایار بی  
والنعمی<sup>۱۱</sup> به تصرف در آورد و اریس قلی بی را نیز تیر رسیده بود که پس از سه روز به

- 
- |    |                         |
|----|-------------------------|
| ۱  | × [د]                   |
| ۲  | جای [ت] [د]             |
| ۳  | × [ت]                   |
| ۴  | گرفت [ت]                |
| ۵  | آوردند [د]              |
| ۶  | آورده [ت] [د]           |
| ۷  | نهاد [د]                |
| ۸  | × [ت]، به حکم آن که [د] |
| ۹  | موصوم [ت]               |
| ۱۰ | بود [س]                 |
| ۱۱ | [ت]                     |

استقبال نموده، به جای مناسب فروز آورد. به مهمانداری پرداخت. بعد از چندین روز خدایار بی والنعمی {۳۵۵} از بیک نظر بی مدد خواست و او فرزند ارشدش<sup>۱</sup> نیاز علی دیوان بیگی (۳۹۲) را با پانصد<sup>۲</sup> سپاهی<sup>۳</sup> جرّار همراه کرد و از آن جا به اورگوت آمد. یولداش بی نیز با چندی از مبارزان خود همراه شد<sup>۴</sup>. از اطراف و جوانب نیز طلب کار جمع شده، با لشکر انبوه متوجه جیزخ شدند. بعد از قطع راه به ولایت جیزخ رسیدند. قوشون را در<sup>۵</sup> بیرون گذاشته، خدایار بی و نیاز علی بی و یولداش بی به پیش فاضل بی والنعمی در آمده، صورت واقعه را بیان فرمودند و<sup>۶</sup> او نیز سپاه جیزخ را همراه کرده، به ایشان فاتحه داد و آن امارت پناهان از پیش فاضل بی والنعمی <۳۴۵> پخصت اجازت یافته، متوجه اوراتپه شدند.

### مصراع

روان گشتند میران وفاکیش

+ همان شب ایلغار نموده، به دامنه کوه ضامین کمین کردند و یک علم سپاه را حکم کردند که رفته، نزدیک اوراتپه را تاخته، به راه راست به جانب جیزخ مراجعت فرمایند و آن لشکریان همچنان کردند. چون خبر به اریس قلی بی رسید، بی تأمل دشمن را حقیر شمرده، این بیت را خوانده<sup>۷</sup>، سواری نمود.

۱ رشیدش [ت][د]

۲ پنج صد [ت]

۳ [ت]، سپاه [س]، کس [د]

۴ شده [ت][د]

۵ [د]

۶ [ت][د]

۷ ایریس قلی بی برون آمد. در پیش [ت]

۸ خواند [ت]

فاضل بی شنید، به این بیت رطب اللسان گردید.

### بیت<sup>۱</sup>

نوید آمدنت میدهند هر روزم      تو فارغ و من از اشتیاق میسوزم

بلا اهمال فرزندان را مع بزرگان خود<sup>۲</sup> امر فرمود. ایشان {۳۵۴پ} والنعمی را استقبال نموده، به عزت تمام به خدمت پدر آوردند. چون چشم پدر به پسر افتاد، از هوش برفت. بعد از ساعتی به هوش آمد. یک دیگر را در کنار گرفته، زار زار چون ابر نو بهار گریه میکردند و شکرانه واجب تعالی را به جای می آوردند. چند روز از رنج راه بر آسود. بعده<sup>۳</sup> از پدر بزرگوار رخصت گرفته، متوجه ثمرقند شد. در آن وقت ولایت ثمرقند در غایت خرابی بود<sup>۴</sup>. غیر از بوم و شوم و چغره هیچ ذی روحی نبود<sup>۵</sup>. خدایار بی والنعمی به نزدیک ثمرقند یسی تپه نام موضعی است، آن جا سکونت اختیار نموده، سه سال به دهقانی پرداخت، به حکم آن که

### بیت

کیمیا خواهی زراعت کن چه خوش گفت آنکه گفت  
<۳۴۵ر> زرع را ثلثان زر است و ثلث دیگر هم زر است

### ذکر مسخر نمودن خدایار بی والنعمی ولایت اوراتپه را

چون چندی بر این بگذشت، باز بر<sup>۶</sup> سرش هوای حکومت افتاد. [گفته اند که دل عادت کرده بلا]<sup>۷</sup>، متوجه شهر سبز شد. چون از آمدن او بیک نظر بی والنعمی وقوف یافته،

۱ × [ت]

۲ خویش [ت]

۳ بعد [ت][د]

۴ بوده [د]

۵ نبوده [ت][د]

۶ به [د]

۷ دل عادت کرده بلا، گفته اند [د]

در موضع قلعه خواص افتاد. والنعمی یکی را امر نمود، + <sup>۱</sup> <چیزی خوردنی بیار. > و آن کس حیران بود که در این نیم شبی به کجا رود. اتفاقاً در آن جا <۳۴۴ر> خانه ای بود. آن کس در بالاخانه برآمد. دید که سه تقاره شیر ملبب ایستاده <sup>۲</sup> است و این مژده را آن کس به والنعمی رسانید. والنعمی از جای برجست. به بالای بام برآمد. هر سه تقاره شیر را {۳۵۴ر} به سه دم بر <sup>۳</sup> کشید و از بام به زیر آمد و میخواست که قدری (۳۹۱) در آن جا از رنج راه بر آسایند. دانستند که آن قلعه را نیز لشکریان خوقندی آمده، متصرف شده اند. لاجول گویان به چندین بیم و هراس متوجه جیزخ شدند <sup>۴</sup>. در آن دشت بی پایان لب تشنه و شکم گرسنه لُج و عریان به چندین خاری راه طی میکردند <sup>۵</sup>. بعد از سه شب و روز به نزدیک جیزخ آمدند <sup>۶</sup>، والنعمی از پا در افتاد، [به حکم آن که] <sup>۷</sup>

## بیت

هر کس به قدر خویش گرفتار محنت است

کس را نداده اند برات مـــــــسلمی

در آن وقت فاضل بی والنعمی نمیدانست که <sup>۸</sup> احوال فرزند ارجمندش به چه منوال گذشت. در آن وقت یکی از رفیقان خدایار <sup>۹</sup> والنعمی به تعجیل تمام به خدمت فاضل بی والنعمی آمد. نوید داد که <فرزند ارجمندت سلامت > <sup>۱۰</sup> ۳۴۴پ رسید. <چون این خبر را

۱ که [ت]

۲ × [ت]

۳ استاده [ت]

۴ سر [ت]

۵ شد [ت]

۶ میکرد [ت]

۷ آمد [ت]، آمده [د]

۸ × [د]

۹ × [د]

۱۰ × [د]

## [مصراع]

کجا روی که ز هر سو گریز گاه نداری<sup>۱</sup>

و<sup>۲</sup> گفت، > شما را شناختم، اما مروت می نمایم، به شرط آن که فراموش نکنید. < حاصل پیاده میدوید که یکی از غلامانش که اوروس بود و آن هم در این قضیه فرار نموده بود، با والنعمی رسید. دید که [پایهای مولایش بسیار]<sup>۳</sup> آبله کرده است. گفت، > یا مولا مرا سوار شوید. < زیرا<sup>۴</sup> که والنعمی مردی به غایت ملحم بود، غلام چند قدمی که میرفت، میغلطید، تا دید که یکی از رعایای او بر خری نیچه بار کرده، می آید. چون والنعمی را بدین حال دید، > {۳۴۳پ} در گریه شد و بار خر را بر زمین انداخته، گفت، {۳۵۳پ} > بر این خر سوار شوید. < و آن خر هم به غایت لاغر و ضعیف بود. به هر صورت گاه بر غلام و گاه بر خر سواره میرفت و گاه پیاده، تا این که باز سه چهار<sup>۵</sup> نفر دیگر از لشکر<sup>۶</sup> او که روی بر گریز نهاده بودند، [رسیدند و]<sup>۷</sup> همراه گشتند. باز از دریا عبور نموده<sup>۸</sup>، متوجه اوراتپه گشت. قدری راه رفته بود<sup>۹</sup> که یکی از گریزه ها در رسید و از او احوال پرسید. او گفت، > خوقندی اوراتپه را نیز مسخر نمود. < چون این خبر وحشت اثر را خدایار بی والنعمی شنید، دود از نهادش بر آمد. با چندین درد و حسرت عنان عزیمت به صوب جیزخ تافت.

در آن وقت سه روز شده بود که والنعمی چیزی نخورده بود. آتش جوع [بر طبیعتش چنان]<sup>۱۰</sup> مستولی گشته بود که قوت رفتار نداشت. اتفاقا نیم از شب گذشته بود که گذارشان

۱ × [ت][د]

۲ [د]

۳ بسیار پایهای مولایش [ت][د]

۴ چون [ت][د]

۵ چار [ت]

۶ × [د]

۷ نمود و [د]

۸ بودند [ت]

۹ چنان بر طبیعتش [ت]

کنده، رو به خوقند آورد و خدایار بی والنعمی عروس ملک خجند را به این تدبیر در تحت تصرف خود در آورد. به حکم آن که

### بیت<sup>۱</sup>

همه روی و رنگ است و مکر و فریب      نه صدق و مروت و نه صبر و شکیب

### ذکر فتح نمودن ناربوته بی والنعمی ولایت خجند را

چون چندی بر این بگذشت، بعده<sup>۲</sup> ناربوته بی والنعمی با لشکر فرغانه به کمال تعجیل متوجه خجند شده، قبل از دمیدن صبح خود را به مقصد رسانید. به یک حمله داخل شهر شد<sup>۳</sup>. چون گیر و دار لشکریان خوقند بلند شد، خدایار بی والنعمی از خواب غفلت سر برداشت. دانست که فلک کج رفتار چه شعبده بر پا کرده است. سپندوار بر جست. متوجه خصم گردید. در میان شهر چنان جنگی <۳۴۳ر> کرد که {۳۵۳ر} داد مردی را داد. گویند، همان روز از دروازه شهر تا لب دریا هفت کس را خلانید. (۳۹۰) عاقبت دید که کار به جای نمیرسد. لا علاج خود را با اسب و اسلحه<sup>۴</sup> به دریا انداخت. چون قدری از دریا قطع کرده بود که اسب از دستش جدا افتاد و در آن موضع اتفاقاً آب تا زانو میرسید. بعد از آن اسلحه و زرهی که داشت، از بر کشید<sup>۵</sup> و شنا کرده، در<sup>۶</sup> لب دریا بیرون<sup>۷</sup> شد. به آن حال میرفت که یکی از لشکریه خوقندی به او دوچار آمده، شناخت، لیکن بر والنعمی مزاحم نگردید.

۱ × [ت] [د]

۲ بعد [ت] [د]

۳ شدند [ت]

۴ اصلحه [ت] [د]

۵ [ت] [د]، کشیده [س]

۶ بر [ت]، به [د]

۷ [د]، برون [س] [ت]



بخارا شده بود، در بازگشت به طریق حیلۀ بسیار اظهار عجز و انکسار و توهّم مینمود، تا حاجی بی در غفلت ماند و در کارها مساهله ورزد. چه {و} آنچه احتیاط در سپاهی گریست، به آن نپردازد. بنابر این بعد از تاختن خدایار بی سهل پنداشته، به احتیاط تمام از خجند بیرون نشده بود، تا خجند را به این حیلۀ و تدبیر گرفت. ندانست که<sup>۱</sup> به زیر هر دانه دامی نهاده اند. [به حکم آن که گفته اند.]<sup>۲</sup>

### بیت

به شمشیری توان جانی گرفتن      به فکری شاید اقلیمی گشودن

تفصیلش این<sup>۳</sup> که<sup>۴</sup> سپاه حاجی بیک<sup>۵</sup> به نزدیک لشکریان خدایار بی رسید و<sup>۶</sup> خدایار بی والنعمی احوال خصم را بدین بی پروایی دید، دانست که تدبیرش موافق تقدیر آمده، یک باره از میان<sup>۷</sup> کمین گاهش برآمده، رو به ایشان آورد. حاجی بی دید که فلک چه منصوبه بر پا کرد، < ۳۴۲ پ > قرار بر فرار اختیار نمود. لشکریان یوز تعاقب نمودند، همراه سپاه خجند به شهر درآمدند. بسیاری را دستگیر { ۳۵۲ پ } نمودند و چندی را به قتل رسانیدند، چنانچه مولانا حاذق میگوید.

### بیت

ایمن<sup>۸</sup> مباحث از ستم خصم ناتوان      فرزین کند طریق عداوت پیاده را

چون حاجی بی این حال را مشاهده نمود، با چندین درد و حسرت دل از ملک و مال بر

۱ × [د]

۲ به حکم آن که [ت]، × [د]

۳ آن [د]

۴ چون [ت]

۵ بی [د]

۶ [د]

۷ × [د]

۸ ایمن [ت][د]

آری خس سبک سیر را چه یارا که سر سیل بی نهایت<sup>۱</sup> شود و خیل کبوتر را چه توانایی که هم پنجه شاهین و شهباز گردد. بالاخر عبد الرحمان بهادر دید که کار از دست رفت، از تخته روان به زیر آمده و اسلحه<sup>۲</sup> خود را در بر کرد و خود را به بالای اسب گرفته، میخواست که سمند باد پیما را در جولان در آرد. از بسکه دو پای او به مرض فلج بیکار شده بود، از رکاب بر آمد. واژگون به خاک مذلت یکسان شد. چون سپاه او میر خود را بدین حال {۳۵۱پ} مشاهده نمودند، بلا اهمال راه گریز پیش {۳۴۱پ} نهادند و لشکریان خوقندی احوال عبد الرحمن بهادر را بدین منوال بدیدند، یکی از اسب فروز آمده، سر آن بهادر را از تن جدا کرد و<sup>۳</sup> به خاک و خون آغشته و گذاشت، [به حکم آن که]<sup>۴</sup>

### بیت

هر که پوشد دیده اخلاص از حق نمک چشم امیدش ز میل یأس نابینا شود

چون ناربوته بی والنعمی این فتح بزرگ را از جمله عطاهای غیبی<sup>۵</sup> شمرده، به فتح و فیروز متوجه خوقند شد. بعد از عبور دریا به مقصد رسید.

الغرض. ناربوته بی والنعمی از مادر جدا دو برادر داشت، یکی شهرخ بی و یکی حاجی بی. حکومت توره قورغان را به شهرخ بی تفویض نمود و حکومت خجند را به حاجی بی. چون چندی از این بگذشت، در آن وقت در اوراتپه فاضل بی و خدایار بی والنعمی بودند. روزی خدایار بی والنعمی تدبیر اندیشید. با لشکر بسیار متوجه خجند شد. نزدیک به مقصد رسید و چندی لشکریان خود را امر فرمود که تاخت کرده، به راه راست به جانب اوراتپه مراجعت فرمایند و خود با سپاه بسیار در کنار کوه کمین کرد و چون این خبر را حاجی بی {۳۵۲ر} شنید، {۳۴۲ر} بی تأمل با لشکر (۳۸۹) خود از شهر بیرون شده، ایشان را تعاقب نمود و تدبیرش چنان بود که قبل از این نزد محمد امین خواجه خوقندی که ایلچی

۱ زینهار [ت]

۲ اصلحه [س][ت][د]

۳ × [ت]

۴ [د]، به حکم [ت]

۵ غیب [د]

القصه<sup>۱</sup>. به اتفاق او به آن حال به تخته روان نشسته، با لشکر خجند متوجه توره قورغان شد و کور نمکی را اختیار نمود.

### بیت

با ولی نعمت ار برون آیی      گر<sup>۲</sup> سپهری تو سر نگون آیی

### ذکر<sup>۳</sup> لشکر کشیدن ناربوته بی والنعمی بر سر عبد الرحمان بهادر

چون این خبر را ناربوته بی<sup>۴</sup> والنعمی شنید<sup>۵</sup>، با سپاه بسیار از دریا {۳۵۱} گذشته، در موضع دشت اش پیش آن [بخت برگشته]<sup>۶</sup> +<sup>۷</sup> را گرفت. چون عبد الرحمن بهادر از آمدن (۳۸۸) سپاه خوفندی وقوف یافت، لا علاج دل به محاربه نهاد و لشکر خود را به جنگ امر <۳۴۱>ر کرد. دو لشکر به<sup>۸</sup> هم آویختند. و کارزار میکردند، [به حکم آن که]<sup>۹</sup>

### مثنوی

ز گرد ستوران خیل سپاه      به رخسار زد پرده خورشید و ماه  
ز سُم ستوران صرصر شتاب      فتاده به ناف زمین پیچ و تاب  
بر آمد چو از کوس روین خروش      یلان را زد از استخوان مغز جوش

در آن هنگام لشکر خصم عنان توجه از میدان عزیمت بر تافته، روی به هزیمت نهاد<sup>۱۰</sup>.

۱ × [ت] [د]

۲ ار [ت]

۳ × [ت]

۴ × [ت]

۵ شنیده [ت]

۶ برگشته بخت [ت] [د]

۷ پیش آن [س]

۸ با [د]

۹ × [د]

۱۰ نهادند [د]

خواجه عالیجنابی بود و او در پس پرده عصمت دختر<sup>۱</sup> ماه پیکری داشت، در غایت حسن و جمال. اوصاف آن مستوره را آن حیوان طینت شنید. غایبانه تیر عشق او را خورده، راغب وصل او گشت. ندانست که گفته اند.

### ۲+ بیت

بی تأمل پا مزن بر<sup>۲</sup> بوریای فقر ما  
نی به ناخن خورده اند این جا ز غفلت شیرها

زبده کلام آن که بالاخر به ظلم و جبر آن عفت پناه را در حباله نکاح خود در آورد و مادر و پدر آن مظلومه دست به دعا برداشته، آبا و اجداد خود را شفیع آورده، رو به سوی آسمان کرده، گفت، >الهی تو دانای {۳۵۰پ} کل حالی، به فریاد ما بیچاره گان رس و داد آن ظالم را ده. < چون دعای او به اجابت مقرون گردید، [به حکم آن که]<sup>۳\*</sup>

### مصراع

دعای خسته دلان مستجاب خواهد شد

چون شب زفاف آن غول بیابان >۳۴۰پ< خواست که به آن عفت پناه دست درازی کند، از قدرت واجب تعالی و به کرامات بزرگان در حال از میان پایان آن نسناسی حیوان سیرت شل شد. چون این حال را به خود مشاهده کرد، حیران و سراسیمه محرمان خود را طلب نمود و مجال حرکت نبود. لا علاج زنبیل از کدام گور در آن شب تاریک یافته، آوردند و آن ابله را انداخته، به ارک خجند بر آوردند و آن دختر عصمت پناه را در حال طلاق نمود و در حالت مرض فلج بود که برادرش قوش بیگی [از خوقند]<sup>۵\*</sup> [رسیده بود]<sup>۶</sup>.

۱ دختری [ت]

۲ فرد [د]

۳ در [ت]

۴ [ت][د]

۵ [د]

۶ رسید [ت]

از جنگ بسیار نسیم ظفر از جانب ناربوتہ بی وزید. به یک حملہ آن بلدہ را در تحت تصرف خود<sup>۱</sup> آورد و آن دو میر بچہ را بہ درجہ شہادت رسانید. خود متوجہ نمندگان شد. چون این خبر را اریس قلی بی شنید، ایلچیان دانا بہ خدمت ناربوتہ بی فرستادہ، طرح آشتی انداخت و سخن بر آن قرار گرفت کہ <۳۳۹پ> برادرزادہ اش عفت پناہی مینگ آیم بنت امام قلی بی<sup>۲</sup> ابن دوست قل بہادر را در عقد ناربوتہ بی والنعمی در آرد و او سخن اریس قلی بی قبول فرمود. آن گوہر درج عفت را در حبالہ نکاح خود در آورد. بہ اریس قلی بی روی دید. کینہ و کدورت او [بالکل مرتفع]<sup>۳</sup> شد. بہ جانب خوقند مراجعت نمود. در آن آوان عبد الرحمان بہادر در خجند حکومت میکرد. برادری داشت قوش بیگی کہ در پیش ناربوتہ بی والنعمی بزرگترین امراء او<sup>۴</sup> بودہ، تمام امور ملکی بہ او عاید میشد و از دست او ناربوتہ بی والنعمی بسیار بہ تنگ آمدہ، لا علاج طریق حزم را رعایت فرمودہ، راہ مواسا<sup>۵</sup> و مدارا پیش میبرد، بہ حکم آن کہ

### بیت

{۳۵۰ر} آسایش دو گیتی تفسیر این دو حرف است

با دوستان مروت با دشمنان مدارا

گستاخی و بی ادبی او از حد گذشت. بالاخر حکم بہ قتل او فرمود. چون این خبر را (۳۸۷) قوش بیگی شنید، راہ گریز پیش گرفت. بہ چندین محنت و مشقت خود را در خجند بہ پیش برادر رسانید و صورت واقعہ را بیان فرمود. چون این سخن را عبد الرحمن بہادر از زبان برادر شنید، <۳۴۰ر> در غرقاب اندیشہ فرو رفت. در آن وقت حکومت چُست و تورہ قورغان و نمندگان نیز با او تعلق داشت. سبب فتور دولت او این بود کہ در ولایت خجند

۱ در [ت]

۲ × [د]

۳ بالکل رفع [ت]، بہ کلی رفع [د]

۴ × [د]

۵ مواسا [ت]

گرفته، پاره پاره ساختند و روحش به جنت المأوی پرواز کرد. مدت عمرش بست و پنج سال و مدت امارتش سه ماه بود. چون اریس قلی بی و عبد الرحمان بهادر و دیگر امرا از کار {۳۴۹ر} سلیمان بی فارغ شدند، همان شب همه به اتفاق به خدمت ناربوته بی شتافته، نوید سلطنت مملکت<sup>۱</sup> فرغانه را رسانیدند و تکلیف خلافت نمودند. آن دانای عاقبت اندیش چون این سخن از امرا شنید، از آن امر پر خطر اجتناب کرده، (۳۸۶) گفت.

### بیت

مخور ای شمع از هستی فریب مجلس آرای  
به یک گردن نمی ارزد به چندین سر بریدنها

امرا همه یک باره سر خود به قدم او نهاده، بعد از التجاء بسیار در میانه عهد و پیمان چندین بار از دین و ایمان قسم یاد کرده، به قصر خانی بردند. <۳۳۹ر> روز دیگر تمام امرا مجتمع شد<sup>۲</sup>. ناربوته بی والنعمی را بر مسند امارت و بر سریر ایالت بنشاندند<sup>۳</sup> و او بر عدل و داد پرداخت و او صاحب دولتی<sup>۴</sup> بود، در کمال حلم و حیا و راست گوی بود. گویند، چیزی که از زبان او صادر میشد، باز گشت نداشت. بعد از چند روز میان او و اریس قلی بی مخالفت افتاد. در آن وقت دو میر بچه از خویشاوندان او در ولایت چُست نیز طرح مخالفت آغاز نهادند.

### ذکر<sup>۵</sup> لشکر کشیدن ناربوته بی والنعمی<sup>۶</sup> به جانب چست

چون ناربوته بی این خبر را شنید، با لشکر خوقند از دریای سیحون عبور نموده، {۳۴۹پ} در ولایت چُست چست و چالاک رسید و محاربات سخت در میان واقع شد. بعد

۱ ممالک [ت][د]

۲ شده [ت][د]

۳ نشاندند [د]

۴ دولت [د]

۵ × [ت]

۶ × [ت]

قلی بی ابن دوست قل بهادر در مرغینان حکومت میکرد و<sup>۱</sup> در خجند عبد الرحمان بهادر هر دو امرا به اتفاق یک دیگر به خوقند آمده، سلیمان بی ابن شادی بی را بر مسند امارت {۳۴۸پ} نشانند و او مرد<sup>۲</sup> بسیار بی کفایت و بسیاری به مردم دون نشستی<sup>۳</sup> و به کار ملک داری نمی پرداخت، [به حکم آن که]<sup>۴</sup>

### بیت

فراز تخت حکومت نشستن آسان نیست در این مقام بسی احتیاط باید کرد

و امرا دیدند که او قابلیت حکومت ندارد. در سهل روز ممالک از دست می‌رود. لا علاج بیان واقعه را به ادریس قلی بی پیام فرستادند. او نیز دانست که حق به جانب امراء خوقند است<sup>۵</sup>. لا علاج سواری نموده، خود را دولتخواه ناربوته بی ساخته، شاید که از این <۳۳۸پ> خدمتش<sup>۶</sup> [کینه دیرینه از دل ناربوته بی دفع شود]<sup>۷</sup>، به حکم آن که

### مصراع

تلخه<sup>۸</sup> بادام را شکر تلافی میکند

القصة. با چند مبارزان خود از ته جامه ایشان شمشیرهای کین چپ راست بندانیده<sup>۹</sup>، به خدمت سلیمان بی رسید و آن بیچاره ساده لوح نادیده جهان را به زیر تیغ خون آشام

۱۰ فرزند پسر [د]

۱ [د]

۲ مردی بود [د]

۳ بنشستی [ت][د]

۴ × [ت]

۵ [د]

۶ خدمت او [د]

۷ از دل ناربوته بی کینه دیرینه را بر آرد [د]

۸ تلخی [ت][د]

۹ بندانده [ت]

دیگرش ناربوته بی بود<sup>۱</sup>، متوجه اورا تپه شد. چون به مقصد رسید، فاضل بی والنعمی قدم ایشان را مبارک دانسته، بسیار گرامی داشت و قلعه قیزی را مع توابعاتش<sup>۲</sup> انعام فرمود<sup>۳</sup> و در میان فرزند ارجمندش خدایار بی و ناربوته بی طرح دوستی انداخت. {۳۴۸ر} دو سال در آن جا بود. در این حین ایردانه بی مکتوب ها فرستاده، به قسم و نامه دل ناربوته بی را پر کرده، به خوقند برد، [به حکم آن که گفت]<sup>۴</sup>

## مصراع

به شهر خود روم و شهریار خود باشم

[ایردانه بی]<sup>۵</sup> بسیار گرامی داشته، در موضع قره تپه که (۳۸۵) حالا به موی مبارک<sup>۶</sup> + اشتهار دارد، گذاشت، [به حکم آن که]<sup>۷</sup>

## بیت

کسی را که ایزد ز جای خمول برارد به اوج کمال قبول

بعد از یک سال ایردانه بی به کسل مهلک <۳۳۸ر> مبتلا گشت و حکیمان آن عصر به مداوای او پرداختند. هر چند سعی نمودند، به جای نرسید. حق را لبیک گفته<sup>۸</sup>، از دار الفنا به دار البقا رحلت نمود. مدت عمرش سی و شش سال و مدت حکومتش ده سال بود و از وی<sup>۹</sup> فرزندی<sup>۱۰</sup> نماند، مگر پنج دختر ماه روی. چون او از عالم گذشت، در آن عصر اریس

۱ × [ت]

۲ تابعاتش [ت][د]

۳ نمود [د]

۴ به حکم آن که [ت]، × [د]

۵ × [د]

۶ دروغ [س][د]، دروغ [ت]

۷ [د]

۸ گفت [ت][د]

۹ او [ت][د]



رسید و در آن وقت حکومت از جماعهٔ اولاد رستم رفته، به بیک نظر بی <۳۳۷ر> قرار گرفته بود. بیک نظر بی قدم آنها را مبارک دانسته<sup>۱</sup>، با وجود بیگانه بودن از روی حق شناسی ملک هایی که به میراث رسیده بود، همه را حق گذاری کرد و کینگس آیم به همه ملک خود متصرف شد. فارغ البال با دو فرزند قمر منظرش بر آسود. چون چهار سال از این مقدمه بگذشت، در آن وقت جناب قطب الاولیا و<sup>۲</sup> غوث الاصفیا ایشان<sup>۳</sup> موسی خان خواجه مسند ارشاد به ذات با برکات آن بزرگوار مزین بود. به سر کینگس آیم هوای زیارت آن سیادت پناهی افتاد. با دو جگرگوشه اش متوجه آن صوب گردید. چون به مقصد رسید، خاک آستان آن جناب را طوطیای دیده خود<sup>۴</sup> گردانید و آن هدایت پناه در بارهٔ ایشان {۳۴۷پ} لطف و مرحمت را بسیار کرد. بعد از چند روز جناب حضرت ایشان در پس پردهٔ عصمت دختر مستوره ای داشت و آن رابعهٔ دوران را به عقد جناب سیادت پناهی ایشان حکیم توره در آورد و همان شب قران سعدین واقع شد و به عیش و عشرت مشغول شدند، به حکم آن که

### مصراع

قران چون مشتری با زهره میکرد

در آن وقت جین <۳۳۷پ> ایردانه بی خان خواجه ابن یوسف علی خواجه از ایردانه بی تغاییش متوهم شده، به دهبید گریخته، آمد<sup>۵</sup>. به خدمت جناب ایشان عمر میگذرانید. چون چندی از این بگذشت<sup>۶</sup>، کینگس آیم از یک فرزند خاطر خود را جمع کرد، [جناب او]<sup>۷</sup> را به ده بید به خدمت حضرت ایشان به فرزندى وا گذاشت. خود با یک فرزند

۱ دانست [ت][د]

۲ × [ت]

۳ [ت][د]

۴ × [د]

۵ آمده [د]

۶ گذشت [د]

۷ جناب شان [ت]

مصراع<sup>۱</sup>

از دیده به جای اشک خون می بارید

و<sup>۲</sup> از دست ناربوته بی بگرفت<sup>۳</sup>. بر سر [آنها آورد.]<sup>۴</sup> گفت، <می شناسی، اینها کیانند.> چون چشم ناربوته بی به پدر و مادر افتاد، دید<sup>۵</sup> که ایشان به چندین خاری در خاک مذلت یکسان به خون غلطیده، خوابیده اند. عرق فرزندی در حرکت آمد و گریه آغاز نهاد و<sup>۶</sup> کینگس آیم گفت، <ای فرزند میدانی که سبب قتل مادر و پدر تو کیست.> ناربوته بی گفت، <میدانم که اریس قلی بیک و عبد الرحمان بهادر است.<sup>۷</sup>> پس گفت، <خاموش باش.> و از دست فرزند گرفت. <sup>۸</sup> کناره شد و چندی از آن کور باطنان هر دو یار وفادار را در نعش انداخته، متوجه خاکدان شدند، به حکم آن که [گفته اند.]<sup>۹</sup>

## بیت

بر نعش گه سالدیلار ایکاونی      جان سیز کیلین و اولوک کویاونی

{۳۴۷} و آن مظلومان را به چندین خاری دفن کردند. چون کینگس آیم احوال را بدین منوال مشاهده کرد، و از ایردانه بی بسیار متوهم شده<sup>۱۰</sup>، رخصت اجازت یافت<sup>۱۱</sup>. (۳۸۴) مع دو فرزند ارجمندش متوجه وطن مألوف گشت. بعد از قطع مراحل به شهر سبز

۱ × [ت]

۲ [د]

۳ گرفت [د]

۴ فرزندان برد و [د]

۵ [د]

۶ [د]

۷ × [ت]

۸ و [ت]

۹ × [ت]

۱۰ شد [ت]

۱۱ [د]

وقت به ایشانان طرح مشاورت انداخته، گفت، <روباه زنده را<sup>۱</sup>#> ۳۳۶ر <هیچ عاقل به فتراک نه آویخته است و مار را در آستین هیچ کس جای نداده است. من به چه دلیل خاطر خود را از دشمن خود فارغ دارم. مگر نشنیده ای>، [گفته اند، که]<sup>۲</sup> این بیت را خواند.

## بیت

اگر دانه حيله باشد کسی به دام<sup>۳</sup> آورد مرغ زیرک بسی

آن دو میر بهانه جو چون این سخن از زبان ایردانه بی شنیدند، تحسین و آفرین کردند<sup>۴</sup>. گفتند، <شاهها این امر از جمله لوازمات حکومت است.> گفته اند.

بیت<sup>۵</sup>+

از هر که دلت گرانی آورد او را سبک از میانه بردار

+ ایردانه بی به اتفاق آن دو سردار بی عاقبت دل بر هلاک عبد الرحمان بیک نهاد. شبی چند ملعون را حکم فرمود که او را به قتل رسانند و آن عفریت منظران بر سر آن نوجوان بیگناه رسیدند. مع زنش آی جان {۳۴۶پ} آیم بنت رحیم خان به درجه شهادت رسانیدند. در آن وقت فرزند ارجمندش ناربوته بی دوازده ساله بود و آی چوچوک آیم احوال فرزندان را بدان حال بدید و<sup>۷</sup># از خود برفت. بعد از ساعتی به خود باز آمد. موی کنان <۳۳۶پ> و روی کنان،

---

۱ [ت][د]

۲ که گفت [ت]، که گفته اند [د]

۳ دُم [د]

۴ کرده [د]

۵ فرد [د]

۶ چون [د]

۷ [د]

چهار کوه آمده<sup>۱</sup>، آن قلعه را استحکام کرده، بر مسند امارت نشست و کوس مخالفت را<sup>۲</sup> نواخت. از این خبر وحشت اثر ایردانه بی واقف گشته، در بحر تحیر<sup>۳</sup> فرو رفت و نمیدانست که به چه حيله اين عقده وا ميشده باشد، [به حکم آن که

بیت<sup>۴</sup>

بر نخیزم ز سر<sup>۵</sup> گوی تو تا جان دارم      ناشده کار به جان از سر جان بر خیزم

دید که از هیچ وجه راه بهبودی نیست. لا علاج دل بر جنگ نهاد. هفت سال در میان ایشان محاربات بسیار واقع شد و ایر نظر ایت باش که خدمتکار عبد الرحمان بی بود، [در آن وقت]<sup>۶</sup> در بهادری عدیل و نظیر<sup>۷</sup> نداشت و شهرت تمام دارد، در آن جنگ ها داد مردی را می<sup>۸</sup> داد. عاقبت ایردانه بی از راه [حيله و تزویر]<sup>۹</sup> در آمد کرده، به چندین عهد و وعده آن میر ساده لوح را بفریفت و به خوقند برد، +<sup>۱۰</sup> به حکم آن که

مصرع<sup>۱۱</sup>

ای امید من و عهد تو سراسر چون باد

{۳۴۶} و از آمدن آن میر ایردانه بی شادیها نموده، در جای مناسب فروز آورد. در آن وقت بزرگترین امراء او ادريس قل بی (۳۸۳) و عبد الرحمان بهادر بود. بعد از چندین

۱ رفته [ت]

۲ × [ت]

۳ تفکر [ت][د]

۴ × [د]

۵ سری [د]

۶ [د]

۷ نظیری [د]

۸ [ت]

۹ تزویر و حيله [د]

۱۰ و [ت]

۱۱ مصرع [ت]

افتاد، به سراسب خورد و<sup>۱</sup> نصف سراسب را قلم کرد. بعده<sup>۲</sup> اختیار این کار را نکرد و از آن مهلکه<sup>۳</sup> پر بیم فاضل بی والنعمی با چندین محنت و مشقت خود را {۳۴۵ر} به ساحل نجات رسانید و اسیرانی که جمع آمده بود<sup>۴</sup>، همه را حکم نمود، (۳۸۲) به قتل رسانند، کله مناره سازند، مثل گوسفند بیچاره ها را قطار کرده، سر می بریدند و از خون مسلمانان دریای آق سودریای سرخ آب گشت و از سر یوزان مینگان <۳۳۵ر> مینگ یوز کله مناره چه که کله کوه ساختند. گویند در آن عصر به خدمت فاضل بی والنعمی خوش آوازی بود که نغمه داود [هیچ نبود]<sup>۵</sup> و<sup>۶</sup> ناهید. علم موسیقی آموختی و در آن زمان عدیل و نظیر نداشت و آوازه او بر هر دیار رفته بود. اتفاقاً آن بیچاره را نیز دستگیر کرده بودند و او به آواز خوش میخواند. شاید که به آن وسیله از سر خون او در گذرند. ندانسته بود، در آن وقت به نزد ایردانه بی والنعمی، به حکم آن که

### مصراع

آواز خر و نغمه داود یکی است

بعد از فراغ قتل عام فرمود که سر آن بیچاره را بریده، از همه بالا تر به بالای کله مناره مانند و به فرموده او همچنان کردند. بعد از آن به فتح و نصرت متوجه خوقند شد. چون چندی از قتل و غارت بر آسود، فلک کج رفتار عادت دیرینه خود را<sup>۷</sup> باز از سر گرفت و نخواست چند روزی {۳۴۵پ} به فراغت روزگار گذرانند.

خلص کلام آن که عبد الرحمان بی ابن عبد الکریم بی از ایردانه بی والنعمی متوهم شده، به قلعه اسپراین که حالا به اسپره شهرت دارد، رفت و از آن جا به قلعه <۳۳۵پ>

۱ × [ت]

۲ بعد [ت] [د]

۳ بودند [د]

۴ × [ت]

۵ آواز [ت]

۶ × [ت]

۷ × [ت]

و ایردانه بی والنعمی با چندین [ محنت و مشقت ]<sup>۱</sup> خود را به خوقند رسانید و شب و روز در تدارک آن<sup>۲</sup> کار بود.

[ ذکر لشکر کشیدن ایردانه بی والنعمی به جانب اوراتپه و قتل عام نمودن جماعه یوزان را ]<sup>۳</sup>  
چون ایردانه بی والنعمی بعد از چندین وقت با لشکر انبوه متوجه مملکت اوراتپه گشت، بعد از قطع راه نزدیک آن بلده رسید. این خبر را فاضل بی والنعمی شنید. بی تأمل با لشکر بسیار استقبال { ۳۴۴ پ } نموده، به خاطر او چنان رسید که<sup>۴</sup> این همان آتش در کاسه است. ندانست که چینی هر روز نمیشکند، به روزی میشکند، به حکم آن که

#### بیت

دشمن چو بینی ناتوان لاف از بروت خود مزین

مغزی است در هر استخوان مردی است در هر پیرهن

و چون هر دو دریای < ۳۳۴ پ > لشکر در موضع آق سو به هم در آویختند، چنان جنگی شد که خاک میدان از خون یلان ارغوانی گردید، به حکم آن که

#### بیت

چنان شد که کس روی کشور ندید ز بس کشته گان شد زمین ناپدید

بعد از محاربات بسیار کوکب ظفر از جانب ایردانه بی والنعمی طلوع نمود و ستاره فاضل بی والنعمی در هبوط افتاد. سپاه یوز روی به هزیمت آورد و لشکر مینگ تعاقب نموده، به قتل میرسانیدند و پاره ای را اسیر میکردند. در آن روز ایردانه بی والنعمی به دست خود هژده کس از بزرگان یوز را به قتل رسانید. در آن وقت از دستش شمشیر خطا

۱ مشقت و محنت [ت] [د]

۲ این [د]

۳ × [د]

۴ × [د]

عمرشان<sup>۱</sup> به دو کم پنجاه سال رسیده بود، در عقد جناب ایشان در آورد و از جناب ایشان بعد از<sup>۲</sup> مدت حمل فرزندی در وجود آمد. نام آن سیادت پناه را حکیم توره نهادند. [در آن وقت عمر جناب شان]<sup>۳</sup> از هفتاد تجاوز کرده بود.

زبدۀ کلام آن که در آن عصر در بخارا رحیم خان منقیت<sup>۴</sup> حکومت میکرد (۳۸۱) و<sup>۵</sup> ایردانه بی را فرزند خوانده بود. در اوراتپه فاضل بی والنعمی ابن صادق بی {۳۴۴} حکومت میکرد و بیان این واقعه را<sup>۶</sup> <۳۳۴>ر< بالتفصیل<sup>۷</sup> + پیش نوشته شده است.

[ذکر لشکر کشیدن رحیم خان و ایردانه بی و به اتفاق یک دیگر در بالای اوراتپه آمدن و

ناامید برگشتن]<sup>۸</sup>

چون رحیم خان لشکر انبوه به جانب اوراتپه کشید و ایردانه بی والنعمی نیز در حرکت آمده، هر دو صاحب دولت بعد از قطع راه در موضع یام روی دیدند. به اتفاق یک دیگر اوراتپه را محاصره نمودند<sup>۹</sup>. بعد از چندان<sup>۱۰</sup> روز به تلبیس محمد امین بی یوز +<sup>۱۱</sup> هر کدام ایشان<sup>۱۲</sup> به مقرر خود مراجعت نمودند و لشکر ایردانه بی والنعمی به آفت سماوی به باد<sup>۱۳</sup> سخت دوجار افتاد و از پشت ایشان مردم یوز تعاقب نموده، اکثر را گرفته، کله مناره ساختند

۱ عمر او [ت]

۲ [ت]

۳ در آن وقت عمر جناب ایشان [ت]، عمر جناب ایشان در آن وقت [د]

۴ منقیت [ت][د]

۵ او [ت]، و او [د]

۶ × [ت]

۷ در [ت]

۸ × [د]

۹ نموده [د]

۱۰ چند [ت]

۱۱ بی وجه [ت]

۱۲ [ت]

۱۳ بادی [د]

از این مقدمه در عصر رحیم خان در بخارا ابو الفیض خان پادشاهی میکرد و او بسیار +<sup>۱</sup> به لهُو طرب مشغول شد. به امور ملک پرداخت. بنابر آن در میان اوزبک هرج و مرج روی داد. یکی از آن جمله فرهاد اتالیق بود که در میان اولوس خود چند روزی کوس حکومت نواخت، در ثمرقند کسی موجود نبود که بر مسند حکومت نشیند. امر لا علاج شده، جناب سیادت و نجابت پناه ایشان عبد الشهید خواجه ابن<sup>۲</sup> جناب عبد المجید خواجه را بر مسند حکومت نشانند. بعد از سهل روز در میان سیادت پناهی و فرهاد اتالیق محاربه اتفاق افتاد. نسیم ظفر از جانب یزیدیان وزید و جناب سیادت پناه را اسیر کرده، حسین وار به درجه شهادت رسانیدند، [به حکم آن که

بیت<sup>۳</sup>

{۳۴۳پ} بر اولاد پیمبر تیغ راندن<sup>۴</sup> خوش آن کس را به خوکان عمر بردن<sup>۵</sup>

<۳۳۳پ> و فرزند ارجمندشان ایشان آرتوق خواجه قرار بر فرار اختیار نموده، به جانب خجند متوجه شد و از آمدن آن جناب عبد الکریم بی مطلع شده، استقبال نمود و قدم آن سیادت پناه را مبارک دانسته، به سر منزل مناسب فروز آورد. جناب ایشان در آن ولایت ساکن شده بود. در عصر ایردانه بی والنعمی از برای زیارت به تخت سلیمان +<sup>۶</sup> رفتند. باز گشت ایردانه بی [قدم شان]<sup>۷</sup> را مبارک دانسته، چند روز خدمت میکرد. در آن وقت عصمت پناهی آی چوچوک آیم بنت ابراهیم اتالیق که به کینگس آیم شهرت داشته<sup>۸</sup>،

۱ از دهن افتاد [د]

۲ ولد [د]

۳ × [د]

۴ راندند [د]

۵ بردند [د]

۶ دروغ [س] [د]

۷ قدم او [ت]، قدمی شان [د]

۸ داشت [ت]



جماعه را آگاه کردند. تیری<sup>۱</sup> از قضا به سینه شادی بی رسید. [در حال]<sup>۲</sup> جان به حق تسلیم کرد، به حکم آن که

### مصراع<sup>۳</sup>

در جان بازی چه جای بازی باشد

بازی ایشان به ماتم انجامید و شادی ایشان به غم مبدل گشت و همه گریه کنان مرده او را به شهر در آورده، به خاکدانش سپردند و از او یک فرزند باقی ماند سلیمان بیک نام. مدت امارتش در مرغینان نه سال و مدت عمرش سی سال بود. بعد از چند وقت عبد الکرم بی نیز از این خاکدان دهر دامن بر چید. رو به سوی آخرت آورد و از او یک فرزند باقی ماند، عبد الرحمان بیک نام. مدت حکومتش هشت سال و مدت عمرش سی و چهار سال بوده. چون او در گذشت، (۳۸۰) به جایش ایردانه بی ابن رحیم خان را به مسند امارت نصب کردند و او در<sup>۴</sup> تمام ممالک فرغانه فرمان فرما گشت و او صاحب دولتی بود، بسیار دانا و عاقل و او همشیره<sup>۵</sup> {۳۴۳ر} + عبد الرحمان بیک در آورد. به حکم آن که

### مصراع

مه را به ستاره عقد بستند

آن دو درج دولت به تخت ناز آرام گرفتند. بعد از چندین وقت از آن دو گوهر یکتا فرزند مشتری سعادت از کتم عدم به وجود آمد. نام آن صاحب دولت را ناربوته بی نهادند. +<sup>۶</sup> قبل

۱ تیر [ت] [د]

۲ فی الحال [د]

۳ ع [ت]

۴ به [د]

۵ به [د]

۶ تاریخ تولد ناربوته خان مولانا شوخی خجندی گفته.

شوخی به خیر مقدم تاریخ خسروی میلاد شاهزاده خوقند زوری ۱۱۶۸ [د]

خطای از کار سیادت پناهان خاطر نا مبارک<sup>۱</sup> خود را جمع نمودند، سپاه قلماق را به جانب ممالک فرغانه فرستادند و ایشان بسیاری ولایت را مسخر نموده، ولایت خوقند را محاصره نمودند و عبد الکریم بی میان را از صد جا بسته، به آن کافران ناپاک هر روز غذا میکرد. مدت محاصره به طول کشید. در آن آوان فاضل بی والنعمی ابن صادق بی یوز در اوراتپه حکومت میکرد و او فرزند خواند عبد الکریم بی میبود. در آن وقت عمرش به بست سال رسیده بود. چون این خبر را شنید، به تعجیل تمام متوجه خوقند شده، بعد از قطع منازل (۳۷۹) خود را به خوقند {۳۴۲} رسانید. به دولت غذا مشرف <۳۳۲> گردید و از آمدن آن امارت پناه عبد الکریم بی بسیار خرسندیها<sup>۲</sup> نمود و قدم آن امارت پناه را مبارک دانسته، به مهمانداری او پرداخت. بعد از چند روز لشکر قلماق بسیار به تنگ آمده، مملکت خوقند را وا گذاشته، متوجه دیار خود شدند و مردم اهل اسلام تعاقب نموده، تاراج میکردند. گویند، مبارزت پناهی سیر<sup>۳</sup> محمد نام بهادر فاضل والنعمی در همان جنگ کفره<sup>۴</sup> به یک روز نود قلماق را خلاص نموده بود. جناب ایشان سلطان خان میگفتند که از زبان خود سیر محمد بهادر این سخن را بارها شنیدم<sup>۵</sup>.

القصة. عبد الکریم بی از کار و زار کفره خلاص یافت و فاضل بی والنعمی را به آبروی تمام رخصت اجازت فرمود. در آن وقت برادر او شادی بی در مرغینان حکومت میکرد. مردم آن جا را بسیاری جماعه قیرغیز به تاخت می برد. بنابر آن بادیه نشین ایشان بسیاری به نزدیک شهر می نشست. اتفاقا شادی بی به جانور پرانی برآمده بود، باز گشت شکار نزدیک آن جماعه رسید. با محرمان خود از بهر بازی خود را قیرغیز ساخته، {۳۴۲}پ> {۳۳۲}پ> به سر آن جماعه تاخت آورد و یقین آن جماعه شد که قیرغیز رسید و هر کدام از خانه خود تفنگ ها گرفته، به انداختن تفنگ مشغول شدند، تا محرمان شادی بی آن

۱ پاک [د]

۲ شادیها [د]

۳ پیر؟ [ت]

۴ کفار [د]

۵ شنیدم [د]

به جای او عبد الکریم بی بر سریر حکومت قرار یافت<sup>۱</sup>، به داد و دهش مشغول گشت. بعد از وفات رحیم خان عبد الکریم بی زن او آی چوچوک آیم را در عقد خود در آورد. و<sup>۲</sup> در ایام حکومت او قلماق از جانب چین خروج کرد. در آن وقت به ولایت کاشغر آی خواجه و کون خواجه حکم رانی میکردند. چون لشکر خطای هفت شهر را فرو گرفت و ایشان<sup>۳</sup> بعد از محاربات بسیار قرار بر فرار اختیار نموده، متوجه بدخشان شدند. چون در آن بلده رسیدند، مردم آن جا به وعده خطای فریفته شده، دین را به دنیا فروختند و آن دو سیدزاده را داشته، به خطای دادند و آن کافران<sup>۴</sup> بی دین سر آن دو گوهر سیادت را به تیغ تیز حسین وار از تن جدا کرده، به درجه شهادت رسانیدند و از خون ایشان خاک بدخشان <۳۳۱پ> چون لعل بدخشان گشت، [به حکم آن که]<sup>۵</sup>

#### مرثیه<sup>۶</sup>

{۳۴۱پ} زمین کربلا شد این بدخشان ای مسلمانان

که در ماه محرم کشته شد خواجه به صد خاری

به دستور حسینش سر برید آن شمر ذی الجوشن

یزید شوم سر بر داشت باز از نو به جباری

از آن سیادت پناهان یک فرزند شیرخواره باقی ماند. دولتخواهان و جان سپاران آن در یتیم را از آن کافران مخفی داشتند<sup>۷</sup>. از<sup>۸</sup> راه غیر متعارف به بخارا رسانیدند و چون مردم

۱ گرفت [د]

۲ × [ت]

۳ ایشانان [د]

۴ کفار [د]

۵ [د]

۶ قطعه [د]

۷ داشته [د]

۸ به [د]

بیک در پس پرده {۳۴۰پ} عصمت برادرزاده ای داشت، آی چوچوک آیم بنت ابراهیم اتالیق، در کمال خوبی، او را در عقد رحیم خان در آورد. +<sup>۱</sup> رحیم خان با آبروی تمام به جانب ثمرقند متوجه شد. چون بر آن بلده وارد گردید، در طبیعت او مرض صعبی مستولی شد و پاره ای گویند که در مزار حضرت شیخ قثم ابن عباس رض<sup>#۲</sup> اسبکی در بالای زینه بر آمد. از روی بی ادبی به آن کسل مبتلا گشت و از جانب خود آنه قلی دادخواه را و ملا<sup>۳</sup> بیچاره را [در ثمرقند]<sup>۴</sup> نایب ساخته، خود متوجه خوقند گردید. چون در ولایت خجند نزول اجلال فرمود، مرض او از حد اعتدال گذشت و<sup>#۵</sup> هر چند طبیبان آن روزگار معالجه کردند، هیچ کدام مفید نه افتاد. از دار دنیا رخت هستی را بر چید، روی<sup>\*</sup> به سوی عقبی آورد. نعش او را در خوقند برده، (۳۷۸) دفن کردند. مدت <۳۳۱ر> حکومتش ده سال و مدت عمرش سی و سه سال بود. در آن وقت که رحیم خان دختر<sup>۶</sup> ابراهیم اتالیق را در سلک ازدواج خود کشید، از رحیم خان آن عصمت پناهی آبتن شده بود. بعد از انقضای مدت حمل و بعد از وفات رحیم خان دختری نیکو منظری از کتم عدم به وجود آمد، {۳۴۱ر} آی جان آیم نام نهادند. قصه کوتاه، از او یک پسر باقی ماند<sup>۸</sup> که آن ایردانه بی بود و سه دختر [نیز باقی مانده بود].<sup>۹</sup>

## بیت

با قضا بر نمیتوان آمد      با قدر بر نمیتوان آویخت

- ۱ و از رحیم خان آن عصمت پناهی آبتن شد. بعد از انقضای مدت حمل دختری نیکو منظری در وجود آمد و نام آن دختر آی جان آیم نهادند و (با خط بطلان) [ت][د]
- ۲ [د]
- ۳ ملای [د]
- ۴ × [د]
- ۵ [د]
- ۶ [ت][د]، و در [س]
- ۷ دختری [ت][د]
- ۸ مانده [ت]
- ۹ بود [ت]، نیز باقی ماند [د]

[چنانچه گفته است.]<sup>۱</sup>بیت<sup>۲</sup>سرش را به خنجر بریدند زار      خروشید زمانی و<sup>۳</sup> برگشت کار

و همان شب آن شهید مظلوم را به خاکدانش دفن کردند. روز دیگر رحیم خان بر مسند امارت نشست و آوازه او اقطار عالم را فرو گرفت و او خانی بود، بسیار تهور و شجاع و بسیاری ولایت فرغانه را او گشاد. از بسکه <۳۳۰ر> ممالک (۳۷۷) را در تحت تصرف آورد، بنابر آن لقبش را<sup>۴</sup> رحیم خان صاحبقران میگفتند {۳۴۰} و بعد از چند وقت حکومت خجند را به برادرش عبد الکریم<sup>۵</sup> بی وا گذاشت، خود در ولایت خوقند قرار گرفت. و در آن وقت خوقند نو آباد شده بود و او بر آبادانی آن ولایت سعی بلیغ نمود و حکومت مرغینان را به برادر کوچکش شادی بی تفویض نمود. چون تمام ممالک فرغانه را در تحت تصرف خود در آورد، خاطر خود را بالکل از آن جانب جمع ساخت.

## ذکر لشکر کشیدن رحیم خان به صوب ثمرقند و میانکال و فتح نمودن آن ولایت را

چون رحیم خان با لشکر انبوه متوجه ثمرقند شد، بعد از قطع مراحل در ولایت ثمرقند رسید و آن مملکت را در سهل درجه فتح نمود و<sup>۶</sup> از آن جا متوجه ینگه قورغان گشت و آن بلده را نیز مسخر نمود. بعد از آن عنان یکران به صوب شهر سبز تافت. در آن وقت در ولایت کیش حکیم بوکری برادر ابراهیم اتالیق حکم رانی میکرد. چون از آمدن رحیم خان وقوف یافت، آماده جنگ و قتال شد. چون رحیم خان به نزدیک شهر سبز نزول اجلال <۳۳۰پ> فرمود و ایلچیان سخن دان در میان شده، طرح آشنایی در مابین انداختند، حکیم

۱ × [ت]، به حکم آن که [د]

۲ × [د]

۳ [ت]

۴ × [د]

۵ کریم [ت]

۶ × [د]

نامرد> گفته، رو به فرار آوردند و رحیم خان صحت و سلامت از آن مهلکه خلاص شده، این فتح اول را نشانه دولت شوگون گرفته، به درگاه سلطان حقیقی شکر به جای آورده، متوجه مقر خود شد. چون از کار او آق بوته بی خبر یافت، انگشت حیرت به دندان گزید. نمیدانست به چه تدبیر آن صید وحشی را به دست آرد. هر چند ایلچیان سخن دان به نزد او فرستاد، تکلیف آمدن میکرد، رحیم خان قبول نمیفرمود، به حکم آن که

بیت<sup>۱</sup>

مرغی که رمیده گردد از دام      من<sup>۲</sup> بعد به دانه کی شود رام

بالاخر بعد از وعده بسیار آن خان والاشأن به پیش آق بوته بی آمد و هر دو صاحب دولت یک دیگر را در کنار [لطف و] <sup>۳</sup># مرحمت گرفتند و قدم او را مبارک دانسته، <۳۲۹پ> به مهمانداری پرداخت. چون چندی از این مقدمه <sup>۴</sup>+ گذشت، {۳۳۹پ} چند از <sup>۵</sup> فتنه جویان ابلیس مشربان طبع آق بوته بی را مکرر از رحیم خان منحرف گردانیده، راهبری کردند که آن خان تهوور را دستگیر نمایند و از این حال <sup>۶</sup> رحیم خان واقف گشته، شبی از شبها آق بوته بی در بالای ارک خجند به خواب ناز غنوده بود، رحیم خان با چندی<sup>۷</sup> از بهادران کینه خواه شمشیر کین را در میان از صد جا چپ و راست بسته و لباس بی آزر می را در بر کرده، متوجه ارک شده، بر سر آن امارت پناهی چون مرگ مفاجات برسیدند و به تیغ کین با دو پسر ماه لقایش چنان شربت مرگ را چشانیدند که تا قیامت از جای بر نخیزد،

۱۰ × [ت] [د]

۱۱ شمرده [ت]

۱ × [د]

۲ مین [د]

۳ [د]

۴ که [ت]

۵ × [ت]

۶ احوال [د]

۷ چند [د]

نموده<sup>۱</sup>، با چندین جشن و طوی در حباله نکاح خود در آورد و رحیم خان را در پیش خود برده، امور ملکیه را به او تفویض نمود. خود به عیش و عشرت مشغول گشت و آوازه رحیم خان در آن وقت در اقطار عالم شیوع یافت و همه لشکریان آق بوته بی به رحیم خان روی آوردند<sup>۲</sup> و از این حال آق بوته بی واقف گشته،<sup>۳</sup> خواست که رحیم خان را دستگیر نماید. او دانسته، با چند محرم خود متوجه وطن مألوف خود گشت. چون از رفتن او آق بوته بی وقوف یافت، از عقیب او پانصد<sup>۴</sup> قرغیز را حکم فرمود که او را تعاقب نموده، دستگیر کرده، بیارند و قرغیزان در کمال تعجیل تعاقب نموده، در موضع شوم قورغان رسیدند و آن شیر بیشه مردانگی دانست که خشت از قالب خیسته است [و تیر از کمان جسته است].<sup>۵</sup> به امید بسیار به آدم کم دست به تیر و کمان برده، به جنگ در پیوست. [به حکم آن که

## بیت

گر اعتقاد تو بر اسب لشکر است سلام مرا است بر کرم دوست اعتقاد تمام]<sup>۶</sup>

چنان محاربه بر پا ساخت که از خون قیرغیزان خاک آن دشت لاله گون گشت و آب دریای سیحون چون می ناب لعل فام گردید. گویند<sup>۷</sup>، رحیم خان قمبر نام تیر<۳۲۹>ر انداز {۳۳۹} داشت. (۳۷۶) همان روز تنها خود چهل قیرغیز را به ناوک کمان دوخت. قیرغیزان دیدند که از چند کس زیاده<sup>۸</sup> باقی نمانده است. همه رفیقان ایشان به سوی عدم روی [آورده اند].<sup>۹</sup> لا علاج پنج و<sup>۱۰</sup> شش بوده، عمر خود را غنیمت دانسته<sup>۱۱</sup>، آهسته <قاجکن

۱ نمود [ت]

۲ [د]، آورد [س] [ت]

۳ متوهم شد [ت]، متوهم [د]

۴ پنج صد [ت] [د]

۵ × [ت]

۶ × [ت] [د]

۷ × [ت]

۸ زیاد [ت]

۹ آورده [ت]

نزد نکته سنجان بلاغت +<sup>۱</sup> پوشیده نماند که از هر بوستان گلی چیده، دولت منقیت<sup>۲</sup> را بیان کردیم. انشاء الله عمر اگر وفا کند، کمیت خوش خرام میخواهد که از هر گلستان بویی<sup>۳</sup> برده، در خانه میدان سخن مطلق العنان مهمیز کند و بالله التوفیق.

### \* طایفه دوازدهم \*

منگيه هفت تن بودند. مدت سلطنت ایشان در ممالک فرغانه صد سال بود. اول ایشان رحیم خان ابن شهرخ اتالیق ابن محمد خالق بی ابن چمش بی، او مرید هدایت پناهی مولانا لطف الله چستی [به لقب شیدا اشتهاار دارد. الحال اولادشان ایشان خواجه جان خواجه]<sup>۴</sup> و ایشان مرید سلطان الاولیا و غوث الاصفیا مخدوم اعظم قدس سره العزیز بود<sup>۵</sup>، و شهرخ اتالیق سه فرزند ارجمند داشت، رحیم خان و عبد الکریم بی و شادی بی بوده، و مقر ایشان در موضع ده قان توده است<sup>۶</sup>. از شهر خوقند سه فرسخ به جانب جنوب است و حالا خراب است. در آن جا روزگار میگذرانند.

و در آن وقت آق بوته بی ولد محمد رحیم اتالیق یوز<sup>۷</sup> هنوز<sup>۸</sup> در خجند کوس امارت را می نواخت. اتفاقا تقدیر ازلی و سرنوشت [لم یزلی]<sup>۹</sup> رفت. دختر شهرخ اتالیق [را {۳۳۸پ} که<sup>۱۰</sup> در پس پرده عصمت نشسته بود<sup>۱۱</sup>، <۳۲۸پ> آق بوته بی خواستگاری

۱ را [س]

۲ منغیت [ت]

۳ بوی [ت]

۴ [ت]

۵ × [ت]، بوده [د]

۶ که حالا [ت]

۷ [د]

۸ × [ت]

۹ الهی [ت]

۱۰ × [ت]

۱۱ را [ت]





متن



ذکر مسخر نمودن شیر علی خان دار السلطنة خوقند را بل تمام ممالک فرغانه را به لطف

حضرت ایزد متعال ..... ۶۴۳

ذکر بر تخت نشستن شیر علی خان بر دار السلطنت خوقند ..... ۶۴۶

ذکر فتح نمودن امرای خوقندی ولایت تاشکند به لطف حضرت ایزد متعال ..... ۶۵۱

ذکر شهادت اتالیق خان ..... ۶۵۶

ذکر به درجه شهادت رسانیدن شیر علی خان هر دو برادر زاده خود را از بهر دنیای دون ..... ۶۶۱

ذکر لشکر کشیدن امرای خوقند به جانب اوراتپه ..... ۶۶۵

ذکر لشکر کشیدن عبد رحمان بیک ابن شیر علی خان به جانب اوراتپه ..... ۶۶۶

ذکر سبب فتور دولت شیر علی خان و عداوت ورزیدن محمد نظر بیک مع جماعه قرغیز و ..

..... ۶۶۷

ذکر مسخر نمودن امرای فرغانه مع جماعه قرغیز و قپچاق مثل محمد نظر بیک و مسلمان قلی

چولاق به لطف او تعالی ..... ۶۶۹

ذکر واقف شدن محمد نظر بیک و مسلمان قلی چولاق از آمدن امیر نصر الله در بالای خجند

و لشکر کشیدن ایشان نیز تا به موضع کان بادام و قرقچی قوم و از آن جا به حيله و بدبیر

گردانیدن ایشان امیر بخارا را ..... ۶۷۵

گفتار در بیان مسخر نمودن عبد الرحمن بیک بن شیر علی خان و لشکر قوشیگی ممالک

تاشکند و قورمه بل تمام دشت قپچاق را به لطف او تعالی ..... ۶۷۷

ذکر مسخر نمودن مراد خان دار السلطنت خوقند را و کشتن شیر علی خان بیچاره را به تقدیر

ازلی و سر نوشت لم یزلی ..... ۶۸۰

گفتار در بیان مسخر نمودن جماعه قپچاقیه دار الملک خوقند را بار دیگر و شهادت مراد خان

از دست خدایار خان بن شیر علی خان ..... ۶۸۲

- متوجه شدن فقير به صوب پای تخت ..... ۵۳۳
- ذکر مجلس کردن رفیقان در ولایت رشت در آن جا صحبت کردن فقير با زن صالحه... ۵۳۴
- ذکر ملاقات کردن فقير به شاه ایران یعنی فتح علی شاه قاجار..... ۵۴۱
- ذکر متوجه شدن فقير از ولایت طهران به صوب مشهد مقدس..... ۵۴۶
- ذکر به یغما بردن ترکمنان این بی سر و پا را در آن بیابان خونخار ..... ۵۵۰
- ذکر رسیدن فقير در ولایت مشهد مقدس و چند روز در حالت بیماری در آن مملکت روز گذرانیده، بعد متوجه ممالک ما وراء النهر شدن..... ۵۵۴
- ذکر آمدن فقير در ولایت بخارا و دیدن امیر نصر الله را..... ۵۶۲
- ذکر لشکر کشیدن محمد علی خان ماده از روی لا علاجی به سوی اوراتپه و تسخير کردن آن ولایت را به تحمت و شيلتاق ..... ۵۶۶
- ذکر لشکر کشیدن امرای خوقند به صوب کاشغر..... ۵۷۳
- ذکر جلای وطن کردن محمد علی خان ماده برادرش عالیجاهی سلطان محمود خان را به صوب شهر سبز ..... ۵۷۴
- ذکر لشکر کشیدن امرای خوقند به صوب قراتیگین و مسخر نمودن آن مرز و بوم را ... ۵۸۳
- ذکر لشکر کشیدن امرای خوقند در ولایت کوهستان ..... ۵۸۸
- ذکر حلال دانستن محمد علی خان ماده مادر خود خان پادشاه را و از بهر او دین دنیا باختن آن ملعون ابدی..... ۵۹۴
- ذکر خط نوشتن فقير و سلطان محمود خان به امر حضرت ایشان شافعی به امیر نصر الله ۶۰۰
- ذکر لشکر کشیدن محمد علی خان ماده در بالای جیزخ و قلعه پشاجر را انداخته، بی وجه از امرا رنجیده، مثل سگ دیوانه بمقر خود مراجعت فرمودن آن برگشته بخت ..... ۶۰۳
- ذکر لشکر کشیدن محمد علی خان ماده به صوب خجند و از آن جا فرار نموده، به خوقند آمده، خانه نشین شدن آن نسناس..... ۶۱۲
- ذکر مردن محمد علی خان ماده و شهادت یافتن سلطان محمود خان و محمد امین خان نادیده جهان از جبر چرخ زنگاری..... ۶۲۶

- ذکر رسیدن فقیر به شام جنت نظیر و بعد از چند روز متوجه مصر قاهره شدن..... ۴۱۷
- ذکر رفتن فقیر از شام جنت نظیر به صوب مصر قاهره..... ۴۲۰
- گرفتار شدن فقیر به دست زن بیباکان و به چندین تدبیر خلاص شدن..... ۴۲۳
- ذکر وارد گردیدن فقیر در ولایت مصر و از آن جا بر آمده متوجه مقصد شدن..... ۴۲۷
- ذکر رسیدن این بی سر و پا به چندین عجز و نیاز به مکۀ معظمه و از آن موضع متبرک بعد از پنج ماه مراجعت نموده، به راه دریا متوجه مدینۀ منوره شدن..... ۴۳۶
- ذکر رسیدن این بی بضاعت به آستان ملک پاسبان حضرت سید کونین علیه الصلوة و السلام از روی بی دولتی از آن موضع با شرافت رجوع نموده، با چندین درد و حسرت به راه دریا رو به مصر کثافت آوردن..... ۴۴۳
- ذکر استقامت کردن فقیر در مصر قاهره..... ۴۵۶
- ذکر صحبت داشتن فقیر به محمد علی پادشاه به مصر قاهره..... ۴۵۸
- ذکر پرسیدن فقیر احوال ممالک فرعانه را از دو قلندر بچه در موضع کازۀ زلیخا..... ۴۶۱
- ذکر واقف گشتن فقیر از عشق برادر ماهر افندی به ملیکه مصر..... ۴۶۴
- ذکر رفتن فقیر به تماشای جشن ملیکه مصر به رفاقت برادر ماهر افندی..... ۴۷۱
- ذکر رخت اقامت از مصر کثافت چیده، رو به کنعان شرافت آوردن فقیر..... ۴۹۲
- مکرر دیدن فقیر ممالک شام را و پنج ماه در آن ولایت بی مانند سکونت اختیار نمودن بعد رو به بغداد شریف آوردن..... ۴۹۸
- رفتن فقیر از شام جنت مشام به راه بیابان بی پایان به بغداد شریف به چندین درد و الم.... ۵۰۱
- ذکر رسیدن فقیر به بغداد سه ماه در آن ولایت مکث کرده، بعد متوجه ممالک ایران شدن.. ۵۰۷
- ذکر رفتن فقیر در ولایت سنندج..... ۵۰۸
- مجلس کردن فقیر به خسرو خان..... ۵۱۰
- تماشا کردن فقیر بزم ملیکه ایران را با معشوقۀ او میرزا محتشم..... ۵۱۶

- ذکر حبس کردن امیر عمر خان برادرم سیادت پناهی جهانگیر خواجه را ..... ۲۴۴  
 ذکر رفتن امیر عمر خان به سوی ممالک توره قورغان و نمندگان و کاسان از بهر تفرج ..... ۲۴۸  
 ذکر لشکر کشیدن امیر عمر خان به صوب اوراتپه و ضامین ..... ۲۵۷  
 ذکر پند دادن فقیر محمد علی خان ماده را از راهی خطا ..... ۲۶۱  
 ذکر انتقال امیر عمر خان از دار غرور به دار البقاء ..... ۲۷۰  
 ذکر گرفتار شدن فقیر بی جنایت در حبس محمد علی خان ماده ..... ۲۸۹  
 نجات یافتن فقیر از قید محمد علی خان ماده و رو به غربت آوردن ..... ۲۹۷  
 ذکر احوال گریختن برادرم سیادت پناهی جهانگیر خواجه به ولایت کاشغر ..... ۳۱۰  
 ذکر حکومت برادرم سیادت پناهی جهانگیر خواجه در ولایت کاشغر ..... ۳۱۸  
 ذکر روی دیدن سیادت پناهی برادرم جهانگیر خواجه به محمد علی خان ماده ..... ۳۲۲  
 ذکر معزول شدن جهانگیر خواجه از ولایت کاشغر به تدبیر امرای خطای آن سیادت پناهی  
 بخت برگشته را به دست آورده، به درجه شهادت رسانیدن ..... ۳۲۶  
 ذکر آشتی کردن محمد علی خان ماده با میر حیدر پادشاه ..... ۳۳۱  
 ذکر احرام بستن فقیر به صوب مکه معظمه و مدینه منوره و مشاهده نمودن بعض عجایب و  
 غرایب دنیا را در آن راه بی پایان ..... ۳۳۴  
 ذکر صحبت داشتن فقیر به گورناتور یعنی وزیر پادشاه اوروس ..... ۳۳۷  
 دیدن فقیر گورناتور پادشاه اوروس را ..... ۳۵۵  
 ذکر ملاقات کردن فقیر به پادشاه اوروس و مرحمت نمودن او بر من درویش ..... ۳۶۴  
 ذکر رفتن فقیر به چندین محنت و مشقت در ولایت اشترخان ..... ۳۷۶  
 حکایت شهزاده ملک قاسم ..... ۳۸۳  
 ذکر اراده کردن فقیر به سوی مقصد ..... ۳۸۶  
 ذکر گرفتار شدن فقیر در حبس وزیر از بهر فرنگ دختری او ..... ۳۸۸  
 نجات یافتن فقیر از آن گرداب ضلالت به لطف الهی ..... ۴۰۶  
 ذکر اختیار کردن فقیر سفر دریای شور را ..... ۴۱۰

- ذکر لشکر کشیدن امیر عمر خان به صوب دشت قیچاق و فتح کردن ترکستان به فضل حضرت ایزد متعال..... ۱۳۳
- ذکر کوس پادشاهی زدن امیر عمر خان به دار السلطنة خوقند..... ۱۳۶
- ذکر لشکر کشیدن امیر عمر خان به جانب ثمرقند و آن مدعا نشده، در موضع اورمیتن به نیاز علی دیوان بیگی حاکم شهر سبز رو دیده برگشتن..... ۱۳۸
- ذکر دستگیر نمودن سیادت پناهی محمود خان را امیر عمر خان در بالای اوراتپه ..... ۱۴۰
- ذکر آمدن محمد رحیم دیوان بیگی از قلعه پشاغر به جانب قلعه یام و از آن جا آمده، اوراتپه را گرفتن..... ۱۴۷
- ذکر لشکر کشیدن امیر عمر خان در بالای اوراتپه و ناامید گشتن از ولایت خجند ..... ۱۴۸
- ذکر لشکر کشیدن امیر عمر خان به صوب اوراتپه..... ۱۴۹
- ذکر لشکر کشیدن امیر عمر خان به صوب جیزخ..... ۱۵۶
- ذکر شکار رفتن امیر عمر خان به صوب مرغیلان و اندجان..... ۱۵۷
- ذکر لشکر کشیدن امیر عمر خان به صوب اوراتپه..... ۱۶۹
- ذکر شکار رفتن امیر عمر خان به صوب مرغینان و اندجان..... ۱۷۶
- ذکر تزویج نمودن امیر عمر خان دختر سید غازی خواجه را..... ۱۸۸
- ذکر گریختن سیادت پناهی جهانگیر خواجه و حق قلی بی به صوب ولایت کاشغر و بی مدعا باز گشتن در سال مذکور..... ۱۹۶
- ذکر طوی کردن امیر عمر خان فرزند ارجمندش عبد الله خان را در ولایت تاشکند و آن ممالک را به او تفویض نمودن..... ۲۰۰
- ذکر شهادت امارت پناهی رجب قوش بیگی به ولایت اخیسی..... ۲۱۶
- ذکر تزویج نمودن امیر عمر خان از خاندان سیادت و آن کار بر وی نا مبارک آمدن ... ۲۲۰
- ذکر لشکر کشیدن امیر عمر خان به صوب اوراتپه و جیزخ و ثمرقند و بی نیل مقصود برگشته، افسوس کردن آن شاه..... ۲۲۹
- ذکر وفات سیادت پناهی محمود خان..... ۲۴۱



- ذکر لشکر کشیدن یونس خواجه به خیال بنگ به صوب خوقند و گریختن او از آن مرز و بوم  
 ۶۱ .....
- ذکر محاربه نمودن امیر عالم خان به یونس خواجه و او را مقهور گردانیدن به تأیید کردگاری  
 ۶۲ .....
- ذکر مسخر نمودن امیر عالم خان ممالک خجند را.....  
 ۶۵ .....
- ذکر فتح نمودن امیر عالم خان مملکت اوراتپه را به یک حمله به مهربانی او تعالی .....  
 ۶۸ .....
- ذکر لشکر کشیدن امیر عالم خان به صوب ولایت جیزخ بی کام دل برگشتن .....  
 ۷۱ .....
- ذکر لشکر کشیدن امیر عالم خان به صوب اوراتپه.....  
 ۷۴ .....
- ذکر لشکر کشیدن شاهزاده عمر خان به صوب تاشکند .....  
 ۷۵ .....
- ذکر لشکر کشیدن امیر عالم خان به صوب اوراتپه.....  
 ۸۲ .....
- ذکر لشکر کشیدن امیر عالم خان به صوب تاشکند.....  
 ۸۶ .....
- ذکر فتنه و آشوب در ممالک فرغانه چند روزی و سبب نامهربانی پادشاه سعید امیر عالم  
 محمد بهادر خان به واسطه طغیان امراء عاصی و دعوی سپاه فتان و مقدمه زوال دولت آن  
 پادشاه ناکام، الحمد لله الذی خالق الجن و الانس .....  
 ۸۹ .....
- ذکر کارد زدن دیوانه امیر عالم خان را .....  
 ۹۲ .....
- ذکر لشکر کشیدن امیر عالم خان بی سببی به مملکت تاشکند و مکر و غدر ساختن امراء و  
 سپاه نمک حرام در آن ایام و زخم کاری خوردن و به درجه شهادت رسیدن آن پادشاه ناکام  
 از خنجر بیداد دهر نافرجام .....  
 ۱۰۲ .....
- ذکر خبر یافتن امیر عالم خان از کار برادر.....  
 ۱۱۰ .....
- ذکر شربت شهادت چشیدن شهزاده شهرخ ابن امیر عالم خان.....  
 ۱۲۵ .....
- ذکر جلوس امیر عمر خان به مسند شاهی .....  
 ۱۲۷ .....
- ذکر لشکر کشیدن امیر عمر خان به صوب جیزخ .....  
 ۱۳۰ .....
- ذکر لشکر کشیدن امیر عمر خان در بالای امیر حیدر پادشاه و این خبر را شنیده، باز گشتن  
 امیر حیدر پادشاه به صوب ثمرقند .....  
 ۱۳۱ .....

## مندرجہ

- طایفہ دوازدهم..... ۱
- ذکر لشکر کشیدن رحیم خان به صوب ثمرقند و میانکال و فتح نمودن آن ولایت را ..... ۴
- ذکر لشکر کشیدن رحیم خان و ایردانه بی و به اتفاق یک دیگر در بالای اوراتپه آمدن و ناامید بر گشتن ..... ۱۰
- ذکر لشکر کشیدن ایردانه بی والنعمی به جانب اوراتپه و قتل عام نمودن جماعه یوزان را ..... ۱۱
- ذکر لشکر کشیدن ناربوتہ بی والنعمی به جانب چست ..... ۱۹
- ذکر لشکر کشیدن ناربوتہ بی والنعمی بر سر عبد الرحمان بهادر ..... ۲۲
- ذکر فتح نمودن ناربوتہ بی والنعمی ولایت خجند را ..... ۲۵
- ذکر مسخر نمودن خدایار بی والنعمی ولایت اوراتپه را ..... ۲۸
- ذکر لشکر کشیدن ناربوتہ بی والنعمی به جانب توره قورغان و مسخر نمودن آن ممالک را ..
- ..... ۳۱
- ذکر مسخر نمودن ولایت اندجان را ناربوتہ بی والنعمی ..... ۳۴
- ذکر ناربوتہ بی والنعمی و خدایار بی والنعمی یک دیگر را به امید دیدن آمده و نا امید بر گشتن ..... ۳۵
- ذکر مصالحه نمودن ناربوتہ بی والنعمی با شاه مراد بی والنعمی ..... ۳۷
- ذکر لشکر کشیدن امیر عالم خان در بالای بای بوتہ نمک حرام و فتح شدن آن قلعه به لطف حضرت ایزد متعالی ..... ۵۱
- ذکر لشکر کشیدن سیادت پناهی خان خواجه به صوب ممالک تاشکند و به درجه شهادت رسیدن آن سیادت پناهی به دست یونس خواجه ..... ۵۴
- ذکر فتح نمودن امیر عالم خان ممالک توره قورغان و چست را ..... ۵۷
- ذکر لشکر کشیدن امیر عالم خان دفعه دویم به صوب چست ..... ۵۹



# منتخب التواريخ



سلسله تحقیقات فرهنگ اسلامی : ۸۱

# منتخب التواریخ

جلد دوم

تألیف

محمد حکیم خان

تصحیح

یایوئی کاواہارا \* کوئیچی ہانہ دا

مؤسسہ مطالعات فرهنگ ها و زبان های

آسیا و آفریقا

توکیو ۲۰۰۶

سلسله تحقیقات فرهنگ اسلامی : ۸۱

# منتخب التواریخ

جلد دوم

تألیف

محمد حکیم خان

تصحیح

یایوئی کاواہارا \* کوئیچی ہانہ دا

مؤسسہ مطالعات فرهنگ ها و زبان های

آسیا و آفریقا

توکیو ۲۰۰۶



ISBN 4-87297-926-5